
真面目な向き合い

悪者はいない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真面目な向き合い

【Nコード】

N0923M

【作者名】

悪者はいない

【あらすじ】

何もかも他人も俺も嫌ってきた。

偏見した生き方

だったんだ、今までは。

けど、あいつらを見ると、今まで

で俺は損した道しか歩かなかったんだと、笑える事が出来る。

前編（前書き）

突拍子に書いたものです。

我ながらグダグダです…うん、何時もか。

しかも、ベタベタです。

へんなこだわり入れました。

中傷、批判は受け付けていませんが、感想、辛口コメントはWEL
COMEです。

では、

『しゃーねえなあ、ハバネロより辛口注意してやるよ。』
って人はどうぞ。↑

いえ、普通にどうぞ。

↓

前編

俺は自分が嫌いだ。

厳つい顔も、目つき悪いのも、親父似のデッカイ身長も、低い声も、眉間に皺を寄せるのも……全て。

母親似の普通の弟が凄く羨ましくて、同時に憎らしかった。

普通の友達、普通に話をしたり相談できる仲間、弱音を吐ける人。そういうのに小さい時から憧れていた。

…だって、今まで俺の周りだけ一線引いたように、家族以外誰もいなかったから。

家族を俺自信が避けていたから、家には自室に引きこもってばかりで、会話何て滅多にない。

飯も皆が食べた後、誰もいない夜中に一人で食べた。

眠たくても眠れない夜は、雨の日でも構わず、家族を起こさないよう音を最小限に庭から出て町を歩いた。

特に目的もなく、海色に染めた髪を夜風に靡かせて、ただ、歩くだけ。

誰もいない静かな世界は、気持ち落ち着くのと、反対に虚しさがズシツと体を重くさせる感覚が入り交じる。

『俺は何がしたいんだ…』

夜の公園のベンチに腰掛け、俯きながらそう呟く。

返事をする奴なんか誰もいない。

それが余計惨めに思えて、絡めていた指を強く握りしめた。

――しかし、そんな俺の人生も変わる事がある。

何時もの学校の昼休み。

何時も通り弁当を一人屋上で食べていた時だ。

屋上は俺以外、誰一人いない。

来る気配もサラサラない。

それは、俺がいるから。

何か“屋上に行く”と宮古ミヤコにカツアゲされる”など変な噂があるらしく、俺しか来ない。

他にも“不良を統べている”とか“シンナー中毒”とか“女を千人切り突破した”とか悪い噂だけあるけど、全て“嘘”だ。

実際、カツアゲ何かした事ない。

絡まれてる奴を助けようとしたら、勘違いされて無理矢理財布渡された事はあるけど…ま、後で交番の前にコッソリ置いて帰ったけどな。

不良を統べるものにも、不良は逆に俺の姿を見ると、何もしてないのに俺に謝りながら逃げるように去っていく。

なので、喧嘩なんてガキの時に弟としょーもない事で殴り合いしたくらいだ。

たしか漫画の取り合いだっけか。

シンナー中毒って…今まで酒もタバコも口にした事ないけど。ってか、体に悪いし、俺まだ未成年だし。

女千人切りって…ハッキリ言って、告られた事も告った事もないですけど？

こんな見た目を好きになる奴がいるなら、そいつはきっと“目が悪い”か“物好きな奴”だ。

やっぱし、見た目がこんなだから変な噂がたつのか？

ハッキリ言って、こんな顔に生まれたくて生まれたんじゃないよ。何だ？俺に整形でもしろってか？無茶な話だ。

…ま、一人も慣れたけどな。

『もう直ぐチャイムが鳴るな…嫌だけど教室行くか。』

弁当箱を片手に重い腰を上げる。

クラスに戻れば、クラスメートは俺に、冷たい目や怯えた顔を向けるのか…いい加減うんざりする。

『…っ！クソ！俺が何をしたってんだよ！』

髪を海色にしたのは、青や緑の色は気持ちを落ち着かせるって聞いたからだ。

髪の色以外、ピアスもアクセサリーも化粧も一切してない。

ネクタイ何か、どいつも緩めてんだろ。

授業はちゃんと受けてるし、ノートもとってる。

忘れ物なんか今まで2、3回くらいしかねえぞ。

宿題も毎回提出して、成績も上の方だ。

…自分で言うのもなんだが、“外見さえ除けば”俺は真面目な方だと思う。

そう断言できる。

前髪をかき上げ、深呼吸した後に、教室に戻ろうとした矢先、

バンツッ！！ ガツッ！

『…っ…！？』

目の前の扉が勢いよく開かれ、顔面強打した。

（鼻が…熱い…ってか、誰だ？こんな時間に屋上に来るなんて…もうすぐチャイム鳴るぞ？）

顔を手でさすりながら開けた人物を見ると……顔面蒼白で俺を見下ろしている。

…女？しかも、そのスカーフの色…一年生か。

痛さのあまり落とした弁当箱を拾い、立ち上がる。

女は目を泳がせながら、俺に何か言おうと口をパクパク動かすが言葉になっていない。手に楽器を抱えているあたり、吹奏楽部なのだろう。

大方、俺がいないと見計らって屋上で練習をしに来たが、運悪く俺に扉をぶつけたと。

だいたいそんな感じだろう。

『次からは気をつけろよ。』

そろそろチャイム鳴るから、お前も教室行け。』

女の目を見ずに言い、直ぐに横切って階段を下りた。

我ながら嫌な声だ。

目を見ながら言ったら、きっと女は泣いていただろう。

これまでの経験上、人と目を合わせたらダメなのは、俺が1番よくわかつている。

『…そういや、久しぶりに人と話したな。一方的にだけど。』

そんな些細な事に、思わず苦笑いをしてしまった。

――次の日。

昼休み、弁当を持って屋上の扉を開けると…何と先客がいた。

見覚えのある茶色の短い髪の小柄の女子が、フェンスにもたれ掛かっている。

手には昨日見た楽器を持っている。

女子は俺の存在に気づいたのか、ビシッと背筋を伸ばして緊張した顔で俺を見る。

その時、クラスの奴らと重なり酷くイライラした。

「あ、あの！宮古先輩！」

『…何だ？』

此処で練習したいんなら、俺は場所を変えるぞ。』

自分でもわかるくらいイライラした口調だとわかった。

ああああっ！もっと違う言い方があるだろうが！

…何でこう上手く出来ねえんだよ。

こんな喋り方じゃ、引かれるのは当たり前じゃねえか。

つくそ…嫌んなる。

『…悪い。お前は何も悪くない。』

俺がどくから、好きに練習すれば良い。』

種を返して早足で行こうとすると、背中から声が聞こえる。

「み、宮古先輩！昨日はすみませんでした！
もし良かったら、ふい、痛っ！」

『……。』

…何か、思っしガチッ！て嫌な音が聞こえたんだけど。
舌嚙んだのか？いや、嚙んだんだろう。
うめき声聞こえるし。

後ろを振り向いて、小さく震えている女を見る。
恐る恐る近寄って様子を伺う。

『（あの音は痛いだろうな…）

…おい、女。大丈夫か？』

「ふあい…ふみません…。」

あの！」

『！』

バツと突然顔を上げ、涙目で俺を見上げられる。
思わず一歩後ずさってしまった。

女は立ち上がり、グイッと一歩間を詰める。

それに、また一歩後ずさる俺。

女は痛みに堪えているのか、眉間に皺を寄せている。

女がそんな皺寄せたら後々後悔するぞ…なんて悠長な事を考え
ると、俺より二回りくらい小さい女が声を上げる。

「宮古先輩！此処にいて下さい！練習聞いて下さい！良かったらで
すが、お願いします！」

私、宮古先輩の弟君の源希君ゲンキと同じクラスの水木茶矢ミズキ サヤです！源希君

とは前後の席で仲良くしていただいております！」

デカイ声でまくし立てるように言われ、耳がキーンとする。

…女ってなんでこうも煩いんだろう。
俺も人の事言えないがな。

………ん？源希と同じクラス？

『おい、女。』

「宮古先輩！水木茶矢です！」

何でしょうか！？」

『…水木、先ずは声を抑えろ。耳が痛い。』

「すみません！…あ、すみません！」

バツと勢いよく頭を下げる水木。

お前は軍人か、と言いたくなるくらい俊敏に行動する。

…源希の同級生って事は、あいつまたペラペラと俺の事喋ったんだな。

今も昔も、特に用事もないのに俺を見ると喋りかけてくるし…あいつは母さんに似たんだな。

うん、あのお喋り癖は母さん似だ。

こういう時は、父さんに似ていて良かったと思う。
本気でそう思う。

しかし…コイツは何時まで頭を下げているんだ？
このまま出て行っても気づかないんじゃないだろうか。
…いや、しないけど。

『…水木、顔上げろ。俺は怒ってねえから。』
「はい、ありがとうございます。」

普通の声量で話をすれば、普通の声だ。
そこらの甲高い声じゃなく、近頃じゃ珍しい凜とした声。
聞き方によれば、落ち着きを与えるだろう。

『水木、お前に聞きたい事がある。』
「はい、なんでしょうか。」

声がしっかりしていれば、顔つきもキリッと引き締まっているわけ。
先程の舌嚙んで悶えていた面影は、今は無い。

…しかし、頭二つ分くらい小さい水木と話すのはお互い首が痛い。
さっきから首が苦痛を訴えている。
脊髄まで痛くなりそうなので、俺は一つ提案した。

『座って話さないか？』

水木の返事を聞く前に、自分が人を誘った事に驚いた。

前編（後書き）

何も考えずに書いたら、こうなりました。

お目汚しすみません（汗）

登場キャラの名前はグダグダ書いてる途中で、

『こんなんでも良くね？』

というノリで決めました。

主人公の名前より、弟君とその同級生の名前が先に決まる不思議。

うん、嫌かもしれませんが、まだ続きます。

前編

……さて、場所を変更したは良いが、何て話せば良いのか。
話し方にも気をつけねえとな。

……ああ、何か自分が情けなくて泣けそう。

とりあえず、飯食うか。

『いただきます。』

手を合わせて、弁当のおかずを口に入れる。

うん、普通に美味しい。

甘い物は苦手だが、母さんの卵焼きは食える不思議。

やっぱり、小さい頃から食ってるからかな…慣れは凄いな。

「宮古先輩。」

弁当を食べる間暇なので当たり前のようにボーっと考え事をして
いると、横からの視線に気づく。

……そーいや、俺が呼んだんだっけ。

『悪いな。呼び止めておいて、勝手に飯食って。』

「いえ、お気になさらず。その唐揚げ私に下さったら、許しますん
で。」

前と後ろで言ってる事が違うと思うんだが…まあ、唐揚げくらい
良いだろう。

『ん。一つ指で取れ。』

「ありがとうございます。
では、いただきます。」

小さい口に唐揚げをほうり込む水木。

頭も上下に動かしながら、唐揚げを食す。

…一瞬、動物に見えてしまったのは仕方がないだろう。

俺は視線を空に、本題を切り出す。

『…水木、源希は俺の事どう言っていた？』

「毎日のように話してますので、話せば長くなりますが…」

『出来れば手短に頼む…』

（だいたい予想はついているがな）『

わかりました、と指についた油を舐め取り、俺に真っ直ぐ視線を向ける。

俺は空に向けたまま。

そして、水木は凜とした声で俺が予想していた、出来ればあってほしくなかった事を本当に手短に話す。

「ほとんどが宮古先輩の自慢話と、宮古先輩が顔を合わせてくれな
いと嘆いております。」

『…ハア。』

頭が痛むのがわかる。

予想通りの返答に、聞かなければ良かったと後悔する。

俺が弟を避けてる原因の一つが、源希の以上なまでの喋り癖に並んで、俺の自慢話を周りに広める事だ。

源希のせいで変な噂をたてられた事は少なくない。

むしろ、50%くらいはあいつが原因だ。

くそっ…あのバカ弟が…殴りたくても、それ以前に会いたくねえ。顔も見たくねえ。

いっそ、死ね。

俺の為に、世界から消えろ。

…それより、早く高校卒業して、大学入って一人暮らしした方が早いか。

今度こそ、あいつが入れないレベルの大学選ばねえと…俺の神経がブチ切れかねない。

そんな事をブツブツ呟いていると、くいとワイシャツを引っ張られる。

思わず水木の顔を見てしまったが、水木は真っ直ぐに俺を見ている。

「それと、心配してました。夜中に疲れた顔で出歩いている事。自分は嫌われてるから、誰か相談にのってやってくれないかな、と。」

『……………それで水木が?』

「はい。一応源希君の友人なので、源希君が困っているのなら少しでも手助け出来ればな、と。」

『……で、俺が相談したら、その内容はあいつに伝わると。』
「はい。……いえ、違います。」

『…………。』

「…………。」

『…………。』

「…………。」

沈黙が続く。

あいつの考えている事なんか見え透いているけど、あっさり肯定されると腹ただしさを通り越して呆れてしまう。
チラ、と水木を見るとスー…と視線と顔を反らされた。

『…………水木。』

「違いますよ。」

『…お前、嘘つけないタイプだろ。』

「ノーコメントで。」

『…水木。』

「何ですか。」

『あいつ、友達何人いる?』

「…………私を含めて、二人です。私の眩きですが、先生達からも引かれ気味です。」

……まあ、あんな性格なら当然か。

逆に十人以上いたら、今頃アイツをハッ倒してるところだな。
俺に嫌われてるって自覚があっただけ、良しとしよう。

『……そういう水木、お前友達は？』

「…ノーコメントで。」

『お前、まさか…源希と同じ「それに関してはノーコメントで。」

『……そうか。』

「はい…。」

俺は何も言えないけど、うん…頑張れ。

お前の背中から哀愁が漂ってるけど、見なかった事にしとくから。

今日の昼休みは、チャイムが鳴るまで重い空気で飯を食べた。

——帰り道、夕暮れの中一人歩いていると、珍しく後ろから声をかけられた。

「宮古先輩。」

凜とした昼間聞いていた声。

立ち止まり、振り返ると声の主が一人、黒髪の知らない顔の男と、

嫌な顔が：

「正兄シヨウー！！！！正軌マサキに、いゝ！？グアッ！！？」

『よー愚弟。水木から話は色々聞いてんぞ。』

まーた俺の変な噂流してたらしいな？あゝ？』

「正兄：ギブ：ギ：ブ：頭、ミシミシい…ってる」

『いわせてんだよ、この馬鹿が。』

「宮古先輩。そろそろ離してあげて下さい。」

『邪魔すんじゃないねえ：これは兄弟の話だ。』

「いえ、そうではなくて。源希君、もう意識ないですよ。」

ダラーと両手をぶら下げ、気絶しているのがわかる。

周りの奴らが冷たい目で俺を見てくるのがわかり、チツと舌打ちしてから源希を持っていた手の力を緩め、地面に落とす。

「んもー！正兄ってば照れ屋ざっゝ！！む…無念。」

『死ぬ。プールの中でも沈めてやろうか。』

脇腹にローファーで蹴りをお見舞いし、少し飛んだ愚弟を見下ろす。

源希の連れっぱい黒髪のひよろつとした男が、心配そうに源希を揺さぶる。

身長は俺より若干小さいが、一年生の中じゃデカイ方だろう。

「宮古先輩。」

『…何だ水木、文句あつか？』

「いえ。ただ、前方から先生が竹刀持って走って来るのが見えるのですが。」

『…げ、ムサイ教育指導の漢谷カンタニかよ。

俺は先に行くから、お前らそいつほつといて早く帰れよ。
漢谷に捕まっと、グチグチ説教くらうぞ。』

俺達の周りには誰もおらず、生徒は皆全力で帰ったらしい。

説教くらう前にさっさと帰ろうとすると…ジャケットを捕まれる。

『…何？』

「彼は窪田クボタ真尋マヒロ君です。友人の一人です。」

『…そーか。じゃ、俺は帰るから、離せ。』

「真尋君は口数は少ないけど優しい心の持ち主です。」

『ちょ、マジで離せ。漢谷に追いつかれる。』

「身長は学年一高いですが、力と勉強は最低ランクです。

そんな彼が源希君を見離せますでしょうか。いえ、非力ながらに頑張るでしょう。今、現に彼は源希君を背負い体を震わせながらも前に進もうとしています『あゝゝゝー！！わーったから！えと、お前！名前なんだっけ！？』

「…窪田…真尋…。」

『そのゴミ貸せ！お前ら走るぞ！！』

「イエッサー。」

「は、…はい…！」

ゴミを肩に担ぎ、全力疾走する。

しかし、体育会系の漢谷の足も現役なのか、距離を保っている。
…ツチ！このゴミさえなきゃ、もうちょい早く走れるのに！

「宮古お！！！！今日こそ、その髪黒く染めてやる！！！！」

『うおおお!!』

クソ、何でこんな事に俺は巻き込まれてんだ!?
…ってかコイツ重え!!』

「宮古先輩ー、早いですよー。」

『早いって…水木遅っ!!』

お前、全力で走れ! 漢谷に追いつかれんぞ!!』

後ろを振り返れば、俺が歩くのより遅いペースで水木が走っている。

「これでも本気ですよー!! ワースト1なめないで下さい!」

『だああほっっ!! それを早く言え!!』

おいっ! 窪田? だったか!?

「は…はい…」

『俺の鞆持って先に行け! 俺は荷物担いで、お前の後追うから! あの緑川公園集合な! 緑川公園!』

「(コクコク)」

『うしっ! 頼んだ!』

水木! …って後ろおお!!』

「フハハハ!! 何か知らんが、お前にも仲の良い奴がいるのか! コイツを人質にすれば…「ちょっと、触らないで下さい。」

ヒュッと懷からナイフを取り出し、漢谷の首に押し当てる水木。

…は? ナイフ? いや、そんな事より漢谷が固まってる今のうち!!

『行くぞ! 水木!』

「アイサー。んじゃ、先生さようなら。」

重いお荷物を二つ担いで、走る高校三年生。

く、何でんな事に!?

そういや窪田! アイツ足は速え!! もう姿が見えねえぞ!?

俺は人目を気にせず、ガキ二名を担いだまま緑川公園を目指した。

『ハッ：ハッ：ツ、クソ：何で俺が、こんな事：ハア：』

「宮古先輩、お疲れ様です。意外と速くてビックリしましたよ。」

『っせえ!! お前が足遅いって早く言えば、こんな疲れなかったんだよ! あゝ!?!?』

「(ビクッ)」

声を荒げれば、窪田は肩を震わせて視線を泳がせる。

…っあー! また失敗した!

…：…そういや、水木は一度した俺を恐がった事ねえな。
肝が据わってんのか?

『おい、水木。』

「はい、なんですか。」

『お前、一度しか俺を恐がった事ねえよな。普通なら窪田みてえにびくつくのによお。』

「ああ、あの時ですか。」

公園のデカイベンチには、右から俺、水木、窪田の順で座っている。

愚弟は当然地面に寝転がせている。

コイツにベンチ何て10年早い。

前髪をかき上げてベンチにもたれ掛かり、水木に聞いてみる。

水木はああ、と思い出したように頷く。

「あの時は、窪田君より大きい人を間近で初めて見たので驚いてしまいました。」

後、私、前から宮古先輩の事知ってますよ。小、中、高一緒ですし。

「

『…は？同じ？』

予想外の返事に、間の抜けた声を出してしまった。

小学、中学、高校同じって事は…源希とも同じって事か。

『…んじゃ、この阿呆面とは腐れ縁って事か。』

「そういう事になりますね。」

何度か宮古先輩のお宅にお邪魔させていただいた事もありますよ。」

ゲシッと馬鹿面を蹴るが、起きる気配はない。

むしろ、『正兄☆』とか気持ち悪い寝言をぬかしてやがる。

腹を集中的に蹴っていると、ぼそぼそと小さい声が聞こえる。

「あ…あの…宮古…先輩。」

『ん、何だ?』

「えと…その…あの…」

水木の影でモジモジしながら小声で話す仕様に、イライラが上がつていく。

それより、水木小せえから全然隠せてねえし。

「あ、の…」

『あゝ…ハッキリ喋ろや。窪田よお。イライラすんだよ…あゝ?』
「ひっ! あ…あ…(ビクブル)」

「宮古先輩。子供がマジ泣きするので、その顔NGです。そのうちモザイク入りますよ。」

『…は、知るかよ。元々こんな顔だ。
泣かない方がどうかしてるぜ。』

目元を手で覆い隠し、ため息を吐く。

何で俺はこんな事しか言えねんだよ…大馬鹿野郎が…
窪田の事だって、もうちょい待てば良いだけなのによ。

ハハ、嫌いだこんな性格。

外見どうこうより、中身の方が問題だよ。

「み、みみ…宮古先輩! ありがとう、ごさいました…!」
『……………。 ……は? 俺、お前に何かしたか?』

突拍子に何を言い出すかと思えば、『ありがとうございます？
このゴミを担いで走った事か？

『いや、あれは半ば水木に無理矢理させられたって言うか何と言うか「…ち、違います！…ボク、…前に、先輩に…助けられた事、があつて…それで…」

『助けた…？俺がか？人違いなんじゃ…』『不良達に、カツアゲ…されてる時に…』

不良達に、カツアゲ？助けた？
ん？んを……もしや、勘違いされて無理矢理財布渡されたアレか？
そう思うと、あの時のガキによく似ているな。

『…此処ら辺でカツアゲされてた、あのガキか？』

「（コクコク！）」

『…無理矢理財布俺に渡した、あのガキか？』

「（コクコク！）」

あの後…念のため、交番行ったら…財布が交番の前に、落ちてたつて、お巡りさんが…。中味確認したら…そのまんまで、何も盗られてなくて…で、思い返してみたら…もしかして、助けてくれたのかな、と思って……お礼、言いたくても、恐い噂があつて、中々近寄れなくて…でも、今日逢えて、良かった…です…」

カアアと顔を赤く染め、恥ずかしそうに俯く窪田。

窪田の言葉は、途切れ途切れで聞こえにくいところもあったけど…

…俺にとって嬉しい事を言った事は伝わった。
現に、俺の顔も全ての熱が集中しているみたいに熱い。

『そうか…そうか…そうなんだ…』

確かめるように、何度も呟く。

俺のした事に気づいてくれる奴がいるんだ…今までしてきた事は、間違いじゃなかったのか…そうか…そうなのか…

俺、今まで生きてきた中で、今が1番嬉しい。

世間にとっちゃ本当ちっぽけな事だけど、俺にはメッサ大事な事。

……ヤベ…嬉し過ぎて泣きそう。

「宮古先輩。」

『…なんだ、水木。』

「宮古先輩の事、見てる人はちゃんといいますよ。」

『……そうらしいな。』

顔を両手で隠して、ただ水木の言葉にそう返す事しか出来なかった。

前編（後書き）

漢字間違いやら文章がおかしいと思う場所は、指摘して下さいと嬉しいです。

毎度、疎い文章ですみません。

しかし、愛は籠ってms（殴

まだまだ続きます。

中編（休日）（前書き）

前編から後日の休日のお話です。

早く終わる予定が、予想外に長くなってしまいました。

誤字、脱字は発見次第訂正致します。

では、どうぞ。

↓

中編（休日）

今日は休日。

昨日は愚弟を起こすまで、三人でしょーもない話をしていた。
こんなに気持ちが悪くなるのは本当に久しぶりの事で、小さくだけど笑ったように思える。

朝から起きて宿題を済ませると、気づけば昼過ぎだった。

うちは一応私立高校なので、宿題が多い。
しかしレベルは上の下ほどなので、真面目な奴と落ちこぼれる奴が別れる。

俺は成績は良いが、見た目がこんななので中間に位置している。
けど、“源希以外には”暴力等をしていないので、漢谷以外の教師は俺の扱いに困っている。

まあ、漢谷も立ちはだかって（俺の髪を黒に染めようとして）はいるが、一定の距離を置いて気味の悪い笑い声をあげる。

所詮、漢谷も小物だ。

何度かバケツに墨汁を入れて俺を呼ぶ姿を見た事があるが、他の教師達に止められていたな。

『…それより…教師があんな事して良いのか？』

何もしてない生徒に、バケツいっぱい墨汁をぶっかけるって。やられて殴るより、訴えた方が効率良いよな。あいつのせいで、大学入れなかったら後悔が残るし。

『…飯食うか。』

13時半、皆が食べ終わった後だろう。今だにあの中に入るのは、抵抗がある。愚弟は例外だが。

それでも、掃除や飯を作ってくれる母さんには感謝している。

親父といえ、母さんとは違って寡黙でどこか頼りなさげのサラリーマン。

小学校の教師をしている。

ある日、家から帰った親父が俺が髪を染めたのを目見て、一言だけ、『正軌、青が好きだったか。』と。

それ以上何も言わずにリビングに入る親父の背中が、とても小さく感じた。

でも、その一言が有り難かった。

タンタンと一階と二階を繋ぐ階段を下りると、何やら源希の笑い声が耳に響く。

ーツチ、あいつリビングにいるのか…んなら飯部屋持ってって、部屋で食うか。

冷静な判断をして、リビングの扉を開けようとした時、最近聞き慣れた声が聞こえる。

「はぁー？正兄がタバコ？バツツツカじゃねえの？

この家で酒とタバコの臭いしますかー？正軌兄の歯、眩しいくらい白いぞ！見せねえけど！！」

「そうですか。やはり噂は全部デマカセなんですね。」

「宮古先輩…可哀相、だね！」

「本っ当だぜ！！一体、何処のどいつがそんなホウを……あ、兄貴ーッグア！？」

ドアを開け、笑顔で立ち上がった馬鹿のこめかみに、回し蹴りをいれる。

壁に後頭部を強打し、うめき声をあげて横たわる阿呆の横腹を蹴りまくる。

『こっんの愚弟が。俺の噂の50%は、お前が俺の事をペラペラと周りに話すからだボケ。自覚しろ、そのミジンコ並の脳みそフル回転させて、生きてる事を謝罪しろ。』

「こんにちは宮古先輩。お邪魔してます。」

「お、お邪魔…してます。」

『ん、いらっしやい。』

勝手に菓子とか飲み物取ってっいてーからな。』

「ありがとうございます。」

ところで、宮古先輩。源希君、泡噴いてますのでそろそろ止めてあげて下さい。私達の為にも。」

白目を剥いて口から泡を噴く馬鹿弟。

いや、一回コイツは記憶喪失になった方が良い。
世界の為に、俺の平和の為に。

『……ん？ 私達の為に？』

何となくスルーしていた事が一周して返ってきた。
テーブルには何やら勉強道具が並べられている。
そうか……そろそろ中間テストだったな。

『テスト勉強か？』

「はい……えと、ボク勉強、出来ないから……源希君に、その……教えて
もらおうと……思ってた……」

「なんだかんだ言って、成績だけは良いですからね。羨ましい限り
ですよ。」

『そーいやコイツ、勉強は出来たな。……その知識を、何故普通に使
えないのか……っあ、ーっっ！！何か虚しくなったじゃねえか！ク
ソボケナスが！！』

「どーどー。」

宮古先輩、気絶してる人に暴力はちょっと。」

まだ勉強出来ないなら仕方がないが、勉強が出来て成績も良いと
なると……何か許せない。

スッキリするまで蹴った後、昼飯を持って部屋に行こうとすると、
服の裾を何者かに引っ張られた。

振り向けば、水木と窪田が。

………何だ？

『俺、これから飯食いたいんだけど。』

「見ればわかります。」

私達、もうすぐ中間テストなので源希君に勉強を教えてもらいに来たのですが。」

『…そうらしいな。じゃ、頑張れよ。』

グイッ

「その教えてくれる源希君が、宮古先輩のおかげでのびてます。」

『…それで？』

「私の成績は中間でつまらないくらい普通なのですが、窪田君は笑えるくらい成績ヤバイです。」

その顔で『ヤバイ』って言われると、何か違和感あるな。

…ん、何となくわかってはいたが、水木は言うつもりないな。

コイツ意外と性格悪いな。

俺は昼飯を勉強道具が並べてあるテーブルに戻し、椅子に腰掛ける。

『…俺は誰かに何か教えた事は、自慢じゃないが一回もない。

教えるの下手くそでも文句言わないなら、勉強教えてやっても良いぞ。』

ガシッ！！

「感謝します。宮古先輩。」

「ギ、ギリギリ、あの…高校に入れた、レベルですが…よろしく、
お願いします。（ポロポロ）」

二人に手を握られ、思わず引いてしまった。

…が、窪田がマジ泣きしだした…お、おいおいおい。

泣いてる奴のあやし方知らねえぞ…ああ、鼻水出てるし。

そんなに悪いのかよ…俺、自信なくなってきたぞ。初めて教えるのにハードル高くないか？

『お、おお…そんなに悪いのか窪田。』

な、泣くな泣くな。俺が泣かしてるみてえに思えるからよ…おい、
ティッシュで顔拭け。ほら…。』

「す…ずみばぜん…（ズズッ）」

「真尋君は泣き虫ですね。はい、鼻拭いて勉強しましょう。」

「う…ん…あ、りがど茶矢ちゃん」

…よく男の中で女が一人でいれるな、とか呑気な事思いつながら
窪田が落ち着くのを待った。

窪田が落ち着いたのを見計らって、勉強会？を開催。

一年生の範囲はあまり覚えてないが、まあいけるだろう。

飯を食べ、渡された範囲を見る。

……なんだ、一年はこんなにか。
なら楽勝だな。

『古文の教師って、お前らのクラス長江^{ナガエ}って女か？』

「（コク）」

『んー：なら、俺ん時と似たようなのだすだろう。
シャーペン借りるぞ。』

教科書に出そうな範囲に印をつけて、和訳のプリントにも書いていく。

『…窪田、ここ間違ってる。後で書き直しとけよ。

今 印付けた部分覚えりや平均点は余裕だ。

古文なんか暗記すりや、こっちのもんだよ。』

「「おおー！」」

声をあげて印をした教科書やプリントを凝視する二人。

……こういう反応初めてだけど、悪い気はしないな。

飯を食べ終え、お茶を飲みながら次の教科に進む。

『次。』

「数学です。」

『広岡^{ヒロオカ}? じいちゃんの。』

「いえ、新任の石田^{イシダ}先生です。」

『石田：ああ、あのインテリ眼鏡か。』

あーいうタイプは…ここらへん出してくんだろ。』

「え…でも、そこは出さないかも、って…」

『出さない“かも”だろ。』

最初らへんの問題も余裕で出してくるだろうし…俺が予想するなら、こんなもんだな。』

ノートに線を書いて、インテリ眼鏡対策を二人に見せる。

二人がそのノートを見てる間、テーブルに置かれた数学のプリントに気づく。

『…おい、窪田。ここ答え間違ってるぞ。しかも“Ⅱ”忘れてるし。』

「へ？あ…本当だ。」

『水木も間違い多いぞ。』

ここは、この方程式使って解け。』

「あれま。本当ですね。宮古先輩、先生より教えるの上手くないですか？」

「凄い…源希君、言ってた事、本当だね。」

宮古先輩は、成績優秀だって…自慢の兄貴、って。」

『…褒めても何も出ねえぞ。ほら、間違ったところは忘れる前に直す。』

数学は量をこなせ。』

パンパンと手を叩いて、勉強を促す。

二人が取り組んでいる間に皿を片付け、菓子がないか探す。

…お、冷蔵庫にケーキ屋のプリンあるじゃねえか。

8個あるって事は、母さん後でこっそり2個食べる気だったな。

俺は食わないから良いけど…ま、食べ過ぎには気をつけろよ母さ

ん。

今は3時過ぎ。

休憩するには良い時間だろう。

二人分のプリンとスプーンを持って、テーブルに行く。
うんうん、真面目に勉強やってるな。

源希はまだツブレてるけど。

テーブルにプリンを二つ、俺は冷めた麦茶を置く。

『そろそろ休憩しても良いぞ。

母さんがプリン買ってくれてたから、食べ。』

『その顔でプリンって言うと、宮古先輩可愛く見えますね。』

『水木が食わないなら、窪田二個食べて良いぞ。』

「あれ…宮古先輩、のは？」

『俺…甘い物苦手なんだよ。胸やけするから。』

胸の辺りを手でさする。

ジュースなんかも苦手で、基本は茶か水しか飲まない。

飲んでる奴を見ると、『よくそんな甘ったるい物飲めるな』と、
ある意味感心する。

俺には多分コップ一杯が限界だろう。

二人はプリンを口に含み、何故か納得したように頷く。

俺が甘い物苦手なのが、そんなに納得するの？

——そりゃ、恐持ての男が甘い物好きだったら引くけどさ。

俺以外の家族は食えるのに、何で俺だけダメなのか……疑問だ。深く考えると嫌な事になりそうなので、ここらへんで止めておく。

さて、二人も食べ終わったみたいだし、次やるか。

俺がコップを置くのと、窪田が話したのは同時だった。

「教えてもらってる、身として、言って良いのか……わからない、けど……宮古先輩。先輩は、勉強しなくて……良いのですか？」

怯えるってよりかは、心配したようにオドオドしながら聞いてくる。

……何この良い子。

窪田の両親、良い息子に育てたな！勉強出来ないけど！優しい子には育っているぞ！

けど、心配は要らないんだよな。

「ちょっと宮古先輩。私達のせいで赤点とった何て事、言わないで下さいよ。」

宮古先輩受験生なのに勉強しなくて良いんですか？

『…お前は窪田を見習え。水木の親の顔が見てみたいよ。俺はお前達と違って、毎日復習やってるから問題ねえよ。テスト前だけで覚えたモノなんか、意味ないからな。はい、雑談は終わり。勉強する。』

「「はい。」」

息の合った声が三つ、了解の音をする。

俺の家のテーブルは縦長で、横に二つずつ、縦に一つずつの合計六脚の椅子がある。

今俺らは横に向かい合うように腰掛けている。

…しかし、斜め前の椅子に金色の髪が見える。

元々淡い茶髪だった髪を、高校生になった途端金髪に染めた馬鹿は、俺の真似をしたらしい。

それを見た母さんは、『息子二人が青と金なら、母さんもオレンジにしようかしら。今の白髪染めの色、飽きちゃったし。いつそ、イメチェン？って事で！』と親父に話していたのを、風呂上がりに聞いてしまった。

親父は反対するかと思えば、『良いんじゃないか。』とすんなり了承した。

……たまに、ほんのたまに思うが、親父は母さんに甘いと思う。まあ、仲が良いんなら俺は何も言わないけど…もうちょい注意した方が良いと思う。

「あれ、正兄？もしもーし、考え事？正に…っいた…!!」

『お前が髪染めて母さんも染めた事を思い出してたんだよ。お前が染めなきゃ、母さんは髪をオレンジにしなかったし、近所から“不良家族”って言われずに済んだんだよ!』

「え、そんな噂あったんだ。

…ごめん、俺の耳は基本正軌兄の声しか入らないから…ね？
けど、親父は染めてないじゃん!」

『死ぬ。今死んだら、葬式で泣いてやるよ。』

「うっわ！迷う！！」

けど、正兄に泣いてほしくないし…けど、泣いてほしい…！
どうする？俺！？」

『待たせて悪かったな。』

次は…地理か。プリント見せてみる。』

「はい。」

馬鹿はほっというて勉強を再開する。

コイツと無駄な時間を過ごすより、水木達が良い点をとれるようになる方が、比べる迄もない。

渡されたプリントを見て、二人に出そうな範囲を教える。

真面目に聞く後輩に対し、今だ一人事をブツブツ言う愚弟を庭に出して鍵を閉める。

カーテンも閉めれば、完璧に邪魔物は排除された。

そろそろ5時半近くなった頃、『ただいま〜。』と『邪魔しま
す！』の明るい声が聞こえた。

…香織さんが来たのか。

多分、商店街でバツタリ会う↓そのままお喋りする↓カフェで盛り上がる⇨晩飯を食べに来た。というところだろう。

ガチャと扉が開く音がして、オレンジ色の髪と金髪の真ん中分けの女性が入ってくる。

「あら、茶矢ちゃんと真尋君いらっしゃい。

あらあら、何、正兄が教えてあげてるの？貴重なもの見たわ〜♪」

『…お帰り、母さん。』

いらっしゃい、香織さん。』

目を反らしながら言うと、首をガシッと細い腕で絞められる。

「なんだ〜？よそよそしいじゃねえかあ？正軌よお。

香織“さん”って何だ？“さん”って。気色悪いいな。

昔みたいに“香織ちゃん”で呼んで良いんだぞ？ほれ、呼んでみろって。」

『……っぐ、苦しい…腕、力緩めて…』

「香織ちゃん、離して下さい。お願いします。って言えたら離してやるよ。」

『…か、おり…ちゃん…ギブ。』

ガタッ！

「ちょっと、その女性。宮古先輩に勉強教えてもらってる私達の邪魔、しないで下さい。

宮古先輩、苦しそうではありませんか。汚い手で触らないで下さい。」

急に椅子に乗り、テーブルに手をつきながら不機嫌そうに話す。
いや、これは怒ってるな。

何となくだけど、声が何時もと違うのがわかった。

：こんな事で怒るなんて、水木は案外短気なんだな。
しかし、喧嘩になるから止めてほしかった…。
もし、香織さんに反抗したら…

「あゝん？何言ってるの？このちびっ子。

こちらとら久しぶりの再開なんだよ。正軌と会うのはよお。

ちったー我慢出来ねえのか？おつむはまだ手放せまちなか？」

「こちらは初めて勉強教えてもらってるんです。もうすぐ中間テストなので、こちらの方が優先なんですよ。」

グイッ。

『グエッ。』

「テストなんざあ、赤点とっても補習受ければ良いだけだわ。
あたしのが優先。」

ギュッ。

『ちよつと…』

「こちらは今まで赤点ばっかだった真尋君を教えるんです！私達の方が優先なんです！理解できますか！？」

グイッ！

『首が…』

「おい、お前引っ張るなよ。正軌が苦しそうだろうがよ。」

ギュー。

「あなたが離せば早い話です！」

「正兄は俺だけが触って良いのー！」

「あらあら、源希何処に行ってたの？」

「み、宮古先輩…大丈夫、ですか？（ユサユサ）」

『~~~~~っあゝあ！！！！！！！！』

バンツ！！

「「「（ビクッ!?）」」」

無理矢理香織さんの腕を解き、テーブルを力任せに叩く。
ビクリと体を震わせ、固まる水木達。

俺は椅子から立ち上がると、無言で窪田だけを連れて自室に行った。

残された四人は、ただ俺達が出て行った扉を啞然とした顔で見っていたという。

『ーで、理科は先ず元素名と元素記号を順番に覚えて、そこから組み合わせていけば良い。』

窪田みたいなタイプは、最初に空いてるスペースで良いから元素名と元素記号を書いておけば、テストは楽になる。俺も忘れやすい奴は書いてるしな。』

「なるほど…。けど、ボク覚えるの、苦手なんです…。」

『教師が教える覚え方もわかりやすいが、俺はこうやって覚えてる。…』

「あ、それならボクでも、覚えられるかも…。」

俺の部屋では、カーペットの上に置かれたテーブルに向かい合うように座って勉強の続きをしている。

窪田は勘違いしているところが多いが、間違いに気づかせればすんなり覚える。

わかりにくかった部分を質問する時、俺なりに丁寧に教えてやればノートの端にメモして、うんうんと頷く。

窪田が今まで間違った覚え方をしていたのを、誰も教えてやらなかったのだろう。

熱意はあるのだから、やればどんな力をつけていくタイプだ。

このまま頑張れば、平均点以上も夢ではないかもしれない。

：しかし、勉強は積み重ねが大切だから、直ぐには結果が出ないかもしれないけど、期末テストあたりには周りより実力をつけている事は間違いないな。

真面目に取り組むから、こちらとしても教えがいがあるし。

中学の教師は、一体何を教えていたのやら。

『おい、窪田。』

「？」

『お前：中学の時、わからない部分は誰かに聞いたりしてたか？教師とか友達や親に。』

「……ないですね。」

言葉を濁すように、困ったような笑顔を見せる。

——中学で何かあったのだろう。

深く詮索する事は、俺自身されるのは嫌だから『そうか。』とだけ言って勉強を再開する。

：別に気にならないわけではない。

親しい奴の事を知りたくない人間はそうそういないと思う。

：だから、今は聞く必要がないと判断しただけ。

窪田が話したくなったら、その時に聞いてやれば良い。

今、俺に出来る事は勉強を教えてやる事だ。

『…そろそろ休憩するか。

6時ちょっとだし、母さんが晩飯作り終わる頃だろ。食べてこいよ。』

「…宮古先輩は？」

「真尋君！晩御飯食べてきなさいよ。正軌も、たまには一緒に食べなさい！」

『…俺は、後で食うから行ってこい。

まだ腹へってないから。』

「…わかりました。また後で…来ます。」

パタン。

扉を閉めた音が部屋に残る。

タンタン…と階段を下りる音がだんだん小さくなっていき、最後には音は何もなくなった。

『…自分の勉強でもするか。』

立ち上がり勉強机に向かうと、コンコンとノックの音がする。

…誰だ？今頃、みんな下で飯食ってるし…この時間に来る奴が思い当たらない。

『…誰だ？』

扉を開けずに訪問者を確認する。

——もしかしたら、母さんが晩飯を持って来たのかもしれない。
料理が母さんが上手く出来たと思った時は、お盆に乗せて持って来るのだ。

冷めない内に食べてもらいたいらしい。

俺の問い掛けに、扉の向こう側から予想外の人物の声が聞こえた。

「あたしだよ。香織。
部屋、入っても良い？」

中編（休日）

——香織さんだ。

一体、何の用だろうか？正直、この人は苦手なタイプだ。

誰彼構わずに、勝手にズカズカと人のエリアに入ってくる。

みんな同じだとも言うように、昔から俺の事を弟みたいに扱って、反応を見ては腹を抱えて笑ってた。

この人は、俺が逆に避けていた部類の中に入る。

『…いいよ。入って。』

ガチャ。

扉を開けると、頭一つくらい小さい香織さんが立っていた。

ニツと笑顔を見せて、『お邪魔します。』と部屋に入ってくる。

扉を閉めると、香織さんは俺のベッドに腰掛けて、俺は勉強机の椅子に座る。

「それにしても、正軌の部屋は男らしくないってゆーか、漫画とかゲームとか興味ないの？」

香織さんはキョロキョロと俺の部屋を見渡す。

言われてみれば、男子高校生にしてはゲームはあまりなく、漫画も少ない。

ゲームはD／Sの“英語ヅケ”や“脳トレ”などの勉強に使う物しか置いてない。

漫画は“名探偵CONAN”を。
後は小説しかない。

『最近のは興味ない。面白くなさそうだから。』

「ふーん、そっかあ。」

けど、CONANは今も集めてるんだね。

あたしが紹介したんだっけ？」

『うん：小学校の時に貸してくれてからハマった。』

あの時の事は今も鮮明に覚えている。

……あれは、俺が小学校三年くらいの頃。

一人で公園のベンチに座っていると、香織がやって来た。

姐御肌の香織は近所の子供や親にも人気で、それでも俺と仲良く

してくれていた。

香織さんは俺に近づくにつれ、さっきまで香織についていた子供や親達は、俺を一目見るなり波が引くように何処かに行った。

それを気にしない風に、香織さんは喋りながら俺の隣に腰掛ける。

「どーした正軌？ 腹でも痛いかな？」

明るい声で話してくる。

それに首を横に振る俺。

『香織ちゃん、俺といた方が良くよ…。俺といると、香織ちゃん一人になるよ…。』

拳を握りしめて、絞るように言葉を口にする。

精一杯の勇気を込めて、俺のせいで寂しくならないように言ったのだ。

パァンッ！

後頭部に平手打ちが。

前のめりにベンチから落ちそうになったではないか。

痛い頭を両手で摩り、香織ちゃんを軽く睨む。

そんな俺を鼻で笑う香織ちゃん。

俺の事を恐がらない家族以外では初めての人。

その香織ちゃんの為に勇気振り絞って言ったのに……何故、平手を？意味がわからない。

“？”を頭に浮かべていると、今度はワシヤワシヤと乱暴に頭を撫でられる。

「バーカ。周りが誰もいなくなっても、一人にはならねえよ。

ほら、今、横に正軌がいるじゃん。あたしは一人じゃないでしょ。」

『…俺？』

「あんた以外に誰がいるのよ。

ま、ミーハーに囲まれるよりかは正軌という方が落ち着くし、私は結構好きだよ。」

—ほら、こうやって嬉しい事をポンツと簡単に言ってくれる。

“ 正軌の隣は結構好き。”

今思えば、この一言がどれだけ荒れそうな俺の心を助けてくれたか。

香織さんにもまた、感謝しきれないほどだ。

俺がボーっと香織ちゃんの顔を見ていると、急に視界が暗くなり、パソコンと何か額に当たる。

『痛…何すんの香織ちゃん。』

「ほれ、ブックオフの土産。」

『ブックオフって何？book OFFじゃないの？』

お土産って…何これ？」

視界を遮っていた物を手に取れば、“名探偵CONAN”とかかれた表紙の漫画。

眼鏡をかけた少年が表紙に描かれている。

『“なたんていコナン”？変な題名。』

「“めいたんてい”だわ。

お前、ローマ字解読出来るのか！？あたしでさえ、最近わかってきたのに…」

『ローマ字くらい俺らの学年で習うよ。

それより、これがお土産？』

“一卷”と右上に印されているから、1番最初の巻なのだろう。

漫画やアニメは“ドラエモン”や“CRAYON SHINCHAN”くらいしか知らない。

弟は色んなの持ってるけど、ふーんって感じで終わる。

特に面白くもない。

この前、“栄螺^{さくら}さん”の取り合いはしたな。

人が読んでる時に、横取りしようとするあの馬鹿が…。

そのせいで、母さんの物なのに19巻を半分に破って、一時間以上正座したまま怒られた。

その後、これからは自分の部屋で本を読もうと決意したのは言うまでもない。

「おう。今その漫画があたし達のクラスでブームなんだよ。

他の奴らは難しいって言って興味ないからさ、正軌それ読んでCONANの良さを語り合おうぜ！超カッコイイぜCONAN！！」

『税込み105円…。』

「book OFだからな。今んとこ、10巻まで出てるよ。」

『…ありがとう。帰ったら読んでみる。』

「今度感想聞かせろよ！

じゃあな！！」

バシッ！！

『…っ痛て。

うん、じゃあね。』

夕焼け空の中、見えなくなるまで二人、手を振って帰った。

見えなくなった頃、貰った漫画を両手で抱きしめながら家まで走った。

これがCONANにハマった始まり。

ちよつとでも香織さんに近づきたい為に、一冊を何回も読み返したっけ。

そして今。

香織さんからブームが過ぎ去っても、反対に俺がCONANにハマってしまい、部屋の本棚には全巻並べてある。

そのCONANも、数年経った今でも連載しているのだから凄いなんだ。

「もうすぐ最新巻が発売するんだっけ。結構続いてるねえ。」

『映画も上映される予定らしい。TVで言ってた。』

「へえ、すっかりCONANのファンになったね。

あたしはもう冷めちゃったもんなー。」

ベッドに背中から倒れる香織さん。

両手を広げ、一面白い壁紙の天井を見つめる。

そこからは、二人共何も言わなかった。

何も話さなくても、気まずい雰囲気ではない。

外の音だけというのが、ゆっくりとしたこの空間を強調させる。

ーコンコン

そんな時、また訪問者が現れる。

今日はやけに人が来る日だな。

『……誰だ?』

同じような言葉を発する。

今度こそ、母さんだろうか？源希だったら、蹴り飛ばしてやろう。

……しかし、またしても予想が外れた。

「水木と真尋君です。とも美さんに頼まれ事と、勉強の続きを教えてくださいに来ました。」

「あの…入っても良いですか？」

とも美さん、とは母さんの事だ。
何の用だろうか？

『…香織ちゃんも一緒に良いなら入って良いぞ。
良いよな？香織ちゃん。』

「……つぶ。正軌の頭の中じゃ、まだ“香織ちゃん”なんだな。ク
ツクツクツ…」

『……悪かったな。』

喉を鳴らして笑う香織さんの顔が見れないから、顔を逸らす。

「あーあー、正軌君、拗ねんなって。あたしは別に気にしないから
良いよ。大勢でいるの、嫌いじゃないし。
おーい、二人共入って良いよー！」

手を挙げて香織ちゃんが呼べば、扉が開かれる。

そこには、お盆を持った水木と水木の勉強道具を持った窪田が立
っていた。

：何んでだか、水木は香織ちゃんを見た途端、表情には出さないが不機嫌そうなオーラを出す。

一方、香織ちゃんは楽しそうにケラケラと笑う。

水木は香織ちゃんを無視して、テーブルにお盆を置く。

「そこにいる方が食事中に『あ、そういや。』と部屋から出て行っただので、ついでに宮古先輩の晩御飯も持って来ました。」

「あっちゃー、すっかり忘れてたわ。ありがとねーおチビちゃん。」
「水木です。」

真尋君、勉強道具を退かしてくれますか？

「あ、うん。」

窪田が荷物を床に置いた場所に、ラップされた焼きそばと食いかけの焼きそばが置かれる。

香織ちゃんは俺に何か用件があったのだろうか？……………それとも、“あの事”の相談だろうか…。

二人が帰ったら、話を聞く事にしよう。

『：香織ちゃん、後で用件聞くよ。』

二人共、持ってきて来てくれてありがとな。』

「いえ、勉強を教えてもらうついなのです。」

「まだ時間、あるから…続き、お願いします。」

再び、飯を食べながら勉強会をする。

時折、横で香織ちゃんがちょっかいをかけて水木を怒らせる。
それを窪田が宥めて、俺が香織ちゃんを止めさせる事があったけど、何とか勉強を教える事は出来た。

――20…10分。

「そろそろ帰らなければ。」と水木が用具をしまい始めたので、窪田も慌てて帰る準備をする。

母さんが持ってきてくれたお茶を飲みながら二人を見ていれば、ガシッ！って香織ちゃんに頭を捕まれる。

俺の頭を引き寄せて、ワシヤワシヤ頭を撫で回し、二人を見る。
俺はされるがままで、お茶がこぼれなかった事に安心していた。

「正軌はさ、見た目こんなんで髪も青く染めてるけど、二人が知ってる通り…優しい奴だからさ。

たまにどうしたら良いか分からなくて、八つ当たりみたいな事言うかもしれない。けど、不器用なだけだから、これからも仲良くしてやってね。

ついでに、あたしとも。」

ニカッと歯を見せて笑う香織ちゃんに、二人はただ頷いた。

俺はこの感情をどうすれば良いのか分からず、手で顔を隠す。
小さく『ありがとう…』と呟けば、香織ちゃんはまた頭を撫でた。
今度は優しく宥めるように。

「しかし、貴女は宮古先輩に近づき過ぎです。触り過ぎです。

そろそろ離れて下さい。」

「「宮古先輩」って、堅っ苦しい呼び方するなあおチビ。

“正軌先輩”とか呼びゃ良いじゃねえか。ほら、真尋も一回呼んでみろって。こんなもん、慣れだ慣れ。」

「!.....ま、ままま.....正...軌...先輩。(カアア...)」

頭から湯気を出す勢いで、窪田は耳まで赤くする。

.....こっちまで恥ずかしいじゃねえかよ。

香織ちゃんは今度はニヒルな笑みを浮かべて、水木の方を見る。

しかし、水木は一言、

「貴女が離れば呼びますよ。」

「あいよ。」

「正軌先輩、今日はありがとうございました。」

サラリと感謝の言葉を添えて言う水木。

水木らしいなと考えると、香織ちゃんが俺の頬を指でつつく。

.....何?という顔で見れば、ニヤリとした笑顔が。

「じゃ、今度は正軌が名前で呼んでやれ。こいつらは呼んだんだし、正軌も出来るよなあ?」

『...いや、俺は良いけど二人が嫌がるだろ。』

「「(フルフル)」」

「だそうだ。観念して早く呼んでやれって。」

首に片腕をかけられ、頬を指先で摘まれる。

『……あー…、えと…はい。』

片手を軽く上に上げる。

注目されてる中、KY（空気読めてない）発言をしなくてはならない。

…自分が悪いのは重々承知している。

二人にも悪いとわかっている…けどさ、俺も人間だから忘れてしまいう事もあるんだよ。

………よし、言い訳はそろそろ止めるか。

俺は小さく深呼吸をした後、意を決して言葉を口にした。

『…………二人の名前、何だっけ？』

あの時の三人の表情は今も忘れられない。

……………本当、ごめんなさい。

中編（休日）（後書き）

…どうか正軌を怒らないでやって下さい（笑）

彼は、昔から色々とありましたので……必要な事しか覚えない子に成長したのです。

まだ続きます。

中編（自分を…）（前書き）

シリアスっぽいけど、空気をぶち壊す親子がいます。
残念ながら、そんな小説なんですよ。

それでも良い方は、どうぞお進み下さい。



中編（自分を…）

あの後、二人に名前を覚えてもらい、たどたどしいながらも言った。

——そして、二人を見送った後、香織ちゃんと再び自室に戻る。

香織ちゃんはまた俺のベッドに腰掛け、俺はカーペットが敷かれた床に腰を下ろす。

顔を上げ、香織ちゃんの顔を見ると、ニッって笑顔を見せる。

はたから見れば、明るく人懐っこい笑顔なのだが、その裏を知ってる俺には痛々しいくらいの香織ちゃんの痩せ我慢だ。

『…また何かあったでしょ。』

静かに、けど怒るようではなく、問い掛けるでもなく、ただ断言するように言う。

俺の一言に、左腕を抑える香織ちゃん。
…やっぱりか。

『…香織ちゃん、今日も泊まってく？』

「…うん。ありがとう、正軌。」

おばさんに言わなきゃ…」

『良いよ、俺が言ってくるから。』

リビングにある鞆に着替え入ってるでしょ？持って来るから、先に風呂入りな。』

「うん…うん…。ごめん…ね、正軌。」

俯いて、更に左腕を強く握る香織ちゃん。

今の香織ちゃんは昼間と比べると、別人のように全てが弱々しい。まるで、何かに怯えているように…体が微かに震えている。

…俺はそつと頭に手を置き、優しく撫でる。

『“ごめんね”は言わない約束だろ。』

じゃあ、後で風呂場に着替え持って行くね。』

「……………うん。」

俺は香織ちゃんから手を離すと、リビングに行った。

リビングに入ると、親父が帰って来ていて、母さんと雑談をしている様子だ。

源希はソファーに座ってTVを見ている。

俺は母さんに歩み寄る。

『…母さん。』

「あら、正軌。香織ちゃんお泊りかしら？」

『うん。今日は俺の部屋で寝るから、そっとしといてやって。』

「正軌、布団は一応持って行けよ。」

母さん達の部屋の押し入れに入っているから。」

『わかってるよ親父。』

じゃあ、よろしく。』

ソファーに置かれた香織ちゃんの鞆を手に取ると、源希と目が合う。

何時ものおちゃらけた目ではなく、真剣な瞳。

「香織ちゃん、まだ“傷”痛む？」

『…お前が口を出すんじゃない。今日は部屋に入ろうとすんなよ。』

鞆を手に、リビングを出て行った。

「…ねえ、母さん。」

「何？源希。」

「正軌兄はさ…まだ、香織ちゃんの事を“自分のせい”だと勘違いしているの？」

あの日からじゃない？正軌兄が更に変わっていったの…」

「源希。止めなさい。」

「だって親父…」

「正軌の決めた事に、お前が口を出してどうする。

私達は、見守ってやれば良い。困った時は助け合うのが“家族”だろう。違うか？」

「……うん、ごめんなさい。」

「…お前の気持ちはわかってるから。心配するな、正軌は大丈夫だよ。」

「親父…うん。俺、頑張るよー」

「あなた…あたし、惚れ直しちゃったわ。一生ついていくわ。」

「…母さん、お茶。」

「んもう！お父さんったら照れちゃって。可愛い！」

「…母さん、雰囲気ぶち壊しだよ。ハア。」

『香織ちゃん、鞆此処に置いておくよ。』

「おー、ありがとさん。」

脱衣所に鞆を置いて部屋に戻ろうとした時…ある物が視界に映る。洗面所に置かれた、使われた後の包帯。

汚れてはいないものの、昔の嫌な記憶が蘇る。

俺は種を返すと、早足で布団を持って部屋に行った。

テーブルを片付けて布団を敷いていれば、ガチャリと何もなしに開く扉。

そこには、タンクトップと短パン姿の風呂上がりの香織ちゃんが。濡れた髪をタオルで拭きながら、鞆を適当に置く。

俺はなるべく直視しないように、布団を敷いていく。

バフツと豪快にベッドに腰掛ける香織ちゃん。

さつきから何も話さない。

無言が続いていく。

『…じゃあ、俺は風呂入ってくるから。風邪ひかないよう、髪をちゃんと乾かすんだよ。』

「……（コク）」

タオルに包まった状態で、俺の方は見ずに頭だけを動かす香織ちゃん。

それを見て『直ぐ戻るから…』とだけ告げ、扉を半開きのまま風呂場へ向かった。

——シャアア：

シャワーを頭から浴びて、自分のすべき事を脳に言い聞かせる。

（もし、またダメだったら？お前はまた、香織ちゃんから逃げるのかよ。）

誰かが言った。

頭の中の俺が言っていた。

もう一人の自分が冷めた目で俺に吐き捨てるように言う。

（…違う、違う違う違う。

俺は逃げたんじゃない…逃げたんじゃ…）

（認める。お前はあの時、自分が可愛い為に香織ちゃんを見離した。）

（違う！あの時は仕方がなかったんだ！）

（“仕方がなかった”？ハッ、笑わせるね。

お前は最低だよ。臆病者だ。）

ガッ！！

『――違う…俺は、俺は逃げて、ない…。恐くて逃げたんじゃ…』

下唇を強く噛み締めると、じんわりと血の味が広がった。

「ハッア―イ！！正軌兄いいん！今のうちに一緒に風呂入ってこいつて母さんが、ったああああ！！！」

『…っ当、お前はつくづく空気が読めてないな。母さんがそんな事言うわけねえだろうが。死ぬ。このまま壁と同化しろ。』

……………ツチ。

俺はもう出る。好きなだけ入ってろ。』

ガラガラ……………ピシャン。

洗面台に設置してある鏡を見る。

海色の髪…流石にちよっと薄くなって自毛の黒が出てきたな。

『…今度、髪染め買ってくるか。』

自分の顔を一瞥してから、着替え始めた。

——扉を開けると、母さんとバツタリ出会った。

そして、衝撃の一言を母さんが口にする。

「あら、一緒に入らなかったのね。」

……………マジかよ。

俺はしばらくの間、呆然とした状態でその場に立ち尽くしていた。

……母さん、それはないよ。

俺達、もう高校生だぜ？

中編（自分を…）

…何か疲れた。

タオルを頭に被せたまま部屋の扉を開けると…そこには香織ちゃんの姿がなかった。

『香織ちゃん…？』

——っ！？まさか！！』

タオルをほうり投げてベランダの方を見れば、夜風に揺れる金髪が見える。

…何だ、何もないじゃないか。

何をはよとちりしているんだ、俺は。

もう数年経ったんだ…あの時みたい“不安定”なままの香織ちゃんじゃない。

香織ちゃんも強くなったんだ…俺がいない間に。

足が、一歩。

また一歩。

ちゃんと香織ちゃんに向かっている。

——大丈夫…香織ちゃんは俺と違って成長したんだ。
俺がいなくても、大丈夫なんだ。

『香織ちゃん…。そんな所にいると風邪ひくよ。』

「……。」

手をのばして香織ちゃんの肩に触れる。
右肩、人並みの白い肌。

……ただ違和感が拭えない。

「…正軌はさ、」

香織ちゃんの肩が…震えている。

「どうして、どうして…」

涙声。

香織ちゃんの足元には、ポタポタと雨が降ったみたいに水が落ちて
ている。

香織ちゃんが振り返る。

——俺は、馬鹿だ。

…大馬鹿野郎だ！

「どうして、正軌は、あの時いなくなっちゃったの？」

目の前で泣いている彼女がいるのに。

自分の都合の良いように頭の中で“香織ちゃん”という存在を書き換えて。

馬鹿のように安心して…

最低だな 俺。

香織ちゃんの左腕の二の腕あたりの傷痕が、俺のした事を更に印象づける。

俺が、起こしてしまった罪の証。

……あの頃は、俺の方が香織ちゃんを見上げてたのに…今じゃ、頭一つ俺の方がデカイや。

でも・・・これでガキの時に出来なかった事が、漸くできるんだ。
あの時代の身長差を羨まないで済む。

――ギュッ。

『…ごめんな、随分待たせちゃって。
俺、もう離れないから。あの時の約束、今度は守るよ。』

グググ…

強く、強く、強く強く強くこの小さな体を抱きしめる。
骨が折れても構わない。
香織ちゃんが好きだって、今だけは離さない。
源希が乱入したって、無視をする。

――ただ、今だけは
どうか この腕の中で子供のように泣く彼女を抱きしめていさせてほしい。

彼女が泣き止むまでで良い。
彼女が俺を突き飛ばすまででも良い。
ボコボコに殴られても良い。

「うゝわあああああんんっつ！……！！！」

『ごめんね…ごめんね…香織ちゃん
後で沢山殴って良いから、好きなだけ馬鹿って言って良いから。

だから……香織ちゃん、』

香織の耳元で、囁くように告げる。

彼女の肩に、俺の頬を流れる涙がどんどん量を増やしていく。

止まらない 二人の涙。

香織ちゃんの叫び。

抱きしめる力。

外の音。

夜風が運ぶ、初恋だと自覚した時の感覚。

あの出会いから、あの時から、あの場所から———今。

あの時伝える事が出来なかった言葉。

今なら、恐くない。

香織ちゃんに、言える、いや言うんだ。

『香織ちゃんの側に、俺をいさせて。』

香織ちゃんの泣き声は聞こえない。

香織ちゃんがギュッと抱きしめる力が増したのがわかった。

涙やら鼻水でぐちゃぐちゃの顔を上げて、香織ちゃんは……

ずっと迷子だった子供がやっと親と会えたような、

かくれんぼしていた子供がやっと見つけてもらえたような、
母親に優しく起こされる子供のような、

そんな、言葉では言い表せられない表情で、ニヘラと笑顔を見せる。

目には、真新しい滴が溢れる。

「…やっと、会えた。」

夜の空を家の光を二人の背景に、

俺達は再会の喜びを分かち合った――――

―――
「もしもし、源希君？源希君？」

「―ああ、ごめん茶矢。そろそろ電池切れそうだから、またかけ直すわ。」

「そうですか。では、また明日。」

「……うん、おやすみ。」

パタン……

携帯電話を閉じる。

俺の部屋は正軌兄の隣。

最初から最後まで、聞かなくちゃいけなかった。

聞きたくないなら部屋を移動すれば良いんだけど……そうもいかな
い。

正軌兄の決めた事を最後まで見届けなくっちゃ。

……だって、俺、弟だもん。

茶矢の親友だもん……。

ポタタ……

――何で俺が泣いてんだ……？

兄貴の恋が実った嬉しさ？

親友が失恋した悲しさ？

兄貴の未来を考えての辛さ？

多分、全部だろう。

「……っ、あーあ。兄弟揃って、明日は目が腫れてるとか。
ははははははは、笑えねえ……っ！」

兄貴には悪いけど、俺は素直に祝えない。

祝ったら、逃げたみたいだし：何より、茶矢が可哀相だ。

何も知らない窪田は、普通に祝うんだろうなあ。

そりゃ良い。

俺達に分まで祝ってくれや。

：何、窪田に八つ当たりしてんだよ。

今の俺、最低だ。

「あーああーあ、優しい奴はどうしてこうも不運な目に会うんだろうなあ。」

目から流れる涙をそのままに、俺は静かに目を閉じた。

中編（自分を…）

——暗闇の中、ぽつんと一人泣く少女。
すっかり疲れた泣き声が耳に届く。
瞳には、何もかも諦めたように色がない。

恐かった場所。

自分を守る為に走って逃げた場所。

トントーン――

ゆっくり、少女の肩を二回叩く。

顔を上げて俺の顔を見る。

驚いた少女の顔。

なんだか可笑しくて、笑みがこぼれる。

『――ちゃん。行こ。』

少女に手を差し延べる。

少女の目の色はみるみる内に昔の色を取り戻し、
だんだん身体が成長していく。

俺の視線もどんどん高くなっていく。

少女は女性になるが、笑顔だけは変わらない。

俺の好きな笑顔だ。

「正軌。正軌、もう先に行かないで。」

『うん、一緒に行くよ。だから……!?!?』

女性の左腕から血が大量に流れる。

ドクツ…ドクツ…ドピュツツ…

『——ちゃん!?!何で?!どうして!?!?と、止まらな…!』

「正軌…今度は置いてかないでね?」

『…っ痛…!』

凄い力で腕を捕まれる。

目の前の女性では考えられない、握力。

腕が、目の前でミシミシと音をたてて変形していく。

『——…ちゃん?』

「これで、あたしとお揃い。」

女性が手を離れた俺の腕は………変な形に曲がって、人間の関節を無視した形になっている。

——これを、——ちゃんが?

ハッ！！！

『ハッ：ハッ：ハアッ、ハア：。』

まだ春なのに、汗が凄い。

身体が、手が震えている。

服がビショビショだ。

髪が肌に引っ付いて気持ち悪い。

「すー……すー……」

腕に何かのつている感覚がある。

顔を向ければ、…香織ちゃんが俺の腕を枕にしている。

夢で見た顔が

「兄貴！？どうした！！？」

『な、何もねえ…部屋から出て行け。』

「けど…兄貴、顔が白いよ。」

『……うるせー。香織ちゃんが起きる前に、部屋から出てけよ。』

源希の横をすり抜けて、階段を下りていく。

なんだったんだ…あの夢は。

“ 償い ” とか、あの女性の顔…俺の手足が…

『うっ！…ハアツ…ハアツ……気持ち悪い…』

香織ちゃん起きる前に、部屋に戻らないと。

シャワー浴びたら、気分も元に戻る…きっとそうだ。

俺は……今度は逃げない。

脱衣所に入ると、母さんが洗濯物を取り込んでいた。
ちらっと俺を盗み見て、

「湿布なら救急箱に入ってるわよ。」

『……何の話？』

「あら、初夜は何もなかったのね。ま、正軌にそんな度胸ないわね。
ほら、さっさと洗濯物出しちゃって。」

『あ…うん。』

よくわからないまま、風呂場で服を脱いだ。

『…あ、香織ちゃん起きた？』

「ん……さっき起きた。正軌、正軌。」

『どうしたの…？』

手招きされ、濡れた髪をそのままに香織ちゃんに顔を近づける。

クスツと笑みを見せる香織ちゃん。

ん？どうしたんだ？

更に顔を近づけると、グイッと服を引っ張られ
——チュツ。

至近距離に顔が。

唇には昨日感じた柔らかい感触。

……………キス？

ぽかーんとしていれば、顔が離れる。
思考が数秒くらい置いてかれている。

「プツ：アハハッ！何その間抜け面！！
アハハハッ！正軌最高！！」

目の前で爆笑される。
やっぱり笑顔が似合うなあ、とかぼんやり考えていけば、思い出
される昨夜のベランダ。

そうだ：昨日、俺達、ここ恋人に：俺が、告白して……

カアアアアア：

『あ：香織、ちゃん……』

「ブハッ！！超赤面してるし！」

『わ、笑うなよ：み、み見るなって：クソオ』

熱い顔を隠そうとすると『ごめんごめん』と謝られる。

俺…格好悪いな。

で、でもさ、初めて付き合うんだし…やっと、長年のこ、恋が実ったわけだし…~~~~あーっ！！！！女々しいぞ俺っ！！

よし、男、正軌。

男を…見せる！

くるっと振り向けば、「ん？」と小首を傾げる香織ちゃん。

…いや、いかんいかん。

可愛いけど、可愛いけどさ！“弱い男は捨てられやすい”、ってTVで言ってたぞ！何の勇気だよって話だけどさ！さあ！！

——無理だろ自分。

こんなんでGIVE UPしてたら、この先不安過ぎて泣けてくるわ。

…目、目を閉じてもらえればなんとかイケるかもしれない。

『か、香織ちゃん…』

「何？真っ赤なお顔の正軌君。」

『（スー…ハー…）目、閉じて、くれない？かな？』

い……………言った！！俺は言ったぞ！！やる時はやる男です！！

「んー。」

あっさり目を閉じて顔を少し上に上げる香織ちゃん。
意図を読んでくれているらしい。

バクバクバクドクツドクツ

う、煩いぞ心臓！一回落ち着け！落ち着いてくれって！！

ベッドに手をついて、恐る恐る顔を近づける。
昨日のは流れる的にしまったわけで、今は自主的にしているわけ。

今思えば、昨日のも自主的なわけで。

あーーーーーーーーーーーっっ！！！！

落ち着け！！COOLになれ！！！！

―――チュツ―――

した…したぞ俺は。

……………頬、だけどな！！文句あるか！！あゝあゝ？

バツと離れてベランダに逃げる。

体操座りをして、膝に顔を埋める。

「ほっぺって……ククク。正軌は何時まで経っても正軌だな。アハハハハ！」

煩い！ほっといてくれ！！

何て口に出来るわけもなく、ただ呻きながら庭を見ていた。

『あー………恥ずい。』

誰か、情けない俺に勇気を下さい。

中編（自分を…）

コンコン。

今は12時ちょっと。

朝飯を食べ、午前中に香織ちゃんを家まで送って行った後、昼飯を食べるまでテスト勉強をしていた。

机の上に置かれたノートから目線を扉に向ける。

『……誰だ？』

何時もと同じ質問。

必然と返ってくるのも同じ答え。

「茶矢と真尋君です。」

また教えてもらいに来ました。」

『おーそうか。入って良いぞ。』

「お邪魔します。」

「お邪魔します…。」

「お邪魔しまーす♪」

『ちょっと待て。』

何か余計なの入ってないか？一、二、三、四……三、四？

『茶矢：そいつは誰だ？その黒髪の女は。』

「紹介します。中学から普通に仲の良い、皆月 友恵です。」

「ちわー！先輩の話は二人から聞いてまーす！

相変わらず顔が怖いッスねー！！」

眼鏡をかけた、スラッとした身体の女。

源希より背が高く、真尋よりは小さい。

皆月 友恵：よし、覚えたぞ。

中学からって事は、後輩か。

『元気なのは良いが：声のトーンを下げてくれ。』

「アハハ♪すみませーん！生まれつき声がデカイんですよー！アハハハ！」

「友恵。煩いです。」

あ、茶矢ハッキリ言うな。
それくらい仲が良いのか。

「留年するくらい馬鹿なのですから、先輩に失礼のないよう『ちょっと待て。今なんて言った！？留年！？！？』」

初めて見たぞ。

“留年”した奴。

本当にあるんだな：留年。

へえー…。

「そんなに見ないで下さいよ…正軌先輩♪キャー!!」

『いや悪い。初めて見たから…留年した奴。』

「アッハー☆意外と傷ついてるところに塩を塗ったな☆

勉強が何の役に立つんだよ!クソウ!!」

「友恵、勉強は大切ですよ。」

「友ちゃん先輩…。」

「ま、元気だしなよ。正軌兄は教えるのがバリ上手い事が昨日発覚したし。」

「「(コクコク)」」

「俺もサポートするから、勉強頑張ろうぜ。友恵ちゃん!」

「源希……お前って奴はああ!!」

「うおっ!!泣くのはまだ早いぜ友恵ちゃん。」

皆月と源希が暑苦しく、騒がしく抱きしめあっている。

俺はかやの外状態。

何故か、話が進んでいるんだが……これは強制なのか?

留年って事は、覚悟して取り組まなくてはいけないのか。

強制的に?マジで?

「つーわけで!正軌先輩お願いしまっす!

あれ?茶矢、先輩は?」

「お昼ご飯を食べに行きました。

そんな所で騒いでいる間に、先に勉強しましょう。」

「あ…テーブルあった。」

勝手に、使っても良いのかな?」

「良いだろ!兄貴はそんな事で怒らねえよ!!」

でもな…この人数でやるのは狭いな。」

「源っちよ、リビングでやらないのかな？手土産を玄関に置きっぱなしなのだけど。」

「リビングに行きますか。」

ぞろぞろとリビングに集結する後輩なのでした。

飯を食べてる時に全員が来たのに、正軌が驚いたのは言うまでもない。

『…で、今日は何をやるんだ？』

「昨日教えてもらった部分は…大丈夫です。」

「私は理科と英語を。」

「あたしは全部を。」

「ボクは…：英語と社会を。」

それぞれ教科書とノート、授業中に出されたプリントをテーブルに並べる。

皆月は…全部。

うん、予想はしていたよ。

隣でペン回しをする源希を一瞥し、茶を飲み干す。

『源希、お前苦手なやつあるか？』

「んー？基本平気だけどねえ、英語がちよっと苦手かも。平均以上はとれるけどね。どうも苦手だ。」

『んじゃ、皆月はワンツーマンで源希に教えてもらえ。たまには役に立て、愚弟。』

「そんな気はしてたから良いけどね。兄貴にならドンドン頼ってちよーだい♪

向こうのテーブルでやろうか、友恵ちゃん。」

「あいよー。」

『茶矢と真尋は、俺が教える。まずは英語のやり方を教える。

皆月も源希でわからない事があれば、俺に聞いてこい。』

「Thank you♪先輩。」

さっそく勉強会を始めた。

テストは明後日から始まるので、時間は少ない。

範囲と教師を聞いて、ノートや教科書に書き込んでいく。

一年生の中間テストなので、まだ少ない方だ。

それが有り難い。

『お前達、一人称とかわかるか？』

「私は一応。」

「……すみません。」

『あー、落ち込むな真尋。』

ん……んじゃ、茶矢はこの英文をさっき言った通りにやれ。辞書で確認しながらやれよ。』

「わかりました。」

『真尋は俺と一人称や三人称の説明な。』

これを覚えなきゃ、英語は覚えられない。基本だと思って良い。』

「はい。」

最初は見ながら声に出したり、ノートに書いて覚えていく。

それを繰り返していくと、次第に見ないで言えるように、書けるまでに成長していく。

『次は、声に出しながら書いていきな。茶矢、終わったらノート見せろよ。確認するから。』

「「はい。」」

良い返事だ。

二人の進み具合から、俺が教えるまでもないように思えるんだが……まあそんな事はどうでもいいか。

真尋が完璧に覚えて書けるようになると、泣いて喜んだ。

茶矢も、多少間違いが目立つが……似たようなモノを間違い続けている。

多分、勘違いして覚えているのだろう。

これをなくせば、大体は大丈夫か。

『茶矢、ここはnowを使うんだ。この英文も。』

時折itやe、esを書き忘れてるから気をつけろよ。凡ミスは早めに直せ。

真尋も、英文を書いて覚えろ。辞書を見ながら的確にな。』

「わかりました。」

「はい。……あれ？あ、ない……。」

辞書を忘れたらしい。

この落ち込みようは、凄いな。

暗いオーラがなんだか見える気がする。

…っと、そんな事を考えてる暇はないんだった。

『俺が部屋から辞書を持ってくるから、その間は茶矢に見せてもらいながら書いてろ。』

「す…すみません…。」

「でさー！その時に岡田が、くく」

「うっそ！リアルに！？引くわく岡田。」

『…その二人、勉強しないなら公園行つてろ。

皆月…この荷物を早く減らしてくれ。通行の邪魔だ。』

「すみませーん！3時になったら減りますんで！」

『…飲み物くらい、冷蔵庫に入れろよ。

源希。冷蔵庫に入れておいてやれ。』

「あーい。よっこらせ。」

扉の付近に何故か大量にある菓子やジュースの山。

皆月が持って来たらしいが…四人で食べるのか？俺は見ただけで胸やけしてきた。

英和辞典を片手に部屋から出ようとすれば、ベランダに目がいつてしまう。

『香織ちゃん、大丈夫かな…』

……戻ろう。』

ボタン。

深く考える前に、俺は部屋から出て行った。
これ以上考えると…あの夢を思い出しそうだから。

英和辞典を持ってリビングに行く…やけに騒がしい。
ゲームの音？源希と皆月の絶叫も聞こえる。

「うおらあ！！波○拳！！波動○！！」

「にやにをを！！アチョー！チョ！チョ！チョッ！！！！」

「ぐああああ！！負けた～～！！」

「へっへーん☆あたしの実力なめんにゃよ！！」

リビングのTVには、名前は忘れたけどキャラクターを選んで対戦する格闘ゲームが映っていた。

そのゲームのコントローラを握る二人に、真面目にやる二人。
真尋は興味があるのか、チラチラとTV画面を盗み見ている。

……おい、勉強しに来たんだよな？勉強しなきゃ、そりゃ落第するわ。

『…………おい。』

「「（ビクッ！！）」」

我ながら、結構低い声が出たなと思う。

『…自由にやるのは良い。赤点とろうが成績悪かろうが留年しようが自分の責任だ。』

周りは関係ねえからな。

……けどなあ、お前ら。周りに迷惑かける野郎は、俺はいけ好かないんだよ。一生懸命やってる奴の近くでギャーワー叫びながら妨害する。俺が1番嫌いなタイプだ。

それはお前が1番わかってるよなあ？源希。』

手をバキボキ鳴らし、源希に話をふる。

ビクッ！！と背筋を伸ばし、コクコク頷く愚弟。

ガシッ。

と奴の肩を掴んで、ベランダに連行する。

源希は抵抗しないで、俺に引きずられるだけ。

ポイツ、って効果音が出そうな感じで弟をベランダに放り出し、リビングにいる三人に振り返る。

『真尋。よく教科書を見て書いていけ。単語の綴りや順番が間違いだらけだぞ。』

茶矢。お前はまたSを書き忘れたり、違う単語に書いたりしている

ぞ。そこだけ直せば大丈夫だから、俺が戻るまで真尋に教えてやってくれ。

……それと、皆月。』

「は、はい!!」

ピシーン!!と背中を真っ直ぐにする皆月。

空気は読めるみたいだな。

『…今回は大目にみるが、次はないと思え。いいな。』

「はい! すいませんっした!!」

『後…その都道府県のプリント。平野全部間違ってるし、県名は青森県しかあってないぞ。地図帳見ながらやれ。無理して書いても覚わるわけない。』

「へ?」

『じゃあ、お前ら。』

“何か聞こえても” ベランダに来るなよ。5分で戻るから。』

ピシャン。

カーテンを広げ、扉を閉める。

振り返れば、源希はもう正座している。

よし、見た目だけは許してやろう。

だがな…

『お前は俺が1番嫌いな事をした。前回は一時間だったが、あれでお前は充分理解したよな?』

「（コクコク）」

『声に出して返事しろって前に教えただろおがぁ!!』

「すいませんでした!!」

『もっと腹から出せえ!!』

「すいませんでしたぁ!!!!」

『お前さ、前に俺がテスト勉強中に勝手に入ってきて、お茶を明日提出しなきゃいけないノートにぶちまけたの覚えてるよな？

“忘れたとは言わせねえぞ。”』

「はい：あの時はすみませんでした。」

ガタガタ震えながら、冷や汗を大量に流す源希。

俺がマジギレした時は手は出さないが、口だけで源希を責めていく。

顔を上げない時は、前髪を掴んで無理矢理にでも上を向かせて、俺の顔を見させる。

コイツに手を出しても懲りないが、精神面で責め続ければ充分効果が出る。

——そろそろ5分だな：キリをつけるか。

『んじゃあな、源希君。』

俺が求める答えを言えたら、中に入れてやる。そのまま風呂に入っ
て着替えるといい。冷や汗をかいた服のままじゃ、気持ち悪いだろ
う。

：ただし、答えて良いのは一回だけだ。もし間違えれば・・・

……親父が帰って来るまで、そこでずっと正座している。今が2時半過ぎた頃合いだから、6時間以上はそのままだな。』

「あ…（ゾクッ!）」

『よく考えろよ。じゃあ、わかったら呼べ。』

源希の頭を二、三回優しく撫でてから、リビングに戻った。

JUST 5分。

後は源希の返事次第だな。

中編（自分を…）

―正軌達が行った後のリビング―

「ねえねえ茶矢と真尋。」

「何ですか？友恵。」

「？」

「先輩って何者？変な噂はよく聞くけど、あれ源希が言ってたみたいに嘘なの？」

先輩見た目あんなんだけど、齒綺麗だし。」

「注目点はそこですか。」

あ、真尋君。そこは“明日から”という意味の単語を使うのですよ。」

「あ、ごめん。」

三人は友恵以外、のんびりと勉強していた。

茶矢が真尋に間違えているところを教え、真尋はそこを直し、友恵は正軌について喋っているだけ。

友恵は二人のノートを見て、友恵は頭を抑える。

「ダメだわあ…あたし頭痛い。勉強って何？私には未知の領域だわ。」

「去年習っている範囲ですから、私達より有利だと思うのですが。」

「あーダメダメ。あたし基本寝てたから☆アハッ♪」

「真尋君、私達はああならないように、正軌先輩の言う事を聞いて

確実な道を歩きましょう。」

「え：う、うん？」

「あー、茶矢酷ーい。私の方が、一つ上なんだぞ！」

「学年が一緒なら意味はないですよ。」

ザックリ友恵に言う茶矢に、笑う友恵。二人のやり取りに困惑する真尋。

友恵が地理のプリントをやり始めたのを見て、茶矢は物珍しい顔をする。

「やる気を出したのですか？友恵が？」

「だって、もうすぐで5分だもん。先輩の声、聞こえなくなったし。」

「そういう方でしたね貴女は。」

「茶矢ちゃん：友ちゃん先輩に、言い過ぎじゃない、かな：。」

恐る恐る言う真尋。

だが、二人は気にしない風に真尋の言葉を流す。

「アハハ！真尋、良いよ良いよ。」

昔っからこんな感じだもん。茶矢の事は慣れたもんだよ。」

「友恵に気を使う必要はありません。」

貴女はずっとバイオリン弾いていれば良いのです。」

「：バイオリン？」

ガラガラ。

真尋が茶矢に聞くと、後ろの扉が開かれる。

そこには正軌の姿だけ。

源希の姿が微かに見えたが、全てを見るその前に正軌が扉を閉める。

「ビュー♪JUST 5分。」

『待たせて悪かったな。』

真尋は進んだか？』

「はい。順調です。飲み込み早いですよ、真尋君。」

「茶矢ちゃんが、教えるの：上手なだけだよ。」

「先パーイ、これって偏西風ですか？」

『じゃあ、二人は後は帰って復習な。』

次は別々に教えていくから用意して。』

「「はい。」」

『皆月：それは日本じゃないぞ。そこはイギリスでモンスーンだ。』

「……うっそーん。」

何事もなかったかのように、進める正軌。

三人は源希に触れないまま勉強を再開した。

『そろそろ3時か。』

三人共、休憩するか。』

続け様にやっても疲れるだけで、覚えるモノも覚えないうらう。

休憩だと言うと、1番に喜ぶ皆月。

「やたー!! 休っ憩♪」

「喧しいです。」

「ふぁ…疲れた…。」

両手を上に突き上げる1番勉強していない皆月。

それを耳を塞いで不快そうにする茶矢。

くたあ…とテーブルに突っ伏す真尋。

反応はそれぞれである。

俺も正直疲れた…目が痛い。

皆月は立ち上がって菓子的大量に入ってる袋をテーブルにどんどん乗せる。

勉強道具を退かさないとイケないくらいの量。

飲み物を置くと、テーブルにコップを置くスペースしかなくなる。

…どうしてこんなに買って来た？

それだけが頭の中に浮かんだ。

真尋も同じ考えなのか、啞然とした表情で菓子の山を見つめる。

「相も変わらず、凄い量ですね。嫌味ですか。」

「だってさあ、あのオジンが月三に段ボールに大量に送ってくんだよ？まだまだ家にあるってのに送ってきやがるし、マジ有難迷惑。捨てるの勿体ないし、茶矢ん家だけでもまだ余るし。」

「そろそろ止めて下さいよ。こちらも迷惑です。」

貴女のせいで、父様がメタボになりそうなんですよ。」

「良いじゃん。元々太ってるんだし。」

「そーいや聞いてよ茶矢！家に先月のあるってのに、また土曜日辺りに送るってオジンがほざきやがった！マジふざけんなって話だよ！」

さも普通だともいうように、二人は菓子を食べる女子二名。

真尋はまだ凝視している。

そんなに見ても減らないぞ、と言った方が良いかな。

「あれ？先輩食べないんですか？

遠慮しないでドンドン食べて下さいよ。てか、減らして下さい。」

『いや…俺は甘い物は…』

「正軌先輩は甘い物苦手なんです。」

煎餅もありますよ。醤油煎餅。」

『いや、間食事態あまりしないから。」

そろそろ源希呼ぶか。お前らは食って待ってろ。』

ジュースが入ったペットボトルを持って、庭に行く。

——ガララ……ピシャ。

『おい、馬鹿弟。』

「あ…兄貴。」

庭用のサンダルを履いて、源希の前に立つ。

まだ五月の始めとはいえ、一時間くらい直射日光を浴びていれば、汗も大量にかくし、体力も減る、日射病になる可能性もある。

ペットボトルを源希の額にコツと当てる。

『で、答えは？』

「……ごめんなさい。」

『よし、早く部屋に入れ。』

テーブルに菓子とジュースの山があって、早く食べねえと茶矢と皆月に食われるぞ。』

「え……良いの？」

『そこに居たいなら、俺は構わないけどな。それ飲んで早く入ってこい。』

「正兄……兄貴いいいい！！」

ガシッ！！ガキッ！！

後ろから抱き着いた源希の頭に、肘打ちを食らわせる。

俺も鬼ではない。

反省したのなら、許す。

もし謝れなかったら、もう一時間庭に座らせる予定だった。

まあ、もう一人教える奴がいないとキツイし、結果オーライだろう。

リビングに入って来た源希にタオルを投げ、シャワーを浴びるよう促した。

「ひゃー、ずっーと庭に正座ですか。鬼ですか先輩は。」

『反省したら中に入れる。これくらいしないと、アイツは反省しないからな。』

初めて飲んだけど、なっchan美味いな。』

「源希君、よく笑っていられますね…。ボクなら、無理だな。」

おにぎり煎餅をモソモソ食べながら、真尋が言う。

「そーいやそうだね。」と頷く皆月に、菓子を食べるだけの茶矢。俺はなっchanオレンジ味を飲んでいく。

この前自販機で見かけたな…今度違う味買うか。

何て事を考えている内に、源希が帰ってきた。

「いやー！スッキリした！」

あ、本当に沢山ある！PEPUSIある！？PEPUSIコオラ！
！」

「はいよ。一気にいきな源希☆」

「おう！男、宮古源希！一気いきまーす！！」

二人が馬鹿騒ぎをしている間に、俺はなっchanN葡萄味に試している。

このくどくなく甘すぎず…丁度良い具合に出来たなっchanN。
やべえ、ハマリそう。

なっchanNブームきたかも。

「正軌先輩、それ好きですか？」

茶矢が俺のコップに入っている物を指差す。

ん？茶矢も飲みたいのか？

『初めて飲んだが、この喉越しのスッキリ感が良い。しかも、甘すぎないからな。』

茶矢も飲むか？』

「では遠慮なく。」

二人して席を立て、俺は茶矢のコップになっchanNを注ぐ。
茶矢は席に座って、グイッと飲み干す。

お、良い飲みっぷりだ。

『どうだ？つつつても、茶矢は飲んだ事あるもんな。』

「正軌先輩の入れてくれたから格別です。もう一杯お願いします。」
『そんな大袈裟な。ほらよ。』

菓子山のせいで、立たないといけない。

右に座っている皆月が、俺達のやり取りを見て席を立つ。

何事かと席を立つ皆月を見ていれば、皆月は茶矢の横に立つ。

「見てて苛々する。席変わってあげるから、早くどいて。」

「何ですか。いきなり人の事を邪魔扱いして。」

あれだけで苛々するなんて、貴女はどれだけ短気なのですか。」

「はいはい。茶矢の頑固は見飽きました。」

さあ、どいたどいた。」

半ば無理矢理茶矢を退かす皆月。

茶矢は抵抗したが、俺の横の席に移動せざるを得なくなる。

ちょこんと隣の席に座る茶矢。

むくれた顔で皆月を睨んでいる。

……そんなに俺の横が嫌なのか。

流石の俺も、心臓がザクツと傷ついたぞ。

まあ、見た目こんなだからしょうがないけどな。

……うん。

しょうがない、しょうがない。

『じゃあ、4時になったら再開するか。』

「「はい。」」

「了解。」

「えー、ヤダ。」

『皆月が赤点ところが俺には関係ないがな。』

また留年しても良いが、留年が二回も出来ない事を忘れるなよ。』

「すみませんでした！どうぞ指導お願いします！」

「留年してしまえば良い。」

「さ、茶矢ちゃん…それは」

「茶矢、友恵ちゃんにキツ過ぎるだろ。」

「茶矢の意地悪。うえーん。」

「嘘泣きが下手くそですね。」

…この二人には何かあるのか？茶矢の事はまだよく知らないが…
…物凄く嫌っているように思える。

因縁のような…黒いものを。

源希は知ってそうだが、コイツは俺が聞いても話さないだろう。

しょーもない事はベラベラ話すが、大事な事や秘密は話さない。
意外と口が堅い奴なんだ。

…そういう源希の性格は、嫌いじゃないけどな。

パンパン。

『はい、休憩終わり。』

勉強の続きするぞ。』

はーい、とやる気のない声も混じっているが、時間は時間だ。
やる時はやらないと。

ダラダラするのは好きじゃない。

茶矢と真尋は、源希に教えてもらえば良いだろう。

二人共手間がかからないし、真面目に勉強に取り組むから覚えるのが早い。

俺は問題児を最後まで、徹底的に教える事にしよう。

『茶矢と真尋は、後は源希に教えてもらえ。二人なら大丈夫だろう。源希、邪魔だけはするなよ。』

「「はい。」」

「信用ないねえ俺。わかったよ。」

『皆月は、俺がミツチリ教えてやる。嫌でも覚えるから安心しろ。』

「いや、あたしは源希で充分…」

『ほら、あっちのテーブルでやるぞ。』

お前達、その菓子食べながらやっても良いが、邪魔なやつは袋に戻して床に並べておけよ。』

皆月が逃げないように手首を掴んで、テーブルに連行した。

そこからは、お互い大変だった。

ここまで二人より覚えが悪いとは思っていなかった。

何回も何回も同じ事を繰り返し、わからないカ所は徹底的に理解するまでやり。

寝ようとする皆月を寝かせず、手を動かせ、気がつけば18時をまわっていた。

体がバキバキいう。

肩こったな…久しぶりに疲れた。

皆月も横でグツタリしている。

いつの間にか帰っていた母さんが、テーブルに晩飯を並べる。

「ほら、二人共晩御飯食べなさいよ。

今日は肉じゃがが良い出来なのよ♪」

「初めまして宮古の母さん！スツゴク美味しそう！！」

テーブルに走って行く皆月を見て、俺は席を立つ。

「あら、また後で食べるの？

今日くらい誰かと食べなさい。」

『ちょ、母さん…。』

じゃあ…俺、あっちで食べるから。それで勘弁してくれ。』

「よし、許してあげましょう。

早く肉じゃが食べてちょうだい！」

皆月と勉強していたテーブルで飯を食べる事になった。

母さん…最近積極的だな。

髪の色を変えたせいかな？オレンジ色の髪、前の茶色より母さんらしい色だと今は思えるけど。

…もう少し自分の歳を考えてほしい、と息子は思っているよ。

「…はあ、いただきます。」

何か、この空間は今も苦手だ。
自分が居ても良いのか、本当はいない方が良いんじゃないかと疑心暗鬼になる。

だめだ……あの夢が、よみがえる。
気分が、震えが…汗が、気持ち悪い。

ーコトン。

目の前のテーブルに、もう一人前の夕飯が置かれた。
顔を上げれば、茶色の髪が俺の向かい側に座っている。

茶…矢……か？何故、向こうのテーブルで食べないんだ？

思った事が顔に出ていたのだろうか、茶矢がおかずを見ながら話す。

「あちらの席では落ち着いて食事が出来ませんので、こちらで食べる事に致しました。
…ダメでしょうか？」

真っ直ぐ見つめられ、耳を澄ませば喧しい笑い声や話し声が嫌でも耳に入る。

…うん、落ち着いて食えないな。

『俺は構わないぞ。』

お茶を持ってくるけど、茶矢も飲むか？』

「では、お願いします。」

食事となっchanNを飲むのは合わないだろうと思い、冷蔵庫からお茶の入った容器を取り出す。

気がつけば、震えや吐き気が治まっていた。

テーブルにコップ二つとお茶を置き、前から気になっていた事を質問してみる。

『そういや、茶矢。屋上で会った時、楽器持ってたよな。あれ、どんな名前なんだ？』

「ピッコロです。祖母が小学校に入るのと同時に、祖母が使っていた物を下さいました。」

今でも練習していますよ。」

『楽器はよく知らないけど、凄いな。』

あの時、屋上にいたのも部活の練習する為か。』

「私、帰宅部です。」

ピッコロは自主トレですね。」

吹奏楽部ではないのか。

一応、うちの高校にも吹奏楽部があるのだから、入部すれば賞状くらい貰えると思うけどな。

ま、茶矢の自由だ。

俺が口出しする事じゃない。

『今度聞かせてくれ。』と言え、
「明日の昼休みにでも演奏しますよ。先に言いますが、下手くそですよ。」と了解を得た。

明日の学校に行く楽しみが増えたな。

『あ、後、漢谷に追われている時。』

お前、何でナイフなんかを…」

「あれ、実は玩具です。今ありますよ。」

ゴソゴソとスカートのポケットを探り、あの日に見たナイフが出される。

「……………これが“玩具”？」

茶矢は刃を出したかと思うと、おもむろに刃を掴む。

『オイ！茶、矢……あ。』

「ゴムです。特殊な加工をされており、本物そっくりに見える仕組みです。」

「触っても良いですよ。」

『……本当だな。よく出来てる……へえ……。』

グニグニと刃を曲げてみる。

見た目はナイフそのものだが、触った感触はゴムだ。
不思議な感覚。

「近頃物騒ですから、護身用に持ち歩いているんです。」
『女子も大変だな。』

ナイフの玩具を茶矢に返し、何気ない会話をしながら食事を勧める。

人と一緒に食べる食事は、何時もより美味い気がした。

中編（自分を…）

飯を食べた後、軽く8時まで勉強した。

『皆月、お前明日の昼休みまでにここの範囲覚えてこい。
火曜日までに赤字とりたくなければな。』

「ふぁい……了、解。」

三人が帰りの支度をしていると、目につく扉付近に置かれてある山。

昼間にあれだけ四人が食べたのに……減った気がしない。
冷蔵庫には、まだ大量にジュースが入っている。

——よく家からここまで持って来たな……

これ、どうすんだ？

『おい、皆月。これどうするんだ？これ。』

「あー、貰って下さい。」

あたしん家、これの倍くらいあるんで。あれで一ヶ月くらい生きていけそうですよ。

真尋も、持って行きたい物は持ってって良いし。」

「え……良いの？」

でも、先輩の家に持って来たんだし……」

『いや、頼むから持って行ってくれ。毎朝これを見て、朝から胸やけしたくない。』

「だそうだから、真尋も沢山持って帰りなさい。」

菓子が大量に入った袋を持って、ペコペコと頭を下げる真尋。
うん、これで俺の朝の平和と母さんの腹周りの安全が保たれる。
真尋には逆に感謝したい。

「じゃあ、アイス買うついでに見送ってくるから！

正兄、鍵は閉めないでくれよ☆」

『お前は一生帰らなくて良いぞ。

じゃあ、気をつけて帰れよ。』

「ありがとうございます。」

では、遅くまでお邪魔致しました。」

「お邪魔しました。」

「宮古の母さん、晩御飯美味しかったよー！

また来るね〜♪」

「また来てちょーだい♪

バイバーイ！」

三人と一匹を見送り、風呂に入って明日の支度をするかと階段を上がっていると……、

——トウル……トウルル……トウルルル……

玄関に設置してある電話が音を鳴らす。

母さんが出るだろうと再び階段を上がれば、リビングから「正軌
ー！母さん今、洗い物してて手が離せないのー！電話に出てちょう

だーい!!」との事。

ため息をつきながら階段を下り、電話をとる。

トゥルルルルル……ガチャ。

『もしもし……。』

向こう側の返事を待っていると……微かに水音が耳に届く。

先程、外を見たが雨が降っている気配はない。

電話の向こう側は、ピチャン…ピチャン…と水滴が床に跳ねているようにみえる。

あれ……前も、こんな事、なかった、か？

小学校高学年。

学校から家に帰って来た時。

耳に響くTELの音。

「正軌ー、電話でてー。」という母さんの声。

ため息をつきながら、ランドセルを下ろす俺。

電話越しに聞こえる雨の音。

そして、

「……正軌……？」

掠れた香織ちゃんの声。

全てが一瞬でフラッシュバックする。
身体が、耳が、喉が、心臓が

…………拒否反応をする。

……ヤメロ、ヤメロ、ヤメロよ！香織ちゃんの声で俺を惑わすな！

「良かった、た…正軌が、出てくれた…」

あの日と同じ、疲れた声。

苦しげに繰り返される呼吸。

「まさ…き…あたしね、」

声が、出ない。

口が出店で売られている金魚のように、パクパク動くだけ。

俺の中にいる奴が、まるでこれから起こる事を先読みしているかのように……嘲笑っている。

俺に何も言うなどとも言うように、声の出し方を忘れさせられたかのように……

俺は何も出来ない。

—俺はまた、繰り返さなければならぬのか—

「またヤツチャツタ♪
あゝは☆」

ガタンッ！！！！

無意識のうちに、俺の身体が、本能が、家を飛び出させていた。

（お前が何をしたって無駄だ。無意味だ。）
うるさい…黙ってる…

（このまま香織ちゃんの家に行って何になる？
またあの惨劇を見たいのか？）
俺は香織ちゃんを助けに…

（助ける？お前がかつ？

……ククク、ヒヤハハハッ！！そりゃ愉快だなあ！！）

香織ちゃんのマンションに着く。

昨晚教えてもらった場所。

（せいぜい苦しめ正軌！！！！）

ピンホン！ピンホンピンホン！！

（こっから先は、お前にとって、）

ガチャッ！！

開いた！鍵はかかってない！

土足のままりビングまで走る。

バンッ！！

……いない！？何処だ！！

シャアア……

一つだけ明かりが点いている部屋を見つける。

シャワーの音……電話越しに聞こえたのと同じする。

ドクン……ドクッ……ドクッドクッドクッ……

心拍数がやばい。

春なのに息が震えている。

カツ…カツ…：

靴の音がフローリングに静かに木霊する。

頬を伝う汗が、床に垂れた。

風呂場の扉の取っ手に手を掛けた時、今まで黙っていた奴が再び喋りだす。

もつとも残酷な一言を。

（地獄と同じ場所だ。）

—ガチャ—ギイイイ———

俺の目の前には、普通に生きていたら絶対に見ないだろう量の赤い水を中心に……

「あれ……正軌だ♪」

シャワーを頭から浴びながら、左腕から手先までザックリとナイフで深く刺した痕を作った

—— ちゃん が。

よく見ると、右足には血で濡れた果物ナイフが刺さっている。左腕の傷口から、脂肪の塊が……ドロリと床に落ちる。

『……あ、あ……アアアアアア……』

……誰の声だ？ ああ……俺のか。

足に力が入らない。
ぺたんと力なくその場に尻餅をつく。

逃げる…逃げるんだ…此処にいたらいけない…早く…此処から…
……逃げるんだよ……!!

「マサキ? どうし、たんだ…?
そんな、オビえた顔シて……」

ピチャ…

赤く濡れた手が、俺の頬を撫でる。
愛しい者が…俺に触れている。

「ズット一瞬ダなあ…

正キ。」

涙が震えが鼻水が吐き気が唾液が心臓が俺の身体が。

——拒めない。

ただ、相手の成すがまになる。

—チュツ。

唇に、柔らかい感触。

キスを、濡れた唇で俺のと重ねる。

声が漏れる俺の口端から出る唾液を、相手が舐めとる。

「正キハあたしノ事、好きだヨナあ？」

グチョ。ゴポポポ：

右足に刺さっていたナイフを抜き取り、刃先を俺の腕に、

「あたしト一生オナジだヨ。」

押し付けられる。

けど、俺は何も出来ない。

俺は、ミチヲ マチガエタ？

「貴女！止めなさい！！」

「兄貴！！しっかりしろっ！！」

後ろに引っ張られる感覚。

香織ちゃんとの間に、金髪頭が割り込む。

俺は、茶髪にタオルで目を隠される。
そして、頭をギュッと抱きしめられる。

「正軌先輩、大丈夫です。私、茶髪ですよ。
もう恐がる必要はありません。私がついています。」

落ち着く凜とした声。

嗚呼…茶矢か。

何で此処にいるんだろうか？

「茶矢！救急車を呼べ！！」

香織ちゃん！ナイフ捨てろって！！」

「離して…正軌…正軌……」

何で源希の声が消えるんだろう？

香織ちゃんは？

「大丈夫です……大丈夫。」

『あ……あああ………』

——頼む。

どうか…今だけは、何もかも忘れて……

この声に縋り付かせてくれ。

中編（自分を…）

——あれは、俺が小学校高学年の時。

小学生男子なら普通、友達と寄り道して帰るか、ランドセルを玄関に置いて遊びに行くのだろうが……生憎、俺にはそういう友人はいない。

最近、香織ちゃんとも会っていない。

公園に行っても、香織ちゃんの姿が見当たらない。
学校ですれ違っても俯いてて、俺の事に気づかない。

——風の噂で聞いたのだが、両親が仲が悪いらしく色々と危ないらしい。

香織ちゃんと同じクラスの女子が、背中に殴られた痣があったとか…。

『……馬鹿馬鹿しい。香織ちゃんは香織ちゃんだ。
香織ちゃんがそんな事されるような人じゃない。』

『ただいま…』と玄関の扉を開ければ、リビングから「お帰りなさいい♪」と母さんの声が聞こえる。

よくわかるな…と思うながら自分の部屋に向かおうとすると、

——トウル…トウルル…トウルルル……

TEL音が玄関に響く。

チカチカと受話器に明かりが光る。

母さんが出るだろ…。

再び階段を上り始めると、リビングから「正軌ー！母さん今料理してるから、手が離せないのよー！ちよっと出てくれるー！？」とお言葉。

俺の予想は見事に外れてしまったみたいだ。

…ハア、めんどくせえな。

ため息をつき、ランドセルを玄関に投げ捨てる。

受話器を手に取り、耳に当てる。

『もしもし？どちら様？』

不機嫌そうに相手を確認める。

早く応対して、自分の部屋に行きたい。

俺は、昨日買ったCONANの続きを見たいんだ。

しかし、相手の声は聞こえない。

シャアアア…

電話越しに聞こえる雨のような音。

あれ？今日は雨は降ってなかったような？

玄関を開けて空を見上げるが、綺麗な夕焼け空。

ちらほらある夕雲がオレンジ色に染められて、綺麗だなあと思わず見とれてしまう。

「……き……？正軌……？」

漸く受話器から声が聞こえるようになった。

家に帰るまで考えていた、1番聞きたかった声。

…この声は、香織ちゃん？
か、香織ちゃん！？

ガシッ！と受話器を耳に押し当てる。

『香織ちゃん！？』

ど、どうしたの？突然電話なんかして…』

「あは…なんで、正軌、どもってるの？笑える…」

『だって、最近会っても気づいてくれないし…急に電話するから驚いたんだよ。』

「そうだった…？」

何か…ごめんねえ。」

『いや…謝らなくても良いけど…』と言うが、香織ちゃんは「ごめん…ごめんなさい…」と呟き続ける。

何を話しても、「ごめんなさい」と謝罪をし続ける。

——まさか……噂は本当なのか？

嫌な予感がする。

香織ちゃんの声が、震えている。

『香織ちゃん……どうしたの?』

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

『香織ちゃん! しっかりして! 今から香織ちゃんの家に行くから!』

ガチャン!!

「あら、正軌何処に行くの?」

『ちよつと出かけて来る!』

遅くなるかもしれないから!!』

「あらあら、気をつけて行くのよー!」

走って、

走って、

疲れても走り続けて、

人にぶつかるのも気にしないで、

コケてもすぐに立ち上がって、

俺は……香織ちゃんの家に向かった。

ハアッ! ハッ! ハアッ! ハッ!

やっと、着いた。

我ながら、この年で、運動部でもないのに、頑張ったと、思う。

—ジリリリリ——ジリリリリ——

香織ちゃん家独特のインターホンが鳴る。

二回、三回、インターホンを押す。

しかし、誰も出る気配がない。

どうしよう……どうしよう……

焦る気持ちが俺を急かす。

落ち着け……勉強ができるんだ、良い方法もきっと思い浮かぶ。

俺なら、きっと。

そんな子供だましで自分勝手を宥める。

『扉を……開けてみよう。』

勇気を出して、俺は取っ手を握る。

本当はいけない、しちゃダメだって頭では理解しているけど、心配ではないんだ。

その行動が不幸に繋がるとは、その時の俺が知るよしもなかった
……

—キイイ：

本心では鍵がかかっててほしかったのだが：扉は俺の手で、意図も簡単に開かれる。

『お邪魔しまーす：』と一応挨拶をしてから、玄関に入る。
だが、返事はない。
人がいる気配さえもない。

靴を脱いで、端に並べる。

———シャアア：

電話で聞こえた雨音を頼りに、足を進める。
嫌な汗がどことなく溢れ、着ているTシャツを湿らせるが気にする余裕はない。

膝が何故か笑っているが、俺は前へ歩いていかなければならない。

着いた先には、シャワー室。

雨に似たシャワーの音が室内に響く。

その中に、何かを何度も何度もザクツ…ザクツ…と刺している、場所的に不釣り合いな音が。

扉の影に、人影が見えた。

高い位置で結んだ髪…

『香織…ちゃん？』

人影がピクリと揺れた。

扉の隙間から、嫌な臭いがして思わず手で鼻を被う。

ガタッ！

何かが倒れる音がした。

「正…軌…やっと、来てくれ…た、んだ。」

掠れた声。

初めて聞く、香織ちゃんの疲れきった呟き。

—ガラッッ！

一気に香織ちゃんと俺の間にあった扉を開けば……そこは、

血の海だった。

壁にもたれている女は、左腕にナイフが突き刺さった状態で、瞳には何も映っていない。

その瞳で、シャワーを全身に浴びながら俺の方へ顔を向け、ニタア…と歪んだ笑みを浮かべる。

ガラガラの魔女のような声で、一言。

「マサ軌 も、一緒ニ やるか？」

プシャアッ！

左腕からナイフを無理矢理抜き取り、血濡れたナイフを俺に差し向ける女。

誰 ダヨ コの おシナは 香織ちゃん ハ ？

固まっていた思考回路が電流を走らせたかのようにフル回転し、俺はその場から逃げ出した。

口から言葉にならないモノが出てるけど、気にしない。
靴を片手に、靴下のまま死ぬ気で家を飛び出した。

止まったら、もう元には戻れない！
捕まったら死んでしまう！

走れ！もつと、もつと、もつともつともつともつと！！！！

靴下がちぎれようが構わない。

目や鼻から流れ出すモノを拭う暇さえない。

月夜の町を、俺は無我夢中で走りぬけた。

家にやっこの思いで辿りつくと、玄関に靴を放り投げ、直ぐさま
自室に引きこもった。

ベッドの布団を頭から被って、震える体を抱きしめ、あの光景を
思い出さないよう必死に違う事を考えるようにして…

「兄貴！母さんがご飯食べに来なさいって！
俺もう腹ぺこだよー！！」

能天気な弟の言葉なんか、今の俺の耳に入るわけもなく。

俺は必死に『いらない…いらないから、先に食べてろ…』と言う
しかない。

頼む…頼むから、一人にしてほしい。

誰か他の人間を見ると、思い出してしまいそうだから：

ウプッ：

突然、吐き気が迫り、胃酸の臭いがツンと鼻にくる。

ダメだ…吐く。

今すぐ吐きたい。

ガバツと掛け布団をめくり、ごみ箱へ駆ける。

―そして、源希がいるのも構わずに胃にある物を全て無くす為に、ごみ箱に顔を突っ込んで：

――ゲエオエ……

吐き出した。

後ろで、源希が俺を見る視線が伝わる。

呼びに来た母さんが、親父を大声で呼ぶのが聞こえる。

親父が俺に声をかけながら背中をさすってくれる。

そこからは、親父の車で病院まで連れて行かれた。

車の中で、俺は香織ちゃんの事だけが頭の中を支配した。

『あれは、香織ちゃん…じゃない。

香織ちゃんの…ニセモノ、だ。

違う…違うチガウ……』

隣で心配そうに見つめる源希の瞳が、驚いた表情で見開いた。

そう。

これが、始まりの日。

――そして、
自分を偽り始めた日でもある。

中編（自分を…）（後書き）

この話は、色々と気分を害されるシーンが多いです。

最後の正軌の幼少期の話。

もうちょつと捻りを加えたら良かったな…（オイ）

まだまだ続きます。

中編（温かさ）（前書き）

前回の比べると、どれだけこの話が平和かを感じられます。

今回は短いですが、どうぞ。

↓

中編（温かさ）

『んあ……あ……？』

——目を覚ますと、病院のベッドにいた。

嗚呼、あれは夢なのか。

夢 なのか。

長く、遠い、心の奥にしまい込んだ、昔の誰かの記憶を見ていた気がする。

実際は俺のなんだけど。

外を見れば、もう夕方で大分時間が経った事を知らせる。

周りを見渡すが、ベッドが俺の使用しているのしかないので、此処が個室なのだと起きない頭で理解した。

ベッドの周りを見れば、よく知った奴らが何故だか俺の片手を握って寝ている。

制服を見るあたり、学校に行った後なのだろう。

左手に、茶矢。

右手に、真尋。

ベッドの足先には、椅子に座ったまま俯せて眠る源希。

……おいおい、まるで俺が包囲されてるみてえじゃねえか。

タオルケット掛けてやりたいけど、両手が塞がれてちゃ何も出来ない。

『…おい、茶矢。真尋。源希。起きろ…』

——ガラッ。

「あ、正軌先輩。起きたのですね。」

『皆月、か。お前ら総勢で何で病院に……。』

ため息混じりに言うと、皆月は真尋の隣に椅子を持って来る。
それから、肩を竦めて同じようにため息をつく。

「今日一日、この三人が学校抜け出でて、病院に行かないように宥めてたのは誰でしょうかね？」

せっかく宿題やってきたのに、肝心の先輩が入院してるし。

あ、宮古の母さんは先輩の状態を先生と話してますよ。

はい、宿題。」

『…フツ、俺なんか、そんな気を使わなくて良いのにな。

ありがとうな、皆月。』

「……どーいたしました。

はい、なっchanの新色“パイナップル味”。先程、売店で見つけたので手土産に。」

『わるいな。』

宿題を見る為に、真尋の手を起こさないよう解く。

片手で採点をしていると、左手にキュッと強く握られる感じがする。

茶矢が……昨日、助けてくれた茶髪。

その時、俺が笑みを浮かべながら茶矢を見ていたなんて知るよしもなかった。

「あ…正軌兄、起きたんだ。」

前方で目を擦りながら身体を起こす源希。
「そーい、やー、なんであの時、コイツらが？」

『昨日は……、すまなかったな。怪我はないか？』

「んー、俺達は平気。」

ただ……香織ちゃんが重体だって。」

『……そうか。』

恐怖を堪える為に、服を強く握る。

身体が震えても、今だけは許してくれ。

俺が深く深呼吸を繰り返していると、皆月が腕と足を組んだまま質問する。

「で、先輩。」

今現在、全く状況が理解出来ないあたしと真尋に、昨日起きた事を説明してほしいんですけど。

ほら、真尋も狸寝入りするよりか、説明してほしいでしょう？」

「う……うん……」

のそりと眠た気に起き上がる真尋。

本当は寝ていたのではないかと思うのだが……目線が真っ直ぐ俺を捕らえているあたり、真剣なのだろう。

ガタッ！

源希が立ち上がる。

「友恵ちゃん。それは俺の口で説明するから。」

今の兄貴には」

「その場に全ていなかった奴が語れる資格はないわ。

あたしは、先輩が忘れないうちに何があったのか全てを聞きたいの。」

「ボクも、聞きたいです。」

皆月に迫られて、源希は一旦怯むが、再度嚙み付こうとする。

お前ら……病院で病人の前で、騒ぐなよ。

―クイツ。

左手を何かが引つ張る。

ふ、とその方を見れば、茶矢が見上げている。

両手で俺の手を握って、

「私からも……お願いします。正軌先輩が昨日あった事、知りたいです。」

「茶矢！お前まで……」

唯一の味方だと思っていた茶矢にまで言われ、源希は舌打ちして俺に背を向けるように椅子に座る。

三人に見つめられる現状。

俺も、このまま一人で考え込むのは俺自身をダメな方に進ませるだろう。

目を閉じ、軽く深呼吸。

昨日、確かにあった温もりが左手にある。

大丈夫：きつと、出会った日は浅いけど、コイツらなら大丈夫だ
って自信がある。
確信を持てる。

目を開いて、全員を一度見渡す。

そして、口を開く。

『――先ずは、昔の話からするか。』

（どうなっても知らねえぞ。）

頭の中で、誰かが言ったが俺は話し続けた。

香織ちゃんがおかしくなった日の事、
それから、一昨日に香織ちゃんと数年ぶりに出会った事、
香織ちゃんと付き合った事、
香織ちゃんが初恋の相手だった事、

そして…昨日の事。

後半、涙がボロボロと流れたが拭わなかった。

拭ってしまったら…いけない気がしたから。

最初から最後まで、コイツらは黙って聞いてくれた。
何度が気分が悪そうに口元を抑えていたが、何も言わずに聞いてくれた。

『――これが、昨日あった事を含めた全てだ。』

ハハッ…男なのに、泣いちゃって情けねえな。』

病院の寝間着で顔を拭く。

そっと、真尋がタオルを渡してくれた。

茶矢は、手を離さないでいてくれた。

ポタポタと、真尋から滴が垂れている。

真尋も、何故だか泣いていた。

皆月は、目を閉じて俯いていた。

源希は、肩を震わせていた。

茶矢は…俺の手に顔を押し付けて静かに泣いていた。

皆月以外、皆泣いていた。

声を出さないで、全員が泣き止むまで泣いたんだ。

…俺ら、高校生なのにな。

今時、中学生でもこんなに泣かないよな…。

——ククク：何だか変な気分だ。

けど、けどな、全て吐き出したからかな…みんなで泣いているかなかな…香織ちゃんには悪いけど、今の俺…

凄く倅せだと思えるよ。

中編（温かさ）

茶矢達が帰った後、暫く源希と二人だけになる。

外はもう暗く、一等星が夜空を瞬いている。

真尋一人で女子二人を守れるだろうか：とか病室から三人を見ていれば、俺に気づいたのか茶矢が小さく手を振る。

それに続いて真尋と皆月が手を振るので、源希と一緒に手を振り返した。

夜風が冷えるので、ベッドの中に入る。

窓を閉める源希を見て、気になっていた事を質問する。

『「おい、源希。」』

「んー？ 正兄、何かほしい物でもあるの？」

『昨日、どうしてあの場所に来れたんだ？』

ピタ、と暫時動きが止まる源希。

顔つきが変わったかと思うと、窓を閉めきり、俺の向かい側の椅子にゆっくりと腰掛ける。

ベッドに両肘をつけ、顔の前で指を絡ませる。

緊張感の漂う空気の中、月明かりが俺らを照らす。

「実はね…」

重々しい口調で語りだす源希。

何だ：何なんだ、この空間は。

こんな顔の源希、俺は知らねえぞ！

勿体振らねえで早く話せ愚弟！！

生唾を飲み込み、源希の言葉の続きを待つ。

やっと源希の口が開き、聞きたい気持ち半分、聞きたくないのが半分と五分五分の気持ちで構える。

「――俺、正兄リーダーがあるんだ☆」

.....。

…五、四、三、二、

ヒュッ、ガッツツツツ！！！！

「グボアアア…！！」

久しぶりの気がするぜ…兄貴の回し蹴り！そんなに経ってないけど！
ちよ、待って待って！それはダメ！パイプは流石の俺も死ぬから！！
ごめんなさい！ごめんなさい！ふざけ過ぎました！ちゃんと話すか
らパイプをお収め下さい正軌兄様！！」

『…ったく、初めっから話せば良いんだよ。この馬鹿がつ！
今回は、あの時の礼に免じて殺らないで置いてやる。』

ガシャ。

ベッドのパイプを元の場所に戻し、再びベッドに入る。

床に女座りして蹴られた頬を手で抑えていた、何とも“気持ち悪い”
格好をしていた源希は、「痛てて…」と椅子に腰掛ける。

今度は、何時ものヘラヘラした顔で話し始める。

「昨日、俺、茶矢達を見送るついでにアイス買いに行ったじゃん？」
『ああ。』

昨日、源希が言っていた事を思い出し、コクンと頷く。

「茶矢もコンビニに立ち寄るって言ったから、真尋と友恵ちゃん、

俺と茶矢でニ…ニで別れて、俺と茶矢はコンビニに向かった。

そこから、コンビニに入ろうとすると…兄貴が俺達の後ろを走って行ったんだよ。必死な顔してたから、兄貴は覚えてないかな？」

……そうなのか？

俺もあの時はただ香織ちゃんの事だけを考えていたから、何にも覚えていない。

「何事だろうと思っていれば、茶矢が突然正軌兄の後を追って走るんだもん。足が遅くくせにね。

俺も慌てて茶矢と兄貴の後を追うけど、茶矢に合わせて走っていたら兄貴見失って……」

『茶矢の遅さは筋金入りか…。』

「ま、しゃーないと思って茶矢の体力が回復するまで立ち止まっていたら、茶矢がマンションの中に入って行ったんだ。

香織ちゃんのマンションにね。

俺はその時に『何でこのマンションに入ったんだ？香織ちゃんの部屋を覚えてるのか？』って聞いたんだけどね……ククッ。

茶矢は何て応えたと思う？」

——茶矢が…？何で、わかったんだ？

俺は呆然とした顔で見ていると、ニコッと源希が笑う。

「『あの人の事を何年見てきたと思うんですか。そんな馬鹿げた質問をするなら、私は源希君よりあの海色の髪を知っていますよ。』だってさ。」

『……。』

「そっからは、茶矢が見事に部屋を当てて、兄貴救出。以上だよ。」

カタツと席を立ち、源希は病室を出て行く。

病室には、まだ理解出来ていない俺と、なっchanパイナツプル味が残された。

―病室前―

「――…はあ…。」

ズルツ、と扉を背に力無く床に座り込む。

……言っちゃった。

茶矢の勇姿、兄貴に言っちゃった。

正軌兄、驚いた顔してたなあ。

いや、理解不能？と言った方が正しいかな？

これ兄貴に話したって言ったら：茶矢怒るだろうなあ。

こういうの1番嫌うもんなあ。

影で頑張るタイプだもん。

茶矢のそういう一面、俺は好きなんだけどね。

——けどさ、茶矢。

悪いけど俺、悪い事したって思っていないから。

茶矢の事、今、正兄に言わないと後悔すると思う。

………ただの、俺への自己満足なんだろうけどさ。

そんな事、自分が1番よくわかってるよ。

『…あーあ、あーあ。遠回し過ぎる茶矢のアタックも、今日でおさ
らばしなきゃな。』

あんなんじゃ、何時まで経っても伝わるわけねえよな、うん。正軌
兄、正直鈍そうだし。

…今度、積極的にサポートしてやろっと。』

ーププププ…ププププ…

携帯の音が鳴る。

画面を見れば、“母さん”という表示が。

ププププ…ププ、ピ。

「もしもし？どうしたの？」

電話に出れば、俺とよく似た明るい声。

「あー源希。やっと出たあ！お父さんに代わるわねえ。」

「…もしもし。源希か？」

「うん。親父、出張お疲れ様。

ところでどうしたの？」

「ありがとう、源希。」

実はな……

母さんが正軌の病室を忘れてしまったんだ。

私は母さんについて行く予定だったものだから、正軌の病室は知らないままなんだ。

…頼むから、迎えに来てくれないか？」

「もうヤダー！お父さんったら、そんな恥ずかしい事言わないでよ！」

「あのう…すみません。他の患者さんのご迷惑になりますので、もう少し声のトーンを…」

「あらやだ。ごめんなさいねえ。」

「…至急頼む。」

「あーい、わかった。」

—プツ。

電話を切り、ポケットに入れて立ち上がる。

：母さんのあの空気が読めないのには、本当笑えるな。
あれが母さんの長所で、短所でもあるんだけどね。

親父も、兄貴の事を聞いてから、出張先の仕事を急速で終わらせて仕事場から直行して来たんだ。

母さんとも仲良しだし、自慢の父親だと胸を張れるよ。

自慢の両親に自慢の兄貴。

仲の良い友達。

俺は倖せ者だとハッキリ言える。

「何時かは、家族みんなで食事したいな。」

近々叶えられそうな夢を胸に抱き、温かさを感じたまま、両親の待つ場所へ走って行った。

中編（温かさ）（後書き）

皆でわんわん泣いた後って、あれ程気まずい空気はないと思うんですよね（笑）

みんなには、

『ブハッ！真尋ブサイクだな！クククッ…』

「茶矢も目え腫れてるぜ！ダハハハッ！！」

「げ、源希君だって…真っ赤、だよ！プッ…クスクス…」

「正軌先輩よりかはマシかと。」

…フッ。」

「きやははは！！あんたら皆凄いわよ！

ヒャーハハハッ！お腹痛ーいっ！！」

と馬鹿騒ぎして、看護師さんに怒られたら良いです。

そんな事で気まずい雰囲気をポーッツイ！と吹き飛ばしてくれる。

この五人のような関係に憧れます。

宮古母、とも美さん。

宮古父、優人さん。

この夫婦と宮古兄弟にも、『こんな家族いたら良いなあ。』と羨んでしまいそうです↑

まだまだ続きます。

中編（中間テスト）（前書き）

私のテストが終わったのに、こちらはテストの話です（笑）
うん、何とも複雑な気分です。

今回もグロい表現がありますが、大丈夫な方はどうぞ。

↓

中編（中間テスト）

こちら、古門清高等学校。

源希や茶矢、俺が通う普通科の高校だ。

それぞれの学年に一室ずつ外国人と勉強を学ぶ教室があり、希望者は始業式の前か、春休みに申し出る。

当選で受かった人は、そこで外国人と勉強をする。

——それくらいしか変わったところはない。
至って平和な高校だ。

教室に入ってテストの用意をする。

今日は数学Aと科学2だったな。

このテストが終わったら直ぐにGWだし、今年は遠出でもしてみるか。

大学探しも兼ねて。

ノートをパラパラとめくっていると…

カッカッカッ、ガシッ！

右肩を突然捕まれた。

驚いて掴んだ主を見ると、…担任の吉田が真っ青な顔でそこに立っていた。

吉田は、英語の担当教師である。
身長は俺より小さい。

顔色は普段から悪いし、しかも冴えない。

ハア…ハア…と持病の胃痛が酷いのか、腹を抑えている。

「宮古…ちょ、ちょっと、来い。」

『…わかりました。』

怯えた顔の吉田の後に鞆を持ってついて行く。

クラメイトの冷たい視線の中、俺は教室を出て行った。

——着いた先は、生徒指導室。

テストなので、職員室は無理だろう。

そう思っていた俺を職員室に入れようとして、吉田は他の教師に怒られていた。

俺は入らなかつたんだから、そこまで注意しなくて良いと思うん

だけどな。

生徒指導に、吉田ともう一人教師が立っている。
チャイムがもう鳴っており、テストが始まったんだと椅子に座ったままぼんやり考える。

「宮古…お前、病院抜け出したって、聞いたぞ。」

『医者には午前中は出かける許可を得ていますけど。
親に報告するのは、忘れていました。』

「しかし、だな…お前は、痛た…他の生徒とは、一緒はダメだ。
精神が安定しているか、わからないからな…宮古だけは、此処で
受ける事になった。い、良いな？」

『わかりました。』

テストを受ける用意をする俺を見て、心底安心した顔をする吉田。
もう一人の教師を見ると、あのインテリ眼鏡ではないか。

鞆を部屋の端に置き、テスト用紙がテーブルに置かれる。

「制限時間は50分。

では…始め！」

バツ！

俺の中間テストが始まった。

――40分後。

チャイムがまだ鳴らない時間、俺は暇でしよがなかった。

回答欄は全て埋まった。

見直しも何回もやり完璧だ。

『ハアア……。』

時計を見て、長いため息をつく。

そんな俺を見て、教師二人は顔を見合わせる。

――キンコンキンカーン：

チャイムが鳴った。

しかし、俺にはまだ時間がある。

毎回毎回、この時間は暇過ぎて困るんだ。

お蔭様で、ペン回しもほら、この通り上手くなった。

俺がクルクルとペンを回している中、吉田とインテリ眼鏡が話し合いを終わらせたらしい。

吉田が恐る恐る俺に話しかける。

「宮古…もう回収するか？」

『あ、お願いします。』

次の教科の勉強をしても良いですか？」

「良いけど…回収してからな。」

『わかりました。』

テストをインテリ眼鏡が回収した後、鞆を取りに席を立つ。

鞆を椅子にかけ、ノートを取り出す。

パラパラとノートを流し見している時、ある心配が頭に過ぎる。

『すみません。』

「な、何だ…？」

『教科ごとにノートを回収するよう言われているのですが、先生に頼んで良いですか？』

俺は直ぐに病院に戻らないといけないので。』

「わかった。任せておけ。」

『ありがとうございます。』

——キーンコーンキーンカーン…

数学Aと化学2のノートをインテリ眼鏡に渡す。

鞆を部屋の隅に置き、テスト用紙が配られるのを待つ。

化学2か…真尋達、大丈夫だろうか？

皆月は最初から諦めていそうで、恐いんだけどな…。

テスト用紙が配られ、吉田が時計を見る。

俺は自分より一年生の事が心配で仕方がない。

―チツチツチツ―キーンコーンキーンカーン…

「では、始め。」

ハア―…よし、やるか。

長いため息を吐いた後、テストに取り組み始めた。

―45分後。

…あいつらは大丈夫だろうか。

確か、世界史だったよな。

後5分で終わるが…

見直しはちゃんとしたかな…

書くカ所間違えてないだろうか…

名前は忘れていないだろうか…

年号や偉人名、皆月が諦めて寝てないか……アアアアアア

ー！！

気になる！！

あいつら以上に気になる！！

俺はあいつらの家庭教師か！！？親か！？

俺の教え方は間違ってたのだろうか…ネガティブになりそう
だ。

ーキーンコーンキーンカーン…

「はい…終了。回収するぞお…痛たたた…。」

教師が確認している間、早く終わらないかそわそわしていた。

トントんとテストをまとめ、袋に入れる。

「今日は…これで終わり、だ。

明日は英語と、古文だから…提出物は忘れない、ようにな。
以上だ。」

『さようなら。』

ガラッー！！

鞆を片手に、生徒指導室を飛び出した。

生徒がぞろぞろと歩いている中、俺も流れにそって歩いて行く。

病院で寝れば、こんなに心配しなくても良くなる。

なっc h a n Nが冷蔵庫にまだあったな…よし、それを飲もう。
糖分は頭に良い。

昼飯をちよつと食べてから、眠ろうか。

「先パァーイ！！！！」

ガシッ！！

早足で病院に向かっていれば、ドンッ！と何者かに背後から抱き着かれる。

思わず『ウグッ！』と変な声が漏れたのは言うまでもない。

この声は…皆月か。

元気なのは良いが…出来れば腹を締め付けるのは止めてほしい。

『よう…皆月。テストは、どうだった、か？』

「友恵、正軌先輩から離れなさい！」

正軌先輩は病み上がりなのですよ！」

「ま、正軌先輩…大丈夫ですか？顔色が…」

「友恵ちゃん、マジ嬉しいのは伝わったから、そろそろ離してやっ

て！

兄貴、今までにないくらい顔が白いから！！」

『何だ…この力、は…。』

「今回初めてあんなに回答欄が埋まった事はないですよー！！
先輩のおかげです！感謝です！」

「…ボクも、今回は凄くわかりました！ありがとうございます…ごさいます
！ふええ…」

『く…こんな場所で、くたばって…たまるかぁ！』

皆月を無理矢理引き離すが、今度は真尋が俺の腕にしがみついて泣く。

ギユウウ…と力は弱いが、皆月より離しづらい！離したら俺が悪者みたいに見えるこの心理現状！もう野次馬は俺が泣かせたみたいな目で見てくる。

クソッ！俺を見るな！！俺は何も悪くない！！

後ろでギアアギアア騒ぐ一年！Sに、俺は言う。

『ギアアギアアギアアギアア煩え！！』

俺は先に帰る！真尋、コケても知らねえぞ！』

ダンッ！

鞆を片手に抱え、俺は走り出す。

真尋は腕を掴んだまま、一緒に走り出した。

「兄貴！待てよ！！」

次に源希が。

「先輩！私の話まだ終わってませんよ！！」

そして皆月。

「待って下さい！」

最後に茶矢。

五人で追いかけてっことをしているみたいに、病院まで走った。

学校が見えなくなった場所では、俺と真尋も息が上がっていた。後ろでは、他の三人も汗をダラダラと流しヨロヨロと歩く。傍から見れば、高校生五人が春なのに汗水流してゾロゾロ歩く、奇妙な光景である。

病院に着いて、全員で俺の担当の看護師さんに怒られたのは、言うまでもない。

優しい人ほど、怒ると怖い。

テスト期間に学んだ事である。
後、制服は走りにくい。

『つ…かれたあ……。』

ドサツ、と身体をベッドに預ける。
結構な距離を走った為、全員グッタリした表情だ。

看護師さんが食事を運んでくれた時、他の奴らはどうするのかと
見ていれば、全員とも弁当持参だった。

……テスト期間は弁当必要ないんだぞ？

『何で、お前ら弁当…』

「え、兄貴何言ってるの？」

「学校終わった後に、」

「ま、正軌先輩のお見舞いに…」

「直行するからに決まっています。」

まさか、正軌先輩が学校に来ているとは驚きましたけど。」

『…なるほど、と言うか、何と言うか…。』

親には言ったのか？』

「モチ☆」

「あたしは学校残って勉強するって。」

「帰りに寄り道するって…」

「正軌先輩のお見舞いに行くからと。」

『…そうか。飯食べてから来ても良いのに。』

昼飯を食べた後に着替えるか、と病院飯を食べる。

…味が…：…しない…？

食材そのものの、味かしねえ：

ヤバイ、早く退院してえ。

母さんの飯がめっちゃ食べたい！

お茶で飯を流し込み、無理矢理胃に入れる。

「あたし達の家の方と病院の方、真逆なんですよ。

だから、学校から直接行った方が早いんです。お分かりいただけました？」

『そういやそうだな。』

病院からなら俺の家が1番近いか。』

「俺、喉渴いたから売店行ってくる。」

何か買って来ようか？」

「あ、ボクも行く…。」

『なっchan林檎味。』

「あたしポッキー。」

「私は雪見大ふくを。」

「あいよー。行くか、窪田。」

「うん。」

全員からお金を預かり、真尋と一緒に病室を出て行く源希。

『俺も着替えてくるわ。』

寝間着を持って個室特有の広いトイレに行く。

「先輩、鍵かけておいた方が良いでしょう♪」

「大丈夫です。」

私が友恵を監視してますので。」

『茶矢、頼むなー。』

タオルで汗を拭き取ってから、寝間着に着替える。
制服はハンガーにかけておこう。

ガララ…。

トイレを開けると、皆月の姿がない。
違うトイレに行ったのか？

『茶矢、皆月は？』

「学校に忘れ物をしたらしいので、取りに行きました。」

『そうか。』

悪い、茶矢。そのハンガーをとってくれないか？』

「はい、どうぞ。」

茶矢に渡されたハンガーに制服をかける。

窓から外を見れば、皆月の走る姿が。

学校までは距離が大分あるが、一人で大丈夫か？

一声かけてくれれば、着いて行くくらいしたのにな。

ベッドに腰掛け、ぼんやり天井を見上げる。

あ、明日もテストがあるんじゃないかねえか。

『茶矢。明日、お前達テスト何がある？』

「理科と地理です。」

正軌先輩に教えてもらったカ所を覚えていますので、大丈夫です。
今日のテストも、教えてもらった通りの場所が沢山出てウハウハでした。」

親指をグッとたてる茶矢。

その顔と声で“ウハウハ”って……ヤベ、つぼったかも。

『クッククックッ…アハハ！』

その顔で“ウハウハ”とか……反則だろ…プッ、フフフ…ククク！！』

「正軌先輩…そんなに変でしたか？
軽くショックです。」

『いや、違う…フフフ、ただ、久しぶりにつぼただけで……ハハッ！！』

「そんなに笑わなくても良いではないですか…。」『クッククックッ…悪い悪い。そうむくれるなって、な？』

クシャリ、茶髪を無造作に撫でて機嫌をとる。

唇を尖らせてむくれる茶矢を見て、また笑ってしまう。

普段からしつかり者として周りを見ているから、年相応の表情はあまり見た事がない。

言った事を笑われてむくれるのも、不機嫌そうに唇を尖らせるのも、頭を撫でられて恥ずかしそうにするのも……何か新鮮だ。

（まーさーきつ！お前の手、あったけえな♪）

——ッ！！！？？

バツ！！

『あ……え……？か……』

香織、ちゃん？

今、茶矢と香織ちゃんが重なって…香織ちゃん、昔のまんまで、笑顔で笑ってて………あれ？

手が震えて、いる。

血の気がひいていくのが、わかる。

寒気が、する。

前は、笑顔は大丈夫だったのに、今は、あの笑顔さえ、怖い。
脈がドクドクと煩い。

思いきり手を離してしまった為、茶矢が驚いた顔をしている。

茶矢が香織ちゃんと重なって、目が……目が…

「…正軌先輩？」

（正軌、どうした？）

『か、香織…ちゃん……』

「…私は、茶矢ですよ。茶矢です。」

（ああ、そうだよ。お前の香織だ。）

『あ……ち、違う。今、香織、ちゃ…んは…いない。』

胸に手を当てて、自分を主張する香織ちゃん。

前のめりに俺を見上げる。

顔が…歪んだ笑顔で、俺の手を握る。

香織ちゃんの手に、血が、血が…――

『あ…あああ……!!』

「正軌先輩!? 正軌先輩!!」

（あたしはお前だけだよ! あたしはずっと待ってるから!）

『ごめん……あ、ごめんなさいごめんなさい……』

泣きながら謝る。

香織ちゃんの顔が、近い。

香織ちゃんの顔が、ドロ……って…、

―――床に、何か

“ミタコトナイモノ”が。

コレは 何 だ ?

バツツ!!

突然、目の前が真っ暗になる。

何か布のような物を被せられたらしい。

…あれ…？

香織ちゃんが、消えた？

代わりに、誰かに頭を抱きしめられる。

あの時に夢中で縋り付いた温もりだ。

身体が、心が、この体温を覚えている。

赤ん坊をあやすように、背中をぽん、ぽんとゆっくり叩かれる。
小さな手が、だんだん俺を正気に戻してくれる。

「正軌先輩、大丈夫です。今は難しいかもしれませんが、」

『……………う…ヒック……………』

「…あの人の事は忘れていきましょう。

大丈夫です。みんないますから、茶矢もいますから。」

『…ありが…とう……………。』

ギュッ。

怖い夢を見た子供が母親に抱き着くように、俺より二まわり小さい身体を抱きしめる。

まだ震えは止まらなかったが、茶矢の手が止まる事はなかった。

中編（中間テスト）

——…あ、寝た。

私に抱き着いたまま眠る正軌さん。

『スー…スー…』という安定した寝息が聞こえる。

呼吸に合わせてサラサラの海色の髪が首に当たってくすぐったいけど、今はこの至福を味わっておこう。

トクントクンという心臓の音が心地良い。

今なら、抱き着いても、髪に触れても、寝顔を見れるのも許される。

“私だけ”が正軌さんに触れられるんだ。

「正軌さん…あったかい。はぁー幸せ♪

髪もふわふわ？してて気持ち良い。指通り良い。

肌も私より綺麗で羨ましいや。

眉間に皺が寄ってるのもカッコイイ…。」

タオルを外して、正軌さんの寝顔をまじまじと見る。

正軌さんと身長差が物凄いある私は、正軌さんをよく見れる事は

出来ない。

もし『触っても良い』と言われても、私が背伸びして触れるのが正軌さんの耳くらいだろう。

ジャンプしたら額くらいいいけるかな。

この小さい身長を恨んだ事は少なくはない。

背の順では毎年一番前だし、一、二番目じゃないと人の背中で黒板が見えない。

目が悪いわけではないのに、毎回席替えの度に手を挙げるのが憂鬱だ。

足が早ければ良いけど、遅いといった致命傷だ。

小さい〓足が速い、は男子だけだ。

女子は違うんだ。

……苛々する事が多いけど、この人を一目見れば、思考が全て正軌さんで埋まってしまう。

この背中を、髪を、顔を見れば、私は元気になれるんだ。

「ただいまー。なっchanN林檎味売り切れてたから、スーパーまで買いに行ったら友恵ちゃんに会ってさ、遅くなっちゃった……うわお。」

「あら、大胆ね茶矢。」

「正軌先輩……寝てるの？」

………至福の時間が。

源希君だけならまだしも、友恵が来るなんて最悪。
一生戻らなくて良い。

この女は、私の前に現れないでくれ。
見るだけで不機嫌になる。

はあ：仕方ない、そろそろ背中が限界だったという事で正軌さんを手放すか。

この体勢、将来猫背になりそうな勢いで背骨がミシミシいつてるし。

「お疲れ様です。

正軌先輩をベッドに寝かせたいので、手伝って下さい。」

そっけなく三人に言う。

友恵が気持ち悪くニヤついてるのが気に食わない。

隣で源希君もニヤニヤしているので、後で覚悟しておけよ。

真尋君だけは手伝ってくれるけど……あまり変化はない。

真尋君ありがとう、気持ちだけはもらっておくね。

正軌さんも、そろそろ起きてほしいな。

——いや、もうどっちでも良いかな。

正軌さんあったかいし、私は倅せだし。

源希君が「ハァー。」と肩を竦めてこちらに来る。

何ですか、そのため息は。

もう手伝ってもらわなくて良いですよ。

「はいはい、茶矢の言いたい事は充分伝わってますよ。けど、そろそろ茶矢の体が限界そうだから手伝ってやるよ。

ハァーア、至福の時間を邪魔して悪かったねえ。」

「あんたもあんな顔するんだ。

爆笑しなかっただけ、有り難いと思いなさいよ。」

「何なんですか、源希君も友恵も。」

真尋君のように素直に手伝う事は出来ないのですか。」

「「はいはい。」」

正軌さんをベッドに寝かせようと真尋君と源希君の三人で動かそうとするけど……離れない。

傍観していた友恵を手伝わせるけど、抱き着く力が緩む事がない。

………本当に、寝てるのですか？

寝息が聞こえるから寝てるのはわかる。

けど、この力を四人をもつてして離れないのはいかなものかと。

グググ…

三人が引っ張って私が押す。

ベッドに座った体勢で、後は横にするだけだというのにこの重労働。

起こさないように手加減していた四人も、最後らへんは本気でやっていた。

起きない正軌さんも、色んな意味で凄い。

疲れてるんだな…夜中熟睡出来なさそうだし。

——あ、良い方法がある。

「源希君、源希君。」

「んあ？何？今、一生懸命引っ張ってるんだけど…」

「正軌先輩の耳に、息吹きかけて下さい。」

このままでは、一向にらちがあかないので。」

「…ま、良いけど。」

私の考えが正しければ、正軌さんは必ず起きる。

代償はあるけど…源希君なら良いだろう。

うん。

真尋君に少し離れるように言うと、友恵も距離を置く。

内心舌打ちして、それでも背中の運命を今日できめたくはないので、源希君に先程頼んだ事を実行してもらう。

「じゃあ…やるぞ。」

ふー…ヒュッ！ボグウツ！！

源希君が実行してから5秒で、顔面にアッパーが。

床に倒れる源希君を見て、計算通り、と満足そうに頷く私。

うつすらと目を開ける問題児を間近で見て、早まる私の心音が相

手に聞こえてないか心配になる。

ゆっくり私から体を離して、源希君の前に仁王立ちする。

『おい源希。人が寝てる時に生温い息を耳にかけるとあ……覚悟で
きてるんだろおなあ？あゝあ？』

「え、ちょっと待って正兄。俺はただ茶矢に言われた事を忠実に実行しただけで……」

『言い訳して、しかも人のせいにするたあ……最悪だな。
その根性、根っこから修正してやろうかあ！？』

「えゝえゝゝー！ー！！？」

……哀れ、源希君。

しかし貴方のおかげで、私の背中と心臓が保たれました。
後で“ガリツガリ君”を奢ってあげよう。

「茶矢！お前から何か言えって！！」

「すみません。」

私、背中が痛いので先にアイス食べてます。あ、大分溶けてる。」

「茶矢ああああ！！」

『……歯あ食いしばれよ？』

後に、看護師さんが来るまで源希君は正軌さんに殴られ蹴られを繰り返されていた。

私は、正軌さんがもう震えていない事に安心。

終わった後の源希君の恨み言は軽くスルーして、アイスを頬張る。

先程の仕返しですよ。

やられたらやり返す。

これが常識です。

源希君が教えてくれた事でしよう？

中編（中間テスト）

次の日。

一限目のテストを生徒指導室で終わらせてノートをパラパラ流し見していると、

—コンコン—

控えめなノックの音が聞こえる。

「ん…誰だ…？教頭だったら嫌だな…アタタタ…胃痛が。」

『俺が出ますよ。座っていて下さい。』

「あ…すまない、な。宮古。」

教頭だったら、何て話せば良いんだ？

ま、適当に部屋に入れば良いか。

胃痛が酷い吉田を座らせ、ドアノブを回す。

—…ガチャ。

「あ、すみません。正軌先輩います…」

「あ！先輩じゃん！」

『お前ら、こんな所でどうした？テスト勉強は？』

「俺は平気だけど、真尋が“昨日正兄に聞くの忘れてたカ所を聞きに行く”、って言うからついて来た。」

「友恵はクラスの女子とでも話していれば良いのに。」

「えと、今、良いですか？」

ノートを持って怖ず怖ず聞いてくる真尋。

こら、茶矢。

皆月を睨むな睨むな。

皆月は茶矢を煽るな。

源希は仲裁入れ。

三人共、ちったあ真尋を見習え。

ってか、こんな場所（生徒指導室）の前で騒ぐな。

……言いたい事は結構あったが、時間がないので三人は無視をする。

『どこだ？』

「えっと……あ、ココです。」

『ああ、これはだな……』

「あ、そうだったのですか。ありがとうございます！」

『よし、頑張れよ。』

ってか、俺じゃなくてもあの馬鹿に聞けば良いのに。』

ワシヤワシヤと真尋の頭を撫でてやる。

小っ恥ずかしそうに笑うが、俺の質問に髪をボサボサにしたまま、あわあわする。

「あ、えと、今まで正軌先輩に、教えてもらってたから、えとえとと……源希君ごめんなさい……」

「んあ？何が？」

『要するに、源希が勉強できる事を忘れていた、って事か。』
「……えへ。」

「別に良いよ。勉強できても自慢じゃないし。」

後ろで皆月が「うっわ、嫌みくく。」と怪訝そうに源希を睨みつけていた。

ワイワイ騒ぐ三人を手ぐしで髪形を直す真尋とぼんやり見ていれば、チャイムの音が鳴る。

――キンコーンキンカーン…

『おら、さっさと行け。』

赤点とった奴は、一週間ミツツチリ俺が教えてやる。』

「あたしを見て言わないで下さいよ。」

頑張りますよ。頑張れば良いんですよ！うわあああん！！」

「突然お邪魔してすみませんでした。」

お互い頑張りましょう。では、後ほど。」

「ありがとうございます！」

「じゃーねえー♪」

『早よ走れ。』

テスト受けられなくなっても知らねえぞー。』

四人にヒラヒラと手を振ってから生徒指導室に入った。

椅子に座っていた吉田が驚いた顔をして俺を見ていたが、直ぐに視線を外した。

俺はノートを鞆に入れて、テストの用意をした。

「じゃあ、次は英語だ。」

宮古なら、大丈夫だろう。

では、始め。」

実は、吉田は三年間俺のクラス担任として、教師の中では一番縁がある。

俺の成績も、授業態度も、俺の行動範囲さえ大方知っている（らしい）。

吉田の事も、一年生の時から持病が酷く、顔色が悪かったのを覚えてる。

相変わらず声も小さくて、地味だった。

：けど教え方は、今まで英語を受けた中では、1番上手いと思う。長年教師をやっているけど下手な奴はいるけど、吉田は聞こえにくいのが欠点だが、わかりやすい。

俺的にだけどな。

——さて、後は見直しだけか。

ココのスペルが俺的に怪しいけど、他は大丈夫だ。
筆記体にも自信がある。

考え事をしていたから、後十分しかない。

吉田は疲れてるのか、目の前でコックリコックリうたた寝している。

：オイ、テスト中に試験官が寝たらダメだろ。
しかも、インテリ眼鏡は今日いないんだし。

吉田一人なんだぞ。

「いや、俺はセコい事なんてしねえけど、頑張ってテスト受ける生徒の前で“ 餌をかく ” のはいかがなものかと。

まあ、俺がそんな事をしないとわかってるから出来るんだろうけど……

そう思うと、ちょっと嬉しいな。

起こすのもなんだし、チャイムが鳴るまでもっ回見直するか。残り5分で吉田が起きれるかは疑問だが、その時は起こすしかないよな。

仕方ない、仕方ない。

「うーん…焼肉はちよつと…」とか寝言呟いてるけど、仕方ないよな。

——キーンコーンキーンカーン……

——起きる気配、なし。

やっぱり起きないか。

もう暫く様子を見よう。

タイムリミットは、誰かが部屋に入って来るまでだな。

コックリと首を縦に振る吉田が、パチ、と目を覚ます。

そして慌てふためき、久しぶりに吉田にしては大きい（一般的には普通）の声でキョロキョロする。

「んあ…は！」

み、宮古！？あいつ帰ってない……よ、な。」

『よく寝ていた様子なので、起こしませんでした。今日もノートを頼んで良いですか？』

「あ、ああ…すまない、な。近頃、あまり眠る時間が、な……はあ…。」

答案、回収するぞ。

ノートはテーブルに、置いてくれば、良い。」

『はい、ありがとうございます。』

では、さようなら。』

「ああ……真っ直ぐ、病院行けよ。」

ペコッと一礼してから生徒指導室を出る。

人気のない廊下を早足で歩いて行った。

…お、自販機になっchanあるじゃねえか。

財布財布…財布はどこにやったっけ？

校舎裏近くに設置してある自販機を発見し、鞆の中を漁る。

確か、もしも用に母さんが千円札を入れていたよな……あの黒い

財布に。

俺の財布は、ちゃんと家に保管してある。

この黒い財布は昔、親父が使っていたらしいが……デザインがな。

この模様はないだろ。

目的の財布を取り出し、自販機に入れる。

ビー……ジー……

……返ってきた？

もう一度やってみよう。

ビー……ジー……

……向きを変えてみよう。

ビー……ジー……

裏表反対に。

ビー……ジー……

……反対にしたまま逆に。

ビー……ジー……

……喧嘩売ってるのか？このポンコツは、え？

苛々した状態で自販機を睨む。

誰もいないから良いものを、誰か生徒がこの状況を見たら変な噂がまた増える。

：しかし、この自販機はムカつく。

なんか鼻で笑われた感が否めないんだが。
殴って直してやろうか：修理だよ、修理。

そんな事をしていたから、後ろから聞こえる足音に気がつかなかっただ。

コツコツ：

足音はだんだん大きくなる。

確実に俺の方へ来ているが、俺は自販機と睨み合い中。

カツン、と足音が止まると、綺麗な英語の発音が俺を呼ぶ。

「Hell. Are you a high school student?

(おい。お前、高校生か?)」

『…………。』

「お前だよ、お前。自販機を睨んでる、青い髪のお前。聞こえてるのか？」

英語がいきなり日本語に変わった。

しかも、声は綺麗なのに、口が悪い。

嫌な予感承知で振り向けば、やはり外人がいた。

淡い緑色のふわふわした長髪を後ろで結び、前髪で顔の右側が隠れている。

外人特有の色白の肌に、整った顔だち。

長い睫毛の下の薄い黄色の瞳が、真っ直ぐ俺を捕らえて離さない。パーカーを着ているから、古門清学校生ではないらしいけど…部外者が勝手に入って良いのか？

…前に母さんが忘れ物持って来てくれたな。
無断で学校に入って。

——けど、まさか見られているとは思ひもなかったな。
マジで痛い奴じゃねえか、俺。

しかし、俺と同じくらいの身長 of 奴、親父以外に初めて見たなあ。
こんな間近で…：間近で…：…：…：…：…：…：近くね？

外人は鼻先が当たるんじゃないかと思うくらい近い。
思わず一歩、後ずさる。

『な…何？』

「お前、日本語は通じているのか？

自分は日本語は話せるが、英語しか理解出来ない。

Can you speak English?

（英語は話せるか？）」

外人は日本語が話せるけど、こちらが日本語で話しても通じない……だと？

——不便だな、とか思ってしまう。

面倒だな、って思うのはしょうがない。

また顔近い！聞こえてるから！

『I can speak English…』

Ah… YOU near a face.

(話せるよ…)

あー…お前、顔近い。』

「なんだ、自分は間違ってるじゃねえか。聞こえているなら早く返事をしろよ。」

もう一回聞く。お前は此処の生徒か？」

『Yes.』

(ああ。)』

俺が答えると、満足したのか顔が離れる。

よし、助かった！…と思いきや、今度はガシッ！と手を掴まれた。

……何、コレ？

『…What?』

(…何?)』

「聞きたい事があるんだけどね。」

職員室は何処なんだ？面接と試験を受けに来たんだが…場所がわか

らない。
時間内に間に合いたいんだけど。」

道に迷った外国人を英語で道案内する日本人が中学生の教科書に載っていたが、これほど面倒だとはな。
しかも土足だし。

……これは、スリッパに替えさせなければならないパターンか？ マジかよ。

なっchanNを買いに寄り道しないで、早く病院にいけば良かった。

自販機を睨んでないで、諦めて帰れば良かった……クソウ。

『……ハア。

OK, come on.

(ついて来い。)’

「直接してくれるのか。…助かるぞ。」

『……………そうかい。’

客用スリッパに履き替えさせ、職員室に行く。

吉田に押し付ける為に。

職員室に行く途中、外人は一方的に話す。

しかし、適当に相槌をしていると腕を掴んで歩くのを止めて俺が理解しているか聞いてくる為、非常に厄介なのである。

ああ、早く帰りたい。

「青髪に会うまで色んな生徒に質問してきたが、皆、青髪のように話せず、最終的には逃げられた。一発くらい暴れてやろうかと思っただけだな。」

しかし、外人じゃない日本人と話せて……良かったと思う。」

『Ah—, feel relieved.

(あー、そりゃ良かったな。』

「ああ……その為にこの国に来たんだ。」

ふわりと綺麗な笑顔を見せる外人。

女子ならキャー！とか黄色悲鳴を叫ぶかもしれない。

見た目は綺麗な事は認めるが、今までの行動が理解出来ない点が多い為、何とも言えない気持ちになる。

何て言ったら良いんだろう……(茶矢「古臭い」＋源希「意味不明なの」＋真尋「たまに何言ってるか聞こえない」)÷3な感じ。

……ますますわかりにくいな。

けど、俺的にはこれが限界だな。

『This room is faculty room.

See you.

(此処が職員室だ。

じゃあな。』

「感謝する青髪。」

ヒラヒラと振る外人に軽く手を振り返しながら、俺は靴を履き替えに行く。

手を振り返さないと今にも迫って来そうな外人から少しでも離れる為に、早足で校舎を出た。

―職員室―

コンコンコン：

職員室の扉を三回叩く音がする。

女性の教員が応対するが、話しが噛み合っていない。

外人は？を頭に浮かべている。

女性教員が日本語で必至に説明するが、外人は理解出来ていない。

外人が笑顔で話してもらおうよう頼もうとすると、職員室の隣の生徒指導室の扉が開く。

そこには吉田の姿が。

胃痛が酷いのか、腹を抑えながらキョロキョロ周りを見ると、外人に気づく。

「：Meshiah！Kurosawa？

（メシア・クロサワ？）」

「はい。今日、試験と面接を受けに来た、黒澤^{クロサワ} 明詩阿^{メシア}です。」

「Oh!」

I'm glad to meet you!

(おお! よくいらっしやいました!)

「すみません。生徒に聞いたのですが教えてくれる者が中々いなかった。先程やっと職員室に案内してもらいました。」

…時間は間に合いましたか?」

「Ah, just in time; in the nick of time:

(あー、時間ぎりぎりだな…)

…ま、いいだろう、うん。

Mesiah! Kuroshawa, go in room.
(メシア・クロサワ、部屋に入れ。)」

「はい。」

吉田は手招きして生徒指導室に呼ぶ。

その姿に、女性教員が吉田を見直したのは秘密である。

黒澤 明詩阿と名乗る外人は、正軌が座っていた椅子に座る。

吉田が問題と答案用紙を明詩阿の前に置く。

始める前に吉田が明詩阿に確認する。

気分が悪いのか、口を手で覆いながら紙に何か書く。

「これからテストを行うが、その前に確認する。」

外人は最後まで見た後、肯定の意で頭を一度、ゆっくり縦に振る。

紙にはこう書かれていた。

「うちの学校は外国人は特別教室に行くが、
黒澤は“普通科の受験”、で良いんだよね？」

——これが、正軌と明詩阿の最初の出会いである。

中編（中間テスト）（後書き）

外国人、明詩阿君^{メシア}登場。

さてと、これから明詩阿をどうやって絡ませようかな…へっへっへ。
↑

まだまだ続きます。

中編（GW前）（前書き）

GW前の五人の話。

この先、正軌とメシアがどうやって絡むのか……それは私にもわからん（ボクオツ！

では、

「べ、別に、今まで見てきたから見てあげるってだけで、あ、あんた何かに興味ないんだからね！
ちよっと、何そのニヤけた顔！！
もう、知らない！！！」

って、純ツンデレ100%の方はどうぞ↑

ノーマルの方も普通にどうぞ。

↓

中編（GW前）

——キーンコーンキーンカーン……

「はい、止め。」

吉田の声でペン回しを止める。

これで全てのテストが終了した。

俺も安堵したのか、欠伸を漏らす。

病室に毎日来る後輩、sにわからないカ所を教え、夜に自分の勉強をしていたから、気が張っていたのもある。

夜に眠れないのも関係あるな。

散歩しようとしたら、見回りをしていた看護師さん、しかも俺の担当の人とバッタリ会って怒られたからな。

あの人の笑顔は、夜は鬼より怖いと思った。

テストを吉田が回収した後、病院に行く為に帰りの支度をする。

今日こそ、学校の自販機でなっchanNを買おうと決意して席を立つと、吉田に止められる。

「あ、宮古。これから、時間……空いてるか？」
『なんですか？』

席に座るよう促され、鞆を置いて腰掛ける。

廊下が騒がしくなったな……と思いながら、吉田の言葉を待つ。

吉田は後ろ頭をポリポリかきながら、バツが悪そうに切り出す。

「実はな、外国人が…私のクラスに、家の事情で転入して来る事になったんだ。」

私は、英語の教師だしな。仕方がない。」

『そうですか。』

「それでだな、転入生は日本語を独学で覚え、読み書きが、スラスラ出来るまでに、成長した。」

…だが、な。私達が日本語で話しても、転入生は何を言っているのか、理解出来ないんだ。これが厄介なんだ。」

―・・・ん？嫌な記憶が蘇ってきそうだぞ。

日本語を話せるが、日本語を聞いても理解出来ない外人……………心当たりがある。

一応、吉田の話を聞いていこう。

予想はついてるが、内容によって返事を決めよう。

うん、GW前には退院出来ると聞いた俺は、現在物凄い冷静だと思ふ。

「宮古は、さ。ぶっちゃけた話、クラスの中で、成績トップクラス、だろ。英語も、Listeningも筆記体も成績も良い。」

『それはどうも。』

「正軌先輩パーイ！まだですかー！？」

「…友恵ちゃん、もうちょっと待とうぜ？」

兄貴にだって、用事はあるんだよ。」

「正軌先輩の邪魔をしないで下さい。貴女は先に帰って良いですよ。」

「さ、茶矢ちゃん…」

廊下からお馴染みの声が聞こえる。

職員室近くで騒ぐなど言っただそばから……ハア。

俺が外人と遭遇した日、当然、俺は病院に帰るのが遅くなり、担当の看護師さんと皆月に怒られた。

皆月は腹が減って限界だったらしい。

それでも待っていてくれたから、頭でも撫でておいた。

コッソリと真尋が耳打ちした話、茶矢が俺を捜しに行くのを源希が止めていたという。

今までにない茶矢の表情だっただけに、皆月は何も言わなかったとか。

何かもう、何をしたら良いのかわからなかった為、何時にも増して不機嫌面の茶矢と、何時ものヘラヘラ顔の源希、教えてくれた真尋の頭をグシャグシャになるまで撫でてやった。

三人のボサボサ姿に皆月が爆笑したのは言うまでもない。病院食は、あの日も自力で飲み込めないほどマズかった。

その日以来、四人は俺を見張る為に病院に行く道は一緒に帰る事になった。

…ま、俺は良いけどな。

ただ、ただ騒ぐ場所を考えてほしいのが現状だ。

吉田は一回扉を見た後、また俺の方を向く。

「三年間の縁、と、廊下の生徒を見ているあたり、意外と面倒見が、

良いし、噂が嘘だってわかる。

転入生も男子だし、関わりやすい、と思う。

…どうだ、転入生が学校に、慣れるまでも良い、転入生を引き受けて、くれないか？

私がいられれば、良いんだが…私も教師だからな、違うクラスもあるから、ずっと一緒にいられる事が、出来ない、んだ…。」

『…………俺、見た目こんなですから、恐がられるかもしれませんが。』

「ああ、それなら問題ない。」

吉田が二、三回縦に首を振る。

妙に自信有り気なのが気になるんだが…

俺はわけがわからない顔で吉田を見ていると、吉田は目線を机に移して話す。

「特別室の生徒の噂を、耳にしたの、だがな…………宮古は、外国人には人気があるらしい。噂があるのも、恐がるどころか、カッコイイと、叫んでいた。その髪も、目立ってて、良いらしい。

…外国人には、好印象だ。」

『…………外人に人気があっても、どうすれば良いのか困るんですけど。俺以外にも、成績が良い奴はいるでしょう。』

「私が厳選した中で、宮古を選んだ。

本当は言ったら、ダメなんだが、今回、宮古のクラス成績、二位だったんだ。

頼む理由の、不足にはならないだろう。」

——だんだん了承せざるを得ない状況に陥ったんだが…。
しかも、あの外人だろ……。うーん…。悩む。

悩んでいる間、今まで静かだった廊下の声が喧しくなる。
皆月の声が部屋に響く。

「正軌セ・ン・パ・イ!!」

あたしお腹すき過ぎて、あたしぶっ倒れますよ！良いんですか！？
三分以内に来ないと、帰りに駅前のクレープ奢ってもらいますよ！
「貴女は早く自宅に帰ってご飯でもなんでも食べていなさい！煩い
です！」

「茶矢ちゃん…お、落ち着いて…。」

「兄貴ー。もう一時間くらい経ってるから、友恵ちゃん今までよく
我慢したと思うから、早くしてやってー。」

「友ちゃん先輩…茶矢ちゃん、職員室近いから…正軌先輩、まだ先
生と話し中だし…。」

…真尋ありがとう。

お前だけだよ、俺の言いたい事を理解してくれる奴は……。何だか
泣けてきそうだ。

何であんなに良い奴が俺なんかの近くにいろんだろうな。

「「真尋うるさい！／真尋君ちょっと黙っていて下さい！」」
「ひっ！（ビクッ）」

おい、お前ら。

後で覚悟している。

―ガタツ。

席を立ち上がり、吉田に一礼する。

『すみません。今は返事が出来ないので、後日、改めて返事をさせて下さい。』

待っている奴らを、これ以上待たせられませんので。』

「…わかった。明日、返事を聞こう。」

『ありがとうございます。』

では、失礼します。』

鞆を持ち、部屋を出ようと扉を開けようとするが、廊下がやけに静かなのに気づく。

真尋に八つ当たりする二人を叱ろうとしていたのに……どうしたんだ？

キィ……とゆっくり扉を開けると、四人が固まってる姿と見覚えのある淡い緑色の髪が。

外人は俺に気づいたのか、薄い黄色の瞳をコチラに向ける。

そして、コチラに手を伸ばした時、

バツツタアアンツッ！！

……無意識に扉を閉めていた。

後ろで吉田が驚いた顔をしている。

ドンドン。

「青髪、また会ったな。コイツらは青髪の知り合いか。それと、何故扉を閉めたんだ？ふむ、開かないぞ。」

『開かないようにしているんだよ！』

「……何て言ったんだ？青髪……あ。」

バキヤ！

——今、俺の手にはドアノブがある。

最初に言っておくが、俺が壊したんじゃない。

向こう側から変な音がしたと思うと、既に俺の手にあった。

どんだけ馬鹿力なんだよ、オイ。

……そういや、まだ四人があっちにいたな。

このままじゃ、四人が危ない。

あの源希が固まっていたんだ。

外人は何かやったに決まっている。

扉の向こう側で、トントんとノックの音が。

「吉田先生、すまない。ドアノブを壊してしまった。

青髪、怪我はないか？」

吉田が立ち上がり、扉とドアノブを確認する。

サアア……と元々顔色が悪いのに、更に青くしてしまった。

プルプルと震えた指先でドアノブを指差す。

「これ：黒澤、が？」

『黒澤って、あの外人ですか？』

「おい、自分の話しをしているのか？自分にもわかるように話せ。」

『You not speak, now.

（お前今は喋るな。）

お前ら四人！靴を履き替えたら校門集合！俺は窓から行く！

源希！三人を任せたぞ！』

「あ、ラジャー！！

みんな行くぞ！

茶矢は俺の手離すなよ！足遅いんだから！！

真尋は友恵ちゃんの手を引いてやって！」

源希達の足音が遠ざかったのを確認してから、俺は吉田に振り返る。

ポン、とドアノブを渡してから窓に足をかける。

『先生、後は任せます。

じゃあ、さようなら。』

「あ、ああ…。」

吉田はドアノブを持ったまま頷く。

生徒指導室は一階にあり、窓の下は地面になっている。

俺は窓から飛び降りると、急いで下駄箱に向かった。

中編（GW前）

——校門から病室まで走った俺達は、息を切らしながらうなだれていた。

『ゼー…ハア…お、おい……』

「な、何…？…正軌兄…ハア…ツク。」

『…全員、いるか……？』

…ッハア、…神崎さん（担当の看護士さん）が、来る前に、…それぞれ言い訳、考えておけ。俺は…着替える。』

「わ、わかりました…。」

「疲れたあ……」

「ハッ…ハッ……（コクリ）」

「い、行つてら……」

出来れば、早く戻って、ね……」

着替えを持って、トイレに行く。

Tシャツとジャージに着替えていると……ある事に気づく。

外人の話のせいで忘れていた事。

『やべ…筆箱忘れた。』

取りに行かねえと…。』

また制服に着替える。

最近走ってばかりだな。

…何故だろう、考えたら駄目な気がする。

ガラッー！

扉を開ければ、目の前に女性が立っていた。

目線を下に向ければ……笑顔の神崎さんが。

サアアア……と血の気が引く感覚が。

ベッドの方を見れば、四人が床に正座して顔を床に向けている。

き……来た。

ナース服を纏った般若ハンニャが、もう来たんだ！

あいつらの姿を見るあたり、言い訳は出来なかったらしい。

……さて、俺の選択肢は三つある。

一・逃げる

二・扉を閉める

三・謝る

一は無理だろう。

あいつらを置いて逃げる事は出来ない。

それに、神崎さんから逃げる事は不可能だと思う。

二は、最終的に開けないといけないからダメだ。

閉めるは良いが、その間に扉越しに延々と冷静に説教をされる恐怖。

顔が見えないからこそ、余計神崎さんの言葉の威圧がのしかかる。

……残るは、三。

1番マシな選択肢。

この人の笑顔が変わる前に謝った方が良いと学習した。

『……すみません、また走りました。

理由は…あいつらから聞きましたか?』

「いいえ、聞いてないわ。

正当な理由なら考えてあげるわ。さあ、話して。」

『えと、実は……』

後ろ頭に手を当て、しどろもどろ話そうとすると低い声が。

「……シャッキツつとせんかい餓鬼が。」

ボソツと笑顔のまま言われるから、余計恐い。

『すみません…』と手を下ろすと、後ろでガラツと扉が開く。

片手に荷物を持った、空気が読めない母さんである。

助かった! と思いきや、母さんは神崎さんを見てニツコリ。

「あらあら、お邪魔だったかしら。

じゃあ、あたし売店見ているから終わったら読んでちょうだい。」

ピシャンー!!

……オ、オイイイイイイ!!???

母さん!? 今の母さんだよね!? 皮被った誰かじゃないよね!!?

何で今空気読まなかったの!? 母さんなら普通読めないよな!?

今まで俺達には“わざと”空気読まなかったの!?

神崎さんの前じゃ空気読むの！？読めたの！！？

色んな疑問が頭を埋める中、神崎さんは再び声を低くする。

「早う話しいやクソガキが。」

仏の顔も三回までって限度あるんは知っとおやろ。オイ。

マッズイ病院食、食わずぞボケ。」

『……すみません。』

俺は頭を下げてから、学校から病室を走ったまでの経緯を話した。

話している途中、足が痺れた源希が足を崩してパアァン！！と頭を叩かれていたのを見て、四人は背中に嫌な冷や汗を流していた。

「じゃあ、明後日あたり退院だから。また何かやったら………ね？」

ガララ…ピシャン。

——ハアアア……。

四人は嵐が過ぎ去ったのに安堵して、力無く横たわった。
この病院で1番権力を持っているのは、神崎さんではないだろうか。

この前、廊下で医者が神崎さんにペコペコと腰を低くしていたのを見かけた。

年輩の医者も一緒に。

俺が、絶っ対にあの人には逆らわないのが身の為だと再確認した瞬間だった。

何故俺の担当なんだろうな……高校生だからだろうか？そんなのが理由だったら、もう一年早く産まれれば良かったな。

壁に背を預けて天井を見上げると、茶矢が視界に入る。

茶矢はもう何時もの表情で、俺に手を差し延べる。

「すみません、正軌先輩だけに話させてしまっ……」

『ああ……いいいいいよ。』

神崎さんも今回は許してくれたし、お前らが無事だったから、良しとする。』

よっ、と茶矢の手を借りて立ち上がる。

空はもう大分暮れていた。

時間というのは早いものだ……。

制服の乱れを直すと、茶矢が気づいたように話しかける。

「正軌先輩。何故、制服なのですか？着替えたのではないですか？」
『ん？あ……学校に筆箱忘れてな。取りに行かねえといけないんだ

わ。』

「筆箱くらい、明日でも良いのでは？」

『ま、直ぐ戻るから大丈夫だよ。』

真尋達の事、頼むな。』

茶矢の肩をポン、と叩いてから病室を出て行った。

母さんと神崎さんに出かけるよう伝えてから、暗くなる前に帰ろうと早足で学校に向かった。

――

：学校に着いた頃には、夕暮れになりかけていて、職員室にいた吉田に頼んで生徒指導室を開けてもらった。

テーブルの下についているパイプの上に置かれた筆箱を見つけて、ホッと一安心する。

筆箱を片手に吉田に礼を言ってから、部屋を出た。

―そして、今日こそあの自販機で買ってやろうと、靴を履き替えてから自販機のある場所に向かう。

一度でもなっchanNを買えれば、俺の勝ち。

頭の中で変なルールを作って、不適な笑みを浮かべながら歩いて行く。

不審者だと言われたら否定出来ないくらい、怪しいオーラが出ている。

自販機が見えて、財布をポケットから取り出すと……自販機にもたれ掛かっている人影を発見する。

もう部活のある生徒でも帰っている時間帯に……誰だ？

あのネクタイの色は三年生か……ん？目が合った。

――ズザッ！

夕日の光で顔が見えにくかったが……よく見れば黒澤ではないか。相手も俺の存在に一瞬驚いた顔をしたが、立ち上がるや否や、俺の手首を掴む。

ずいっと綺麗な顔を近づけて、眉間に皺を寄せる黒澤。その顔は、何故か悲しそう。

「……青髪……青髪は自分が嫌いかな？」

突然そんな事を言い出す黒澤。

突然そんな事を言われ、目を見開く俺。

薄い黄色の瞳が、俺の目を捕らえて離さない。

俺が返事をする前に、黒澤はまだ話を続ける。

「何故、自分を中に入れてくれなかった。自分は青髪に何か嫌な事をしたか？何故、逃げた？」

…自分は何を間違った。教えてくれ、青髪。」

ギリツ、と手首を強く握り締める黒澤。

あまりの痛さに、顔を歪める。

黒澤はハッ！と俺のそれに気づくと、手首の力を弱める。

だが、手首は掴んだまま。

申し訳なさそうに顔を反らす。

…コイツは、悪気があってしているんじゃないんだ。

あの時、俺達が逃げた事に傷ついているのか…。

俺はポケットに何か書く物を探す。

英語が書いても、やはり日本語の方が早い。

一々考えていると時間がかかってしまう。

こういう時に、携帯電話があれば便利だと思う…。

俺がポケットをまさぐっているのに気づくと、黒澤は首を傾げる。

「何か搜しているのか？何を探している、言ってみろ。」

『あー：pen and paper, please.

（ペンと紙をくれ。）』

ジェスチャーを入れながら、黒澤に頼む。

すると、俺の手首を話して携帯電話を渡す。

「書く物が欲しいんだろう？これでダメか？」

『Thank you.』

（ありがとう。）』

たまに源希が使っているのを見ていたから、操作くらいはわかる。カチ…カチ…と文字を打っていると、黒澤が横から覗きこんでくる。

「打つのが遅いな。使った事がないのか？」

『：Yes. I am to blame for it.
（そうだよ、悪かったな。）』

「いや、謝らなくて良いのだが…すまない。」

黒澤が難しそうに考える間に、俺は打ち終えた。文章を書いた画面を黒澤に見せる。

「俺の名前は宮古^{ミヤコ}だ。」

昨日のは、色々あって逃げた。

…悪かったな。」

一通り文章を読むと、また首を傾げる。

「コレはどう読むのだ？」

“色々”を指差して質問する黒澤。

…これは意味も教えないといけないか。

カチカチと地味に打っていくと、教師に見つかった。

「君達、そこで何をしている？そろそろ門が閉まるぞ。」

『あ、すみません。』

今すぐ出て行きます。』

「宮古、何を話している…」

パシ。

一々説明するのが面倒なので、黒澤の手首を掴んで『Come on.（ついて来い。）』と一言伝えてから、歩き出した。

それ以上何も言わず、黒澤は黙って俺の後を歩いた。

……さて、面倒だから病院連れて行くか。

中庭なら大丈夫だろうし。

その前に、黒澤の家は何処だ？

「お前の家ってどっち方面？」

「先程通り過ぎた。」

「そうか。」

門限とか決まってるか？」

「いいや、決まっていない。」

宮古、自分達は何処に向かって歩いているんだ？」

「病院だ。」

ちよっと訳ありで、今、入院している。もうすぐ退院するけどな。」
「病院？あの大きい病院か？」

黒澤が指差す先には、俺が入院している海東総合病院が。
空はもう暗い。

病院に入って行くと、病室で源希達の手を振っているのが見える。
だが、その顔も黒澤を見たのか源希でさえ引き攣っている。

「黒澤：お前、あいつらに何をした？」

「あの子達は、宮古の友人らか。」

あまりにも耳障りだったので、脅して黙らせた。」

「暴力はしてないだろうな？」

あいつらに何かしたら許さねえぞ。」

「安心しろ。英語で脅し言葉を並べただけだ。」

あの子達の反応を見るなり、理解は出来なかっただろう。」

「：：：そうか。」

中庭のベンチが使われていたので、仕方なく病室に連れ込んだ。

病室には、四人と母さんが待っていた。

四人は黒澤を見るなりズザッと間を置いたが、母さんは『あらあら』と黒澤をジロジロ見る。

俺が黒澤の手首を掴んでいるのを見て『あら、仲が良いわねえ。』
と言い出すもんだから直ぐに離れた。

『母さん、明後日くらいで退院するって神崎さんから聞いた？』

「ええ。だから、そろそろ荷物を持ち帰ろうかと思ったけど、着替えと勉強用具くらいしかないから、正軌の顔見てから帰るつもりだったのよ。」

それで、お隣の外人さんは？」

『今度、俺のクラスに転入する事になった黒澤。

帰りに偶然会って話してたんだけど、途中で門が閉まったから連れて来た。』

「この人、俺の母親。」

「初めまして。Meshiah Kuroshawaです。
漢字では黒澤 明詩阿です。」

俺から携帯電話を取って、母さんに見せる。

何時の間にか集まっていた四人も、携帯電話の画面を除く。

「くろさわ…めいしあ？」

「メシアだ。メシアと読んでくれ。」

「あらあら、綺麗な名前ねえ。」

私は正軌の母親の、宮古 とも美よ。よろしくねえ♪」

俺が母さんが言った事を黒澤の携帯に打って、翻訳する。

黒澤はそれを見ると、母さんに握手しながら『ありがとう。』と嬉しそうに口にする。

母さんの勢いに乗って、茶矢が自己紹介をする。

「My name is Mizuki Saya.

(私の名前は水木 茶矢。)」

「ま、My name is Kubota Mahiro.

Nice meet you.

(ボクの名前は窪田 真尋。よろしく…)」

「My name is Minaduki.

Nice meet you.

(あたしの名前は皆月。よろしく。)」

「My name is Miyako Genki!

I'm he brother.
Nice meet you!

（俺は宮古 源希！兄貴の弟だ。よろしくな！）
「よろしく。」

母さんが家に帰った後、ベッドを挟んで右に黒澤、左側に茶矢と真尋と皆月。

俺の正面には源希といった並びになった。

源希は慣れたらしいが、三人はまだ黒澤を警戒しているらしい。
今度こそ着替えて、制服をハンガーにかける。

ベッドに座ると、四人の視線に挟まれる。

俺は源希に携帯を借りると、カチカチと文字を打つ。

「先程“色々”は“イロイロ”と読む。意味は辞書でもひいてくれ。」

「わかった。」

ところで、この子達は どうして自分を睨んでいるのだ？

「黒澤が廊下で話した事を思い出せ。」

理解出来ない言葉で話しかけられたら、さすがに警戒するだろう。」

「そうか。」

君達、悪かったな。」

ペコッと頭を下げる黒澤。

それにギョツとした顔をして、俺に何があったか説明を求める皆月と真尋。

俺が二人に説明していると、茶矢が俺の携帯画面を覗く。

画面に並んだ文章をザッと見てから俺の手に携帯を戻し、懐から携帯を取り出し文章を打つ。

「日本語なら通じますか？」

俺より早く文字を打ってから黒澤に見せる。

黒澤がコクンと頷くと、また文字を打つ。

「私は英語が苦手なので、このように会話させていただきます。

突然ですが、あの時廊下であなたは何と言ったのですか？」

「ああ。それはだな…」

口を開いた黒澤の綺麗な発音からは似合わない、汚らしい言葉の数々に、黒澤以外の五人が一時フリーズした。

平然とした顔で言うから、更に引いた。

最初に現実に戻った俺は、理由を四人に話す。

理由を聞くと、四人はそれぞれ違う反応を示す。

「煩くてすみませんでした。」

「ご、ごめんなさい…。」

「英語で話さないで。」

私、日本語しか理解出来ないから。」

「悪かったな（笑）」

これからは気をつけるよ。」

「いや、冷静に考えれば自分も言い過ぎた。すまない。」

何とか和解したらしい………が、皆月はまだ気を許した様子はな

い。

普段なら積極的に話すのに、俺達が会話していても何も話さない。つまらなそうに外を見ている。

『皆月、どうした？』

四人が会話をしている中、俺はベッドの上を移動して皆月と話しやすいように近づく。

皆月は不満そうな顔のまま、プイッと顔を背ける。

「べっつに何もありませんよ。ただ、わざわざ携帯使わないと会話出来ないって面倒だから、話しに入らないだけです。」

此処は日本なのだから、外人は日本語を話せて思うんですよ。」

『それにしては、つまらなそうにしているな。』

そんなに黒澤が嫌か？』

「そんなんじゃないですよ。」

あー、もう暗いから帰りますね。」

ガタッ。

皆月が席を立ち上がると、真尋も黒澤に何か伝えてから帰りの支度をする。

茶矢も外を見てから、帰りの支度を始める。

源希が「時間は大丈夫？」と黒澤に聞くと、黒澤は「問題ない。」と頷く。

三人を見送ってから、三人で面会時間ギリギリまで会話した。俺は黒澤の携帯を借りて会話をする。

「何故、日本に来たんだ？」

「家の都合でな。」

今は、日本人の叔父の家に居候させてもらっている。」

「メシアの家族は？」

「ちよつとな…今は母国にいる。」

宮古は最初に比べると、打つのが早くなったな。」

「そりゃどうも。」

お前らも、そろそろ面会時間終わるから帰れ。」

「もうそんな時間か。」

では、帰ろう。」

「俺も帰んね。」

メシア、I'm back together!

（俺と一緒に帰ろ！）」

「ああ。」

仲良く帰って行く二人の背中を見送って、俺はベッドに横になった。

こういう時に、あいつの人見知りがないのは有り難い。

もしあいつがいなければ、他の三人も黒澤と一言も話さずに気まぐずい空気のままだっただろう。

人懐っこいヘラヘラした顔は苛とする事も多いが、今回は感謝せざるしかない。

一等星しか見えない星空を見上げて、ある決意を口にする。

それは、今まで触れてこなかった事。

逃げ続けていた事。

『…予定通りだと、GWが始まる日に退院か。』

——その前に、お見舞い、行かないと……散々避けていたから、な。一度くらい、様子見に行かないと……ダメだろ。

……一応、彼氏だし。』

震える拳を握り締め、今はただ、その時の為に眠りに落ちた。

中編（GW前）（後書き）

何とか五人とメシアを絡ませられました。

ふう、一安心一安心。

こちらはもう直ぐGW。話は既に考えてあるんだぜ…へっへっへっへ（笑）

まだまだ続きます。

中編（名前と演奏会）（前書き）

GW前日のお話。

今回メシアは登場しません。

すみません、美形いないです。

代わりに、見えない奴いますけd（（撲殺

では、

「えー、メシアいないのお？つまあんなあいなあ…。

でもお、新人さん気になっちゃう感じい？だからあ、見てあげよ
っかなあ♪」

という方はドゾ↑

すみません、普通の一般人の方もどうぞ。

↓

中編（名前と演奏会）

「正軌先輩。」

GW前日。

移動教室なので廊下を歩いていれば、最近では声だけでわかるようになるくらい聞いている、凜とした女性の声。

歩くのを止めて振り向けば、俺より頭二つ小さい茶矢が片手にケースを持って立っている。

教科書などを持ってないあたり、茶矢も移動教室ではないらしい。源希達もないしな。

通行の邪魔にならないよう、使う人が滅多にいない屋上の階段に移動して腰掛ける。

茶矢もケースを両手で抱え、ちょっと間を置いて隣に座る。

茶矢の顔と視線は斜め下の床に向けられる。

『茶矢が一人でいるって、屋上以外じゃ初めてだな。俺に何か用か？』

「実は、長々と延期になっていたピッコロの演奏を、正軌先輩がよろしければ今日の昼休みに屋上でやろうかと思いましたが。」

『……ましたです、ってオイ。日本語おかしいぞ。』

そうか、すっかり長引いちまったもんな。何度か楽器を持って来てくれてたけど……悪かったな。重かったろ？』

「いえ、他の楽器に比べれば、ピッコロはまだまだ軽いものです。お願いですから、謝らないで下さい。」

ただ…私が演奏したいだけなのですから。」

ケースを膝に置いて、俺を見上げる茶矢。

その表情は、何時にも増して決意がこもっていて、眉間に若干皺が寄っているのが残念だ。

それに、少し顔が赤いんだが……夏風邪か？茶矢は無理するタイプだから、周りがブレーキ止めてやらないと。

愚弟は気づかなかったのか？

ピタ。

『茶矢、顔が熱いぞ？夏風邪でもひいたか？』

茶矢の前髪を上げて、額に手を当てる。

反対の手は俺の額に当て、互いの体温を確かめる。

男の方が体温高いから……ちと茶矢のは熱いかな。

額から手を離すと、目をパチクリさせる茶矢の顔。

ちよつと笑えるが、拗ねられたら大変なので堪えておく。

『少し熱いから、無理はするなよ。後少しで昼休みだから、演奏は体調の良い時に……』

「いえっ！私は大丈夫です！

だから、今日の昼休み、屋上で待ってます！！」

タタター、とケースを抱えて走り去る茶矢。

何時もよりも早く走っていると思うのは俺だけだろうか？

そして、逃げるように走って行った気もしなくもない。

……そんなに、俺に触られたのが嫌だったのか？……軽くショックだ。

『あ、そろそろチャイム鳴るな。急がねえと。』

階段から腰を上げ、遅れないように早足で教室に向かった。

——キーンコーンキーンカーン――

昼休み。

学校に行く前に家に寄って、母さんが作った弁当を持って屋上に向かう。

この学校にも売店もあるのだが、菓子パンやコンビニで売っているようなおにぎりなどしかない為、母さんの弁当が1番良いのだ。しかも美味しいな。

そして：今日の帰りこそ、あの自販機でなっchanNを買ってやろうと、ひそかに決意している平和な俺。

一般生徒が例の自販機で買っていたのだから、余計闘争心が燃えたのである。

変なプライドで自販機に敵対心を抱きながら、屋上の扉を開ける。

そこには、ピッコロを両手にフェンスにもたれ掛かり、茶色の髪を風に靡かせている茶矢の姿が。

肩よりほんの少し上のショートヘアが風に遊ばれているみたいに見える。

茶矢は俺の姿を確認すると、テテテという効果音が出そうな感じでコチラに小走りする……が、

ガチッ！

「つて！」

『おっと！？』

足を絡ませてコケた茶矢の手からピッコロが飛んできて……無意識にそれをキャッチしていた。

茶矢はムクリと上半身を腕で持ち上げるが、顔は俯いたまま。プルプルと体が羞恥で震えているのが痛いほどわかる。

恐る恐る茶矢の状況を確認める。

『茶矢：ほら、立てるか？』

誰にでもコケる事はある。そんなに恥ずかしがる事はないぞ。誰にも言わないでおくから……な？』

「……大丈夫です。」

ありがとうございます。」

俺の手を掴む茶矢の手をグイッと引き上げる。

しゃがんでパンパンと膝についた汚れを払ってやっていると、ギョッとピッコロを握る手が見える。

顔を上げると、唇を噛み締める茶矢の真っ赤な顔。口には出さないけど、よほど恥ずかしいらしい。

大分払い落としてから、クシャリと頭を撫でてみる。

『茶矢、弁当は？』

「あそこに…。」

茶矢が指差す先を見れば、扉付近の日陰に弁当箱一つとなつち
a n N が二本置いてある。

なつ c h a n N は自販機に売ってある種類のだ。

二本あるって事は、わざわざ買って来てくれたのか…。

『俺、腹減ったから先に飯にしないか？あの日陰で一緒に食べるか。
茶矢の演奏は何時でも聞けるしな。な、どうだ？』

「……わかりました。」

シヨボンと肩を落とす茶矢の背中をポンと叩いて、日陰に移動した。

正座した膝の上に明るい色の弁当箱を広げる茶矢。

弁当箱の中は、可愛いオカズなどが並べられている。

女の子らしい弁当だ。

茶矢の弁当は“和食”ってイメージだったので内心意外だった。
病室で食べていたけど、人の弁当なんてジロジロ見ないし、誰かと
屋上で食べるなんて初めてだから、ちょっと新鮮だ。

けど、もともと弁当を食べる茶矢は、普段より暗い。
それに内心苦笑。

『ほら、茶矢。好きなオカズ取っていいから元気だせ。』
「すみません：では、卵焼きを。」

箸で卵焼きを挟んで、箸で小さく切ってから口にする。
口にした瞬間、驚いた顔でバツ！と俺の顔を見る。

「正軌先輩：甘い物、苦手では？」

『母さんの卵焼きだけは、どうも平気なんだよ。昔っから食べているからだろうな。』

「どうだ、美味しいか？」

「はい。とても美味しいです。」

味わうように噛み締める茶矢に、そんなに美味しいかと小さく笑う。
俺も弁当を食べると、茶矢が弁当箱を差し出す。

ん？どうしたんだ？

「貰ってばかりではあれなので、私のからもお一つどうぞ。」

『いや、良い。茶矢はいっぱい食べて大きくなれ。』

「これ以上は横にしか伸びませんので、お気遣いなく。」

さあ、どうぞ。」

先程とは打って変わって、強気で弁当を押し付ける茶矢。
仕方がないので、俺は適当に卵焼きを箸でつまむ。
熱い視線を向けられてる中、俺は卵焼きを口にする。

パク。

—……ん、ダシ巻き卵焼きか。
柔らかくて食べやすい。

『ダシ巻き卵か。』

「はい。味は……いかがですか？」

『うん、美味しい。』

ダシ巻きは初めて食べたが、柔らかくて食べやすい。味も好みだ。』

「……………よし。（グッ。）」

小さくガッツポーズをする茶矢に気づかず、俺は弁当を食べる。

二人でポツリポツリと話しながら食べていると、気づけば弁当が空になっていた。

弁当箱をしまって隣に置けば、茶矢からなっchanNを渡される。

「売っている自販機を偶然見つけたので、ついでに買ってみました。」

『…ありがとな。』

なっchanNを受け取り、一口それを口に含む。

スクツ、と茶矢が立ち上がったと思えば、ケースから楽器を取り出す。

カッカツと日の当たる場所まで歩いて行けば、くるつと振り返る。
ピシッと背筋を伸ばし、ペコッと頭を下げる。
スツと頭を上げると、目線が合う。

「大変長らくお待たせ致しました。本日の演奏は、私、水木 茶矢がさせていただきます。」

『おおー。』

パチパチパチ…！

いかにもコンサートっぽい物言いに、演奏の期待も高まる。
ピッコロを片手に、目を閉じて、口で深く深呼吸を繰り返す。

緊張しているのだろう。

茶矢がリラックスするまで黙って見守った。

「…では、先ず初めに有名な曲から一つ。

“キラキラ星”を。そこから続けて二曲。」

ピッコロの先を軽く口にくわえ、肩で軽く深呼吸。

シン…とした空間に、初めて聞く綺麗な音色が響く。

音楽の時間に聞いたモーツァルトの“キラキラ星”。

先生がピアノで奏でているのと、ビデオでしか聞いた事がない。
初めて聞くピッコロでの演奏は印象深く記憶に刻まれる。

小学校で聞く短いものではなく、原曲での演奏だ。

リズムよく音が流れる。

“キラキラ星”が終わったと思うと、すぐまた違う曲が流れる。

俺の知らないクラシックの曲だと推定される。

俺が知らないとわかっていたから曲名を言わなかったのか。

言われても理解出来ないものな。

茶矢の真剣な表情が曲に合っていて、茶矢の周りだけ空気が違っ

て見える。

茶矢の違う一面を見た気がした。

何も考えず、音楽に耳を傾ける…

場所を問わず、それはとても心地良い感覚に包まれる。

（おい正軌。）

『！！？』

バツ！

頭の中で、声が聞こえる。

今1番聞きたくなかった声。

嫌な声。

耳障りだ。

今出て来るなよ…空気読め。

お前誰だよ。

俺から出てけ。

（冷たいねえ。

何年お前と一緒にいると思ってるんだよ。）

知らねえ。

名前教えろ。

呼ぶのに不便じゃねえか。

（お、俺が居ても良いつて事かい？
けどなあ、残念な事に名前ねえんだよ。）

お前、消えろつつつても消えねえだろ。

今すぐ消えれたら今すぐ消えろ。

耳障りな声出すな。

しかも名前ねえのかよ。

不便だな、今すぐ決める。

（今すぐ決めろつてえ言われてもなあ…困ったもんだ。

正軌、お前つけてくれよ。俺ネーミングセンスねえからさ。）

俺もねえぞ。

お前がよく知っているだろうが。

あー……面倒。

短いのが良いな。

（ギャハハ！！酷えな正軌！

もう、何でも良いぜ。正軌が決めてくれや！）

んー……あ、クソ、お前。

茶矢の演奏、終わっちまったじゃねえか。

最後の曲、半分も聞けてねえ。

せっかく体調悪いのに演奏してくれたのによお。

馬鹿野郎。

馬鹿阿呆KY（空気読めない）。

（へーへー、悪かったですね。

ったく、鈍い野郎に言われたかねえよ。正軌ちゃん？ヒヤハハハ

！！）

お前、精神科行って消却してやろうか。
あの自販機並にムカつくわ、お前。

脳内で会話していれば、茶矢が俺の前に立っていた。
ジッ、と見つめている。

俺はパチパチと拍手してから、軽く笑む。

『茶矢って独学だろ？音楽とかよく知らないけど、凄いい良かった。
ありがとな、茶矢。』

「ほ、本当ですか？お世辞とかは嫌ですよ。」

『茶矢にお世辞なんか言うわけねえだろ。』

知らない曲だったけど、俺は三曲とも好きだな。』

ワシャワシャと頭を撫でてやる。

茶矢の髪はサラサラしていて、見た目が何だか小型犬っぽいので
思わず撫でてしまう。

俺が撫でると決まって俯くから表情は見えない。

（あれれー？最後のはあんまし聞こえなかったんじゃないかな
けえ？）

お前のせいだな。

出だしが印象的だったから、それだけは覚えてるんだよ。

あ、そうだ。

茶矢から手を離して、ある事を聞いてみる。

『茶矢はさ、もし「名前をつけてくれ」って言われたら、何てつける？』

「…名前、ですか？性別にもよりますが…」

おい、お前。
性別教えろ。

（知らね。原形がないんだから、性別なんて決まってねえんじゃないの？）

俺が知るかよ。
話し方とか考えて、お前“男”な。
はい、決定。

（何でも良いっての。）

考えてるフリを止め、茶矢に向き直る。

『男、かな。詳しく言えば、口が悪い奴。』
「うーん……」

目の前で真剣に考えてくれる茶矢。
茶矢のネーミングセンスにも期待大だな。
ま、何であっても決定するけどな。
これ以上コイツの為に時間使うのは癪だし。

——キーンコーンキーンカーン…

『「あ。」』

昼休み終了を告げるチャイムが鳴る。
茶矢と見合って、どうするか考える。

『……ま、そんなに急いでないし、今度で良いか。
んじゃ、教室行く……』

「あ、あの！」

弁当を持って立ち上がる俺のワイシャツを捕まれる。
ピッコロが入ったケースを抱えて、何か言いた気な顔を見せる。

『どうしたんだ？』

「あの、ネーミングセンス皆無ですけど、それでも良いですか？」

カアア…と赤面しながら、掴んだ手に力を込める。

そこまで赤くしなくても、ポチでもタマでも何でも良いんだけど
な。

（オーイ正軌くん？）

あーあー、何も聞こえない。

俺は何も聞いてない。

茶矢はズイッとピッコロを見せて、言った。

「ピッコロに因んでなんですけど、

“……ピロ”、
「はどうですか？」

——ピロだつてさ。

こんな奴の名前が“ピロ”だってさ……ククク。

口元を手で抑え、笑いを押し殺す。

やべ、面白過ぎて涙が出てきた。

茶矢最高だわ……ピロ……クツクツクツ……

『あー…ちよつと待ってな。ピロ…うん、凄く良い。』

茶矢のセンス、最高だわ。フッフツ…。

「それにしても笑っているように思えますけど…」

『いや…な。あいつがどんな顔するかと思うと、さ。…プツ。』

さ、教室行くぞ。」

（俺がピロとか：ウケるうー！！！！）

ギヤハハハアハハハ！！！！

俺も気に入ったぜえ、嬢ちゃん！ ナイスネーミングだ！ ヒヤッハハ
ハア！！！）

黙れ、ピロ野郎。

頭の中で煩く笑う野郎を無視して、茶矢の背中を押して先を促す。

——キィ、ガチャ。ドツサァッ！

「「「!!?」」」

『「……。」』

——扉を開ければ、聞き耳をたてていたらしい三人が床に崩れ落ちる。

三人は驚いた顔で俺達を見上げた後、顔を見合わせて苦笑い。

それを、冷めた目で見る俺と茶矢。

ピロは頭の中で爆笑してやがる。

煩え：頭痛えわボケ。

その後、逃げた三人を茶矢が追いかけて、俺は一人教室に戻って行った。

…ハァ。

俺にマトモな時間はないのか？

中編（名前と演奏会）（後書き）

何か突然“ピロ”登場。

名前が決まった方が、後の展開も効率良いかと思ひましてですね、はい、今決めましたすみません。

GW突入する前に、茶矢の演奏ついでに決めました。うん。よしよし↑

茶矢のピッコロの腕前も（多分）表現出来たし、満足っちゃあ満足だ。

まだまだ続きます。

中編（GW）（前書き）

GWに突入する前のお話〜GWのお話。

最初に『え？終わるの？』ってなるかと思いますが、すいませんまだまだ続くんですよ（笑）

では、期待ハズレのお話ですが、

『なんだよ！終わらねえのか！！ケツ！』

って怒らない方以外はどうぞ。

↓

中編（GW）

―海東総合病院2091号室。

神崎さんやナースの人には聞けないから、源希に聞いて知った。
今日は、源希（家族）以外は来ないように言ったから病室には源希以外来ていない。

『心配だから』と言ってついて来ようとする源希を説得させて、俺はこの病室の前に立っている。

――此処に、あの人がいる。
嫌な汗が流れる。

足が震えているのがわかる。

…正直、恐い。

今すぐ逃げ出したい。

一生来たくないくらい嫌だ。
トラウマにさえなっている。

―…けど、ただで行くしかないんだ。

『…よし。行こう。』

源希の話だと、一命は取り留めたけど眠ったままらしい。

目を覚まして、状態が安定したら精神病棟に移動するとか。

……あーもう、そんな事は今考える必要はない。
顔だけ見て、ちよつと寝顔見て帰ろう。

明日は、退院だ。

スウー…ハア…

深く深呼吸を繰り返す。

（俺様知ーらね。

頑張ってちょ、正軌ちゃん。）

昼間からよく喋るようになったピロの声が頭に響く。

この野郎…人がせっかく勇氣振り絞ってる時に。

…いかん、八つ当たりだ。

落ち着け、俺。

看護師さん達や患者の人達が不審がってきた。

そろそろ行かないと、神崎さんに病室へ連れ戻される。

ガシッ！とドアノブを掴んで、なるべく静かに勢いよく開く。

ガラッ！

扉を開けた先には……予想外の人物が座っていた。

『……あ、れ？』

「あら、正軌じゃない。」

母さんだった。

ベッドで眠る香織ちゃん横に置かれた椅子に座っている。
俺が入って来たのに驚いた顔はしないが、口癖の『あらあら』と
言いながら、もう一つ椅子を並べる。

「正軌も香織ちゃんのお見舞いでしょう？そんな場所に立っていないで、コチラに座りなさい。」

『う、うん……。』

促されたままに、椅子に座る。

花瓶に備えられた花を見る限り、毎日来ていたらしい。

ピッ、ピッ、と機械が一定の音を部屋に響かせる。

俺と母さんは特に何も話さず、眠る香織ちゃんを見つめる。

香織ちゃんの肩から腕、顔にも包帯が巻かれていて、見ているだけで痛々しい。

酸素マスクをつけていて、源希の話が真実である事を証明する。

隣に座る母さんは香織ちゃんの髪を優しく撫でながら、何時もの口調で話し始める。

「あんたの話、源希に話させたわよ。」

『…そう。』

「最初はその子が“絶対話さない！俺は正兄の弟だもん！俺達が口出しする権利はないんだよ！”って聞く耳持とうとしないから、源希が落ち着くまで父さんと説得し続けたわよ。もう、大変だったんだからね。」

ああ…だから母さん達は、俺に何も聞かなかったのか。

普段通りに接してくれていたんだ。

源希も変なトコ頑固だから、母さん達大変だっただろう。

…後で病室で待ってるアイツに何か買ってやるか。

後ろ頭をガシガシかいて、ペコツと頭を下げる。

『…ごめんなさい。』

「もう、良いわよ。」

源希の言う通り、第三者が口出しする話じゃないし、父さんとは“見守ってあげよう”って決めてるから。

…まあ、ほどほどに頑張りなさい。大怪我しなかっただけで、良しとするわ。」

『…ありがとう、母さん。』

「父さんにもね。」

『うん。』

親父には仕事がある為、仕事を終えて病院に着いた頃には面会時

間が終わっているのだ。

源希から俺の事を聞く親父の話を耳にしている。

親父の顔、最近見てねえな…母さんと源希がいるから、多分元気だろうな。

『親父：元気にしてる？』

さりげなく母さんに聞いてみる。

『お父さん？元気よ。』とケラケラ笑いながらの返事だろうと予測していたが、母さんは『それがねえ』と手をおばさんがよくするみたいに動かす。

「聞いてよ。父さんったら正軌の事を心配し過ぎなのか、忘れ物なんてあんまりしないのに、最近よくお弁当忘れて会社行ったり、新聞逆さに読んだり、お茶とお酒を間違って飲んだりと酷いのよお。一昨日なんか笑っちゃった笑っちゃった。

滅多にドジしない人なのに、閉まったままの扉にそのまま突撃してねえ。源希と二人で爆笑しちゃったわ。アハハハ！」

口元に手をあてて思い出し笑いをする母さん。

女性独特の高い笑い声に、間近で聞いた耳がキーンとする。

……前言撤回。

—親父、明日には帰るからそれまで頑張って。交通事故にはならないでね。

苦勞かけてばかりの息子でごめん。

そんなに心配するなんて、思ってたから……ごめんなさい。
俺が社会人になって給料貰えたら、二人で酒を飲みに行こう。
酒を飲みながら語り合おうか。

…その前に、家族で飯を食べれるようにしないとな。
逃げてばかりじゃあ、先に進めない。

—…うん、やらなきゃいけない事は数え切れないくらいある。
トラウマ克服は難しいと思うけど、やるしかない。

震える手を叱り付け、香織ちゃんの髪を一度だけ撫でる。
バツと直ぐに手を離れたが、一歩、いや半歩前進したな。
よし、よく頑張った俺。

『じゃあ、明日の用意終わらせるから、部屋に戻るね。』

「ええ。」

あ、源希に“遅くならない内に帰りなさい”って伝えといてね。
『わかった。じゃあ、気をつけて帰ってね。』

—ガララ…パタン。

タッタッタッタ…

正軌が行った後、とも美はクスリと小さく笑う。

「あんなに周りと距離を置いていた子が、今じゃ『気をつけてね』
ってあたしに言ってくれるまでに成長して…母さん嬉しいわあ。フ
ッ♪

表情も、昔と比べると随分柔らかくなったし、これもあの子達のおかげかしらね？

…あら、勿論。貴女も入ってるわよ。」

香織の両手をそっと包み込み、まるで会話しているように話す。

無論、返事が返ってくる事はない。

目を閉じたまま、呼吸を繰り返すだけである。

とも美は、それでも続ける。

「貴女が正軌のトラウマでも、あたしは貴女を嫌いにはならないわ。そりゃ、正軌も源希も大切よ？私の周りにいる人は、みんな大好き。みんながあたしを嫌いになっても、私は嫌いにならない。」

…それはね、香織ちゃん。貴女も例外ではないのよ。」

何度も何度も、とも美は家事で細くなった手で香織の頭を撫でる。金色の髪が、サラサラと揺れる。

「目が覚めて、元気になったら、あたしとまたショッピングしよう。ね？」

そうだ！帰りはあのカフェでお喋りして、戦利品を見せ合いっこしようか。この前食べれなかったケーキ、二人で半分個しましょう！」

一人愉快そうに話し続けるとも美。

香織の手にはお擦りをしながら、ニッコリ優しく微笑む。

「貴女も私の子供の一人よ。貴女の本当の親にはなれないけれど、あたし達は“親子”にはなれるわ。“親友”にもなれるの。正軌は嫌がるかもしれないけど、退院したら茶矢ちゃん達も誘って、河原でBBQしましょう。夏だから、花火もしましょっか。」

…とも美が語るのは、これから先の楽しい未来の話。
笑い声が絶えない、皆が笑顔の日常。

——ツウ：——

とも美の声が聞こえているのかはわからないが、香織の目元からは一筋の涙が流れ落ちた。

「……何で売店に？」
『何か選べ。』

俺は今、病院の1Fにある売店にいる。

病室に戻り源希に『ついて来い。』と襟首を掴んで連れて来た。

何が何だかわからない源希は、“？”を頭に浮かべたままオロオロしている。

何故この場所に連れて来られたのか理由を必至に考えているらしい。

意味ないから早く選べ。

俺を見るな。

お前は(多分)何もしないから早くしろ。

お前に感謝してって……

……理由なんか言えるか！

「(え、俺なにかしでかしたつけ？何でそんな怖い顔してるの？何でただで睨まれたの？俺、兄貴見たらダメなの！？それに、選べって……何？俺が選んだ物で殴られるの？俺、殴られるの！？何もしないのに殺られるの！！？)」

源希も源希で内心パニック状態だった。

……数10分後。

背後からの神崎さんの登場に、条件反射で売店から逃げ出した宮古兄弟でありましたとさ。

『……つたく、オツマエが早く選べば良かったんだよ!! 馬鹿野郎
おがぁ!!』

「知らないよ! それより何で急に売店連れ込んだの!? 選べって何
!?!」

『知るかあああああ!!……!!』

「えええええーっっ!!……!!??」

「ほら、病院で騒ぐな走るな、何回言ったんと思っとなるんやボケが。
あゝあゝんゝ?」

『「すいませんっしたあ!!……!!」』

二人は今日も仲良しです。

中編（GW）

——チュンチュン…チチチ…パタパタタ……

鳥が二羽、羽音をたてて飛んでいく朝の平和な日常。

日の光を浴びて目を覚ますと………ん？なんか前が暗い。

「おはよう、宮古。」

至近距離に綺麗な顔があり、覚醒しきれていない脳がゆっくり分析し始める。

淡緑の髪……ん、見覚えある。

外人に知り合い……いたな。

薄黄色の瞳の……おい起きろ脳みそ。

顔を近づけて話す奴って言えば、

黒澤 明詩阿。

パチ。

漸くお目覚めしたらしい。

まだ近くにある顔に、サアアと青くなる俺の顔。

「ふむ、聞こえているのか？」

宮古 正軌。おはよう。自分がわかるか？」

外人は己自身の胸に手を当て、尚も話し続ける。

『……お、お。』

「あ？」

『ギ
ャ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
！
？
？
？
？』

午前7時ちよつと。

海東総合病院に俺の叫びが木霊した。

皆さん：朝っぱらからすみませんでした。

悪いのはこの外人です。

どっから入って来やがった朝から驚かすな顔近づけるな叫ばすな
…これらを総合すると、黒澤馬鹿野郎。

駆け付けた看護師さん達に謝って、ゾロゾロ集まった患者の人達にも頭を下げ終えてから、ベッドに戻る。

黒澤とは距離を置いて。

「何があつた宮古。朝から凄いい叫び声だったな。」

キ
ユ
ツ
キ
ユ
キ
ユ

額の血管が浮き出て、はらわたが煮え躁り返りそうだったが、俺は売店で見つけた小さいホワイトボードに書いていく。

何回書いても消せるから便利なのである。

部屋に置いておけば、スケジュールにもなるしな。

ドン！

テーブルにホワイトボードを乗せる。

「目が覚めて間近に顔があれば、誰だって驚くわ。こんな早朝から一体何の用だ？」

「それはすまない。

クセ、だから自分にはどうしようもない。」

「そんな癖、心臓に悪いわ。早く治せ。

頼むからもう少し離れろ。最低15cmで。

それと腕を離せ。」

俺の腕を引っ張って近づかせようとする黒澤に対抗して、何とか踏ん張っている俺。

これで俺が負ければ、このままずっと黒澤の癖に悩まされると直感しての事だ。

グググ：と俺の腕をかけて引っ張り合いが行われるが、力で黒澤に勝てるはずがない。

腕の痛みに顔を歪めると、それに気づいた黒澤は力を緩める。

よしよしと腕を撫でる為、何も言えなくなってしまった。

「そういえば、自分が此処にいる理由だったな。」

返事の代わりにコクリと頷く。

まだ7時半くらいだ。

面会時間は詳しく知らないが、多分さつき始まったばかりだろう。朝一から俺に何か用件が？

黒澤は床に置いていた荷物を膝に乗せ、ポンポンとそれを叩く。

旅行鞆らしき大きなバッグ。
それがどうしたんだ？

「源希から誘われてな。まだ日本に来て日も浅いし、良い機会だと思っ
て甘えてみる事にした。」

GW中は世話になるぞ。」

『What? (何?)』

おい、誰か。

あの金髪頭の正しく(まさしく)“愚弟”って言葉が似合う馬鹿、
此処に連れて来てくれないか？

俺は何にも聞いてねえぞ？え？ええ？

俺だけ？俺だけが仲間外れなのか？全然話についていけないぞ。

意味がわからん。

『…どゆ事?』

「Do you koto?」

『違えよ。意味わからねえ。』

黒澤、お前、日本語勉強しろ。』

「“黒澤”と“日本語”は理解出来たぞ。」

「お前は日本語の勉強しろ。」

「少しずつだが、理解はしているぞ。」

これもフリーと叔父のおかげだ。」

——フリー？フリー（自由）？誰だそれ？
新しく出来た外人の友達か？

ま、それなら俺の平和な時間が増えるな。
有り難い有り難い。

さてと、片付ける前に着替えねえと。

こんな事で時間を使っちゃったから、もうすぐ母さん達が来ちゃう。

黒澤がいるから、トイレで着替えてこねえと。

ホワイトボードに書いたのを見せて、俺はトイレに向かった。

「着替えるから、座って待っている。」

ガシッ。

………一体、何故腕を掴むんだ？

何故立ち上がるんだ？

顔近づけるな。

会話するなら最低15cm！さっき言ったぞ！

神崎さん達が入って来たら変な目で見られそうだから止めてくれ！

「此处で着替えれば良いだろう。」

『は？』

何を言い出すかと思えば……は？何だって？

「男同士、気にする必要はない。俺は気にしないぞ。」

『いやいやいや、俺が気にするから。』

黒澤、腕、離せ。』

ジェスチャーを入れて言ってみる。

無理矢理にでも引き抜こうとすれば、俺の右腕がどうなるかわからない。

黒澤は理解したのか頷くが、腕は離さない。

……何故、今頷いた？理解出来てないだろ。

オイ。

『腕、離せ。』

「気にするなと言っている。早く着替えないと、約束の時間に間に合わないぞ。」

『What time? (何時だ?)』

「9時半。」

時計の針を見れば……まだ8時も越えていない。

叩いて(はたいて)やろうかこの頭。

そして、日本語を詰め込んで日本語理解できるようにしてやる。

……っだから、顔近え!!その癖も忘れさせてやろうか!?!今すぐ忘れろ!

しかし、黒澤は至って真面目な顔(何時も通りの顔)で俺を見つめる。

……よく見ると、黒澤って睫毛長いな……って違う違う。
ちよっと待て俺!!

黒澤のペースにのまれるな俺!

早く着替えるんだ俺！

…慣れてきた自分が恐い。

「腕離せ。」

「着替えるのか。」

「トイレでな。」

「宮古も頑固だな。」

「お前ほどじゃねえよ。」

——ガラッ！！

一向に譲る気配のない頑固な黒澤とホワイトボードで口論をしていると、病室の扉が開く。

二人して開いた扉の方を見れば…………

……神崎さんが笑顔で立っていた。

俺の腕を掴む黒澤。

それを拒む俺。

何やら揉めている様子。

至近距離に顔を近づけている現状。

…そして、神崎さんの笑顔。

ヤ バ イ 。

：これ、絶っつつ対いに神崎さん誤解してるよね？
俺が神崎さんの立場だったら絶対誤解して扉閉める。
そして逃げる。

けど、神崎さんは立っている。
後ろに般若が見えるけど、凄っつい笑顔で俺達を見ている。
変な汗が出てきた。

「おはようございます。」

何呑気に挨拶してるんだよ。
緊張感持て、肌でこの嫌な空気を感じろ。

お前のせいでこうなったんだよ！

「おはよう。正軌君を起こしに来ただけど……お邪魔だったかしらね。」

また後で迎えに来るわね。」

——スッパアアンツツ！！

『「……………」』

物凄い音をたてて閉まる扉。

神崎さんの腕が一瞬早過ぎて見えなかった。

——何あの人。

ただの看護師じゃないだろう？昔、何かやっていただろ。

まさか、元ヤ○ザ？いや、神崎さんなら有り得る。

背中に入れ墨あってもおかしくない。

……………って！ちょっと待って神崎さん！！勘違いで
すよ！！？

『神崎さ…！』

「あのナースは何を話していたんだ？」

ヒュ——スッパアアンン！！！！

『お前のせいで変な誤解が生まれたんだよ今日退院なのに！！今後
一切俺に触るな日本語理解しろ馬鹿野郎！！！！』

バツ！！

黒澤の後頭部を平手打ちして、理解出来ないのがムカつくが、日本語で怒鳴ってやった。

力が緩んだ隙を見て、腕を引き抜きトイレに行く。
トイレのドアを閉める時、ほんの僅かに黒澤の顔が見えた。

……初めて見た、あんな顔。

『…っふん、早く着替えて支度するか。』

俺はその時、黒澤の顔を見なかった事にしたのだ。
…したかったのだ、自身の非を認めたくないから。
俺もまだ子供なんだよ。

—コンコン。

控えめなノックの音。

聞かなくても、誰だかわかる。

少し間があった後、ノックと同じ弱々しい声が向こう側から聞こえる。

もうとっくに着替え終わっていたが、言葉を待つ。

「Mashakii—sorry—sorry,

(正軌…ごめん…ごめんなさい、)」

…声が、違った。

さつき暫時だけど見た表情と同じ、酷く何かに怯える声色。
必至に、何かに縋る奴の声。

「s o r r y s o r r y」（ごめんなさい…ごめんなさい…
…）」と何回も謝り続ける。

扉の向こうで幻像が映る。

泣いて謝る…眠っている人が。

ガラッ！！

思わず扉を開けた。

驚いた顔で見上げる黒澤が、次第に泣きそうな顔で俺の両腕を掴む。

消え入りそうな声で、同じ言葉を呟く黒澤。

見ているコチラは痛々しさに目を背けたくなるが、する事は許されない。

同じ身長なのに、黒澤がとても小さく見える。
腕を握っていた手が、俺の服の裾だけになる。
身体が、小刻みに怯えを表現する。

『――黒澤、』

肩に手を置いて語りかける。

しかし、黒澤は握っているのとは反対の手で耳を塞ぎ、嫌々と頭を横に振る。

まるで、これから先の言葉を拒むように。

『黒澤…』

「ごめんなさい…ごめんなさい…そんな事、お願いだから、言わないで……」

『黒澤。』

「ヤダ、イヤダ、何も聞きたくない。

謝るから、良い子にするからそんな事、」

グイッ！

俺から腕を掴んで、顔を上に向かせる。

酷く怯えきった黒澤の顔。

何時もの真面目な黒澤からは想像も出来ない豹変ぶりだ。

源希達が見たら、心底驚くだろう。

……けど、今の黒澤には重なる人物が、二人。

だから、俺は放っておけない。

優しく頬を撫で、少しでも落ち着くような声で話す。

『黒澤、ごめんな。』

どこで地雷踏んだかわからないけど、これから気をつけるから。』

「あ……やっ、メシア、が良い。黒澤、違う…」

『…わかった。』

メシア、ごめん。俺が悪かった。』

メシアの髪を優しく撫で下ろす。

後ろで結んだ長い髪の振動が、安定してくる。

呼吸もマシになってきた。

顔色も、まだ若干強張ってはいるが、落ち着きを取り戻してきつつある。

しかし、服の裾は握ったまま。

子供が迷子にならないように、母親の裾を掴むように、メシアはこれだけは離そうとしない。

メシアが安定してきたところで、時計の針が9時を過ぎる。

メシアを離させる事が出来そうもないので、握らせたまま支度をして病院のホールに行く。

道行く人々が二度見や三度見、ガン見をするのを無視して俺は歩く。

人に見られるのは、もう慣れたものだ。

もう服の裾なら自由に掴んでくれ。

コラそこの看護師さん達。

期待に満ちた目で俺達を見るな。

頬を赤らめるな。

キヤツキヤツ騒ぐな、指差すな。

変な誤解するな！

結局、俺がメシアの荷物も持ってるし、コイツは元に戻らないし。

ホールに着けば、神崎さんが立っていた。

『あ、神崎さん…』

ダッ！！

……逃げられた。

行き場を失ったこの手はどうすれば良いのだろうか。
仕方がないので暫く見ている事にした。
爪伸びたな…爪切り救急箱にあったっけ？

「あ！正軌兄ー！！こっちこっちー！！」

源希が手を大きく降って存在を示す。

小走りでこちらに走ってくる奴の後ろには、親父が立っている。

親父、生きてたか…ちょっと安心した。
もし当たったらごめんな。

メシアの荷物を床に一旦置いて、自分の荷物を掴む。
メシアにちよつと離れるように言ってから、肩を軽く回す。
源希との距離、残り数メートル。
周りに人はいない。

——よし、今か。

「母さんや茶矢達は家で待ってるって……ッアガッッ！！！？？」

『よし、命中。』

メシアの鞆を再び肩に担いで、顔面直撃した俺の鞆を拾う。
死体を跨いで、親父が待つ場所まで歩く。

メシアは踏んでしまったらしいが、まあ生きてるだろう。

『ウグッ！』ってうめき声が聞こえたけど、気のせいだと考える。

「もう身体は大丈夫なのか？」

『うん。心配かけてごめん。』

荷物はこれだけだから。』

「後で源希を拾ってきなさい。私は荷物を運んでおくから。」

『歩いて帰れると思うけど。』

「通行の邪魔になっている。早くしなさい。」

『わかった。』

メシアを背中に連れて、打ち所が悪かったのか気絶している愚弟を拾いに行った。

俺の朝の平和を返せこの馬鹿弟。

中編（GW）

———キィ。

親子の車で家まで送ってもらった。

メシアはまだ俺の服を握ったまま。

表情は何時も通りで、変わっている事はあまり話さない事だけだ。

源希は親父に負ぶられて、先に家に連れられた。

変な寝言ほざいてたけど。

『…良い天気だな。』

太陽が眩しくて、手で光を遮断する。

後ろのメシアを振り返るが、何も話さない。

ただ俺を見つめるだけ。

『…WELCOME, Meshiah.
（いらっしゃい、メシア。）』

口角をほんの少し上げるのをメシアに見せて、それから家に入る。

キョトンとしたメシアの顔が何だか可笑しくて、喉で小さく笑う。

メシアに捕まれたまま玄関の前に立つと、…何やら騒がしい事に
気づく。

心なしか源希の声もする。

……ヒソヒソ話をしているつもりなのか知らないけど、こちらに
丸聞こえなんですけど。

「せーの、でやるぞ。」

「わかってるわよ、もう聞き飽きたわ。」

「ほらほら皆、正軌がそろそろ入って来るわよ！あら、お父さんやらないの？」

「私はさっき言った。」

「正軌先輩、遅いね……ちょっと見てみる……」

「ダメです真尋君。もし正軌先輩が目の前に立っていたらどうするつもりなのか。」

茶矢、ご名答。

俺は今、目の前にいます。

なのに、何故こんなにも入りづらいのだろうか……？

バレバレなんだけど、ここは空気を読んだ方が皆の夢を壊さないよな？驚いたフリしてやった方が、あいつら泣かないよな？真尋あたりが俺が知っていたって知ったら泣きそうなので、怖い。

“恐怖”とは違う意味の、怖い。

——スツ…ガチャ。

俺の横から手が伸びたと思うと、勝手に回されるドアノブ。横を向けばメシアがいて、目の前は勝手に扉を引いている。

……オイそこの兄さんちょっと待て。

ドンッ！

肘でドアを抑える。

ジンジンしてめちゃくちゃ痛いけど、今はそんな事を気にしている余裕はない。

：向こう側が不審に思っただわだわだしたんだ。

あの時あのまま開けられてどう反応すれば良いのかわからなかったのに、何で開けるかな！？

もうちょい時間くれれば良かったのにな！

睨み合いに似た感じでメシアと無言の何かをしていると、ベランダが開く音が。

親父が顔を出して、紙を見せる。

「無理しなくて良いぞ。」

ペラ。

「こっちから入って来い。」

見た目に似合わない手招きをする救世主、親父。

——…親父!!

俺はこの時ほど誰かに感謝した事はないと思った瞬間だった。

「なーんでベランダから登場なんですかー？ しかも外人連れ込んで。」

『変な言い方するな皆月。』

理由はノーコメントで。』

「ま、なんでも良いじゃん！退院祝いなんだしきー！」

「母さん張り切って作ったわよ！パーっとやりましょう！！パーっとね！」

「……なんで黒澤さんは正軌先輩の服を握ってるのですか。離して下さい今すぐ。」

『茶矢、睨むな睨むな。これは、何と言うか、んー…、ま、俺が悪かったという事で。』

「？（キョトン）」

「（モグモグ）」

「母さん、コップが足りないぞ。」

騒がしい近所迷惑の見本になる煩ささで、“退院祝いパーティー？”らしきものが開催されている。

もう、食事会で良くね？祝ってもらうほど大怪我したんじゃないし。

茶矢が横に座るメシアをずっと睨んでるし、メシアは俺の服離さないし、真尋は親父と何とか会話してるから良しとして、問題なのは残りの三人。

カラオケなんかやり始めて、タンバリンとかマラカスとか何処から持って来たオイ。

「あたしですよ。」

『やはりお前か皆月。』

…ってか何で読めた？』

「さっきから口に出てますよ。恥ずかしー。」

衝撃の事実。

俺は独り言を口に出していたのか…!!??

バツと口を覆うが、皆月はニヤリと怪しい笑みを見せ、

「嘘です。顔に出てました。」

………テメエ。

よくも騙しやがって。

今鼻で笑ったなコノヤロウ。

——それより、茶矢は何時までメシアを見ているんだ。

メシアは完全に無視しているし、何故睨まれてるのか理解してないし、飯を無言で食べてるし。

一人でテーブルのものの大体メシアが食べてるし。
語尾に“ゝし”ばかり付けてるし。

……疲れてるんだ、少し寝よう。

テーブルを立ち上がり、ソファーに行こうとするが、メシアに捕まれて行こうにもいけない。

メシアはコツチ見ないで食ってるし。
どんだけ食えば気が済むんだよお前。

「手を離せ。

ちよつとあっちで横になるから。頼む。」

「…わかった。」

久しぶりに聞いたように思える声と同時に引っ張られる感覚が消える。

助かった…、とソファーに倒れ込めば、疲れがドツと出てきた。

病院で眠るとは言え、やはり自宅より無意識に気を張ってるいた。夜に眠れていないのも手伝って、学校でも眠る事は出来ないし、疲れやストレスが蓄積していた。

「だけど“帰った”という安堵感心地良い。

眠気が俺を誘う。

ぼんやりしたまま床を見ていると、ガサガサと煩い音が近づく。
ドサツ、テーブルに大量の皆月が持つて来た菓子袋が無造作に置

かれた。

置いた人物に誰かが怒っている。

怒っている奴は、テーブルに一人前の食事を持った皿をテーブルに二つそつと置く。

ソファの前で二人が俺に背を向けて座る。

一人は淡い緑の髪に怒ってるから、横顔だけが薄れゆく意識の中、見えた気がした。

「正軌先輩はそういう類の物は苦手なのです！貴方、理解していますか？！」

「お前、煩い。」

早過ぎて理解、出来ない。正軌のホワイトボード、テーブルにある。

「

「はいはいわかりました！」

（今のうち寝とけ寝とけ。

今日から休みだしな！色んな所に連れて行ってくれよな。）

—うっせピロリ菌。

けど、寝る。

騒音を子守歌に、俺は眠りに落ちた。

「ちょっと貴方、バリバリ喧しいです。

もっと静かにしないと、正軌先輩起きてしまいます。」

「……。 (ボリ…ボリ…)」

正軌が眠った後、メシアと茶矢はまだ口喧嘩をしていた（茶矢が一方的に怒ってるだけだが）。

茶矢は優人（宮古父）に渡されたタオルケットを正軌にかけ、ソファーにもたれ掛かりながら菓子を貪るメシアに静かに注意する。

メシアはツーンとした態度だが、“正軌”“起きる”“静か”は理解したようで、先程よりは静かになった。

メシアに何を言っても無反応な為、ホワイトボードを使う茶矢。だが、茶矢に顔を向ける事はなく、チラッとボードを盗み見るだけ。

―だが、茶矢もめげない。

小さいながらも、意地はある。

「帰って来てから全く話していませんが、どうしたのですか？」

「……。」

「明詩阿さん、見えますか？」

「……。 (コクリ)」

「なら、教えて下さい。」

今の貴方は貴方らしくないと思います。」
「……………」

最後の文章を見た途端、メシアは食べていた菓子をテーブルに置き、膝を抱える。

薄黄色の瞳だけを茶矢に向け、静かに小さく、けど確実に聞こえる声で語る。

「お前に自分の何がわかる。自分の事をよくも知らないでわかったような口をきくな。
優しくしてくれた奴なんて、……………」

そこでメシアはひざ頭に顔を埋め、それ以上何も話さない。
最後らへんのメシアの声が言い表せないくらい深く、茶矢はメシアに問い詰める事は出来なかった。

ただ、唇を強く噛み、こう悔やむだけ。

……何故、弱者ばかりがこんなにも優しい人に縋るのだろう。
私にもっと力があれば……もっと早く生まれてれば……あの時に話しかければ、この人の道は変わったかもしれないのに……
……遠くからしか見れなかった……—

…本当、弱い私が憎らしい。

中編（GW）

（――オイ、正軌。）

……なんだよピロリ菌。

人がせっかく気持ち良く寝てるってのに、邪魔すんな馬鹿ピロリ菌。

（おいおい、ピロリ菌で定着させるなよ？

お前、もうすぐ9時だぞ。ベランダで何かやってるんだよ。）

……マジか。

そんなに眠ってたか俺。

で、ベランダってなんだよ。

此処は一階だぞ。

（ウツセエ！細けえ事は気にすんと禿げるぞボケエ！！ヒヤハハ
ハ！！！！）

あーはいはい。

頭に響くって何回言えば覚えるんだよピロ。

いい加減覚えねえと、本気でピロリ菌って呼ぶぞ。

（悪い悪い。

庭？だっけか、源希らが楽しそうに火で遊んでるぞ。メッサ綺麗な
火で。）

……………火…？

あの馬鹿が？茶矢達が庭で火で遊んでるって事か？
綺麗な火って、何？危なくね……？

ガバッ！！

勢いよくベッドから上半身を起こ上がらせる。

親父がビックリした顔したけど、それより俺は家の安全を！

庭の方を向けば、真尋達と母さんが……………花火？

綺麗な火って、花火かよコノヤロウ。

変な想像して家が燃えるかと思ったじゃねえかよピロリ菌。
確かに楽しそうで良いけどさ、お前も言い方を考えろ！

（仕方ねえーじゃん。名前知らねえんだもん。

なあ！そんな事より近くに行けよ！近くで見てみてえ！！）

：俺の眠りを妨げたお前に触れたら、今すぐぶん殴ってやりてえ。
何でリアルにいねえんだよ馬鹿ピロ。

今すぐ出て来い。

重い腰を上げて、親父に飯は後で食べると告げてから、庭に歩いて行く。

庭では源希がネズミ花火？やって、皆月に殴られている。

茶矢がため息をついて、真尋が苦笑、母さんはメシアの隣で大爆笑。

メシアは窓辺に腰掛けて、線香花火を真剣に見つめている。

：何とも平和な光景だ。

見ているだけで、気持ちが穏やかになる。

親父だけがリビングでお茶を飲みながら新聞に目を通している。

親父はこういう事には誘われても、参加する事はあまりない。

祭があっても、母さんと源希だけがノリノリで浴衣に着替えて二人で行っている。

俺は一人で部屋で花火が上がるのを見ているか、ブラブラと人気の少ない道を散歩するだけ。

こういう協調性がほとんどないのは、親父に濃く受け継がれたと思う。

メシアの横にしゃがんで、線香花火を二、三本取っていく。

「やらないのか？」

顔を上げて、メシアが質問する。

俺は首を横に振ってから、他の花火を数本取っておく。

それをテーブルに置いて、親父の正面の席に座る。

庭の楽し気な声に耳を傾かせ、目を閉じる。

時折、親父が新聞をめくるカサッという音が良い。

「正軌はやらないのか？」

新聞に目を向けて話しかける親父。

その声にゆっくり目を開けて、椅子にもたれ掛かる。

『後でやるよ。』

その時は親父もやらない？』

腹の上で手を重ね、親父の反応を伺う。

親父は目を見開かせたが、直ぐに新聞紙で顔を隠される。

外とりビングの空間が遮断され、この場所だけが他から外された
静寂な場所になる。

花火のパチパチという音が、いっそうこの世界の空気を強調する。

「良いぞ、風呂に入ってからな。」

間を置いて、話す。

新聞紙が邪魔して表情を読む事は出来ない。

だが、『ふふふ』という笑い声が耳に届く。

俺も親父につられて喉で小さく笑う。

二人の笑い声がリビングにそっと響き渡る。

――皆が寝静まった後。
庭で綺麗な火が二つ、笑い声と共に灯ったという。

中編（GW）

タッタッタッ！

朝の8時半。

階段を軽い足どりで駆け上がる金髪の少年。

口元は笑みを浮かべて、最後の段を上りきる。

廊下を歩き、ある一室の前で一旦立ち止まる。

そして、軽く深呼吸。

顔をムニムニ触って、髪形が可笑しくないか手で確認。

よし！と扉に手をかける。

バンッー！！

「正軌兄おはよーう☆
グアッ！」

源希の顔にクッションが投げ付けられた。

：だが、今回は何時もより勢いが無い。

源希がよろける程度で、直ぐに持ち直す。

クッションを退かして部屋を見てみれば……何かお馴染みの二人に挟まれた、大欠伸をする眠そうな正軌。

寝癖がそのままである。

一方の問題の茶矢とメシアは、何故か睨み合い中。

源希は何が何だかわからないまま、入口で突っ立っている。

『源希…クッション返せ。ふああ……ねむ。』

「あ、はい。ねえねえ兄貴、この状況は何？

二人の後ろに炎が見えるんだけど。」

『あー……飯食った後で、こいつらに聞け。朝っぱらから疲れが溜まって、腹減った。』

「兄貴、文章が変だよ。」

朝飯テーブルに置いてあるから。メシアと茶矢も食べなよー。」

源希は正軌の後を追いかけて、部屋には今だ睨み続ける犬二名が残された。

『あふ……いただきます。』

「いただきます。」

「先輩、スッゴイ欠伸ですね。笑えます。」

「おはよう、ございます。」

大丈夫……ですか？ 顔色が優れない、ようですが……」

『皆月ハッ倒すぞ。』

真尋、おはよう。気にするな、時期に慣れる気がするから。』

「「「？」」」」

顔を見合わせている三人に構わず、朝飯を腹に詰め込む。

母さんがテーブルに『はい、なっchanメロン味。』とコップに入ったなっchanを飲み干す。

……はあ、美味い。

朝の出来事なんて忘れられる美味さだ。
なっchanは凄いな。

これ考えた奴は、人間国宝にしても良い。
俺が推薦する。

食べ終わった皿を流しにいる母さんに渡し、ソファアーに腰掛ける。
親父を見かけないな…と考えていれば、仕事があった事を思い出す。

何か会議あるとか言ってたな…教師も大変だ。

ボケーとテレビを見ていれば、源希がやって来る。
朝食を食べてきたらしい。

「さっきの話、教えてちょーだい？」

『…あいつらに聞けって言っただろ。』

「聞いたけど、無反応だったから兄貴に。」

『まだやってるのか…ハア。』

…頭が痛い。

何でこうもあの二人は衝突しあうんだ？俺がいる時に限って。

俺はため息混じりに、朝の苦労話を話し始めた。

…朝、7時半過ぎ。

やけに布団が温かいと思い、目を開ければ……………ドアップの顎。静かな寝息が聞こえてくる。

そー…と身体を起こせば、メシアが横で眠っていた。しかも、上半身裸で。

『……………！！！！！？？？』

言葉に出来ない叫びを病院の二の舞にせぬよう、なんとか押し殺してゼーハーゼーハーと深呼吸。

こめかみが酷く痛む。

頭が混乱している。

俺は必死に昨夜の寝るまでの記憶を引っ張り出すが、メシアと会った記憶はない。

親父と花火をやった後、扉を閉めて真っ直ぐベッドに潜り込んだ。此处で記憶は朝に変わる。

目を覚ませば、メシアの顎が目の前にあり、わけがわからん。

ーコンコン。ガチャ。

「正軌先輩、おはようございます。

今日は天気が良いです…よ、」

おお、BAD TIMING茶矢。

神の悪戯、いや嫌がらせだろうか。

こんな自分でも理解出来てない状況に茶矢を導入するとは、神は俺の事が嫌いなのか？嫌いなのはいいから、こういうのは本当に止めてくれ。

メシアの寝起きドッキリでも心臓に悪いのに、茶矢とメシアの喧嘩をわざと始めるのは。

…ほら、茶矢が無表情で黒いオーラを体から滲み出しているから。

…おいおい、何か茶矢がメシアを引っ張り始めたぞ。

ーゴンッ！って、メシアまだ寝てるのに壁に頭打ったし。

あれは痛そうだ。

あーあーメシア起きたし、不機嫌丸出しで頭摩ってるし。

二人共、眉間に皺寄ってる。

将来痕になって悔やむのは自分だぞ？茶矢は女なんだしさ。

痛そうにするメシアの頭を撫でてやると、何か腹に巻き付いてきた。

『おいおい…まだ寝ぼけてんのか？』

「……眠い。」

「ちよつと貴方！」

茶矢が何か怒ってメシアの腕を解こうとするが……引っ張りすぎて、ベッドから落ちた。

俺は腰を床に強打。

ガンッ！ってメシアの腕がテーブルに直撃するし。

後で見れば、赤くなってる痛そうにしていた。

茶矢は俺の事を心配したが、メシアとは睨み合う。

メシアも負けじと睨み返す。

『……二人共、こんな体勢じゃキツイから座らせてくれ。』
「「……………」」

——で、何故か俺を挟んで無言の喧嘩。

俺はまだ眠いつてのに、今度から部屋に鍵をつけようか、何て事を寝てる頭で考えている。

『……で、お前が入って来たと。』

「…うん、朝からお疲れ。」

あ！茶矢達下りて来た！」

バツ！と立ち上がり二人に駆けて行く源希。

俺は気怠さにソファーに背を預ける。

その間、真尋と皆月が近寄って来て、午後は何処かに行こうと誘って来る。

——この二人は何て平和なのだろうか。

俺も前は普通に暮らしていたのに……皆月の嫌味はいらないけど。

「この前、新しいお店が出来たんですよー♪今日行きませんか？」

「外の空気、吸うのも良いかな…って。」

『新しい店って…あのケーキ屋か？学校の近くに出来た小さい店。』

「そうですよー！」

とも美母さんも一緒に行きませんかー？」

「あら、あたしも一緒に行って良いの！？」

是非行かせてもらうわ♪」

女性二人でキャツキャツと楽しむ姿に、何とも言えなくなる。

……俺、甘い物苦手って前に言っただけだよな？

真尋は善意で言ってるのはわかるけど、皆月は絶対忘れてるだろ。それか、遠回しの嫌がらせ。

女性は甘い物好きってよく言うけど、母さんは大丈夫か？とか逃げる為の言い訳をどこかで考えている俺。

真尋が心配そうに見る視線に、断ったら泣くかもしれないとまた頭痛を酷くさせる。

源希は二人をなんとか宥めるのに頑張ってるし。

『……行くだけなら良いぞ。』

「ほ、本当です、か？」

『っは、噛みまくりだぞ。』

真尋にちよっただけ癒されて、頭痛が和らいだ気がした。

…さてと、後で胃薬探しておくか。

中編（GW）

『……………』

——…俺、宮古　正軌は今、昼間の発言を死にたくなるほど後悔している。

昼飯を軽く済ませた俺達は、皆月と母さんを先頭にゾロゾロとケ
ーキ屋に向かって歩いていった。

前で楽しい二匹に話し合う源希と真尋に対し、俺は“犬猿の仲”と呼
ぶに相応しい二匹に囲まれ挟まれ、ため息しか出てこない。
そんなに嫌いな見なければいいものを。

それに、何故当然の如く俺を挟む？
…せめて、俺を抜きにやってくれ。

ガシッ、と二人の頭を掴んで下を向かせる。

『いい加減にしろ。大概にしないと、俺はもう知らないぞ。』
「……………ごめんなさい。」

シュンとする二人に小さくため息をついて、ワシヤワシヤと髪を
乱雑に撫で回す。

尻尾が生えていれば左右に振っていそうな気がするの、俺が疲
れているせいにする。

柴犬と狼の二匹……うん、最近よく寝てないからな。
目の錯覚錯覚。

近所の目を見無視して歩いて行けば、高校にたどり着く。
そこを通り過ぎて暫く歩けば……小さなケーキ屋を発見する。
店の前では女性が二人、店の前に置かれたメニューを見て悩む姿
を見かける。

しかし、皆月はメニューを気にせずそのまま入って行く。
俺達もそれに続いた。

……此処までは良かった。
しかし、入った瞬間、キツイ香水の匂いに鼻が痛くなった。

「いらっしやいませー☆
何名様でございますかー？」

甲高い声で接客をする若い女性が出迎える。
化粧は薄めだが、香水の匂いがキツすぎる。
ケーキの甘い匂いも、俺には苦痛。
目まで痛くなって、涙が出てきた。
吐き気もなんとなく感じる。

源希と真尋、茶矢も俺と同様に鼻に手を覆い隠す。
……だが、皆月や母さん達は何とも感じない顔で店員と話している。

——ダメだ、帰りたい。

『皆月、俺やっぱり留守番して…』

「大人一人で学生六人で。」

「目が…痛い……。」

「俺、気持ち悪い…。」

「何ですか、このキツイ香りは。つけ過ぎではないですか。」

香水にGive upする学生四人が抗議するが、皆月はスルー。店員に案内されるままに後について行く。

店内はやはり女性だけしかおらず、俺達男は浮いていた。しかもメシアがいるものだから、キャー！という黄色い歓声も沸き起こる。

俺達は1番奥のグループ席に座り、店員が説明を始める。

「当店“Sweet Ozaki”では、時間制のバイキングになっております♪

ご来店された時間からお帰りになる時間を計算して、お会計をお支払いしていただきませう♪

因みに、目安として高校生は1時間600円からのスタートでえす☆その間、ケーキやスイーツが食べ放題♪

お店の前に置かれているメニューを見てから食べる物を決めてから来店されるお客様も沢山いらっしやいませう♪

あ、そうそう。男性のご来店はお客様が初めてですので、今回はサービスいたしませう☆

では、ゆっくりお楽しみ下さいませ♪

あ、お会計の際はコチラをお持ちしてレジにいらして下さい☆」

コトン、と店員はテーブルの横に何かを置くと一礼して去って行った。

店内が行った後も香水は店に充滿しているのか、香水がダメな四人はそれぞれトイレに逃げ込んだ。

「とも美母さん、私達は先に食べてよっか！時間がもったいないし」
♪

「そうね、そのうち戻って来るだろうしね☆メシア君もどう？
：あらあら、日本語がダメだったわね。ホワイトボードは何処にやったかしらね。」

メシアは男子トイレを見つめて、とも美達の会話は耳に入っていない様子。

友恵は『誰かテーブルにいないと大変。』だと言って、とも美の手を引いて選びに行った。

メシアは女性陣の熱い視線も無視して、ただ男子トイレを見ていた。

『ゼエ…ハア…お、おい。』

「…うえ、…っはあ…な、何？」

「ハッ…ハアッ、ハッ……？」

男子トイレに逃げた一同は、窓や洗面台に項垂れていた。

顔色は、当然青い。

体内の空気を入れ換えている時、正軌はある提案をする。
長距離を走ったわけではないのに、息を切らしている。

『…………逃げないか?』

「「無理だろ。／無理ですよ。」」

即答させてしまった。

二人は首を力無く横に振る。

…やっぱり、ダメか。

母さんと皆月を置いて帰る事は、出来そうでもない。

あの家の権限は、ほとんど母さんが握っているも当然だし、俺達は金を払ってもらう立場だ。

思いつきで言ってみたが…………やはりダメか。

『…じゃあ、あの空間に何時間もいれるのか?』

「それは…」

『あの二人の事だ、長期戦は必須だぞ。』

「う…。」

『女の茶矢でさえギブしているあの匂いに、何時間も耐えられるのか?』

このままトイレにずっといる訳にもいかない。』

「「……………」」

苦い顔をする三人。

八方塞がりとはまさにこの事だと、自身で体感する事になるうとは…。

——ガチャン。

そんな中、誰かがトイレに入ってくる。

メシアか？と思ってそちらを見れば……パティシエが着る服を着た茶髪の男が立っていた。

20代前半かと思われる男は、俺達の存在に気づくと……ガチャン、と閉められた。

……誰？あ、また来た。

茶髪のくせっ毛の男は、そーとコチラを伺っている。
何かちよつと嬉しそうな顔しているんだけど。

「え、え、君達が例の男の子かな？」

『「……例の？」』

「えとね、店員さんが言ってた、初来店の男の子達。」

……店員って、あの女性か。

確か、“初めて”って言っていたような言っていないような……一刻も早く逃げたかったから、よく覚えていない。

猫みたいな髪と目をチラチラ覗かせて俺達を見ているのに、だんだん苛々してきた俺。

源希は男の手を引いて、中に連れ込む。

男は『えへ、えへ』となよなよしながら入って、俺の前に立つ。

細身のもやしみたいな男。
照れているのか、頬をほんのり赤らめている。

「僕ね、一応このお店のオーナーなんだ。
スイーツ好きな男の子って、あまり出会えないから…何かテンションが上がっちゃった。はー嬉しっ。」

しゃがんで顔を隠す年上の男。
真尋が慌てるが、俺は冷めた顔。

……
“スイーツ好きな男の子”だと？

何を勘違いしているんだこの男は。
胸やけ意外の何ものでもない。
それに、オーナーだったら男の事も考えろ。

『ちょっとあんた。』
「ほえ？」

『あんたも男ならあの香水の匂いをどうにかしてくれ。男に来てほしいなら、先ずは店内の空気と店員の香水のキツサ注意しろ。俺達の連れの女性さえトイレに駆け込んだんだぞ。
味が良くっても環境が良くなきゃ美味く感じない。しかも俺は甘い物は見ただけで胸やけするんだよ！』

ポカーンとする男を置いて、俺はトイレを出て行った。

残された二人と男は、暫く唾然としていれば、ハッ！と現実に戻った学生二人が正軌の後を追う……が、動けない。

男に腕を捕まれたのだ。

男はニコツと人の良い笑みを向け、二人に話し掛ける。

「ちょっと手伝ってくれない？」

僕、最近お店始めたばかりだから細かい事はさっきの子のように見落としてるかもしれない。だから、二人にアイデアをもらいたいなあってね？どうかな？」

華奢な見た目からは想像出来ない力強さで二人を捕らえて離さない。

底知れぬ言葉の威圧感に、二人が縦に首を振るしかなかったのは、言うまでもない。

――で、これは何だ？

テーブル近くの窓を開けて、何とか呼吸の確保をしたが……何故、こんなにも女性が囲んでいるんだ？メシアのおかげだけだな。窓を開けたのに、香水の匂いが離れない。

茶矢と二人で窓に顎を乗せて、外を見ていた。
そういえば、真尋達が帰って来ていないが……まあ大丈夫だろう。
帰る時にいれば良いんだし。

トントン。

突然肩を叩かれ、『ん?』と振り向く。

メシアが皿に乗せたケーキを俺に差し出している。

……え、食えと?俺、甘い物苦手って……あー、メシアには言っていないな。

「悪い、甘い物苦手なんだよ。見ただけで胸やけする。」

「母親から聞いた。」

これは甘さ控えめと書いてあった。」

「控えめって書いてあっても、どうせ甘い。」

「一度食べてみる。何事も経験だ。」

水木もテーブルにあるのを食べると良い。」

「……。」

プイ、と顔を背けるメシア。

……そういえば、茶矢が何かしてメシアを怒らせる事はあっても、メシアから嫌う事はなかった。

俺が昨日、メシアは不安定だったのを教えれば、茶矢がメシアを怒る事もなかったのではないか。

……しかし、茶矢が何故メシアに突っ掛かるのだろうか?たまに茶矢の考えている事はわからない。

んむむ……と悩む茶矢の顔を見て、俺は苦笑い。

『せっかくメシアが持つて来てくれたんだ。

俺も、食う、から、茶矢も食べろ。人の良いところを、変な意地で目を反らすな。

っし！…いただきます。』

フォークを持って、シフォンケーキを小さく切る。

本当、一口より小さく小さく切る。

何故か皆月達に注目される中、フォークを口に……口に………クッソォ！！

――…パク。

……シー……。

「…あらあら、正軌。気分はどう？

野菜ジュース、向こうにあったわよ？」

「くれ。」

「味はどうだ？」

「甘い。無理。」

「これ以上無理。」

「正軌先輩、どうぞ。」

茶矢に渡された野菜ジュースを…ゴツゴツゴツ、一気飲み。

―プハ、…敵は小型だが、破壊力は半端ない。

たった一口で、この有様さ。

舐めてかかったら、いや舐めてないけど、思っ返し返り討ちにあ

った。

ッハ！もうケーキなんかには騙されないぜ！二度も裏切られたんだ……こんな屈辱があつてたまるか！ショートケーキのように何も装備してねえくせに……あ、クリームあつたわ。

俺とした事が、見落としてたあー！！

テーブルに両肘をたて、顔の前に手を重ねる。

後悔と敗北感に打ちひしがれる中、隣で茶矢はメシアが持つてきたケーキを食べていたのに気づかない俺であつた。

「このシフォンケーキ、美味しいです。私は好みですね。」

「このカステラ、美味いぞ。食べてみる。」

「では、遠慮なく。」

「あらあら、仲直りかしら？正軌は哀愁が漂ってるけど。」

「良かった良かった。」

んでも、真尋と源希、まだ帰って来ませんねー？ドリンクバーお代わりしてこよっと。」

甘いお菓子と正軌を通じて、ちょっぴり仲良し？になった二人でしたとき。

——一方、源希達は——

裏方の部屋に連れて来られ、ケーキやジュースを飲みながらアンケートに答えていた。

「窪田は、このケーキどう？」

「…うーん…美味しい？」

「うん、美味いけど、それだけじゃあ意味ないよな。」

「困ったね…。」

時折顔を見せる

“Sweet Okazaki”オーナー、岡崎オカザキに連れ込まれた二人は、“店内”“商品”“店員”の三項目に分かれたアンケート用紙を前に、苦悶顔。

休憩のスタッフが話し掛けてくる為、軽々と“店員”の項目に書けない為、長引いてしまっている。

「はい、ケーキとジュースのお代わり。」

「あ、ども。」

「ありがとうございます。」

「本当、突然ごめんね。高校が近くにあっても、中々こうやって直接聞けるのは難しいからね。しかも男の子に。」

君達の代金は無しにしておくから、アンケートよろしくね♪」

また厨房に戻っていく岡崎を見て、『忙しいんだなあ』と小さく呟く源希。

項目は中々埋まりそうにない。

「窪田あ……」

「んー……？」

「俺達、何時帰れるだろうな？」

「…皆が帰る時には、多分。」

「俺さあ、嫌な予感するんだよね。」

もし会計の時、母さん達が店員さんに俺達の事聞いても『只今アンケートにご協力していただいておりまあす♪』って言われたら、『あらあら、そうだったの。それじゃあ、遅くならない内に帰りなさい、って伝えておいてくれる？』『はい☆あ、二人には手伝っていただいておりますので、二人のお会計は無料とさせていただきます♪』『あら！やったわ☆』って母さん喜びそう。

…リアルに有りそう。」

「……源希君、モノマネ上手だね。」

「ありがと。」

——なんと源希の予感は的中し、母さん達一行は二人を置いて帰って行ったのを源希と真尋が知るのは、数時間後のお話。

晩御飯の時間、とも美（宮古母）が優人（宮古父）の為に持ち帰ったお菓子を見て、条件反射で逃げ出した三人の姿がありましたとさ。

中編（GW）

…朝、目を覚ますと客間にいた。

真尋と源希、皆月に茶矢もまだ寝ていて、メシアはなんか腕を抱きまくらにしている始末。

起こさないよう起き上がり、近くの掛け時計に目をやれば……まだ7時。

何で自室にいないんだっけ…？

眠る脳を起こして、思い出す。

……そういや、昨夜は人生ゲームやって、最下位の皆月が『このままじゃあたしの気が済まない！』って言って、大富豪（大貧民）に変わったんだ。

そうそう。

それで、俺は早くあがったんだけど、皆月がまた順位悪くって、何回もやって……それで俺、眠くなって此処で寝たんだ…。

うん、そうそう。

若年性アルツハイマーの心配はまだ大丈夫だな。

——しかし、こうやって皆の寝相を見ると……面白いな。人の性格が表れるって言うか、それぞれ違っているのが良い。

源希は大の字で寝転がって、真尋の腹に足乗せてるし。

真尋は苦しそうに唸りながら、布団を被って寝ている。

皆月は枕を抱きしめて、コチラも真尋同様寝相は良い。

メシアは上半身裸で、何か俺に絡まってくる。

……本当に寝てるのか？

そういえば茶矢を見ないと見渡せば……部屋の隅で動く茶髪を
発見。

……え？なんでそんなに離れてるの？茶矢だろあれ？

あーあー、そんなに転がったら壁に頭ぶつけるって……あー…。

ガツンッ！

…ほら、言わんこっちゃない。

痛い音がしたぞ。

「ううう……」

額を抑えて縮こまる茶矢。

どうやらお目覚めのようだ。

体を起こしてキョロキョロ辺りを見回すと、俺と目が合う。

『よう、茶矢。』

今頭打っただろ？大丈夫か？』

「あ、おはようございます正軌さん…、……っ!？」

ま、ま、ま正軌先輩、い、今の見たのですか!？」

『しー…。皆が起きるから、小声で話せ。』

さっき目が覚めてな。正直面白かったぞ。』

『意外な一面見れたわ。』と小さく笑うと、顔を茹蛸ユデタコのように真っ赤にさせて口をパクパクさせる茶矢。

あ、前にも見たなこの顔。
本当、見えて飽きないな。

茶矢の表情。

メシアに布団を抱き着かせ、顔を洗いに洗面所に行く。

茶矢はまだパクパクしていたので、笑いすぎると拗ねられかねない為、一旦退却。

洗面所に行くと、母さんがもう起きていた。
化粧水を顔に溶け込ませている。

「おはよう正軌。昨日は賑やかだったわねえ。」

『おはよ。煩かった？』

「ううん。笑い声がある方があたしは好きだから、別に気にしてないわ。」

お次どうぞ。」

最後に髪形をチェックして、母さんは笑顔でリビングに行く。

賑やかつつつても、11時過ぎてたんだけど……近所迷惑とか考えないのかな？ま、別に言われてから直せば良いや。

顔洗って、寝癖を手櫛で直してから、俺は着替える為に自室に行った。

『そーいや、後宿題どれくらいあったっけ。』

着替えを済ませた後、勉強机の上に置かれたノートを見る。
GWの為に各教科の担当にそれぞれ出された物だ。

寝る前にやっていっているの、残り一日で焦る事はない。

ペラペラとめくっていれば、後少しで終わる事が判明。

シャーペンを手、終わらせようとしたのだが……、

（なあなあ正軌。今日は大学探しに行かねえの？バスや電車に乗るんだろ？）

茶々を入れる野郎が現れた。

いや、起きた？という表現の方が正しいか。

（俺様はお前より早く起きてますけど？笑）

『笑』って自分で言うな。

んなら、お前は何時寝てるって話だよ。

（んなの細けえどーでもいいー話。

あ、そこ間違ってるぜ。）

どーでもいいー話だな、確かに。

ん？どれだよ。

（んっとねえ、右ページの上から三つめ。（四）。
簡単な計算間違い。）

上から三つめ…（四）…（四）……あ、これか。
どーも、ピロ。

（よく凡ミスするからなあ正軌は。見直しても気づいてないの多いしい。ハアアア。）

ウツセエ。

何だそのあからさまなため息は。

お前、本気で消されたいのか？

（悪いって。）

それより、もうすぐ本棚にある漫画の最新刊、発売じゃねえか？名探偵DONANだっけか？

よく覚えてるな。

もうすぐ映画もやるし、人気が少ないのを見計らって見に行くか。

…今日はやけに喋るなお前。
良い事でもあったのか？

（そうかあ？

ま、天気良いからじゃね？）

天候でお前のテンションが決まるのかよ。
頼むから、

『あんまし騒ぐなよ。頭痛くしたら、ピロリ菌野郎って名前変えてやる。』

「……ピロリ菌野郎？」

『だから、お前の名前……』

頭からは違う外からの声に、一瞬固まる。
手で口を抑えて、ハッ！と息を飲む。

：まさか、無意識に口に出していたとは。
気をつけようと努力していたのに。

この声は、まさか……

恐る恐る振り返り、誰かを確認する。

声のした人物の他に、もう一人が首を傾げていた。
真尋と皆月だ。

「ピロリ菌野郎って、誰と話しているのですか？」

『いや、な。独り言だ。独り言。
忘れてくれ。』

「独り言にしては、誰かと話しているみたいでしたけど。
ノックも耳に入ってたみたいだし。」

怪訝そうな顔で皆月が言い寄って来るため、何とかその場をし
ぐ。

真尋はそこまで気にしていないのか、皆月を宥めてくれている。

『…で、何の用だ？』

「あの、もし良かったら、宿題みてくれませんか？」

「まだテスト結果返ってきてないし、源希は『もう終わらせちゃっ
た！メシアを案内してくるね！茶矢も行こっ！』って、朝食食べ終
わったら直ぐに出て行ったし。流れで来ました。」

『お前は言葉を選んでから話せ。』

じゃあ、食べてくるから解るところから始めてろ。テーブルはそこ
にあるから。』

「ありがとうございます…！」
「どもー。」

部屋を出て、リビングに行く。

もうすぐ9時か…俺も早く宿題終わらせるか。

（えー、出かけねえの？つまんなあーい。）

明日あたり探しに行く。

面倒な事は早めに終わらせた方が、後が楽だろ。

…それより、皆月達に気づいてたなら教えろよ。
変な目で見られたじゃねえか。

（え、だって…ねえ？）

死ね。

今すぐ出ていけ。

脳内でピロと会話しながら、リビングに行った。
コイツの性格は、どうにかならないのだろうか？

「これは、こうじゃない？前にやったでしょ。」

「あ…そっか。ありがとう友ちゃん先輩。」

「部屋に戻れば、勉強をしている平和な二人が…え、？
皆月が勉強を教えているだど！？俺は夢を見ているのか…？」

『勉強嫌々。』『学校なんか滅んでしまえー。』ってテスト期間中ずっとグダグダ言って、中々進まなかったあの皆月が…！？

『そうか、疲れてるんだな。これは幻覚なんだな。皆月が人に教えるなんて……源希が一日中何も話さない事より有り得ない。』

『何気に失礼ですよ先輩。あたしが出来てちゃいけないんですか。』

『いや、テスト期間中あんな姿を見せられたらな……疑いたくもなる。』

熱はないか？』

額に手をあてるが、平均温度だ。

俺の体温よりは冷たい。

パシッと手を払われる。

「先輩の方が熱いですよ。

ほら、さっさと座って教えて下さい。二人でもわからない問題が沢山あるんですから。」

『悪かった悪かった。』

なんだ、一年はこんなに少ないのか。』

俺のと比べると、半分くらい差がある。

内容も懐かしいものばかりだ。

皆月が指名した問題を順々に教えていく。

二人がやってる間、俺は俺で宿題を片付ける。

昼飯が出来たと母さんが呼ぶまで、それを繰り返していた。

「……んはぁ、疲れた疲れた。」

頭使ったらお腹すいちゃいましたよ。」

「うん。一回休憩しよっか。」

『だな。息抜きしてから、また再開すっか。』

腹を空かせた俺達は、リビングに下りて行った。

——真尋達がいる間、ピロが何も話さなかった事に俺は気づいていなかった。

中編（GW）

——今日は眠りたくない夜だった。

久しぶりに夜風を浴びたくなったので、皆を起こさないよう物音をたてずに外に出る。

春と夏の境目のこの季節は、夜に吹き抜ける風の冷たさが気持ち良い。

昔は嫌いだった景色も、今となっては普通に見える。

…今日は遠出をしようか。

（何処まで行くんだい？お兄さん。）

んー……眠くなるまで。

今日は外を歩きたい気分。

（ご一緒しても？ってか？ヒヤハハハ！）

喧しい、雰囲気壊すな。

ダメって言っても意味ないだろうが馬鹿ピロ。

勝手にしろ。

（そりゃどーも。

今日は星が綺麗だなあ。）

ピロに言われて立ち止まり見上げるが、一等星くらいしか見るこ

とが出来ない。

綺麗というよりかは、寂しいと感じられる。

お前の感性が理解不能だ。

（あー、空気の層が濁ってて正軌には見えにくいなあ。
俺にはメッサ綺麗に映るぜ。）

あつそ。

脳内にいる野郎に目が見えてるのかい。

そりゃ科学者達よりも先に新発見しちゃったよ。

（あ！信じてねえな！

ふん、いいいいいよ。別に正軌に信じて貰えなくても。ふん。）

拗ねるな、子供かよ。

はいはい、俺が悪かったね。

あ、公園で一回休むか。

なっchan売ってる自販機何処つかにあったつけ。

（馬鹿にしゃがって…。

でも、今入らない方が良いよ。）

『は？何でだよ？』

（血の臭いがする……）

ピロが言い終わる前に、公園に足を踏み入れた。

その言葉の意味を理解するのには……そう時間はかからなかった。

公衆トイレの前で、パーカーのフードを深く被った男が、サラリーマンらしき男の頬にナイフを当てている。

サラリーマンらしき男は、怯えた顔で口から血を流しながら財布を差し出している。

頬にはナイフで切られたのか、血が流れワイシャツが汚れている。

…カツアゲをしているのか。

目が汚れた。

あのフード、どっかで見た記憶があるんだが……今はどうでもいい。

(おい、正軌……)

邪魔するなよ。

今は腹がたつてしょうがないんだ。

ザッザッザッ…

真っ直ぐフードの男に向かって歩いて行く。

眉間に皺を寄せ、怒りを抑える。

『……おい、その男。』

「「…!?!?」」

フードとサラリーマンが一斉に俺の方を向く。
その時、フードから銀色の髪が零れ落ちる。

青い瞳で睨ませて、髪が長い事から女性かと思ったが……影で顔がよく見えない。

だが外人なのはわかった。

そんな事はまあ良い。

国籍なんかより、した事事態が許せない。

『こんな夜更けに何学生がナイフ持って出歩いてんだよ。しかも人を傷つけて、お前は何様のつもりだ馬鹿野郎。』

（正軌も学生だろうが。）

『そのサラリーマンが酔っ払って絡んできたかもしれないが、暴行した上に血い流させるってえのは人としてどうかと思うぞお？ あゝあ？』

「「……。（ゴクッ。）」「」

ヤクザ丸出しの表情でにじり寄る俺に、フードもサラリーマンも後ずさり。

どうやって出すのかわからないくらい低い声が喉から出る。

二人共俺の後ろに何かを恐れるように生唾を飲み込む。

しかし、フードの奴は奮い立ちナイフを向けて走って来た。

サラリーマンが叫ぶ声がする。

「うらあああああ……！！！！！！」

「オイ！兄ちゃん危ない！！！！」

『……なめんなよ?』

——ヒュッ!!

「グッ…ア!」

『ハア?』

俺にたどり着く前に、フードは倒れる。

何? コケたのか?

はは、だっせえなあガキ。

フードが起き上がる前に足でナイフを遠ざける。
カラン、とコンクリートに当たった。

(正軌、あそこ。)

ピロが教えた場所を見ると…よく知る人物が。

『……メシア…?』

石を片手に公園に入ってきて来る、服を着たメシア。

サラリーマンは逃げ出したらしく、もう姿がない。
懸命な判断だと思う。

メシアはフードの男のフードを持ち上げて、顔を近づける。
端から見てこういう風に見られていたのだと、今更ながら神崎さんの気持ちがわかった気がする。

呻く男の耳にメシアはボソボソ口を動かす。

「フリー、こんな所で何をしている。正軌に何をした？」

「うっ…せ……っっ！！糞、野郎！！顔が、近えよ……手え離せ！！あゝ！！」

「何をしていたと聞いている。お前なら英語で話せるだろう。話せ。」

パサ、とフードが外れ、顔が露^{アラワ}になる。

メシアとそっくりの顔。

ただ違うのは髪と瞳の色、背丈もフードの方が小さい。

双子？かと考えたが、二人の雰囲気からなんとなく違うように思う。

ドシャ！と地面にフードが投げ降ろされた。

咳込むフードを、メシアは見下ろす。

「自分に何をしても良いが、伯父さんには迷惑をかけるな。警察に捕まって悲しむのは伯父さんなんだぞ。」

「黙れ！！居候の身のくせに偉そうに上からモノを言いやがって！

！何様のつもりだあ！！

そんなんだからお前の親も、ブツ…！！」

パアアン！！

肌を叩く（はたく）音が辺りに響き渡る。

メシアは平手打ちをフードにしたらしく、フードの頬は赤く腫れていた。

だが、ギッ！と歯を食いしばりメシアを睨みつける。

フードの口端からは血が滲む。

メシアはフードのそれも、何時もの顔で見下ろしている。

そして、静かに言葉を投げ捨てる。

「…その話をまたしてみろ。今回は見逃してやるが、次はお前の首の骨を握り潰してやる。」

「ッハ！できねえ奴がほぐな！！手え震わせてるくせになあ！！」

ダッ！と逃げるように駆け上がると、ナイフを拾い、俺を一度ガンを飛ばしてから去って行った。

俺は二人が言い合いをしている間に熱は冷めた。

…だから、ハッキリ見える。

病院の時と同じ、メシアの怯える顔が。

フードを叩いた（はたいた）手を見つめるメシアが。

重なる、二つの幻像。

ザリッ…。

俺はメシアの前に立つ。

震わせる手を取り、歩き出す。

『ついて来い。今日は夜風が気持ち良いんだ。
立ち止まったらもったいない。』

「……………」

わからない日本語で話す。

メシアには伝わらないだろうが、今はいい。

——だってさ、ピロ。

今日は星が綺麗なんだろう？

俺には見えないけどさ、星は瞬いてるんだろ。

俺の手を握り返すこの細い手の平を冷ますには、夜の爽やかな風は心地良かった。

中編（GW）

昨夜は、メシアが落ち着くまで散歩した後、そーと部屋まで戻って眠った。

その間、手を繋いだまま。

『ん……、』

腹が、重い……何か、乗っかって、る？

目を開け、天井を見上げるように乗っている人物を確認する。
金髪、頭……お前かつ！

ガッツ！！

「グオッ！？

き、効くねえ……。」

『寝てる奴の腹にのるんじゃないやねえ。今すぐ降りろ。』

今度は背骨狙うぞ。』

「あー！わかった！どくから待って！」

ワタワタと退く源希にため息を一つ。

気づくと、何時もいる淡い緑色の髪が見当たらない。

ガバツ！と起き上がり辺りを見るが、一向に見つからない。

何時もは間近に顔があるはずなのに、その違和感。

「…メシアならリビングにいるよ？器用か事してる。」

『…器用な事？』

源希の発言に、俺は大丈夫なんだと安心すると同時に意味が分からなくなる。

コクンと頷く源希に体を向け、詳しい話を聞く。

『えっとね、』と人差し指だけを天井に上げ、ニコツと笑顔。

「食べながら座ったまま寝てるんだ。

正軌兄を起こす時に先にメシアが起きてね、寝ぼけてたから先にリビングに誘導して座らせたら…ビツクリ。口と手を動かしてるけど、熟睡しているの。揺すっても話し掛けても起きないんだ。」

『…マジか。』

「マジ。」

源希は基本的に嘘はつかない。

冗談とか言った時は、直ぐにネタバレする。

見た目に反して、真っ直ぐな性格。

そんな真っ直ぐなもの、嫌いではない。

即答で頷く源希。

目が嘘だと言っていない。

（ヤベ、俺チョー気になる！）

俺も気になる。

よし、見に行くか。

…っと、その前に着替えねえと。

源希だけだし、別にいいよな。

下は替えないし。

上着を脱いで、クローゼットから適当に服を選ぶ。

俺達は足音に気づかない。

扉は開けっ放しのままだ。

「源希君、正軌先輩を起こすのに何時までかかっているのです……」
『「あ。」』

服を着ようとした瞬間、漫画では在り来りなタイミングで茶矢登場。

源希と見事に声がハモる。

茶矢は耳まで赤くして、声にならない何かを口にする。

無論、俺達には伝わらない。

茶矢は俺に震える人差し指で指して、俺は服を着るタイミングを失ってしまった。

さて、どうするかな。

（さっさと着れば良いじゃん。茶矢にはキツイと思うぞ？）

俺の腹、そんなに太いか？

この前“BMI”やったら正常だったぞ。

贅肉はあまりないと思うが……ま、着るか。

（そーいう話じゃないんだけど。

そんなんじゃ、茶矢は一生報われねえな。ナム。）

じゃあ、どういう話だよ。

前にもこんな会話したなオイ。

茶矢が報われないって……俺、何かした？

服を着て、茶矢の方を見るが……跡形もなく消えていた。

一階からは消え入りそうな誰かの悲鳴。

何かに顔か口を抑えつけて叫ぶ感じ。

『…源希。』

「（ドキッ。）な、何？正兄。」

『俺……』

脈が早くなり、ちょっと期待している源希の気持ちを知らず、俺は話す。

源希にとっては期待外れで呆然とした顔になるほどの発言。

『…の腹、そんなに太いか？茶矢が逃げ出すくらいだし、よっぽどなんだろうけど。』

「……ハ……？」

…あ、いや。俺は、正兄貴は身長割に痩せてると思うよ。

茶矢が逃げ出したのは……きっと何か違う理由があったんだよ。き

つと、ね。」

顔を反らして『アハハ…』と渴いた笑い声。

よくわからないが、考えても仕方がないので考えるのを止めた。

例の器用な事をしているメシアを見に行くと、顔をテーブルに突っ伏して爆睡していた。

さっきまで食べていたようで、俺達は一步遅かったらしい。
メシアの肩にはタオルケットが掛けられている。

(ちえー、つまんないの。茶矢が来たせいで遅れちまったあ。)

俺達が遅かったんだろう。

人のせいになると、みつともないように思われるぞ。

それに、メシアならまたやるだろうから、落ち込むな。

(……っふん。)

それ以降、ピロは何も話さなかった。

遅い朝飯を食べ、午前中は真尋達の宿題を見る。

今日は茶矢と源希、メシアも加わったので、リビングでする事にした。

俺も残りを終わらせる。

午後は昼飯の季節外れのそうめんを食べ、母さんに『出かけてくる。』と伝えてから外に出た。

昨日話していた“名探偵CONAN”の最新刊を買いに行くのだ。
ついでに髪染めも。

連れは、頭の中に勝手に住み着いた住民だけ。
騒音で迷惑している。

店が並ぶ所を本屋を目指してブラブラ歩く。

この時間帯は人が多いが、今更視線を気にする必要もない。

髪と顔、身長のせいで目が合うと反らされる。

女だったら、小走りで逃げる奴らもいる。

——やっぱり、アイツらは変わっているよな。

こんな俺の周りにいるのに笑ったり泣いたり怒ったり、話し掛け
てきたりする。

褒めてやれば喜ぶし、嬉し泣きした奴もいる。

嫌味を言っヤカラて楽しむ奴もいれば、何回言っても直さない輩が二名
ほど。

そいつらから走って逃げれば、何故が同じように追いかけてくる
し。

自分を飾らないで接してくる。

それが当たり前になってるんだな……——

（正軌、寂しいのか？）

人気の少ない小さな本屋に入ると、今まで無言だったピロが喋り
かけれる。

——寂しい、か。

多分それは違う。

昔よりも、なんだろう……“除外”されていない感覚。アイツらが入ってきて、輪の幅が広がったみたいな。

（…んじゃ、今は倅せか？）

……それも、違う。

目を伏せて首を横に振る。

人がいない分、何をやっても怪しまれない。

目当ての物を手にレジに行く。

店を出て、次は薬局に。

…“倅せ”って言うには、誰かが足りない。

香織ちゃんもそうだし、……誰か忘れる気がする。

——ズキッ。

『…っ、痛…！』

頭の一部が焼けるように痛んだ。

まるで、思い出すのを拒むように。

…だが、それは一瞬で治まる。

電柱に預けた体を元に戻す。

痛みが引いたその間に、俺は薬局に入る。
真っ直ぐ髪染めのコーナーへ。

（黒買えよ、黒。）

何時もの色を買おうとしたら、ピロに提案された。
喋ったり喋らなかったり、よくわからない奴だ。

（元々黒だったから、絶対黒が良いって！俺が保証する！）

ピロに保証されても、どうにもならないんだが。

（もうすぐ大学入試だし、今の髪のままだと確実に落ちるぞ？成績良くて。）

……痛いトコついてくるなお前。

確かに、言われてみればそうだけど、今更なあ…

（んじゃ、ジャンケンポン一回勝負。）

俺が勝ったら黒、正軌が勝てばその色ね。）

どうやってジャンケンするんだよ。

まさか、目の前に出て来れたのか？

（なわけない。俺は口で言うよ。）

……釈然としないが、まあ良いか。

辺りをキョロキョロ見回して、大丈夫な事を確認する。

んじゃ、ジャンケン…

(グーッ！)

…あいこで、

(チョキ！…お、俺の勝ちー！！)

目の前の手は広げられ、敗北を示している。

…ん、ま、良い機会だし黒にするか。
ピロに負けたのは癪だけど。

店を出た頃には、3時くらいになっていた。

帰る途中、買い物をしている母さんと茶矢と真尋と遭遇し、四人でスーパーに行った。

真尋と茶矢が袋の中を聞いてきたが、『帰ればわかる』と言ってはぐらかす。

母さんには話したから、聞いてはこない。

「さあ！今日はセールだから皆に手伝ってもらおうわよお！！お一人様78円の卵がメイン！勝てば今晚はオムライス！！
行くわよー！！」

母さん先頭に、スーパーの前に並ぶ。

母さんは我先にと前の方に行ったが、俺は真尋と茶矢がおばさん達の波にのまれないよう背中を支える。

―チリンチリン!!

鐘の音を合図に、一斉におばさん達が走り出す。

最初は茶矢の腕を引っ張っていた俺も、立ち止まったらおばさん達の波に踏まれると直感し、茶矢を片手に走り出す。

こういう時に茶矢は小さくて有り難いと感じる。

真尋は足が速くて良かったと思う。

真尋はおばさん達の波より先に出て、メインの卵パックを手に取り離れようとした瞬間、波が追いついてきて飲み込まれてしまった。俺はおばさんを掻き分け、真尋の手を発見すると引き上げる。

その腕には三パックの卵。

よしよしとボロボロの真尋を撫でていると、母さんは先に次の場所へ走って行く。

それに気づいた茶矢が叫ぶと、おばさん達も走って行く。

俺達も走る。

次は12個入ったトイレットペーパーで、お一人様100円。

母さんは二つ手に入れると、次の場所へ走る。

俺達について行くのがやっと。

もみくちやになりながらも、何とか卵パックを母さんのカゴに入れた、何とか最後まで走った。

――帰り道、重い荷物を俺が持ち、母さん達はパンとか野菜とか軽い系の物を持たせる。

母さん以外の俺達はボロボロだ。

たった数10分でここまでなるとは……母さんを更に見直した日になった。

「今日は三人が頑張ってくれたから大漁よ☆
あ、そのコンビニでジュース選んできて良いわよ♪ご褒美だから、皆には内緒よ?」

荷物があるので、俺は母さんと店の前で待つ。

真尋達になっchanNを頼んで、夕焼けに近い空を見上げる。

「あら、漫画は大丈夫?」

『ん、大丈夫。茶矢に持たせてたから。』

「あらそくなの。今日はありがとね!」

バシッ!

背中を思いっきり叩かれた。

主婦の力なのか、背中がジンジンする。

痛む背中を撫でていれば、茶矢達が戻ってくる。

母さんにお釣りを渡し、俺になっchanNを渡す。

「じゃあ、帰りながら飲みましょ♪」

オレンジ色の空を見上げる四つの並んだ影が、道路に伸びた。

∴その後ろに誰かがいた事に、俺はまた気づいていなかった。

中編（GW）

晩御飯がくどいくらいの卵を使ったオムライスだった夜、真尋は喉の渴きを覚えリビングに。

音をたてないように扉を開けるあたり、彼の性格が伺える。

友恵だったら、気を配る事をせずに開けるだろう。

パタン…と閉めて振り返る真尋の目に映ったのは、ソファアーにもたれ掛かる黒髪の巨大な男。

正軌くらいの身長はある。

黒髪の男は気怠そうにテレビのチャンネルを変えているのを見ると、真尋に気づいていないみたいだ。

真尋は直感した。

「（…泥棒！？こんな夜中に！！！？）」

泥棒は基本人気のない時間に来ると思うが、まあそこは触れないでおこう。

真尋は扉に背を張り付け、どうすれば良いのか考える。
ここでお馴染みのライフカードの登場だ。

1. 闘う。
2. 叫ぶ。
3. 逃げる。

先ずは1番。

彼にそんな力はないと自覚している為…無しだ。

2番だが、叫んだら皆が起きてしまうし近所迷惑だと考えて、止めた。

彼の優しさに…乾杯。

残る3番だが…逃げれば皆が危ないと思い、これも捨てた。
頑張れ青年。

君の未来はきつと明るい。

手元に何もカードがなくなり焦り出した真尋に、更に危険が迫る。
何と、男がテレビを消して立ち上がったのだ。

これはピンチだ！

どうする青年！？

さっきの言葉は訂正させてもらおう。

君の未来は、…生き残ればきつと明るい！！

『ん？』

「！！」

おおっと、これは急展開。

男が真尋に気づいてしまった。

前髪が長くて顔が見えにくい！

男の表情が見えないのは真尋にとって痛い！
表情が見えてもピンチなのには変わらない！

おおっと、何と新たなライフカードが手渡された。

そこに書かれている言葉に、青ざめる真尋。

男は着実に真尋に迫っている！

どうする！？真尋！君の未来は此処で終わってしまうのか！！？

『おい、そんな所でどうしたん…』

「イヤアアアー！！！」

『うお！？』

最後に真尋に手渡されたカードには……—

4. タツクル。

……腕力でダメなら脚でどうだという事でしようか。

しかし、タツクルするには距離がないように思えるが…あ、やっぱり。

タタタタ——ポスト。

『……………。』

「……………。」

……………、この沈黙は痛い。

両者、何も話さない。

真尋に多大な威力を与えている様子です。

スッ――

おっと、真尋は男から離れて何をするんだ？

んん？両手を合わせて、俯いている。

震える声で何か話し出したぞ。

「……ボクを、捕まえて良いので、他の人達には、何もしないで、
下さい…グスッ。」

……………何と、自ら犠牲になったあ………！！！！！！
見ているこっちは切ない気持ちになったぞお！！

おっ、これはどうした事か！男は困っている！！
って言うよりか、状況を飲み込めていないみたいだぞ！！
これはチャンスだ青年！

『……おい、真尋。』

「…ッズ、な…何で、ボクの名前…知っている、の？」
『俺だよ、俺。』

これは懐かしの“オレ○レ詐欺”かあ！？騙されるなよ真尋！

黒髪の男は前髪を掻き上げると、真尋の涙も止まった。
途端に、赤面する。

男の正体はあ……アイツだ。

『…正軌なんだけど。

何で俺が真尋を誘拐しなきゃならねえんだよ。家は此処だっつうの。
』

――髪を染めたあ、正軌でした。

真尋の努力と涙も最初から、無意味だったのさ！

――
「うおっ！？誰！？」

『皆月、俺だよ。』

…ッハア、そんなに別人に見えんのかあ？』

前髪を掻き上げ、皆月に顔を見やすくする。

本気で驚かれたのは、今んとこ三人。

メシアには挨拶しても無視された。

茶矢と源希も驚いてはいたが、ちゃんと認識してくれた。

母さんと親父も普通に挨拶。

三人にジロジロ見られるのに居心地の悪さを感じ、食べ終わった食器を片付け、自分の部屋に行く。

椅子に座って、昨日買った漫画をもう一度見る。

これは何度見ても飽きない。

主人公の名推理とヒロインとの微妙な距離がたまらない。

読み終わった後、次はどんな展開になるのか楽しみで待ちきれない。

漫画を本棚に順番通りにしまい、クッションを抱きしめる。
この余韻に浸っていると、

——コンコン。

ノックの音。

それで現実に戻った。

『な、何だ!?!』

「自分だ。入るぞ。」

何も返事をしていないのに開かれる扉。

ドスッ!と知らないうちに壁にクッションを投げ付けてしまった。
手首をプラプラさせて、メシアの方を向く。

メシアは何時もの表情で俺を見つめる。

……ん? 何だ?

服の裾を捕まれて、引っ張られる。

メシアに少し近く。

耳を傾かせ、言葉を待つ。

「……夜には、帰る。学校の用意をしないといけないから。」

『そうか。ま、同じクラスだし直ぐ会えるな。家も近いし。』

「…同じクラス、か。」

その時は、よろしく頼む。」

『ああ。よろしくな。』

大分日本語を理解してきたらしい。

メシアにそう言うと、泊まっている間に源希に教えてもらっていたらしい。

源希のこういう気配りには驚いてしまう。

メシアが離れる気配を感じ、耳を離す。

一階に行くと思ったが…服を離す気配はない。

『…読む?』

メシアの事がわかってきたので、無理矢理離そうとはしない。本棚に並べてある“名探偵CONAN一卷”を差し出す。気晴らしくらいにはなるだろう。

「…名…探偵、コナン?」

『最後のアクセント変だったけど、まあいいか。推理系の漫画。オススメ。』

「…いいのか?」

『俺が聞いたんだ。読んで良い。破くなよ。』

力が強いから念のため。

片手で器用に読み始めるメシアを見て、俺も一安心。

リビングで茶を飲むか。

皆月達が何かゲームしてたな。

それ見て今日はのんびりしよう。

部屋を出ようと歩いて行くと、グイッ!と引っ張られた。それ以上動くと服が破れそうなくらいに。

振り向けば、熟読中のメシア。
あんな至近距離で見たら目を悪くするぞ…。
手を離す気配は毛頭ない様子だし、服の運命をごみ箱行きにする
のは可哀相だ。

『…メシア。メシア。』

「なんだ？」

…ちよつと待て、今いいところなんだ。」

グッ！と顔をますます近づける。

…どのシーンだ？

俺も気になるじゃねえか。

戻って漫画を覗き込む。

あの名シーンで、俺も思わず見入ってしまう。

そのままキリの良いところまで立ったまま見ていた。

『……ふう。』

「…面白いな、コレ。」

『わかるか、メシア。』

「ああ。わかる。」

ガシッ！と手を握り合う。

この日、メシアと趣味が一致した瞬間だった。

中編（GW）

色々と騒がしかったGWも、今日が最終日。

昨夜に残りの三人も学校の仕度で帰ったので、今日はやけに家が広く感じる。

モソモソと朝飯を食べていると、目の前で携帯を弄る源希が目に入る。

：…そういや、茶矢も真尋も皆携帯持っていたな。
皆月には『本当に高校生ですか？』と嫌味ったらしい風に言われたけど。

今まで必要だと感じていなかったのだから、持っていなかった。
両親に何回か勧められたけど、使わないから、と断っていた。
どうせ家族としか使わないし、外を出歩く事は家にいるのより滅多にないし。

『携帯、か……』

「ん？興味持ったの？」

「あら、やっとな？」

俺の独り言に何故か集まる親子。

親子が横で話し合うち、俺は黙々と朝飯を食べる。

母さん、洗い物の途中だったんじゃないのか。

『やっとな？』ってなんだよ。

高校三年生でも持っていない奴くらいいると思うぞ。

横で話が広がってるし、固まってきたるし。
メイン（俺）の意思はないのですか？

食器を流しに置いて、テレビを見る。

尚も似た者親子の会話は留まる事を知らない。

「じゃあ、そういう事だからね正軌。」

『……何が？話しに全くついていけないんだけど。』

「お昼食べ終わった後にでも行くわよ。携帯ショップ。」

お父さんには許可ももらったから。」

『……………はい…？』

…何でこういう事になるんですか。

誰か、わかりやすく教えてくれ。

やけにノリノリな親子とは裏腹に、俺はただ阿呆面で見ている事
しかできなかった。

『……で、コレが？』

テーブルに銀色の携帯電話が。

スライド式のように、画面がデカイ。

母さんと源希に普通に『使えれば良いから。』と言って、選んできてもらった。

GPS機能とか嫌な内容が聞こえてきたけど、任せておいた。詳しい話をされても理解できないだろうし。

片手で説明書を見ながらイジっていると、前に座ってため息をつく親子が。

肘をたて、その手を頬を添えて話し合う。

「今まで何回言っても『必要ない。』って言って見向きもしてくれなかったのに、ねえ？」

「正兄に、やっと高校生って自覚が芽生えたんじゃない？友達もできたし。」

「まあ、母さんは良いんだけどね。大学生にもなって『必要ない。』って拒否られたら、服にこっそりGPS発信機縫い付けてやろうかと考えてたし。」

『…オイ母さん。』

「あら、なによ。あたしだってね、息子の心配くらいするわよ。ねー？」

「ねー。失礼な兄貴だね？」

ま、いざとなれば俺が同じ大学行けば良いしね。母さん安心して良いよ。」

『もう付き纏うな。違う大学行け。』

グチグチ小言を連発する二人から逃げるように、携帯電話と入っていた箱などを持って自室に逃げ込んだ。

「使いすぎちゃダメよー？」

『わかってるよー。』

返事をしてからドアを閉める。

ベッドに座って、色々と試してみる。

インターネットにも繋がれるとか言ってたけど、多分使わないだろう。

親父の部屋にパソコンあるし。

アドレス帳を見てみると……何故か真尋のアドレスが。

下にメシアのがある。

次のページには自宅の電話番号、最後は茶矢と皆月と源希、親父のものもある。

——源希だな。

まったく、要らぬお節介をしやがって。

……けど、一応アイツらに知らせておこうかな。

俺だけ知っているのはなんか変だし。

誰から連絡するかな……

ーピッ、ププププ…ププププ…

『……あ。』

メールをするつもりが、間違えて通話ボタンを押してしまった。

初心者がよくやる失敗の一つである。

………へ、え、あ？

コレ、どうすれば良いの？コレ。

どうやって戻るんだ！？

…ピ、ピロ！おい、ピロ！！ 応答しろ！おい！！

ププ…ガチャ。

「…もしもし？」

誰か出たあー！ー！ー！ー！！！！

ピロ！出てこいピロ！！

（なんだいなんだい？そんなに俺様を呼んじやって。正軌はそんなに俺が好きなのかい？
いやあ、照れるねえー。）

そんなんじゃない！！

この対処方法を教えろ！俺には無理だ！！

（え、無理だって。ちょ、説明書説明書。説明書ザツと見せてよ。
そして、携帯にそんなに離れてたら何もできないし。）

『無理無理無理無理無理。ピロどうにかしろ説明書はドコ行った！
！？』

「……その声は、正軌先輩ですか？」

テーブルに置いていた説明書に目を通してしていると、携帯電話から声がする。

俺の名前を呼ぶ声。

パニックってる俺には、通話中だというのはとっくに忘れている。携帯電話が勝手に喋っているようにさえ思えてしまっている。

『ピロ！早くしろ！！何か喋ってる！』

「……は？」

（…んーと、ね。

まずは、携帯は喋ってないと理解しようか。
正軌落ち着け。今は通話中だ。）

『つ、通話中？…あ、そうだった。』

「正軌先パーイ。これ、正軌先輩の携帯ですかー？」

『お、おうー。今日、母さんと源希が買ってきたんだー。』

携帯に触れずに、呼びかけるように会話する。

携帯電話なのに変な会話なのは気にしまい。

電話の相手は茶矢だった。

「その反応ですとー、電話したのって私が最初ですかー？」

『そうだー。メールしようと思ったらー、間違えて電話になっちゃまったー。』

『よし。』という茶矢の喜ぶ声は、遠い俺には届かなかった。

「何でー、そんなに離れてるんですかー？」

ピロさんって方ー、そこにいるのですかー？」

『色々あってなー。まあ、気にするなー。』

ピロはもう帰ってったぞー。』

「それは残念ですー。」

それから会話は続き、茶矢に様々なアドバイスをしてもらった。

茶矢はピッコロの自主練中だったらしく、仕度は昨日のうちに終わらせたらしい。

真面目な茶矢らしい。

『練習の邪魔して悪かったなー。』

明日学校でなー。練習頑張れよー。』

「ありがとうございますー。いえー、電話嬉しかったですよー。1番で（ボソッ）

では明日ー。またわからない事があったらー、電話してくださいー。」

『茶矢ー、ありがとうなー。』

ピッ。

通話終了ボタンを人差し指で押して、通信を切る。

——よし、これで携帯電話の操作方法是記憶した。

茶矢にピロの事を質問されたのは驚いたが、なんとか乗り越えたからokとしよう。

ピロ、よくやった。

（へっへーん、俺を見直したか正軌！

俺も携帯の使い方レクチャーしたし、どんとこい！）

いや、俺も覚えたから。

…もしもの時は頼むな？

（おう！どんどん頼れ！！）

元気に頭の中で叫ぶピロを適当にあしらって、携帯電話をポケットにリビングへ下りて行った。

中編（GW）

…夜道を歩く俺の背中が見える。
どんだん、どんだん、見知った町を歩いて行く、俺。
目的地はわからない。

——ザリッ。

後ろで物音が聞こえた。

砂利を踏む、靴とは違う裸足特有の、音。

歩く俺は気配を察知していない。

刃物を擦り合わせるシャリ…と音に変えた殺気でさえも。

振り返る事さえも許さない、無言の圧力。

おい！危ないぞ！！

走って逃げろ！

危険を伝える為に叫ぼうとするが、喉が震えてくれない。

叩いて知らせようとするが、触ろうにも手が体を摺り抜ける。

まるで、透明人間みたいに。

——…俺は、俺を救えない。

（これがお前の現実だ。）

誰かが言った。

ピロじゃない、誰かが。

世界にその声を鈍く反響させる。

ボオン…ボオン…といったみたい。

ハッ！？と気づくけば、後ろに居たはずの殺意はもう俺の真後ろにいて、俺は必死に手を伸ばすが届かない。

走っても、走っても、背中に向けて振りかざすナイフは勢いを止めない。

『あ…あああ……』

——凶器が、突き刺さった。

目の前で飛び散る、絵の具で濃く溶かした赤が。

グラリと倒れる、海色の髪。

ドシャツ、とマネキンのようにコンクリートの地面の上に崩れ落ちた、体。

溢れ出る、目の前に作られた血の水溜まり。

フラッシュバックするのは、浴室の床、シャワーの音、鋭利なナイフ、尋常なほどの血、えぐり出す物体、そして、あの瞳。

二度も見た、感じた、臭いを記憶した、体が覚えている、

——恐怖——。

カタカタと痙攣する身体。

顔が青ざめる。

顔が引き攣る。

血の気がなくなる。

瞳孔が開く。

逃げたくても動かない身体。

気持ちと器が空回る。

視線を感じ、その方を見れば……俺が倒れていた場所に、何故か香織ちゃんが。

涙と血が混じり、赤が少し薄くなる。

俺を見る目に生氣はない。

あの時と同じ、瞳。

『……み…見ないでくれ…そんな風に、俺を、』

「まあさあきいにいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ツ
!
!
!
?
?
?

ガ
バ
ツ
！
！

誰かの大声に、夢から現実に取り戻される。肩を痛いくらい強く捕まれ肩を揺すられる。夏じゃないのに汗が凄い。

額や首に髪がくっついて、不快感。

「あ！正兄起きた？」

酷い魘され（うなされ）様だったよ！具合はどう！？」

『…………最悪だ。お前が馬乗りしてっから、重い。』

「ごめん！今降りるから！

気分はどう？顔色悪いけど、晩御飯食べれそう？」

『…………知らない。母さんに言っといてくれ。

シャワー浴びたら、直ぐ寝る。』

「…わかった。おやすみ、正軌兄。」

頭を抑えながら、階段を下りる。

足が思うように動かないが、手摺りを利用しながらも歩いた。

意識は朦朧としつつあるが、シャワーを浴びないと起きた時に面倒だ。

キュツ、キュア…シャアアア…………

風呂に置いてある椅子に腰掛け、シャワー口から湯気がたつ。

頭から熱いお湯が降り注がれる、それについ瞼が閉じられていく。

——このまま何もかも忘れられたら、どういう気持ちになるだろうか。

トラウマから逃げられるだろうか…

弱い俺は、最初からやり直す事は不可能なのだろうか…………——

ズルツ—！

体の全身の力が抜ける。

俺の意識は、もう途切れていた。

——ガッ。

意識のないはずの正軌の手が、瞬時に体を支える為に壁に肘を当てる。

シャワーの中に、小さく舌打ちする音が聞こえた。

グシヤリと前髪を掻き上げ、体を起こす。

眉間に深く皺を寄せ、鏡に映る自分を睨む。

『……ったあく、正軌のバカがあ！こんなになるまで溜め込みやがって……クソッ！！』

ガンッ！！

鏡を殴りつけ、苦虫を噛み潰したように苦々しい表情を浮かべる。反対の手を強く握り、それを額に当てる。

体、頭、顔、声、全て宮古正軌なのに、何かが違う。

雰囲気というか、心というか、見えないモノが正軌と重ならない。

『最近やあけえにシンクロ率高けえから気をつけてたけど、まさか

の悪夢で“入れ代わる”とは…俺の不注意だ…っ！
不安定なのはわかってたのに…頼れ、って言ったそばからコレか
よ…。俺様カッコ悪い…。糞野郎があ。』

黒髪の間から見える瞳から、シャワーとは違うモノが零れ落ちる。
とめない悔しさが彼の涙を煽りたてる。

拭っても、拭っても、子供のようにボロボロボロボロ流れてしま
う。

鏡から反映される顔はぐちゃぐちゃだ。

『へへ…』と唇の片端を上げる。

『……あーはー、俺が泣いてても意味ないじゃねえか。正軌の体だ
し。

早く出よ。今のうちに腹に詰め込まねえと、倒れられたらたまらね
えぞ。』

適当に体を洗って、浴室を出る彼。

髪を拭きながらリビングに行き、冷蔵庫からなっchanNを取
り出し立ちながらラッパ飲み。

正軌ならコップに注いでから座って飲む。

こんな姿は有り得ないのだ。

事実、正軌をよく知る源希が目を見開いているのが証拠だ。
信じられないモノを見たみたいに、彼を凝視する。

「……あれ、は？正軌兄、だよな？そうだよな？」

それ、どう…したの？珍しい、ね？行儀悪い、事するなんて、さあ。」

正軌は自分が不快だと思ふ事はしないし、誰かに注意する事は自分ではない。

大正時代の親父か、とツツコミたいくらいだ。

彼は一瞬『ヤベ、しくったー！！』と内心焦るが、顔には出さないようにする。

椅子に座り、空になったペットボトルを弄ぶ。

しどろもどろ言い訳を並べていく。

『い、いや、牛乳でああいうやつあるじゃねえか。牛乳の代わりだよ。』

「牛乳、まだあったよ？」

あれ、前に正軌兄『はしたない。やりたいなら庭でやれ。』って、無理矢理追い出そうとしてたよね？頑張って謝ったけど。」

『……腹へったんだけど、何かない？』

明らかに話を逸らす彼。

源希は不信感を抱きつつある。

…流石は正軌の噂の根源（弟）だ。

何十年も一緒にいるだけはある。

正軌にされた事を、ブラコンに近い源希が忘れるはずがない。

正軌の日頃の苦勞も見て取れる。

「それなら、母さんが部屋の前に置いてたよ。持って来ようか？」
『いや、いい。ありがとな。』

立ち上がろうとする源希を制止させ、彼は立ち上がる。
ペットボトルを投げ捨て、冷蔵庫からもう一本なっchanNを
取り出す。

ポン、と源希の肩を軽く叩いてリビングを出る彼。

正軌の身体の疲労で、彼もそろそろ限界間近だったのだ。

足元が定まらないので、ゆっくり階段を上がるしかない。

なっchanNが入ったペットボトルを持つ手が、やけに怠い（
ダルイ）。

『（……よくもまあ、こんな体で動けたな。倒れなかったのは意地
だな。

俺なら諦めて、あのまま寝てるよ。

正軌の頑固野郎。）』

軽い悪態を吐きながらも、やっこの思いで階段を上がった。

壁つたいに歩けば、部屋の前に皿に載ったおにぎりがラップして
ある。

源希の言った通りだ。

皿を持ち、肩を使って扉を開ける。

倒れて手元の荷物を落とさないよう注意しながら。

電気はつけずに、テーブルにおにぎりとなっchanNを並べる。

『……いただきます。ってか。』

ニヤツと笑みを浮かばせ、とも美お手製おにぎりを頬張る。

疲れからか味はよくわかりにくいが、美味いの一言に尽きる。

締めになっchanで流し込み、手を合わせてから『ご馳走様でした。』と呟く。

米粒を舐め取りながら、月明かりに照らされるベランダに移動する。

ベランダの手摺りにもたれ掛かり、下を見る。

街角からフードと殺気が丸見えだ。

これで隠れているつもりなのか？と彼は鼻で笑う。

暗闇に銀色の髪が見え隠れする。

今、正に体調万全なら遊びに行きたいのだが、正軌の体は眠りを求めている。

無茶をして傷つけるわけにもいかない。

無理をして明日に響かせるわけにもいかない。

『ま、今度機会があれば遊ぼつか。

正軌に何かしたら許さないけどね？この前みたいなさ。
じゃあねえー。』

一方的に喋って、相手に届くわけはないが別れの挨拶をして、ベランダのドアを閉める。

ベッドに腰掛け、壁を背に胸に手を当てる。

『正軌の事よろしくねー、サラと新入り。
今から寝るから。』

……あーあ、もう終わりかあ。

最悪の最終日だったな、GW。正軌と“入れ代わった”し。』

——ドサッ。

ベッドに横になり、目をつぶる彼。

食後なのも手伝ってか、寝息が聞こえるのは早かった。

——GWは、様々な“影”が姿を現してきた。

彼の登場もまた、序章にすぎないのかもしれない。

結末を知る者は、まだ誰も……

中編（GW）（後書き）

長かったGW、やっと終わりました！

自他共にお疲れ様です（笑）

はてさて、最後は暗めの終わりでしたが、お気に召していただけたでしょうか・・・？

ハッキリ言いますと、私は不満足です。同じ言葉、表現の仕方、色んな事ですね。

アハハ、自分終わった！！

まだまだ続きます。

中編（転人生と窓際と）（前書き）

GWも終わり、学生には最悪な学校生活の始まりです。

今回は、皆さんお忘れしているかもしれませんが、重要な日でもあるのです。

……皆と仲良くなれるかなあ？それは彼と私次第ですね。

では、

「待ちに待った、なわけねえ！！お前は早く書いて俺に見せれば良いんだよ！！！」

……お、おい、泣くなよ！そんなん嘘に決まってるだろうが！！おい！！……ったく、どうすりゃ良いんだよ……。あやし方なんて、知らねえ……。

——はあ？嘘泣き？騙しやがったのか？俺様を？

………ハア、今回だけは許してやるが、次からは承知しねえ。……後、泣くのはヤメロ。マジで焦るから。」

という、俺様我が儘野郎だけど根は良い方はどうぞ↑オイ

普通の方も、ごゆっくりお進み下さいませ。

↓

中編（転人生と窓際と）

……朝、か。

カーテンから差す光に優しく起こされて、ムクリと起き上がる。
風呂場から意識がないのだけど、服を着替えているあたり源希と母さんが引きずってくれたのだろう。

テーブルの上に置かれた空の皿とペットボトルが気になるが。

『……着替えるか。』

気持ちを切り替える為に、俺は立ち上がった。

「あ、正軌兄！おはよ！」

『おう。朝から煩えな。』

「昨日は様子が変だったけど、もう大丈夫？」

『……問題ない。』

昨夜の源希が起こした時の事だろう。

パンをかじりながら頷く。

源希は風呂上がりの事を質問したのだが、俺の様子を見てニカッ

と歯を見せる。

母さんが親父を見送った後、食べ終わったので俺も学校に行く為に鞆を肩に掛ける。

皿を母さんに渡すと、源希が一緒に行こうと急いで食べるが俺はさっさと玄関で靴を履く。

——ピンポン。

目の前の扉からチャイムを鳴らす人影が見える。

こんな朝っぱらから誰だ？

まだ8時前だぞ。

常識を考えろ。

そうこう考えてる内に、源希が追いついてしまった。

横で靴を履いている間に、朝の訪問者に一言文句を言ってやろうと扉を開ける。

ガチャ、

『…………おはよう。』

「おはよう。良い天気だな。」

メシアが立っていた。

日光で髪が輝いている。

パツと見て制服姿なのを考えてると、吉田の言っていた話が蘇る。

そうか…今日が転入日か。

学校に向かう時に通り掛かると言っていたし、一緒に行こうと思

ったのだろう。

一人じゃあ流石に不安だし。

「メシアだったんだ！おはよ♪」

「おはよう、源希。」

俺の横から顔を出す源希。

メシアも頷いて挨拶を返す。

源希と一緒になら大丈夫だろう、と先に行こうと前を向くが、メシアがジイーと見られていた。

久しぶりだな、とか感じる俺もメシアのペースに慣れてしまったらしい。

俺がいたら印象悪くなるってのに、コイツはわかってねえのか？

『……ちよっと待ってろ。』

源希にメシアと待つよう言ってから家に戻る。

数分後、鞆にホワイトボードを入れてから玄関に戻る。

扉の前で話し合う二人を見つけ、軽いため息。

『…待たせたな。

じゃあ、行くか。』

「うん！行こっかメシア！」

「ああ。」

先に歩く俺の横を挟んで歩く源希とメシア。

源希が一方的に喋り、メシアが聞いている。

俺はシカト。

学校に近づくにつれて学生が増えていく。

早く行けば人が少ないのだが、今日は遅くなったため人が多い。

しかも、メシアが横にいるのもあって女子が『キャー!』『うそー!?!』とか叫んで耳が痛い。

眉を寄せて耳を塞ぐが、二人は特に気にした様子はない。

メシアは慣れているのだろうか普通に歩いて行く。

早足で玄関に行きさっさと教室に行こうと階段に足を踏み入れるが、ガシッ!と後ろから鞆を引っ張られる。

思わず落ちそうになるのを手摺りを掴み回避。

振り向いて睨めば、やはりメシアがいた。

一年は校舎が違うのだが、源希はまだいる。

向き直りメシアの言葉を待つ。

『……何だ?』

「~~~~~なんだ。」

口を開いて何か話したようだが、よく聞き取れない。

メシアを囲む取り巻きが騒がしく、俺はイライラゲージが徐々に上がっていく。

メシアがもう一度言うが、やはり肝心なカ所が聞き取れない。

源希も耳を近づけて聞き取ろうとしている。

……このままじゃ、拉致があかない。

源希の耳を近づけて先に教室に行くよう促し、俺はメシアを人気がない場所へ引き連れる。

メシアは源希に手を振り、黙ってついて歩いた。

生徒が少ない職員室前まで歩くと、吉田がキョロキョロしているを発見する。

歩いている途中、メシアが転入生である事を思い出したのだ。

『吉田先生。』

メシアの手を離し、吉田の前に差し出す。

メシアは職員室の場所を聞きたかったのだらうと予想して。

「お、宮古……宮古!？」

か、髪を染めた、のか!!

黒澤を、連れて来てくれ、たのか。助かったぞ。

Good morning, Kurosawa.

How are you?

(おはよう黒澤。元気だったか?)」

「おはようございます。

はい、元気です。先生もお元気そうで。」

「Thank you. (まあな。)

じゃあ、宮古。先に教室に行っていてくれ。」

『わかりました。

後でな、メシア。』

「ああ。」

吉田に軽く一礼してから教室に向かう。

今日は廊下を歩いても静まらない不自然に首を傾げながら席につく。

教科書やノートを机に入れ、携帯電話の電源を切ったか確認する。しかし、光がついているのを確認し画面を開くと、メールが2件

着ていた。

茶矢と真尋からで、二人共似たような文面でメシアの転入を心配している。

カチカチと二人に返信をしていると、同級生が三人気まずそうに話しかけてくる。

「あのー…転入生、かな？」

「そこは、えっと、違う人の席だから、座ったらダメだよ？」

「もうすぐ来ると思うし、俺達が職員室に案内しようか？なあ。」

……そこまで別人に見えるのか、髪を染めただけで。

いや、今は眼鏡かけてるのも関係してるのか？

『……此处、俺の席だけど。』

前髪を耳にかけ、顔を見やすくする。

眼鏡を机の上に置き三人を見ると、息を飲む音が聞こえた。汗を流す三人。

「「す、すいませんでしたーっっ！！」」

『……いいえ。』

三人が教室を飛び出した後、小さく呟く。

普段は使わない黒い縁の眼鏡を眼鏡ケースにしまう。

席が最後らへんだと、時間割や黒板の小さな字などが見えない。

さっき時間割を確認する為にかけて、そのまんまメールを返信していたから、目が疲れた。

——キーンコーンキーンカーン：

チャイムが学校に鳴り響く。

急いでクラスに戻って席に座る生徒達。

そんな中、俺のクラスの女子は頬を染めて扉を食いつくように凝視している。

男子も男子で盛り上がっている。

そんな熱気の中、近づく二つの足音。

——ガララ：

「——「来た——ッッ！！！！」」」

「うわっ！？……な、なんだ、心臓に、悪い事を、」

「吉田先生！そんな事より転入生を紹介して下さいよ！！」

「美人な外国人なのはお見通しなんですからね！！」

「早くして下さい！！」

クラスの女子にも男子にも詰め寄られている。

哀れ、吉田。

吉田は胃痛を我慢しているみたいだ。

俺は暇なので、抗議に参加していない奴を探してみる。

ザッと見渡した限り、立ち上がっていないのは委員長くらいだな。

1番前の席で、吉田を心配そうにしている焦げ茶色の、前髪が長い女子。

髪を後ろで団子にして、余った髪はそのままにしている。

基本女子のほとんどが髪型を毎日変えているが、彼女だけは同じ

なので記憶に残っている。

教壇の机に身体を預け、吉田は掠れた声で彼女に言う。

「あ、浅倉……。まずは号令、頼む。」

「わかりました……。き、起立。」

俺くらいしか立ち上がっていないが、……。まあ細かい事を一々言わなくても良いか。

浅倉さんの号令で俺が立ち上がると、教室が少しだけ静まる。

彼女の声で挨拶を済ませ、一応全員が席に座る。

吉田はヨロヨロしながら、椅子に腰掛ける。

「く、黒澤。Come on.
(入ってきなさい。)」

扉に向かって呼びかける吉田。
声が死にかけている様だった。
――数秒経って、扉は開かれた。

ガラッ――。

「「「……！！！？」」」

メシアが入った途端、皆が言葉を失った。
口をあんぐり開けたまま顔を赤らめる男子さえいる。
俺以外がメシアに見惚れていた。

「……黒澤メシアです。」

今日からこのクラスで勉強する事になりました。
よろしく願います。」

パチパチ…。

吉田と俺が拍手をする。

すると、数える間もなく歓声が沸き起こる。

男子は机に上りだした奴までいる。

メシアは吉田が何か伝えたらしく、こちらに向かって歩いてくる。
俺の席の横の列で、俺から斜め後ろの席の後ろに空いた席がある。
そこに歩く際に視線が交わる。

カタン…とメシアが席に着くと、吉田は立ち上がる。

キーンコーンキーンカーン……

さて、一時間はなんだったかな？

中編（転人生と窓際と）

一時間目はLT。

中学校でいえば、総合にあたる教科だ。

「今日は、メシアも入った、わけだし、お前達も、そろそろ出席番号なのは、嫌だろう？」

この時間は、席替えを行う。」

「イヤッフウーイーアア！！！！セ・キ・ガ・エ・キターー！！！！」

「やったあ♪一緒に良いねえ！」

「うん！近くが良いな！」

席替えとは何故か盛り上がるものだ。

クラスの異常な盛り上がり様に、吉田もホッと一息ついている。

最初に視力が悪い奴を聞き、前の席を決めていく。

俺は眼鏡があるから、手を挙げる必要はない。

だけど、前の方が好ましい。

次にくじを引く順番の為、端と端がじゃんけんをして、浅倉さんがくじが入った袋を持って歩いてまわる。

適当にくじを引き、黒板に書かれている番号と比較する。

周りの連中は自由に立ち上がり、仲の良い奴と話している。

「引いた奴は、順番に副委員長に、報告しろ。」

吉田の言葉に、男子の副委員長の席の周りに人だかりが出来る。

俺は空いてから行こうと思い、ボケーとしていると、メシアが肩

をつついた。

前の席に座り、俺を見つめる。

『…どうした？報告に行かないのか？』

「正軌こそ、行かないのか？」

自分は男子生徒がやってくれた。」

『そりゃ良かったな。俺は、空いてから行く。』

「そうか。」

日常会話が出来るまでに成長し、軽く驚く。

くじの紙を弄んでいると、メシアが紙を取り黒板を見る。

「12…この列の、前から2番目か。自分は正軌の二つ後ろだった。近いな。」

『そうだな。まあ、前の席の方が有り難い。』

「…有り難い？」

「有り難い。」

国語辞典でもひけ。」

鞆からホワイトボードを取り出しメシアに見せる。

ちらっと副委員長の方を見れば、人だかりが少ない。

席を立ち上がり、メシアに『報告してくる。』と一言伝えてから向かう。

副委員長の机に紙を置き、名前を言う。

『12番、宮古。』

「あ、はい。わかりました。」

席に戻ろうと振り返ると、誰かとぶつかった。

相手は拍子に床に尻餅をつく。
相手は浅倉さんだった。

「ご、ごめんね。宮古君。怪我はない？」

『いや、俺の方こそ悪かった。立てるか？』

「う、うん。ありがとう。」

手を差し出すと、捕まって立ち上がる浅倉さん。

怪我はしていないみたいで安心する。

浅倉さんに、そばかすが両目の下あたりにあるのを初めて知った。

浅倉さんは柔らかく笑みを見せ礼を述べると、副委員長の所へ紙を見せに行った。

俺も自分の席に戻る。

吉田が発表するまで、メシアと二人、ホワイトボードを使って遊んでいた。

ビンゴみたいに3×3で9マスを書き、どちらかが○か×かを決めて、交互に○と×を書いていく。

最初に三つ揃えたら勝ち、という暇つぶしゲームだ。

メシアが言い出したのだ。

聞いた事のあるゲームだが、した事がないのでちょっとワクワクした。

しかし、途中で吉田が発表しだした為、メシアは席に戻った。

俺は一人で○×ゲームに挑戦する。

「…………じゃあ、移動しろー。」

ギギギイイイー……!!!!

一斉に席替えが始まった。

俺も椅子を机の上に乗せて移動する。

移動させて椅子を下ろそうとすると、後ろから声が聞こえた。

「うーん……黒板見えるかな。」

『…?』

振り向いて誰かを確認すれば、浅倉さんが手を口にあて悩んでいた。

彼女は茶矢ほど小さくはないが、女子の中では小さい方だろう。窓際とはいえ、クラスで1番デカイ俺がいれば黒板を見るのは難しいだろう。

ふむ、と考える。

俺は椅子下ろす前に浅倉さんに提案する。

『浅倉さん。』

「あ、宮古君。前の席だね?よろしくね。」

『ちょっとお願いがあるんだけど、良いかな?』

「何かな?」

首を傾げる浅倉さん。

俺は窓を指差す。

『俺の場所壁だから風が通らないんだ。もうすぐ夏近くなるし、暑くなると思う。』

浅倉さんさえ良かったら、席代わってくれない？』

「え？席を？」

…う、うん。良いよ。じゃあ代わろっか。」

まだ席替えしているのに紛れて、俺と彼女も机を動かす。

暖かい日差しを受ける窓際、後ろのメシアも空を見上げている。運動場では、体育をしているクラスがある。

……あの時、浅倉さんが俺の方を振り返ったのを、俺は知らなかった。

「じゃあ、これで終わる。

委員長、号令。」

「起立。礼。」

「点数悪かった奴は補習だから、忘れるなよ。」

「ゲー！最悪！！」

「もう嫌！テストなんてえく！！」

4教科のテスト返却され、意気消沈する奴もいれば浮かれる奴もいる。

俺は何時も通り。

俺はさっさとテストをしまつて、眼鏡を外す。

3番目は微妙に見えない時があり、中途半端だ。
前よりかは良いけどな。

鞆から弁当を取り出し、クラスを出ようと立ち上がる。

「何処に行くんだ？正軌。」

メシアに腕を引かれ、立ち止まる。

弁当を机に置いて、天井を指差す。

『何時も屋上で食べてるんだよ。』

茶矢達も来るみたいだし、メシアも行くか？』

「自分は購買に行かないとならない。」

『しゃーねえな。案内してやる。』

あ、携帯電話。』

「サイフ…。」

携帯電話を胸ポケットに入れて、教室を出て行く。

メシアは財布をポケットに、後をついてくる。

購買で真尋と茶矢に会い、そのまま四人で屋上に行った。

――一方、教室では――

ザワザワと正軌の話で盛り上がっていた。
クラスのムードメーカー的存在の男子が、周りの男子に話している。

「宮古さあ、印象変わったよね。髪染め直してから。」

「え？ 高校入学する前からあんな色じゃねえの？」

「違えよ。入学当初は髪黒かったんだよ。」

「俺も同クラだったから覚えてる。成績は変わらず良いけどな。」

髪染めてるのに真面目だからマジ嫌味かと思ったし。」

「あー。入学式のアレ、アイツが読んでなかったっけ？」

「それは違う。一組の山下って女が読んでた。」

「もー、アイツ意味不だし！！変な噂ばっかし！」

「黒髪になって眼鏡かけてたから、別人かと思って俺達声かけちゃったし、マジ最悪ー。」

ザワザワと正軌の話が広まる中、浅倉^{アサクラ} 和葉^{カズハ}は一人で弁当を食べ

ていた。

彼女は地味な為、友人も少ないのだ。

和葉は窓から見える屋上を見上げ、楽しげな声をあげる正軌達を見る。

弁当をしまつて、屋上が此処からじゃ見えにくいから、正軌の席に座る。

笑い声が絶えない屋上。

噂とは真逆の場所だ。

時折正軌の怒鳴り声のような声も聞こえてくるが、恐いとは感じない。

「：優しいよね、宮古君。真面目に授業聞いてるし、宿題も皆よりちゃんとやってるし。

皆が恐がって彼を見てないだけだよなあ。」

頬杖をつき、ため息を小さく零す和葉。

彼女の持ち物では違和感のある、黒いシンプルなシャーペンを見つめる。

正軌がするようにペン回しをするが、コロンと失敗してしまう。机の上でコロコロ：と転がるシャーペンを人差し指で止める。

大きな胸を机に乗せ、シャーペンを胸ポケットにしまう。

「さっきも席代わってくれたし：私の独り言が聞こえちゃったのかなあ？

宮古君、自分が悪いみたいに言ってくれたし。先生に聞かれた時も、『風通しが悪いから、代わってもらいました。』って……気を使わ

せちゃったな。」

和葉は教室にあるある物を一点に見つめ、『あー…』と頭を抱える。

長い前髪を指先でいじり、またため息。

彼女の憂鬱に気づく者は、誰もいなかった。

「——そういえば、正軌。」
『なんだ?』

一年生・Sが屋上で走り回る中、三年生は日陰でぼんやり見守っていた。

メシアはジュースはストローで飲みながら、腕を引っ張る。
正軌は慣れたもんで、耳を傾かせる。

「どうしてあの時、席が変わったのだ? 前の席の方が良かったんだろう?」

『んー…日当たり悪かったから。壁があると、鞆を横に掛けにくいし。』

「そうか。しかし、これからどんどん暑くなるが昼飯はどうするのだ?」

“クーラー”のある教室にするのか？」

『…俺よりアイツらに聞いてくれ。どうせ、教室になっても来そうだし。』

背中を壁に預け、空を見上げる。

メシアは正軌を暫く見ていたが、同じように空を見た。

——この古門清高校は私立校。

1クラスに1台、クーラーが設置してあるのだ。

夏は涼しく、冬は暖かく、快適に教室で過ごせるのだ。

流石は私立校だ。

「正軌先輩、何を見ているのですか？」

「……ハア、どうしよう。」

——彼女達が出会うのも、時間の問題。

中編（転人生と窓際と）（後書き）

委員長、浅倉 和葉登場。

地味なそばかす女の子。胸は大きいです。

さてさて、やっと委員長登場させたのに私は満足しています。
順番通りに出て来てくれるとか……フリーに続いて、委員長も良い
子だねえ。よしよし。

さてと、一日二話アップで頭が痛いぞお。晩御飯食べないと。

まだまだ続きます。

中編（放課後の教室）（前書き）

前話の“転入生と窓際と”の放課後設定です。

長くてごめんなさい。

最後らへんグダグダでごめんなさい。

遅くなってごめんなさい。

もう、色々のごめんなさい。

では、今回一年生・Sはほとんど出番なく三年生・Sがメインですが、それでも良い方はどうぞ。

最後らへんに一年生・Sもちょっと登場します。

では、どうぞ。

↓

中編（放課後の教室）

——キーンコーンキーンカーン……

「起立。礼。さようなら。」

「」「さようならー。」「」

「気をつけて、帰れよー。」

H L、小学校でいえば帰りの会が終わり、騒がしくなる教室。部活に行く者もいれば、寄り道を提案する者もいる。平和な日常風景だ。

俺は鞆に荷物を入れ、忘れ物がないか机の中を見る。確認が終わり、そろそろ帰ろうとメシアを見れば……静かに寝息をたてて熟睡していやがる。

教科書とノートが5時間目のままなのに呆れた。

ノート真っ白だし。

『……メシア、起きろ。

授業は終わったぞ。』

人気が少なくなったが、このまま置いて帰るのはできない。体を揺さぶって起こそうとするが、起きる気配はない。頬をペチペチ叩いても、唸るだけで目を覚まさない。

ため息が零れた。

「黒澤君、寝てるの？」

『え？』

横から声が聞こえ、パッとそちらを向く。

横に立つ浅倉さんが、メシアと俺を交互に見ていたのだ。

教室を見れば俺達以外後人数人だけで、教室はガランとしていた。廊下側でお喋りに花を咲かせている女子達である。

その女子達も、部活があるのか教室から消えてしまった。残るは俺とメシアと浅倉さんの三人。

メシアは一向に起きない。

浅倉さんも手伝ってくれている。

『浅倉さん、施錠は俺がやっておくから部活行って良いよ。時間もつたいないし。』

「え、でも：悪いよ。」

それに、宮古君は用事とかはないの？」

『俺は部活入ってないから大丈夫。特に用事ないし。』

メシアの背中を叩きながら話す。

メシアの鼻でも摘んでやろうか、とか考えてると教室から誰かが入って来た。

「ハア：ハッ、まだいたか：助かった。」

「吉田先生。」

息が切れ切れの吉田に慌てて駆け寄る浅倉さん。

吉田は顔色が悪い顔が、走ったからかちよつと赤い。

俺はそんな二人を見ながら、メシアの鼻を摘んだ。

苦しそうに眉をひそめるメシア。

俺は何秒で起きるか時計を確認する。

吉田は、浅倉さんに頼み事をしていた。

「すまないが、英語と古文の、ノート、国語のプリントを、職員室から教室まで、運んでくれないか？先程一気に、渡されて、机の上が占領されて、いるのだ。」

「今からですか？

うーん……わかりました。頑張ります。」

「浅倉、助かるぞ。

しかし…副委員長が、いれば良かった、のだが、一人で大丈夫か？私は職員会議、があつてな。」

「部活に間に合えば大丈夫ですから。」

笑顔で応対する浅倉さん。

職員室から教室までは階段を上らなくてはならないし、ノートとプリントを40人分持って歩くのは大変だ。

しかも女子が。

浅倉さんは『間に合えば』と言ったが、体育会系でもないのに何往復するのはキツイ。

パンツッ！！

「「!？」」

何かを勢いよく叩く音に、吉田と浅倉さんはビクッ！と肩を震わせた。

音の元凶は俺。

メシアの頭を思いっきり手の平で叩いたのだ。

今まで顔を上げなかったメシアが、不機嫌そうに起き上がる。頭が痛いのか、手で摩って俺を軽く睨む。

俺はそれを澄ました顔でスルーして、メシアにホワイトボードを見るよう促す。

「お前は何時まで寝ているつもりなんだ。もう放課後だぞ。

俺は何時まで待てば良いんだ？」

「……もうそんな時間か。

悪かったな。」

メシアは後ろ髪をグシャグシャにし、ボワアと髪をさせる。虚ろな瞳でホワイトボードに触れている。

寝ぼけているなコイツ。

デコピンして頭を覚醒させてみる。

『待たせた罰として、今からちよつと付き合え。』

「…？」

『ハッキリ言えば、荷物持ちだよ。』

ほら、立て。』

「荷物は？」

『職員室。』

席を立ち、教室を出る。

フラフラとボサボサ頭のメシアは服の裾を掴んでついて歩く。

廊下を見渡していると、階段を下りようとしている浅倉さんを発見。

下りる前に呼び止める。

『浅倉さん。』

「？あ、黒澤君起きたんだね。」

「ん…起きた。」

『良かったね。』と小さく笑う浅倉さん。

メシアは目を擦って頷く。

もはもはの淡緑色の髪が浅倉さんに見え、プツと吹き出す浅倉さん。

メシアは？を頭に浮かべ、俺は髪を結び直せと教える。

よく見ると前髪もボサツとしていて、手櫛で直してやる。

一通り笑った浅倉さんは、涙を拭い口元を手で隠す。

「二人共仲良しなんだね。」

黒澤君が第一印象と違って可愛いから、思わず笑っちゃった。ごめんね？」

「…自分が可愛い？何故謝るんだ？」

ヘアゴムで髪をサイドに結び、首を傾げるメシア。

浅倉さんは苦笑い。

立ち話をする為に呼び止めたのではないのを思い出し、俺はメシアを手で指し示す。

浅倉さんはキョトン顔。

『メシアはこう見えて力強いんだ。こうやって捕まれたら、服が破れるかメシアが離す以外解けない。』

「へえ、以外。」

宮古君と黒澤君、前々から仲良しなんだ。」

「仲良し？」

『色々あってね。』

さっきの吉田先生との話聞こえたんだけど、俺達も手伝っていい？」

『メシアが早く起きれば、頼み事されなかっただろうから。お詫びとして。』とメシアをチラ見すれば、手が服の裾から腕に変わっていた。

「よく聞き取れなかった。」と腕を引かれるが無視。

浅倉さんに『どうかな？』と聞けば、ブンブン首と手を振られる。アワアワと困った様子で俺達から一步後ずさる。

「そんな事ないよ。私、学級委員だし、黒澤君も疲れて寝ていたから仕方ないよ。お詫びなんて、そんな…。」

それに、これ以上宮古君に迷惑かけられないし…一人で平気だよ！大丈夫大丈夫。」

『…俺、浅倉さんに何かしたっけ？』

でも、女子一人で往復するのは辛いでしょ？」

「ふむ、話は全くわからないが俺は荷物を持てば良いんだな？」

『ああ、そういう事。』

じゃあ行くか。』

「ええっ!？」

ま、待って！宮古君！黒澤君！」

浅倉さんを置いて先に行く俺達。

メシアは俺の肩に腕を乗せて横を歩く。

肩が重いが、まあ仕方ないか、と諦める。

授業中もたまにワイシャツの背中を摘んでくるし。

『何だ？』と聞けば、「べつに。」と首を振るだけ。

背中を摘んでいるだけだし、授業の邪魔にならないから、そのままほっといた。

他の奴らには触らないのにな、とぼんやり考えながら。

——タンタンと浅倉さんより先に階段を下りて行けば、後ろで必至に追いかけている浅倉さん。

止まったら戻らせかねないので、俺は一定の距離を置いてメシアと話しながら歩く。

一階に向かう最後の階段を下りていると、トンツと背中に何か当たる。

立ち止まって苦笑いを浮かばせ、浅倉さんの呼吸が落ち着くのを待つ。

「ふ…二人共、早いよ…大変だった、んだからね…もう。」

『お疲れ、浅倉さん。』

もう職員室目の前だから、頑張つて。』

「大丈夫か、浅倉さん。」

『メシア、名前覚えたのか。』

「正軌が呼んでいたからな。下の名前は知らないが。」

「和葉^{カズハ}だよ。」

二人共、名前で呼んでくれたら、嬉しいかな。

私、地味だからさ、友達少ないし…。」

俺の背中にもたれ掛かりながら、息を整える浅倉さん。

メシアは聞こえなかったらしく、俺に聞いてきたので『和葉、って呼んでほしいって。仲良くしろよ。』と短く言えば、「そうか。正軌も仲良くするんだろ？」と返される。

直球で投げられ、どう返せば良いのか少し困る。

メシアは周りにとって印象は良好だが、俺は悪い噂が流れるほど良くない。

俺のせいで彼女の周りに人が寄り付かなくなるのは避けたい。返事を濁らせていると、後ろから驚きの声が。

「…え、宮古君は嫌かな？」

予想外の凄く悲しそうな声に、慌てて振り返る。

——その時、足が纏れた（もつれた）為にバランスを崩し、足場が遠ざかった。

俺に体重を預けていた浅倉さんもバランスを崩し、前に倒れる。

全てがスローモーションに見えた。

メシアが『正軌!』と叫んで手を伸ばすが、何も掴んでいないメシアの手を取れば巻き添えになってしまう。

そう判断した俺は手を引っ込めて、目の前に倒れそうな浅倉さんをどうするか考える。

前に突き飛ばしても、此処は階段。

怪我をしかねない。

だからと言って、このまま一緒に落ちるのも危険だ。

大怪我をしてしまうかもしれない。

メシアが彼女だけでもと制服に触れるが、指先を掠めただけで救出は無理だった。

俺は無い知恵を絞り、手摺りを強く握り、摩擦で痛んだが気にしていられない。

空いた腕で彼女を抱き留め、両足と片手で支える。

左手首が鈍く痛んだが、何とか大怪我は免れた。

俺は左手首を捻ったらしいが、彼女に怪我した様子は見られない。
大怪我の代償と思えば、安いものだ。

「正軌っ！和葉っ！」

急いで階段を走って近づくメシア。

『メシアまで支えられぞ…』と苦笑していれば、浅倉さんがバツ
！と顔を上げる。

怯えた表情で俺のワイシャツを両手で握り締め、泣きそうな顔で
大人しい彼女からは想像つかない大声をあげる。

「宮古君大丈夫！？わ、私がずっと宮古君にもたれ掛かっていたか
ら、宮古君バランス崩して落ちそうになって！私が！私が、っ！ご
めんね！ごめんね宮古く、」

『浅倉さん。』

彼女の慌てっぷりに苦笑いを浮かべ、彼女の背中をポンポンと軽
く叩く。

浅倉さんは『うゝ…！』とワイシャツに顔を埋めた。

メシアは俺と浅倉さんを見て、黙っている。

俺はメシアに『平気だ。』と伝えるが、メシアはジッ、と直視さ
れる。

この顔は信用してねえな、本当に大丈夫だったの。

こういう時だけはやけにしつこく迫ってくる。

困った外人さんだよ。

メシアから顔を反らし、浅倉さんに問い掛ける。
落ち着いた口調を心がけて。

『浅倉さん、大丈夫だった？怪我とかしてない？』

ごめんね、俺のせいで怖い思いさせたね。本当にごめん。』

「和葉だもん…。宮古君悪くないよ、私が悪いんだよ。

私の方こそ、ごめんね…。ごめんなさい…。」

涙声で呟く浅倉さん。

名前呼びじゃないのが嫌らしい。

子供っぽい彼女の物言いに、手首の痛みも忘れて笑ってしまった。
喉を鳴らして笑う俺に、メシアも浅倉さんもポカーンとした顔を見せる。

浅倉さん、意外と可愛い人だったんだな。

こんな時に名前呼びを主張するなんて、子供かよ。

さっきの事も、俺なんか悲しそうな声出すし。

変わってるなあ…。俺の周りの奴らは。

そういう俺も自分じゃ気づいてないだけで、本当は変わってるのかもな。

メシアと浅倉さんは目を合わせて、俺の様子を見ている。

俺は笑いをおさめて、浅倉さんに一つ提案する。

『じゃあさ、この事はお互い様って事にして、俺から提案。』

「……な、何？」

『俺も名前で呼ぶからさ、浅倉さんも俺達の事を名前で呼ばない？』

浅倉さんだけ名字で呼ぶのって、変だろ？」

『ね？』と笑って言えば、浅倉さんは顔を赤くさせる。

メシアにも『和葉さんに名前で呼んでほしいよな？』と聞けば、間があつた後にコクンと縦に首を振る。

和葉さんはワイシャツを引っ張って、背伸びをする。
グツと顔が近づく。

「……わ、笑った。宮古君、今笑ったよね？」

『あれ？俺の提案は気に入らなかった？』

「ううん！大賛成！」

メシア君と……正軌君！えへへ……♪」

小恥ずかしそうに笑う和葉さん。

元気になって少し安心した。

メシアは表情は変わらず、『何だ？』と首を傾げるもんだから、二人で小さく笑う。

……で、冷静になって考えれば、俺はそろそろヤバイ。

手首もそうだが、他にも色々と危険。

特に心臓とか。

だんだん顔が赤くなるのがわかり、顔を反らして片手で顔の下半分を覆い隠す。

……男の俺には、キツイ。

『……和葉、さん。そろそろ離れてくれない、かな？』

「……？」

…ご、ごめん！重かったよねっ！今すぐどこから！」

『い、いや…重いわけじゃなくて、その、そういう事じゃないんだ。』

「……正軌君？」

——耳まで熱いのはわかってるから、見ないでくれ。
メシアも服を引っ張るな。

理由を言わなくちゃならないだろうが。

……え、この空気は言わないといけない？

二人して俺を見るな。

頼むから見ないでくれ。

「正軌君？顔が赤いけど…体調悪いの？」

『……から…。』

「正軌、聞こえないぞ。」

『…だから、……が。』

「「え、何？」」

『……っ！』

だから！さっきから当たってるんだよっ！和葉さんのが！」

逆ギレしてやった。

ハッキリ言わせるな、俺だって男なんだから恥ずかしいんだよ。
早く気づいてくれ、頼むから、心臓がモタナイ。

和葉さんは顔を下にやると、やっと気づいてくれたのかカアア…

と俺と同じく顔を赤くして、急いで離れる。

メシアだけはわかっていないようで、俺に聞いてくる。
俺はシカトを決め込む。

二人の間に気まずい空気が流れる。

後ろ頭を搔く俺と、顔を床に向ける和葉さん。

メシアはまだ空気を読めていない。

『……ご、ごめん。和葉さん。』

「う、ううん……。私の方こそ、ごめんね。」

こんなに大きいと、邪魔なんだよ。肩凝る（こる）し。」

『そ、そうなんだ……』

女子も、大変なんだね。』

「遅いなあ、浅倉。」

……お、いるじゃないか。宮古と黒澤、まで。何しているんだ？」

『「先生。」』

「吉田先生。」

階段下から現れた吉田に、俺達はホッと一息。

第三者の登場は有り難かった。

タタタと駆け降りて吉田に遅れた事を謝罪する和葉さん。

俺達も下りようとした時、メシアに手首を捕まれた。

グッと握られ、激痛に顔を歪ませる。

メシアは顔を近づけ、話す。

口調は何時も通りだが、表情は怒っている。

「……何故、あの時に手を引いた？正軌が自分の手を掴んでいれば、こんな怪我はしなかっただろう。」

今回は運が良かったが、もしかしたら二人共大怪我をしたかもしれない。」

メシアが強引に手の平を開かせれば、摩擦で皮が剥けた部分が露あらわになる。

グーをしていたから、指先に血がついている。
意外と酷い有様だった。

：バレないように隠していたが、メシアにはお見通しだったか。
何でお前の方が、痛そうな顔をしてんだよ。

ため息を一つ吐き、メシアに頼む。

『それは悪かった。今回の事は俺も運が良かったと思う。』

「だったら、」

『しかしな、力に自信があるメシアでも、あの時何も掴んでなかったらメシアも怪我をしたかもしれない。』

180くらいの男を階段という足場が不安定な場所で引き止めるのは危険だ。違うか？』

「……っ。」

『この事は二人の秘密な？』

俺なんかが、これ以上周りに心配かけるのは嫌なんだ。』

「……正軌は、馬鹿だ。」

正軌のそういうトコロ、自分は嫌いだ。」

日本語で理解できてないのが多いと思うが、俺が伝えたい事は察したらしく下唇を噛み締めるメシア。

顔を歪ませて俯いてしまう。

俺はメシアの肩を叩いて、階段を下りる。

俺達三人は職員室に行き、言われた物を持って教室まで歩いて行く。

和葉さんにプリントを持ってもらい、俺とメシアはノートを持つ。大丈夫だとメシアに言ったが、メシアがノートをほとんどを持っ

てしまい、俺は全部の四分の一しか持てなかった。

代わりに、和葉さんのプリントをノートの上に少し乗せる。

教室までの道のり、メシアが終始機嫌が悪かったのを和葉さんは心配していたが、適当に理由を言って流した。

――ドサッ。

教壇の机上に全て置き、安堵する。

和葉さんはお礼を言った後、部活を思い出して慌てふためく。

俺達が『施錠しとくよ。』と話せば、暫く唸った後にまた何回もお礼とお詫びの言葉を言って、急いで教室を飛び出した。

『俺らも帰るか。』

「その前に保健室。さっき覗いたら、まだいた。」

『…はいはい、わかったよ。』

メシアが帰る仕度をしてから行くか。』

「…わかった。」

メシアは早急に机の上の物を片付ける。

片付けている間、俺は部活動中の生徒を見ていた。

運動部が声をあげて部活に励んでいる。

「正軌、行くぞ。」
『ん。』

メシアに半場強引に鞆を盗られ、保健室まで手ぶらで歩いた。

保健医に怪我をした理由を聞かれ、『階段から落ちそうになって』と詳しくは言わなかった。

『応急処置だから、帰ったら直ぐに病院に行きなさい。学校内で怪我したから、病院のレシートは明日此处に持ってくる事。良いわね?』と強制され、ガーゼと湿布と包帯を巻かれてしまった。

左手が見えていて痛々しい。

帰り道、メシアから鞆を取り返し、怪我をしていない手で持ち歩く。

並んで歩いていたら、部活をしている女子がメシアに手を振るのが見えた。

黄色い声もよく響く。

俺達はさっさと門を出て、家まで歩いた。

左手は痛むが、顔には出さない。

メシアが煩くなるから。

――しかし、俺はまだ、家に茶矢達がいる事を知らなかった。

家に帰って怪我を見た真尋が突然泣き出したり、
茶矢が卒倒しそうになったり、

源希が怪我した理由も聞かずに学校に犯人を探しに行こうとした
り、

皆月はそれを傍観してたり、

メシアは『病院について行く。』と言い出したり、

本当、色々と怪我より大変だったが……まあ、嫌な気はしな
かった。

神崎さんに会うのは憂鬱だけど、なんとかなるだろう。
だって、コイツらがいるんだし。

中編（放課後の教室）

夜に母さんと病院に行けば、久しぶりに神崎さんの恐い笑顔を見られた。

全力で逃げ出したくなっただのは言うまでもない。

神崎さんは怪我の治療している時、医者に聞こえないよう舌打ちと小さくボソッと呟いた言葉は忘れられない。

「ツチ。仕事増やすんじゃないよクソ野郎。こっそり手首折ってやろうか。」

『……すみません。』

無事な左手を見て心底安心したのは神崎さんには秘密だ。

やっぱり看護師なんだ…、と自覚した事も。

手の傷も暫くは痛むが痕は残らない、と医者が診断すると母さんは『良かったわね!』と俺の肩を叩いて喜んだ。

地味に痛い。

「左手首の方も時期に治るでしょう。ヒビとかは見当たりませんし。手首に負担をかければ、当然長引きますけど。」

んーと、週一で診断に来てもらう事になりますけど、よろしいですか?」

「わかりました。」

『はい。』

黒笑顔の神崎さんに見送られてホールに行けば、見知った人物が椅子に座って待っていた。

母さんに一言言って、その人物に近づく。

俺に気づいたのか、薄黄色の瞳を上に向け、直ぐに左手に移った。メシアは眉を寄せ、包帯が巻かれた手の先にそっと触れる。

「……痛むか？」

『別に。そんなに痛くはない。』

安静にしてれば、時期に治るらしい。怪我也痕には残らないってさ。』

「…良かったな。」

ホッとした顔に変わり、俺もちよつと安堵した。

メシアのせいではないのに、ずっとあんな顔を見せられたら居心地が悪い。

しかも病院にまで結局はついて来たし、俺より心配しているメシアに内心苦笑い。

『ありがとな。』と頭にポンと手を乗せれば、狼の尻尾が左右に振られた気がした。

メシアの右目を隠す長い前髪がサラッと揺らいた。

それからメシアと途中まで一緒に帰り、家に帰って扉を開ければ、調度親父が壁に顔面衝突している場面に出くわした。

源希が慌てて親父に駆け寄り、母さんは横で腹抱えて笑っている。

俺が声をかければ、スクツと立ち上がり『お帰り。』と何時も通りに言うが、鼻先が赤い。

リビングに入った親父の背中を見て、何となく嬉しかった。

寝る前にベッドで携帯電話を開くと、着信履歴と何十通ものメールが着ていた事にビビった。

ほとんどが茶矢と皆月から。

真尋は一時間に一回の電話を。

初めに真尋から電話したのは、1番マトモだったから。女子は恐い。

『…………メシア、どうやって入った。』

「玄関から。とも美に入れてもらったぞ。」

『母さん…………っ！何で入れたんだよ…ハア。』

朝から目を開ければ、メシアが間近。

耐性がついて驚かなくなった俺は、今後どんな事をされても平気だという自信がある。

手でメシアの顔を押しして起き上がる。

コイツは俺に何がしたいのかわからない。

前髪を掻き上げ、床に座るメシアに前々から疑問に思っていた事を質問する。

欠伸がもれた。

『他の奴にもそんな事するのか？』

「そんな事？」

『朝から間近に顔をやったり、布団に入ってきたり、顔近づけて話すのも、ベタベタ触るのもよく見れば俺だけだし。』

他の奴にもした事あるの？』

「正軌は嫌か？」

『別に、前はうつとうしかったけど、もう慣れた。』

「そうか。」

ヘニヤと笑むメシアは、嬉しそうだ。

質問の答えになってないが…ま、何でも良いや。

人前では最低10cmを守ってるし。

………ん？今、変な発言しなかったか？俺。

だんだん普通がわからなくなってきたような……。

「正軌ー！起きなさいよー！

源希も早くしなさい！

メシア君、朝ごはん食べてくー？」

『……メシア、先にリビング行っとけ。顔洗ってくるから。』

「わかった。」

メシアが部屋を出た後、ハンガーにかけてある制服に手をかける。
病院での件で、俺は学習したのだ。

メシアをどうやって部屋に出すか、を。

制服に着替えた後、洗面所で顔を洗って、寝癖を手櫛で直す。
後ろから源希が目を擦りながら現れたので、適当に挨拶を交わしてリビングに行った。

『……鞆返せ。右手はびんぴんしてっから。』

「……。」

「メシア！学校まで競走！」

「スタート。」

『オイ！お前らっ！』

走り出した二人を追いかけようとするが、脳内に神崎さんが登場する。

ニッコリ笑顔で『へし折ったるか？』と脅してくる為、走るのを断念。

ため息を吐いて歩けば、茶矢が後ろから走ってきた。

左手を見て心配した顔をするので、メシアと同じようにワシヤと頭を撫でて『平気だよ。』と教える。

茶矢とそのままのんびり歩いてれば、突然皆月が背後からタックルしてきた。

…倒れてなかった、コケなかったが、コンクリートの壁に左手を強く打ったので、その場に暫く疼く（うずく）まる。

後ろで茶矢の怒鳴り声が聞こえるが、抑える余裕は今はない。

二人が口喧嘩をしている間、俺は道の端で静かに痛みに耐えていた。

『……どいてくれ。』

「正軌、遅かったな。」

先に席に座っていたメシアの周りには沢山の男女が集まっており、俺が現れると席に座っていた女子が急いで立ち上がった。

机の上に鞆が置いてあり、右手と左肘を使って授業の用意をする。メシアは後ろで男女と話しているが、聞いてると相手が一方的に話しているだけだ。

周りの奴らはチャラチャラしている奴ばかりで、女子は香水の匂いがキツイ。

窓を開けて換気をしていると、前の椅子が引かれる音が聞こえる。

「おはよう正軌君。

昨日はありがとうね。」

『和葉さんおはよう。』

和葉さんがニコツと笑顔を向けて挨拶する。

俺は左手を下ろして、彼女に見えないようにする。

後ろでザワザワと『正軌って誰?』という話し声が聞こえるが、

俺は無視。

和葉さんは背中を向けて、授業の準備をする。

彼女に左手は見えなかったらしい。

これでまた誰かが心配したら、俺は手袋をして隠さないとならなくなる。

チャイムが鳴るまでボケーと外を見てみると、背中を引っ張られる感覚。

振り向けば、メシアが俺を見ていた。

周りの男女は驚いた顔をしている。

「正軌、コイツらは何を話しているのだ？理解できない。」

「え？メシア君、それって冗談だね？」

「…ッハハ！メシア面白いな！」

「もう、メシアったら！」

周りの奴らは焦りを一瞬見せたが、ごまかそうと笑ってメシアに触る。

メシアはそいつらを無視して、俺を見つめる。

「…………え、俺にどうしろと？」

メシアの言いたい事は察したけど、俺に言えと？

ただでさえワックスとか化粧品とかの臭いで気分悪いのに。

お前がハッキリ言いなさい。

『……メシアは日本語、あまり理解できないからな。仕方ない。』

「耳鳴りがさっきから酷い。」

「えーメシア大丈夫う？」

「保健室に行くか？」

「耳鳴りはお前達が離れば直る。

ガムを噛みながら話すな。」

そいつらには目もくれず、淡々と言い放つメシア。

俺を掴んでいる手にキュッ、と力が加わる。

……ハア、もう今更氣にする必要ねえか。
陰口なんか慣れたし。

メシアもちゃんと言ったしな。

俺は体ごとアイツらに向け、顔を見上げる。

『さっきから香水とかワックスの臭いがキツイんだけど。クチャクチャ煩いし。』

メシアは顔に出さないからあんたにはわからないだろうけど、迷惑してると思う。』

「……。」

「…っな、は？」

「何それ、意味不明。」

「い、行こうぜ皆！」

「マジ最悪。」

悪態をつきながらゾロゾロと去って行く男女。

離れた場所からチラチラとこちらを見て陰口を叩いている。

メシアは俯いたまま、震えている手を握りしめる。

小さく『ごめん…』と手を離すが、俺は別段気にしていない。

あいつらと関わるのもこれで最後だと思うし。

前から悪態ついてたのは知っていた事だし。

『…俺さ、“ごめん”って言葉嫌いなんだよね。』

「……。」

『どうせ言うなら“ありがと”にしてよ。その方が俺は好き。』

「…Thanks。（ありがと。）」

『いーえ。』

軽く息を吐き、体を前を向ければ：和葉さんが笑っていた。
柔らかく笑みを見せ、口に手をあてている。

『どうした?』と聞けば、和葉さんは首を振る。

ニコツと笑顔を見せて、

「正軌君、やっぱり優しいよね。

『ごめんなさい』より『ありがとう』が好きだ、って中々言えないよ?」

『そう? でもさ、謝罪より感謝させる方が気持ち良くない?』

「うん! 私もそっちのが好きだな。」

——キーンコーンキーンカーン：

和葉さんと談笑していれば、チャイムが鳴り吉田が教室に現れる。
和葉さんが慌てて号令し、今日の授業が始まった。

今日もほとんどがテスト返却で授業が終了した。

ファイルにテストを入れ、鞆から弁当を取り出す。

メシアは今日も購買らしく、『仕方ねえな。』と冗談っぽく言つて席を立つ。

教室を出ようとした時、ふと和葉さんが一人で食べている事に気づいた。

弁当箱を広げようとしている。

『メシア、ちょっと待て。』

「何だ？」

『和葉さんも誘わねえか？一人増えたって、屋上にはスペース有り余ってんだし。』

「賛成だ。和葉も一人よりは良いだろう。

源希達も、彼女なら喜ぶだろうし。」

『だな。』

和葉さん。』

「うん？」

弁当の蓋を開こうとしている和葉さんに呼び掛ける。

誰かと食べる気配はない。

和葉さんは弁当箱から手を離して俺達を見上げる。

俺は弁当を持ち上げて、左手を隠したまま屋上を顎で示す。

『俺達屋上で昼飯食べる予定なんだけど、もし和葉さんが良かったら一緒に食べない？』

「自分達以外に一年生が四人いるが、構わないか？」

「……え？良いの？」

凄く驚いた顔で目をパチパチさせている。

彼女の反応に小さく笑い、『購買にも寄るけど良い？』『自分が買わなくてはならないのだ。』と彼女に尋ねてみれば二つ返事で返ってきた。

——ジ——……

「……えっと、浅倉 和葉です。正軌君とメシア君と同じクラスだよ。

そ、そんなに見られると、は恥ずかしいよ。」

『お前らドコを凝視してんだよ。』

一旦目を離せ。』

パコーン！

源希の頭を叩き（はたき）、視線を外させる。

女子二人は自身のモノと和葉さんのモノを比べ、ダッシュでそれぞれ隅っこで体育座りをしに行った。

真尋は照れながらも、自己紹介を和葉さんにした。

流石は真尋だ。

源希も元気よく自己紹介をする。

……今のシャレじゃねえからな？

時間をもったいないので、女子二人はほっというて俺達は先に昼飯を食べる。

真尋と和葉さんは心配そうに、隅っこの暗いオーラ満載の二名の様子を伺いながら弁当を食べ進める。

これで真尋と和葉さんの人間性がわかるだろう。

「あ、友恵ちゃんが立った。」

「茶矢ちゃんの所に行ったね…。」

「何か話しているみたいだぞ。」

『あ、怒って立ち上がった。』

「どうしたんだろう？」

『皆月が茶矢に何か言った。』

「友恵ちゃんが茶矢に何か言ったんだよ。」

「友ちゃん先輩が茶矢ちゃんを怒らせちゃったんです。」

「友恵が茶矢を怒らせた。」

四人のほとんど同じ内容のハモリに、和葉さんは呆氣にとられている。

俺達にとっては日常茶飯事だから、茶矢が落ち着くか、誰かが止めない限りは全員何事もなかったかのようにシカトをする。

メシアが弁当のおかずを取ろうとするのを注意しながら、『貧乳ですよ何か!!?』と茶矢が叫ぶのをスルーする。

食べ終わった源希が説得に向かうが、二人に蹴られて戻って来た。真尋が行くが、怒鳴られて（八つ当たりされて）帰還。

メシアはややこしくなるから止めさせておいて、俺は『ごちそうさま』と弁当をしまってから重い腰を上げる。

最終的には俺が止めに行かなくちゃあならない。

理不尽なローテーションだ。

言い争う二人の間に入り、ガシツと肩に腕を回す。

皆月はこれから何を言われるのか理解しているから一切何も言わない。

冷や汗ダラダラである。

一方の茶矢は拗ねたように唇を尖らせている。

犬の尻尾と耳がペタンと伏せられて見えるのは、俺が疲れているから。

俺は二人に聞こえる範囲で語りかける。

『皆月、お前今回のテストどうだった？平均点は余裕だよなあ？』
「え、えーっと…」

『もし補習なんかを受ける点数とってみろ……土日に関ツーマンで叩き込んでやる。』

「……アハハ、楽しみだなあテスト結果。」

顔をスー…と俺から反らす皆月。
赤点とったな、この顔は。

次に茶矢を説得する。

『茶矢は大人だろう？皆月の挑発に乗ってどうするんだ？』

「……貧乳ですよ、ふん。」

『……っあー、そんな事気にするな。』

「そんな事じゃないですよ…女子には一大事です。」

ぶー、とますます拗ねる茶矢。

こんな時、どうやって宥めれば良いんだよ……男の俺には女子の気持ちにはわからねえ。

その場にしゃがんで茶矢を見上げる。

茶矢の機嫌が直る気配はない。

額に手をあて悩んでいると、ノスツと誰かが背中に乗った。
重い…これは、メシアか。

「まだ終わらないのか。」

胸くらい、直ぐ大きくなるだろう。そう落ち込むな。」

「メシア先輩にはわかりませんよ!」

『メシア、お前は退場。』

源希、メシア連れてけ。』

「あいよー。メシア、向こうで和葉ちゃんと遊ぼ!」

——メシアめ、傷口に塩を塗りやがって。

皆月はあっちに行ったから良いけど、茶矢はフェンスにもたれ掛かって床を見つめる。

——誰か、女の子の扱い方を熟知している人を連れて来てくれ。

中編（放課後の教室）

――放課後。

俺は茶矢と街を歩いていた。

昼休みの時、『どうしたら機嫌を治すんだ？』直球で問い掛ければ、茶矢は何時もの表情に戻り『放課後、買い物に付き合ってください。二人で。』と条件を出された。

向こう側の全員にも耳に入ったのか、屋上がシーンと静まる。

茶矢は至って真面目。

俺は予想外の事に、思考がついていけない。

「……駄目ですか？」

シュン……と茶矢の尻尾が元気をなくす。

スカートを皺になりそうなくらい両手で握りしめて。

買い物に付き合う、つつつても…荷物持ちは難しいな。

源希に頼んで、鞆だけ家に持って帰ってもらうか。

財布と携帯電話はポケットに入れば良いわけだし。

俺は立ち上がり、茶矢の茶髪の髪をグシャグシャと撫で回す。

『源希！今日、俺の鞆も一緒に持って帰ってくれねえか？』

「わかった！校門で待ってるね！」

『悪いな！』

んじゃ、今日の放課後な。そんなに荷物持てねえと思うけど。』

「……、約束？」

『指切りげんまん、しておくか?』

放心状態の茶矢に背を向けて、そろそろ教室に戻るか、と弁当箱を持つ。

和葉さんが左手の包帯に気づいたけど、『昨日帰り道でね。』とごまかしてメシアと先に行く。

一年生・sは茶矢を現実に戻そうと顔の前で手を左右に振ったり、肩を揺らしたりしている。

「あ、待って正軌君メシア君!」
みんな、またね!」

俺達を追いかけて屋上を飛び出す和葉さん。

茶矢は昼飯を食べないまま、チャイムを聞いていた。

「正軌。ちょっと良いか?」

『わからないヶ所でもあるのか?』

今は6時間目でテスト直しの時間。

俺にとっては自習に近い。

メシアも関係がなく暇そうだったので、一学期から今までのノートを貸して、ノートに写させていた。

俺はその間、間違えた問題をどこで失敗したのか解析している。

だがそれも終わり、右手で文字を書く練習をしているとメシアから指先でトントンと呼ばれたのだ。

体を後ろに動かし、身を乗り出す。

メシアが指し示したのは、先生は言っていない俺がわかりやすく覚える為のメモ。

ノートの空いたスペースを利用してメモを書いているのだ。

メシアは一応全て写し終えたらしく、残るはメモだけだ。

『これは、授業とは関係ねえよ。俺の解説メモだ。』

「メモと言うには、覚えた方が良いのだろう？」

説明してくれ。」

『はいはい。これ終わったら、次のノート写すか？持って帰って、明日返してくれば良いし。』

「頼む。」

シャーペンとホワイトボードを使って、ノートに書かれたメモの説明。

俺が覚えやすいようにしているから、他の奴がどうだかは知らないけど。

メシアは頷いたり、聞き返しを繰り返してメモを覚えたみたいだ。別に書かなくても提出点は引かれない、そう教えたが無視された。

コンニャロ、ノート貸さねえぞ。

そんな小さいマネはしないけどな。

新たなノートを渡し、『わからないのがあれば聞いてくれ。』それから前を向く。

机の中にノートをしまい、ふと前を見れば和葉さんが気まずそうに見ていた。

その手にはテスト用紙。

点数の部分は折られて見えないようにしてある。

俺はした事ないから、見えないようにする心理がわからない。

和葉さんは机の上に問題用紙と答案用紙を広げ、赤ペンでチェックされた問題を指差す。

「この問題がわからないんだ。答え見ても、どうやってこうなるのかチンプンカンプン。」

正軌君、教えてくれないかなあ？」

『問題見せてもらっても良い？』

近頃小さい文字も危うい為、眼鏡をケースから取り出して問題用紙を見る。

紙の端には色々とシャープペンと赤ペンで考えた跡があり、テスト中に必至に答えを導こうと頑張っていたのだろう。

努力している人には手をかしてやりたい。

俺は筆箱から色ペンを手に持ち、重要な部分に線をつけていく。和葉さんはペン先に視線を追う。

『これはノートに書かないで教科書で軽く済ませただけだから、覚えてないのかもしれないよ。』
今引いた部分だけど…』

前髪を耳にかけ、図式を裏面に描いていく。

前の解答も使って説明をすると、和葉さんはパチパチと拍手する。俺の説明でわかったらしい。

役に立てたと思うとホッとした。

「正軌君凄くわかりやすいね！ありがとう。」

はあ…先生もさ、こんな意地悪問題出さなくても良いのに…」

『ありがとう。』

この問題もテスト範囲には入っていたからね。さっき先生が話してたけど、“細かいところまで目を通しているか”確認する為の問題らしいから、意地悪ではないよ。』

問題と解答用紙を返して、眼鏡を机の上に置く。

嫌味に聞こえるかもしれないが、俺は難しいとは思わなかったからハッキリ言う。

予習復習して、教えられた範囲を勉強していればわかったはずだ。教科書には線を引いたし。

彼女も何か言うかな？と和葉さんの発言を予想していると、和葉さんは大きく裏切ってくれた。

教科書を取り出してページをめくり続け、小さく唸り声をあげる。

「うむむ…こんな端っこにあったんだね。

そっかあ、今度からはちゃんと隅々まで確認しなきゃな。勉強になったよ。」

パタン、教科書を両手で挟んで閉じる和葉さん。

ニコツと笑顔を見せてから『ありがとね。』嬉しそうに述べる。テスト期間中の真尋や茶矢達と重なり、自然と顔の筋肉が緩む。俺は失礼な事をしてしまった、と口には出さずに『ごめんな。』

謝罪する。

和葉さんは一瞬頬をほんの赤に染め、何か言おうと口を開いた時、

——キンコーンキンコーン：

授業終了のチャイムが校舎内に鳴り響く。

和葉さんは口を開いたまま、先生に呼ばれた通りに号令を始める。明らかに何か俺に話そうとしていた。

どうしたんだろうか？

号令が終わった後メシアに直ぐ声をかけられ、そのまま和葉さんに聞くのを忘れてしまった。

中編（放課後の教室）

俺達は校門で待ち合わせた後、鞆について来ようとするメシアと皆月を任せて街に向かった。

——で、ブラブラ二人で歩いているけど、茶矢はずっと黙ったままだ。

俺は自分から話す事はあまりなく、基本聞き手側なのでこんな時何を喋れば良いのかわからない。
ただ黙々と歩いているだけ。

店を首だけ動かして見渡していると、犬を連れた女性とすれ違う。

ウウウ：ワンワンッ！！

「！？（ビクッ）」

「マロン！ご、ごめんなさい！」

犬が茶矢の足元で喉を低く鳴らしながら吠えたので、女性は慌てて犬をリードを引っ張って走る。

小さい犬なのに強気だなぁ、と走る一匹と女性の後ろ姿から目を離す。

再び歩こうと手を動かした時、左手を引っ張られる感覚が。

見れば包帯を巻かれていない中指の指先を、茶矢が遠慮がちに握っている。

そーっと手を上に上げてみるけど、離れない。

プラプラ傷口が痛まない程度に左手を振って茶矢がどうするか実験する。

結果は、意地でも離さなかった。

：どうでもいいって事は俺が1番知ってるから何も言うな。

『犬苦手なのか？』

直感的に茶矢に聞いてみた。

メシアじゃあるまいし、真面目な茶矢がボディタッチするのは珍しいから。

触れたとしても、このように握ったままなのは何かあったとしたか想像つかない。

あつたのは犬に吠えられた事だけ。

しかし、間があつた後フルフルと首を振る。

苦手ではないようだ。

―では、この手は何を表しているんだろうか。

色々と考えては否定して、また繰り返してはため息を考えと共に吐き出す。

キュと手に力が込められる。

「……今日は、人が多いので、はぐれないよう保険として。」

顔が俯いているので表情が読めない。

放課後のこの時間、街は学生や主夫などが大勢集まる。

茶矢が人混みに飲み込まれたら捜し当てるのは困難だろう。

『そうだな。』小さな茶矢の手に親指を添えて再び並んで歩く。

『茶矢は何処に行きたいんだ？』

「えっと…雑貨屋さんです。シャープペンがボロボロになってしまっているの、買い替えようかな、と。他にも買いたい物があるので

すが、良いですか？」

『それくらい構わないぞ。』

「ありがとうございます。」

語尾が上がり、先程よりも声色が明るい。

顔を上げて話すようになった。

元気になったようで、楽しい茶矢を見て良かったと思う。

茶矢に導かれたまま女性が集まる雑貨屋に入って行った。

「…何アレ。仲の良い兄妹にしか見えないじゃないの。笑える☆」

「茶矢が嬉しそうだから良いんじゃないね。」

「あそこはどういう店だ？」

「雑貨屋だよ。女の子が好きそうな文房具やアクセサリーとかを置いているお店かな。ボクは入った事はないけどね。」

「ふむ、では男が好きそうな店は何と言うのだ？」

「え…えと、それは…」

「同じく雑貨屋だよ。呼び方は変わらないんだ。」

基本店の名前でよぶから、雑貨屋ってあんまし言わないかな。」

「ほら、あたし達も入るわよ。茶矢のあんな顔、見逃してなるものですか。フフフ…」

「友ちゃん先輩…そろそろ止めた方が…ああ、メシア先輩まで…」

「窪田…諦めろ。俺達はあの二人を止めさせる力はないんだ。」

「正軌先輩と茶矢ちゃんに怒られるより…どうしよう…」

「潔く怒られようぜ☆
俺はもう覚悟決めてる。」

皆月とメシアが店内に入った途端、女性客と店員に騒がれるメシアに二人が気づかないはずもなく……メシアは暫くの間、宮古家に出入り禁止を言い渡された。
約束を守らない奴は嫌いだ。

源希と真尋はというと、茶矢に色々と怒鳴られて真尋は落ち込んでいた。

皆月については茶矢が一週間ほどシカトし続けた。

お前らは何がしたいんだよ……ハア。

中編（放課後の教室）

「正軌、帰らないのか？」

『悪い…先に帰ってくれ。』

人気の少ない校舎。

生徒のほとんどは帰ったか各々部活動に励んでいる。

この教室にいるのは、今や俺ら二人だ。

和葉さんは後で鍵を閉めておくと言ったので、『ごめんね！ありがとう！』手を合わせて教室を駆け出した。

美術部の大会が近づいているらしい。

和葉に前よりも頼られているようだ。

俺は午後から感じている体のけだるさと偏頭痛に立つ気力もない。額を手で押さえ、痛みが和らぐ時を待つ。

メシアは『待つ。』と心配してくれたが、一人で帰りたい気分なのでやんわり断った。

メシアの事だから無理強いしてでも居座るかと思像して説得方法を痛む頭で考えていたが…

「…わかった。夜には電話して容態を聞く。」

苦々しい顔で教室を去って行った。

窓からメシアを見送り、手を振られれば小さく振り返した。

頭痛がだんだん酷いものに変わりつつある現状に、俺は机に俯せて眠る事にした。

寝れば少しは楽になるだろうという安直な考えで。

寝不足が原因かもしれないしな。

腕を枕に目を閉じる。

窓から訪れるそよ風が眠気を誘うのを手伝ってくれる。

チツチツチツチツ……

壁時計の中を走る秒針の音が静寂な空間に心地良く響く。

—その世界に飲み込まれるように、俺は意識を手放した……。

――

「……んあー…ちと、短期間でやり過ぎちゃったかな。

体調を崩させただけで“代われた”し。」

眠ったはずの正軌の体が、数分も経たない内に起き上がる。

だが、何かが違う。

口調もそうだが…眠る前と今では雰囲気が変わっている。

正軌を知る身近な人物にしか気づかないほどの、変化。

“彼”が出て来たのだろう。

座ったまま正軌の体を色々と動かし何かを確認しているようだ。
彼の意図は読めない。

左手の包帯を解いてガーゼを取り怪我の具合をしげしげ見つめたり、手首を回したりもしている。

痛みに顔を微かに歪ませるが、満足したのか包帯を巻き直す。

適当なのがバレバレな出来だが、彼はまあ良いだろうとため息を一つ。

自身でやったのに面倒臭いらしい。

けど、見た目はほぼ綺麗に処置を出来ているので文句は言えない。

鞆を手に席を立ち上がると、廊下を走る足音が。

彼は警戒するように扉から距離を置いたが……入って来た人物にひょろし抜け。

前髪を手で上げて、呼吸を整えるの様子を見る。

絵の具で汚れた黄色のエプロン姿の和葉だった。

肩を上下に動かしているー

「…よ…良かった。教室閉める前に、ハア…間に合って。」

ニコツと彼に笑いかける。

彼は答えるように笑顔を見せる。

源希の時に“喋ると怪しまれる”と学んだのである。

和葉は彼だと気づいていない様子で、横をすり抜け自分の机に向かう。

可愛いシンプルな筆箱を忘れていたみたいだ。

安心したようで、筆箱を片手に『また明日。』手をヒラヒラ振りながら教室から消える和葉。

和葉の背中に彼はボソツと呟く。

口元は孤を描いて。

『あんたらに任せたからね。正軌の事。
もし、正軌を傷つけたら………』

「…正軌君？何か言ったかな？」
『ううん、何でもないよ。』

和葉は扉付近で振り返り、小首を傾げる。

彼は貼付けた笑顔で首を横に振り否定をする。

和葉はそんな彼にちよっとした違和感を覚えたが、『そっか。』
そう言っただけの視界からいなくなった。

チャリチャリと指先で回される鍵がキンッ！と上に飛ばされた後、
パシッと手でキャッチ。

満足そうに教室を自身も出て行く。

彼は教室の鍵を閉め、職員室ではなく違う場所へ歩を進める。

廊下を早足で歩く彼の表情はまるで、獣を狩りに行く猟師の獣に
対する期待と気持ちの高ぶりを含ませたニヒルな笑みを浮かべてい
る。

待ち続けていたものを漸く（ようやく）手に入れる時のように。

ガチャ：――

彼が訪れたのは、昼休みに使用している屋上。

誰もいないはずのそこに、銀色の髪の方がフェンスの前に立っ
ていた。

彼は喜びを押し殺すように話し掛ける。

『よう、フリー？フリーター？だったか。それか“ストーカー”って呼んだ方が良いか？』

「あゝあ！？お前殺されてえのか糞野郎が！！？」

『ヒヤッヒヤッヒヤッ！やっぱしお前短気だな。口車に乗せられて痛い目を見るタイプ、そうだろう？』

それに：あんな隠れ方バレバレだったの！』

腹を抱えて銀色の髪の男、フリーを指差して嘲笑う。

今日のフリーは制服姿だ。

此処の学生なのだろう。

首に身につけているのか巻いてるのかわからないネクタイの色を見る限り二年生のようなだ。

顔はやはりメシアによく似ている。

フリーは手に持っていたナイフを構え、戦闘体勢に入る。

だが、彼は笑ったままフリーを見てこう言った。

『二対一とは卑怯者だな。

なあ、パチンコ構えてる銃を腰に装備した茶髪の兄さんよ。違うか？』

「あちゃーバレちゃったじゃん。影薄いのが取り柄なのに。」

「バ、バカ赤也^{アカヤ}！！のこのこ出て来てどうすんだよ！！アホ！！」

給水タンクに隠れていた茶髪の男が姿を現す。

片手に最新のi：何とか：まあパソコンみたいな四角い黒い機械を持っている。

赤也と呼ばれた男は、彼が言った通りパチンコと銃を腰のベルトに装備しており、フリーに困った呆れたような顔を向ける。

赤也は機械を手慣れた手つきでタッチしながら、フリーに説明する。

「あのなあ：僕はこの人の見えない所で応戦しようとしてたのに髪の色とか持ち物全てバレたんだぜ？構えてたのもパチンコだったし。」

「っな！？何でバレる所にいたんだよ！！バカヤ！！」

「おいおい、フリー。お前も僕が見えない場所に隠れてたのを見ていただろう。それなのに：この人は見破ったんだよ。」

隠れても姿見せても大差ないんだよ。」

『そゆ事。フリーよりも赤也って連れの方が賢いようだなあ。ツハハハ！』

「：：ウツセエアア！！叩っ切ってやる！」

『なあ、赤也二年生。』

ちよっと取引しねえか？』

「僕と？」

フリーは彼目掛けて駆け出してナイフを振った。

：が、彼に当たった感触はない。

辺りを見回せば、赤也と給水タンク前で何やら携帯電話を取り出して話している。

何時の間に！？とフリーが驚いているのもつかの間、彼と赤也は会話を終わらせたようで彼は右手を使い器用にそこから飛び降りる。扉の取っ手に足を一旦置き、そのまま床に降りる。

慣れていないと怪我をする可能性が高い技だ。

左手を使わずに、しかも右手だけで。

これを正軌がやるのは無理だろう。

下手したら怪我を増やす確率が高い。

啞然とするフリーを無視して、屋上の隅に投げられた鞆を手に取り埃を払う。

屋上を去ろうとした際、フリーが背中に呼び掛ける。

「宮古 正軌！あんた何者だ！！？」

フリーの言葉に彼は口端を軽く吊り上げ、背を向けたままこう呟いた。

『俺は“正軌”だけど“正軌”じゃねえ。

俺に逢いたきゃ、来月まで待ちな。ストーカーさん♪』

「……オイ！待てよ！

どういう意味だよ！！？」

——ギイイイ、ボタンッ！

意味深な言葉を置き手紙に、彼は屋上を去って行った。

赤也は階段を使ってフリーの所まで行く。

彼は苦笑いを浮かべて。

「フリー、あの人二重人格かも。手を出さないで正解。」

「ハア！？どういう意味だよ！！！」

感情を露にフリーはナイフをしまって、機械の画面を見るように促される。

そこには、一件の電話番号。

正軌の番号らしい。

フリーは意味がわからず、赤也を睨み据える。

鋭い眼光に赤也は『まあ聞けよ。』とフリーに話を聞くよう落ち着かせる。

「俺があの人を調べたのとフリーが見張った結果はコレ。前に見せただろ。」

画面をポンと叩いて、一つのグラフと情報を見せる。

フリーは素直に頷く。

「この情報とさっきの宮古って人の態度と口調。変だと思わないか？情報だと喧嘩を好むような人物じゃなく、噂とは真逆の性格だ。フリーと会った時にサラリーマン助けようとしたみたいな。」

「っ！？アレは、金に困ってて、むしろくしゃしていたからカツアゲしただけであって！居候が勝手に登場したけど負けたわけじゃあ、

「はいはい。“あの人”には怒られたみたいだから、僕は何も言わないよ。」

で、普段の宮古って人とさっきの人と色々比較してみた結果がコレ。

」

一つの表をフリーに見せる。

……だが、フリーは凝視したまま固まっている。

赤也は画面に触れながら、説明していく。

「これが普段の宮古って人の声の周波数で、こっちがさっきの人の。これを比べると若干誤差がある。こっちの画像は彼の………って、その顔は理解できてないね。フリー。」

「……っあー！頭痛えー！！」

「フウ、仕方ないか。フリー勉強苦手だもんね。基本、僕のカンペで点数とってるようなもんだし。」

バシッ！と頭をグーで殴られた赤也。

フリーは赤也から機械を奪い、表に目を通している。

理解できないのに、無駄な努力をする。

赤也は頭を摩りながら、画面に触れていく。

「これらを比較してみると、ほんの僅か（わずか）にズレがあるんだ。

僕の予想だと、宮古って人は人格が二つある。しかも、片方しか意識を外に出す事ができない。

病院にある機械つけてやれば確証に繋がるけど。」

「…ふ、ふん！」

「わかったフリしなくても良いよ。

まあ、明日実験してみるし。」

機械を大きめの肩掛け鞆に入れ、腰に巻いたベルトも一緒にしま
う。

赤也は楽しそうに『フフッ♪』と笑う。

茅の外状態のフリーは面白くない。

ガシッと自分より顔半分くらい低い赤也の肩に腕を回して体重を
かける。

赤也は倒れそうになるのを両足でなんとか踏ん張り、フリーを見
上げる。

「な、何？重いんだけど？」

「さっきアイツと何を話してたんだ？電話番号だけじゃねえだろ。」

「ああ…フリーが離れてくれれば、教えてやるよ。」

「まったく貧弱な足だなお前。」

赤也から離れ、腕を組むフリー。

偉そうな態度にため息をつきながらも、ネクタイを直す。

鞆から機械を再び取り出し電源を入れる。

「宮古って人の人格……まあ仮に“K”にしよう。

フリーがKにナイフを振りかざす前に僕の前まで上ってきてね、

『今は正軌の体調も悪いし、左手も怪我しているから遊んでやれねえ。来月には治るから、電話番号教えろ。』

で交換。」

「……。」

「交換した後、Kが笑ってこう言った。

『番号使ってハッキングするなり嫌がらせするなり好きにすれば良いが、もし怪我が治れば1番にお前に向かうから覚悟しろ。その機械、代えはまだ作ってねえんだろ?』」

「……ドンピシャかよ。何者だアイツ。」

「誰にも言っていない事を言い当てるから怖かったよ。初対面なのにさ。

壊されたら困るからアジトに行ったらアヤちゃんに予備用の作ってもらお。

あ、後。

『正軌の体に傷つけたら皆殺しに行くからな。』
って笑顔で。ハッターが本当か読めなかったよ。」

「ッハ！俺があんな奴ぶっ殺してやるよ！

来月まで、か……それまで退屈じゃねえかよ。」

「そんなの知らないよ。

僕はアップルが心配なんだよ。」

「機械に名前つけるとかキメエ。

あ、あいつ。」

フェンスにもたれ掛かり下を見る。

すると、彼が校門に向かって歩いている姿を発見。

赤也もそれを見る。

彼はチラッと屋上を見上げた後、背中を向けたまま左手をヒラヒラ振り上げる。

挑発しているみたいに。

・
・
・
夕日が照らす教室、変わり始めた“ ” に気づく者はまだいない。

中編（放課後の教室）（後書き）

はいパーン！↑

すみません、台詞ばっかしで、色々と最後らへん適当で申し訳ない。
NEWキャラまた出して申し訳ない。すんません。

赤也は勝手に出て来ましたので、デコピンしときます。↑
もうちょつとで出番だったのに……メッ！！

さてと、頑張るか。

まだまだ続きます。

中編（優しい人）（前書き）

短くて適当です。

すんません、眠いッス。

では、今眠い方は寝ましょう↑

そうでない方は、どうぞお進み下さいませ。

↓

中編（優しい人）

——ピンポーン。

『……熱い。メシアか。』

「違う。」

『じゃあ、この髪の色は誰のだ？』

額に怒りマークを浮かばせて手に絡まっている淡緑色の髪の毛を持ち上げる。

何んで布団に入ってんだよ。

6月近いからジメジメしてるし、蒸し暑い。

起き上がればメシアは不満顔で携帯電話を指差した。

「昨夜電話したのに出なかったのは正軌だ。源希に聞けば爆睡していると言っているし。」

『……それは悪かった。』

実は、教室で寝た後から記憶がないんだよ。

風邪ひいてるかもしれないから、あんま近づくな。』

咳ばらいをしてメシアを押し返す。

メシアが腕を掴んでいて後ろが壁な為、あまり離れない。

俺がベッドから立ち上がりメシアから離れようとするが、グイッと腕を引っ張られベッドに戻された。

頭がグラグラしてんのに…こんなにやろう。

風邪うつるかもしれないから触るなって。

聞いているか頑固メシア。

頭を押し付けるといふか前屈みでもたれ掛かるメシアの頭を軽く叩く。

体が怠いから、力が入らない。

咳込む俺の背中を摩ってくれるが、その前に俺から離れなさい。

『ハア：もう知らね。風邪で苦しんでも俺のせいじゃねえからな。』
「無論だ。」

今日は休日。

一ヶ月出入り禁止したが、もう面倒だからいいや。

俺は着替える。

『メシア、母さんからマスク貰って来てくれ。咳が酷いから。』
「わかった。」

なんとかメシアを部屋から出して、着替えにかかると、
上着を脱いで服を着ようとした瞬間、

——ビュオツツ！！バツシイインッ！！！！

『グアアッ！！？』

背中に凄い衝撃が。

目の前のベッドに倒れ込む。

「正兄大丈夫！？ものっそい音が聞こえた……あら、お着替え中だった？失礼しましウブッ！！」

『今更んな事気にするたまか愚弟が。何が飛び込んだか調べる。痛え……。』

「もう、冗談が通じないんだから。ん、コレかな？」

背中を労りながら起き上がる。

…病人の体になんて事しやがるんだ。しかも素肌に。

ヒリヒリするし。

メシアがマスクを持って部屋に戻ると、何故か硬直し手からマスクを落とした。

意味がわからん。

なんだその顔は。

源希は背中を撫で、ベランダから飛び込んだ物体を見せる。

『……frisbee?』

「何か普通のより重いよ。」

「正軌、何故上半身裸な」

『着替えてたんだよ！変な目で見んゴフツゴホ！』

怒鳴ったらむせた。

くそっ、頭痛がまだ酷いつてのに。

メシアは急いでマスクを渡す。

源希はfrisbeeを調べている。

何か言ってたな…重いとかなんとか。

「あ、すみません！」

僕のフリスビーが入ってしまったみたいで…」

扉から茶髪の男が入って来る。

見知らぬ男で、大きな肩掛け鞆が特徴的だ。

茶髪の男は源希が持つフリスビーを指差し、平謝り。

……どうやって入ったコイツ。

『オイ、お前。どうやって入った？』

「あ、玄関からです。此処のお母さんが入れてくれました。」

「コレ重いねー。まるで機械が入ってるみたい☆
どうやって作ったの？」

「コレ貫い物なんだよ。凄いでしょ？」

道路で遊んでたら間違っってこの部屋に入っちゃったらしくて……あの、怪我とか大丈夫ですか？」

背中が痛むが、だんだんひいていっている。

上着を着て縦に頷いてみせる。

「良かったあ！」

「ねえねえ、あんた茶矢の兄ちゃんの“赤也”さんでしょ？」

「あ、うん。よく知ってるね。茶矢には嫌われてるのに。」

そういう君は？」

「俺は源希だよ！茶矢とは小学生からの幼なじみ♪

赤也さんの事は写真で見たから覚えてたんだ！」

和気あいあいと語り合う二人。

俺はフラフラとベッドに座り込む。

メシアは床に座って赤也という奴を見つめる。
知り合いなのか？

「見覚えのある顔だ。」

「あ！長居してすみませんでした！

源希君、茶矢の事よろしくね！」

「うん！

あ、俺赤也さん見送ってくね！」

タタタ…と階段を下りていく音が遠ざかる。

しかし、窓が開いてたとは偶然にも良すぎる。

母さんが開けたのだろうか？なら編み戸くらいしてほしい。

『メシア、俺は寝るから帰れ。本当にうつしたら俺が気分悪い。』

「午後から真尋と茶矢が来るぞ。例のケーキ屋が新しく変わったようだな、自分も誘われたのだ。正軌も行くのだぞ。」

『パス。これ以上酷くしたら身がもたない。』

「心配するな、背負って行く為に自分がいるのだ。」

『…拒否権は無しかよ。』

んじゃ、来たら起こしてくれ。寝ないとしんどい。』

俺が眠った後も、メシアは名探偵CONANをベッドにもたれ掛かりながら側にいたという。

「フリー、お待たせ。」

赤也は物陰に隠れていたフリーに近づく。

フリーはガムを膨らませたり噛んだりを繰り返している。

赤也は鞆から機械を取り出し、楽しそうに話す。

「フリスビーはフリーのせいで宮古って人に当たったらしい。源希君に拾われたのは焦ったけど、なんとかやり過ごせた。メシアさんも居て驚いたけど、相手は僕の事忘れてたみたい。」

「影薄いのが赤也の取り柄だしな。」

「自重しろ。」

で、さっき会ったけど、風邪ひいてるみたいで僕を見ても気づかなかった。初対面みたいな顔してさ。ポーカーフェイスには思えなかった。

結果、二重人格の線は強そうだ。」

「ツチ！一ヶ月も待たなきゃならねえってのがウゼエ。」

ガムを吐き捨て電柱に当てる。

種を返して歩くフリーの横を赤也は小走りで追いかける。

「源希君も勉強できるみたいで勘も良い。フリスビーにちよつと手を加えただけで、機械だってバレた。まあ、本物持ってるらしいから仕方ないか。」

一応、要注意人物。」

「金髪チャラ男に興味はねえよ。
たく、居候もいるとかタリイ。」

フリーと赤也はそのまま街へと消えていった。

「ジャジャン☆どう！？君達の意見を参考に改良してみました！
甘い物苦手な子の為のメニューも増やしたんだよ！」

「ウォ！2階まであるんだ！！メニューで選ぶのも出来るみたい！」
「空気綺麗だね。良い匂いがする。個室があると、一人でもゆつくりできるね。」

「個室が奥にあるのですね。一階は男性用ですか。中々好みです。」
「女性客が多いな。早く食べよう。」

『……ッゴホ。』

あの例の店長が源希と真尋の手をとりブンブン振っている。
店に入るとテーブルが少なくなり、スッキリしている。

奥へ続く通路の奥には部屋が小数ある。

2階も似たような造りで、部屋は一階より少ないが広めに造られている。

店長に一階の部屋を案内されるままついて行けば、部屋の中に皆月が座っていた。

ケーキやジュースを先に飲み食いしている。

……待つ事は出来ないのか。

「先輩達遅いですよ、先に食べちゃいましたよ。」

「正軌先輩、先に座って下さい。体調が悪いのに無理させてしまいですみません。」

『皆月は常識を茶矢から教われ。基本は全員で食べるものだろう。』
「だってお昼食べてないんですよ。喧嘩しちゃって。」

『自分が悪いなら素直に謝るんだな。』

俺はメシアに負ぶされそうになって大変だった。』

「風邪：苦しくありませんか？辛いならお家まで…」

「友恵の気まぐれで付き合わされるこちらの身にもなってほしいですよ。」

正軌先輩、眠っても良いですよ。」

『いや、せっかく来たからお前らは食べに行け。』

俺は留守番しているから。』

「自分も残るぞ。」

『……メシア、なっchanNジュース持って来てくれ。』

ついでにメシアの分のケーキや菓子も持ってこい。真尋達も連れてな。』

「ほら、部屋は友恵ちゃんと正軌兄に任せて俺達は取りに行こう！時間がもったいないよ！」

メシアと源希に任せて、俺は皆月と部屋で待つ事にした。

全員が出て行った後、皆月が皿を動かして俺の隣に移動する。

罰が悪そうな顔でケーキをモクモクと食べる。

プライド高い皆月は言葉に出さない代わりに態度に出る。
チラチラと様子を伺ったり、何か言おうとして口をつぐんだりを
リピートして中々言い出せないようだ。

『ッゴホ、皆月と二人きりってのは初めてだな。』

「：普段はあの二人がいますしね。」

『親と喧嘩したって、朝からか？』

「昨日の夜からですよ。テスト結果が父親にバレたので。」

コンコンと咳をすると皆月はそわそわしだす。

手を出そうとするが、引っ込めて握りしめる。

心配してくれているみたいだが、表現出来ないらしい。

ケーキをもそもそ食べる皆月の頭を引き寄せて、ポンポンと軽く
叩いてやる。

『仲直りしろよ？何時までも此処にいるわけにいかないんだし。皆
月の親もきつと心配している。ゴホゴホ。』

「……お節介です。」

皆月に何かすれば何時もなら手を払われるなりされるが、今日は
されるがまま。

フォークを加えて、俺にもたれ掛かる。

今はマスクしているから大丈夫だろう。

今は誰かの体温が心地良い。

「…………ごめんなさい。」

『んー？何か言ったか？』

「先輩熱いです、って言いました。」

風邪ひいてるなら連絡して下さいよ。あーあ、茶矢にどやされる。」
『ゴフツゴホ、一々体調をお前に報告するかよ。
ちよっと肩貸してくれ……』

「…重いですよ。」

皆月の肩に頭を乗せ、眠りにつく。

体が熱くて、怠くて、眠い。

意識も朦朧としている。

風邪の三大か四大要素が揃った俺は、冷房が効いた部屋で皆月の肩を枕に眠りについた。

皆月はただ肩を貸してくれた。

「……たく、茶矢に見られたらあたしが怒られるのに。嫌味言っても文句言いながらも、結局は最後まで面倒見て……今日だって無理して来てくれたし。先輩は最後には痛い目を見るわよ。あたしの1番嫌いなタイプ。」

……優しい人は嫌い。報われる事がないから。優しくした分だけ優しい人に縋る人が増えていく。優しい人は断れないのをわかってるから、弱い奴が寄ってくるんだ。

優しい人は自分を削ってまで相手に優しくする、それが優しい人の親しい人達を苦しめてるのに。

——先輩、あたしは貴方が嫌いよ。皆に優しくするから。先輩はもっと自己チューになれば良いのに。こんな風に甘えれば良いのに……大っ嫌い。」

指先に絡まる黒髪を優しく撫でる。

空になった皿にフォークを置き、上着を正軌の肩にかけた。

少女の不器用な優しさ。

反対の意味の答え。

青年が少女の“嫌い”の本当の意味を知る日はくるのだろうか。

友恵は茶矢達が戻るまで、正軌の頭を撫で下ろし続けた。

彼女達が戻った時には、何時もの皆月 友恵に戻っていた。

中編（優しい人）（後書き）

最後は友恵と二人きり。

肩にもたれ掛かりながら眠るカップルを見ていると微笑ましくなります。

気持ちと正反対の事を言うのって、辛いです。

心は“大好き”なのに口では“大嫌い”。言葉にはしないけどわかってほしい、理解してほしい。勘違いしないで、本当は違うんだよ。君になら伝わってるよね？お願い、嫌わないで。

プライド高いのは、素直に慣れない人の事。

我が儘なのは誰かに甘えたいから。

結局は自分を見て、存在を気づいてほしいのです。

友恵には“不器用”という言葉が1番しっくりきます。

器用な人間ってのは本当はいなくて、その人はいっぱい失敗した人。人ってのは、過ちを犯さないと学習しない生き物ですからね。

本当、面白い生き物です。

まだまだ続きます。

中編（雨の日）（前書き）

……すみません。

正軌が三年生だったのと、修学旅行を思い出しました。Big Eventなのに忘れてるとか、お前作者失格だわ。すみません本当。

それでは、

『お前最近キャラ出しすぎなんだよ！覚えきれてねえのにまだ出すのか！？いい加減にしろよこのタコナスビ！！』

と書いていても言わない心の広い方はどうぞ。

努力はいたしますが、次話も出てしまいます。ご了承下さい。

キャラ増えてもよろしい方もどうぞ。

↓

中編（雨の日）

「じゃあ、勝手に班作れ。最低二人な。はい、十分後には、席つけよ。」

吉田の手を叩く音を合図に、一斉に生徒が動きだした。動いてないのは俺と前後の席の二人くらい。ボケェと空を見上げているとメシアがのしかかってきた。勿論重い。

和葉さんはクスクス笑っている。

「正軌、話を聞いていなかったな。」

『重え…病み上がりなめんなよ。』

「メシア君と何処に行こうか話してたんだよ？ほら、パンフレット。」

『んー……修学旅行とか集団行動とかめんどい。』

「正軌は協調性が低いな。」

メシアは俺の隣の席の椅子を引き寄せ、机の上に広げられたパンフレットを除きこむ。

この学年の今年の修学旅行先はアメリカ合衆国三日間、北海道四日と私立らしい大予算だ。

俺的には、近場の温泉でのんびりしたい。

そう二人に言えば和葉さんは共感してくれたが、メシアには温泉はなんだと聞かれた。

北海道のパンフレットに載った温泉を指差せば、顔を近づけて凝視していた。

……で、今気づいた事を言う。

『和葉さん。』

「うん？どうしたの？」

『……部屋どうする？四人で一つの部屋でしょ。基本、班で一室だし。』

俺とメシアは良いけど、和葉さんは…女性だし。色々嫌でしょ。』

「あ。そうだった。」

「仕切でもカーテンでもすれば良いだろう。ベッドルームは二つずつで別れてる部屋もあるし。」

北海道は襖でもすれば良いだろう。」

『和葉さん一人だと旅行の意味なくないか？』

「大丈夫だよ。メシア君が言ってくれたみたいにすればOK！寝る前までお話すれば寂しくないよ。」

『いや、そういう事じゃなくて。』

……ツハア、二人ついて来い。担任に相談だ。』

「「はーい。」」

ひよこのように後ろをついて歩く二人。

誰かまともな人間を連れて来てほしい。

常識を持っている人間を。

席に座っている吉田に三人が近づく。

うたた寝していた吉田はギョツとした顔で俺を見上げる。

周りの二人を見て、ちよっと焦っているようだ。

『突然すみません。相談がありました。』

「…まあ、座れ。」

近場の椅子を動かして座るように促され、腰を下ろす。

吉田は前屈みに体を動かし『どうした?』と聞いてくる。
俺はため息をこぼしたいのを我慢して、吉田に向き合う。

『実は、浅倉さんの事で……』

班の事、部屋の事、メシアの提案を伝える。

後ろの二人はたまに話の補足をしたりしてくれる。

全て伝え終わると、吉田は腕を組んで考える。

担任ともなれば色々と苦勞もあるだろう。

男女関係の事となると吉田も放っておけないだろう。

吉田は浅倉に顔を向ける。

「浅倉は、違う班に移動する、予定は?」

「ありません。」

……キッパリ言ったな。

和葉さん、意見はハッキリ言うタイプだもんな。

吉田はちょっと引いてる。

「……じゃあ、新しく女子を入れる……のは難しいか。」

「三人はダメなのですか?」

「生徒指導には、何とか言えば、良い。うん……良い。お前達なら、
安心できるしな。」

じゃあ、お前達のは、先に決めておくが……良いよな?」

『ありがとうございます。』

よろしくお願いいたします。』

「「ありがとうございます。」」

案外アツサリ決まった俺達は、席に戻った。

それから何処に行くか二人がほとんど決めて、意見が行き違ったら俺が適当に決めて、チャイムが鳴るまで吉田の注意を聞いていた。

——キーンコーンキーンカーン：

「暑い…。」

『なら引っ付くな。』

「メシア先輩、離れないと昼ご飯食べちゃいますよ。」

「それは困る。」

何時も通り屋上で食べている三年生と一年生と留年生と留学生。

よく考えれば凄い組み合わせだと思う。

あと教師と二年生が揃えば完璧だ。

(…：ごめん、一言いい？)

何が完璧なの？)

…：疲れてるんだ、忘れてくれ。

俺も何が言いたかったのかわからない。

なんだろう、自分がわからなくなってきた…。

手で目元を隠す。

久方ぶりのピロの言葉のがあんなのにもショックを受けて。

ピロが慰めるのが更に自分自身が哀れに思えてしまった。

食後に日陰で話し合いをしていると、タタタ…と走る足音が。

左右にいる茶矢とメシアは気づいていないようで、もたれ掛かっている扉を振り返れば…

バンツッ！！！！

ガツッ！！ガンツッ！ゴツッ！

『「！！！！？」』

「…。」

茶矢とメシアは後頭部、俺は顔面（特に鼻）を強打し痛みにそれぞれ手で抑えて痛みに堪える。

皆月は向こうで爆笑している。

顔を上げて人物を確認すると、薄茶色の前髪を上で結んでいる女生徒が見下ろしている。

背が高いのと目がチカチカするので、顔がよく見えない。

ただ、肩がガツシリしているのだけはわかった。

「ごめん。」

『…あ、ああ。怪我はしてないから気にするな。』

「いるか？」

『……何を？』

「弥生！」

和葉さんが立ち上がり、現れた女生徒に歩み寄る。

弥生と呼ばれた女生徒は俺達を跨いで和葉さんの両手を取って見つめる。

170cmは軽くありそうだ。

和葉さんが小さく見える。

和葉さんは弥生と呼んだ人と俺達の前で会話？をしている。

「屋上までどうしたの？」

「探した。」

「教科書忘れたの？」

「（フルフル。）旅行。」

「修学旅行の事？」

「（コク。）回る。」

「自由行動と一緒に？正軌君とメシア君もいるけど、良い？」
「どいつ？」

一言しか言っていないのに会話が成立している…。

和葉さんの彼女への理解力に拍手したい。

痛みはまだ我慢している二人の頭を撫でている俺と、肩に額を押し付けるメシアを和葉さんは弥生という人に教える。

すると、弥生は嫌そうな顔をした。

オーラが黒い。

茶矢やメシアみたいに表情があんまし変わらない奴らが傍にいるから、何と言うか微かな変化が伝わってくる。

そんな感じ。

弥生さん？は和葉さんの手を握り、目線の高さを同じにする。

身長差もあってか、和葉さんは一步後ずさる。

「だけ、和葉、ダメ。」

「や、弥生。落ち着いて。ゆっくり話して。」

「…男、危ない、ダメ。」

「……男だけで、私が危ないから、ダメ？」

「（コク。）そう。」
『……。』

——おお…、まともな人間だ。

話し方は変わってるけど、考えは普通だ。

やっと普通の人に会えた！常識を持っている人に！
俺の常識が証明されたんだ。

握手したいが手がふさがってできない。

まあ、このまま和葉さんが考え直してくれれば…

「大丈夫だよ。正軌君達は信用できるから心配要らないって！」
「けど、」

『あの、ちょっと良いか？』

挙手をして会話に入る。

弥生さんに睨まれたように思ったが、俺はこのチャンスを逃したら終わりだと思うから話す。

『弥生…さん、で良いかな？』

「……（コク。）」

『寝る部屋ってもう決まっているかな？』

もしまだなら和葉さんを入れてほしいんだけど、ダメかな？』

「……まだ。けど、違う。」

「クラスの事？」

「（コク。）」

『それなら担任に話すから問題ない。』

弥生さんも和葉さんと一緒の方が、俺達より安心だろ？

和葉さんも昼間は一緒だし、寝る前は部屋に遊びに来れば良いし。どうかな？』

「『……。』」

顔を見合わせて、向こうに行って話し合う二人。

和葉さんは悩んだり慌てたりして表情を見せるが、弥生さんは真っ直ぐ和葉さんを見ている。

どこと無く真剣に彼女を心配しているように感じるのは何故だろうか。

初対面なのに。

まさか、スキルでも手に入れたのか？有り得ない事もない…ククッ。

（正軌……本当に今日はどうしたんだ？頭イカレてるぞ。）

ウッセ、開き直らねえともうやってけねえんだよ。

帰ったら即行寝る。

寝れば治る。

（どこぞの母ちゃんか。寝れば治るって、今時言う奴いな）

黙れ、精神科行くぞ。

俺に額を当てたまま寝そうなメシアを起こしていると、弥生さんが現れる。

和葉さんの手を握ったまま、俺を見下ろす。

「多波、弥生。代わり、よろしく。」

『多波さんか。了解。』

まあ、普通に色んな所を見に行くだけなんだけどね。

メシア起きろ。』

「和葉。噂、違う。本当だ。」

「でしょ？ 噂なんて所詮^{しよせん}噂なんだから！

元凶の人は謝ってほしいよ！」

『「「「……。」」」』

「……え、何？

皆して俺を見ちゃうとか照れるんだけど？ ヒャー！ やめてやめて！」

『おし、馬鹿は置いて教室戻るぞ。

馬鹿がウツル前に全員急げ。』

「ちよつとー！ーっ！？ 兄貴いいい！！！」

事情を知らない三人はさておき、一年生・Sと俺はさっさと屋上を出た。

源希の悲痛な叫び声を背中に聞き流して。

抱き着いてきた源希に回し蹴りを一発やってから、教室に戻った。

中編（雨の日）

『ありがとうございます。失礼します。』

ガララ…ピシャン—

職員室を出て一息つく。

吉田に和葉さんの事を相談して了承を得てきたのだ。

廊下で待っていたメシアに結果を報告して、下駄箱に向かう。

二人で名探偵CONANについて談笑しながら渡り廊下を歩いて
いると…鈍い音が耳を掠める。

何か物を殴ったり蹴ったりするような、時折呻く声までする。

メシアも『血の臭い…』俺と同じく立ち止まる。

辺りを見回すが、それらしき事をしているのは見当たらない。

流石に職員室近くでするわけではないか。

（——…き！）

『……！？』

血の臭い…何かが頭を過ぎる、が思い出せない。

無意識に頭が思い出すのを拒むような、ジーンと重い痛み。

無理矢理白で塗り潰された誰かの顔。

俺に手を振って、俺の手を引っ張って……

——誰だ？

俺はこの人を知っている。

大好きだった人で、血が――…血？

「正軌っ！」

『！？』

突然メシアが声を張り上げて名を呼ぶ。

両肩を掴まれて、目の前に必至な真顔のメシアがある。

頬をつたう冷や汗は何故流れるのか、俺は何故頭を抱えているのか、何故体は震えているのか、何故気分が悪いのか、記憶の中の少女は何故顔が白く塗られていたのか、何故メシアはそんな顔をしているのか、わからない。

俺には、わからない。

…ただ、心配かけてしまったのだけはわかった。

苦笑いしてメシアの手を離させる。

『……大丈夫だったの。ちょっと立ちくらみしただけだから。』

「嘘だ。体が震えてる。」

『風邪が振り返したかもな。』

それより、音のした方見に行くぞ。』

無理矢理メシアから離れ、落とした鞆を拾って先を歩く。

腕で汗を拭い、怪我がまだ治らない左手に痛みを加え震えを止め

る。

ワイシャツがビシヤビシヤで気持ち悪い。

髪が張り付いてうっとうしい。

呼吸が乱れる。

「……自分は、頼りないか、っ！」

メシアは下唇を噛み締めて直ぐに俺の後ろを追った。

ガッ、ゴッ、グシャ、ガンッ、

物か何かで殴る音がだんだん近づいていく。

メシアを一旦止めて、一人で影から覗き見る。

…すると、目の前で男女に囲まれた一人の女子が蹴られたり殴られたりしている。

怪我也酷く、包帯やガーゼの上からでも血が滲み出ている。

動かない女子をまだ笑いながら暴行を加える男女数名。

メシアも一緒に覗いており、携帯電話のムービーでこの行為を撮っている。

用意周到な奴だ。

俺は暴力を加える男女を止めようと立ち上がる、が…クラッと意識がぼやけて視界が暗くなる。

ドサッ…、メシアに支えられるようにして気絶した。

「正軌……？おい、正軌！？しっかりしろ！！」

『……かー、痛つつ……“強制退場”はやっぱキツイな。ま、せつかく消したもんを思い出そうとしたんだから、“入れ代わり”は楽だったけどな。』

まったく無茶しやがって。正義感だけじゃ生きてけねえーつつうの。馬鹿正軌。』

「……正軌？」

『ん？メシア、か。』

俺は平気だ。それより、アイツらの顔はバツチなんだろうな？』

メシアの携帯を指差して、向こう側の様子を伺う“彼”。

メシアは急いでムービーを見直し、難しい顔をする。

正軌と一緒に角から覗き、向こう側を指差す。

「1番奥だけ顔が見えない。」

『じゃあ、コレ使え。最新だからバツチ撮れるだろう。頼むぞ。』

「わかった。」

メシアは正軌の携帯を受け取り、再びムービーを撮る。

『撮れた。』メシアがそう告げた時、彼は立ち上がり指示を出す。

『メシアはそのムービーを吉田に見せて、終わったら此処に連れて来い。』

俺はアイツら止めてくつから。』

「自分もやる。」

『……ッブ。頑固な奴だなあ、メシアは。』

ったく、これはお前にしかやれねえ仕事だ。メシアしか頼めない。それでも断るか？』

「……相手が多い。」

『なーに、俺が負けるって思ってたのか？笑わせる。』

もおし俺が地面に膝をついたら、あそこのケーキ屋で三時間分奢ってやるよ。

どうだ？良い条件だと思わねえーか？』

背を向け楽しげに語る彼。

堂々とした、自信に満ち溢れている彼の背中にメシアは頷く。

「∴Good rack.

（幸運を祈る。）」

走り出したメシアの背中を見届け、彼は胸に手を当てる。

（暴れるけど、正軌の事頼むな。怪我には気をつけっからよ。）

——ザッ：

彼は男女の前に姿を現した。

誰かが正軌だと気づいた途端、顔を青ざめる男女。

しかし、威勢の良い一人の男子が声をあげる。

「カッコつけてつか知んねーケド！？お前一人でこっち多数！勝ち

目無くね!!? ボッコボコでBAD END確定!?!」

「い、いえてるうゝ!! マヂうざいし!!」

「「「ヒヤハハハッハッハ!!」」」

高笑いをする男女。

ボロボロの女子は何も話せず彼に手を伸ばすが、気づいた女がその手を踏み潰す。

痛みに女子は声を押し殺す。

更に涙が地面に落ちていく。

『――で、お前達の遺言はそれだけ? 俺様手加減しねえよ。』

鞆をドサリと地面に置き、右足をトーントーン地面に跳ねさせる。
左手の包帯を解けないようキツメに巻き、軽く深呼吸。

そして、クイクイツと手で挑発をする。

「:な! 舐めやがって!! ウォオラアアア!!」

「死ねえええおおおあああ!!」

二人の男が全力で走ってくる。

片方は金属バットを振り回して。

彼はワイシャツのボタンを上から二、三個外し、ネクタイをシュルリと手に取り、体を振った（ねじった）。

――ヒュッ、!!

「「……あ?」」

立ち止まる男二人。

彼はそのまま回し蹴りを男共の脇腹に入れる。

男共の頬には切れた痕が。

『紙で指が切れるってのは知ってるだろ。ありや摩擦で切れてんだ。布でやんのは流石に難しいけど、出来ない事はねえんだよ。まあ技術は必要だがな。』

それに勢いつけてネクタイ先のコレに当てれば、ザックリ切れる。』

彼が見せたのは血で汚れたネクタイ裏のわっか。

最後に細い部分を入れる為の細い布だ。

瞬時にそれに気づき、利用し、それに伴う力がある事を理解している。

『あーあ、ネクタイ洗わねえと。』

汚れたからなあ？』

「「「!!!」」」（ゾクッ）」「」

彼の笑顔に男女を寒気が襲う。

足が動かない。

ガタガタ膝が笑ってる。

『んじゃ、お前達がした事を後悔すんだな。女だからって俺は気にしねえから。』

ダンッ！！

彼が駆け出した時にはもう遅い。

校舎裏の誰も近寄らない場所。

そこから悲痛な汚らしい男女の悲鳴が木霊した。

薄れゆく意識の中、ボロボロの少女は渴いた唇を小さく動かして
呟いた。

「黒い…墮天使様。」

少女は静かに目を閉じた。

「正軌！」

「宮古！」

『あ、遅かったな。』

吉田とメシアがその場についた時には……酷い戦場跡に変わって
いた。

正軌は顔に血を浴びて、左肩を抑えている。
苦痛に歪むその顔は無理矢理笑みを浮かべている。

吉田は横たわる生徒達に声をかけるが、皆気絶している。
ボロボロの女子を見て吉田はその姿に焦る。

『吉田先生。』

彼は肩を右手で抑えたまま吉田に声をかける。

『その女子をコイツらが暴行していたのはムービーで見ましたよね？
俺は止めようと思って出たら肩をバットで殴られ蹴られたりしました。
これは立派な正当防衛ですよね？』

「ま、先ずは、この子と一緒に、保健室に行きなさい。骨にヒビが、
入ってたら、危険だ。」

メシア、二人を頼むぞ。」

『んじゃ行くか。』

賭けは俺の勝ちな。なっchan奢れ。』

「わかった。」

保健医の診断は軽い打撲で、肩と足に湿布を貼られただけだった。
『近頃よく大怪我するわね。』と保健医に悪態をつかれ苦笑いをする。

少女を保健医に任せ、校舎裏にまだ怪我人がいる事を教えて帰路
に向かった。

——肩の打撲は彼がわざと受けたものとは、吉田もメシアも皆、
知るよしもない。

中編（雨の日）

フラッ。

『つと、危ね。』

「正軌、大丈夫か？だから自分が背負うと」

『んなみつともねえ事頼むかよ。』

そんなんより肩貸してくれ。鞆は持てるから大丈夫。』

鞆を持った右手をメシアの肩にまわし、多少よろつきながらも真っ直ぐ歩く。

打撲とは言っても内出血の色が酷くない為、一週間もあれば直るとか。

メシアは彼の体を支えながら歩いて行く。

「正軌の体、細いな。ちゃんと食べているか？」

『メシアとそう大差ねえよ。メシアの方が細いんじゃない？』

「そんな事はない。」

ムツと拗ねたメシアの髪を左手でガシガシ撫でてやる。

メシアは驚いたように彼を見るが、彼はボサボサ頭のメシアに声をあげて笑う。

『メシアの髪凄いボサボサだせ！？こりゃ爆笑もんだな！ヒヤハハ！！』

「……正軌、今日は機嫌が良いのか？よく笑うな。」

『ん？んー、まあ良い方かな？』

「……ちよつと眠いな。ふぁ。』

小さく欠伸を漏らす。

全身運動をしたものだから疲れているのだろう。

彼はメシアに全体重を預けるようにして歩いて行く。

それにメシアは文句を言わない。

正軌が甘えたり頼る事はほとんどないのだ。

基本は甘えられたら文句を言いながらも甘えさせて、困ってたら今日みたいに自分の体調を気にせずに助けようとする。

：普段1番近くにいる分、メシアは正軌が痛々しく思えてならないのだ。

そんなメシアも正軌に甘えてばかりなのだから、負担になっている事を悔やんでいる。

本当はもっと頼ってほしいのだ。

——だから、顔には出さないが、こうやって正軌から頼られるのは嬉しいのだ。

ニヤけそうになるのを、なんとか堪えている。

（：まったく、さっきあんな寂しそうな顔見せられたらこうするかねえよ。正軌、堪忍な。）

そんなメシアの反応に彼はため息を吐きながら、このまま家まで歩いた。

夜中。

俺は喉の渇きに目を覚ました。

起き上がると、左肩や足に痛みが走り眉をひそめる。

こんな部分を怪我した記憶はない。

服を脱いで見れば、湿布が何時の間にか貼られている。

足にも数枚、白い湿布が足を覆うように貼られている。

…自分の知らない間に。

『――何、だ…コレ？』

自分の体の異変に、息を飲んだ。

知らない間に怪我している。

知らない間に処置されている。

知らない間に着替えている。

知らない間にテーブルになっchanNが置かれている。

知らない間にベッドに寝ていた。

…前もこんな事があった。

風呂場にいたのに、目か覚めたら部屋で寝ていた。

教室で寝ていたはずなのに、気づいたらベッドで寝ていた。

俺の知らない間に、知らない間に、知らない間に、

誰かが俺を動かしている、のか？

…一体誰が…そんな事をして何になるんだ？

わからない、犯人の意図はなんだ？

ガンッ！！

『クソッ！何なんだよ…俺が何をしたんだよ、クソ…クソが……』

壁を叩きつけた手をそのままに、左手を握り締めた。

不安と恐怖、混乱が体を蝕む感覚がする。

知らない間に何物かに飲み込まれてしまいそうで…誰も気づかないで………

俺は 消えてしまうのか。

（正軌、まーさーき。）

頭の中で声がする。

ピロが話しかけてきた。

『…今、取り込み中だ。』

（あのさ、“多重人格”って知ってる？）

『多重…人格？』

二重人格なら知っている。

中にもう一つの人格を持っている人間の事だ。

その多重って：二人以上の事か？

（そうそう。俺も人格の一人。
ってか、気づかなかった？）

『んな事：知るかよ。気づいたらいたんだし。
お前俺の人格だったのか。それなら納得できるわ。』

（黙っててごめんネー。こんなにアツサリ信じてもらえるとは思
ってなかったからさあ。）

『今なら何言われても信じれるわ。
ハア：ちよつと安心した。早く言えよな。』

（基本は俺しか会話したり出来ないし、代わるのも俺だけ。

正軌の精神が不安定だったら“入れ代わる”事が可能。たまに拝借
してましたサーセン。

まあ：まだ色々あるけどまた今度に。）

『オイ、謝り方軽いなオイ。
それとちよつと待て。まだあるのかよ。』

（そろそろ寝ないと、疲れとれないよ？
ほら、なっchanN飲んで早く寝なって。）

聞きたい事は山ほどあったが、ピロの言う通り明日にも学校がある為テーブルの上に置かれたなっchanを手取る。

生温いもので喉を潤い、ベッドに横になった。

（おやすみ。）

最後にピロの言葉に頷いて、眠りについた。

——だが、それを知る事が間違いだと気づき後悔するのは、青年も彼も今は……

中編（雨の日）

——休日の朝。

コンコン。

源希の部屋にノックの音。

源希は目を摩りながら扉を開ける。

「ふあい…もう起きるよ、母さん。…あれ？」

『よう、』

バンッ！ガチャ！

『……。』

「……。」

条件反射で思わず閉めてしまった源希。

勢いよく閉められた扉を挟んで無言の宮古兄弟。

朝から似つかぬ沈黙。

—コンコン。

『お前に話があんだ。結構重要な事。』

「お、俺は兄貴の家出には反対だからね！手伝わないよ！」

『は？何ふざけた事吐かしやがんだ愚弟。早く開けろ。』

「開けたら殴られそうだもん！ヤダ！」

『人をDVみたいに言うな馬鹿野郎。』

……じゃあ良いよ。お前だけには言っとこうと思ったけど、人選ミ

スだったわ。

朝飯食いに行こ。』

タンタン…トントントツ…

アツサリ部屋から離れリビングに行ってしまった正軌。

そー…と源希が扉の隙間から覗いた時には、もう遅い。

源希がリビングに降りた時には正軌は両親と話を終えていた。

『…ま、さっきの話。信じるかは親父と母さんに任せるよ。後、家族だけの話にしておきたい。』

朝飯をもぐもぐ食べながら、目線はテーブルのまま話す正軌。

両親は顔を見合わせた後、何か納得したように頷く。

「信じるも何も、これで説明がついたわ。」

「香織ちゃんの事件の時から、普段大人しいお前が声をあげて笑ったり、喧嘩して帰って来たり、敵対心というか私達に警戒していた時期があったからな。正軌は覚えてないだろう。」

『…うん。そんな時の記憶、あやふや。』

「まあまあ、でも良いじゃないの。何でも話せる話し相手が出来たんだし。」

ピロ君、だったかしら？今度ゆっくりお話ししようねー♪」

「私も語り合いたいもんだな。」

何にせよ、無理はするなよ。」

「これ以上怪我増やしたら、ピロ君怒るからね！」

両親に正軌は頭を撫でられ…ちよつと照れる。

小さく『うん』と頷き、隠すように朝飯を口に運ぶ。

源希はリビングに入り、何の話をしていたのか明るめに聞いてみる。

「ねーねー、何の話してたの？俺にも教えて！」

『……さっき「ヤダ」って拒否したのは誰だよ。

お前には教えない。』

「えー！！？酷い！」

「自分の言葉には責任を持ちなさい。」

「諦める事ね。母さんもそこまで軽くないわ。」

「そんなぁ……ガクッ。」

『ご馳走様。』

ガシッ、源希の襟首を掴んで階段を上がる正軌。

源希は突然の事に頭がついていけず、思考をおいてきぼりのまま正軌にひきづられて行った。

…その様子を見て、両親は茶を飲んで見ていた。

「まさかねえ、多重人格なんてね。正直驚いちゃったけど、納得の方が大きかったわ。」

「私も同じようなものさ。顔には出さないだけで、内心驚いてるよ。後でパソコンで調べてみるよ。正軌に害が無ければそのままにして、後は二人に任せよう。正軌はピロ君を嫌っていないようだしな。」

新聞に目を通しながら優人は告げる。

とも美は洗い物を終え、無愛想な優人の隣に座り横顔を頬を赤く染めて見つめる。

そつと優人の手を両手で包み込み、キュツと優しく握る。

「あたし優人さんに一生ついていくから。」

優人さんの言葉に、また惚れ直しちゃったもん。カッコ良すぎよ、もう！」

「……とも美さん、お茶。」

「ふふっ、照れ隠しも可愛いわ♪」

久しぶりに今度二人だけで旅行にでも行きたいわね！温泉に浸かってゆっくりしたいわ。」

「…夏休みに行くかい？」

源希も高校生だ。二、三日私達がいなくても大丈夫だろう。」

「でもねえ…困った事があるのよ。1番重要な事。」

「なんだいそれは？」

ほう、と頬に手を添えたため息を零すとも美。

優人も新聞から目を離し、とも美に向き直る。

とも美は『それがね…』と優人を上目で見上げ、小さく苦笑い。

「あの子達勉強はできるけど、料理はからっきしダメなのよ。学校の調理実習でも兄弟揃って大惨事だったみたいだし。」

源希なんか、茶矢ちゃんがいなかったら包丁で指が無くなってたかもしれないなかったって。

小さい頃に家でやらせてみたけど、酷かったわよー。ま、若干正軌の方がマシかしら。」

「……それは色々と問題だな。社会人になったらどうするんだ？」

「この家から通わせるしかないわね。ま、家にちよつと入れてくれればあたしは良いわよ。」

「…インスタント食品は体に悪いし、誰かに頼んでみようか。これも二人にとって良い経験かもしれない。」

「ええ、優人さんの意見に賛成よ♪反論なんてしないわ。今度、茶矢ちゃん達に聞いてみるわね☆」

「…頼む。」

…これほど相性の良い夫婦はいないと思う。

正軌と源希が真っ直ぐ成長出来たのは、この二人のおかげだ。

正直、この夫婦は喧嘩した事が有るのか疑問だ。

どちらかが怒鳴る姿が想像出来ない。

ほんわかムードの夫婦は、夏休みの温泉旅行でのんびり時を過ごしていた。

またしてもすんなり頷く源希に、思わずマヌケな声を出してしまった。

源希は何時もの表情でニコニコ笑っている。

：俺はまだ脳が眠っているのか心配になり、源希の頭をペシペシ二回叩く。

嫌がるそぶりを見せるので、起きてる事には間違いない。

どうして俺の家族は異常な事をアッサリ受け止めれるのだろうか
：不思議だ。

「だってさ、親父達が言ってた通り、これで昔の説明が合致するもん。元気になったと思えば、突然暗くなるし。この前の不自然な言動にも納得できる。」

これ以上理由は要らないでしょ？」

『……多重人格なんて、普通信じねえだろ。俺なら精神科直行しろって言う。』

「だって、兄貴がわざわざ嘘つく必要ないじゃん？何の得があるわけ？」

：それに、さ。何十年正軌兄を見てると思ってるの？真剣な事くらい伝わるよ。」

『……。』

：思わず嫌な顔をしてしまった。

何十年も見ているって、言い方が気持ち悪い。

いや、元々気持ち悪いか。

コイツ何時からこうなっちゃったんだろうな……気づいたらこうなってたし、ピロは知ってるんじゃないの？

（知らないでちゅよー。俺も源希の事は詳しくないから。）

一回クタバレ。

永久に地球に返って来るな。

お前の方が年下だろうが。

（んな怒んなんて。普通に考えて実体ないからクタバレないし。）

黙れ、お前のせいでまた神崎さんに会わなきゃならなかっただろうが。

今すぐ代われ。

（俺様ちよつと用事あつから…）

待て逃げんな。

…お前もあの怖いのか。

なんかしらオーラがすさまじいよな。

（うん、俺も何時も睨まれてるみたいで怖い。見えてないはずなのに…）

「兄貴？おーい、正兄？」

『あ、まだ会話の途中だったな。悪い悪い。』

「メッサ棒読み！？酷いわ！」

『はいはい。』

じゃあ、そういう事だから。茶矢達にも言うなよ。』

「あーい。」

手を挙げて頷く源希。

子供かよ、とデコピンすれば『えへへ』笑顔でニヤける弟。

気持ち悪い奴だな、何でこんなに嬉しそうな顔をするんだ？

デコピンがそんなに好きか、好きなのか？

……Mか、お前。

「兄貴と久しぶりに二人だけだなんて思うとねえ♪嬉しくってさ！」

『今すぐ出てけ。気色悪い。』

「えー酷い。」

『じゃあ俺が出る。』

源希が足に絡み付いてくるのを頭を踏み潰して離し、興ざめしたのでリビングに行く事にした。

階段を後ろ頭を掻きながら下りていると、

——ピンポーン……

玄関に着いた時、チャイムの音が鳴り響く。

こんな時間だし茶矢達が遊びに来たのか、安直に考えてドアノブに手をかける。

（ちよっと待って、知らない女の子がいる。）

『女の子？茶矢じゃなくてか？』

ピロの言葉にドアノブから手を離す。

頭に手を当て、ピロに現状を聞いてみる事にする。

（んとね…眼帯、至るところに包帯巻いてて、湿布も顔に貼ってる。）

黒髪のロング。病人みたいに白い肌で、身長は茶矢よりちょっと高い。胸は皆月くらい。目が印象的、っと。これでok?)

——ズクンッ……!

偏頭痛が急に襲い、壁に手をつく。

ピロの繊細な情報で大体イメージは出来た。
確かに知り合いにはいない。

源希を呼ぼうと振り返ると、母さんと目が合う。

「あら、正軌のお友達?メルヘンな子ねえ。
リビング使って良いわよ。」

『……メルヘン?』

リビングに戻って行った母さんの後ろ姿を呆然と見送り、自分も源希を呼びに階段を上がると源希が調度下りて来ていた。

目線が合いそうなのをサッと顔を反らす。

「え?まだ続いてんの?」

『お前に客だ。包帯だらけの女の子。』

「包帯だらけの?そういう知り合いいないけど……」

すれ違い、扉を開ける源希。

階段下で扉向こうの人物を見る。

「あれ……墮天使様はあ?どこ?」

「墮天使、様?家には人間しかないけど……ゴスロリ凄いな。」

一步玄関に入って来たのは、ピロの言った通りの女の子だった。ふわふわの髪で、右側に眼帯をしている。

露出はあまりなく、ウサギの人形を持つ手には包帯が巻かれていた。

黒と白の……本当凄い服。

初めて見る服だった。

茶矢が空みたいな青なら、この女の子は墓場みたいなモノクロ、みたいな。

説明って難しいな。

勉強ばっかじゃあダメだな、うん。

俺はリビングに行こうと源希の後ろを通り過ぎようとすると…、

「あー、いた！墮天使様！」

「…いた？何処に？」

「墮天使様ー♪」

ギュッ！

少女は源希の横を通り抜け、靴のまま玄関を上がる。

——そして、そのまま俺の腹に抱き着く女の子。

…………抱き着く？

俺と源希は目を合わせ、二人で俺に抱き着く女の子を見る。

嬉しそうにスリスリする姿に、怪我は痛くないのか疑問になる。

女の子が髪を揺らす度に、甘い香りがする。

『「……墮天使様？」』

メルヘン少女との出会いである。

中編（雨の日）

『：先ずは靴を脱げ。話はそれからだ。』

「お、おお：流石は正軌兄。こんな状況でも礼儀に厳しい。兄貴の鏡だ。」

「ええ、スリッパないから嫌あ。」

『「いや、あるから。」』

兄弟が指差す所には、客人用のスリッパたて。

俺達兄弟はあまりスリッパを履かないが、親父と母さんは履いている。

だからこの少女は勘違いしたのだろう。

俺達が教えてやると、少女はムツと頬を膨らませ源希を指差す。

「その君、取って来て。」

「お、俺？」

まあ：良いけど。はい。」

「ふん、のろまね。靴は玄関に置いといて。」

源希に対して上からの物言いに、感謝の一言もない少女。

源希だからといって、年上にする態度ではない。

こういう教育をしているんだ、この子の親は。

ヒョイ。

俺は少女を壊れ物のように持ち上げて、玄関から出す。

靴も横に置いて、ガチャリと扉に鍵をかける。

手を払い、スタスタ玄関を後にする。

「兄貴…良いの？」

『俺もピロも知り合いじゃない。』

知り合いだったとしても、常識のない奴は家に入れない。子供でもな。』

「正軌兄…カッコイイぜ！」

ドンドンドン！！バンバンバン！！

「墮天使様ー！？開けてよー！何で“あゆ”を出すのよー！？」

『お前は出入り禁止だ。常識を覚えてから再び来きやがれ。以上。』

「聞こえないー！何て言ったのー？」

ドンドンガンガンガチャガチャ！！

扉を無茶苦茶にする少女。

壊したら弁償してもらうぞクソガキが。

（正軌…俺様ちよつと心当たりがある。あのクソガキ。）

『は？ピロの知り合い？』

「ピロさん？あ、話してるんだ。」

もう源希に話したので、気にせず口に出して話す。

気を使いののは楽だ。

やっぱり話して正解だった。

（気許してんだな。良い事だけど。

あのね、右肩怪我した時に…）

——ピッピッ…ピッピッ…

ポケットに入ってる携帯電話が鳴る。

少女の事は無視して、リビングに行ってソファに腰掛ける。

携帯電話の通話ボタンを押して、耳に当てる。

『もしもし。』

『もしもし、メシアだ。』

『急にどうした？何か周りが騒がしいが…』

『正軌の家の前にいる。少女が邪魔で、インターホンが押せない。』

『遊びに来たのか？』

『怪我の具合も兼ねてな。家にいるか？』

『ああ。庭に来い。』

『わかった。』

ピッ。

ソファから立ち上がり、母さんにメシアが来る事を教える。

少女の事は他人だと話せば、『ほっときますか。』と台所に戻って行った。

テレビを見る源希に親父に話してくるよう言っ、俺は庭に繋がる扉を開ける。

扉を開けるとメシアはもう前に立っていた。

少女は気づいた様子はない。

『今度からは電話してから来いよ。それが礼儀だ。』

『わかった。お邪魔します。』

「「いらっしゃーい。」」

『いらつしやい。』

靴を玄関に置くように言って、俺は母さんに渡された菓子、なつchan、湿布と包帯を乗せたお盆を持って部屋に行く。

玄関は親父が注意したらしく、静かになっていた。

手の包帯を慣れた手つきで解くと、手の平の傷はほとんど癒えていた。

医者 of 言った通り綺麗になっている。

メシアは床の上で名探偵CONANを見るフリをして、ベッドの上の俺を見ている。

俺は気にせず手首の包帯を解いていく。

まだ多少痛むが、完治には近づいている。

『メシア、見てみる。ほとんど治ってるぞ。』

「…本当だ。良かったな、痕にならなくて。」

安心したのかホッとした笑顔を見せるメシア。

左手を見る度に痛々しい顔をするのも、これでマシになるだろう。手の平を撫でるメシアの頭を軽くワシワシ撫でてやる。

『ありがとな。』

「…自分は何もしてない。」

『心配してくれて、みたいなの？』

「…ッフ、意味もなく感謝するのか。」

『意味なんてあんま必要ねえだろ？ハハッ！』

狼の頭を撫でながら、二人して声をあげて笑いあう。

照れ臭そうに笑うメシアは、初対面の時より日本語も出来るようになったし、笑うようにもなった。

癖もマシに（俺が慣れて）きたし、良い進歩だろう。

左手首の湿布と包帯を交換して、腕をまくる。

ピロのせいで怪我した肩と足の湿布も張替えていると、メシアがある事に気づいた。

「この漫画、一巻だけ古いな。誰かから貰ったのか？」

『ああ、それは……』

（正軌！これやるよ。）

（これで語り合おうぜ！）

フラッシュバックのように映像が頭に映し出される。

頭を抱え込み、映画のように流れる記憶を強制的に見せられる。公園、夕焼け、ベンチ、小さい俺、横に座っている……アレ？また、だ……

…顔が、見えない？

少女の顔の部分だけ、白い絵の具で塗り潰されてた。
声も今度は聞こえにくかった…。

大切な記憶、笑ってる俺はその女子を大・

ズキンッ!!

『あ、!!?』

「正軌!? しっかりしろ! オイ!!」

メシアが怒鳴るがそれが余計頭痛の手助けをしていて苦しむだけだ。

胸を手で握りしめ、脳と心臓の痛みに涙が落ちる。

——これは誰なんだ?

ポニーテールの女の子。

俺のとても大切な人。

……大切な人?

本当に、そうなのか?

なら何故体は震えているんだ?

歯がガチガチ鳴るんだ?

涙がボロボロ出てくるんだ?

——どうして俺は…こんなにも怖がってるんだ?

わからない…わからない事が更に震えを増加させる。

俺は 何かを忘れてる?

——ギョッ!!

突然…誰かに頭を抱きしめられた。

痛くて、乱暴で、強く、強く…それでも、

温かい 人の体温。

縫り付いたあの時とは違う、けど安心させる鼓動。

「…悪かった。ごめん。

誰かが泣くのは嫌なんだ…お願いだから、笑って？」

『…う…、ヒック…』

背中をポンポンと優しく叩かれ、余計に涙がベッドに染み（しみ）をつくる。

俺はメシアの服を握り、額を押し付けて壊れたロボットのよう
に呟いた。

『…わからない、わからないんだ、俺は…何かを忘れてる。わ
からない…わからない…わからないっ!』

子供のように泣きわめいてる俺には、メシアの涙に気づく事はな
かった。

中編（雨の日）

『スウ…スウ…』

泣き疲れて眠る正軌をベッドに寝かせ、指に溢れる水を掬う。
服を弱々しく握る手を取り、両手で包み込む。

大きくて小さいこの手。

自分の知らないところで、この手で何かを探しているのだろうか。
ボロボロの今に消えてもおかしくない手で、誰にも頼らずに。
忘れられたモノを、パンドラの箱かもしれないのに、後悔するか
もしれないのに、誰が何と言っても彼は探し続けるだろう…それが悔しい。

漸く手に入れた宿り木は自分の意志で枯れようとしている。

鳥や人間や果実が止めても、最後を教えても、宿り木は栄養剤に
化けた除草剤を求めるんだ。

宿り木は己の存在感を知らず、木が失くなる事の周りへのダメー
ジを考えないんだ。

…このまま目を覚まさないでくれれば良いのに。

いや、そうになったら出来ない事が多過ぎる。

一緒に楽しめないのは嫌だ。

低いこの声が聞けないのは困る。

不器用な笑顔が見れないのは無理。

小さい背中に、綺麗な髪に触る事が出来なくなったら鬱になる。
この唇で名前を呼ばなくなれば…耳を引きちぎる。

だって必要ないから。

日本に着てから変わったんだ…怖いのも寂しいのも辛いのも楽しいのも嬉しいのも全てこの手がわかってくれた。

怖い時、辛い時、困った時、寂しい時……温かい手が拭い去るように頭を撫でてくれる。

引っ張って一緒に歩いてくれる。

楽しい嬉しい時、必ず横にはこの手があって、たまに茶矢と取り合いになると困ったように頭を掴まれて。

でも最後にはため息吐きながら乱雑に撫でてくれて、

…嬉しかったんだ。

触って良いと、化け物みたいな自分が許されたような気がしたんだよ。

「……なんで…教えてくれないんだ？友達って、そういうものだろう…？」

…正軌……っ！！」

正軌の手に透明な雫がポタポタ落ちる。

泣くのは自分の心の弱さか、脆さか、大切な者に頼られない辛さからか。

わからないし、今はどうでもいい。

ただこの体温を忘れないように、強く壊れないように……

「茶矢ちゃん、何時もごめんね…」
「いえ、購買くらい良いですよ。」

茶矢と真尋は購買へ歩を進めていた。

真尋が昼ご飯と飲み物を買わなくてはならないのだ。

茶矢はその付き添い。

源希と一緒に رفتても良いが茶矢と友恵を二人きりに出来ないし、友恵は『面倒だから嫌。』で終了。

一人で行くのは心細いので、結局茶矢に同行してもらっているのだ。

茶矢もたまに飲み物を買う事もあるので、面倒だとは思っていない。

というよりか、彼女の性格からは“面倒”だという考えはしない。友達として“普通”、と思うか。

二人並んで歩いていると、人だかりが見えてきた。購買に近づいて来たのだろう。

男女共に戦う顔をしてパンや飲み物を取り合っている。

高校生ではよくある光景だ。

二人は離れた場所でおさまるのを待つ。

力のない真尋は余った物を買えば充分という考えだった。

茶矢も、無くなれば自販機で買えば良い考え。雑談でもしながら頃合いを待つ。

「友ちゃん先輩、仲直り出来て良かったね…。」

「他人を巻き込むのは止めてほしいです。真尋君も、無茶な事はハ

ツキリ断るんですよ？」

「他人って…アハハ。」

「…アレって、まさか。」

「おい、何処に行くんだよ！もう、自由人だな！」

二人に向かって長い銀髪を揺らした男子生徒が早足で歩いて行く。それを、大きめの肩掛け鞆を掛けた男子生徒が後を追う。カツカツカツ四人の間合いは狭まる。

頃合いを見計らい、真尋が歩く為に一步足を前に出すと、

ポン。

「え？」

「よお、真尋。同じ高校だったんだな。」

「……あ…フリー、様。」

「フリー歩くの早い。」

あ、茶矢じゃん。その子と友達だったんだ。」

「私の名前を気安く呼ぶな！赤也！」

「あー、お兄ちゃんを呼び捨てとかダメな妹だなあ。」

呼び捨てするんなら…僕より頭良くなったんだよな？茶矢？」

真尋は顔面蒼白し、茶矢は声を荒げる始末。

一方のフリーは口端を吊り上げ、赤也は優しく笑む。

二つの最悪な再会。

結末が見えない出会いの繰り返し、小さな世界で再び接触した四つ。

…そして四つの中心には、やはり正軌がいた。

中編（雨の日）

——キーンコーンキーンカーン……

『（茶矢と真尋、来なかったな……後で様子見に行くか。）

ほら、さっさと教室行けよ。二人共先に教室行ってるだろうし。』

「「はーい。」」

一年生を見送り、俺達も屋上を出る。

茶矢と真尋は屋上に来なかった。

二人は購買に行ってから屋上に来ると話していたからそのまま先に飯を食べてたけど……あの茶矢と真尋が来なかったのが不自然だ。何かあったのかもしれない。

今すぐ探しに行きたいが、もうすぐ授業だ。

どうする……どうすれば良い？

（メールすりゃ良いじゃん。メール。）

『ああ、なるほど。』

「「？」」

『携帯電話……はポケットか。』

不思議そうに見る和葉さんとメシアはさておき、俺はカチカチとチャイムが鳴る前に急いで文字を打つ。

宛先は真尋だ。

五十音順で1番早いから。

時間ないし。

「昼休みはどうした？」

後で電話してくれ。」

ピッ。

送信と同時にチャイムが鳴る。

携帯電話の電源を切り、鞆に入れ授業に専念する。

……だが、6時間目が終わっても真尋から連絡は無かった。

『……』

「正軌君どうしたの？さっきから携帯をずっと見つめてるけど…」

『…いや、何でもない。』

じゃあ俺は帰るね。メシア、行くか。』

「ああ。和葉さよなら。」

「二人共バイバイ。」

和葉さんに手を振り返して教室を出る。

携帯電話で真尋にコールするが一向に出る気配はない。

二度目の電話をかけようとした時、グイッと力強く横から腕を引かれる。

薄黄色の瞳が視界をせしめる。

メシアは携帯電話をそっと俺の耳から遠ざけ、真っ直ぐ俺を見る。

「真尋に電話か？」

画面表示を見て、メシアが確認するように問う。

それに頷くとメシアは軽く唇を歪める。
とてつもなく淋しげな表情で。

「…心配なら何故自分に相談してくれないんだ？一人で動いて、一人で傷ついて…お前の存在を過小評価するな！

正軌が傷ついてそれを知って傷つく者がいると知れ！」

『え…ごめん。』

静かに怒りに満ちるメシアはよくあるが…声を荒げて怒るメシアは初めてで、俺は素直に謝ってしまった。

俺の返事にメシアも面食らったようで、乾いてしまいうんじやないかと思うくらい目を見開いている。

腕を掴む震えが治まった。

『歩きながら話すか。』とメシアの背中を押して一緒に進んで行く。

唇に指を当て、考えるように話す。

『俺…メシアは知らないだろうけど、今年の4月下旬までずっと一人だったからさ、団体行動とか慣れてないんだ。だから、無意識に単独行動しちゃうんだな。』

「…茶矢達とは？」

『茶矢と出会ったのが4月下旬。それまで源希を、いや家族や周り全員避けてたから。』

今思えば…茶矢と出会ってから景色が変わったな。真尋や皆月と逢って、源希や家族と一緒に飯食べるようになって、髪黒くして、それに…メシアや和葉さんとも仲良くなったしな。

昔の俺を知ってる奴らが見たら、別人だと思うぞ？クク…』

「…そんなにも、この数ヶ月で変わったのか？」

目をパチパチさせるメシアが可笑しくて、俺は喉を鳴らして笑う。
メシアは信じられないと言った表情で、口を半開き状態だ。
髪染めた時にシカトしたただけはあるな。
面白い顔だ。

メシアの肩を叩いて歩いて行く。

『まあな。変わった事が多い。』

もし俺がまた単独行動しそうになったら、メシアが止めてくれ。自分じゃあ気づかないから頼むな?』

「……自分で良いのか? 怒るなよ?」

『何で俺が怒るんだよ。源希や皆月じゃあないんだし。』

苦笑いしてふと窓を見ていると、雨が降っていた。

サアアと小雨が木や地面、人間を濡らしてゆく。

だんだん……少しずつ、雨が染み込んでいく。

気づかない間に。

(ちよっと良いか!? 急ぎなんだけど!!)

キーン!!

何かが頭に突撃されたような痛みに、足を止め頭を抑えているとメシアが心配そうな顔をする。

服を引っ張って見つめられたら、何にも言えない。

真顔なんだけど、オーラがそう訴えている。

『…大丈夫。近頃偏頭痛が酷くてな。』

なに、すぐに治まるからそんな顔すんな。』

「…バフ○リン要るか？」

『何で持ってるんだよスゲーな女子高生かお前。』

「この前一人で歩いていたら保健医に渡された。

理由を聞いたら『軟弱そうな子見ると渡しちゃうのよく持ってた損はないわよアハハ。』だそうだ。」

『その真顔で言われると違和感あるな。』

一応大切に保管しとけ。俺は要らないから。』

バフ○リンを鞆に戻して、放置していたピロに続きを聞く。

すまん、バフ○リンで時間くった。

（マジでやばいんだよ！馬鹿正軌！！バフ○リンの馬鹿！

東校舎裏でボロボロの真尋と泣いてる茶矢がいる！真尋の携帯電話壊されてて…とにかく走れ！！）

『…痛っ。サンキューピロ。』

メシア、真尋の居場所がわかった。茶矢も近くにいる。』

「何処にいるんだ！？」

『東校舎裏にいるらしい。』

走るぞ！』

足はまだ痛むが、真尋の容体が最優先だ。

鞭を打って、雨でグチャグチャの地面を全速力で駆け抜ける。

ズボンが泥で汚れて気持ち悪いが気にしてられない。

ピロが案内する場所まで走るしかない。

降りしきる雨の中、メシアと共に走り続けた。

ピチャビチャ!! ピチャ、ピチャピチャ…
ザアアア——!!!!

ポタ、ポタ、ポタ…

『ハッ…ハアッ、ゴフゴフ!』

「ハッハッハッ、ツク…ハア…ハア…」

色んな音が混じり合い、俺達は髪も制服もビシヨビシヨのまま立っている。

目の前の光景に今も体が受け付けない。

横に立つメシアも手を握り絞めて、目を離さない。

——俺達の目の前には…

『真尋…っ!』

「……ッ、クソ! 酷いっ!」

「……。」

「う…ふっあ、ごめ…なさ…ごめん…なさい……うあああ!…!」

刃物で至る所を切られた真尋が、壁に背中を預けて目を閉じていた。

血が壁を汚し、土にも溜まっている。

晴天なら固まるのだが、今日に限って雨が真尋の血流を促している。

茶矢は真尋の体を抱きしめて声を最大限に泣き継る。

細い手首は何者かに強く掴まれた痕がくっきり見える。

凜とした澄んだ声がもうガラガラだった。

本当に有り得ない現場。

一生で刑事くらいしか遭遇しないほど、残酷。

―俺は、なるべく冷静に、ゆっくり、メシアに告げる。

メシアが壊れてなかったから。

『メシア、保健医を呼んで来てくれ。頼む。』

「……こんな状況で自分だけ、!!!?」

『……メシア頼む……っ!!!』

真尋から目を離さず、左手に爪を食い込ませ、唇を噛み締める。

そうする事でしか恐怖を追い出せない。

声が震えてるのなんて、俺は知らない。

ただ、この事態から目を逸らしたら真尋を侮辱した事に値する。

だから俺は目を逸らさない。

「……わかった……。」

意を飲んでくれたのか、メシアは走って行った。

俺は鞆から母さんから渡された折り畳み傘を取り出し、真尋の上

に翳す。

雨がこれ以上、真尋の体温を奪わない為に。

茶矢の肩を掴んで、沸き上がる怒りを出さないように落ち着いた口調で話しかける。

『…茶矢、真尋から離れろ。これ以上揺ると大量出血で死ぬかもしれない。』

「嫌っ！真尋君は私のせいであつ！！」

『…ツチ！

まだ生きてるなら助けたいだろうがっ！！！！茶矢あ！！』

「…ヒッ、ク…う…ふあああああんん！！」

『よく頑張った…偉いぞ、茶矢。もう大丈夫だ。きっと大丈夫…』

「私が！銀髪の男に…『真尋君に、何するんですか！』って叩いたり、したら……そいつが怒っ、て！それを、真尋君が…庇ってくれて…ナイフで、血が！止めようと、しても…赤也が邪魔して、ヒッ…私何も出来なくて……ごめん、なさい！！もう…真尋君に顔向け出来ない！！ふっ、く…ううわあああんん！！！！」

無我夢中で縋り付くに抱き着く小さな体を力いっぱい抱きしめて、茶矢の顔を体に押し付ける。

ガラガラで、もう掠れた声で泣き叫び続ける茶矢の体は酷く冷たい。

ボロボロ泣く茶矢に対して、俺は泣く事はない。
いや、泣けなかった。

この胸にある決意がそうさせる。

『……ピロ、わかるよな？』

（ああ…、ちょうど一ヶ月近いな。夜に借りるぞ。先に謝っとく。明日筋肉痛にしたらごめん。）

『…俺だと殺しかねない。頼むな…虫の息にしても良い。警察に突き出してくれ。』

二人共…俺が何も出来なくてごめんなあ…!!』

（了解。お前らの思いは預かった！）

この後、保健医が表れ真尋と茶矢は救急車で運ばれて行った。

警察も現れて俺達二人は事情徴収をされた後、自宅に見送られた。

家に帰ると、源希が目を腫らして玄関に座っていた。

顔を上げてつかみ掛かるように俺の腕にしがみつき茶矢と真尋の状況を聞く。

俺は知ってる事だけを話して、リビングに入る。

真剣な顔の両親に話して、軽く飯を食べてからシャワーを浴びた。

湯舟に浸かる中、俺は考えていた事を口にする。

『…なあ、ピロ。』

（出来ない事はねえが、厳しいぞ。体への負担が計り知れない。無理。）

『まだ何も言っただけ。』
ピロが見れるんなら、俺だって見れるだろう。やる前に決めつけるな。』

（んじゃ、やってみる？どうなっても知らねえぞ。）

ズクンッ…!!

『い…あ…!?!?』

今までで一番酷く激しい頭痛が襲いかかる。
俺は湯舟から一旦出て、床にはいつくばる。
痛みが、逃げてでも逃げてでも追いかけてくる。
視界がだんだん黒くなり、世界が遠ざかっていく。

“死”に似たような感覚だ。
よくわからないけどそんなん。

『……頼、む…。ピロ…!!!』

世界から追い出された瞬間だった。

『……はぁーい、ピロ様了解しましたぁ！！痛ってえっ…クソ。』

両手を使い起き上がる“彼”、ピロ。

ピロは頭を抑えながら湯舟に浸かり直す。

ふうー…、息を吐き天井を見上げる。

目を閉じ、胸に手を当て祈るように呟く。

『サラ：新入り…正軌の事、引き止めといて。』

彼の小さな願いは、夜の闇に静かに消えていった…。

中編（雨の日）

——真っ白な世界。

辺り一面、白。

壁も、床も、階段も、天井も、全て辺り一面、白。

遠くを見渡しても、影が見当たらないくらい白の世界。

平面だと思えば、違う視点からは斜めだったり。

凹んでいるのかと思えば何も無かったり、突き出ているのかと思えば平面だったり、本当に摩訶不思議な場所。

奇想天外も間違いではない。

そんな世界で一人、前髪をヘアピンで留めている髪が長い小学校一年生くらいの少女が走っていた。

白いワンピースのような服を纏い、めくれないように走ったり、飛んだり、駆け上がる女の子らしい姿で、仕種が可愛い。

少女の体には不釣り合いな、手首に大きなブレスレットを両手首にぶら下げている。

中に小さな箱が通されていて、壁に当たらないように気をつけて歩を進める少女。

幅を飛び越え、階段を駆け上がり目的地まで走り抜けた。

白の世界の中、黒髪の男が壁にもたれ掛かりながら眠っている。

左手には包帯を巻いており、真ん中分けの前髪は寝息で左右に揺れ動く。

正軌だった。

そんな正軌を物影から見つめる少女。

走ったせいか頬がほてっている。

そー…と壁を使って覗き込むがピュッ！と隠れてしまう。
また再びそー…と覗き見、また隠れる。

それを何十回か繰り返し返した後、少女は決意したのか一步、正軌に近づく。

一步、半歩、また一步、一步…とうとう正軌の目の前まで来た。

少女は今にも泣きそうな表情で、目に涙を浮かべている。

プルプルと震えた手で、正軌に触れようとする。

それがとてつもなく長い。

残り数cmというところまで手を伸ばした時…

――ヒュッ！ドォアンッ！

突然正軌の手が壁を勢いよく殴り付ける。

少女は驚いて涙も止まってしまった。

『……っあー！！』

良い夢見せて俺が起きないようにしようとしたようだが無意味だったな。

…ってか、なっchanNあんだけあったら逆に胸やけするわボケ。
あー気持ち悪い。』

どうやらなっchanNが山盛りある夢を見た模様。

正軌は口に手を当て顔色を悪くする。

悪夢に似たような夢らしい。

パッと上を向くと、少女の存在に気づく。

差し出された手が正軌に向けられているので、何となく正軌はその小さな手を握る。

少女の手から体温は感じなかった。

少女は更に顔を赤くさせ、ワタワタ慌てる。
少女を気にせず正軌は立ち上がり、周りを見渡す。

白、白、白、全部白の世界。

どこぞの宗教みたいな世界だ、と呆れたのは秘密だ。

正軌は少女と目線が合うようしゃがみ込み、聞いてみる。

『悪い、此処は何処だか教えてくれないか？』

「…え……。…」

もじもじしながらボソツと何かを話した少女。

よく聞き取れなかったので、耳を近付けてじっと待つ。

少女は内緒話するように正軌の耳に両手と口を当てる。

くすぐったいが我慢するしかない。

少女は相変わらず小さな声で呟くように話す。

「あのね…正軌お兄ちゃんの、空想世界なの。」

衝撃的な発言に目を見張る正軌。

少女に向き直り、なるべく落ち着いた口調で話す。

少女が怯えないように。

『ピロを知ってるか？』

「（コクコク。）」

『じゃあ…』

ピロがどうやって“外”を見てるか知ってるか？』

「……。」

少女は俯いてしまった。

残念そうに……けど、唇を強く閉じて悩んでいる様子だ。

タンッ！

少女は正軌の手を引いて走り出した。

しゃがみ込んでいたのと、突然の事で倒れそうになったけれども、片手を床についてなんとか少女の後を追う。

くぐったり、飛び越えたり、壁を越えたり、走ったりと少女の後ろを精一杯ついて走る。

身長差があり過ぎて腰が痛いけど、少女が答えに導いてくれている確信があった為、無言で手を強く握った。

「ハッ…ハア…」

『あの女性、が…知ってるのか？』

「うん…（コクリ）」

『ハア…ありがとな。』

グッタリしている少女を放ってはおけないので、ヒョイっと抱き上げて、背を向けている女性に歩み寄る。

走り続けたので、汗が半端なく流れている。

1M程距離を空け、黒いストライプのワイシャツと黒いズボンを履いている女性。

腰近くまで長い髪の上らへんに、紐を蝶々結びしているのがうっすら見える。

俺は考えていても始まらないので、女性に声をかける。

『あの、』

「大きくなったわね…正軌。」

全てを言う前に女性が遮る。

……俺の事を知ってるのか。

まあ、俺の空想世界だから当たり前か。

でも…『大きくなった』て、俺は昔この人に逢ったのか？
覚えていないな…。

「覚えて無いのも無理ないわ。

それより、何か用件があるのでしょう？」

考えを読み取られ、複雑な気分になる。

ピロミたいな感覚だ。

思考が読めるならさっさと言ってくれば良いのに。

俺は少女を抱え直した後、口を開ける。

『外の世界を見たいんだ。』

「難しいわ。」

即答されてしまった。

だが、『不可能』とは言っていない。

俺は食いつくように女性に質問する。

『どうすれば出来るんだ?』

「正軌自身の基本人格が薄まれば可能。」

『薄まるとどうなるんだ?』

「ピロのような人格が代わりたいたいと思えば、正軌の意志無く代わってしまおう。」

何回も体験があるでしょう。」

『じゃあ、今なら出来るんだな?』

「不可能ではない。」

ただし、失敗すれば“正軌が消える”と覚悟して。体が朽ちるまで、ずっとこの世界で生きなくてはならない。ピロが外の世界で生きなくてはならなくなるの。

成功率は10%。」

『上等。そうならない覚悟はある。

やり方を教えてくれ。』

「…わかったわ。」

女性がクスッ、と笑みを浮かべて小さく笑った顔を俺は見る事はなかった。

ふわさっ、と女性の髪が風のない世界で揺れたかと思うと、海色の瞳と出会った。

右目には眼帯をつけている。

俺は…長さがバラバラの前髪から見える海色の瞳に、懐かしさを覚えた。

やっぱり、俺は昔会った事がある。

『……サラ……?』

「!?!」

「ええ。私はサラよ。

では、始めましょうか。」

サラは立ち上がり、少女を俺から下ろし、俺の頬を両手で包み込む。

少女と同じく、体温は無かった。

真剣な表情で真っ直ぐ見つめる。

俺も見つめ返すと、サラはチュツと口づけた。

唇が直ぐに離れていく。

啞然としている俺と少女は、サラの行動についていけない。

ギュツと顔を胸に押し付けられ、耳に空気が浸透するように囁かれる。

「真っ直ぐ…走りなさい。疲れたら歩いて良いわ。

でも、決してゴールまで振り返ってはダメ。スタートに戻ってしま
うから。良いわね?」

じゃあ、応援しているわ。」

ゴプウ。

頭を更に押し付けられたかと思うと、サラの体に水に入るように
体が吸い込まれる。

最後に足先までサラの中に入ると、トプン、と後ろで音がした。

目の前は真っ暗。

360度、全て平面。

1 番奥が見えない。

どうなっているのかと後ろ側を見ようとしたが、

（振り返ってはダメ。）

サラの助言に踏み止まる。

俺は立ち上がり、膝や手を払う。

スウーハァー…と深呼吸をして、ダンッ！走り出した。

疲れが溜まっている脚に無茶を頼み込み、俺は走る。

ただ前は暗くて先は見えないが、走るしかない。

それしか方法はないんだし、俺はそうする事しかわからないから。

『長いな、まだまだ何も変わらない。』

「う…ええん。」

疲れたので歩いてたら、子供発見。

俺の本棚の小説でこんな話があったような…こんな場所にいたら危ないし、急いでるけどしゃーないよな。

俺は寄り道する事にした。

中編（雨の日）

「あれ？兄貴、散歩行くの？」

『ん、久しぶりにカリカリ君食いたくなった。』

お前も食うか？』

「んー：食べる！俺まで凹んでたら皆テンション下がっちゃうもん！」

『散歩するから遅くなるかもしれない。そんな時は寝とけよ。』

源希の頭をグリッと乱雑に撫で、靴を履く。

目の腫れが引いてきている源希は、突っ立ったまま頭に手を当ててジッと背中に視線をやる。

源希の心に正軌への違和感を感じたからだ。

ほんの僅かの違い。

正軌は源希を小突いたり蹴ったりはしょっちゅうするが、撫でるという優しい行動は滅多にしない。

：一回だけあったが、グチャグチャッ！本当に無造作に素早く撫で回して、手を離れた。

そして『ふんっ。』と鼻を鳴らして、腕を組み顔を逸らす。

今更どう接したら良いのか正軌はわからないのだろう。

あれが精一杯だったのだ。

ボサボサの髪になって、何も言われなかったけれども：源希はそれだけで嬉しかったのだ。

思わず嬉し涙を流しそうになり、照れ隠しの為に変な事を言っ殴られた。

他人なら『ハア？』と訝しい顔をして理解し合えないと思うかもしれないが……それでも、源希にとっては大切な体験。

たった一回、ほんの数秒の出来事が貴重なのだ。

——だから、この感触は別物だと断言できる。

それほどまでに正軌を知り尽くしているのだ。

正軌が知ったら『気持ち悪い。』とスッパリ兄弟の縁を切ろうとするかもしれないが。

源希はピロの髪をツイツイと軽く引っ張る。

黒いジャージを身につけたピロは、『ん?』と靴紐をキツク縛っている。

正軌なら源希の手を払うだろう。

それに、カリカリ君を食べるのも正軌を知る者なら普通に考えて変だ。

昔、一口食べただけで源希に渡したくらい苦手なのだ。

それを『久しぶりに食いたくなった。』という発言をするのは、『毒薬飲みたくなった。』と変換しても良いくらいの発言。

源希はのしー、とピロの背中に抱き着くように体重をかける。

ピロは『何だよ?』と振り向けば、真剣な瞳と視線がぶつかり合う。

源希は何時にも増して冷静な口調で呟いた。

「ピロ兄、何処行くの?」

まさか：仕返しに行くつもりじゃないよね?」

『あちゃーバレちゃった? 源希の正軌への知識には敵わないわ、本当。』

「この体傷付けたら：茶矢が許しても俺は許さないよ?

本気で追い出すからね? 俺を見くびらないでよ。」

普段の馬鹿丸出しの明るい声からは想像つかない、鋭利な刃物の

ように鋭く、1オクターブ低い冷酷な声。

瞳だけで本気なのだと充分過ぎるほど伝わってくる。

それだけ正軌を大事に、尊敬している表れなのだろう。

ピロは源希の手をポンポン軽く叩き、困ったように笑む。

『正軌には許可を得て、頼まれている。筋肉痛にはなるかもしれないが……それでもダメか？』

「……………」

源希には珍しい無言。

今にも泣きそうな顔で肩に顔を埋める。

——この子は迷っているのだ。

このまま引き止めても必ず危ない場所へ行ってしまう。

……かと言って、笑顔で見送れるはずもない。

結局は危険なのだから。

正軌が頑固なのは知ってるが、優しいのはもっと知っている。

だから、犯人が特定できれば行くであろう事はたやすく想像できる。

大怪我しようが、死ぬかもしれない場所かもしれないが、正軌は迷わず行くのだ。

そんな兄を源希は慕っている。

けど、止めてほしいとも思っているのだ。

複雑な思い、決して正軌には届かないもどかしさ。

ピロはそれを知っていたのだ。

ピロは立ち上がり、小指を源希に差し出す。

源希は意図がわからないが、小指を己の小指と絡める。

ピロはニツと歯を見せ、絡ませた小指を小さく上下に動かす。

『もし、俺様が無傷で帰ったら：源希の嫌いな怖い話な。正軌が庭でしたのより更に怖いやつしてやる。』

「え：ヤダ。」

テスト週間の時に庭で正座させられて耳元で囁かれたのを思い出
し、源希は両耳を隠す。

源希君、実は心霊現象やホラーが大の苦手だった。

正軌の部屋で正軌を怒らせて、怖い話をされて以来：怪談話を極
度に怯えてしまうのだ。

それから正軌はマジグレすると、源希に精神的ショックを与える
為に怪談話をするようになったのは言うまでもない。

ピロはケラケラ笑って、源希の額にデコピンする。

『俺様が万が一かすり傷でもしたら、一つだけ源希の言う事叶えて
やんよ。』

条件としては最高だろう？』

パチン！指を鳴らし、源希にニヤリと笑ってみせる。

源希も同じように指を鳴らして『OK. その勝負乗った。』と同
じくニヒッと歯を見せる。

最後にコツンと拳を合わせて、『楽しみにしとけよ？』と後押し
してからピロは家を出た。

源希は『うん！待ってる！』とピロが見えなくなるまで手を振っ
た。

ピロも背を向けたまま手を軽く振り、夜の闇に消えて行った。

源希は体を抱きしめ、その場にしゃがみ込む。

目をキツクつぶり、祈るように呟いた。

「約束だからね…ピロ兄！」

少年の願いは神に届くのだろうか…

――町外れの工場跡地。

赤也にメールで指定させた場所だ。

俺はデカイ扉の入口で仁王立ちして待っていると、ガガガ…と機械的に扉が開かれた。

工場内は窓から射す月明かりしか照らすモノはない。

暗く不気味な場所だ。

物音一つしない。

埃っぽい為、源希の部屋から拝借した顔半分覆える、本来はオシヤレの為に使う布を上げておく。

薬品とか使われるかもしれないのを想定して。

中に二、三步足を踏み入れると、ガガガ…と開いたのと同じ要領で扉が閉まる。

最後にガコオン・・・と音をたてて完全に扉は閉鎖された。

俺の力で開けるのは困難だろう。

しかも、まだ左肩は完治していないのだ。

両足だって、湿布を貼っている状態。

不利な事は百も承知。

：だが、今やらなくてはならない。

ポケットに両手を突っ込み、声を張り上げる。

『ウォラア！！銃刀法違反血の気バンバン放出野郎と茶矢の機械馬鹿兄貴い！！』

さっさと姿現せてんだあ！！！！』

工場内に響き渡るように怒鳴ってやった。

多分外にも丸聞こえだろう。

まあ、気づいてもらった方が内心有り難い。

俺は目を閉じ、耳を研ぎ澄ませる。

俺以外の二つの呼吸する息遣い。

ナイフを抜き出すのと、銃を構える微かな音。

二人が工場内にいる事は確かだった。

忍び寄る足音で距離を考えていると、

カ、カ、カ、！！！！

ライトが点いたのか一気に眩しくなる。

うっすら瞼を開くのと、タンッ！と駆け上がる音が耳を掠めたのは同時だった。

俺は相手が逆光で見えないが、相手は俺が見える。
見えないのは不利！と感じた時、フリーの腕がヒュウッ！と振りがざした。

——だが、俺は口端をニイイと上に吊り上げる。

『これで勝ったつもりかあ？がき大将が！』
「ッ！？」

目を開眼させ、俺はポケットからある物を素早く取り出しフリーに向かって突いた。

ピッ、フリーの頬に傷付けたそれは……折り畳み式のナイフをワイヤーで細いドライヤーの先端に縛り上げた槍紛いの物だった。

コンセント部分を片手に巻き付け、固定している。
予想外の俊敏な動きに、フリーは一旦距離を置く。
賢明な判断だ。

これはドライヤーから外せば、ナイフを投げ道具に使える。
避けてもワイヤーで怪我を与える事が可能なのだ。

ドライヤーはとも美の物を拝借した。

折り畳み式ナイフとワイヤーはコンビニで購入。

今時のコンビニは便利な物が揃っている。

時間帯も時間帯で、店員に不審な目で見られたけどな。

それに……俺は肉眼じゃなくても見える事が出来るから、目眩ましなんて姑息な手は通用しない。

……は？理由？正軌が普段生活している時、俺がどうやって正軌が見えない場所を見ていると思ってるんだよ。
自分で考えろ。

俺はドライヤーをポケットに入れ、折り畳み式ナイフの穴にワイヤーで括った（くくった）物を構える。

肉眼もそろそろ慣れてきた。

ヒュンヒュン回していると、フリーが赤也に向かって叫ぶ。

「オイ！視力全然悪くねえじゃねえかよ！！頬掠った！」

「僕もわからないよ！目眩まし用のライトも効果ないし、情報には載ってない！！」

それと、怪我したのはお前の油断だよ！

僕も応戦するから本気でやれ！」

『自分の居場所を声で教えてどうすんだよ。笑えるねえ…俺も舐められたもんだ、な！！』

「「！！？」」

ガッシャアアン！！！！

石を一斉に投げて、ライトを壊していく。

それに加えて赤也にも投げたのだが、寸前で避けられた。

…だが、それで良い。

パラパラと落ちるガラスをフリーは跳びはねて怪我を免れる。

そこへダンッ！と一気に間合いを詰める俺。

空中で動ける人間などいない。

ましてや相手はナイフだけだ。

フリーは『チィッ！』と苦虫を噛み潰した顔で舌打ちしたが、赤也は銃声を響かせて俺を狙い撃つ。

身を翻して銃弾から免れる。

真っ直ぐ突っ切っていれば、脳天ぶち抜かれただろう。

赤也の腕は一応確認出来た。

後はパチンコと工場に仕掛けられた罠だけ。

弾は本物ではないらしいが、毒薬は塗られているようだ。変わった形の銃弾に毒々しい色の何かが塗られている。

革手袋を嵌めているとはいえ、触りたくはないな。

『ピュウ♪』口笛を吹き、赤也を見上げる。

優しい笑顔を浮かべてるもんだから、怖いねえ。

フリーは首をコキコキ鳴らして、フードを深く被る。

ナイフをクルクル指で回し、綺麗な英語を呟く。

「I We are revolutionary.

He make the punishment fit for
the crime, now.

(：俺達は革命家。

彼に今、罪に相応しい罰を与える。)」

「さあ、青年よ。

開拓者になりたくば、跪ずけ。」

「「されど、お前に光は無い。」」

『おーおーカックイイ事言っちゃって。惚れちゃうよ？俺様。

Practice, I should not dream
of
doing it.

(実際、夢にもそんな事は思わないけどな。)

ヒヤハハア!!!!!!』

「：ッ、クソがあああ!!!!!!」

ナイフを持ち直して、フリーが特攻して来る。
上手く挑発に乗ったようだ。

ピピピピ…ピピピピ…

『おおう、Bat timing』

反撃してやろうかと思えば、ポケットから通話着信の音楽が。

フリーのナイフをバク転しながら、ポケットから携帯電話を取り出して耳に当てる。

赤也の銃撃をなんとか走って避け、ナイフを振り回すフリーの攻撃を足で何とか躲す（かわす）。

『もしもしー？』

「メシアだ。今、工場前にいる。」

『は？何で？』

フリーを使って赤也の攻撃をしにくくさせ、赤也が上で走るのがわかる。

俺は電話主の言葉に素っ頓狂な声をあげ、携帯電話を肩で挟みながらナイフを投げる。

フリーは避けやがった。

「正軌の後を追ってな。

こうなる事は想定出来ていたから、準備はしてある。」

『どーやって入る気？

おっと。』

顔面ぎりぎりを銃弾が飛び抜け、フリーの蹴りをナイフで切り付

ける。

ふくらはぎに傷付けた。

これで、そこまで激しい動きは出来なくなっただろう。

タン、タンツと赤也が狙いにくそうな場所まで跳びはねる。

メシアの返事を待った。

「“化け物”と呼ばれた自分の力、見せてやるよ。」

プツ。ツー、ツー。

通話が切られたかと思えば、ビュッ！と銃弾とナイフがやってくる。

建物を使ってそれを避けても、フリーは背中を追ってくる。

ちと油断したかな？とか考えてると、

――グッシャアアア！！

壁が壊れる音。

フリーと俺の間に、革手袋に何か刺？が付いたメリケンだっけ？
そんなもんが嵌められた腕が、ボロボロの壁から飛び出ている。

二人が唾然としている内に、俺は壁から離れる。

ガラガラガラ！！と壁が崩れ、そこからメシアが姿を現す。

タンクトップにジーパン。

髪を高い部分で結んでいる。

両手には革手袋の上にメリケン？。

表情は何時もより怖く、厳つい。

冷たいオーラが背中から滲み出ている。

メシアの初めて見る戦闘モードだ。

強い味方の登場だ。

心強いが、頭に血が上ってるからヘマやるかもしれない。

周りをよく見ろよ：メシア。

罠はねえけど、俺の罠に捕まるな。

俺は声を高らかにメシアに話しかける。

『メシア！来てくれてThank you！

周りをよく見て暴れまくれよう！！』

「言われなくても、そのつもりだ。」

楽しいダンスパーティーを仲間外れは酷いなあ、正軌。」

『やっぱし招待状書いた方が良かったかあ？クククッ！

メシアア：今、源希と約束しててなあ、負けたら言う事一つきかな
きやならねえ。協力してくれねえ？

“勝つ為に”。』

「お前の為に力を使おう。背中には任せた！」

『OK！交渉成立だ！

イツツシヨータアイム！！』

背中を合わせ、それぞれの武器を構える。

メシアは珍しく笑みを浮かべ、唇を舌で舐め、狂喜に滲ませてい
る。

それを見てフリーは『チィッ！クソ！』と舌打ちして、嫌な顔を
あからさまに見せた。

メシアとフリーは相性が良いらしい。
こりゃ見物だな。

眠る獅子が目覚める瞬間だ！！

俺は小声でメシアにある事を告げた後、メシアのポケットにある物を赤也に見えないように入れる。

ダンッ！！

二手に別れて走り出した。

（ピロ！おい、聞こえてんのか！？）

：おう、正軌。

グッドタイミング。

遅かったな。

（小さな俺が案内してくれた！

それより：メシアも来たのか。巻き込まれねえよう注意しろよ。）

大丈夫、血の気があるけど意外と冷静だったよ。

赤也のデータにちよつと覗いてくれねえ？今の正軌なら可能だろう？

（何となくコツは掴めてきた。よく見えるな。

っし！行ってくるわ！！赤也の攻撃からメシア守れよ！！）

煩え、頭痛いし、んな事理解してるわベイビー！！

上に上がる方法を考えながらも、赤也と攻防戦を繰り返す。

メシアに当たりそうになれば、落ちてた鉄パイプで野球みたいに打ち付けた。

時たまフリーに攻撃して、翻弄させる。

怪我している分、体力も大幅に削られているフリーに、体力満タンの先程現れた名前通りの救世主メシアは本当に相性最悪。

接近戦が主なフリーは、同じく接近戦のメシアに迂闊に攻撃出来ない。

先程壁を壊したのでわかるが、握力だけじゃなく力が強いメシアが本気を出せば、足をへし折るのはたやすい。

捕まったら、そこで勝敗が確定するのだ。

蹴り飛ばそうとして、もし足を取られれば：お分かりいただけるだろう。

フリーが手を出せない分、メシアはボクシングのように殴り掛かる。

時々フェイントで蹴りつけるが、腕ほどではないが威力は凄い。

蹴っただけで鉄筋が少し曲がったのだ。

メシアは平然と次々攻撃している。

喧嘩慣れしているらしく、無駄な動きがほとんど無い。

味方であって心底有り難いと感じた。

（ピロ、機械に詳しくないけど、ウイルス流してきた。扉付近注意。

後、銃弾残り5発だから。

パチンコもあるけど、ピロの目なら大丈夫だ。BB弾三ビン腰につけてる。）

偵察、妨害ご苦労さん。

ウイルス流せれば立派なもんだよ。

後でやり方聞きたいねえ。

BB弾：ばらまけれねえか？正軌の腕ならきつと可能だ。

（ただ触っただけなんだけどな。
一応期待すんなよ？）

バリ期待してまっす！

ニヤリと赤也に笑みを向け、叫ぶ。

『メシア！

……扉付近に誘導しろ。赤也の機械が壊れて扉が可笑しくなったから。

カックイイ姿見せちまおうぜ！！』

「ああ！

……肯定。^{イエス}」

俺はメシアから離れ、上に上がる壊れた階段に向かって走り出す。

ギギギ……

開かないはずの扉が音をたて、少しずつ開いていく。

それに赤也は慌てて肩掛け鞆の機械を確認すると悲鳴を轟かせた。
フリーが赤也を見た瞬間、ビュッ！とメシアのアップーが腹にダイレクトに決まった。

『ぐはあっ！』と血を吐くフリー。

腹を抱えるフリー、息も切れ切れだった。

一方、メシアは息切れ一つしていない。

涼しい顔でフリーを見下ろし、腹を蹴り飛ばした。

ブーツを履いた靴で腹を中心に顔面まで蹴ったりして、何度も、何度も、容赦なく殴る蹴るとフリーを痛めつける。

ハッキリ言って、手加減無しでメシアはやってる。

俺は機械を慌てて直している赤也に早足で近づくが、赤也も遠距離と近距離が分が悪い事は理解している為、機械にタッチしながら走って逃げる。

そんな時、B B弾が大量に入ったビンが傾き中身がジャラアアアと散らばってしまった。

それに驚いたのと、足を滑らせたのは同じだった。
ドッシャアアン！！と後頭部を打って倒れる赤也。

うは、痛そ。

(時間かかったけど何かやれた。頭痛いだろうな…)

ご苦労さん。

後は傍観していて大丈夫。

脳震盪起こしたらしく、後頭部を抱えて悶える赤也の服を掴み、パチンコと拳銃を足で壊してから下に下りる。

ベキィ！とメシアがナイフを折ったらしく、良い頃合いだった。

俺は赤也を床に落とし、メシアに聞いてみる。

『俺の罠、あんまり必要なかったな。』

「そんな事はない。」

工場内の至る所にワイヤーが張り巡らされている。

万が一用に作ってたのだが…まあ、終わり良ければ全て良しだ。

赤也の指と手首、足首、口に持って来た縄を巻き、フリーと距離

を置いて地面に置く。

さっき確認したが、刃物は所持してなかったからこれくらいで良い。

メシアと目を合わせ、人差し指を立て『一回だけ良い?』と許可を得てから赤也の前に立つ。

グシャツ!

「あゝあゝあゝあゝあゝ!?!?!?!?」

『これは茶矢の思いだ。』

指だけで済んで感謝しろ。』

「僕の、指!?!痛い!?!痛い!?!っ!?!」

「ま!?!待てテメエ!?!お前、赤也に手出すんじ、グッ!?!」

「これは真尋の恨みだ。」

殺す事が出来なくて残念だ。」

「や、ヤメロ!?!俺に触んじゃねえ!?!クソ居候がああ!?!」

「クソ従兄弟。」

ベキヤアツツ!?!

「あゝあゝがっ!?!?!?!?…ぐ、グゾがあゝ…!?!」

メシアに利き手であろう肩を外されて、泣き叫ぶほど痛いであろうが:フリーの意地なのか、唇が切れて血が流れるくらい強く噛み締めて叫ぶのを我慢する。

俺も一応、フリーの頭を叩いておいた。

赤也の機械は代用品だったが、ウイルスやら画面破損やらでもう使えないだろう。

ま、帰り道はメシアが作ってくれてたし大丈夫だけど。

最後に、フリーの長い髪を持ち上げて、ナイフで無造作に切った。パラパラと落ちる銀色の髪。

フリーももう抵抗はしなかった。

フリーの足を縄で結び、一応手首も縛ってからメシアを見上げる。

『んじゃ、警察の前に置いてから帰りますか。』

帰りにカリカリ君食べようぜ。相棒。』

「……了解、相棒。」

——雨が降りしきる夜。

メシアはフリーを、俺は赤也を担いで、交番の前に置いてから、コンビニまで並んで歩いた。

工場からコンビニまで終始無言だったけど、公園でカリカリ君を二人一緒にベンチで食べた時、小さく笑いあった。

戦う時の話で、お互いの顔や表情で腹抱えて、キリの良い所で自宅に帰った。

『明日学校でな。おやすみ。』

「明日も迎えに行く。おやすみ。」

そう言って自宅にそーっと帰れば、源希が玄関口で眠っていた。もう深夜3時くらいだ。

仕方がない。

頭をポンポンと軽く叩いてから、源希の上にカリカリ君を乗せて、両手で抱き上げてから家に帰った。

『勝負は俺の勝ちな。』

源希をベッドに寝かして、部屋を去る時にそう呟いた。

雨の日…それは血を洗い流すレクイエムの日。

青年の傷ついた心が潤う日は訪れるのだろうか…

中編（雨の日）（後書き）

最後は戦闘シーン、夢中で書きました。そのせいで徹夜明けしたのは内緒です。

いやあ、誤字脱字めっちゃありそうだけど投稿しちゃう。二カ所ほど訂正したけど……自分じゃ気づかないもんね（笑）↑開き直り

さてさて、やっと雨の日が終了して、暗いのが終わった！と思った方……すみません。もうちょっとだけ暗いです。まあ、それが終わればコメディイに入るかな、と。

ま、気長に待ってくださいな（笑）

徹夜明けは頭痛が酷いなあ……ガンガンする☆

まだまだ続きます。

中編(真尋Memory)(前書き)

真尋の昔話です。

切なくて、苦くて、辛くて…でも、二人との出会いが彼を大きく変えた。

家族と一緒に成長したのです。

真尋…家族思いの、みんなに優しい子。

彼の今は、彼の努力で掴み得たものなのです。

…では、今までこの小説を読んでくださった方だけお進み下さい。
この話だけ見るだけの方は残念ながらお帰り下さい。

では、どうぞ。

↓

中編(真尋Memory)

ボクは昔から人付き合いが苦手だった。

人見知りもあったけど、顔が熱くなって頭が真っ白になってしま
うのだ。

ひ弱で風邪をひく事も少なくなかった。

そんなボクは、いじめっ子達には恰好の対象だったのだ。

――小学校低学年の時、中々クラスに馴染む事が出来ないボクに
話し掛けてくれた子達がいた。

明るい子達で、クラスの人気者だった子も混じっていた。

ボクは突然の事に頭がパニックになって、何を話したら良いのか
慌ててると…皆待ちくたびれてしまったのか、『もう行こうぜえ。

つまんない。』という言葉を残して、早足で離れて行ってしまった。
ボクは後悔した…多分、きっとあれが最初で最後のチャンスだっ
たから。

…次の日からボクは“イジメ”を受ける事になる。

上級生のがき大将的存在の黒澤 フリイ君に目をつけられて、鞆
持ちやら机に落書きとか、教科書を学校の中庭に投げられたり、“
様”付けで呼んだり……漫画のようなイジメだった。

引っ込み思案なボクが先生に相談出来るはずもなく、ただ黙って
辛さを飲み込んでいた。

…でも、これはまだ序の口。

学年が上がるにつれて、イジメのハードルも上がっていく。

1番印象に残っているのは、小学校四年生。

トイレに無理矢理連れ込まれ、1番奥の個室で初めて殴られた。フリー様はその日の前日に、お母さんを亡くしてしまったらしい。ボクはそれを知らなくて、ただただ止めてほしくて、『やめて…やめてよ…』と泣きわめいてもフリー様は止めてくれなかった。

フリー様の瞳にも涙が滲んでいて、殴る蹴るを繰り返しながら狂ったように叫んでいた。

「お前のせいだ…お前がMotherを殺したんだ！お前が殺したんだ！！」

罪も無い言い掛かりをつけられていたのに気づかないで、ボクは気絶するまで暴力を受けていた。

…目が覚めたのは病院のベッドで、目の前の母さんは酷く悲しい顔して泣いていた。

妹の真理マコも大きな瞳からボロボロ涙を零して、二人して大声で泣くもんだから…ボクも声をあげて、溜まっていたモノを吐き出すように泣き叫んだ。

情けなくって、恥ずかしくって、訳がわからないけど、泣き疲れるまで泣いた記憶がある。

その後、フリー様は転校したけど、卒業までイジメは続いていた。けれど…ボクは学校を風邪以外休まなかった。

休んだら、逃げたような気になってしまうから…家族にこれ以上迷惑かけたくなかったから、ボクは嫌でも毎日通った。

——そして、中学生。

小学校から上がる子が多く、あまり変化はなかった。ボクの身長が急激に伸びた事くらいだ。

でも、大きく変わったのは……皆がボクを“シカト”する事に変わったくらいだ。

違う小学校から来た子も、イジメを見て見ぬ振りをする先生も……全員がボク存在を否定した。

声をかけても何事も無かったように振る舞われ、肩が当たっただけで舌打ちされて払われた。

本当に透明人間になった気分だった。

暴力や罵声を受ける事は無かったけど……陰口やチラチラ見られクスクス笑われる事は確実に増えた。

先生に話し掛けても、『忙しいから。』と早足で行くのに、他の子が話し掛けると笑顔で対応していた。

ボクは……本当に、このまま消えてしまうのか？
消えても、誰も気づいてくれないのだろうか？

精神的に弱ったのか、気持ち悪さから、よくトイレで吐くようになった。

食べても……直ぐに吐いてしまう。

教室に行くのが困難になり、保健室で勉強をするようになってしまった。

何度も三者面談をして、母さんが頭を下げて……その姿が悲しくて、させてしまっている自分自身の弱さが悔しくて……ボクは席を立ち上がり、先生に告げた。

「ボク……古門清高等学校、に受験……します！
受かったら、母さん安心して……仕事に、専念して。ね？」

この地域ではレベルが上の下だが、ボクの成績と学力では厳しい。だから…手の届かない高校に合格したら、自分を変えられると思ったから、古門清高校を選んだのだ。

決意したのは二年生の終わり。

三年生からは、イジメに屈さずただ自分を変える為に教室に行き、必死で勉強した。

一年生から勉強してなかったから、一年生から復習して…家で寝る間も惜しんで机に向かっていた。

けど…三つの離れた真理と留守番の時には、手を休めて一緒に遊んであげた。

この小さな真理にも苦勞をかけてるのは気づいてたし、母さんが忙しい分甘える事も我慢している真理に少しでも甘えさせてやりたい気持ちもあった。

寂しい思いをしないように、母さんが帰って来るか真理が眠るまで遊んで、寝静まった後も必至で勉強した。

シャーペン握ったまま眠る事も少なくなかった。

寝不足で授業中に熟睡してしまって、授業についていけなくなつた時は、教科書を見たり保健室の先生に教えてもらったりして、なんとか受験日までやり過ごした。

——受験日当日。

早めに行って勉強していた。

ボクの中学校でも、頭の良い人が数名受験に来ていて…本当に受かるかと不安になっていれば、隣の席に違う中学校の子が座った。

一人は茶髪のやんちゃそうな男の子と、後ろに茶髪のショートヘ

アの女の子。

受験対策のプリントを見ながら、男の子が教えている様子だ。
男の子の机には筆記用具しか置いていない。

頭が良い子なのかな：なんて見ていると、パチッと視線が合った。
怒られると思って顔を逸らすと、横から明るい声がして手を差し
出された。

「俺、宮古 源希！後ろの席は水木 茶矢！
よろしくな！」

「初めまして、水木 茶矢です。
受かったらよろしくお願いします。」

「……え、ボクに？」

「名前は？窪田？」

「え、えと、窪田 真尋です。」

「窪田か！よろしくな！」

差し出された手に怖ず怖ず手を伸ばすと、宮古君はガツシリ握ら
れた。

水木さんはパソコンと宮古君の頭を叩き、『私達は友達作りに来た
のではないですよ。』と注意して、『でも、よろしくお願いします。
』と頭を下げたから、慌ててボクも頭を下げた。

それから二人に誘われて、一緒に勉強する事になった。
ボクはその時間が、受かった時よりも嬉しかった。

——これが、源希君と茶矢ちゃんとの出会い。

本当…二人共、今とあんまり変わってないや…クスッ。

事実…もし、源希君と茶矢ちゃんが色々と教えてくれなかったら…ボクは古門清高校に受かってないと思う。
面接はガチガチだったし…。

受かった時の喜びは半端じゃなく、力がないのに真尋を抱き上げたり、母さんの仕事場まで報告しに行ったり、最終的には家族三人でボロボロと嬉し泣きして眠った。

涙もろいと言われても、確率が1%以下と断言されていた高校に受かったのだから、そのくらい許してほしい。

——そして、入学式。

新品の制服と鞆を身につけると、弱い自分とは決別出来たような

気持ちになる。

真理も中学校の入学式だったけど、『真尋君についてあげて。』と母さんに言ってくれたから…入学式始まる前に泣きそうになってしまった。

掲示板を見て、クラスを探していると…見知った人達と再開した。

「あ！窪田じゃん！！」

お前も合格したんだ！おめでとう！！」

「おめでとうございます、窪田君。」

ところで、クラスは見つかりましたか？」

「二人共…ありがとう。そして、おめでとう。」

えと…まだ、かな。中々見つからなくて……」

「一緒に探してやるよ！因みに、俺と茶矢はB組だったぜ！」

「喧しい人と一緒に苦労しますよ。」

「あ！ヒデェ！！」

「本当の事でしょう。源希君。」

「…ふふっ。仲良しだね、二人共。」

口に手を当てて笑う。

コントみたいな二人が可笑しくて…気づいたら、二人に直視されていた。

下から顔を覗き込まれて、真っ赤になりながら慌てて謝ろうとしたら…水木さんに遮られる。

人差し指を突き上げ、凜とした声で顔を指差す。

「笑顔は1番の化粧、とよく言いますが…窪田君は笑顔が1番似合ってますよ。断言します。」

「断言できます、だろ。」

うん！笑顔初めて見たけど、優しい感じがして俺も似合ってると思う！」

「そ、そんな事…ないよ……ふえ…」

——そんな嬉しい言葉、初めて言われたから…とうとう嬉し泣きしてしまった。

迷惑かかるからと涙を拭っても、拭っても止まってくれなくて…
…恥ずかしくて、その場にしゃがみ込む。

…二人共、きつと困った顔している。

止まれ…止まれ、涙。

泣き虫な弱いボクとは決別したんだろ…止まってよ……。

一生懸命、涙を止めようとしていると、前で二人の話し声が聞こえてくる。

きつと…嫌になっただろうな…。

「……源希君。」

「俺！？俺が泣かせたの！？全部俺?!」

「ち、違うよ！ボクが泣き虫なだけで…」

「あ、真尋君の名前発見。」

「「へ？」」

宮古君に渡されたティッシュで鼻をかんでいると、水木さんがポツリと呟いた。

驚いた顔で立ち上がり、水木さんが指差した先を見ると……

「あ…あった。」

「窪田もB組か！やったな！！」

「一年間、よろしくお願いします。真尋君。」

「うん！よろしくね！」

源希君…と茶矢ちゃん？」

「おう！」

「はい。」

これが古門清高校の最初の思い出。
明るい未来への第一歩だったのだ。

喜ぶボク達の遠くで、ボク達のお母さん達も仲良くなっていたのは
後で知る。

――入学式から数日後。

二人と遊ぶ約束をしていて急いで駅前まで走っていると…久しぶ
りにフリー様に再会した。

横に知らない人を一人連れて、フードを深く被って片手にはナイ
フを握ってる。

…蛇に睨まれた蛙のように体が固まった。

「よお…真尋！久しぶりだなあ？」

今、金に困ってんだよ…財布くれねえか？」

「フリー、お前顔が悪いな。フッフ…。」

口がパクパク動くだけで、声が出ない。
助けを呼びたくても、震えて意味をなさない。

昔、トイレでの思い出がフラッシュバックする。
泣き叫んで助けを求めても、皆ただ遠巻きに見ているだけだった。
手を差し延べてくれた事なんか全くなくて……

震える手で、ポケットから財布を取り出そうとした瞬間、

『……オイ、テメェら。こんな場所で何してんだよ……あゝあ？』

海色の髪の高背の男の人。

か……顔が、怖い……

オーラが……魔神が後ろに立ってる。

古門清の制服着てるけど……ヤクザ！？

男の人は、ボクの手にある財布を見て、一層眉間に皺を深く刻む。
顔の影がサツと更に黒くなった。

『……お前ら、ただじゃおかねえぞ？自分より弱い奴、』
「「に、逃げろ！！」」

フリー様と連れの人走って逃げる。

ボクは、腰が抜けて何もする事が出来ない。

男の人は落とした財布を拾って、ボクから視線を外した今がチャンスだと思って男の人の横を走り抜ける。

全速力で二人が待つ場所まで人混みを駆け抜ける。

……けど、財布が無いのは困るなあ。

もう、中身なくなってるよなあ。

一応、望みは薄いけど交番に頼んでおこうかな。

源希君に電話して後で追いかけるから、と連絡してから交番に向かう。

——そういえば、あの男の人。

追いかけて来なかったな……何か言いかけてたけど、何を言おうとしたんだろう？

フリー様達に怒ってたように思ったけど……気のせいかな。

……振り向いても当然男の人はいなくて。

不思議な感覚が胸に残っていて。

「……急ごう。」

二人を待たせてはダメだと思い、駆け出した。

「……あのお、すみません。」

「ん？どうしたんだい？」

交番を覗くとお巡りさんが不思議そうに財布を見ていた。

……あ、ボクの財布だ。

どうしてお巡りさんが持ってるんだろ？

ボクの反応を見て、お巡りさんが財布とボクを見比べる。

「この財布、君の？」

「あ、はい。公園の前で落としちゃって…」

「そうなの？これ、交番の前に置いてあってねえ。不思議なんだよなあ。」

あ、書類は書いてもらうよ。」

「あ、はい。」

書類に色々書いてから、財布を返してもらった。

お巡りさんは最後まで顎の髭を触って、納得いかないような、不思議な物を見るような目で財布を疑視していた。

…変な形でもしているのだろうか？

ボク的には普通のお財布なんだけどなあ…誕生日に真理がこの財布をプレゼントしてくれた。

大切な宝物の一つ。

お巡りさんは指差して、唸るように話した。

「普通ねえ、交番にくるのは中身がゴッソリ無くなってるんだけど…君の財布、取られた形跡が全くないんだよ。不思議な事があるんだねえ…。」

交番の前に、チョーンって置いてあってねえ。トイレから戻って、それ見た時にはねえ…。」

「…：…本当に中身取られてない。」

「…：…だからさあ。」

ま、次からは気をつけてねえ。拾ってくれた人に感謝しなさいよ。」

「はい、ありがとうございました。」

ペコリと頭を下げてから、大切にポケットにしまって走り出した。

——これが正軌先輩との初めての出会い。

…あの時は本当にごめんなさい。
反省します。

…今日は懐かしい思い出ばかり見るなあ。
まるで、もうすぐ死んじやうみたいに…

……ボクは死んじやうのかな？

…ああ、そういえば校舎裏に連れられたんだ。
フリー様が茶矢ちゃんにナイフを突き付けたから茶矢ちゃんが危
ないと思って、間に入ったら突然後頭部殴られて…それから意識無
くなったんだ。

茶矢ちゃんがボクの名前を叫ぶ声がだんだん遠くなって、色んな
カ所から血が流れ出る感覚がして…

「……………あ……。」

目をうつすら開くと真っ白な天井が見えた。

薬品の臭いや、誰かが泣く声。

両手を誰かが握っていた。

バツ！と視界に真理が映るとお母さんも見えた。

真理はセーラー服のまま、二人共泣き腫らした痕がある。

「真理…お母さん…？」

何で、泣いてるの？」

掠れ声で二人に聞けば、真理が抱き着いてきた。

酸素マスクを外して、泣いてる真理の背中をポンポン叩いてあやす。

手には包帯が巻かれていて、耳が聞こえない。

「真尋君…ずっと眠ってたんだよ？三日くらい目を覚まさないから…真理、もう心配で心配で…うえええ…」

「本当、生きてて良かった…。大量出血で、九死に一生を得たのよ。お母さん、ズツ…お医者さん呼んで…くるわねえ…」

お母さんもボロボロ涙を零して病室を出て行った。

ボクは包帯だらけらしい。

首だけは無事なようで、安心した。

……………あれ？茶矢ちゃんは？

——茶矢ちゃんは!?

ガバッ!

「真理、茶矢ちゃんは…っ!」

「真尋君! まだ寝てないと!」

水木さんなら…廊下でお友達さんと待ってるから。ほら、安静にしてないと、管が抜けちゃうよ?」

「ごめんね…あ、まだ輸血してるんだ。」

「うん。ほら、呼んできてあげるから、良い子で寝てるんだよ?」

あ、後……」

「…どうしたの?」

罰が悪そうに真理が振り返る。

テテテ…とベッドに戻って、ボクの手を握る。

内緒話をするように耳に手と口を近づけて、小声で囁く。

悲しそうに見えるのは何故だろうか?

「あのね…水木さん、学校休んでまでずっと真尋君が起きるの廊下で待ってたんだから。」

笑顔見せてあげてね? お兄ちゃん♪」

最後にウインクしてから病室を出た真理。

茶矢ちゃんが責任を負う事ないんだけどなあ…ボクが巻き込んじゃったようなものだし。

うん、笑顔見せて安心してくれるなら安いもんだよ。

“ ボクは大丈夫だよ ”

この思いが伝わると良いな。

中編(真尋Memory)

――カララ…。

最初は誰が入って来るのだろうか？と顔を横に向けて見ていると、茶矢ちゃんに肩に手を回して一緒に歩く源希君。

茶矢ちゃんの顔も、泣き疲れた痛々しい表情で、手首に包帯を巻いている。

源希君が支えないと、今にも倒れてしまいそうだ。

二人の後ろを、正軌先輩とメシア先輩が並んで入るけど…正軌先輩が『狭い。』って先に入った。

茶矢ちゃん以外、全員制服だった。

全員が入った後、パタンと扉は閉まる。

さっきから茶矢ちゃんは一度も目を合わせてくれない。悔しそうに、今にも泣きそうな顔で顔を逸らしている。

茶矢ちゃんは負い目を感じているのだろうか？

それは嫌だ。

だって、友達にそんな思いをしてほしくない。

「茶矢ちゃん。」

「(ビクッ!)…ごめんなさい、真尋君ごめんなさい…私のせいで、私があんな事言わなかったら…:…ごめんなさい。」

「茶矢、窪田をちゃんと見ろ。今、窪田から逃げるな。

それに、窪田の怪我はお前のせいじゃない。」

「だっ、て…私が…:…。」

顔見せなんて出来ないよ…ウ…:…。」

「泣くなよ、あーよしよし。」

茶矢ちゃんの頭を抱き寄せて、背中をポンポンと子供をあやすように叩く源希君。

茶矢ちゃんは声押し殺して泣いている。

ボクまで悲しくなってきた…。

無理矢理体を起こそうとすると、正軌先輩とメシア先輩が源希君達の前に出る。

ボクの体を寝かせて、隠されていたリモコンを手に置かれた。

メシア先輩は、ケーキの箱をテーブルに置いてくれる。

『これで動かせるから。無茶するな。』

「あのケーキ屋で色々と買って来た。土産だ。」

『後、二人に朗報。』

フリーと赤也が警察に捕まった。暫くは気を落ち着かせられるだろう。』

椅子に座って、ボクの頭を撫で下ろしてくれる正軌先輩。

メシア先輩は反対側の椅子に座って腕組みしている。

茶矢ちゃんはまだ源希君の腕の中で、源希君と目が合えば苦笑を浮かべた。

「だーいじょうぶ！窪田まで、んな顔すんなって。」

ほら、茶矢。窪田はお前の事心配してんぞ？傍にいてやつから、顔くらいちゃんと見せよ。な？」

「…真尋君は優しいから。私の顔なんて、本当は…」

『茶矢、そろそろ俺も』

スッパアアアアアン！！！！

正軌先輩が言いかけてる途中で、病室の扉が勢いよく開かれる。病室にいる全員の視線が一斉に扉にいる人物に集中する。

黒い髪を靡かせて、眼鏡を中指で押し上げて、鞆を床に投げ捨てて、その人は一直線に茶矢ちゃんに向かって大股で歩く。

怒った顔で歯をギリツ！と鳴らしてから、手を振り上げた。

パァン…！

病室に乾いた音が響く。

ボクと源希君は啞然とした表情で友ちゃん先輩と茶矢ちゃんを見ている。

茶矢ちゃんの頬は赤く熱を持った。

茶矢ちゃんは頬に手を当て、友ちゃん先輩に見開いた瞳を向ける。状況が飲み込めていないようだ。

ボクもわからないけど…。

友ちゃん先輩がもう一度手を上げた時、スバァン！と友ちゃん先輩の頬を茶矢ちゃんが平手打ちした。

これには正軌先輩も驚いた様子だ。

唯一、メシア先輩だけが冷静に成り行きを見守っている。何か知っているのだろうか？

友ちゃん先輩は熱い頬を抑え、キツ！と鋭い瞳で茶矢ちゃんを睨みつける。

茶矢ちゃんは自力で両足で立ち、友ちゃん先輩を見据える。

何時もの茶矢ちゃんに戻ってきている。

友ちゃん先輩は病室なのだけど大声を出して茶矢ちゃんに怒鳴り

付ける。

「あんたが休むから日直あたしがやらなきゃいけなかったんだからね！！馬鹿茶矢！！！」

『「「「……。」」」』

シーーーーーン……………

友ちゃん先輩の発言に、流石の茶矢ちゃんも呆れ果てた目で見ている。

もっと重要な事を言うのかと思ったけど…うん、友ちゃん先輩は友ちゃん先輩だ。

茶矢ちゃんは舌打ちして、友ちゃん先輩の頬っぺたを抓っている。友ちゃん先輩も負けじ魂で茶矢ちゃんの鼻を摘み取る。

茶矢ちゃんは手首が痛むのか顔を一瞬歪めたのを彼女は見逃さなかった。

「へっ！痛くて顔を歪めて泣いて、悲劇のヒロイン！？もしそうなら腹抱えて爆笑してあげるわ！
キャハハハハハハ！」

「喧しいです、黙りなさい、此処は病室で重傷の方がいるんです、貴女の汚らしい笑い声で怪我が悪化したらどう責任とるんですか、悲劇のヒロインとか表現気持ち悪いです、ちようど病院にいるのですから頭調べてもらったらどうですか？」

「あんたがいつぱん黙りなさいよ！」

「貴女の声は不快感を与えます。触らないで下さい。」

二人のやり取りで、しんみりしてた空気が一気に普通に戻った。正軌先輩はため息をついたけど、ボクと源希君は小さく笑った。だって、ボクらはこんな日常を求めていたんだから。

二人が喧嘩して、ボクと源希君が宥めて、メシア先輩はずっと傍観してて、正軌先輩が呆れた顔で最後は止めてくれて・・・

そんなボクの当たり前な日々の中で、誰かが泣いているのは嫌なんだ。

皆が笑顔でいてほしいんだ。

ボクは止めようとする正軌先輩に笑顔を向けて立ち上がり、ベツドの左右のパイプを松葉杖代わりに、口論している二人に歩み寄る。一步、また一步、地道に、亀より遅いかもしれないけど、ボクは歩く。

正軌先輩が輸血のアレを動かしてくれて、ボクは漸く茶矢ちゃんに辿り着けた。

そっ・・・と茶矢ちゃんの手に触れる。

ボクよりも冷たい手。

茶矢ちゃんは驚愕の顔でボクを見上げた。

顔の包帯を解いて、ニコ、と笑みを見せる。

「茶矢ちゃん、」

「真尋君・・・」

「ボクは今“倅せ”だよ？」

茶矢ちゃんも一緒に倅せになってほしい。

これはボクからのお願い。ね？茶矢ちゃん。」

小さな手をボクの胸に当てて、ボクは茶矢ちゃんにお願いする。
茶矢ちゃんは更にビックリした顔でボクを見上げてる目から涙が流れる。

それを指で掬ってあげようとする、包帯に染み込んだ。

茶矢ちゃんは唇を噛み締めて俯き、頭を左右に振る。

否定の意志表示だ。

涙声で手の平をギュッと握り締める。

「私は…真尋君に、ごめんなさい…」

「…ボクね、謝罪の言葉は嫌いなんだ。謝られた方も悲しくなっちゃうから。」

「え…それじゃあ、何て…」

頬に手を添えて、優しく微笑む。

真理によく教えてる言葉を誰かに言うのは、ちょっと恥ずかしいかな。

…でも、今ピッタリの言葉だと思うから。

友達が泣き止んでくれるなら、ボクが恥ずかしい思いしても大丈夫。
夫。

照れ笑いを隠さないで、茶矢ちゃんの目を見て話す。

「人間ってさ、感謝される方が気分が良いんだ。泣いて謝られても、相手も悲しくなっちゃう。」

だったら、笑顔で『ありがとう。』が良くないかな？ボクはそう思う。」

「……………ありがと…真尋君、ありがとう…!!」

笑顔はなかったけど、茶矢ちゃんからはさつきとは違う涙が床に零れ落ちた。

握られた手の力も抜けて、頬に添えた手の上に更に手を重ねる茶矢ちゃん。

ボロボロ涙を流している姿を見ると、もらい泣きしてしまった。指で拭つてると、『泣き虫の仲間入りですね。』凜とした声が前から聞こえて、薄く笑む唇。

…茶矢ちゃんが笑った。

ボクもつられて笑う。

二人で久しぶりに笑ったような気がした。

ベッドに真尋を寝かせて、茶矢は源希の膝の上で寝ている。満足に眠ってなかったようで、茶矢は熟睡している。こういう時は小さいと便利だなあって思う。

横の椅子に座る皆月は考える仕草で真尋の寝顔を見ている。

うん、茶矢が寝てればまだ大人しいか。
何でも茶矢にちよっかい出すのかねえ。

…ま、皆月のお陰で茶矢は落ち着いたけどな。
終わり良ければ全て良し。
うんうん。

…にしても、何故に真尋をそんなに凝視するのか。
寝顔に落書きする気か？

『どうした？そんなに真尋の顔を見つめて。』

「……ちよっとね。薄々気づいてはいたけど…うん。」

「友恵ちゃん、何に気づいてたの？」

源希が茶矢の背中をトン、トン、優しく叩きながら聞く。

メシアも皆月を目だけ向けている。

皆月は真尋を指差して、ニヤリと怪しい笑みを浮かべた。

「真尋、“天然タラシ”ですよ。

今回は“茶矢”相手だったから大丈夫だったけど、他の女だったら
甘いマスクに惚れてますって。マジ、ホスト向き。ククッ。」

『「オイ。」』

「人付き合いの仕方を学べば、そっちの世界で働けるかもな。真尋
は性格が顔に表れているから、癒し系タイプか。身長高いし。」

『「メシア!？」』

「地味な見た目をイメチェンすれば、絶対モテるタイプですよ。後、
体力つけば。」

「まあ、そこが良いと思う奴もいるだろう。今時の草食系男子が好
きな女が増えているし。」

「わかってるわね、メシア。」

「テレビはよく見るからな。友恵もわかってるな。」

「何の話？」

親指を突き立て合う二人の頭を叩いてやろうと手首の準備運動をしていると、後ろからボソツと声が聞こえた。

ヒンヤリとした手が手首を捕らえた。

聞き覚えのある幽霊よりも怖い存在に、サッとメシアと眠る二人以外は青ざめる。

皆月さえも何も言わない。

ギキギ・・と反抗する頭を無理矢理振り向かせ、白衣の天使みたいな笑顔で俺の肩に顎を乗せている女性を、見た。

神崎さんが……出た。

…誰も気づかなかったよな？

人間なら気配あるよな？

一般人が消せるの？気配って。

無理だろ。

——あ、そうか。

神崎さんなら出来るんだ。

神崎さんなら何しても納得できる。

しないと、自分の考えが崩れそうで、強制的に自分勝手に理由をつけて受け入れる。

源希は茶矢をメシアに預けて、神崎さんの前で正座している。

俺も皆月も続いて正座した。

体が無意識にそうしないと身の危険が、と判断したようだ。

女王様の皆月でさえ、こうなのだ。

絶対王政ならぬ、絶対神崎さんだ。

メシアはただ座って神崎さんを見据えて、挨拶代わりに軽く頭を下げた。

「正軌君の周りは、病院好きねえ？三人：いや、四人がこの病院でお世話になってるわね。」

「あの：俺達何かしでかしました？」

「ううん、正軌君以外は誰も。あなた達が勝手に正座しているだけよ？」

私は真尋君の包帯替えに來ただけだし。まあ、何故顔の包帯が解けるのかは疑問だけど、ね？」

「それは：その、色々ありました。はい：。」

「まあ、良いわ。解く手間が省けたし。正軌君に責任とってもらわ。」

『（：二人の仲が戻ったと思えば安いものか。仕方ない。）

：わかりました。』

「ふふ、後でついて来てちょうだい。命の保証はしてあげるから。」

頭をクシャリと撫で回されたけど、冷や汗が流れるだけだった。

横の二人は哀れみを含めた視線を送る。

神崎さんは鋏をワゴンから取り出し、チャキンと鳴らして俺達を見下ろす。

やっぱり笑顔だ。

「じゃあ、出て行ってくれる？治療するから。

それとも：真っ裸にされたいのかしら？露出狂がいる、って言って警察呼ぶわよ？」

『「失礼しました！」』

『メシア早く来い!』

「ああ。すぐ行く。」

そう言ったけど、メシアは追って来なかった。

病室に残された二人。

メシアが先に口を開く。

「……神崎さん、だったか?」

「何かしら? 黒澤メシア君。」

——正軌達が退室した後。

神崎はメシアに気を使わず、包帯をジョキジョキ切っていく。

メシアは茶矢を膝に乗せて座ったまま、神崎の行動を直視する。

神崎は視線を無視して包帯の残骸を袋に入れ、傷口を間近で確認している。

顔を上げずに手慣れた手つきで処置を行っていく姿は、美人の真面目な看護師だ。

仕事ぶりからは、先程の本性を想像できない。

……読めない人だ。

メシアは心の内で呟いた。

薄い唇を少し空け、神崎さんに話しかける。

「今度、空いている日はないか?」

「デートのお誘いかしら？年下はあまり興味ないんだけど。」

「美味しいスイーツ店を知っているんだが、甘い物は嫌いかな？」

「あら、奢ってくれるのかしら？」

「自分の質問に出来る限り答えてくれたら、全て奢ろう。荷物持ちも引き受ける。」

「…良い条件だろ？」

正軌「いや、ピロの口癖を思い出して、メシアは口に出す。

願掛けを込めて。

「…違和感が、だんだん触れ合うに連れて、ねずみ算式に増えて、一つの確信に変わっていく。」

確信なのだが、自分はそっち側に詳しくはない。

インターネットなどで調べる力が自分には無い。

周りに聞けるはずもない。

「――しかし、この人だけは条件に当て嵌まる。」

「…きつと、最初で最後。」

頼みの綱はこの人だけだから。

手放す訳にはいかない。

断られる可能性は大。

自身が諦めるのは皆無。

家が近いのも、神のささやかなサービスだ。

神崎は手を止めずに、横目でメシアを観察するように目だけで撫で回す。

普通なら気色悪く思い顔を逸らすか、神崎の本性をよく知る者は逃げ出すかするだろう。

…だが、どんな気持ち悪く感じても、早く近くに行きたくても、メシアは神崎を一点に睨むように直視する。

日本初、“狼VS般若”の睨み合いが勃発されようとしていた。

……が、先に般若…違った、神崎が真尋に視線を変えた。

包帯を巻き終えたのか、真尋の衣服のボタンをはめていく。

神崎はため息を吐き、

「仕方ないわね。断つてもしつこく病院通いするだろうし、一回くらい良いわよ。」

そのかわり、黒澤君は入院しない事も条件に加える事。良いわね。」

「…ありがとう。」

電話番号とアドレスは置いておくから。」

「あら、もう帰るの？なら、ついでに水木さんの手首を見るから、置いてから行ってちょうだい。」

「ああ。連絡頼むな。」

茶矢を椅子に座らせ、二つ折りにした一枚のメモ用紙をテーブルに置いてから立ち上がる。

ひらひら手を振って見送る神崎。

メシアは振り返る事なく、病室を出て行った。

クスツと笑む神崎は、何を考えているのか。

神でさえ読み取る事は困難だろう…

中編(真尋Memory)(後書き)

真尋Memory、終了。

次は正軌が殺されます↑
すいやせん、嘘です。

はてさて、次から暗いのは終わるかな？

まだまだ続きます。

中編（裏読み）（前書き）

前の話の後の話。

今まで薄かったような濃かったような存在の神崎さんが動き出します。

では、

『俺…実は、ホスト目指してたんだよね。可愛がってあげるよ。．．子猫ちゃん♪』

——え？白衣の天使様が俺を呼んでるって？か、神崎さん？

……んー、子猫ちゃんごめんね？ちょうどホラー体験してくるわ。待っててくれたら、ご褒美あげるよ？じゃあ！』

というナルシスト野郎でも、お進み下さい。

真尋はこんな子に育てませんので、ご安心を↑

では、インターネット依存症と呼ばれた方もどうぞ。

↓

中編（裏読み）

『――メシア！大丈夫だったか？』

「ああ。問題ない。」

茶矢は手首の治療をしているから、もう入って良いぞ。」

メシアがやっと退室したと思えば、用事があるらしくそのまま帰ってしまった。

その時の表情は、やっと手掛かりを手に入れた者のように、安らかな笑顔だった。

『メシア、見送るぞ。』

「「ダメー!!」」

見送ろうとメシアの後を追う為一步一步くと、ガシツ！と抱き着かれた。

下を向けば源希と皆月が青い顔で、『死にたくない。』と必死に頭をブンブン左右に振って、俺を引き止める。

俺がいなくなる↓神崎さん登場↓俺いない↓黒笑顔で二人に聞かれる↓未知数。

死ぬ可能性、大。

二人の脳内シュミレーションは全てBad Endで終了しているようだ。

…あの人は殺人鬼か。

まあ、気持ちはわからなくもないけど。

あの人の昔を知りたいようで知りたくない。

知ってしまったら今の日常を取り戻せなくなりそうだ。

『わかったから離せ。』源希の頭を押して離そうとする。
せめて別れの挨拶くらいはしようと思シアが行った方を見るが、
既に見えなくなっていた。
珍しく、メシアは今日俺に触れなかった。
親離れした子供を見送る親のような、ちょっと寂しい気持ちにな
った。

うんうん、メシアも大人になったかあ。

…ってか、あの日以来メシアが元気ないように思う。
俺の気のせいだろうか。

あの甘えん坊の背中が、遅しくなっている。

…身長抜かされるかな？

（正軌はメシアの親父か。思わず出ちゃたわ。）

だよな。

子供の巣立ちって寂しいものだな…しんみりしちまう。

（お前はお袋か。

同年代！まだ高校三年生！）

はいはい、煩いよ。

…なあ、今すぐ代われない？

俺、眠たいから代わりに帰ってほしいんだけど。

（ヤダ。そんな見え透いた嘘で俺様を騙せると思うな！！そんな
子に育てた覚えはないわ！！）

俺も育てられた覚えねえよ。

深層心理聞こえるんだろ？

嘘ついても意味ねえか、残念。

素直に捕われるしか道は残ってねえのか……クソッ。

（大丈夫！俺様も一緒にいるから安心しな！

一人じゃねえよ！！）

……だな。

誰もいないよりかは、まだ心強いよな。

大丈夫、大丈夫……命の保証は（多分）ある！

…生きて帰れますように。

母さんの弁当が最期の晩餐になりませんように。

神様、信じてねえけど頼みます！！

——カラッ。

手を合わせて天に願っていると、扉が開いて全員が固まった。

皆月：そんな強く抱き着くと腰痛い。

源希は太股にしがみつくなボケ。

神崎さんは女神の微笑みで俺様を一瞥した後、ニコツと俺を見上げる。

冷や汗がタラー…頬をつたうのは生理的現象だ。

「じゃあ、正軌君借りるわね。

遠回りするけど、ついて来てちょうだい。」

『…はい。』

「正兄！生還を祈ってる！」

「先輩の骨は拾って家に届けてあげます。せめてもの情けです。」
『死なないわ！勝手に殺すな！』
じゃあ、用事があれば先に帰れよ。』

二人がハンカチを振るのを無視して、神崎さんの後ろをついて歩く。

歩いていると、ほとんどの患者さんにはこやかに神崎さんに挨拶するが、一部の患者と医者はビクビク頭を下げて逃げるように去っていった。

……視線痛いから、前髪で見えにくくしよ。
手で前髪をやろうとすると、ナースステーションに到着。
ワゴンを置きに行く神崎を入口付近で待つ。

早々に戻って来た神崎さんは、カルテと聴診器を片手に抱えて歩き出す。

俺は最初と同じく黙って後ろを歩いて行く。

暫く歩いているとあまり人気のない場所に変わり、俺は“仮眠室”という表札が印された部屋に入れられた。

・・・ガチャン。

後ろ手に鍵を閉められ、ベッドとソファが主に置かれた空間で二人きりになる。

健全な神崎さん知らない男子なら盛り上がるだろうシチュエーションに、俺の脳は生死の安否が猛烈に心配していた。

悪寒が半端ない。

「じゃあ、ソファに座ってちょうだい。」

『は、はい……。』

促されるようにソファに腰掛ける。

神崎さんは椅子を俺の前まで引きずってきた。

神崎さんはカルテを開いて一通り目を通すと、ボールペンを胸ポケットから取り出した。

一瞬、刺されるのかと想像したのは秘密だ。

目の前で足を重ね、ボールペンを口に当てる神崎さん。

ここで照れたら、天国から一気に地獄に堕ちっから注意。

見ない事が大正解。

静かな、ちよつと埃っぽい部屋で、最初に神崎さんが言葉を出した。

「今からこれにボールペンで書いていってちょうだい。

ただの健康診断書だから。後で色々質問させてもらうわ。」

『わかりました。』

神崎さんはカルテから一枚紙を取り除いてから、カルテを渡す。

受け取ってザッと見ると、彼女の話した通りの学校で書いた事のある健康診断書だった。

ボールペンで丸をつけたり文字を書き込んだりして、空欄を埋めていく。

神崎さんは黙ってカルテを眺めていた。

書き終わったそれを渡し、神崎さんが外した紙を再び挟む。

何の紙なのだろう、と考えたが深追いはしない。

わからない物を見せられても、何も出来ないし。

彼女はボールペンを指先で回し、ピタと止めた。

カルテから俺に視線を移す。

「今からする質問に、答えられたら答えて。わからない、答えたくない時は『わからない』で答えて。」

『はい。』

頷いて答えた。

神崎さんはカルテに目を向けながら、質問する時は俺を見る。

質問が始まった。

「あなたの名前は？」

『宮古 正軌です。』

「生年月日を教えてください。」

『19xx年10月3日。』

最初はこんな簡単な質問を次々とされた。

俺も正直に答えていく。

だが、質問の内容が段々と根本に迫っていく。

時折意図がわからないモノも含まれていた。

「今、あなたは幸せですか？」

『まあまあです。』

「時折、激しい頭痛がしますか？」

『…はい。』

「頻度は？」

『わかりません。』

「そう。」

普通に暮らしていて、心臓が締め付けられるように痛む時がありますか？」

『……はい。』

「頻度は？具体的にどのような時になるのか教えて。」

『わかりません。』

「知らない間に時間が過ぎていく事は？」

『わかりません。』

「気づいたら、場所が変わってる事は？」

『わかりません。』

「夢で自分が歩いている姿をよく見えますか？」

『わかりません。』

「悪夢は頻繁に見えますか？」

『いいえ。』

「じゃあ…」

『ちよつと待ってください。そろそろいい加減にして下さい。

一体何の質問なんですか？意図がわかりません。

俺が夢遊病か調べてるのですか？なら、その心配はありませんよ。
健康体です。』

神崎さんの聞き出した事が、ピロやサラ達の事だと気づいた俺は抗議した。

：ピロの事は家族にしか話してない。

俺の家族が俺の秘密を誰かにべらべら話す可能性は無いに等しい。
源希でも、これだけは信用しているのだ。

母さんは、しょうもない事は話すけど、大切な事には口が堅いのを知っている。

親父は家族以外はほとんど喋らない。

俺本人が教える事は有り得ない。

茶矢達にも話してない、家族だけの極秘なのだ。

——だから、看護師だけど他人の彼女が知っているという事は、
不自然だ。

彼女の前で入れ代わったまま会った記憶はないし、数年前の時は彼女はまだこの病院にいなかった…と思う。

ピロと会った事があれば話は別だが、接点のない神崎さんが根掘り葉掘りボロを出させようってのは…何度も言うが、理由がない。彼女の利益もない。

ほとんど考えが読めない人とはいえ、これほどまでに理解出来ない日が来ようとは…。

真尋の病室に戻ろうと俺は立ち上がろうとする。

が、額に人差し指を当て、不適な笑みを近づける。

頭の中で赤信号の警報が強く鳴った。

「最後の質問。

頭の中で声は聞こえない？」

『……いいえ。

では、失礼します。』

手を払いのけしかめつつらをしたまま扉に手をかける…が、

ガチャッ！

『は！？』

開かない！？鍵は開けたはずなのに！

元の向きに変えても、ガチャン！と無機質な音を鳴らすだけで、外に出してはくれない。

もう一度やってみるが結果は変わらず、鍵穴を鍵で回さないと無理みたいだ。

チャリッ。

振り向けば目的の物を指に引っかけて、チュツとキスをする神崎さん。

……言え、って誘ってんのか。

俺も男、意地ってのがあるんだよ。

（今なら俺様OKだよ…どーする？）

誰かに舐められたまま引き下がるのは、負け犬のする事だ。
これで逃げるのは後悔する。

（正軌のそーゆうトコ好きだぜ！ヒャーハー！！
男見せちゃって、んー、ちょーだい！）

頭痛くさせんな、ピロリ菌。

でも、よく記憶に刻んどけよ。

俺の勇姿を。

俯いてから前髪を顔を一緒に持ち上げて、神崎さんを目を細めて見る。

…正直、初めてやるからドラマの見よう見真似だ。

生まれてから数分前まで、やる機会なんて無いしな。

そもそもやる相手がいないし。

さっきの皆月とメシアの会話のせいだと身勝手な理由をつけておく。

視界が悪い方が恥ずかしさも無いと信じ、なるべく視界を狭めて

俺は神崎さんに立ち向かう。

恥ずかしがったら負け、恥ずかしがったら負け、恥ずかしがったら負け、恥ずかしがったら負け、恥ずかしがったら負け、……よし、いけ俺。

ネクタイをシュルと人差し指で緩めると、ボタンをしめていないワイシャツの1番上も同時に重力に従って下がる。

…う、神崎さんどこだ？

眼鏡無しじゃあぼやけてなんもわからねえ。

でも、これ以上開いたら確実に見えるし…

(……ハアアア、男前が台なし。ま、カッコイイ正軌を見んのは今度にすつか。

ああ……しゃーないなあもう。ほら、真っすぐ歩いて。)

…すまん。

案内頼むな。

ピロが話す通りに歩いて行くと、ナース服がぼんやり見えてきた。神崎さんは机の上にドラマの悪役の女がするような色っぽい格好を、しているらしい。

ピロが報告するけど、俺はもう目を閉じてるのに近いくらいの幅でピロを頼りに動いている。

元々大きくないから、つぶっても変わらないように思えてきた。

——それより、鍵は？

(……服ん中。)

……………。

……嬉しくねえからな？そんな嘘。

俺得設定とか最近覚えたけど、そんな設定は神崎さんに対して要らないからな？

俺がドラマみたいな事したら、もう茶矢達に顔向けできねえ。

部屋に引き込もって、一生を過ごすわ。

だから、ピロ代われ。

（その“だから”は何。代わっても良いけど…ちょっと待ってね。

）

痛みに堪える為に深く深呼吸。

神崎さんは『ふふっ。』と大人っぽい笑い声をあげる。

完全に子供扱いしている、としようもないプライドが競り上がり
つつある心情で、それは起こった。

——カチャン。

『「!?!?」』

扉が開く音がして、直ぐさまピロの声が頭に響く。

（正軌も出来るなら、俺様も可能かな？って思ってたんだよ！長
年居座っていると、案外やれるもんだな！やりい!!）

でかした！

逃走開始だ!! 捕まれば、ジ・エンド確定。

ずっと実験体になると覚悟しろ！

（ラジャー！）

「……鍵は全て私しか持っていないのに。おかしいわね？」

『じゃあ、俺は行きますね。』

ネクタイを上げて、目を普通にすれば神崎さんを見てしまい耳まで熱くなった。

一礼して、イタズラしている場面を見つけてしまった子供のように、種を返して部屋を飛び出した。

自己最高速度だったと思う。

看護師さんに注意されるまで走った後、エレベーターを使って戻った。

仮眠室に残された神崎。

カルテを確認しながら、先程の異常現象を考えている。

「うーん…面白いわ。頑張って見ないようにしてる姿、虐めたくなっちゃった。イキがって男を見せようとするとか、馬鹿ね。」

「…まあ、最後に耳真っ赤にさせたので今回は勘弁してあげましよう。」

鍵を胸の谷間から取り出し、ポケットにしまう。

カルテを持ち、立ち上がると入口に黒髪の少女が人形を抱きしめて小首を傾げている。

神崎は内心『チッ！小娘が！』と舌打ちした。

この少女は正軌の家に訪問して、追い出されて、怒られて、渋々帰った少女だ。

神崎は嫌味ったらしく、爽やかに、優しく少女に話しかける。

「白城あゆ様？御祖父様はこちらにはおりませんよ。シラシロ

院長は何時ものお部屋かと。」

「かんちゃん…何をしたたのお？あゆはあ、墮天使様の気配がしたからあ、来てみたのお。」

「ああ、まだ見つかっていないのですか。」

相変わらずムカつく喋り方だな、とは口が裂けても言わないだろう。

白城あゆはこの病院の院長、最高責任者の孫娘なのだ。

変に関われば、色々と力のある神崎でもクビにされかねないのだ。だから適当にあしらって、あゆの横をすり抜けるようと歩く。

「かんちゃん。」

傷だらけの手で神崎の手を握る。

神崎は払い落としそうになるのを、根性で止めさせる。
ニコツと笑みを見せれば、あゆはへニヤと笑い返す。

「かんちゃんは優しくって、あゆ大好きだよ？
かんちゃんはある？」

「私は普通ですね。」

「あはは♪そういう見た目と中身が真逆なものだーい好き。本当に腹黒いよねえ。」

「大丈夫。私よりも、あゆ様の方が墮天使の髪より黒いですから。ご安心下さい。」

「えへへ♪その紙は何？」

「ふふっ。」

急ぐので失礼します。」

手を離させ、優雅に去って行く神崎。

あゆもニコニコしながら背中に人形の手を左右に降って見送る。

「……油断ならないわね。」

カルテの1番上の紙は、白紙だった。

中編（裏読み）

夏が近いのかまだ明るい夕方。

コンコンコン、三回ノックされたかと思うと静かに扉が開かれる。ひよこっ、と頭を覗かせると焦げ茶色の髪が揺れた。

「こんにちはー…あ、正軌君発見。

お見舞いに来たよ。」

『あ、いらっしゃい。』

弥生さんもいらっしゃい。』

「ども。」

和葉さんの後に弥生さんも続いて入る。

部活から直行してくれたようで、二人共制服姿だ。

弥生さんはスポーツバックを肩に斜めにつけ、紙袋を片手に持っている。

先に起きた茶矢が慌てて椅子を準備するのを、和葉さんが『私がやるよ。』と止めさせる。

茶矢は何時もの茶矢で、『痛みは引きましたので、お気になさらず。』とさっさと準備をした。

皆月の横に二つ。

真尋は今だ熟睡している。

輸血がポツ、ポツ、音をたてて落ちていく。

弥生さんは紙袋をテーブルに置き、和葉さんの横に腰掛ける。

和葉さんは真尋の寝顔を見て、口を手の平で隠す。

「まだ起きてない？」

『いや、さっき起きたよ。元氣そうに笑ってたら、疲れて寝たみた

い。』

「そうか。」

「茶矢もさっきまで寝てたんだよグフツ!？」

「余計な話をしなくてよろしい。黙りなさい。」

「うっわ、茶矢乱暴だ。」

『コイツらほかつといて良いから。』

全く、怪我人がいる側で……ハア。』

「くすっ。でも、真尋君の寝顔……倅せそうだね。安心しちゃった。」

言い合いを始める二人を源希が宥める。

その光景にため息をこぼして眉間に指を抑えていると、和葉さんが横にこっそり歩いて来た。

真尋の寝顔を見て、学校でも心配そうにしていたのでやっと気を落ち着けたのだろう。

彼女の優しい性格は、真尋とよく似ていると思う。

この空間が一気に癒される。

うんうん、平和だ。

弥生さんの視線が刺のように痛いけど。

よし、話題を考えよう。

『何が入ってるんだ?』

紙袋を指差して聞いてみる。

『あ、そうそう。』と和葉さんが言おうとする前に、グイッと和葉さんと俺の間に弥生さんが入る。

和葉さんはキョトン顔で弥生を見上げてるが、弥生さんはジトツと俺を睨みつける。

俺は何か勘違いを受けてないかと感じてるが、今は言わないでおこう。

弥生さんは和葉さんは後ろにやった後、やはり一言だけ言った。

「ケーキ。」

『……もしかして、高校近くのケーキ屋？』

「あ、うん。そうだよ。」

「ふぁ…先輩？」

「窪田おはよ。」

ほら、二人共やめようよ。」

「真尋君おはようございます。」

友恵はそろそろ帰りなさい。」

「真尋おはよう、茶矢あんたは明日日直だかんね！まだ帰らないわよ！」

「真尋君、こんにちは。具合はどう？」

「あ、和葉先輩と多波先輩。」

お蔭様で大分良いです。痛…」

「寝ろ。開く。」

『おはよう真尋。』

弥生さんの言う通りだ。傷口開く前に、横になれ。』

「すみません…。」

『その三人！騒ぎ立てに来たんだったら、廊下行ってやってこい。神崎さんの目の前でやれ！』

人が増えたから、部屋も騒がしくなるわけで。

一喝すれば三人共黙った。

真尋はベッドをリモコンで起こし、テーブルの上の紙袋を指差し聞いてくる。

俺は病室に備え付けの冷蔵庫から同じ紙袋を取り出し、中のケーキの箱を置く。

和葉さんはそれを見て苦笑いして、弥生さんと目を合わせて笑った。

箱を開けばケーキやお菓子はほとんど被ってなかったので、真尋が『せっかくなので皆で食べましょうか。』と提案したので、源希と皆月が売店で紙コップと紙皿を買いに行かせた。

フォークはケーキの箱に入れてもらったので、一応人数分ある。

飲み物をテーブルに取り出していると…クイクイと服を引っ張られた。

ん？とそちらを見れば、真尋が困ったような複雑そうな表情で手招きしていた。

俺は耳を近づける。

コソコソと耳に手を添えて、真尋は言った。

「あの…ケーキ二個残してくれませんか？真理とお母さんにあげたいのですが…」

『……そうだな。余ったケーキ、家族三人で食べな。

これは真尋の為に買って来たんだし。』

「すみません……ありがとうございます。」

『遠慮するなよ？無茶はダメだけど。』

頭を撫でてると、ちょうど二人が戻って来て、閉館1時間前まで話し合った。

俺達が帰った病室。

家族三人で仲良くケーキやお菓子を食べる笑い声がひっそり聞こえたという……

中編（裏読み）

休み時間。

宿題の見直しをしていると、ノシツと背中に誰かが抱き着いた。メシアか？と思って『重いぞ。』と注意すれば『自分は席に座っているぞ。』とのお言葉が。

……チラツと見上げると、源希がニヒツと笑ったように思えたが、一瞬で地面に頭を埋めた。

何事も無かったかのように授業の用意をしていると、源希が机に顎を乗せて見上げてきやがった。

ケシカスを払う要領で、顎を払い落とし、脇腹を蹴り飛ばす。うずくまる源希は『待った！待った！』と制止を要求するが、俺は特に何もしていない。

（うわ、ヒデエ。）

煩いぞピロ。

馬鹿につける薬は無いから、体罰で覚えさせるしかねえんだよ。

源希は携帯を指差し、時計を見る。

「メツチャ大事な話。兄にも関係あるから。放課後にメールの場所に来て。」

『じゃ！昼休みにね！』と和葉さんとメシアに手を振りながら教室を出る。

源希はピロの事を『ピロ兄^{にい}』や『兄^{にい}』と呼ぶ。人前ではバレないように『兄』と呼ぶ事が多い。

あの源希が真剣な話って……神崎さんの件もあり、重要な事かもしれない。

次の休み時間トイレに行って見てみるか。

タイミング良くチャイムが鳴り、俺は授業に頭を切り替えた。

後ろでメシアの視線に気づかずに……

――
「正軌。」

授業が終わると携帯電話を持って教室を出る。

廊下を早足で歩いていると、メシアが追いかけて来た。

……ちと、タイミング悪いな。

何処に行って見るか、人気の無い場所は……ピロよろしく。

（あいさー。頭痛酷くなったら言ってちょーらいな。）

ピロの言葉遣いにイラツとしながらも立ち止まり、メシアの方を向く。

眼鏡を押し上げて、『どうした？』用件を聞く。

「…いや、何処に行くのか気になってな。自分もついて行く。」

手首が捕まり、真剣な顔が近くなる。

久しぶりに体験したな、なんて呑気な事を考えてると人の目が痛くなった。

特にメシアのファンの女子から。

凄いい形で殺気を放出する女子までいる。

俺の今度の学園生活が危ういかもしれない。

女は男より恐ろしいからな。

俺はメシアの額を押して、苦笑いを浮かべてみせる。

『悪いなメシア…今は一人になりたいんだ。』

「…自分がいると邪魔か？」

……メシアめ…そうきたか。

ちよ、ピロ！早く帰ってこい！！

こういう対処法は俺知らないから！

——キーン…………

『…痛っ……』

「そんなに強く触っては…大丈夫か？」

『違う…メシアじゃない。持病の偏頭痛が、今きたんだ……悪い。授業には戻るから…』

「正軌、自分はお前の手助けをしたいんだ。ダメなのか…？」

『……ごめんな。』

肩を捕まれ、酷く悲しげに見つめるメシア。
純粋な気持ちは嬉しいが…今は難しい。

——こんな普通では有り得ない人間が、家族のようにアツサリ受け入れてもらえる訳がない。

家族でさえも内心ビクビクしていたのに…友人に話すのは、更に恐い。

やっと落ち着ける居場所が出来たのに、自らが簡単に破壊してしまいかもしれないんだ。

こんな自分が望んではダメだけど…大切なモノを簡単には手放す事は困難だ。

“友達”という麻薬は、二度と“一人”にさせる事を拒ませる。

麻薬に浸かった俺は、学校は疎か外までもを別世界に変換させる。

あいづらに…やっと手に入れた奴らに会えなくなるのは、辛いんだ。

切ないんだよ……メシア。

頭を抑え顔を伏せる。

体が、起こりうる絶望に震えていた。

それを見たメシアの手が…落ちた。

支えを無くした操り人形のように、パタッと。

——キンコーンキンカーン…

『…あ、チャイム。』

メシア一緒に戻るか。…メシア?』

「正軌は……」

ポタ。

俺達の間の床に滴が落ちた。

―これは俺のモノではなくて…俯くメシアの左目からは、頬をつたう綺麗な水が見えた。

両手を握り潰し、メシアは鋭く睨みつける。

目の前にある…今まで見た事のないほどの、メシアの辛そうな顔。綺麗な顔が、色んなモノで台なしだ。

メシアは間を置いて、衝撃の一言を吐き出した。

「正軌なんか嫌いだ！」

走り出す、淡緑の髪。

止まる、俺の時間。

落ちた、涙。

わからない、誰のモノか。

失いたくなくて、距離を置きたくなくて、最初はどう思うってたけど、今は大切な人の一人で……

友達に初めて言われた『嫌い』。

たったその一言は、鉛のように頭痛なんかよりも数倍重く心臓にのしかかる。

止まる事を知らない涙。

カタンと音をたてた、携帯電話。

冷たくなる体。

震える声で、誰にも聞こえない叫びを呟いた。

——メシア、なあ教えてくれ。

俺は、俺は一体……

『何を間違えたんだよお……？

俺は、お前に嫌われる事をしたのか？「嫌い」って言葉、スッゲエ胸が裂けそうに痛い。痛いんだ……』

ぽっん。

世界が白黒に一変した。

前もこんな感じになったっけ……もう、何でも良いや。
無くしたモノが大きすぎる。

受け入れる許容量を超えて、何も考えたくない。

これ以上傷つくんなら……一人になりたい。

誰とも関わらず、最初のようにずっと独りになれば良いんだ。

初めから、そうすれば良かったんだ。

『バイバイ……みんな。』

バイバイ、俺。

俺は床に崩れ落ちた。

そのからは、深い眠りに墜ちる。
自分の世界へ逃げ込み、

…ガチャン。

鍵をかけた。

ムクッ。

起き上がる、正軌の体。

噛み締めた唇。

叩きつけた床。

憎む、己の心。

『――何で：何でこんなアツサリ墜ちた！？正軌！

確かに！安定はしてなかったけど、けど：メシアの一言で、簡単に消えるのは無いわ……。そんだけ重みがあつたのかよ。クソッ！』

携帯電話を拾って階段を駆け上がる。

授業中だって事は、今の彼には心底どうでもいい。

今は誰にも邪魔されない場所に移動したかった。

バンッ！！

扉を押し開けて屋上へ辿り着く。

汗を流したまま、後ろ手に鍵をかける。

ワイシャツが汗で濡れてしまった。

ピロは携帯電話を取り出し、メールを見る。

そこには、“ケーキ屋2階の最奥”とだけ書かれていた。

ピロは顔を歪める。

『こんだけの事……。帰ってから言えば良いだろうが！！』

携帯電話を思わず握力で壊してしまいそうになるが、理性で胸ポケットに押し込む。

胸を思いつき殴りつけ、両頬を流れる涙を脱ぐ、青年は声を荒げる。

その悲痛な叫びは、誰かに届く事があるのだろうか……

『サラ、新人：絶対起こせよ！一回可能だったらもっかい出来るはずだ！』

俺が…また、近くにいなかったから！俺が無理矢理代わってれば…
…クソッ！！

…俺は、環境を整えとくから。俺が直々に、な。』

涙を振り払ったピロの瞳は、決意に満ちた強い眼差しに変貌していた。

彼の行く先に、果たして“光”はあるのだろうか？

——屋上の給水タンク付近。

ピロの姿を見ている人物に…彼は気づいていなかった…

中編（裏読み）

「……あの、二人共？」

『あ、和葉さん。後で4時間目のノート見せてくれる？』

「う…うん。」

「和葉、自分は購買に行ってくるから。」

「あ、ついて行こうか？」

「一人で問題ない。」

廊下を歩く三年・s。

何時もなら真ん中に正軌がいるのだが、今日は和葉が真ん中に挟まれている。

左右の俺達は顔を背けて、顔を合わせようとしなない。

チラッとメシアが俺を見るが、俺と目が合えばサッと避けられた。そのまま一人で購買に行く。

焦る和葉さんの背中を押して先に屋上に行かして、俺は黙ってメシアの後について歩いた。

「……。」

『……。』

「……。」

『……。』

廊下を黙々と歩くメシアの後を、俺も弁当片手に歩く。早足になるけれども、気にせず足を進める。

……おー、イライラしてるイライラしてる。
オーラが荒ん（すさん）どる。

だんだん猫背になってえー、止まった。
俺も止まる。

キッ！と睨んで、こっちに歩いてきた。
ヤンキーかと疑いたくなるくらい柄悪く見えるぞ、メシア。

——『嫌い』って正軌にベツタリのコイツが言ったんだもんな。
よっぽどの心情だろう。

それで大嫌いな奴がわざわざついて来るんだから、苛々するわけだ。

口を開こうとするメシアの前に、俺が言葉を遮る。

「いったい」

『よう、相棒。ちょっと付き合えよ。』

ニヒツと悪戯を考える子供のような笑みを見せる。
ヤンキーから驚愕の顔に変えるメシアの肩を抱いて、購買に連れて歩いた。

……まあ、メシアが購買で買う早さは異常だったけどな。
波が引いたように真ん中が空けるのを、ドラマや漫画以外じゃなくリアルで見るのは正直夢の中じゃないのかと思えてしまう。

『…美人って得だねえ。』

購買の入口で一人小さく苦笑した。

和葉さんにメールして、俺達は今、人気の少ない校舎裏に来た。
真尋が巻き込まれた事件で暫くは立入禁止になっていたが最近開
放させた。

しかし、血まみれの場所に入ろうと思う者はいるわけがなく、元
々人氣がほとんど無い場所には俺達しかいなかった。

俺は岩の上に腰掛け、メシアに向かって自販機で買ったなっc h
a n Nを差し出す。

だが、メシアは受け取らず、代わりにジトツと冷たい視線が。
苦笑いして、ヒョイツと下から投げ飛ばす。

『そう警戒すんなよ、相棒。美人が台なしだぞ〜?』

「……お前は誰だ? 正軌ではないだろう?

害は無さそうに見えるが……」

『ま、話が長くなりそうだから先に飯食べようぜ。立ち食いは行儀
悪いだろ? 横来いよ。』

「答えろ! お前は何なんだ! ?」

怒っちまったよ、面倒くさ。

怒鳴るメシアを冷めた目で見てみると、鳩がやってきた。
弁当のおかずを地面に落とせば、バタタと啄みに飛び出す。
その光景を見ながら俺も弁当を頬張る。

もっかい白米を投げると、メシアがまた怒鳴り付けた。
熱くなるメシアに対して、スッゲー冷静な俺。

：俺様、意外とケツコー怒ってんだけどね？

素直に座ってれば手荒な真似はしなかったんだけど。

仕方ないって、さ。

『ご馳走様でした、っと。』

「聞いてんのかお前、ツツ！？」

ダンッ！！

メシアの上に馬乗りし、首に当てている腕に全体重をかけ、目ギリギリに箸を突き付ける。

見開かれた薄黄色が、中央で小さくなる。

ピロの顔に人間らしさが無かった。

機械のように、ただ目の前のモノを消そうという目的しか感じ取れない。

普通の箸が快刀のような鋭さをほこる。

首に込める力に容赦は無い。

オーラは丸い、柔らかいというものは皆無だった。

ピロは箸を持ち直し、猫のように真っすぐ見つめ、脅すように囁く。

『お前のたった一言で正軌は閉じこもったんだよ。何してくれてんだボケ。うちの正軌は顔に出さないだけで、メンタル面弱いんだよクソ野郎。』

お前が探ってる通り俺は“正軌”じゃねえよ。

詳しく教えてやろうと思ったけど、お前が中々言う事聞かねえから教えてやらない。教えてほしかったら、お前が正軌呼び起こして全

力で謝れ。』

「ツガハ！カッ……ヒュー……ヒュー……何処、行く！？」
『教室だよ。授業始まるしな。』

箸を岩の上に放置していた弁当箱にしまい、メシアを置いてさっさと歩いて行く。

――が、頭をガシガシ掻きむしった後に種を返してメシアの元に戻った。

腕を持ち上げ背中やズボンについた砂を手で払い落としてやる。頭についた砂をパンパンやって、ヘアゴムを解いて落としてやると、状況を飲み込めていないメシアが半口開けてポカーンとしていた。

ピロは地面に落ちていたパンとなっchanNを差し渡し、頬をポリポリ人差し指でかく。

そして、罰が悪そうにチラと見上げてぼそぼそ話す。

『…俺も正軌も、さ。メシアの事…嫌いじゃねえ、んだよ。嘘じゃねえぞ！本当だからな！

だからさ……嫌い、ってもう言うなよな。悲しくなるから、な。バカヤロウ……。』

「……。」

『……んん！あーもう！俺を見んな！

一緒に教室戻っぞ！飯は休み時間に食べ！』

「あ……」

手首を引っ張ってズンズン歩いて行く。

口調が突然変わった事にもだが、一気に子供っぽさが現れたのに一番驚いたメシアであった。

顔を赤らめて、唇を尖らせている。

喧嘩した子供が泣々謝るみたいな、そんな顔。

『くくっ…』メシアは小さく笑ってしまった。

さっきまでの身勝手な自分自身や目の前の彼のギャップに。

殺人鬼のような殺気も出せば、小さな子供のような…この手首の
ような温かいモノも持ち合わせている。

工場の時の冷静で頼りがいのあるところ、無邪気に楽しむ顔、正
軌と違った彼の事は…

「……さっき、『嫌い』とは言った。それは、君への軽い嫉妬から
出た言葉だ。

本心からではないが、傷つけてしまった事には謝る。すまない……。

」

歩きながら小さく頭を下げるメシア。

ストレートなメシアの言葉には、俺もヒッキー中の正軌も嫌いじ
やない。

寧ろ、正軌の周りで笑う奴らは全員好きな方だ。

弥生って奴はよく知らないから何とも言えねえけども。

——これからは、一通り様子見してから判断していくか。

実際、正軌のせっかく出来た仲間を減らしたくはない。

俺達は正軌の笑い声が聞ければ充分なんだ…それはサラが1時強
く望んでる。

メシアがこんな事言わなきゃ、全員のメモリーを抜き取ろうと思
ったけど…大目に見てやっか。

一人でイライラしてるの馬鹿らしくなったし。

俺様やつさすいー。

顎を突き上げ、喉で笑う。

教室の入口で手首を離して振り返り、メシアの額に先程のヘアゴムを当てて引く。

『やダね。正軌に直接謝りな！ククク…』

パチーン！

「痛ッ！」

『ほら、席座らねえと怒られっぞ？メシアちゃん♪』
「……お前なあ。」

ケラケラ笑って席につく。

弁当を鞆にしまうと、ノートが差し出された。
顔を上げれば、和葉がニツコリ微笑んでいた。

「和解した？」

『おう、バッチリ。

ノートありがとな。助かる。』

「あはっ、楽しそうだね正軌君！ノート持って帰っても大丈夫だから。ゆっくり写して。」

あ、起立！」

ガタガタ……。

——俺様にとっては高校で初授業。

小学校は殆どやってたけど、中学からは大分耐性がついてきたから影で見守るようにしたから……久しぶりにこの体で受ける。ワクワクして、授業中に緩む頬を抑えるのに苦労した。

正軌の授業を見て、聞いて、覚えていたから難しくはなく、すんなり記憶に刻まれた。

残り数分で自主勉強になり、この時にノートを写し終えた。和葉の驚いた顔がちと笑えた。

6時間目も、すんなりやれた。
帰って復習すりゃ完璧だな。

「正軌、ちょっと話がある。」

『んー何？』

あ、和葉さん。俺達やつとくから、部活行きなよ。』

「じゃあ、よろしくね！」

バイバイ二人共。」

ひらひら手を振って和葉を見送る。

足音が遠ざかるのを確認して、メシアの方に体を動かす。
メシアは何時もの表情で、俺を指差した。

「『正軌』だったら変だろ。違う呼び方ないか？」

『源希は「兄」って呼んでるけど。』

俺様的には正軌でも何でもどっちでも良いけどねえ。』

「不思議生命体。」

『ごめん、さっきの言葉訂正させて。』

せめて普通のを。

名前は“ピロ”だぜ。でも、不自然だから却下な。』

腕を組んで悩むメシア。

窓の外を見れば、部活動だけになっていた。

青春だねえ：俺様はパス。

動くの好きだけど、傷つけそうでヤダ。

体育でもセーブしないと。

ちよんちよん、肩をつつかれメシアに戻す。

いつの間に出されていた一枚のルーズリーフには色んな呼び方がずらりと並べられていた。

正直、ちよつと引いた。

「どれが良い？」

『えっと…無難なの無難なの……』

「声に出てるぞ。」

『出してんだよ。』

んじゃ、コレ。正^{ひま}。』

1番まともなやつを選んで丸を打った。

これなら『あ、呼び方変えたんだ。』くらいで納得されやすい。

俺が一人上機嫌でいれば、メシアから問題発言。

「この“ユーマ”はダメなのか？」

『病院行け。』

「結構力作だったのだが、残念。」

『“力作”じゃなくて“失敗作”だろ。辞書ひけ。』

…まあ、なんだかんだって仲良くなった俺様である。

メシアは『夏休みの修学旅行に正の事を聞く。それまでには、正軌を起こしてみせる。』と断言したので、今後が楽しみだ。

ま、起こすのは無理だけど、心意気は合格だ。

肩を並べて二人、長い影と共に家に帰った。

中編（裏読み）

家に帰って着替えてから“Sweet Ozaki”に行くと、薄化粧の店員が応対した。

前と変わったらしく、グループに一つだったのが、一人に一つあの機械を渡す仕組み。

途中で抜けるお客さん用に店長が考えたらしい。

入口で立ち話をしているとオーナーが店員を呼び出した為、店員は奥へ行った。

この店員と立ち話するのも、源希と真尋と正軌がトイレでオーナーに会ったのと、二人がアンケートに答えたからである。

すっかり顔を覚えられた俺達が店に来ると、時々オーナーの岡崎が対応して、新作の味見を頼む時もあるのだ。

正軌は逃げ出したいくらいの勢いで目を閉じてたけどな。

俺様はちよつと残念だった。

……今日は食べてやろっかな。

俺様は甘い物好きなんだけどね。

トレイに乗せた皿に適当にお菓子を乗せて、飲み物に乗せて2階に行った。

1番奥の扉にノックしてから中に入る。

部屋の中には源希が刑事みたいに胸辺りで腕を組み、何か唸ってる。

取り敢えず頭を叩いて（はたいて）おいた。

ゴツ！と額をテーブルに打ったが、俺は気にせず正面に座った。

ムクリと起き上がり、バンッ！！と勢いよく両手でテーブルを叩いた。微妙に怒ってる。

「もう6時近いよ！何時間待たせるんだよ！もう来ないと思ってメ

ツサ心配してたんだからね!!」

『源希のメールが元凶でメシアと喧嘩して、正軌は引き込もった。』
「……え？」

目だけ上に上げて冷静に話す。

こうも相手が怒っていると呆れて冷静になれるもんだね。

マヌケで可哀相に思っちゃもう。

手え出さないのは、正軌に今後に関わるから、正軌に気まずい思
いさせたくないから。

べつに、正軌以外の人間……正軌の両親以外は、どーでも良い。
俺様が両親を気に入ってるから大事にする予定。

人差し指を源希に向け、言い放つ。

『メシアとは和解したから一応大丈夫。正軌が起きた時に気まずい
させたくないからな。

で、話って何だ?』

「……ごめんね。電話にすれば良かった。

正軌兄は無事なの?」

『今、鍵かけてヒッキーしている。前よりかはマシだから、暫くす
りゃ出て来る可能性が高い。』

「良かった……またあんな事にならないんだよね。」

『——良かった? 何ふざけた事吐かしてんの?
可能性があるだけで、真逆になるかもしれねえのに。お前は“良か
った”って言うのか。』

……もう、どうしようもないなお前。興ざめだ。

お前の話もお前みたいにどうしようもないんだろ。どうでもいい、
聞きたくない。』

立ち上がり、部屋を出る。

制止の言葉を見殺して階段を下りて行く。

腕に掴む手を振り払い、代金を払って店を出た。

――コンコン。

晩飯を食べ終えてから自室で今日の復習していると、ノックの音がする。

『どうぞ。』

勉強しながら返事をする。

ガチャ、開かれる扉。

俺は今だ勉強机と向き合い中。

『何？親父さん。』

「ちよっとピロ君と話がしたくてな。風呂上がりで良いからリビングに来てくれないか？」

『今からでも良いよ。調度キリの良いところだし。』

「では、そうさせてもらおうか。」

床に胡座をかいて座る優人。

俺はノートを閉じて、優人の前に座る。

優人は背筋を伸ばして、両手を前で絡めている。

見た目は普通の真面目な父親だ。

性格も自分自身を必要以上に飾らなく、真面目過ぎないで、誰かが間違うとちゃんと注意して、とも美と家族に優しい。

小恥ずかしい時と嬉しい時に新聞紙とかで顔を隠すか、お茶を飲んで平然とした表情をするのも好きだ。

俺的には父親の代表にしても良いと思う。

俺様推薦するよ。

優人はちよっと困ったような顔で笑みを見せた。

「お節介かもしれないが、源希と喧嘩したのか？」

『……ちよっとね。源希の言葉が許せなくて、怒っちゃった。

俺様は悪いとは思わないよ……ちよっとはやり過ぎたかもしれないけど、さ。でも謝ったら正軌が可哀相だもん。』

同じように胡座をかいて、後ろ頭をガリガリ搔く。

冷静に考えれば、まだ話くらいは聞いてやれば良かったかもしれない。

俺様も子供のように一方的に決めつけてたから、俺様が嫌いな奴らと同じだな。

……でも、謝らない。

あの時に『良かった。』は場違いで1番言っちゃいけない事だ。正軌だったらなんとも思わないかもしれないけど、俺達にとつちや重要なんだよ。

膝を抱えて小さくなる。

唇を尖らせて、優人から目を逸らす。

この優しい瞳を見たら、諭されてしまいそうで……膝に顔を埋めた。

真っ暗な方が安心する。

ぽん、と頭に手を乗せられた。

温かくて……大きい、この手が今は憎らしい。

……けど、払う事ができない。

優人は何時ものちよつと低い声で、優しく語りかける。

「私は誰かが悪いとは思わない。ピロ君も源希も、正軌もね。

でも、今度源希が謝りたい時は聞いてやってほしい。……駄目かな？」

『……。』

フルフル小さく頭を振る。

叱るでもなく注意するでもなく、強制するでもない。

優人が頼むように話すから、断れるはずもない。

……しかも、逃げ道をちゃんと用意してくれている。

『嫌だ。』と言っても『そうか。』と受け入れてくれるだろう。それがズルイ。

優人はズルイ……。

「ピロ君…いやピロ君達の事、一応調べさせてもらった。私も謝らないとな。すまなかった……。」

『…良いよ。正軌の安否の為にした事だから。でも、ロクな事しか書かれてなかったでしょ。』

「ありがとう。」

そうだな…色んな事件や症例ばかりで、私には難しいモノばかりだ。

——だからと言ってはなんだが、君達を信じる事にするよ。私は目にしたモノしか信用しない質でね。

もう心配する必要はない。安心なさい。」

くしゃ、髪を一撫でされる。

見開かれる瞳。

予想外の言葉に気持ちが強く揺さぶられた。

心臓が…初めて熱を帯びたように熱く、痛む。

昔は野良猫のように、誰にも馴れ合わず、ただ中にいる奴らを護る為に優しい家族にまで牙を向けて、『怖い』と叫びながらも必至に威嚇をしてきて…

——それでも、優しく見守ってくれたんだ。
知ってて、避け続けたんだ…俺は。

優人の服をキュッと摘み、目だけ覗かせる。
消え入りそうな声で、そっと呟いた。

『ごめん……。』

色んな思いを込めた一言。

伝われ…伝われ…伝わって…お願い、届いて！

優人は一瞬驚いた顔を見せた。

…けど、手で顔を隠して、俺の両肩に手を置いた。

「……やっと懷いたか。」

…ほら、優人はズルイ。

何でも見透かしてるんだ。

これからは、ちょっとは甘えさせてね…

中編（裏読み）

——チュンチュン…チチチ……

早朝の鳥の囀り（さえずり）に目を覚ます。

久しぶりに、この体で朝を迎えた。

嬉しいとは思わない。

だって、俺が“外”にいるって事は正軌が引き込もってるって事だから。

俺が体を操作している時は、“精神世界”に入れない。

二人が一緒にいる、って事は“死”に近く体が危ない状態。

無理矢理にでも戻ろうとすれば、この体は全て停止してしまう。

だから俺が代わりにコントロールして生かしているのだが、二人が早く正軌を出してくれないと色々ヤバイので早急に叩き出してほしいのが本音。

夏が近づいているのか汗が気持ち悪い。

まだ6時半だ。

『…シャワー浴びよ。』

制服を手に取り、部屋を出た。

脱衣所の扉を開けると、とも美が顔を洗っていた。

すっぴんのとも美は、ちょっと恐い。

化粧と化粧水のマジックは凄いと思う。

『おはよう。ちょっと待ってねえ。』と化粧をするとも美の後ろ

を通り過ぎ、制服を置いて風呂場で着替える事にした。

洗濯物を適当に風呂場から出してシャワーを浴びる。

汗が流れて冷たい水が心地良い。

余計な考えさえ流れて消えてほしいと頭の隅で望んでしまう。

……ダメダメ、ネガティブ思考ダメ。

俺様明るくウザイがモットー☆

俺様が暗いと皆ズーンってなるから、ノンノン。

「ピロちゃん。」

『んあ、何?』

頭を犬みたいに左右にぶんぶん振っていると、とも美が扉越しに声をかけてきた。

シャワーを止めて、顔だけ覗かせる。

何時ものとも美の顔に内心ホッとしたのは秘密だ。

ポタポタ水滴を落としながら首を傾げると、タオルで頭を拭かれた。

ゴシゴシと拭くにつれ、タオルにどんどん吸収されてゆく。

どこか嬉しそうにするとも美の真意がわからない。

ため息ついて笑う彼女。

「何年ぶりかしらねー。体だけ成長しても、まだまだ中身は子供だわ。」

ピロちゃんって嫌いな食べ物ある?」

『……肉、あんまし好きじゃない。後、野菜。』

「あらら、野菜は必要よ? 肉だってこんな痩せてんだから食べなきゃ。」

じゃあ朝は好きなの作ってあげるわね。」

『……知ってんの?』

タオルを首に掛けられ、とも美は脱衣所を出る前に『楽しみにしてらっしゃい。』とスキップしそうな勢いだった。

俺は？を頭に浮かべて、一応制服に着替えた。

ドライヤーはまだ使い慣れない。

鞆を取りに階段を上つてると上から源希が下りてきた。

仰天するようにあからさまに動揺を見せるから、俺はそのまますり抜ける。

源希が振り返った時には、もう正軌の部屋に入っていた。

――――

『あー美味かった。魚メツサ旨い。ニュースで減ってきてるとか、マジないわ。』

「魚が好物なのか。」

『まあーね。食べてきた中では好きな方。』

メシアと並んで登校中。

源希は先に家を出た。

顔を合わせるのが難しいようだ。

俺的にはいてもいなくても、どーでも良い感じ。
だって、前は正軌一人で学校行ってたし。

——っと、とも美に頼まれた事があったんだっけ。

『なあ、メシア。』

「何だ？」

『料理って出来る？』

「食べれる程度には、一応作れる。」

『じゃあさ、』

クルツとメシアの前に両手を合わせて頼む。

正軌も源希も料理が出来ないから家庭科を選択してないし、俺が知識だけで作れる可能性は低い。

ポイズンクッキングをしたくはないのだ。

：これは一筋の蜘蛛の糸に近い光。

断られたら違う人物に頼まなくてはならない。

恐る恐る言葉を紡ぐ。

『夏休みの三日間、家で俺達の料理作ってくれない？』

優人ととも美が温泉に行くらしくってさ……』

「源希は作れないのか？」

『：兄弟揃って小、中学生時代に家庭科の実習で血まみれになりそうになりました。味も見た目も最悪です。

コイツらに包丁持たせたら凶器に変わる……』

「ピロは無理なのか？」

『俺様は正軌が出来ないと無理なのよ。喧嘩は別だけどね。』
「そうだな……」

考えるように空を見上げるメシア。
俺はメシアに縋る思いで頭を下げる。

―すると、茶矢登場。

『何をしているのですか?』と歩み寄る。
事情を説明しメシアに頼んでいると話せば、茶矢が勢いよく挙手。
俺達は茶矢を見る。

「私に作らせて下さい!料理にはちょっとばかり自信があります!」
「日にち決まったら教えてくれ。修学旅行の前日じゃなければ、ほとんどの問題ない。」

『本当か!?ありがとう!』
「「!?!?」」

ムギュー!と二人一遍に抱き着く。
驚く二人を余所に、俺は安堵と喜びに浸る。
人目を気にせずに腕に力を込める。

「……正。」

『ん?痛い?』

「いや。茶矢が気絶しているから離してやれ。」

『あ、本当だ。昇天してる。
おい、起きろー。』

ペシペシ。

頬を叩いて現実呼び戻す。

正軌好きの茶矢には刺激が強すぎたか。

メシアは少しだけ頬を染めてるだけだし。

何回か叩いてるとやつと目を覚ました。

そして、顔が間近だったのでボンッ！と音をたててまた気絶してしまった。

ペシペシ叩いても起きる気配はない。

『どーしよ。放置したらダメだろうし・・・背負うか。』

「鞆持とうか？」

『いや、大丈夫。茶矢軽いから。』

茶矢の両手を首に回して、三人で歩いた。

「――じゃあ、班で考えろ。始め。」

期末テストも近いけど、夏休みの修学旅行の方が重要らしく教室で行く先を話し合い中。

困みに、赤点とれば教室で泣く事になる。

安定した点数をとる俺達には関係ないけど。

和葉が机を反対にして、メシアが椅子を持って来て班が完成。
配られたパンフレットを机に広げて話し合う。

欠伸をしながら二人の話を右から左に通り返していると、吉田が来た。

胃を抑えながら俺達に話し掛ける。

「ちょっと、良いか？」

『何ですか？』

「君達に、頼みたい事が、あってな。」

三人の視線が一斉に集まり、吉田は更に顔色を悪くさせる。

和葉が席を譲り、吉田は『すまない…』と腰を下ろす。

メシアがバフ○リンを取り出そうとするのを止めさせて、吉田に話すよう促す。

『で、頼み事って何ですか？』

「あ、ああ。」

“中馬”^{ナカマ}を知っているか？」

『「？」』

「…このクラスの不登校の女の子ですよね？」

「いや…学校には来ているは来ている。ただ、授業に出なくてな…」

「不良か。いやレディースの方が正しいか。」

「…まあ、否定は、出来ない。最近は屋上に、一人でいる、らしい。」

「

『要するに、中馬って人を俺達の班に入れたいのですか？』

ハッキリ言えば、吉田は時間を置いた後にゆっくり頷いた。

俺達三人は顔を合わせる。

二人共嫌そうな表情は見せない。

見た事ない人物を嫌っても仕方ないしな。

吉田は呟くようにまだ話す。

「中馬は、授業に出てない分、赤点の可能性も：正直高い。

君達の班は、他より人数は少なく、赤点になる確率も、1番低い。

学年ベスト5に入る、宮古もいる。」

「勉強もついでに教えてやれと。」

「中馬さん：見た事は一回しかないなあ。“寂しそう” っていうのが第一印象。」

『二人共、拒否権はあるぞ？』

「「……………」」

暫く俺を見て、目を見合わせた後、何も言わないで頷く。

以心伝心までスキルアップしたらしい。

二人は俺の方を向き、口を揃えて想像通りの言葉を並べた。

「「正／正軌君が決めるなら、それに従う。／従うよ。」」

『…………OK。二人共良い返事だ。』

吉田先生、今は返事は出来ません。』

「…そうか。」

『もし俺達三人と中馬さんのうまが合えば、班に入れます。

赤点も断言は無理ですが、ギリギリ回避させてみます。因みに、赤点いくつとったらアウトですか？』

「ちょ、ちょっと待ってろ！」

急いで机に向かって走る吉田。

メシアは無言で頭を押し付けてきたので、ぽんぽん叩いてやった。和葉さんがクスツと笑ったのに、口端を上げて答えた。

『もしダメだったら正直に言う事。我慢する、無理する、被害を受ける必要はこちらに無いしな。』

「策士だな、正。了解した。」

「わかったよ♪それじゃあ：何時中馬さんに逢いに行く？」

『先ずは相手を最低限知らなきゃ懐かない。どのくらいの知識かも知らないと。』

今から吉田先生に色々聞いてから、三時間目の休み時間にでも行くか。

異論は？』

「ない。」

「わかったよ。」

『良い子達だ。』

後、和葉さんはむやみに俺達から離れない事。女性の和葉さんに、怪我が痕に残ったら洒落にならないからね。良い？』

「わかりました、隊長♪」

『約束だぞ？』

そんな雑談をしていれば吉田が戻って来たので、必要な事を聞いて時間は過ぎていった。

中編（裏読み）

今日は陽射しが強い。

屋上にいたら暑いだろうけど、俺の知ったことではないな。

俺達にはリスクと労力しかなくて、褒美も何もない。

けど、正軌ならすんなり『良いですよ。』と言うだろうから俺もあんな条件で取引した。

見ず知らずの相手にヘコヘコする気はサラサラ無いが、正軌が三年間世話になっている吉田の頼みを断るのは気が引けた。

様子見で、一応メシアもいるから安全。

和葉は任せるとして、俺は問題児に口車をどうやって乗せようか考えないと。

挑発なら得意なんだけど、説得は苦手だなあ…面倒くさっ。

階段を上り、扉の前で一旦二人に振り返る。

『じゃあ、俺が先に行くから呼んだら来て。メシア頼んだぞ。』

「無理はするなよ。」

「気をつけてね!」

『フハ、俺様見くびんなよ?』

慣れたドアノブを回して、扉を開いた。

——屋上には誰もいなくて、ガランとしていた。
見渡しても何処にもいなくて、吉田の発言を疑った時。

『……タバコの臭い。』

振り向けば、給水タンクの影に女子生徒が見えた。

真ん中分けで、黒のメッシュ？している短髪金髪女子。

上は普通の制服だが、下は何故か男子が履くズボンだ。

タバコ吸いながら音楽を聴いて、シャーペンを指先で回してる。

胡座をしている姿は女か疑う、というよりかは服装が奇妙で意味がわからない。

：今で言う“ボーイッシュ”って格好を目指してんのか？
なら私服でやれって話だ。

キーン……

『…痛ってえ。』

今までの肉眼で見たわけじゃない。

ちよっとした“長年いたらこんな事まで出来るようになりましたよ”的なアレだ。

正直俺も詳しくない。

便利だから良いけどね。

俺は頭を抑えながら梯子を上っていく。

最後の段を上りきると、タンクに背を預けながら傍らにキーボードを弾いている中馬がいた。

俺は数歩歩いて近づく。

頭痛は酷いけどポーカーフェイス。

読まれたら負けだ。

『ちょっと良い？』

「……。」

綺麗にシ・カ・トされちまった。

イヤホンに音楽を流しながらシャーペンを楽譜に走らせる。
眼中にないらしい。

俺はまた一步距離を詰める。

『中馬^{ナカマ} 由^{ユイ}。』

「……呼び捨てにすんじゃねえよクソガキが。」

ギロツと睨まれた。

ここまでは想定内だったので驚きはしない。

レディースって言われてんなら、このくらいで引いたら来た意味がない。

逆に威勢が良い方が好みだ。

前髪を耳に掛け、まだ話し掛ける。

『正軌と仲良くしてくれない？』

「却下。気味悪いキエロ。」

『ククッ……こうもハッキリ言われるとはね。

じゃあ、どうしたらなってくれる？』

「つるむ気は無いって言ってるんだよ馬鹿が。消されてえのか？あ、？」

『……良いねえ、タバコさえ吸わなきゃ俺好みだ。』

何書いてるの?』

しゃがんで紙に手を伸ばした。
すると、

ビュオツツ!! タンツ。

顔面に一瞬で回し蹴りをされる。

女性にしては威力がある。

直撃したら骨が折れるくらいでは済まないだろう。

だが、俺は右手で中馬の足を掴んで、そのまま楽譜に目を通す。
歌詞らしきものが音符の下に書かれていた。

中馬は目を見開かせた後、顔をしかめて両手を床に着きもう片方の足で腹を狙ってきた。

俺は立ち上がり、楽譜を持った手で足を下に殴り落とす。
持ったままの足を離して、見下ろす。

バランスを崩した中馬は起き上がりまた足技を使う。

適当に払い落としてると、今度は手で殴り掛かる。

パン、パン、受け止めたり避けたりして、フェイントにも蹴り返してガードする。

攻撃は最大の防御って言うでしょ?

女にも手加減はしない義理だから。

正軌の周りの奴らは…まあ考えるけど。

足を抑えて睨まれたって、ねえ。

先に手を出したのはあっちだよ?

俺は正軌の体を守っただけ。

かすり傷つけようもんなら、足をへし折るから。

……そこんどこわかってる?

殺気をちよつと出せば、中馬は顔を青ざめて冷や汗を流した。
手が微かに震えてる。

俺は笑顔を止めて、もう一度訪ねた。
今度は違う言い方で。

『仲良くしてくれるにはどうしたら良い?』

「……ツチ、知るかよんな事!! 由はお前なんかと馴れ合わねえよ
!!」

『それは困った。俺は吉田先生に頼まれて、修学旅行の為に中馬を
赤点回避させなきゃならない。その為に、先ずは君と仲良くしたい
んだ。』

俺は宮古。中馬と同じクラスだ。』

「知ってるよ：噂は耳にしているからね。」

『全部デマだけだな。』

まあ、勝手に信じてれば良い。

そろそろ二人を呼ぶか。』

「!?!? ……ックソ、仲間かよ……」

『そ、正軌の仲間だ。……俺のじゃないけど。』

タンッ、タンッ、

ジャンプして後ろに下がる。

ニコッと微笑を浮かべ、ギリギリの場所と言う。

『ちよつと待ってろ。』

グルッ。

「お前ッ?!」

背中から倒れ、落ちるところを一回転で着地。

最後に決めポーズ。

上から顔を覗かせて開いた口が塞がらない状態の中馬。
アホ面がウケる。

『メシア、和葉さん。』

ガチャ・・・

扉を開けて姿を現す二人。

メシアが『遅かったな。』なんて文句を言うもんだから、
嫌われちゃってな。』と返してやった。

和葉さんは中馬を見上げて、優しい笑顔で話し掛けた。

「浅倉 和葉です。」

修学旅行は一緒の班なんだ。中馬さんと仲良くしたいな。」

「黒澤 メシア。同じ班だ。よろしく。」

二人の言葉に中馬は酷く傷ついた顔をしたのを俺は見逃さなかった。
た。

中馬は頭を引っ込め、怒鳴るように叫んだ。

「由は行かねえ！由に構うな！

善意でやってやる的な根性がいい好かない！吐き気がする！」

「：中馬、さん？」

「早く消えろ！お前ら何か見たくない！！」

『そろそろチャイム鳴るしな。また次の休み時間に来るよ。またな。』

「もう来んな！馬鹿野郎！！」

二人の背中を押して屋上を後にした。

この学校は治安悪い奴は真面目な奴と五分五分かそれ以下だけど、初対面に回し蹴りはないだろ。

あのまま足首壊しそうになったし。

傷つけたらダメだと知ってるから我慢したけど。

頭を抱える中馬の表情に理由を察し、来ない理由を吉田に聞いてみる事にする。

『次なんだっけ？』

「古文。」

「宿題あったよ？」

『ちゃんとやったから大丈夫。

まーた次の休み時間、逢いに行くか。かったるい。』

メシアにもたれながら三人一緒に教室まで歩いた。

『ゆーいー君。元気かい?』

「……またお前かよ。」

笑顔の登場にもものっそい嫌な顔された。

警戒しているのか楽譜とキーボードを鞆にしまって身を屈める。
何時でも飛び出し可能な戦闘体制だ。

俺もしゃがんで首を傾げる。

『由君がレディースって本当?』

「お前に話す義理は、ねえ!!」

『質問に答えてよ。』

あ、これ土産ね。』

「ぷっ!?! 何投げた……湿布?」

『保健室からくすねて来た。足首まだ痛むっしょ?』

「これはお前がやったから……っへ、こんなもんいらねえよ!」

湿布を投げ返されて、うーんと悩む。

下にメシア達がいるから手伝ってもらうか。

——シュツツ!!

シャーペンのシン出したまま真っ直ぐ飛ばされ、パシと虫を払うように取る。

近く中馬の足を足で踏み付け、手を掴んでシャーペンを額ギリギリのトコロで寸止め。

中馬は痛みに顔を歪ませて、俺はまだ笑顔。

シャーペンのシンを親指で戻して、中馬の胸ポケットにiP O Oの横に入れる。

固まってる中馬を俗に言う“お姫様抱っこ”して、下にいるメシアと和葉に話す。

『まだ湿布あったっけ?』

「うん!箱ごと貰って(盗んで)きたから、いっぱいあるよー。」

『じゃあ、足の治療をしますか。』

ワイシャツ握っとけよ?』

「……!? 降ろせ!怪我なんかしてねえ!!」

『はい落下ー。』

トンッ。

有無を言わず二、三Mほどある高さから降りる(落ちる)。

中馬は顔を一層青くし、ワイシャツを強く握った。

落とす気はないから安心して良いんだけどね。

足を曲げて衝撃を分散させれば、着地成功。

パチパチと二人から拍手をもらった。

俺は拍手に答えた後、中馬を見下ろす。

『落とさなかったっしょ?』

「……由が掴まなかったら絶対落ちてたし。」

『あらま、素直じゃないねえ。』

ま、いいや。和葉さん、湿布貼ってやって。靴下脱がしてーから。』

腕の中で暴れまくる中馬をメシアと二人で抑えて、また休み時間が過ぎていった。

『んじゃ、昼休み暇だったらそこにいてよ。
またな。』

「またねー中馬さん！」

「じゃ、また。」

俺達が去った屋上には、足に湿布を貼られた中馬が扉を睨んでいた。

中編（裏読み）

メシアと和葉と購買に買いに行く時、体の異常に気づいた。

歩いていると突然頭痛がした。

それにつれてフラッシュバックのように“消したはずの記憶”が一つ、蘇る。

それは威力を増して…恐怖を煽る。

冷房が効く校舎内で、冷や汗が首筋を流れた。

足が、動かない。

視界が変になり、足元が覚束ないのを両足でなんとか踏ん張った。

…ん？あ、ヤバイ。

これ以上は騙せない。

立ち止まる俺に二人が振り返る。

俺は笑顔で、何事も無かったかのように振る舞う。

『悪い、教室に忘れ物したっぽい。先に行ってて。』

「それじゃあ、購買行った後に三人で行こう…あ、正軌君！」

『一人で大丈夫だから。俺抜きで先に食べて。』

その場所から逃げるように俺は走った。

心配そうに背中を見送る和葉の横で、メシアはただ走る俺の背中を見つめていた。

『…はっ…はあ、ん、ふあー……………疲れた。』

校舎裏。

誰もいない場所で一人、岩の上で体操座りをして顔を隠していた。
震える肩を目一杯抱きしめ、なんとか平然を保つ。

654

——新人がへまして落としたのか？

でも、サラがいるからその確率は低い。

正軌が出たのなら予兆があるはずなんだけど、無いって事はこの可能性も少ない。

…やっぱり、新人が誤ってコケて落としたか。

なら、早くしまってくださいと助かるんだけどな。

茶矢達と昼飯食べたいから。

由君と打ち解けて勉強教えてやりたいし。

それから…それから……

「…何やってんのアンタ？」

目の前で声がして、顔を上げる。
声の主は由君で、怪訝そうに見下ろしている。

……ヤバイ。

今、何かされたら太刀打ち出来ない。
メンタル面弱ってる現状、上手く体を動かす自信は毛頭ない。

『由君こそ、こんな場所で何をするのかな？ 屋上で待っててって言ったのに。』

下手くそな笑みで挑発して、せいぜい虚勢を張る事しか^{すべ}な術がない。

あ、短気な由君には逆効果だったかも。

思っくそ殴られるか蹴られる可能性99%。

残りの1%は俺の願望。

・・あ、顔しかめた。

——蹴り飛ばされる！

ごめん、正軌。

腕で顔をガードする。

……が、予想していた痛みが一向に与えられない。

腕の隙間から様子を伺うと、目の前に足が寸前で止められていた。
顔を上げれば、誰かが由君の足首を掴んでいる。

一触即発しそうな空気の中、俺は腕を下ろして渴いた唇で言葉を紡ぐ。

『……メ……シア？』

「此処にいると思って来てみたら、こんな状況だったとはな。」

「……外人さん、手を離してくんない？」

『……相棒、握力で潰すなよ。俺は大丈夫だから。』

「安心しろ。基本女は傷つけない主義だ。」

……気に食わない奴には容赦ないがな。」

パツ、と手を離して龍と虎が睨み合う光景が目には浮かぶ。

俺は足に鞭を打ち、二人の間に立つ。

このまま仲が悪くなったら困る。

せっかく築き上げたモノを己でぶち壊しかねない。

なら、まだ一発くらい受けた方がマシだ。

躓く俺の腰をメシアが支えてくれたのに礼を述べ、由君に顔を向ける。

『今からさ、俺達飯食べるんだけど……由君も一緒に食べない？』

「誰があんた達なんかと！」

『お願い、食欲無いから俺の弁当食べてほしいんだ。』

由君の手を優しくとって、弱々しく笑む。

これが限界なんだよ。

あの頭の中に映し出された映像はダメだ。

気絶しないのが奇跡だもん。

由君は俺の顔を見て、バシッ！と手を振り落とした後、岩の上に腰掛ける。

やっぱり胡座姿だ。

弁当箱を取り出し、ガツガツ食べ始めた。
ピタ、と動作を止め、弁当を見る。

「…美味しいな。」

「とも美の料理は美味しい。」

『ま、たと食べてくれ。残したらショック受けるから。』

「……う、美味くなんかねえ！マズイわ！！」

貪るように食べる由君の横に俺達も座る。

この気温なのに此处は涼しい。

校舎内は冷房が効き過ぎて逆に寒いから、このくらいの風が心地良い。

思わずうとうとしてしまう。

こっくり、こっくり、水鳥のように頭を動かしているとメシアの肩に頭を抱き寄せられた。

『大丈夫…』と言っても、力が入らない。

頭がボーとする。

眠りの国へ入るのも、後僅か。

妖精がふわふわと誘う。

『…チャイム鳴る前に、起こして。』

「わかった。」

『由君ごめんね…おやすみ……。』

「…。」

スウ、と静かに暗闇に溶け込んだ…。

「……本当に寝た。」

「何もするなよ。寝かしてやれ。」

由に見えないようピロの寝顔を手で隠して、反対の手でパンを食べる。

由は食べ終わった弁当箱をそのままに、空を見上げた。

メシアもそれに続く。

雲が綺麗な青色の空に浮かんで、ゆっくりと形を変える。

消えるものもあれば、また現れるものもある。

風が止んだと思えば、今度は葉がひらりと舞い踊る。

メシアはピロの髪を指先で弄り遊び、ピロは静かに寝息をたてる。由は横目でそれを見遣ると、ため息を吐いて頭をガリガリ掻きむしる。

本当に女か疑う雑な振る舞いだ。

「何で吉田なんかの頼みであんたらは由に構うの？」

「先生の言い分など耳にはない。」

「…はあ？意味わかんないんだけど。」

「じゃあ何でさ？」

眉間に皺を寄せ、目を細める由。

メシアの淡々とした物言いにカチンときたのだろう。

しかし、メシアはピロの前髪で丁髷ちやんまげをやったりして、由の威嚇をモノともしない。

ピロの髪を手櫛で整えて、前髪を耳にかけてやる。

メシアの顔は、とても表現出来ないほど・・・

：それに見惚れてしまった由は、顔を赤くさせ暫く放心状態だった。

——皆さん忘れがちかと思いますが、メシアは美形なのですよ。一般の人ならこれが普通の反応。

メシアの周りがちよつと変なのです。

ま、慣れですね。

人間慣れって恐い。

メシアは顔だけを由の方に向け、薄い唇を動かす。

「正が：いや、二人の願いに手助けするだけだ。

コイツらの“相棒”だから、理由はそれだけだ。」

「：コイツら、って、一人しかないじゃん。意味不明。」

「お前はそうなのだろうな。」

で、どうやったら行く気になるんだ？」

ジッと見つめられて、由の顔は更に真っ赤にさせる。

下唇をキュッと噛み、頭をガリガリして顔を隠す由。

メシアはただ静かに言葉を待つ。

痺れを切らしたように由が喋ろうとすると・・・

——キーンコーンキーンカーン：

「正、起きろ。教室行くぞ。」

『んー…あい。起きる…うん、起きる…。』

「寝ぼけるなよ。ほら、教室行くぞ。」

ペシペシ。

『待つて、弁当箱片付けないと。痛い痛い。』

つと、またねー由君。』

「じゃあな。」

…ほら、まだ寝てるんじゃないのか。起きろ。」

『そんなすぐに起きれるわけない…くぁ…、眠っ。』

並んで歩く二人の背中に舌打ちし、彼女も逆方向に歩いて行った。

ダダダ・スッパーン!!

「兄!」

『メシア帰るか。』

「ちょっと待ってよ!

昨日はごめんね!これからは言葉に気をつけるから!」

抱き着く源希を見下ろして、頭を下に押さえる。

ムギューと抱き着く源希は目をウルウルさせている。

小動物好きの女子なら胸キュンするだろうか。

いや、正軌なら思っきりぶん殴るから俺もしょうかな。

タンッ、タンッ、

こちらに走る人影一つ。

手首を回している恐い人も一つ。

和葉さんに離れるよう促して、俺は壁に背を預ける。
走って来た人物がこのまま直進する。

タッ、タッ、タッ、

「源希君、離れなー……さい!」

ドシュー!!

「グアッ!!」

「正、動くなよ。」

グイッ。

「メシア痛い痛い痛い!!」

『早く離れるこったな、源希。』

「兄!俺死ぬ!友達に殺されたなんて俺報われなくて成仏できない!!悲しすぎる!!」

助けて兄!

「早く離れなさい。」

「そうだ。」

メシアが腕を引っ張り（これが振れるようにやるから激痛らしい）、茶矢が地味に横腹をつま先で蹴り続ける（足を尖らせる& amp; 何十回もやるから地味に痛いらしい）。

源希はマジ泣きしだすから、そろそろ制止の言葉をかける。

このままじゃあ、源希と二人の友情に直らないヒビが入る。

怪我を負えば永遠に忘れられない苦い思い出になる。

一応源希の兄（仮）として、それは避けてやらないと。

泣かれたら弱くなる。

『はいはい、二人の気持ちは嬉しいから。ありがとな。

でも、そろそろ止めてやって。源希泣いてるから。あの能天気馬鹿の源希が泣いてるから。よっぱどの事だから。

な?俺の顔（正軌のだけど）に免じてな?』

「兄貴が優しいいいい……昨日はごめんなさいいいい……うえ

ええ………」

「正軌先輩がそうおっしゃるなら……仕方ないですね。」

「わかった。しょうがない。」

『はいはい、源希泣き止め。』

ほら皆で帰るぞ。和葉さんじゃあね。』

和葉に手を振って、クラスの変な視線の中から抜け出す。

茶矢が源希の鞆を持って、廊下にいた真尋と皆月と一緒に学校を出た。

中編（裏読み）

『源希、ちょうど良かった。』

「ん？兄、俺に用事？」

ある朝の事。

学校の鞆を取りに部屋に戻ると、調度源希が部屋から出たところだった。

毎日休み時間に屋上に行くにも暑くて堪らない季節に近づいてきている。

正直、進路相談室で作詞作曲してほしいものだ。

：と内心愚痴りながらも通ってる俺達は偉いと思う。

まだ三日目だけど。

——それで俺は名案が浮かんだんだけど、午後からは由君がいないからやれる確率は低い。

ま、無理なら庭で楽しめば良いんだけど。

俺は源希に手招きして、コシヨコシヨ内緒話。
うんうん頷く源希はニカッと笑顔で了承した。

「ちょっと待っててね！一応袋に入れてあげる☆」
『おう、助かる。』

部屋に入る源希をニヤニヤしながら待った。

学校に行く途中にメシアに袋の中を質問されたが『放課後の楽し

みさ♪』と悪戯っ子の笑顔を見せた。

今回はメシアは怒らなかった。

茶矢も途中参加して『放課後予定なければ屋上来いよ。』と誘っておいた。

真尋はまだ包帯巻いてるヶ所あるけど……ま、良いか。

傷口は大分塞いでるし。

学校までの足取りは凄く軽かった。

――

『由君ー♪ヤッホ。』

「……よ。」

『お！挨拶してくれた！』

メシア、和葉さん！俺達の努力は無駄じゃなかったよー！』

「ダアホ！ウルセエ！集中できねえだろうが！！」

『ね、ね。放課後、ちょっと時間ある？』

「！？近いわ！」

ニヤニヤ頬を緩ませたまま近づくと、頭を叩かれた。

強いけど、傷になるものではない。

それでも俺は楽しみで仕方がないんだ。

ニヤつきが治まらない。

『どう？空いてる？』としつこく聞けば、襟首を掴まれた。

そのまま由君との距離が広がる。

メシアが見下ろしていて、唇を尖らせて抗議するがサラッと流された。

和葉は俺の横で楽しげに笑ってる。

三人に囲まれても、由君は作詞を続ける。

i P O ○からは聞いた事がない音楽が流れてる。

俺はヒョイと由君からイヤホンを抜き、耳に装着。

i P O ○本体も取って、聴いてると二人も耳を近づける。

ピアノとギターの少し悲しいメロディーだが、何か惹かれるモノがある。

声はまだなくて、後で録音するのかもしれない。

俺的にこの曲好き。

目を閉じれば情景が頭の中で創造でき、二人が手を繋いで歩いている姿が思い浮かぶ。

最近のはあまり好きなのはないけど、これはお気に入りに入るかも。

目を開けて横を見ればギョツとした。

和葉が鼻を赤くしてボロボロ泣いていたのだ。

他の二人も啞然としている。

和葉は両手で顔を覆い隠し、ワタワタと慌てる。

「あのね、違うの！この曲を創造してみたら：男の人と女の人が：ズツ、切なくなっちゃって……ふえええん……」

理由がまあ何とも彼女らしくて、また三人でポカーンとしてしまった。

いち早く冷静になった俺はイヤホンを外して、ポケットを探る。

『ティ、ティッシュ！あ、クソ鞆の中だ！』

ハンカチはまだ使ってなかったよな…はい、和葉さん。これで涙拭いて。』

「大丈夫…ポケットに、あるよお…うえええん…」

「和葉、泣き止め。由がもらい泣きしている。」

「バツ、バツカじゃねえの！泣いてなんか…ねえ、ての！

…クソ…ッ！そいつと一緒にすんな！」

背中を向けて泣き出す女子二人に、顔を見合わせる男二人。

『ちよつと用事思い出した…』と逃げようとすれば捕まる事間違いないし、だろ。

いや、しないけど。

ハンカチを和葉に渡して、代わりにティッシュを貰ってからメシアに任せた。

俺は背中向けてる素直じゃない由君にティッシュを渡す。

『いらねえよこんなもん。』と口で言いながらもティッシュを手から奪うのは、呆れて笑いそうになった。

ストンと由君に背中を向けて、ポンと背中をちよつとだけ預ける。手で頭を押し戻されたけど、殴ったりはしない。

目の前で純粹に感動されれば、ちゃんと嬉しいと思うんだ。気持ちちは真っ直ぐな子。

新しい一面を発見しました。

『俺もあの曲好き。今度iP O○持ってくるからダウンロードしてよ。』

「はっ…誰がそんな事、」

「私もお願いします!」

挙手してアピールする和葉。

まだ泣いていた。

「ただ泣けば気が済むんだろう、と考えてれば後ろでキツイ一言。」

「アンタは泣いて脱水症状になりそうだからダメ。」

「そんなぁ…グス…」

またぼろぼろ滴を零す和葉さんにギョツとした顔をする由君。

メシアに頭を撫でられている和葉を暫く見て、由君はため息をついた。

どうにでもなれ、みたいなヤケクソな物言いで指を二つ立てる。

俺は由君の扱い方をだんだん収得していくのにニヤニヤしながら空を見上げる。

由君の言葉に和葉は顔を上げた。

「――ハア、約束は二つ。」

一つは、曲を誰にもあげない事。聞かせるのは許す。

二つめは、誰が作ったのか秘密にする事。勿論、自分が作った発言も禁止。

この二つと最低限のマナー守ってくれれば、ダウンロードしてやつても……良い。」

『「本当!?!」』

「……破ったら一生口きかない。」

『「約束する！約束だからね！」』

「……明日、由が此処に来てればな。」

『「やったー！！」』

喜びに俺と和葉は握手をしあう。

ノリで抱きしめ合ったら、有無を言わずにメシアに剥がされた。
ちよつと痛い。

由君が離れた場所でタバコを吸いながら苦笑いを浮かべた。
もう二人は泣き止んでいた。

チャイムが鳴ったので、『またねー。』と手を振れば初めて振り返してくれた。

早く行け、みたいな感じだったけど。

だんだん進歩していく関係に、俺は嬉しかった。

「……ったく、由も甘くなってるなあ。」

俺達がいなくなった屋上の給水タンク近く。

その表情に偽りは無かった。

「では、範囲も終わり期末テストも近いので、自習にしよう。
あまり雑談はしないように。」

数学の時間、欠伸をしていると屋上の細い煙りに目移る。

気まぐれに黒縁メガネして行こうかな、なんて煙りの動きを見つめながらボケーとしてると、和葉さんがこちらに振り向いていた。

『どうしたの?』と聞けば、わからない問題があったらしく眼鏡をかけて示された問題を黙読する。

和葉は文章問題やちょっとハードルを上げた応用系が苦手だ。

正軌を通して見てきたからわかる。

シャーペンをクルクル回して考えてると、後ろからも呼びかけが。
俺はシャーペンで薄く線を引いて教える。

『今引いたのと、さっきやった方程式を使えば…何ページだったっけえ。』

ちよっと待っててなメシア。』

「もしかして、コレ?」

『ん? そうそうコレだ。』

なんだ、やれるじゃん和葉さん。後は計算間違いしないようにな。』

「うん、ありがとう♪」

一回やってみるね。」

『またわからないトコは聞いてみて。
はい、お待たせ。』

クリツと体を振り、後ろを向く。

メシアは他の問題をやっていたらしく、しばし待つ。

メシアは正軌がやるようなノートの使い方をしていて、自分が覚えてないという意味がないのだけど……まあ、今回の点数で決まるか。
俺も待つてる間に違う宿題やる。

「正。」

『ん？終わった？』

「ああ。」

コレ、何て読むんだ？」

『……牧野さんマキノじゃない？あんまし問題に関わりはないけど。』

「じゃあ、これは？」

『一寸いっすん。昔の長さの単位。

…これだけ？』

「ああ。助かった。

意味のわからない漢字がテストにある時は困るからな。今のうちに聞いておかないと。」

『……ま、何かあったら呼んで。』

宿題のページをパラパラめくっていれば、サッ！と紙で指を切ってしまった。

案外深めに。

じくじくと痛む指。

タラー……と流れる血を見て、

——ドクンッ！

また、フラッシュバックが俺を襲う。

：前とは違う、記憶。

夕暮れ、泣いてる正軌、誰かが：正軌がこうなった子供時代の元凶が、手を差し延べた。

答えるように笑顔で手をとる正軌。

見え隠れする痣を子供心に見て見ぬフリ。

まだ平和だった記憶。

だけど、コイツがいるから消さないと・・・

何をやってんだ！新人！！早くしろ！！

気づかれないよう鞆からティッシュを取り出し、それを指に巻いて肩幅を狭くさせる。

目を閉じて、深く、ゆっくり、焦らず、深呼吸。

ハンカチは和葉に渡したまんまだから、目を隠す物がない。

暗闇は心を落ち着かせる。

あの温もりを、体が求めている。

小さな、記憶には消したけど：俺は強く印象に残っている、あの声。

今が休み時間だったら、走ってでも逢いに行くのに。

今はただ、堪えるのみ。

昼休みになれば逢えるんだ……それまで保て。

後ろでメシアが声をかけようとした際に、タイミング悪くチャイムが鳴ってしまった。

休み時間、俺は何時もの如く自然に振る舞えた。

『はい、由君です。』

修学旅行で一緒の班。仲良くしてやって。』

「……ッケ。」

階段を下りようとする由君と偶然バッタリ出会い、屋上に連行。

和葉とメシアの後ろで悪態ついて顔を見せない。

うん、コイツらにすぐに懷いたら努力の意味がわからないから良かった良かった。

源希はうーんと由君の顔を覗き込む。

思っきり睨まれた。

「どこかで見た覚えあるんだけど…何処だっけ？」

「私に聞かないで下さい。見ないで下さい。」

黙々と食べる茶矢にサラリと酷い発言をされる。

ズーンと落ち込む源希を優しい二人以外は飯を食べる。

由君はまた昼飯を持っていない。

ペーイ。

「…？何コレ？」

『昼飯。由君の。』

間違っ買って買ったから食べてやって。』

「嘘だろアンタ。由はいら」

『茶矢ー、手相見てやるから手貸してみ。』

「聞けよ！お前絶対嘘だろうが！」

「やーん、由先輩野蠻ー。友恵恐い。」

「…ハッ、キモ。」

「息ピッタリ…」

「あはは♪楽しいね。」

ワイワイがやがや騒がしい屋上。

茶矢の手相を適当に言っってショック受ける茶矢。

この手に触れただけでホッと安堵した。

あの時に救ってくれた手に、この声に、頭痛がひいていくのがわかる。

言った言葉を本気にするから面白くって、“此処にいる”って実感出来て、柄にもなく本心から笑みがこぼれ落ちる。

両手で茶矢の手を握れば、真っ赤にさせる茶矢。

——グイッ。

体を後ろに引かれてしまったので、思わず手を離してしまった。

メシアが腹に腕を回して俺は動けない。
横を向けば、チューとジュースを吸っていた。
何かムツとしてる。

『……ヤキモチ？ 正軌のだから？』

「さあな。」

『区別すりゃ良いのに。』

おっと。』

「…昼休みくらい、良いではないですか。普段一緒なのですから。」
「何の事だか。」

腕を引かれて、腹を引かれて、何か言い合いが始まる。

正軌苦勞してんな…これじゃ、狼と柴犬の餌じゃね？

腹苦しいし。

腕痛いし。

俺を挟んで喧嘩すな。

誰かヘルプ…：…つっても、もう当たり前になってるからしゃーないか。

二人が離してくれればなあ…。

『口喧嘩したら…前に言ったよな？ 口きかないって。』

「「！！」」

『はい、離して。食べた物出したくない。』

「「……。」」

『睨み合いも禁止な。睨むなら俺か空を睨め。それ以外は禁止。』

のそのそと脱退して、一人でいる由君の横にストンと座る。

後ろで人数もあるのか自然と煩くなる。

不愉快には思わないけど。

『いやー、吐きそう。』と腹をさすりながら苦笑いすれば、由君はチラッと俺を見て、またタバコの煙りを吹かせる。

一気にこんな人数の中にいたら居心地悪いだろう。

悪い事をしたかなあ：俺は仲良くして、早く勉強教えてあげたいんだけどね。

修学旅行行きたいし。

胸ポケットからある物を取り出し『ジャジャーン♪』と由君の前に広げる。

コラ、『アホじゃねえのコイツ。』みたいな顔しない。
わかるようにしているんだろうけども。

『修学旅行のパンフレット。何処行きたい？』

「日本。」

『北海道もあるよ。』

どのコース行く？』

「行かなかって言ってるんだろ。」

『居心地が無いと思うから？』

「!!?」

バツ！と勢いよく俺の方を向き、怯えたような顔を見せるのも一瞬で、キツ！と睨む。

俺は笑わずに、片膝に頬を乗せて寂しそうにアスファルトに視線を移す。

黒髪が顔を見え隠れさせる。

何時もの明るい声ではなく、ちょっと暗めに語りかけるように話す。

『今は皆がいるけど……正軌も前までは一人だったんだ。だからね、由君の気持ちはわからなくもないよ。』

「……。」

『独りは恐いけどさ、今は俺達いるよ？見た目は頼りない男だけどさ……やる時はやるよ？俺。』

「どーだか。アンタ勉強できないだろ。」

「正軌君は勉強できるよー。毎年学年ベスト5には入ってるもん。」

「またまた、そんな嘘……」

「嘘じゃないよ！」

正軌兄は漢検……何級だっけ？英検もあるよ！」

『三級、だっけか。覚えてねえや。』

明日賞状見せよっか？』

「ああ、見せてみなよ。」

それで信じてやる。」

『んじゃ、テスト勉強する？』

「ああ、してやるよ。」

『じゃ、中間の結果も探しておこつと。』

二言はないね？』

ニヤニヤしながら、漸く掴めたチャンスを無駄にはしないと手を握りしめた。

——キーンコーンキーンカーン：

チャイムが鳴り、ぞろぞろと戻る準備をする一同。
帰り際、俺は由君にこっそり耳打ちした。

『放課後待っててな。絶対楽しいから。』

またね♪』

「……フンッ。」

放課後に向けて、源希と打ち合わせして教室に戻った。

中編（裏読み）

——キーンコーンキーンカーン……

「起立、礼、さようなら。」

「」「さよならー。」「」

帰りの挨拶をすると、ぞろぞろと教室から出て行く生徒。俺も和葉に別れを告げて、メシアを引き連れる。

廊下で待っていた源希と合流して、ある場所へと向かった。

「——ってかさあ、最近の宮古、やけに明るくない？」

「あー！それあたしも思った！違和感ありありだし☆」

「気持ち悪いよねえ！キャハハハ！！」

教室に残っているムードメーカー的な（授業中煩い）奴らの話を、帰り仕度している和葉は珍しくイライラしながら聞いていた。

実は早く教室を出て鍵を閉めて部活をしたい。

……しかし、鍵を任せたらちゃんとやってくれる確信がない。

絶対そのまま帰るだろう。

それだと、仕事を果たせないのだ。

それだけは困る。

学級委員なのだし、自分が仕事を放棄すればクラスの質が下がる。

自分のせいで真面目な人が迷惑かかるのは嫌なのだ。
あってはならないのだ・・・

「てかさー、宮古マジ超ウザイ。メシアにベツタリくっついて、近寄れないしい。」

「メシアもメシアだよねえー。何であんな奴とつるむのか理解できない。」

「渋谷従ってんじゃねえの？ほら、まだ日本に来て間もないし。」

「初めて出来た友達を失いたくない…ってか？」

「マジ可哀相う。最初の友達があんなクズとかさー。」

「あたしなら泣いて後悔するわぁ。アハハハハ！！」

「ダハハハハ！！俺もー！」

「「ヒヤハハハハハハ！！！」」

…、…、…、…、プチ。

——和葉の中で、何かがプツンと切れた。

それは、彼女の堪忍袋の長く太い紐。

滅多な事で切れるものではない紐を、コイツらは切ってしまったのだ。

さて、切った事がある人は数少ない。

キレた和葉を知る人は希少価値がある。

さあ、ご覧あれ。

仏の顔にも限界がある事を身を持って知るが良い。

——バキア……!!

「「「バキア?」」」

何も知らない男女数名は、音のした方向に顔を向ける。

そこには、見た事もない鬼神を背後に置く和葉の姿。

音の発端は和葉の手元にある、無惨にも片手で折られたシャーペン。

和葉はガタンと立ち上がり、カツカツと男女数名に歩み寄る。

団子結びにしている髪を下ろし、バサッと指で解き、長い前髪を片手で上げる。

その表情は凄く楽しげで、だけどオーラはその真逆で。

男女数名は何となくだけど、自分達の犯してしまった過ちを理解した。

そして、同時にこう思った。

“このクラスで1番怒らせてはいけない人を、俺達／私達は怒らせた”

気づいた時にはもう遅い。

和葉はガンツ!と男子が座っている椅子をお構いなしに蹴り飛ばす。

倒れる男子に、近くにいた数人も床に落ちていく。

アワアワと『大丈夫か?』『怪我してない?』とか周りが心配する一方、

——シュツツ、ガツ！！

踏み潰す勢いで、倒れた椅子に片足を乗せる和葉。

見下ろす和葉の表情を見上げる男女は、サアア・顔から血の気が引くのがわかった。

……その時の和葉の表情は、何にも表現不可能なくらいヤバかったらしい。

ただ、笑顔なのだけれど、笑顔ではないと言うか……うん、モザイクかかって仕方がない。

縛ってた髪下ろす＋黙ってる＋前髪上げる＋笑顔＋見下ろされる＋後ろに鬼神etc Ⅱ 死ぬ間際数秒前。

男女数名は必至に何十回も土下座した後、逃げるように（本当に逃げてる）教室を走り去った。

残された和葉。

暫くそのままの状態であれば、フシュ・・と何かが抜け出た。パツ、目に光りが戻って……一言。

「……あれ？私、何してたっけ？」

髪を結び、不思議そうに倒れている椅子を直して、教室に鍵を閉めた。

……覚えてないっていう。

本人には全く記憶にないのだ。

家族が恐る恐る聞いた時、

「うーん……気づいたらパッと時間が進んでたんだよねえ。本当に不思議だな。」

都合良く記憶が消されるようです。

アラ便利な脳みそ。

欲しくはないけどね。

和葉の新たな一面を見たクラスの方々でした。

——後日から、和葉の前でビクビクするようになり、大人しくなったのは言うまでもない。

委員長の実力、恐るべし。

※人数が多い為、名前有ります。

『――さあ、皆様やってきましたこの戦場へ。』(ピロ)

「屋上だろ。」(由)

「兄が今朝に考えて今日実行される水鉄砲大会！」(源希)

「今朝なんだね。」(真尋)

「しかも先輩が発案とか。」(友恵)

「本日は暑くて水遊びしないとやってられない炎天下。」(メシア)

「そのカンペは何ですか。」(茶矢)

「まあ、あーだこーだ言っても始まらないのでえ．．．」(源希)

「皆様、鉄砲はお持ちになられましたか。」(メシア)

「「棒読みすぎるだろ。」」(由・友恵)

「持ちました。」(茶矢)

「はい：！」(真尋)

水が入った水鉄砲を掲げる二人。

ノリが良いな。

『大事な荷物は階段に避難させたな？』(ピロ)

靴やネクタイ、スカーフ等は扉越しの階段に全員分置かれている。
靴下も脱がせて、今は制服とスリッパ、水鉄砲オンリー。

「させたよ。ったく、こんな事の為に残らせたんかよ。クダラネエ。」

「(由)

「普通はいるものですよ。ちゃっかり引き金に指かけて。」(茶矢)

「はい、そこ喧嘩禁止ね。楽しむがメインだから。」(源希)

源希が一応注意する。

俺はメシアに借りたヘアゴムで伸びた髪を結ぶ。

パチン！と音がした所で、俺はメシアのカンペを追加する。

「えー、水が無くなったら隅に置かれたペットボトルで回復する事。ペットボトルも無くなれば、ペットボトルを持って階段下りて水道で普及する。勿論、誰にもバレないように。」（メシア）

「わかりました。」（真尋）

「怪我人には手加減する事。傷口開くまで無理しないように。」

一応、常識を持ってやる事。」（源希）

「当然じゃない。」（友恵）

…皆、同じ考えをしたが阿吽の呼吸。

由君も何も言わなかった。

俺はメシアと源希の肩に手を回し、銃を構える。

『タイムリミットは一応5時半。全員が満足するまで水は汲みに行く。』

じゃあ…L a d y. . . 』

「「「「「……、」「」「」「」

ニヒルな笑みを浮かべて、火花を切った。

『——ゴウツツ！——！』

プシャアアア!!!!!!

全員が一斉にそれぞれの引き金を引いた。
一気に制服ビショビショだ。

各々日頃の恨みと言うか、女子が予想以上に凄かった。
俺達も当然避けたりするが、水でびしょ濡れになってしまう。
そこがまた楽しくて、笑ってると後頭部にかけられた。
犯人は、茶矢。

「隙あります。正軌先輩。」（茶矢）

『やったなコンニャロ!くらえっ!』（ピロ）

「ひゃっ!」（茶矢）

「いけ。」（メシア）

『おっと、そう簡単に当たってたまるか、よ!!』（ピロ）

「にぎゃ!?」（由）

『んげ!? 由君…』（ピロ）

「よくもやってくれたなあ宮古……」（由）

『あ、名前覚えてくれたんだ! 嬉し♪』（ピロ）

「……あんだけ言われれば誰だって、ブッ!!?」（由）

「「油断大敵。」」（茶矢・メシア）

「……」お前らあああっつ!!!!!!」（由）

走る二人に（茶矢は相変わらず遅いけど）、由君がもうスピードで追いかける。

ケラケラ笑っていれば、控えめな銃弾が。

拭いながら振り向けば、髪から滴を垂らす真尋が照れながら笑っていた。

傷口はまだ完治していないが、濡れても平気そうだ。
楽しそうにしているし、真尋の退院祝いも兼ねたこれは大成功らしい。

ちょっとした悪戯心で『うっ…』と痛むフリをすれば、慌てて駆け寄る真尋。

『大丈夫ですか！？』と肩に置いた手を掴み、ペロと舌を出してネタバレ。

『うっそー☆ごめんな♪』 (ピロ)

「うわっ！」 (真尋)

『あはは！楽しめよ真尋！みんな笑ってるぞ！！』 (ピロ)

去り際にくしゃりと頭を撫でてから走り出す。

真尋は頭に手をやった後、満面の笑顔で返事をした。

「はい！楽しんでます！」 (真尋)

その笑顔に俺も笑い返した。

「いやっふうー！！☆」 (皆月)

「ちょ、友恵ちゃん強い！鼓膜破れるって！」 (源希)

「宮古くらええ！！！」 (由)

『ヘッヘーン、BAN。』 (ピロ)

「応戦する。」 (メシア)

「メシア先輩の相手は私で」 (茶矢)

「えへへ、大当り。」（真尋）

俺達の夏の初めの第一ページ。

正軌も和葉もいないけれど、俺達は楽しめて。

みんな笑顔で笑ったり、怒ったり、悔しがったり……でも最後は楽しんでて。

由君も皆と打ち解け、皆も由君と打ち解け、茶矢も真尋も互いに吹き出しながら指差して、源希も友恵も熱くなって、メシアもどことなくうれしそうで……

……俺達は夕暮れまで遊んでしまった。

全員息を切らせて、何もかも水浸しである。

女子は中に体操服を着せ、ズボンを履かせたので大丈夫。

由君には正軌のを貸した。

水も何回か補給に行き、今はそこを尽きた。

源希が鞆からタオルを取り出し配ってくれる。

皆から離れた場所でタオルを首にかけていると、由君が隣に座った。

由君の髪はペツタリしている。

『どおだった？感想は。』

「ハッ！びしょ濡れで中グツシヨグシャで気持ち悪い。

……けど、」

『けど？』

タオルで顔を拭いて聞く。

由君は夕暮れの綺麗な空を見上げて、ポツリと呟いた。

眉間に皺を寄せないで、フツと笑む横顔を俺は忘れない。

「……嫌いじゃないな。

こんな気持ちも、今の自分も……。」

ジーツとニヤニヤしながら横顔を見ていれば、ボ、ボ、ボ、ボ、顔を真っ赤にさせて、空から床にゆっくり動かし視線。

タオルを頭から被っても、真っ赤な手が物語る。

隠している意味がない。

「……今のは嘘。」

『ククッ、それは俺の自由だ。』

はい！そろそろ帰らねえと門が閉まるぞ！

各自、風邪ひかないように直ぐ風呂に入る事！湯冷めにも気をつけろよ！源希は風邪ひけ。』

「ヒドッ！！」

『んじゃ、さっさと荷物担いで、漢谷に見つかる前に逃げるぞ！

茶矢は遅いから担いでやる。』

「はい。」

『んじゃ、開始！！』

ほら、由君も帰るよ!』

「…わーったよ。仕方ねえなあ。」

俺達はホント偶然漢谷に見つかってしまい、全速力で走って逃げた。

楽しい一日になった。

……皆の中に“正軌”がないのが、魚の骨が喉に刺さったように胸の奥で引っ掛かって、終始違和感を拭えなかった事以外は。

中編（裏読み）

『はい、コレ。』

「何だ？」

『昨日話してた資格と前回の中間テストの結果。』

丸められた紙を由君が広げれば、目を点にした。

由君の横で二人も覗き込んでいる。

漢検も英検も誇れるくらいのものだし、コレ以上必要ないと正軌が止めたのだ。

勉強していれば、まだ上を狙えたかもしれない。

中間テストは凡ミスがありはしたものの、何時もと変わらない点数だ。

正軌的には普通の点数。

和葉はパチパチと拍手をして、由君は顔を真っ青にしている。

メシアはそう驚いた様子はない。

別に自慢する事じゃないし、普通に授業受けて帰って予習復習ちゃんとしてればとれると思う。

コレを見せれば由君が勉強するって断言したから、昨夜とも美に聞いて持って来た。

今回は副教科も入るから、油断はならない。

由君はわなわなと肩を震わせ、俺を指差した。

「嫌味かコノヤローツ！！自慢か！？」

こんな点数見たの小学生ぶりだわ！！滅多にとれなかったけども！！

宮古異常！！頭どうかしてる！！！！」

『普段から予習復習してれば皆とれるよ。一夜漬けで覚える事はすぐに忘れるから意味ない。』

漢検と英検は充分だと思って途中で止めた。

これで勉強してくれるね？』

「クソーーッッ！！！！」

「でも、実行するのは難しいよ？正軌君の努力の賜物だね！」

「それより正。勉強は何処でやるんだ？」

項垂れる由を宥める和葉。

メシアが引っ付いてきたのをスルーして、賞状とテスト結果を片付ける。

——正軌は努力して結果を出して褒められているのだから、喜んで良いのだろうか。

なら、直接正軌に伝えてほしいけど…無理か。

俺が静かに受けとっておこう。

腕に絡んで肩に顎を乗せるメシアを好きにさせて、俺は由君に聞く。

『由君って、20時までダメな曜日とかある？』

「…日にちによってあるけど、基本は水、金、土曜は無理。色々しなきゃいけない事あつから。」

『んと…じゃあ、今日は大丈夫？』

「んー、何も無かったかも。平気平気。」

何かやんの？」

ベタベタするメシアの頭を押して、ニカツと歯を見せる。

不自然なほどの爽快な笑顔に、由君はなんとなく背筋に嫌な汗が流れた。

自然と体が後ずさる。

俺は一步でほとんどの間合いを詰め、由君の前で仁王立ちして見下ろす。

決して笑みを絶やさずに、人差し指を突き付けて言い放った。

『そりゃ…』

俺の家でワンツーマンで勉強教えるからだよ？

大丈夫、俺は教えるの上手いらしいから。範囲とかも色々聞いたし。

『いや、わざわざそんな事しなくて良いし！宮古が勉強する時間に使えよ！しかも、そんな時間までいたら迷惑だろうが！！』

『安心して、俺は普段からしているからわざわざ必死に覚える必要ないよ。』

テスト週間は茶矢達が勉強しに来るから、何時も20時くらいまでいるし。親にもちゃんと言ったよ。

他には？』

「あ：あ、あたし頭悪いし、授業受けてねえからサッパリだぞ！こんな短期間で馬鹿が覚えれるわけ」

そっ…

しゃがみ込み、由君の唇に人差し指を当てる。

笑顔を消して、真っ直ぐ由君を見つめると、由君の手からタバコが落ちた。

明るく振る舞う声も低くして、真剣に語りかける。

『…俺さ、

自分自身を過大評価する奴よりも、過小評価する奴の方が“嫌い”なんだよね。だって、そこで自分勝手に“見限る”から可能性もチャンスも無くなる。

本心から言ったのでない言葉でも、体は自然と言葉に影響される。今後の為にも、これは知っておいた方が良い。』

「……あ……」

『…っという事で、今日も屋上か校門で待っててちょ♪迎えに行くからさ。』

そうそうiP O O。よろしくね。』

「あ、由ちゃん私もお願い！」

——キーンコーンキーンカーン……

タイミング良くチャイムが鳴り、唇から指を離してタバコの火を揉み消す。

スリッパが微かに焦げた臭いがした。

含み笑いを浮かべて、背を向けたまま手をヒラヒラ左右に振る。メシアと和葉を連れて、教室に戻った。

…屋上には、トマトくらい真っ赤な顔した由君が。

消されたタバコ、冷たい風、低く真剣な声、唇に残る人差し指の感触。

由君の胸の中で、何かが動き始めた――

※人数多いので名前有り

「はい、友恵ちゃん確保。前もギリギリだったんだから、勉強会するよ。」（源希）

「あたしの平和があゝ……」（友恵）
『メシア、由君離さないようにな。

全く、下駄箱直行したら逃げようとしてたんだもん。俺様ビツクリしちゃったよ。』（ピロ）

「嫌だ！離せ！この怪力外国人！！」

宮古嘘つくなあああ！！」（由）

「メシアだ。」（メシア）

「んな事わかつとるわあああっつ！！！！！」（由）

「喧しいですよ。周りに迷惑です。」（茶矢）

「茶矢ちゃん……」（真尋）

和葉以外のフルメンバーで、逃走をはかる二名を引きずりながらも、家に到着。

ボーっと突っ立ってる由君の背中を押して、家の中に入れた。

とも美はニコニコしながら由君と両手で握手すると、由君は困ったように頭をガシガシ掻いて小さく返事をした。

……で、今は主に勉強できる四人で会議中。

腕組みして天井を見上げる。

残る三人はソファで何かしている。

『……んじゃ、配役を決めるぞ。

先ずは源希。』

「うん。」

『お前は此処で主に一年生、基本皆月にミッチリ教える事。

もし赤点とったら連帯責任な。』

「うう……はい。」

『茶矢も真尋に教えてやって。』

「わかりました。」

『メシアは……んー、俺の部屋で由君と勉強教える。暇だったらテスト勉強して構わない。』

「わかった。」

『じゃあ、検討を祈る。何かあったら呼んでくれ。』

由君、ついて来て。』

「あたしは此処でやらねえのか？ こんだけスペースありや、充分だろう？」

ソファァーから頭を見せて、話す由君。

由君の言う通り、場所はある。

一年生が食事用の長いテーブルを使って、俺達がソファァーのテーブルを使えば問題ない。

…だが、此処じゃあダメなのだ。

一応自覚はしてもらいたい。

俺達は色々と忙しいのだ。

『テストまで残り一週間“しか”ないんだよ？

そこんところ、ちゃんと理解してる？』

「…あ、はい。すみません。」

『赤点とった者は構わず罰を与えるから。一教科につき一つ。やられた事がある者も、とりそうな者も、心してかかるように。

では、開始。』

俺の声を合図に、全員もそもそ動きだした。

由君の荷物を肩に担いで、メシアに本人を連れて自室に向かった。

パタン。

後ろ手に扉を閉め、ニィ・・とチェシャ猫のように口端を吊り上

がげる。

メシアがやけに引っ付いてくるのを無視して、眼鏡ケースから眼鏡をスチャと掛ける。

『最初に言っとくけど、出来の悪い奴にはスパルタ方式でやるから。……覚悟しろよ?』

「い、嫌だああああーっっ!!!!!!」

∴それからは有言実行。

暴れても、叫んでも、泣いても、逃走しようとしても、殴ろうが蹴ろうが、正座させて縄縛る心意気でやらせた。

一、二時間で由君は白髪になりそうなくらい老けた。

テーブルに突っ伏してピクリとも動かない。

俺達はとも美が運んでくれた晩御飯を手早く食べる。

死人の頭を叩いて、黄泉の国から日本国に強引に引っ張り戻す。

ムクリと起き上がった由君は寝た（やつれた）表情で皿を凝視する。

「何これ?」

『かき揚げ丼。』

「何で三つ?」

「由の晩御飯。」

「何で?」

『お腹すくと頭が働かないから。

はい、ごちそうさま。』

「ごちそうさま。」

「……。」

俺達が食べ終えた後、由君が食べ始めたのでメシアの勉強を見ていた。

ほとんど二人で雑談しながらだったけど。

「：あゝもーヤダッツ！！由には無理！！」

『嘆くな喚くな手を動かせ脳みそに刻み付けろ。』

たったこの範囲だけ覚えれば良いだけだ。こんなもん、二、三時間あれば暗記可能だ。俺ができるなら同じ人間の由君にもできる。』

「できつかああああああ！！！！！！」

「近所迷惑だ。音量を下げる。」

帰る頃には人間が二人消え、ゾンビが二体増えていたという。

『ふう、疲れた。』

ドクッ、ドクン…

全員が帰った後の風呂上がり。

首からタオルをぶら下げ、ベッドに腰掛ける。そつ、と胸に手を当てる。

…脈が早い。

風呂上がりだからだろうか？

痛いくらい内側から叩かれているようだ。

頭じゃなく、心臓。

珍しいヶ所なだけに、驚きと一抹の不安がポツンとガラスの破片が残る。

もしかしたら、もしかしたら俺の…

『……やめよ。無意味だ。』

タオルを目元に被せて、仰向けに寝転がった。

… 暗い夜空に瞬く月。

一匹の黒猫が空を見上げて悲しく鳴いた。

その鳴き声を気にする者はいない。

ただ、風で騒ぐ木の葉と同じとしか捉えない。

…黒猫は気づいていた。

仲間がいる中での孤独感の意味を、

体の違和感を、

胸の痛みも、

今もある破片の答えを、

喉から出そうな、この“ ”でさえも・・・本当は。

：今はただ、体を丸める事しか、逃げる方法がないのも

黒猫は知っている。

中編（裏読み）

『母さん、ちょっと出かけてくるわ。』

「あらあらピロ君、まだ9時ちょっとだけどこへ行くの？」

『メシアが風邪ひいてヤバイってさっき電話きて、看病に行く！』

「メシアが風邪！？俺も行く！」

「今日は茶矢ちゃん達が遊びに来るんでしょう？大勢で押しかけたら迷惑よ。」

「ちょっと待って、ピロ君。」

靴を履きかえていると源希が走ってきて『6時には俺も行くから！』と心配そうな顔をする。

デコピンして『俺一人で平気だ。』と言っても、ぐずぐず服を摘んで離さない。

よほど心配しているのだろう。

だが、とも美にいつも簡単に跳ね退けられ、リビングで落ち込んでいた。

とも美は俺の手にお金と四つ折のメモ用紙を握らせる。

…何故にお金？財布ならちゃんと持ったけど。

「メモに必要な事を書いておいたから。一応参考にして。」

正軌はあまりお金を使わないけど、お母さんの使いなさい。メシア君によろしくね。」

『……うん、わかった！』

行ってきます。』

「「行ってらっしゃい。」」

とも美と源希に見送られ、俺はとも美の温かさを握りしめて駆け

出した。

――数十分前――

朝食を食べ終わり、テスト勉強の為に自室に入ると、

――ププププ……ププププ……

ベッドの上の携帯が音と一緒に震えている。

誰かから電話が着たみたいだ。

……こんな時間に？

まだ8時半過ぎの時間だぞ。

俺達は週間になってるから普通に平日と変わらない時間に起きるけど。

携帯電話を開けば「メシア」と画面に表示される。

メシアが電話するのはあまりない。

基本的にメシアとはメールとかはあまりしない。

するとしても、「明日の宿題はなんだった？」「そうか、助かつ

た。じゃあな。」と短い。

メールもアッサリしていて、メシアらしくてちよつと笑える。

ププププ…ププ、ピ。

『もしもし？おはよう。』

「はぁ…正、か。」

電話越しから息が熱いのがわかる。

メシアの異変に微かに眉をひそめる。

冷静にメシアに質問した。

『どうした？何があった？』

「…：…すまない。無意識に、君に電話していた。すぐに切る。」

『風邪ひいたのか？息が荒い。』

「…大丈夫だ。何時も、一人で自力で、治した。問題な」

『今すぐ行くから待ってろ。』

ピッ。ツーツー、ツーツー、

部屋着とはあまり変わらないけれど一応外着に着替えて、鞆に財布を入れて階段を下りた。

――で、今に至る。

住宅地に並ぶ、二階建てのひっそりとした一軒家。

庭らしき場所には一切手を触れていないようだ。

俺は玄関先でメモに書かれた物をコンビニで買い、家を見上げている。

コンビニ袋片手に家の人とあったら、追い返されるかな？

一般の人に最近会ってないように思うし。

実は、これがメシアの居候している家にお邪魔するのが初めてなのである。

変かな？一、二ヶ月くらい経つけど。

正軌があまり自分から遊ばないタイプだし、メシアも似たような性格だからしょうがないと俺は思うけど。

別段、友達だから家に行くって基準は変だと。

だって、真尋の家にも、友恵の家にも、茶矢の家にも行った事ないけど正軌とは友達だし。

…さてと、御託を並べる前にチャイム押すか。
メシア心配だし。

ジリリリ…ジリリリ…

俺の家とは違うチャイム音。
暫くそのままの状態で待ってても、誰も出る気配がない。
…伯父さんもないのか？

ギィ・・・

ボーっと突っ立っていると、目の前の扉が開かれた。
中からは銀髪の髪が短い外国人の男。
無愛想な表情が印象的だった。
これが、フリーの父親か。

「……。」

『突然すみません。メシアの友人の宮古と申します。
メシアが風邪をひいたと聞いたので、看病しに来ました。上がって
もよろしいですか？』

「……。」

コンビニ袋を上げて見せると、男は扉を開けたまま家の中に入っ
て行った。
廊下をスタスタ歩いて行く男の背中に、俺は声をかける。

『すみません！メシアの部屋はどちらにありますか？』
「2階の1番奥。」

ボタン。

自室らしき部屋に入るフリー父。
フリーと目の色が同じだと気づいた。

にしても無愛想。

靴を揃えて、遠慮なく階段を上がる。

掃除をしていないのか、空気が埃っぽい。

こりゃ、衛生上健康に悪い。

とも美の偉大さに拍手したくなった。

トントンと上がると左右に二つずつ部屋があり、角を曲がれば目的の部屋を発見。

此処だけ黒い扉だった。

――コンコンコン。

念のためノックをしてから静かに入る。

寝ているのを起こすのは気が引けるからだ。

扉を閉めて部屋を見渡すと、クローゼットとベッドくらいの必要な家具くらいしか置かれてない殺風景な部屋だった。

右隅に設置されたベッドの上で、もぞもぞ動く淡緑色の髪を発見。ベッドの傍らに置かれた小さな高いテーブルにコンビ二袋を乗せて、荷物をフLOORリングの上に置く。

髪を上げてやると、熱い寝息をたてているメシアの寝顔を見た。額に触れると俺より熱かった。

『…空気悪いな。窓開けねえと。』

ベッド向こうの窓、ベランダにつながる扉、二つ開けて換気する。部屋にあった椅子をベッドに引き寄せ、ガサガサとメモを見ながらやってみる。

……あ、体温計ねえじゃん。

仕方ない、メシアの顔見て判断するか。

案外おおざっぱなのよ俺様。

多分37・6℃くらいある。

布団を剥げば服着てないというのは何となく想像してたので、俺は冷え○タ額に貼ってタオルと桶を探しに部屋を出た。

階段を下りればタイミング良くフリー父が部屋から出たところだった。

俺はすかさず質問する。

『すみません。タオルと桶ってありますか?』

「……。」

スタスタと歩いて行く男の後を追ってもう一度聞こうとすると、男はある一室に入った。

そこは脱衣所のようなだ。

桶の中にタオルを二枚入れたのを渡してくれた為、『ありがとうございます。』と言えばさっさと違う部屋に行った。

俺は桶に水を入れて、フリーの部屋に戻った。

水で濡らしたタオルで汗を拭いてやって、背中では起こさないように体を起こして拭いた。

渴いたタオルで水気を取り、クローゼットから取り出したタンクトップを着せて、一回寝かせる。

メモを見て、枕を渴いたタオルで巻いた氷枕に入れ替えていると、メシアが目を覚ましてしまった。

『あ、起こしちゃった?悪い。』

「いや…大丈夫だ。」

世話かけて、すまない…。」

『なーに言ってるんだよ。そんな事気にする仲じゃねえだろうが。そんなメシアに天罰じゃ。』

冷え○タの上からデコピンして、後ろ髪を上げて氷枕の位置を首の後ろに当てる。

濡らしたタオルを絞って汗を拭いてやる。

首を拭いてやると気持ち良いのか目を細めた。

コンビニ袋から消化に良さそうな物と風邪薬を取り出す。

メモに目を通していると、メシアの手が俺の指に触れた。

メモを置いて『どうした？』と顔を近づけて聞けば、首を横に振るメシア。

口まで布団を引き寄せ、ボソッと呟いた。

「……風邪ひいた時、誰もいなかったから。

正直、嬉しい。ありがと。」

中指を弱々しく握ってニコッと笑顔を見せるメシア。

世の女性こんな事されたら確実にオチてると思う。

母性が目覚ましく呼び起こされるんだろうな。

俺は、こんなギャップあるんだ、で終わらせるけど。

ちよっと可愛いと思ってしまったので、空いてる手で頭を撫でてやる。

何か、風邪ひくと色々と弱ってるから本心が出るってテレビアニメで見た記憶があるけど、なるほど、と今なら頷ける。

アニメも凄いね。

『アニメなんか見てないで勉強しなさい！』って怒ってる親の人、アニメも勉強になるんですよ。

家族揃って見てみると良い。

さてと、結構話が逸れたけど気にしたら負けさ。

メシアの手を握ってやって、メモに書かれた事を見る。

——ジリリリ…ジリリリ…

来客が来たようで、眠るメシアの手を布団の中に入れる。

ぽんぽん、ぽんぽんと布団の上から一定のリズムで叩いていけば、何故か開かれた部屋の扉。

そこには予想外の人物が買い物袋両手で持っていて・

「失礼します。」

「こんにちは正軌先輩。」

『……茶矢？』

『どうして此处に？』と聞く前に、『一年生代表です。料理を作れるのは真尋君か私しかいませんし。』との事。

源希は知ってたけど、やっぱり友恵も作れないか。作れたら作れたで納得しそうだけど。

茶矢はテーブルの上に果物を置いて、再び部屋から出ようとする。

『何処に行くんだ？』

「キッチンをお借りしようと。お粥作ってきます。」

『俺も手伝うよ。一人じゃ大変だろう。』

「いえ、メシア先輩の近くにいてあげて下さい。

起きた時に誰もいないのは、寂しいですから。」

『そうだけど…俺も最低限度の料理作れるようになりたい。将来性が心配だし。』

「……知らないですよ。メシア先輩が悲しんでも。」

そう言ってスタスタと先に行ってしまった。

メシア先輩が…ねえ。

じゃあ自分はどうかんだ？、って話だけど。
俺から言わせてみればね。

そんなんだったら、一生気づかれないぞ？若者よ。

ヒッキー中の人は相当自分に関心ないから。

世界一周よりも遠回しな思いに気づくのは、後何十後か。
それは俺にもわからない。

『ちょっと待っててな、メシア。

戻るまで良い夢を、Good night♪』

キイイ…パタン。

青年に悪夢が現れないように。

夢の入口を軋む扉を引いて、閉じた。

コンコンコン。

……ガチャ。

『お仕事中にすみません。』

「お粥を作りたいのですが、キッチンをお借りしてもよろしいでしょうか？」

『「お願いします。」』

ペコッ、頭を下げる俺達。

フリイ父は5秒ほど俺達の後頭部を無言で見つめた後、『片付けをするなら、使いなさい。』とキッチンがある方を指差した。

そちらへ顔を向けていると、

パタン。

お礼を言う前に扉を閉められてしまった。

閉められた扉へ『ありがとうございます。』声を揃えて、キッチンへ足を運んだ。

キッチンは綺麗に片付いていて、ある程度使われているようだ。

あの日に聞いた時に『食べれる程度には。』と言っていたので、使ってるのは多分メシアだろう。

手先器用そうだし。

……作れるなら、何で弁当作らないんだろ？

弁当箱でもないのかな？

茶矢から頼まれて戸棚から土鍋を取り出すついでにちょっと探してみる。

大方漁ったけどそれらしき物は無くて、土鍋だけ降ろして戸棚を閉めた。

ガサガサと米やら卵やらを袋から出す茶矢に、俺は肩をつついてみる。

『葱、切らせて?……ダメ?』

「うっ。」

……良いですよ。指がソーセイジ代わりになるのだけは気をつけて下さいね?」

『了解。』

茶矢に指示されるようにまな板と包丁を水洗いして、洗った葱を置く。

茶矢はボウルに量りで量った米を注いで、手際良くといでいく。

俺はと言えば、葱と睨み合い中。

いざ、初挑戦。

——シュン、ザクツ!

「!?!? 何故真っ二つに切るのですか!?!?」

『へ? 違うの?』

「先ずは根っこ部分を切り落として、白い部分から細く切っていくんです。」

ほら、先ずは根っこ部分を。」

スッゴイ驚いた顔で制止された。

まな板の上には人間だったら惨いであろう葱が。包丁を片手で振り下ろしたら危ないらしいです。

今日、年下に教わりました。

皆も気をつけろよ☆
そんな奴いねえか。

横では着々とお粥を作っているのに、俺は飾りに悪戦苦闘。
根っこ切ろうとしたら、爪が一緒に切れた。
ギリギリ肉は無事。

「正軌先輩は座ってて下さい！後は私が」
『大丈夫。傷つけないから、やらせて。』

……………もうすぐ帰ると思うから。』

ボソッと呟くその言葉が茶矢に届いたかはわからない。

俺はどちらでも良い。

これは俺の推測。

確証なんてない。

…だから、どちらでも良い。

誰にもどうする事も出来ないから。

茶矢が無意識に手を伸ばしているのに気づかず、試行錯誤で包
丁を動かす。

腕で汗を拭う俺の横顔で思い止まり、茶矢も続きを始めた。

「…この太いのか細いのか区別不可能な葱は何だ？」

『…飾り。無理に食べる必要はないから…うん。』

できればいっその事、捨ててやって。その方が俺も…。」

ベッドの足側の部屋の隅に膝を抱えて低く笑う俺。

茶矢がアドバイスしてくれても…俺には難しくて、土鍋を開ければ葱パラダイス。

本当にすいません。

『こんなに切んなよ、ハッ邪魔!』ってな感じで退かすなり、鳥の餌にするなりして下さい。

俺（正軌）には一生料理は作れないと、今になって自覚したから。怪我してないだけマシだという事にしておいて下さい。

出過ぎたマネをしてごめんなさい。

そんな俺を余所に、茶矢は椅子に座ってメシアと話す。

「茶矢も来たのなら起こしてくれれば良かったのに。

正は何故、隅に座る。」

「すみません、気持ち良さそうに眠ってらしたので。

お粥なら食べられるかと思いましたが。

葱は率先して正軌先輩が切って下さったのですよ。有り難く食べて下さい。」

「!」

メシアがパッと顔を上げて俺を見る。

一方の俺は自分の情けなさに落ち込んでいて、味見させてもらったお粥の美味さと比較して更にグッサリ心臓えぐられて……二人の顔が見れませんでした。

勉強やスポーツ（喧嘩）だけじゃダメだね。

正軌はおにぎりくらい作れるようになってほしい。

これ切実。

料理できる人を見習いたいです。

あ、やべ、涙出そう。

「そうか：正が、ふふ。そうか：そうかそうか。」

「ニヤニヤしないで下さい。嫌がらせで葱だけ食べちゃいますよ。はい、あーん。」

ふーふー冷ましてからメシアの口に運ぶ茶矢。

メシアはチラッと俺の方を見たが、俺は膝に顔を埋めてるだけ。自問自答中。

茶矢に急かされて、メシアは口に入れた。

卵粥は塩加減も抜群で、茶矢は良い嫁さんになれるよ。

俺が保証してやる。

メシアはゴクツと飲み込んだ後、頬を赤らめながらそっと呟いた。

「………美味しいな。」

「はいはいそうですか。葱が1番美味しいですか。

私も一口食べますよ。一人占めなんてさせません。」

「次。あー：」

「我ながら良い出来です。

はい、あーん。」

端から見れば兄妹みたいな光景に、俺は隠れて口元に笑みを浮かべた。

平穏な空間に別れを告げるように。

――16時ちよいくらいになると、茶矢はそろそろ源希達の元に戻らないと心配かけてしまう、みたいな事を言って帰り仕度をする。メシアの代わりに見送りに行き、二人で部屋を出た。

玄関で靴を履き替える茶矢を壁にもたれつきながら見つめる。顔を上げ、ジッと見つめる茶矢に気づいて壁から離れる。

前屈みで『何か言ったか?』と聞けば、聞き慣れた凜とした声で、

・

「私が寝込んでしまった時は、正軌先輩が看病して下さい。約束ですよ。」

『――え、あ、ああ。良いぞ。約束な。』

「忘れないで下さいね。」

お邪魔しました。また今度。」

キィイ……パタン。

閉じられた扉を暫く立ち尽くして見つめた後、種を返すようにメシアの部屋に戻った。

——守れるかわからない約束をしてしまった。

俺は最低な野郎だ。

中編（裏読み）

なるべく平然を装う為に、扉の前で深呼吸。

——カチャ。

「すー…すー…」

『寝てる、か。』

メシアの部屋に戻れば、メシアは眠っていた。ずっと喋っていたから疲れたのだろう。

当然と言えば、当然か。

ベッドに腰掛けるとギシツと軋んだ音がした。

ヘアゴムを起こさないように解いてやり、結んでた髪を眠る妨げにならないようにしてやる。

肩まで掛け布団を上げて、ベランダから見える夕暮れ空を見上げる。

青空とオレンジ色の空が混ざり合うのか合わないのか判別が難しい空。

人は“神秘的”だと言葉で表現するが、そんな一くくりの単語で表すのは惜しいと思う。

それは、ピッタリ当て嵌まる事のない不思議な感覚。

わからないままで良い。

そう考える、今。

鞆から書く物を取り出して、とも美のメモ用紙の裏に筆を走らせる。

書いたモノを内側に、とも美のメモを外側に折りたたみ、テーブル

ルに置かれたコップの下に置く。

これで風に飛ばされる心配はない。

水滴で濡れて捨てられたなら、それで良い。

多分それを1番に望んでると思うから。

『:See you, partner.

(じゃあな、相棒。)’

黒猫は、帰る所へ帰った。

外灯が目立つ暗い夜道、

七月なのにまだ肌寒い夜風、

濁った空気が邪魔して星を見る事が出来ない星空。

誰もいない、アスファルトで固められた道。

責め立てるように降り出した雨。

自分の姿を守る為に雨を避ける人々。

怒るように吠える近所の犬。

楽しい笑い声が響く家庭。

雨に虐められてずぶ濡れの体。

髪が顔に張り付くのは、いたぶるのを楽しめた痕。

体が冷えているのは、体温が俺から逃げ去ってしまったから。

今も尚、足が前へ進む。

行く宛てなどなく、放浪人のようにふらふらと。

「……宮古？」

嗚呼、誰かが名前を呼んだ。

それはきつと空耳。

誰かが俺に囁いた。

俺はそれを信じて、真っ直ぐ歩く事しか出来ない玩具のように町を歩き回る。

ピタ、ピタ、池から上がった河童のような音を鳴らして。

——グイッ！！

腕を引っ張られた。

ちよつと痛い。

…けど、まだ此処にいるんだ。

再確認したようで、そんな自分が可笑しくて、小さく嘲笑う。

「おい！そんなに濡れるまで外にいるなんて…お前阿呆か！！？」

誰かが怒鳴ってる。

女性だ…あれ、見た覚えがある？

苗字を知っているという事は、俺はこの人と知り合いなのだろうか？

メイクしているから、素顔見ればわかると思う。

——けど、今は一人でいたい気分…手を離してくれないかな。

女性は怒ってるみたいで、色々言ってるみたいだけど、何故か聞き取れない。

早過ぎて、わからない。

ゆっくり喋ってくれないかな。

「お前どうした！？ちゃんと由の話聞してるのかっ！！？」

『……え……？』

「……ッチィ！とにかくついて来い！！」

腕を掴む力が強まる。

そのまま引っ張られて、倒れないように歩いていたら、女性の後を追う形になってしまった。

俺は一人になりたいのに…。

それに、何で怒ってるんだろ？

俺が何かしたかな？

何処に向かって歩いてるのかな？

背負ってるのは何だろう？

こういうの…パンクファッションだっけ？派手だなあ。

傘も真っ赤で、服にあってる。

…それより、どうしたら離してくれるのдаро？

怒ってるから、謝ったら解放してくれるかな？

『……ごめんね？』

「何で疑問形なんだよ。悪いと思ってないなら謝るな。気分悪い。」

『だって、怒ってるから。俺のせいだと思うから。』
「……とりあえず、入れ。」

路地裏にある、扉の無い小さな赤い屋根の店。

靴の中までびしょ濡れの俺が入ったら迷惑ではないかと思ったんだけど、今は反発する気力も体力もなくて……引きずられるままに中に入った。

中は、広いホールがあって、沢山の人がいる。

女性と似たような格好の人ばかりだ。

人のいない場所に行きたいのに、逆に多い場所にいる不思議。

女性は受付らしい場所に行くと、顎髭の男性が女性に気づいた。

「よー、Soraiyu^{ソライユ}。」

……と、そちらのデカイ連れは？あーあービショビショじゃん。」

「健さん、由は何時も通りで！」

それと……コイツが着れそうなサイズの服とズボンない？雨の中一人でフラフラ歩いてるの見つけてさ。」

「連れさん変わってんな。んー……俺のだと小っさいだろ。」

お、いーとこにいた。おーい！サングル！！」

何か話してる。

顎髭の男性が俺を見て、誰か呼んだ。

女性の手はずっと腕から離れない。

解放してくれたら、一人で帰れるのに。

……それより、どういう名前なんだろう？

会話からして、“ソライユ”って名前だろう。

この女性は外国人なのか。

考え事をしていると、数人の男性がこっちに歩いてきた。
メイクが凄い。

けど、全員俺より背が低い。

一人だけ、俺と大差ない人がいるけど。

ちょっと優越感。

「よーSoraiyu。ラストよろしくな。…連れどうした？傘忘れたのか？」

で、田中さん俺に用事？」

「こんばんはシングルさん！よろしくお願いします！」

「ちつとな訳ありで、お前の予備の服とズボン、Soraiyuの連れに貸してやってほしいんだ。ダメか？」

「田中さんの頼みとあっちゃ、断れねえよ。」

連れさん、名前は？」

…連れさん、って俺の事か？

『…宮古です。』

「んじゃ、宮古をちょっと借りてくよ。受付に連れて来るから、それまで待ってな。」

ついて来い、宮古。」

『はい。』

女性の手が離れて、やっと解放された。

けど、行かなくてはならないようだから帰れなかった。

男性が色々話し掛けてくるのを適当に返して、着いた先は「控室」と札が貼られた扉の前。

促されるように入り、他の人から注目を受ける中、ある一つの口

ツカーの前で止まるサングルさん。

年上なので一応“さん”付け。

呼び捨てで良いなら呼び捨てにする。

「ほら、まずは服脱げ。」

『……セクハラ？』

「ブハッ！ 違えよ！！」

「着替えるには服脱がねえと着替えられねえだろ！」

「ヒヤハハハ！ お前最高！ クククツ、やべえツボった……ククク……」

「サングルがセクハラだってさ！ このネタ使えるぜ！」

「ダアホー！ うるせえ！！」

とにかく下着以外脱げ！」

『わかりました。』

バツ。

濡れているから中々脱ぎにくい。

服を脱いだら、水がボタボタ床に水溜まりを作る。

髪からも背中をつたってズボンに当たる。

……何かやけに視線を感じるのは気のせいではないと思う。

部屋にいる人達から集中的に見られてる。

横に立っていたベースの羽留ウルキ氣さんが背中に触れた。

「宮古デカイくせに意外と細いなあ。俺の方が体重あるかも。」

「手首なら勝てそう。」

「体力勝負なら、ヒロト様が勝つな！」

「青年！ これ使って良いぞ！」

『…ありがとうございます。』

知らない人にタオルを投げられてキャッチした。

お礼と一緒に頭を下げて、もそもそ頭を拭く。

前屈みでちんたらやってたら、ガシッ！と頭を掴まれた。

しかも手の数からして数人が。

小さく笑う声が上がらする。

「チンタラやってんなら、俺達がやってやるぜえ！！ウオオオ！！！！」

「勇也と俺は体拭いてやるぞおお！！！！」

ガシガシガシガシ！！

『痛い！痛いです！！いたたたた！！！！』

「「「ギャハハハ！！もつとやってやれ！！クロウ！！」」」

『や、もう、本当、自分で出来ますから！

ちよ、ズボンはトイレで着替えますから！！勘弁して下さい！！』

「「「ヤダ。」」」

「「ハハハハハハハハ！！こりゃ、やる前から一気に和んだわ！！！！」」

散々やられ、散々笑われ、散々セクハラさせた後、漸く止めてもらえた。

結局、ズボンまで替えさせられた。

パンツは死守したけど。

半端なく精神的ダメージが大きい。

四人にお礼を述べて、地獄から受付に逃げようとした俺は…また別の男性に捕まって、無理矢理鏡の前の椅子に座らされられたと思えば、ドライヤーしてくれた。

鏡の前では黒をベースにした、テレビで歌う人が着てそうなパン

クの長い服とズボンを履いている。

ボーっとドライヤーしてもらってたらクルッと椅子を回され、靴と靴下をまた知らない人に脱がされた。

驚きすぎて啞然とその人を見ていたら、靴乾燥機に靴を入れてニコツと笑んだ。

「ドライヤー終わるまでに、これで乾かしてやるよ。」

「もう終わったよ。ププ、ダッセェー。」

「マジかよ!？」

…ま、良いや。青年、最後までいるだろ?それまで貸しといてやるよ。」

『え、最後って…』

「次のチーム、急げよー。」

「あ!俺達じゃね!？」

じゃ、終わったらまた控室に来てよ!良かったら聞いてくれよな!

「青年、また後でね♪」

『あ…ありがとうございました!』

「「どいたま!」」

ボタン!

ドライヤーの人と靴乾燥機の人は何かを持って、急いで部屋を飛び出した。

俺はポカーンとしていて、二人と入れ代わりで入った汗だくの人達が近づいてきた。

サングルさんって人も来て、色々話し掛けられた。

楽しそうに笑顔で話す人達なのだが、俺は人の多さに若干ビビってる。

ヒロトさんって人にサンダルを貸してもらって、部屋の人達に別

れの挨拶をしてから受付に戻った。

——受付では、怒ってる女性が待っていた。

俺の姿を見るなり、一瞬目を見開かせた後、『ヒュー♪』と口笛を吹いた。

受付の男性も『ほお、見違えたな。』と顎髭を触ってる。

…やはり似合わないだろうか？

こんな服着たの初めてだから、違和感ある。

「宮古、似合っ……てんじゃね？ふん、由は知らねえけど。サندانさん達ありがとう！助かった！」

「困った時はお互い様だ。それに、宮古人気者だったぞ。全身全霊をかけて、皆で可愛がってたら遅くなっちまった。」

「待たせて悪かったな。Sora I y u。」

「けど、演奏前に癒された！って皆喜んでたぞ。」

サンダルさん達の言葉の後に、女性は俺に顔を向けたので頷く。皆、良い人達だった。

度が過ぎてるトコもあったけど、少年のように笑う顔に偽りは無かった。

いっぱい優しくしてくれたし、感謝しても足りないくらいだ。

田中さんって呼ばれる顎髭の男性は、ニヤツと笑みを浮かべて四人に言った。

「ほお、そりゃ良い事だ。お前らも良い演奏してくれよ？」

「」「モチ！宮古も良かったら聞いてくれよな！」「」

『あ…ありがとうございます。』

「…可愛い奴め！」

「ほれ、くらえ！」

「何があったかは聞かねえが、しっかりしろよ！」

「じゃ、またな。」

頭をグリグリ撫でられ、背中を叩かれ、肩にポンと手を置かれて、全員が手を振って歩いて行った。

頭を下げて、小さく振り返す。

ジッ・

横にいる女性の視線に気づいて、グシャグシャになった髪を手櫛で直しながら首を傾げる。

…俺、本当にこの人と会った事あるっけ？

初対面なんだけど、初対面じゃない気がする。

不思議な感じ。

「…宮古、」

『はい？』

「……………どうして雨の中、傘ささねえで歩いてたんだ？ 答えろ。」

『えと…その前に、名前を聞いて良いですか？』

できれば、何処で会ったのかも。すみません。』

「！！？」

申し訳なさそうに（いや実際俺だけ知らないのは失礼なのだが）後頭部に手を当て、顔を伏せる。

女性は眉間に皺を寄せていた目つきが悪い瞳を、俺の言葉で目を

見開かせ言葉を失ったように半口を開けていた。

田中さんもビックリした顔で俺を見てる。

……いや、本当すみません。

名前を教えて下されば、思い出すかもしれないので。

俺ものこのこついてしまったのは、冷静に考えてダメだったと思う。

さっきまでは、ただ一人になれる場所を探してさ迷ってて、成すがまま状態だったから……すみません。

女性は唇をわなわな震わせ、人差し指で俺を指す。

「…宮古…それは、冗談かあ？ お前が敬語とか、気持ち悪いぞ……ハハハ。」

『……すみません。』

「何で謝るんだよ！」

お前はもっと明るくて、飄々としてどこか掴めなくて、喧嘩強くて、何時も由をおちよくって、それでも…休み時間には毎回来てくれて、帰る時には『またね。』って言って手を振って…グスッ……」

『…俺は、』

（正軌、ゴメン。）

——キイイン…ドクンッ！ドクン！！

『?! あ…、頭が…割れる……!!』

胸倉を掴んでいた女性の目の前で、ピロの言葉を最後に耳鳴りと頭に激痛が走った。

今まで感じた事がないくらいの痛みに、頭を抱えて立て膝を床に

着く。

女性は手を離して、俺は後ろにあった柱に頭を押し付けて、痛み
に悪あがきする。

痛みがひく事などないのに。

俺は痛みの中、あるモノを見た。

『…何、だ…コレは……!?!?』

「宮古！オイ！大丈夫か!?!」

「先ずは静かな場所に移動させろ!」

脳内で、走馬灯のようにムービーがカシャカシャと映し出される。
古ぼけたモノではなく、新しくカラフルなスクリーンの映像。

何時もと変わらない日常。

変なのは、俺の声がやけに空元気な事で。

何時ものメンバーが揃ってて、修学旅行の話をしてて、吉田が来
て『中馬』って人に勉強教える為に毎回屋上行って、そこで……あ
れ？

目の前の女性とぼそっくりだ。

薄化粧してるかしてないか、の違い。

喧嘩っ早いけど、俺は簡単に避けて、次の休み時間にも殆ど自分
から攻撃しなくて。

だんだん行ってるうちに“由君”って女性は懐いていき、喜ぶ自
分自身。

源希と俺の事で喧嘩して、何度か体調悪くなって、屋上で水鉄砲
大会して、勉強会して、今日メシアが風邪ひいてて……

ガッ！

震える体。

瞳からは涙が流れ、カタカタと歯が鳴っている。

俺の急変に、二人の方が驚いてるみたいだ。

女性が肩を痛いくらい強く握り、俺の体はビクッ！と跳ね上がる。

痛い…怖い…今の映像、ピロの時の…？

目の前の女性は…

『…由…君…？』

「……！」

「あ、青年っ……！」

ドサアッ……！！

目の前が真っ暗になり、俺は床に倒れ込んだ。

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえたけど…痛みを受け入れる為に、目を閉じた。

中編（裏読み）

世界に引き込もってた俺は、扉に鍵をかけて小さく疼くまっつた。

外からはサラと少女が扉を叩いて何か言ってるけど、知らんぷり。耳を塞いで、目をキツク閉じて、何もかも遮断した。一人になる為に・・・

——この世界に時間がない。

食欲も、眠る事も、痛みも、感じる事がない。

それは人間では有り得ない事で、またそれに憂鬱になってたり。いや……もう、考えるのは止めよう。

何も思わない、

何も感じない、

何も考えない、

“俺は人間じゃない。”

そう信じれば、自分自身を保っていられる……

――ザアアアア……

…外に出たのは、何日ぶりか。

曇天の下、電柱にもたれ掛かって雨を見上げてる俺。
肩には鞆。

何処かに出かけていたようだ。

電柱に懷いてる体を立ち上がらせ、慣れない体が倒れないように
前へ歩いた。

ピンポン…。

ガチャ…。

「はいはい。

…んー？誰もいない。あ、コレ兄貴のじゃん。」

ドアの前に置かれた鞆。

源希は鞆の上に置かれた紙を拾い、それを読む。

「散歩してくる。晩御飯は食べたから。

帰りは遅くなると思う。気にしないで先に寝て。
正軌。

……正軌!!? 母さん! 親父! 兄貴戻った!」

鞆と置き手紙を握りしめ、喜びに胸をいっぱいさせ源希はリビングへと走った。

何時帰るのかわからないのに。
だから爪が甘いのだ・・・

目の前で眉間に深く皺を寄せて、緊急用のベッドがある部屋で眠る宮古。

…あの時、健さんに運んでもらって良かった。
目の前で倒れた時には、頭の中真っ白で、どうすれば良いのかわからなかったから。

冷静な人がいて、他の人達に迷惑かからないで、騒ぎにならないで……

でも、最後に言った一言。

『……由……君……?』

初対面の奴に確かめるように、痛みに震えながらやっと絞り出した声で……名前を呼んだ。

名前を思い出しただけでどうって事ないけど、あの瞬間由は確かに、

「……………嬉しかった。」

たった名前を呼ばただけなのに、宮古が思い出しただけなのに、この胸は、ぽう、と温かくなったのだ。

何だ? この気持ち……。

痛くて、

切なくて、

寂しくて、

悲しくて、

ムカついて、

苛々して、

それでも嬉しくて……苦しい。

何かもうごちゃまぜだ。

意味不明。

消えてしまえと思うけど、大切にしたい。

この胸にあるモノは、きっと失った後の方が辛い。

“あの日”よりも……絶対に。

ガチャ・・・

「Sorry、出番だ。皆が待ってる。」

「…ねえ、健さん。」

この人なら、きっとこの胸の違和感の名前を知っていると思う。
健さんは由の事を何でもお見通しだもん。

ポタッ ポタポタッ

「教えてくれ。」

こんなにも胸が痛いのは……病気かな？」

「…さあな。」

頬を流れる涙が、その答え。

額を抑えてそのままベッドに戻る事になる。

『何だ？どうした？』とワイワイガヤガヤ声をあげる。

痛みに我慢して起き上がると……狭い部屋に様々な人が。

何だこの人口密度。

夏の夜は涼しいってのに、此処だけ蒸し暑い。

知らない人が増えてるし。

ケバい女性が増えた。

…何だ何だこの人ばかりは？

さっき控室で会った人達もいるけど、この囲まれてる感は恐怖でしかない。

——逃げよう。

それしかない。

のそのそと逃げようとすれば、

ガシッ！！！！

足首掴まれた。

今度は俺が顎打った。

そー…と振り返れば、あの女性が顎を赤くして物凄い形相で足首からふくらはぎへと掴む部分を変えていた。

怒ってるらしく、ギリギリ足を握り潰してしまいうさだ。

俺の左足の人生は此处で決まるのか？そんなもん死んでもごめんだ。

何とか逃げ去る方法を考えていると、女性がベッドに上ってきた。しかも土足で。

流石にそれはダメだと思い体を戻すと、

——ヒュンッ！パッシーンッ！！

女性の頭を田中さんが平手打ち。

俺は後ろから手を引かれて、周りが田中さんと女性に注目している内にそのままついて行った。

「くくくってえなあ！！健さん！！いきなり何しやがんだ！顎髭え！！」

「お前が土足でベッドを汚すからだろうに。クソガキが。洗えよ。」

「あー、青年がいねえ。」

「本当だ！何処に消えた！？」

「ベッド下にはいねえぞ！」

「青年ならさっき瑠璃君が連れてったぞ？何かあったのか？」

「瑠璃があ！！！？」

医療室では田中さんと由君の声が轟いた。

子供に引かれるがままにロビーを抜け出、近くの公園に着いていた。

子供は息切れしていて、俺は周りを見渡す。

俺の知らない場所。

こんな場所まで歩いてしまったのか・・・置き手紙したし、家は大丈夫か。

携帯電話：は、ある。

財布はない。

きつと鞆に入れたままだったのだろう。

服は借りたまま。

：何時まで寝てたんだろ。

それより、何時からあそこに居たのかさえわからない。

クリーニングして返さないと。

体がまだけ怠い。

けど、走ろうと思えば走れる。

頭痛はまだ微かにする。

そういえば、何故あの場所に密集していたのだろうか？

何かの集まりの邪魔だったのなら悪い事をしてしまったな・・・
戻ったら謝るか。

冷静にすべき事と現状確認をしていると、子供が振り返る。

黒髪の短髪で、やはり凄い格好をしている。

女物の服だから、女の子だろうか。

顔は小さくて、目が大きいし。

素直に可愛いと思う。

「アハッ！疲れたぁー！」

『：君は誰だ？控室では見かけなかったけど。

俺は宮古。』

「俺は瑠璃^{ルリ}。小3。

下の名前は？」

『：正軌だ。苗字は？』

「田中。受付の髭オッサンの子供だよ。」

声が高いが口調は男みたいだ。

最近こういう子供が増えてるよなあ。

小3なら仕方ないにしても、敬語くらい覚えろよ。
将来絶対使うから今のうち覚えた方がきっと良い。

クシヤリと茶矢より小さい背丈の頭を撫でる。

『年上に対しては敬語で話するのが礼儀だぞ。今のうちに覚えた方が
将来役立つ。』

ま、俺は気にしないからタメ口で良いぞ。』

「……。」

ま、正軌って由と同級生なのか!？」

『ああ。今は勉強を教えている(らしい)。

もう1時だが…眠くないのか?』

「俺は平気だよ! 正軌こそ、大丈夫なのか?」

『大丈夫だ。昔はよく散歩していたからな。慣れたよ。

心配してくれてありがとう、瑠璃。』

ふっと微笑めば、瑠璃は照れ臭そうに顔を背けた。

『べ、別に心配なんか…』と何やらゴニョゴニョ呟いている。

小3かぁ…若いな。

まだ高校三年なのに老けた気がする。

…俺も年かな? ちょっと悲しい。

ベンチに座って話していれば、頭の住民が衝撃の一言。

（正軌・・・）

何だよ？

あ、代わりに学校行ったりしてくれてありがとうな。
ノートとか出席日数とか色々助かった。

（どいたま。

……それより、そいつの事だけど。）

子供がこんな時間にいると危険だよな。

俺、不審者に見えるかも。

小学生連れて公園で会話してるってさ。

（…そいつ“男”だよ。女装してるけど。）

…………マジ…？

最近の子供って女装するのか。

9年くらい先に生まれて良かったよ。

うん、良かった良かった。

（俺からは動揺してるの丸わかりだから。まずは深呼吸しとけ。）

……そうだよな、女装癖の子供だってそこら辺にゴロゴロしてる
よな。

普通だ普通。

……アレ？俺が変なのか？

普通、女装するものなのか？

（だから落ち着け。

それと、お前は普通だから安心しろ。」

……そうか。

けど、違和感ないよな。

小学生三年ならまだ男女の大差ないし、

『凄いな、似合ってる。』

「へ？何の話？」

『あ、瑠璃って男だったんだな。

……また、やっちまった。』

「何でわかったの?!」

ピロと話していると独り言している奴みたいに見える。

この癖直さねえと、そのまま一人でブツブツ喋りそうで嫌だ。

(……ま、頑張れ!)

…お前と会話するの、今日限りで止めれば良い話か。

それより、なんて説明すれば瑠璃は納得するか考えろ。

超キラキラした目で見られてるんだけど。

俺はどう対処すれば穏便に事を済ませられ、

——ガゴッ!! ドガッ!!

『!?!?』

「痛っ!!」

くく何すんだよ! 由と健!」

「年上には敬語使えつつってんだよ! クソガキがあ!!」

「実の父親呼び捨てにするな。小学生の分際で宮古を誘拐すんな、バカ息子。」

「あ！聞いてよ！

初対面の正軌が、俺の性別言い当てた！こんな事初めてだよ！」

「……まさかぁ。」

『じゃ、俺は帰ります。おやすみなさい。』

ガシッ！ガバッ！ぼん。

「待て不審者。」

「何で帰るんだよ！」

「まだ靴と靴下が残ってるぞ。」

『……そろそろ帰らないと、本当にヤバイんですけど。

こちら辺の地図詳しくないですし。』

「「とにかく戻れ。」」

……俺はとんでもない場所に迷い込んでしまったようだ。

連行されるままに、またあの場所へと戻ってしまった俺は弱いのだろうか……ハア。

………全速力でダッシュすれば、帰れるかな？

（無理だろ。）

寝たフリすれば…悪戯されまくるな。

トイレに行くフリして帰るのは…

（他の人達も一緒に行く可能性あるな。）

…だよな。

携帯電話でSOSは出来ないし、ただ黙ってるのが得策か。

——今、何故か赤い屋根の場所の隣の居酒屋に連れて来られた。
抵抗はした。

未成年で酒が飲めないのも主張した。

居酒屋に入るのは社会人になってから、と嘘まで吐いた。

小学生が入るのは親としてダメだろ、と田中さんに注意までした。

両足で踏ん張って、両手で入口を掴んで離さなかった。

力では勝てる確証はあった。

……けど、

（耳弱いんだな。初めて知ったぞ（笑））

（笑）って口で言うな。

自分自身が1番驚いたわ。

ビククリして手離しちまったよ！！クソウ！

「ま、ま、ウチで歌ってるバンドが経営してるから心配するな。：それと警戒すんなよ。耳ふーは悪かったって。」

『田中さんの半径1M以内に近づかない事にしたので、コレ以上近寄らないで下さい。後、俺財布持ってきてないのでいただけません。』

「俺も持ってきてないけど食べてるぞ？正軌も食え！」

『せめて“食べろ”だろ。』

瑠璃は父親がいるから問題ないけど、俺はそういう訳にもいかないんだ。』

「由も食べてるぞ。」

『オイコラ未成年。酒飲むなタバコ吸うな。それも小学生の前で。親の田中さんも注意しろよ。』

「別にコイツの人生だし、好きに生きれば良いんだよ。瑠璃は女装して悪戯さえしなけりゃ俺は構わない。」

ピクツと眉が動いたのがわかる。

だんだん怒りに震えるのも。

：何が無責任な事を吐かしてるんだこの親は。

子供は親を見て、善悪の判別をつけるんだ。

他人じゃなく、親で。

目の前で未成年タバコ吸えば『吸っても良いんだ。』と勘違いする。

酒もそうだ。

そもそも、子供をこんな時間まで起こしているのもどうかしてる。

深夜徘徊で捕まったらどうするんだ。

一度警察官にお灸をすえてもらった方が学習するかもしれない。

俺も人の事は言えないけど。

それより、子供の目の前で酒を飲んだりタバコを吸う事事態が許せない。

子供を癌^{ガン}で殺したいのか？この親は。

そうだとしか考えられない。

俺はハンカチで呼吸器官を何とかカバーして、終わるのを待つ。
横に座る瑠璃が裾を引っ張った。

「どうした正軌？具合でも悪いのか？」

『……タバコの煙は、吸わなくても周りに害を与える。最終的には癌になって死亡してしまう確率が一番高い。酒は肝臓を切り取らないとなくなる病気、肝臓癌とかになる可能性が高い。』

：瑠璃は決してタバコは吸うなよ。酒は二十歳になってから程々に。もし目の前で親がタバコ吸ってたら腹蹴りして「子供の前で吸うんじゃない、バカ親が。」とでも怒鳴りつけてやれ。俺が許可する。』

「正軌の家はしてないのか？」

『ああ、酒は滅多に飲まないし、飲む時は俺達が眠った深夜だけだ。両親はタバコを吸った事ない。』

二人共、尊敬できる親だ。』

「ふーん、そっかあ。」

もくもくと焼鳥を頬張る瑠璃。

俺は角に座ってるから、視界に入りにくい。

斜め前に座る由君は、もう潰れて眠ってる。

：俺も欠伸が零れた。

瑠璃は何時の間にやら熟睡してる。

目の前に座る田中さんはビールを一人で飲んでいた。

俺の視線に気づくと、コップを机に置いてタバコに火を燈す。

「最低な親だ、って思ってたんだろ？」

『はい。子供の目の前で飲酒や喫煙するのはどうかと思います。癌で殺したいのですか？』

「ハッキリ言うねえ。宮古の両親はしないらしいな。」

『…瑠璃との会話、聞こえてましたか。』

それより、そろそろ限界なので帰らせてもらっても宜しいですか？』

「ま、また今度ゆっくり話そうや。」

ついでにこの小娘を家まで送ってくれねえか？」

『住所を知らないのですが…』

「なあに、問題ない。コイツが教えてくれるさ。」

田中さんが由君の額をコツンと小突いた。

…それより、靴とか返して下さい。

―…で、由君を背負って、靴とか返してもらって、皆さんにお別れして、由君が案内するままに歩いて…到着。

赤茶色の小さなマンション。

一人暮らしをしているらしい。

鍵を渡されて、ガチャとドアを開ける。

『お邪魔します。』『どうぞ』というやり取りをして、中に進んで行く。

リビングを通り抜け、寝室の扉を開ける。

色々紙やら鞆やら服がゴチャついていて、女の部屋かと疑った。楽器を適当な場所に立てかけ、由君をベッドに下ろす。

ベッドのある物を見た時に顔が赤くなり、一刻も早く家に帰ろうとすると死にそうな声で、

「水くれえ…」

…酒なんか飲むからだ。

見捨ててやろうかと思ったが、午後から勉強を教える事を思い出してため息混じりに部屋を出た。

冷蔵庫を開ければほとんど何も入っておらず、ちゃんと食事をとっているのか不信になりながらも水が入ったペットボトルを一本取り出した。

『はい、水。酒は二十歳になってから飲め。』

…じゃあ、午後から忘れるなよ。』

パシッ！

「待って…」

腕を掴まれ、引き留められた。

由君は片腕で顔を隠している。

酒のせいかな、頬が赤い。

俺的には早急に家に帰って寝たいのだが。

俺だって色々あって疲れているのだ。

由君はもともと床やテーブル、ベッドに散らばる紙をかき集め、俺に差し出した。

紙は楽譜のようで、音符と歌詞が書かれている。

右上に小さく書かれた番号の順番がバラバラだけど。

「これ…前に好きだ、って言った音楽の歌詞。i P O Oに入れるなら、曲にしてからの方が良いと思って。」

頭を抑えて楽譜に指差す由君。

……オイ、ピロ。

引き出しに入れたままのi P O O、勝手に使ったな。

誕生日プレゼントだったけど、音楽に興味ないから大切に保管してたのに。

（それは悪かった！

お願いだから、代わって！直接見たい！頼む！）

……ハア、仕方ねえな。

ちよっと待ってろ。

由君の横に腰掛け、目を閉じる。

——キイイ：ドクンッ！

耳鳴りと大きく鳴る心臓の音。

だんだん世界から遠ざかる感覚。

入れ代わる時の痛みにも、大分慣れてきた。

俺は意識を手放した・・・

・・・
ぼす。

由の肩に頭を乗せる正軌。

由はビクウツ！と硬直。

気を紛らわす為に、水を飲む。

『…っと、完了。』

さてさて拝見しますかな♪』

「…一気に明るくなったな。宮古。」

『そっかな？って、順番バラバラじゃん。しょうがないなー由君は。』

ピロが起き上がれると、自然と失くなる肩の温度。

それに少しの寂しさを覚えて、けど肩と腕が触れ合う部分があっ

たかいので由は動かない。

ピロはぶつくさ文句を言った割には、鼻歌を歌いながら並び替える。

そんな横顔を盗み見る。

―スッ、歌詞に目を走らせる瞬間、ピロの表情が一変したのを、由は見逃さない。

真面目な表情で楽譜をめくるピロに内心ドキドキしながらも、目を離す事が出来ない。

心臓の音がバレないか、

肩が当たってて迷惑じゃないだろうか、

歌詞はどうだったのだろう、

もし気に入らなかったら書き直さなきゃ、

ああもう落ち着かない!!

早く静まれこの鼓動っ！

『―プッ、ククク…』

「ハ？」

突然吹き出したピロに何とも間抜けな声を出す由。

ピロは楽譜に顔を埋め、喉を鳴らして肩を震わせた。

由は何がなんだかわからず、ただ横の人を見つめるばかり。

目に涙を浮かべるまで笑った後、やっと由君を見た。

人差し指を指して、楽譜で口元を隠す。

『俺の横顔ジッとガン見して、真っ赤にしながら百面相するんだもん。可笑しくて可笑しくて、ククッ、全部見終わっても気づかないし暫く楽しませてもらったよ。』

「……っ、な…!？」

『歌詞、素敵だったよ。バットエンドだったけど、俺は好き。見せてくれてありがとね由君♪』

ぽんっ。

「……ふん、素人に言われても嬉しくねえよ。由に触るな。頭撫でるな。」

『ふふん♪お礼だよ。』

唇を尖らせてそっぽ向く由。

口では悪態をつくが、ピロの手を払う力は全く入っていない。それにニヤニヤしながら撫で回すピロ。

スクツと立ち上がり、由に楽譜を渡す。

窓からは朝日が昇る前の薄く青い世界が見える。

荷物を片手に、ヒラヒラと手を左右に振る。

『そろそろ帰らないと。午後からちゃんと来ないと、俺だって怒るからね?』

「……あ、明日! 完成させたの持っていくから!」

『うん、ありがとう由君。』

んじゃ、またね。おやすみ。』

「……おやすみ……。」

パタン。

閉じられた扉。

聞こえる玄関の音。

一人、渡された楽譜を抱きしめた。

…わからないこの気持ち。

真剣な表情に顔が熱くなった。

笑いかけられただけで、胸がドキドキする。

撫でる大きな手が、心地良かった。

いなくなった部屋が…広く感じた。

初めて感じた気持ち。

名前はまだ見つからない。

「……よし、さっさと曲完成させよ。」

喜ぶ顔が見たくて、

褒めてほしくて、

頭を撫でてほしくて、

…本人には絶対言わないけど。

言ったらさっきみたいに馬鹿にされるから。

彼女はベッドから立ち上がり、寝室を後にした。

明日の事を想像すると…もう、寂しくはなかった。

中編（裏読み）

ピロがテクテクと迷いなく歩くのを見守りながらボーっとしてる
と…

（…着いた。）

『サッスガ俺様。勘で歩いてたら帰れちゃった。』

（嘘つけ、道を記憶してたんだろ。）

『バレちった？』

ま、とりあえずさっさと部屋に戻るか。』

家族が起きないように自室に入り、服をハンガーに掛けて寝間着
に着替えてから眠った。

…多分、とも美が起こすまでの短い時間だけど。
寝ないよりかはマシだと思うし。

ベッドに入って数えないままに、熟睡した。

――ピンポーン…

午後、昼過ぎ。

チャイムが鳴り、扉を開けると……俺にとっては久しぶりの顔が。

『メシア…?』

「……正軌、か? ちょっと来てくれ。」

『嫌だ、聞きたくない!』

離してくれ…頼むから…』

あの日の出来事を思い出して、体が引けてしまう。

手を掴むメシアの顔は酷く傷ついたように歪み、ピロが頭の中で何か言ってるけど、記憶が物語るけど、俺にはもう沢山で…

『止めてくれ…もう、何も考えない事にしたのに…何も感じなければ…』

「正軌! 話を聞いてくれ!

正…ピロにもちゃんと謝罪した!」

『!?!?』

…何…で…ピロの、事……』

「あ、いらっしやい! メシア。

…二人共どうしたの?」

―パシィッ!

源希が現れた時に、メシアの手を振り解いて自室に逃げる為に階段を上がる。

…だが、階段でも捕まったしまう。

無理矢理にでも離させようとする、メシアが怪我をしてしまう。下には源希が見上げていて、二次災害は免れない。

メシアは必死な顔で俺を見ていて、俺はもういっぱいいいいで…まともに見る事は無理。

掴まれている部分が汗をかく。

片手でクシャ…と髪を鷲掴みにし、泣きそうな声でメシアに告げた。

『頼むから、俺を振り回さないでほしい……ピロと代わってる時に、仲良く会話してくれ…』

「正軌、話だけでも…」

『…悪い。今はそつとしてほしい…』

スッ…

降ろされた手をそのままに、ゆっくり階段を上がる。

パタン…、静かに扉を閉め、部屋に閉じ籠った。

扉に背を預けて、体育座りをする。

（本当に、メシアは謝りたいだけだよ…正軌。）

『そんな事…嫌ってほど、知っている。

もう、何も考えないと決めたのに…俺は弱い…っ！』

歯をギリッと噛み締めて、肩を目一杯抱きしめた。

階段には掌を悲しげに見つめるメシアと、そんな二人を見守る源希が残された。

二人はただ、静かに時間が過ぎるのを待つしかない己の力の無さに……自分を恨む事しかできなかった。

ピンポーン…

「あ、はい。」

源希は階段を下りて、玄関の扉を開ける。

何時もの一年、Sが家に入る。

茶矢が玄関に置かれている靴に気づいた。

「メシア先輩、もう来られたのですか。

お邪魔します。」

「う、うん。今は上にいる。」

「何時も早いよ、ね。よく、正軌先輩と一緒にいる所…見かけるし。お邪魔します…。」

「変に疑っちゃうわよ。

お邪魔します。」

玄関からは、階段の上は見えない。

それが幸をそうして、メシアを見えなくした。

源希は家を設計した人に感謝して、一年生をリビングへと促した。今はそっとしておこう、そう心に決めて。

――2時過ぎ。

再びチャイムが鳴り、源希は慌てて玄関へと駆ける。

メシアはまだ一階に下りて来ない。

きつと扉の前で立っているだけだろう。

扉が開くまで…ずっと、待ち続ける。

「何はともあれ、仲直りしてほしいなあ…ハア。
はーい、どちら様？」

「よう、宮古弟。」

仲直りしてほしい、って誰か喧嘩したのか？」

由が片手を上げて挨拶する。

源希は口を抑えて、『しまった！』という顔をした。

由は朝とは違う、短パン、ミニTシャツ、パーカーとラフな姿。
ヘアゴムを使って、後ろの真ん中あたりで小さく縛っている。

急いで来たのか、額から汗が流れている。

「いやあ、寝坊しちまってさあ。急いでチャリ走らせたから汗だくだわ。あ、自転車置場っぽい所に置かせてもらったよ。
お邪魔します。」

ズカズカと遠慮なく上がり、階段を上ろうとする由の服を引っ張った。

体がグラついたが、手摺りを利用してセーフ。

振り向いて怒鳴り付けようとする前に、源希が遮る。

「今、二人が気まずいからさ：由ちゃんは普通にしててくれないかな？ 難しいと思うけど、お願い！」

目の前で両手を合わせ、頭を下げて由に頼む源希。

由は突然の事に『ハア？』と声をあげた後、源希の思いが通じたのかトントンと再び正軌の部屋に向かう。

「ま、テキトーにやつとくわ。宮古弟も勉強頑張れよ。」

「ありがとう！ 由ちゃん！」

「どいたま。」

どいたまⅡどういたしまして、の略称はあそこで流行っているのだろうか：それは私にもわからない。

源希はスキップしそうになるのを堪えて、リビングに戻って行った。

——タンタンタンタン、トンッ。

最後の段をジャンプして着地して、前を見れば：正軌の部屋の前でドアにもたれ掛かるメシアの姿。

由の存在に気づいたのか、顔を上げて由を見る。

目の前にパーカーのポケットに両手突っ込んで仁王立ちする由。メシアの表情は痛々しく、由は源希の言葉の意味を理解する。

『チッ!』と舌打ちして、足でメシアを退かす。

「ほらほら、邪魔だよ。

由は勉強しに来たんだ。赤点とったら修学旅行行けないだろ。グダグダしてつと、首の骨へし折つぞ。」

「今は、そっとしておいてくれと。」

「由は言われてねえから関係ない。あっちから約束したんだ。ほら、早く退け。」

立ち上がるメシアを横に動かすと、ドアノブを下に押して扉を開ける。

カチャ、簡単に開く拍子抜けした由であったが、部屋の主を瞳に映すと微かに頬を赤らめた。

正軌は勉強机に向かつて眼鏡をかけて勉強していた。

椅子を回して由達の方に向き合い、立ち上がる。

『遅かったな由君。さっさと始めるぞ。』

メシアもそんな場所に座ってるなら、部屋に入って自分の勉強をしる。：静かにしているなら、良い。』

「：色々あって遅れた。

め、眼鏡なんてかけるんだな。」

「……わかった。」

『授業中はかけているが、日常生活に支障ないからな。前は何処までやった?』

テーブルを囲むように三人座る。

今日は、メシアと正軌の間に距離が置かれている。

：普段なら、メシアからもたれ掛かったり、話し掛けたり、雑談とかをしたりするのに、今は無言でテスト勉強をしている。

時々、様子を伺うように正軌を盗み見をするが、正軌は由に出題

されそうな範囲を教える。

赤点を採らなければ良いのだから、40～50点分の範囲を。

しかも覚えやすいヶ所を厳選して。

ピロとはまた違ったやり方に、由は驚いたり感心したりして正軌の指導に従った。

流石は教えるのが上手いと言われただけはある。

大体由が理解したところで『後は復習する事。家でわからないヶ所があれば、電話して必ず聞く事。』と次の教科に進もうとした時、由が小さく拳手をする。

「えと、アドレスも電話番号も交換してないんだけど。」

『…そうなのか?』

(実は、してないんです。俺様シャイド)

『なら丁度良い機会だ。交換しておくか。』

「お、おう。」

立ち上がる際にテーブルに手を着くと、

コッソ。

メシアと手が触れてしまった。

ビクッ!と肩を跳ね上がらせた正軌だったが、スツと自然に手を離し『すまない…』小さく謝った。

メシアは俯き『大丈夫だ。』と消え入りそうな声で呟いた。

…気まずい空間。

由は源希を恨みつつあった。

しかし、アドレス交換できるとあっては、この部屋の空気もそんなに気にならない。

女は強い。

男二人は弱い。

しつかりやれ日本男子、外国男子も負けるなよ。

…と、まあ携帯電話を取り出したが、赤外線受信は知っているが送信がまだわからない正軌。

最初から和葉以外のアドレスと電話番号が入っていた為、正軌からメールして全員に教えた。

和葉は赤外線受信して、メールに電話番号を載せて送信して完了。

…しかし、今回は相手方が受信スタンバイ。

送らねばならぬのだ。

携帯電話を弄りながらやり方を探すか、？が頭を飛び交う。

由も正軌から来ないので、どうしたのかわからず首を傾げる。

ピロは逃げた。

困ってる正軌に、スッと手が差し出された。

「…やってやろうか？」

救世主、メシア。

前なら素直に頼むのだが、今はそうもいかない。

『いや、大丈夫だ…』口を開く前に、携帯電話が勝手にメシアの手に移動した。

驚愕の異常現象に、携帯電話を凝視する三人。

犯人は勿論、三人以外に部屋にいる人物。

今頃知らん顔でふわふわしているに違いない。

ハッ！と1番に我に戻ったメシアは、カチカチと携帯を弄って赤

外線送信。

受信して、無事交換終了。

『メシアよく知ってるなお前』とか思った貴方…気にしたらダメです。

ダメですよ？めっ！ですからね。

メシアから携帯電話を渡されて『悪い、ありがとう…。』と罰が悪そうに受け取る。

正軌の反応に下唇をキュッと噛み、首を小さく振る。

そんな二人に、呆れて大きいため息を吐く由。

正軌は携帯電話をポケットに入れて、再び勉強を開始した。

夏のそよ風が部屋を通り抜けても、黒煙のように重苦しい空気だけは変えられなかった。

由はちよっとだけ知力がupした。

―――
お昼ご飯。

メシアはテーブルで、俺はソファ―に座って茶矢と由君と一緒に昼飯を食べていた。

何故か無言のリビング。

源希達四人が話す場所と俺達四人の場所は異世界並に温度差が違った。

ソファ―に座る三人は、テレビを見ながら黙々と母さんが作ってくれた飯を胃に入れる。

うん、相変わらず美味しい。

久しぶりに食べた気さえする。

不意にテレビを見ている茶矢が質問した。

「正軌先輩とメシア先輩、喧嘩なされたのですか？」

「ブッ！！」

『：そんなトコ。しかも俺が避けてる。格好悪いな。』

お笑い番組を見ながら淡々と会話する茶矢と俺。

由君は吹き出したモノを慌ててティッシュで拭いている。

面白いトコあっただろうか？

人の感性はそれぞれだから、この質問は愚問だったな。

俺と茶矢は、まだ続ける。

メシアに聞こえていても、別にどうって事ない。

「どちらが悪いのですか？」

『さあな、多分俺だろう。話も聞こうとしないから。』

「何があったのですか？」

『ちよっとした口喧嘩。』

「仲直りしたいですか？」

『当たり前。』

だけど、無理だと思う。』

「それは何故？」

『俺が弱いから。耳を塞いでしまう。』

ご馳走様でした。

由君、俺は先に部屋に行ってるから。早く食べなよ。

…茶矢。』

「何でしょうか？」

私はただ、正軌先輩とお話したかっただけです。」

『…ありがとう。結構楽になった。』

「何の事でしょうかね。」

ご馳走様でした。」

ぽん、茶矢の頭に手を置いてわしわし撫で下ろす。

茶矢も立ち上がったので、キッチンに食べた食器を片付けて、入口の菓子山を無視して自室に戻った。

茶矢のストレートな質問に素直に打ち返してたら、肩が軽くなった気がした。

今度礼をしないと。

由君が戻る前に、範囲を確認しているとカチャリと開かれた扉。もう戻ったのか、と眼鏡を持ち上げると…

「……。」

『…そんな場所に突っ立ると迷惑だぞ。早く入れ。』

「どうしたら、自分の話を聞いてくれる？」

『だからその話はまだ…』

「正軌。」

ダンッ！

『！！？』

……メシアの馬鹿、何を思ったか

ダイブしやがった！！

ガッタアアンツツ！！

地震にも似た震動と衝撃が全身を袋叩きする。

特に腰が痛いし、腹が重い。

のしかかる……いや、突進してきやがった狼が、とにかく重い！

頭はクソ狼の腕がクツション代わりになって痛みはないが、首がゴキュッ！って変な音した。

マジ一瞬だけ三途の川らしき景色が見えたし。

死にかけたとか、お前は何してくれるんだこの阿呆メシアが！！

ギユウウと抱きしめるメシアの背中をバシバシ叩いて怒鳴る。

『俺がお前を避けてるからって、お前は人様の家でジャンプして飛びつくのか！？馬鹿狼！！』

お蔭様でこちら背中と腰と首が痛いわ！お前重いわ！茶矢くらい軽くなってから飛びつけ！あの軽さなら“まだ”受け止められるわっ！それに比べて俺と似たような身長でダイブしやがって馬鹿！阿呆！床ぶち抜けたらどうするつもりだったんだよ！？あゝ！！！？弁

償してもらおうぞ!!』

「……“嫌い”って言って、ごめん。」

『絶対許さねえ!!』

夏休み一週間飯作れ!テストで学年順位10位以内に入ってみやがれ!修学旅行風邪ひくなよ!道中で顔近づけんの禁止だ!変な目で見られる!もう家でダイブすんな!俺に抱き着くのも禁止だ!他の奴にやれ!お前が寂しがり屋だったのはとくに知ってたんだから我慢すんな!後!!後!!後!!後!!後!!後!!

「うん…後?」

痛みやら、激痛やら、胸に溜まっていたモノやら、この馬鹿さ加減やら、もう色んなもんがゴツチャゴチャになって、知らない間に目には涙が溢れていた。

声もだんだん小さくなって、手で顔を隠す。

眼鏡は床に転がって、無事回避できたようだ。

本体の俺を残して。

メシアが抱きしめる力に俺は敵わない事を知っている、背中や頭を片手でペシペシ叩く。

離せ:離しやがれ:クソ、結局メシアのせいでグダグダに終わるじゃねえかよ。

メシアの馬鹿野郎、阿呆狼、すかぼんたん。

お前と会わなきゃまだマシな毎日だったかもしれないのに、毎日楽しかったわボケ。

高校の自販機がきっかけだけど、今じゃ普通に日本語会話出来るし、笑顔見せるようになったし、頼りになるし、……ああクソ。

これ以上はもったいないから言ってやらない。
クソ馬鹿狼に最後の約束だ。
しかと聞いてろよ。

カーペットの上に沢山のシミを作って、俺は最後の契りをする。

『後……』

…もう“嫌い”って言うな、馬鹿メシア…。』

「ああ、約束だっ…!!」

骨が折れるかと思うくらい、強く、強く、強く、強く、メシアの腕が食い込むくらい本気で抱きしめられた。

…実際痛い。

文句言ってやりたい。

頭叩いて、源希のように回し蹴りを背中に食らわしてやりたい。

——けど、今日限りで抱き着くのを禁止するから今だけ許してやろう。

スリスリするのも許可しよう。

あ、スリスリ禁止にするの忘れた。

ま、いっか。

それと、耳に息が当たるのは…耳に息が…

ゾクウウツツ！！！！

『ヒッツ！！！？』

「…正軌？」

『や、やめろ…そこで話すな…一旦離させ…ウアツ！！』

メシアの肩を押すが全く効果無く、耳を抑えて真っ赤な顔で抗議する。

田中さんにやられてから、更に酷くなった気がする。

クソ、髪の毛だけでダメじゃねえかよ！

田中さんの馬鹿！どうしてくれんだよ！！

ああもうだから触んな！！！！

『耳に触るなっつってんのわからねえのか狼があああっ！！！！！！』

スッパーン！！

「耳弱かったんだな。前々から嫌がるそぶりはあったが。」

『知っててしたのかよ。オイ。』

とりあえず、そろそろ由君が戻るから退け。』

「……じゃあさ、」

『んー？』

見上げれば、嬉しそうな表情のメシア。

メシアが何時の間にやらドアを足で閉めていたから見られる心配はないにしても、背中痛え…。

テーブルの上を飛び越えたのに、被害はシャーペン落ちただけだし。

被害者俺だけだし。

メシアの野郎無傷みたいで腹がたつし、まあ二人共外傷はなくて良かった良かった。

ま、痛みとメシアの奇想天外で馬鹿な行動のおかげで仲直り出来たし。

万事完結、という事で。

メシアの長い前髪がサラッと俺の額に落ちる。

この距離に慣れてしまった俺は、もう色んな人とこんな距離でも会話可能だろう。

そんな耐性要らねえ。

「どうせまともに座れないだろう？ だったら自分が支えてやる。」
『… … はい？』

——トウルル…トウルル…ピッ。

「はい、もしもし？」

『源希か：丁度良い、頼みたい事がある。』

「あ、やっと終わった？」

もう大変だったよー！友恵ちゃんと茶矢と由ちゃん止めるの。マジ苦勞した！

で、お願いって？」

『：早急に由君に湿布持って部屋に来てくれ。箱ごと。』

プッ。ツー、ツー、ツー、

「ありゃ、切れちゃった。

母さーん、湿布何処だっけえ？」

受話器を戻して、リビングに歩いて行く源希だった。
多分あの音で腰でも強打したかな？とか予想して。

ガチャ・・・

「はいはい、結構待ってました由と湿布の到着で……ザオリク！」

『生きてる。』

「：よくこの呪文わかったな。
はいよ、湿布。」

使いかけの湿布箱をメシアに渡す。

正軌をテーブルに突っ伏して、メシアが後ろから抱き着く状態。
初対面の人が見れば誤解を受けるであろう状況を、慣れてきたのか顔を引き攣らせる事で飲み込む由君。

正軌は両手を使って何とか起き上がり、メシアの腕を叩く。

『ほら、膝までズボンめくれ。湿布貼ってやるから。』

「何、黒澤が両膝強打して歩けないって話？」

「ああ。」

『メシアは自業自得だ。俺は巻き込まれて、メシアより重症：痛くて：』

「あーもう、しゃーないなあ！二人共由が貼ってやるから、正軌は床に懷いてな！」

見兼ねた由君が立ち上がり、正軌から湿布を奪い取る。

メシアから逃れるように俯せに寝転び、痛みに堪える。

由君はメシアの両膝に湿布を貼って、テープで固定。

次に正軌のをしようと立ち上がったら、クイツと腕を引っ張られた。

メシアが見上げている。

「正軌のは、自分がやる。」

「怪我人は大人しくしてな。由だって出来るさ。」

「自分はただで手は動かせる。自分がやる。」

「由が任されたんだ！由がやるんだ！」

「自分が、」

「由が、」

「なら私がやります。」

パシッ。

茶矢が忽然と現れて、由から湿布をナチュラルに取り去った後、正軌の傍らに座る。

『失礼します。』と服を上げて、手で痛いヶ所を確認。

湿布をペリペリ剥がして、その部分に貼付ける。

ヒヤリとした感触に、思わず『うっ』と声が漏れる。

黙々と作業を行う茶矢に、二人はただポカーンと見ているだけ。最後に首筋に貼ってから、空になった箱にゴミを入れる。

正軌の服を下ろして、顔が見えるように首を動かす。

「終わりました。お加減はいかがですか？」

『ありがとう、助かった。』

冷たくて気持ちいい。』

「それは安心しました。」

では、私は戻ります。ご無理はなさらないようにして下さいね？」

『ああ。茶矢、ありがとう。』

勉強頑張れよ。』

「……なら、もし学年20位以内に入ったら、一日中“二人きり”で買い物に付き合っして下さいませんか？目標がなければ、何事もやる気は起きませんし。」

『良いぞ、約束な。』

頑張れよ。』

『よし。』小さく呟いてガッツポーズをする茶矢を正軌の視点からは見れなかった。

やはり遠回しのデートの約束。

直球でする日は訪れるのだろうか？

“二人きり”という言葉に隠された意味を、正軌は気づいていない。

ハッ！と他の二人が阻止しようとする前に『では、失礼します。』と茶矢は部屋を去ってしまった。

羽のように軽い足取りで、最後は軽くスキップしていた。

年下の先を越された三年生。

引き留めようとして行き場を失った手を頬をポリポリ掻いたり、頭をガシガシ掻いたりしてごまかす。

正軌を起き上がらせて、やっと勉強を開始。

テスト勉強をしている中、二人はそれぞれこう決意した。

（茶矢／ちびっこにだけは正軌／宮古を譲らない！）

（…やっぱ鈍いねえ、正軌は。）

何の話だ？

それより、明日の体育よろしく。

絶対無理だから。

（しゃーないなあ、仰せのままに。正軌様♪）

キモいぞ。

――入り交じる様々な思い。

何かを決意する面々、手に入れたり失ったりもする。

俺はまたコイツらの側で笑える事を、どっかの誰かに感謝しなくもない。

中編（裏読み）（後書き）

裏読み…実に長かった。

書きたい話があったけど、次の枠をちゃんと考えてるから問題ない。
へっへっへ。

由君は見ればわかる通り、Mじゃない方に（ゴミヨゴニヨ）。

茶矢が登場したのには、源希が裏で動いてました（笑）

本編終わったら、A f t e rで書きたいなあ。A f t e rはしょーもない小話を書いてく予定（笑）その前に本編を地道に終わらすか。

まだまだ続きます。

中編（期末テスト）（前書き）

結果次第で色々決まる期末テスト。
学生よ、ファイトだ。

では、

『テスト何て大嫌いだバカヤロウがああああ!!!!!!』
という女子の叫びに共感可能な方は、どうぞお進み下さい。

『テスト大好きよウツフン♪』
という方も、どうぞお進み下さい。

↓

中編（期末テスト）

――朝、痛む体を無理矢理起こして着替える。

一昨日の衝撃が今だ消える事がない。

昨日は体育をピロにやってもらい、移動教室や屋上へは壁つたいに歩いた。

メシアが『背負う。』とか馬鹿吐かしやがるから本気で腹殴って、何か良からぬ事を考えて近づくメシアとの間に和葉さんを入れて、身の安全を確保した。

屋上では由君に勉強を教えて、『無理して来なくても…』と苦笑された。

仕方ないんだよ、ピロが『行ってくれ。』って頼むから。

まあ、テストも心配だったし。

昼休みは教室で死んでたけど。

そろそろ本気でメシアをセクハラで訴えてやろうか考えてる。

誰かあの外人どうにかしてくれ。

強制送還とかしてくれたら、って…出身国何処だ？

歩けるまでに回復した俺は、i P O Oから延びるイヤホンを片方外してメシアの方を向く。

聞いているのは、昨日由君が入れてくれた、題名は『無題』。

i P O O最初の曲。

真っ赤な顔でぶっきらぼうに渡された。

和葉さんには普通に渡して、ちよっと扱いの違いを感じた。

ピロにお願いされて、放課後からずっと耳に嵌めているから、正直ジンジンと痛む。

まあ、食事やら勉強教えてた時とかは外すからまだ大丈夫。
今日は直接感想言いたって言ってるから、午後に入れ代わる予定。

…ピロが初めて作った友人だしな。
出来る限り一緒にいさせてやりたいし、沢山話させてやりたい。
俺にはこんな事くらいしか出来ないから。
ま、我が儘言わない子供のお願いくらい叶えてやらないとな。
…と思う訳でして。

メシアは首だけ動かし、俺を見る。

『メシアの母国って何処なんだ？』

「…一応、アメリカ合衆国。」

『そうなのか。』

「…詳しい話は、また今度。」

『話したくなければ話さないで良い。』

それより、テストに集中するぞ。』

「わかった。」

（修学旅行で必ず話す。）

校門で突撃した皆月に大ダメージを与えられ、俺は教室までメシアの腕に掴まりながら何とか辿り着いた。

「おはよう正軌君、メシア君。
…正軌君、まだ痛む？」

『おはよう、和葉さん。』

朝っぱらから、皆月にタツクルされた：クソッ。治りかけてきたのに。』

「おはよう和葉。」

「朝からお疲れ様。」

由ちゃん大丈夫かなあ：。」

『やれる事はやった。後は由君次第だ。』

（メール！チャイム鳴る前にメールして！）

はいはい。

ちよっと待ってろ。

携帯電話出す間に考えとけよ。

鞆から携帯電話を取り出しメールを打つ為の画面に変える。

ピロの言う通り文字を打ったり消したり。

「頑張れ。」

結局この一言を送信して、画面を黒くさせる。

鞆に携帯電話をしまった時、丁度吉田が入ったので二人はそれぞれの席へ行った。

一限目は国語。

筆記用具を机上に並べ、ノートをパラパラめくる。

うん、漢字は大丈夫だな。

ロッカーに鞆を置きに立ち上がろうと片手を机に着けば、『ついでに持つて行く。』とメシアが横に現れた。

此処で無茶するのは考え物で、素直に甘える事にした。

『悪い、ありがとう。』

「お互い頑張ろう。」

眼鏡を掛けて、吉田が解答を配るまで静かに待った。

――キンコーンキンカーン：

「止め。後ろから、回収。」

吉田の掛け声で、様々な反応を見せる生徒達。
俺は眼鏡を外して、一息つく。

回答欄を埋めて確認して、出来の悪い女子二人を心配していた。
大丈夫かな：諦めて放棄してなきや良いんだが。

由君には、先ずは問いを見てから文章を見ると伝えてあるし、漢
字は出そうなやつだけ教えた。

ほとんど教えたやつが出題されたから、覚えていれば点数は稼げ
る。

後は由君次第。

赤点は免れてろよ…。

「正軌。ノートとケータイ。」

『あ、ありがとう。：どうしてわかったんだ？』

「色々とな。ケータイは由から返信が着てるかと思って。」

「今回は簡単な方で安心したよー。」

次は世界史だっけ。」

『あの先生、細かいトコ出題するからな。』

すまん、今から電話するな。』

ププププ：ププ、ガチャ。

「もしもし：」

『俺だ。次の世界史は、昨日ノートに書いたヶ所を丸暗記しろ。問題が少ない分、点数が大きい。ノートだけで、赤点を余裕に越せる。書き間違いがないか何度も見直す事。良いな？』

「おう、頑張る。」

：。。。そっちも頑張れ。」

『ありがとう。じゃあ、後でな。』

「じゃ。」

ピッ。

「由ちゃん、手応えありそう？」

『：声が死にかけてた。』

俺達も覚えよう。』

ノートをペラペラ右から左にめくって、パンと閉じる。

チャイムが鳴ったので、メシアに頼んでロッカーに入れてもらった。

：世界史は教科担当でテストの善し悪しが決まるが、今年の担当のジジイは学年で1番最悪だ。

先ず、範囲を言わない、早口で何を言ってるのかわからない、字が汚い、あまり触れてないヶ所をもろ出してくる、宿題多い、評価が厳しい。

最悪な事が揃い過ぎてる。

ほら、この問題教科書の隅に小さく載ってたやつだ。

これは随分前の宿題プリントでやった問題。

引っかけなんか余裕で出しやがる。

記号問題は一問しかないし、性格の悪さが滲み出てる。

……っと、終了。

見直し見直し。

採点厳しいから、面倒臭い。

あ、間違い発見。

もう訂正ヶ所はねえな……よし。

時間も余裕ある。

（なあ、今のうち代わってくれねえか？）

無理だ。

うめき声とかどうするつもりだ？こんな事で怪しまれたくない。

テスト回収したらすぐに代わってやるから、それまで待て。

（…ごめん。）

：ピロの気持ちはわからなくもない。

だが、落ち着いて今ある状況を読み取ってくれ。

出来る限りお前の願いを叶えてやるから。

な？ピロ。

（はい…。大人しく待ってるよ。）

いい子だ。

——キーンコーンキーンカーン…

「はい！回収しなさい！」

後ろの奴が解答用紙を持って行った瞬間、

キイーン…

何時もの耳鳴りが。

ドクンッ！ドクッ！ドクッ！

『……っ…。』

俯せの状態で、俺は入れ代わった…

『…はい、完了。』

Thank you. 正軌。』

（どーいたしまして。）

交代は15時までな。明日の勉強教えないと。）

アイアイサー。

HRが終わり、立ち上がって鞆を取りに行けば、メシアと視線が合う。

ジッ…と見つめられたので『ハアイ♪』と手を振って挨拶。
メシアは頷いて答えた。

テスト期間中、和葉は部活がないので一緒に由君を迎えに行く。
普段は弥生さんと帰っているが、午後からも部活があるらしい。
女子バスケット部は大変だな。

『んじゃさ、テスト勉強俺の家でやる？一人より良いと思うけど。』

「え！？そんな、突然お邪魔したら…」

『メシアと茶矢達も制服のまま勉強しに来てるよ。由君もその予定。
母さん大勢でいるの好きだから、遠慮しなくて平気だよ。』

「うーん…それじゃ、明日行かせてもらうね？」

突然だから、明日の勉強用具もないし。」

『了解。』

和葉にニッと笑みを見せると、ニコツと返された。

帰って母さんに伝えないと。

下駄箱まで三人で雑談しながら歩いてると、俺達のクラスの下駄箱前で見知った人物が待っていた。

派手な髪に、上は女子用なのに下は男子のズボン。

スクール鞆を足元に置いて、周りの白い目を睨み返している。

そういえば“レディース”だったっけ。

おーおー、前の正軌みたいだ。

（そうだな。周囲の輪に誰も入らない。

根は悪くない子なのに、見た目で判断する。）

ま、そんな奴らは関わらないから、どう思われても気にしないし。つてトコだろ？へへん。

（大正解だ。）

『由君、お待たせ。』

声をかければチラツと横目で確認して、照れたように顔をほんのり染める。

そして、わざとらしく大きなため息を吐いて下駄箱から離れる。

「遅い！宮古弟達、先に行ったぞ！」

『ごめんね、生徒指導室見に行ってたから。由君いるかと思って。』

ぽんっ。

拗ねる由君の髪をワシヤワシヤ撫で回す。

ちよっただけボサボサになった。

和葉も謝ると『もういい。』とフイツと先に歩いてしまう。
靴に履き替えて、早足で由君の後を追う。

：けど、和葉がまだ履けてないのに気づいて、後戻り。

メシアが立ち止まったのに連れて由君も歩みを止める。

和葉が『ごめんね!』と申し訳なさそうな顔をするから『二人共
待っててくれてるから、大丈夫。』と宥める。

和葉に合わせて駆け足で二人の所に向かう。

『ごめん、待たせた。』

「ごめんね。」

「別に、そんなに急いでいない。」

「ふん、早く行くぞ。」

校門で和葉と別れて、小さく手を振り合った。

由君がちよっと前を歩いて帰路を進む。

メシアと昨夜のテレビ番組の話をしていると、正軌がボソツと呟
いた。

（由君は…ヒョウだな。）

『ブッ!ククク…』

「「?」」

ピッタリ当て嵌まる動物だけに、想像して吹いてしまった。

何を一人で考えてるんだよ。

茶矢の柴犬と言い、メシアの狼と言い……マジ笑えるんですけど。
今度は彪ヒョウですか。

肉食系ばっかしだな、正軌の周り。

（俺も不思議に思ってる。源希は子虎だし、皆月は狐で、真尋が熊。）

何故“子”虎？

納得はできつけど。

（アイツの喋り癖は子供が鳴く並以上だから。だから子虎。成人になるのは無いと思う。）

ククッ、確かに。

でも、たまにしつかりした一面も見せるぜ？
それで“虎”か？

（さあな。ご自由に想像しな。）

はいよー。

おっしゃる通り、自由に想定しておくわ。
んじゃ、和葉は？

（……何だろう。ハムスター？）

あー、納得できる。

けど……もうちょい何かないかな？

似たような感じで、大人しそうな……あ。

モルモット。

（モルモット。）

うん、これでOKだな。

いやあスツキリした！

（和葉さんだけ草食だな。わかるけど。）

今度動物園でも行きたいな。
直に全員見てみたい。

（茶矢だけいけないけどな。道歩いてれば会えるけど。）

だな：この辺ペットショップあったっけ？
駅前になかった？

（確か、小さいペットショップあったような：もしかしたら和葉
さんもいるかもな。）

モフモフしたの撫でたいな。
触りてえなあ……

ガシッ！！

『ん？』

「何処まで行くつもりだ？」

「もう家着いたけど。」

『あー悪い。考え事してて、うっかりな。タハハ。』

（俺の気持ち、ちょっとはわかったか。）

：うん、あんな発言しててごめん。
これからはちゃんと教えるから。

(独り言より虚しい事はない。)

あれは俺様も気づかないのが大半で・

――グラッ！

『…へ？』

突然体が後ろに引っ張られるように、足が地面から離れる。

痛みを我慢し過ぎたのか、ただ足が滑ったのか、原因は不明。それとも、勝手に動物に変換してしまった罰か。

そんなしょーもない事で？

“思想の自由”は憲法にあるんだけど。

神様の仕業だったら、訴えるからな？

覚えとけ。

ヘタ、と尻餅をついただけで腰に響いた。

朝の皆月の嫌がらせに怒りを覚えた。

メシアに手を貸してもらい、違和感をそのままに俺達は家に入っ
た。

昨日、優人に借りた座椅子に座って勉強。
着替えるのが面倒なので、制服のまま。
明日は由君が嫌いな化学と英語。
ほとんど嫌いらしいけど。

「あーあ、テストに和英辞典持って行ければ良いのに。」

「行けるけど、使ったらカンニングに」

「ウッセェー！！外人は黙って化学だけ勉強してろおあ！！」

『由君はい、深呼吸。』

けどさ…この曲に英語あるよね？やっぱり和英辞典ひいて歌詞考えてるの？』

「お…おう！何だよ悪いかよ！」

「自分に聞けば英文に換えてやるぞ？」

「良いんだよ。自分で考えて、調べる方が達成感がある。」

……そういえば、まだ感想聞いてないんだけど。」

ブスーとふて腐れて顔を逸らす由君。

唇を山みたいにして、チラッチラッと様子を伺う。

実は、片耳だけ曲を延々とリピートしている。

すっかり感想を伝えるタイミングを逃しちゃったので、休憩の時に教えようかと思ったんだけど。

今言ってもいいけど、まだ中途半端だから休憩までやりきる事にする。

そのままお喋りしてたら、時間が勿体ないし。

正軌が怒りそうだしー。

……あ、スルーされちった。

切ない世の中だねえ…俺様寂しっ！

（グダグダ言ってる暇があったら勉強やれ。時間の無駄だ。）

あーいよ。

俺様ガンバッチャう♪

（キメエ。）

14…30まで続けざまに勉強した後、30分休憩。

メシアがトイレに行く為席を外したら、部屋には自然と二人だけになる。

本棚にある名探偵CONANの漫画を黙読する由君に、ぽつり、声をかける。

『この曲さ、』

「!…な、何だよ!? ハッキリ言えよ!」

『屋上で音楽聴いた時、あの日に歌詞見せてもらった時、悲しい歌だと思った。けどさ、結局はBAD Endなんだけど……何十回も聞いているときさ、』

「…………?」

顔だけ由君に向ける。

上目がちの視線が不思議そうに続きを待っている。

『ふふっ』と小さく笑うと、赤らめて面白くなさそうに俺の肩を揺らす。

まるで玩具をねだる子供のようで、ニヤつく頬を隠さずにやられている。

「何だよ！途中で止めるとか卑怯だぞ！教える宮古！狡い！」

『えー、どうしよっかなあ？口にすると減りそうだし。』

「お前はギャルか！ナメクジ並に気持ち悪い。」

『あー、そんな風に思っちゃうんだ。俺傷ついたー。グサツ、うう…。』

「嘘つきが！全くそんな様子サラサラねえじゃねえか！」

片頬をギムウー！！と本気で抓られ『痛い痛いっ！』と苦笑い。

逃げようにも動けないから、やられっぱなし。

痛みに耐え兼ねて、手に触れてると、

「!？」

ギリッ！！

『爪爪爪爪爪！！食い込んでる血が出る！！』

「あ、ごめ…ッバ、馬鹿野郎！お前がいきなり触っから！！…だから、その…。」

『イッテェ…。痕がクッキリ残ってるし。』

それは悪かったな。もう触らねえよ。

はー、女の子は気難しい。』

（お前はオッサンか。）

一応、高校三年生ですう。

マジ痛いよ？

爪って凶器に変貌するんだよ？

この体で実感するなんて思ってもみなかったよ。

傷つけた、ごめん。

（別に気にしない。

それより、素直に言えば痛い思いしなかったのに。阿呆だな。）

知識は同じだけどね。

（お前は俺に喧嘩売ってんのか？何なら買うぞ？）

すみませんでした。

お願いだから、そんな怖い事考えないで。

（するかしないかは、お前で決まる。

ほら、由君ブツブツ言ってるぞ。）

気づけば背中を向けて膝に顎を乗せてる由君。

——え、俺のせい？

そんなに触られるの嫌だったの？

結構ショックなんだけど。

俺、誰にも触らない方が皆の為になる？

（オイ、ピロがそうだったら俺も触ったらダメじゃねえか。何か前にもこんなあったな。）

ガチャ・・・

「とも美に飲み物とお菓子を渡された。

…正、その頬の痕どうした？」

『ん、んー…ちよつとね。そのうち治るから大丈夫。』

「……そうか。」

傷痕の上を指の腹でなぞるメシア。

最近のメシアは前より積極的に若干引いてる。

正軌はうんざりしてため息ばかりだ。

まあ、表情がわかりやすくなったと思えば良い傾向じゃないかと思っけどね。

メシアの腕を引いて、耳に口を当てる。

『16時には戻るから安心しなよ。』

「…自分は不安に思った事はない。」

『そう？一応、心配する事はないから。それだけ。』

うっ？』

「…人の目の前で内緒話してんじゃねえよ。胸糞悪い。」

『はいはい、もうちよつと素直になるのをオススメするよ。』

トイレ行ってくるね。』

立ち上がって扉を開ける。

メシアがついて来ようとするのを笑って止めさせ、ドアを後ろ手で閉めた。

人に見せるようなモノではないから。

中編（期末テスト）

――……朝。

今日はアラームより早く目覚めてしまった。

二度寝する癖はないので、そのまま起きる。

今日はランニングコースを変えてみようか。

もしかしたら、とも美か優人さんに会えるかもしれない。

伯父さんはまだ寝てるから、帰ってシャワーを浴びてから朝食作って正軌の家に向かおう。

早く行けばまだ寝ているかもしれない。

……そう考えただけで楽しみだ。

クローゼットからタンクトップとジャージのズボンを取り出し、逸る気持ちを抑えて部屋を飛び出した。

――タッタタッタ……

人気の少ない町。

朝は人とすれ違う事はない。

新聞配達のおばさんと軽く挨拶するくらいだ。

何時ものコースを走っていると、正軌の家の前に着く。

優人さんが何時ものスーツ姿で新聞を立ち読みしている。

早起きした時によく会う。

スピードを下げて、タオルで額を拭いて挨拶。

「おはようございます。」

「おはようメシア君。今日は早いね。」

「目が覚めてしまったので、早めに走る事にしたんです。」

「そうか。早起きは良い事だ。」

「ちょっと待ってなさい。」

そろそろ続きをしようと思った途端、優人さんに止められてしまった。

玄関口からではなく、ベランダから入った。

サンダルを履いていたのに気づく。

すぐに優人さんは何かを持って戻って来た。

それを自分に差し出す。

「疲れただろう。差し入れだ。」

「いえ、自分で買いますので」

「あら、メシア君じゃない。おはよう♪」

「おはようございます。」

「では、私はそろそろ仕事に行くから。」

人気の少ない場所は気をつけて走りなさい。

それでは、行ってきます。」

「行ってらっしゃい優人さん♪」

「…行ってらっしゃい。」

自分の手に強引にアクエリ○スのペットボトルを持たせて、車を走らせた。

とも美と一緒に優人さんを見送り、それからアクエリ○ス片手に自分も走り出した。

それから公園まで走り、ベンチで休憩。

散歩している犬や野良猫をボーっと見ていると、顔見知りの野良猫がやって来てベンチに飛び乗り、つかず離れずの距離を空けて丸

くなる。

首輪がないから野良猫だと思ってる。

自分も野良猫も特に何もせず、ただ座ってるだけ。

空を見上げて、

今日の天気を予想したり、

朝食はどうするか考えたり、

フリーは今頃どうしてるのか想像したり、

横にいる野良猫は昼間はどうしてるんだろうとか。

たまに真尋の妹の真理と会って会話する。

テニス部らしく、雨天でもランニングしているようだ。

前から見かけてはいたが、真尋の病室で以来話し掛けるようになった。

5分程度真理の話を聞いた後、別れて家まで走る。

今日は来ないようなので、野良猫に『じゃあな。』と一言告げてから家まで走った。

――ガチャ。

「…ハアッ……ただいま…。」

ドアを空けて、下駄箱の上に置いたケータイを手取る。

チカチカ光っている画面をスライドさせる。

知らないアドレスからのメール。

文章を見て、目を見開かせる。

それは、今まで連絡が無く、すっかり忘れていた存在。

内容を確認してから、カシャンと音をたててポケットにしまった。

顔が強張る。
無意識に手を強く握りしめていた。

……暑い。

この前タオルケットに変えたのに何で蒸し暑いんだ。

―ふっ、我ながら愚問だったな。

慣れているじゃないか。

慣れるまで何回驚かされた事か。

母さんが起こす前に起きるとか、背中まだ痛いってのにお前は・

『…メシア、お前なあ』

「もう起きたか、おはよう。」

『このクソ暑いのに起きない奴は死人くらいだわ。早く離せ。』

「もうちょっとだけ…」

『……仕方ないな。母さんが起こすまでだぞ。』

額を背中に押し付けて離さないメシア。

何となく“何かあったな”と気配で感じ、窓の外から快晴の中に浮かぶ雲をぼんやり見上げていた。

『そういえば、今日は予定あるんじゃないか？』

学校の帰り道、今日が水曜日である事にピロが気づき、由君に質問するよう頼んだから。

前に予定が悪い曜日を聞いた時に水曜が含まれていたのだ。俺もピロの発言でそういえばそうだな、と頷く。

「あー…ま、18時に帰れば間に合うから大丈夫。ほら、田中さんトコの。」

『あ、あそこか。田中さんと反りが合わないんだよ、俺。』

「宮古、堅物なトコあるからな。自由な田中さんとは相いれないのはわかるわ。」

『未成年の飲酒喫煙を注意しないのは大人としてどうかと思う。子供の目の前でタバコを吸うなんつ』

「あーもう煩い！田中さんの悪口言うなあ！頑固親父！」

口を手で塞がれメシアと肩がぶつかってしまった。
彪が牙を晒して威嚇する。

シャー！と背を低くして、今にも飛び掛かりそうだ。

後ろにいるメシアに手で謝るも、グイッと由君と引きはがされた。
和葉さんが由君を宥めてる。

フーッ、フーッ、と肩で息をする由君。

顔が赤い。

…頑固親父って、まだ若いわ。

田中さんにそんなにお世話になってるのか。

由君がこんなに誰かの為に怒るのは、初めて見た。

『……言い過ぎたのは謝る、ごめん。』

けど、田中さんに賛同する事は無理だ。』

「本人の目の前で言わずに陰口たく奴は嫌いだ！お前がそんな」

『ハッキリ言ったよ。由君が酔い潰れている時に、本人に直接。』

信用ならないなら、田中さんに聞いてみると良い。「居酒屋で宮古に何を言われた？」って。』

「……ツチ！信じられないわけじゃないけど、今すぐ電話する！」

鞆から携帯電話を取り出して、由君は電話する。

二人が『田中さんって誰？』みたいな視線を向けるので、先に『由君の知り合い。』とだけ教えた。

家はもうすぐだけど、立ち止まって電話が終わるのを待つ。

何度かコール音が鳴り、『あ！田中さん！？』と由君が声をあげた。

話し合って、暫く経つと顔を伏せて戻って来た。

唇を尖らせて、決して顔を上げずにボソッと何かを呟いた。

「…………ごめん……。」

『はい、これで喧嘩終わりな。みんなで勉強しに家行くぞ。メシアはそろそろ離して大丈夫だそー。』

「遠慮するな。」

『熱いんだよ!』

「あはは。仲良しだね。」

由ちゃん、行こっか♪」

「…………おう。」

和葉さんに手を引かれ、由君も後に続いた。

…やっぱ“嫌い”って言葉、グッサリくるな。

俺は絶対言わないでおこう。

中編（期末テスト）

「浅倉 和葉です。お邪魔します。」

「いらっしやい♪」

正軌と源希の母の、とも美です。あらあら、畏まらなくて良いわよ！『ともさん』って読んでほしいわ。」

『ただいま。』

じゃあ、部屋行ってるから。昼飯お願い。』

和葉さんと母さんが挨拶したトコで、俺達は部屋へ直行する。

階段を上る前に茶矢達が挨拶したので手を振って返した。

和葉さんが慌てて俺達の後を追う。

ガチャ・・・

『和葉さん、適当に座って。』

今から着替えるから先にやっておいてくれ。』

「わー…此処が正軌君のお部屋なんだ。お兄ちゃん以外の人の初めてで、ちょっと緊張するな。」

『「…何故？」』『

声をハモらせて和葉さんに質問する三人。

一斉に視線が集中したからか、予想外の言葉からかはわからないが、困ったように笑む和葉さん。

唯一の女子の由君にも共感してもらえなかったので、返事に迷ってる。

ピロに聞いてみるが『さあ?』の一言で終了。
…ま、そこまで重要な事ではないだろう、と予想して部屋の扉を
閉めた。

――俺が出て行った部屋での会話――

「うー…何だコリヤ?」

「ドコがわからないのかな? 私でよければ教えるよ?」

「あ、ああ悪い。」

「コレなんだけど…」

「んー?」

ポヨン。

「…………。」

「あ、これはねー…キャッ!? ゆ、由ちゃん!?」

「あ、あー…胸デカイなあ、と思って。つい。」

「オッサンか。セクハラだぞ。」

「煩え! 英語どうせ百点なんだろうが!!」

「も、もう。こんなに大きいと、肩凝りとか下見れないとか不便な
んだよ。いきなり触っちゃダメ!」

「許可得れば良いの?」

「つてか、遠回しに由に対する自慢か。」

「……頑張れ。」

「真顔で言うな! 喧嘩売ってんなら買うぞ!!」

「由ちゃんも充分大っきいよ! 羨ましいなあ…」

「：何この複雑な心境。素直に喜べない由がいて、イライラしてる由が大量にいる。」

「由ちゃん沢山いるの!？」

「気色悪いな。」

「いや、いねえけど。」

お前はいつぺん地に埋めてやろうか？

：いいなく、たゆんたゆん。」

「あ、や、持ち上げちゃっ、」

「重いけど柔らかいとか、クソウ：何食べたらこんなにデカクなるんだ？」

「ゆ、由ちゃんくく：そ、ろそろ離して？ね？」

「もうちょつとだけ良いだろ？こんな体験、滅多に出来ないだろうし。」

：……それにしても、男ってこういう場面恥ずかしくないのか？顔赤くしたり、挙動不審になったりとか。」

「意味がわからない。」

そろそろ離してやれ。和葉が可哀相だ。」

「ゆ：ハア：由ちゃん：」

ガチャ、

『昼飯預かってきた。テーブル片付けてく……。』

「「あ／あ。」」

「わかった。」

『……先ずは由君、手を離せ。それから何があったか、じっくり聞こう。』

そんな趣味があったとは信じたくないが、とりあえず飯を食べよう。

』

「ち、違え!!!勘違いするな!」

「やああああ!!!もうお嫁に行けないよおおお……」

「由、最低。責任とってやれ。」

「由は男じゃねえ!! 一回死ね!!」

『あーはいはい。』

和葉さん、女にされたくらいならまだセーフ(?) だと思うから。安心しな。』

「ほ、本当:~?」

『俺、嘘ついた事あったっけ? ほら、泣き止んで。』

飯が載ったおぼんをテーブルに置いて、部屋の隅で泣く和葉さんの頭を撫でる。

涙目で見上げる和葉さんに小さく微笑んで、親指で涙を拭いてやる。

ポウ:と頬が赤く染まった後、綻ぶような笑顔が彼女から咲いた。後ろで由君の一方的な取っ組み合い(由君がメシアにつかみ掛かって、メシアが由君の手首を掴む)をしていた二人は、目を点にして俺達を見ていた。

箱ティッシュを和葉さんに渡して、前髪を上げてやる。

『前髪邪魔くさくないか?』

「あ:私、そばかすがコンプレックスだから:不細工だし:」

『え? 俺は可愛いと思うよ。和葉さん。』

それと、“不細工”なんて言っただけで自分を悪く言い過ぎだ。マイナス思考は良くないぞ?』

「:~:ごめんね。お世辞言わせちゃって:」

『お世辞を言えるほど俺は器用じゃないよ?』

和葉さんは、もっと自分に自信持つと良い。勿体ないと思うよ、笑顔が素敵なんだから。』

「え:~:あ、ありがとう:」

『本当の事を言っただけだから、お礼を言わなくてもいいよ。』

一応、どういたしまして。』

俯く和葉さんをぼんぼん叩いて、何故か固まってる二人を定位置に移動させた。

和葉さんは終始顔が赤くて風邪でもひいたのかと具合を聞こうとすれば、由君が先に聞いたり、メシアに問題を聞かれたりして忙しかった。

和葉さんが俺に何か聞こうとすれば由君が遮ったけど、問題がわからないので頭から湯気がのぼっていた。
結局メシアが教えたけど。

四人ではちょっと狭いテーブルなので、間違って手が触れる事もある。

消しゴムを取る時に和葉さんと手が当たってしまい、由君に爪をたてられたのを思い出し慌てて『ごめん!』と謝ると、和葉さんも同じように『ごめんね!』とワタワタしてしまった。

『大丈夫?』と伺おうとすると、グイッとメシアに腕を引かれた。

『…どうした?』

「人肌恋しくなったから。」

『…失恋でもしたのか?』

「告白した事は一度もない。された事はあるが。」

『ラブレターよく貰うよな。呼び出しもあるし。』

で、お前は何時になったらその手で勉強を再開させるんだ?』

「わからないやつがある。教えてほしい。」

『仕方ないな…由君、ちょっと待っててな。』

和葉さん、ごめんね。』

こうやって流されてしまった。

——今日の三人は何かおかしい。

由君は行動が意味不明だし、メシアは今日特に話し掛けるし、和葉さんはずっと真っ赤だし。

（誰かさんの無意識の告白のせいだよ、誰かさんの。）

誰かさんって俺かよ。

何か変な事言ったか？

記憶にない。

（正軌、自覚がないなら、あまり女性に喋らない方がいいよ。オススメする。）

…は？俺にわかるように説明しろ。

自覚ないってどういう意味だよ。

オイ！ピロ！

この日は色々理解出来ない事が多かった。

唯一わかったのは、和葉さんが甘党だという事だった。

おやつに運ばれたケーキと紅茶。

あの店の新商品らしい。

俺はなっchanNの新作を飲みながら休憩していると、中央に置かれた角砂糖をおもむろに和葉さんが手に掛ける。

そのまま紅茶に角砂糖をポチャン、ポチャン、ポチャン、とリズムよく8個ほど入れ、ミルクを追加し、スプーンで掻き交ぜて飲んだ。

そして『美味しい♪』と至福の笑顔。

大食いのメシアも、普通の由君も、暫くフリーズ。

嬉しそうにケーキを頬張る和葉さんの意外な一面を発掘した俺達であった。

……和葉さん、恐るべし！

中編（期末テスト）

水曜日は由君にこの前シングルさんに借りた服とズボン、お礼代わりの菓子折りと「ありがとうございました。宮古」とかかれた紙が入った紙袋を頼んで持って行ってもらった。

直接返さないのは不本意だが：また行ったら帰れなくなりそうだから、由君に両手を合わせて頼み込んだ。

『一つ貸しな。』と言われ、貸しを作ってしまったけれども。

——金曜日。

源希達に置いて行かれたと言う茶矢と一緒に四人で帰宅。

茶矢と玄関で別れて、三人は俺の部屋に。

『着替えるから、喧嘩するなよ。』

と強調してから、部屋を後にした。

ピピピピ…ピピピピ…

昼飯を持って階段を上がって行く途中、帰り道に取り出してポケットに入れたままの携帯電話が鳴る。

両手が塞がった状態なので、自室に着いてから通話ボタンを押した。

知らない番号だ。

『…もしもし?』

「あ! 正軌!? 俺、瑠璃!」

『どうして番号を知っているんだ?』

「ちょ、ちよつとね。」

そんな事より大変だよ! 今すぐ“Red tree”に来て!」

『“Red tree”?』

「田中さんが管理してるトコの名前。前に行っただろ?」

「…つか、誰と話してんの?」

『瑠璃とだ。』

「由は来なくて良いよ! 正軌、急いで来てね!」

プツ、ツツ、ツツ、

急に電話して、返事もしないのに切られてしまった。
無機質な音が、部屋に響き渡る。

携帯電話を閉じて、制服をハンガーに掛けて、鞆を持つ。

『とりあえず、行くだけ行ってみよう。もし本当に危ないなら急がないと。』

メシア、場所変わるけど良い？』

「問題ない。何処に行くんだ？」

「宮古っ！本当に行くのかよ！？絶対騙されてるって！！」

『△△区の路地裏まで。ここら辺からじゃ、ちょっと遠い。』

：騙されてるかもしれない、だから荷物も持って行くんだよ。予備にね。

ほら、由君も急いで。』

「……ったく、知らねえぞ！」

鞆に財布を入れて、母さんに『ごめん、急用が出来たんだ。帰りは遅くなるかも。』と昼飯を返してから家を出た。

ショボンとする母さんを見て罪悪感に駆られ、もう一度小さく『ごめん』と呟いた。

それから俺達は早足で、瑠璃が待つ“Red tree”まで向かった。

前に来た道を歩いて45分ほど。
自転車でもよかったのだが、メシアと由君がいるから止めた。
のんびり歩いて帰るのも悪くない。

無言で路地裏に入ると、ちょうど誰かが赤い屋根の下から出てきた。

黒いエプロン姿で壁にもたれ掛かってライターでタバコに火をつける。

プカーと空に輪っかを作る。

ジッと見ている俺達に気づいたのか、壁に押し付けて火を消す。
俺は声をかけた。

『こんにちは、田中さん。』

瑠璃に呼ばれたのですが、何処にいるかわかりますか?』

「よお、久しぶりだな宮古。」

あのクソガキが? あー…また逃げ出しやがったか。教師にドヤされる。」

「またあ? 全く、アイツは何がしたいんだよ…」

「多分自分の部屋にいるよ。」

その前に、そちらさんの美人さんの名前を教えてくださいるか?

What you are name?

（名前は何だ？）」

「黒澤メシア。二人の友人です。

日本語で問題ありません。」

「ありゃ、随分と綺麗な日本語だ。

俺は田中 健だ。此処の管理人をしている。」

「他に仕事はしているのでしょうか？ そうでないと経営が」

メシアの口を塞いで、そっからを遮る。

知り合ったばかりの人間がそこまで知る権利はない。

触れてほしくないヶ所を深く関わりのない者がズカズカ入るのは失礼だ。

それが常識だと思うから、俺は邪魔した。

メシアの頭を押して一緒に俺も頭を下げる。

謝罪の言葉は言わない。

謝る事が予想外に傷ついてしまう事もあるから。

頭を上げて田中さんを見ると、腕組みして空を見上げていた。

普段と変わらないようだが、中身が外と同じという人は無邪気な子供くらいだ。

表情に変化が少ない人ほど、深い切り傷になっている時が多い。大人になると、そういう嘘を塗り固めなければ生きていけない。る。

：俺も、似たような生き物だから。

俺は口を開いて言葉を向ける。

『すみません。もし時間があつたら教えていただけませんか？』
「いーぜ、クソガキつつつても俺の子供だ。その友達ってなら、案内くらいはしてやるよ。」

俺達は田中さんに続いて“Red tree”の中に入った。

ホールを突き抜け、“非常口”と赤色で示された扉を開け、真っ直ぐ行けば外に出られるがそれから階段を上がって、また扉を開けると玄関らしき場所に着いた。

小学生の女の子が履きそうな靴が無造作に置かれている。

「上がりな。」

『お邪魔します。』

「お邪魔します。」

「邪魔するよ。」

「邪魔するんやったら帰ってー。」

『「……。」』

「さーてと、クソガキ何処いっかなー。」

メシアが腕を引っ張るが…俺にもわからないからその手を離してくれ。

俺達より長い付き合いの由君でさえ呆れた目で見ているから。

親父ギャグなんて初体験だから対処法なんてワクチン持ってない。

俺の親父が言う姿はきつと想像を超える別人だと思う。

家族一丸となって病院に連れていく光景が目に見え浮かぶ。

田中さんと由君の後ろを、静かについて歩いた。

ガチャ・・・

「あ！正軌遅かった……何でいんの？後、誰？」

ガッ！ゴツツ！

「「お前えのせいだよクソガキ。」」

「黒澤メシアだ。」

正軌、コイツが瑠璃か？」

『ああ。小学三年生。』

「痛いなあ！何すんだよっ！健と由！！」

「親を呼び捨てすんな。」

「年上には敬語で接しろ！」

ギャー！ワー！騒ぐ二人と普通に叱る田中さんを見ている辺り長くなりそうなので、廊下で二人、鞆からノートを取り出して問題を出し合った。

瑠璃の様子からして、大事ではないらしい。

メシアが喉が渴いたらしいのでホールの自販機で何か買いに行こうかと提案して、瑠璃の部屋に顔を覗かせる。
すると、タイミング良く瑠璃が抱き着く。

「正軌は良いって言ったもん！二人と違って正軌は優しいんだよ！俺だって敬語くらい使えるんだからね！」

「クソガキ！宮古から離れろ！」

「お前が敬語を使ってるトコ見た記憶ねえぞ！」

『瑠璃、優しくない人間はいないぞ？見えない優しさの方が大切なんだ。』

それだけは二人に謝れ。』

「け…けどさ…口煩く言う奴が」

『自分の非を認めない奴は格好悪いぞ。格好悪い奴になりたいか？』

「……ヤダ。」

…ッチ、正軌の顔をたてて謝るよ。悪かった。」

「…こんの！」

「育て方間違ったなあ…ハア。」

『コラ、素直に「ごめんなさい。」言わないと、もう瑠璃の電話やメールを無視するぞ？遊んでもやらない。』

「…ごめんなさい！」

「「……………」」

…シューーン…………

やけくそに近かったけど、謝れた事は褒めないとな。

『良く出来たな。』と目線を同じにして頭をかいぐり回してやる。
照れ臭そうに笑う瑠璃を抱っこして、固まる二人に伝える。

『一応ここまでやったから許してやって下さい。一気に進歩出来る人間はいませんから。少しずつ経過を見守ってやる事と、口煩く言われると反感してしまいますので優しい口調で指摘してやって下さい。成長につれて、口調も変わると思いますから。』

じゃ、由君。下の自販機で飲み物買ってくるから。先に勉強してて。瑠璃も気分転換させに一緒に連れて行きますね。

メシア、お待たせ。行くか。』

「ああ。」

パタン……

首に回す細い腕、肩に埋める小さな顔、キュッと服を握りしめる小さな手、背中を軽く叩きながら薄暗い階段を下りた。

「正軌、聞いても良いか？」
『何をだ？』

自販機の前。

オレンジジュースを瑠璃に渡して俺はお茶。

メシアはコココ○ラを二本片手に真っ直ぐ見つめている。
何時になしか真面目な表情で。

メシアが口を開く前に、腕の中の人物が挙手。

「俺まだ自己紹介してない！

俺は田中 瑠璃です。顎髭の人が父親です。正軌とは何時から仲良しなんだ？…あ、間違えた。」

「瑠璃、か。綺麗な名前だな。自分の事は『メシア』と呼んでくれ。敬語も要らない。」

正軌とは今年の5月上旬からの知り合いだ。」

「へえー、案外短いんだね。」

俺の事も『瑠璃』で良いよ！」

『ちゃんと言えたな、瑠璃。偉いぞ。』

「えへへ♪あれから先生に教えてもらったんだよ！偉いでしょ！」
「覚えて損はないからな。偉い。」

俺達に褒められて嬉しそうに笑む瑠璃。

あの時に言われた事を覚えて、実行した意思を尊重してやりたい。

褒めるタイミングを誤ると間違った方向に進んでしまう、とテレビや親父の本棚で見た覚えがある。

やっぱり、ガミガミ注意されるよりかは、飴と鞭を使いわけて、鞭7に対して飴3くらいが子供もやる気を出しやすいと思う。

褒められたい一心で取り組む姿は微笑ましい。

俺はメシアに瑠璃を渡して、落とさないよう指摘する。

『軽いな。』と慎重に抱き抱える姿は、生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこする父親みたいで少し笑ってしまった。

瑠璃がメシアに注文をする。

「ね！肩車してよ！絶対景色良いからさ！」

「…努力する。」

危なっかしい手つきでしようとするので、俺が瑠璃の脇を持ち上げ肩に座らせる。

メシアに落とさない程度に両足を握るよう教える。

瑠璃はメシアの頭に手を乗せて、目をキラキラさせている。楽しんでいるみたいだ。

それは安心した。

——ふと、昼間の事を思い出す。

『瑠璃、急用って何だ？』

「ん？あ、そうそう！」

クリアできないダンジョンがあつてさ！」

「ゲームの話か。」

「うん。」

『……瑠璃、俺達は今期末テスト中なんだ。そんな事はサングルさ

んとかに頼め。

因みに、俺はそういうゲームをした事は一度もない。期待ハズレだ。」

「自分は機会のゲーム自体、した事はない。昔、やる前に壊してしまったからな。」

由に頼め。」

「えー！？そんなの男として有り得ないって！！

由は…ちよつと…」

『その偏見はどうかと思うけどな。』

「とりあえず戻るか。」

部屋に戻った時、田中さんと一緒に格闘ゲームで盛り上がっている場面に遭遇した俺とメシアは、ちよつとだけ画面を直視していた。…ちよつとだけな。

中編（期末テスト）

『あ、やばい。そろそろ帰らないと捕まる。』

「捕まる？ 誰にだ？」

瑠璃に構いながらも由君に勉強を教えた。

テーブルに置かれた携帯電話が18時半を示したところで、帰宅の用意を慌ててする。

まだ家が近いので、18時以降も続けたのだ。

駄々をこねる瑠璃を宥め、理由を聞くメシアに『無事に出られたら』と先伸ばしして、由君はのんびり準備するのを急かして、『邪魔しました。』と言ってから田中宅を出た。

由君は平気らしいのでさっさと行くが、俺は控室の件以来警戒するようになってしまった。

あの人達は怖い！

そー…と扉を出て、何食わぬ顔で入口まで歩いてると、

「あ、宮古青年じゃん。」

『！！（ビクウウ！！）』

「あ、本当に青年だ。」

「久しぶりだなあ。覚えてっか？ 俺の事。」

『あ、ドライヤーしてくださった…』

何故か人だかりが出来てしまった。

後ろにいたメシアも、大勢（特に女性）に囲まれてどんどん距離が空いてしまう。

サングルさんにお礼と直接渡せなかった謝罪をしてると、バシバシ背中を叩かれて『律儀な奴だな！ガハハ！！』と笑われてしまった。

背中がジンジンする。

四方八方から質問や声がかかり対応に戸惑っていると、

グイッ！

誰かに腕を引っ張られた。

スッゴク不機嫌な顔で、一言。

「遅いっっ！」

…怒られた。

驚いたまま『ごめん。』と素直に謝る。

このやり取りに周りの人は爆笑していた。

今日是由君から触れてきた。

爪をたてられないかとちょっと不安になる。

長い爪に今はマニキュアは塗っていない。

テストだとカンニング扱いされるから。

ズンズンと歩く由君の後を周りに挨拶しながらついて行くと、後ろから腕を組まれた。

息を荒げているメシアは自力で脱出したようだ。

尊敬するよ、二人共。

「また何時でも来いよー！」

「菓子折り美味かったぞー！ありがとな！」

「メシアくーん♪正軌くーん♪またねー♪」

「今度遊びに行こうねー!!」

入口で腕を引かれるまま一礼して、由君の自宅まで歩いた。

――

「あーっ!もう、お前らは今時の草食系男子か!? あんなもんすぐに逃げろ!!」

『すみません…』

「自分は自力で脱出したぞ。」

「すぐに逃げなきゃ同類だ!!」

着替えてくっから、お前ら荷物持ちだ!!」

バッタアアアアンツツ!!

勢いよく音をたてて扉を閉める由君。

お怒りのご様子だ。

俺とメシアは正座しているフローリングの上から足を上げ、メシアの手を持ち上げてやる。

楽譜が散乱しているテーブルの前に置かれた椅子に腰掛け、何となく歌詞に目を通す。

今回は音楽からではなく、歌詞から考えているようだ。手に持ったのは途中書きのようで、前の紙を探す。

やっと1番初めの楽譜を発掘したのと、メシアが言葉を発するのは同時だった。

「正軌、さっきの話だが…」

『自販機の前のか？

あ、』

バツ！

後ろから楽譜を奪われた。

見上げれば、由君が真っ赤な顔でわなわな震えていた。

楽譜はグシャグシャだ。

まだ途中だったのに、ピロも頭の中で残念がってる。

（あ、くるぞ。）

何、が…

——ビュッ！！ガシィッ！！

「お前は女性の部屋の物を勝手に見るのかよっ！！最低だあ！！死ねえええああ！！」

『ちょ、ちょ、ちょ、謝るから！ごめん！

グーはない！女性でもグーはない！』

「黙あれええええええ！！！！」

グググッ・

鬼のような形相で殴ろうとする由君を、苦しい体勢で耐える。

背骨がミシミシ叫んでいる。

椅子が後転しそうになるが、テーブルの脚に足を絡めて一応維持している。

…けど、長くは持たない事は考えなくてもわかる。

今回は肩の骨も危険度が高い。

関節が外れてもおかしくない力を受けているのだから。

『由君…そろそろ、ギブアップ…！そんなに、丈夫に出来て、ないから…さ…』

「折れちまえ〜っ！！」

せっかく家でしか書いてなかったのに…死ね！今すぐ死んで詫びろ！！」

「止める由。行くならさっさと行くぞ。」

メシアが制止してくれたので、何とか危機は去った。

由君はキッチンらしき場所に行き、冷蔵庫から水が入ったペットボトルを一本取り出して一気飲み。

『ぶはぁ。』と息をつく姿は、風呂上がりのオッサンのようだ。怒りそうだから言わないけど。

俺は体を起こして、メシアに礼を言う。

『メシアありがとう。本気で死ぬかと思った…。』

そういえば、話の…』

「おら、さっさと行くんだろ！

由は先に行くぞ！」

『あ、今行く。

メシア、帰り道に詳しく聞く。』
「わかった。」

荷物を両手に急いで玄関で待つ由君に向かって走った。

メシアが『持つ。』と言ったがメシアには色々助けられてばかりなので、荷物くらいは持つ事にした。

ギターが入ったケースと鞆だけだから、そこまで重くないし。
歩いて行ける距離だから、苦でもない。

歩く度に揺れる淡緑と金色が暗闇で映える。

何時も歩く位置を一步、後ろに下がるだけで景色が一変する。

特定の形がない雲のように、星の瞬きみたいに、人間が気づかないだけで刻一刻と位置を変える月のように、ほんのちよつとの変化。

…その変化を実感して、俺はおかしな事を考えてしまった。
我ながらそういう性格を早めに直したい。

足元がふわつく感覚が、

首筋をつたう汗が、

ドクンドクン煩い心音が、

手がべたつくのが、

自分自身への小さなサイン。

（正軌、お前はそこに立ってるだろ。）

……知ってる、心配するな。
こんなので墜ちたりしない。

（しょっちゅうは困るけど、無理はすんなよ。）

…サンキュ、ピロ。

俺、地に足ついてる。

大丈夫だ、大丈夫。

自己暗示は大切だ。

視界をそっと暗くして、二人に気づかれないよう小さめに口を開き、深呼吸。

夜風と二酸化炭素が肺で入れ代わる。

冷たい冷気が心地良い。

「…どうした？」

「そんなに荷物重えか？軟弱だな、草食系。」

声に目を開ければ、月明かりを背景に由君とメシアが顔を覗き込んでいた。

メシアは何時もの真面目な顔、由君は呆れ顔で腰に手を添える。

気づかれてたのに二割の驚きと、五割の困惑、三割の見栄。

俺は取り繕うように苦笑いを見せた後、

『今日はテストあったから少し疲れてるかな。』

納得しそうな言い訳を並べる。

まあ、長時間眼鏡装着を実際にキツイから…嘘ではない。

テストがあつて良かったと思う。

「ふうーん…疲れたんなら交代すれば？由は別にどっちでもいいーし。」

「正軌、貸せ。」

『有難う。けど、もうすぐ着くからこれくらい平気だ。』
「……そうか。」

夏風に吹かれるままに、俺達は並んで歩いた。

『そういえば、俺に何を聞きたかったんだ？』

“Red tree”の入口まで荷物を運び、他の人達にバレないように由君とそこで別れた。

制服姿のメシアと二人、ピロに人気の少ない道を選んでもらいながら歩を進める。

警察官や大人に見つかったら面倒な事になる。

遠回りでも仕方ないが、21時前までには帰れるだろう。

行きとは違う道にメシアは何も言わずついて歩く。

俺は二、三回ほど中断された話をメシアにふる。

メシアも思い出したように三日月より太い月を見上げて『あー…』と声を出す。

「瑠璃の部屋を出る前に田中さんに言っていた話の事だ。自分には気にかかってな。」

『ああ、あの話か。あれは瑠璃と似た知り合いを見た実体験と俺の感想を述べただけだよ。

その時の話、聞きたい？』

「聞きたい。」

『この話は、他の奴らには他言するなよ。』

コクリと頷いたのを確認して、俺は思い出すようにぼつり、ぼつり、話し出した。

中編（期末テスト）

――あれは、小学四年生あたり…今の瑠璃くらいの時。

俺がまだ記憶がある時代、平和で、けど周りに境界線がハッキリ出来ていた日常を送ってた。

周りより顔が悪いから、

周りより口が悪いから、

周りより背が高いから、

周りより声が低いから、

周りより目つき悪いから、

周りが蔑むから、

周りが嘲笑うから、

周りが陰口を言うから、

周りが怯えるから、

周りが恐がるから、

周りが逃げるから、

周りが仲間外れにするから、

…周りが俺を嫌うから、臆病者の俺は進んで一人でいた。

強がって、独りぼっちで悲しくて寂しくても平気なフリして、同
情の眼差しを向ける奴らを見返してやりたくて、勉強もスポーツも
がむしゃらに努力した。

普通に友達がいて、

普通の顔で、

普通の声で、

誰にでも普通に受け入れられて、

誰にでも普通に笑顔でいれて、

普通に暮らしてる俺とは性別以外ほとんど対象の弟は、俺の1番憎い人間だった。

二つ下だけど、アイツには何もかも負けたくなかった。負けたら、自分自身の存在意義が見えなくなりそうで……俺は否定し続けた。

食事の時は絶対隣に座らせなかったし、話し掛けられても無視して、

触られたら『触るな!』と怒鳴って手を払い驚いている弟を睨みつけ、

部屋に入ったら身近にあった物を投げ付けて、泣いて喚き散らしても何事もなかったように振る舞い、両親に怒られても決して謝らなかった。

殴り合いや口論なんかはしなかった。

時間の無駄だと思ったから。

それほどまでに、俺は弟が死ぬほど怨んでた。

……けど、アイツは毎日話し掛けてきやがった。

俺に傷つけられた次の日も、臆す事なく部屋に現れた。何時もあの煩い声と憎らしい笑顔で俺を見るのだ。

まるで、俺を追い詰めるように。

俺を責め立てるように。

俺を世界から追い出すように。

俺を排除するように……

——ある日、弟が母さんにテストを見せていた。

俺も調度帰って来ていて、テーブルにテストを置いて自分の部屋に戻ろうとした時……俺は弟のテストを見てしまった。

俺と同じ満点のテストを。

母さんは喜んでいた。

俺は絶望していた。

固まっている俺に、弟は笑顔でテストを見せた。

「凄いつしょ♪初めてとったんだ！」

その笑顔で、その言葉で、俺は何かガラガラと崩れ落ち音が聞こえた。

お前が勉強が出来たら、俺はどうすれば良いんだ？

お前に無くて、俺に有るものと言えば、勉強くらいしかないだろう？

親や周りに俺が認められるのは、それくらいしかないんだぞ？

お前はそれを知ってて、お前はそれまでも、

『俺から全てを奪うのか？』

初めてと言っているくらい、俺から話し掛けた。

初めての言葉が、自分を更に地獄に突き落とした。

何故だか……胸に何重にもチェーンで締めて鍵をかけたはずのモノが、ボタボタと床にこぼれ落ちる。

世界に、追放された気分だ。

実際そうなのだろう。

母さんも弟も何故か慌てていて、俺には何で慌ててるんだか意味不明で、どうしても良くて。

狂ったように泣き叫んで、周りの言葉に耳を塞いで、俺は全てを撒き散らした。

『俺の努力をお前は踏みにじる！俺の居場所をお前は奪う！俺の存在をお前は否定する！お前は笑って俺を責め付ける！』

お前なんか嫌いだ！！嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い！
俺にはお前みたいに誰にも受け入れられない！笑えない！優しくさ
れない！お前がいたら……』

俺は永遠に不幸だ。

最後の言葉を飲み込んで、俺はその場に立ち尽くした。自分の言葉が、自分を1番傷つけた。

茫然とした顔で、無音の世界、色が見当たらない視界に『あ、終わった。』終末を向かえようとしていると、誰かの泣き声が耳に届いた。

顔を上げれば、目の前で泣きわめく弟の姿。

泣きたいのは俺の方だ。

泣いて同情したのなら、殴ろう。

気が済むまで、暴力を振るおう。

それがイケナイと知ってても、する。

「お、俺は、！ただ兄貴に、追い付きたくて、毎日必死に、テレビも我慢、して、勉強しただけなのに、！！踏みに行るとか、奪うとか、否定するとか、そんな難しい、事、俺が出来るワケない！！俺は、ただ単純に……

理想（兄貴）と並べば、楽しく話せると思ったただけなんだよおっ！！！！！！

俺は、兄貴みたいに、賢くないし、運動も普通だし、集中すんの苦手だし、敬語とか兄貴使えてるのに俺はちんぷんかんぷんで部活の先輩に怒られっし、母さん達は兄貴の心配ばっか話すし、テスト見せたら兄貴より褒めてくれた回数少ないし、兄貴より身長低いし、年下だし、もう全て兄貴より少ないし……努力しても兄貴に嫌われるし！！

どうやったら俺を弟だって認識してくれるの！！？？ねえ！兄貴！！俺は兄貴みたいになりたいんだよ！！兄貴みたいに努力して結果が欲しいんだよ！！！！俺はただ……

・笑った顔が見ただけなんだよおう……グスツ……うええ……いっじょに、あぞびただけだもん……俺は好き、だもんね……ううう……うわああああんん！！！！」

ぐちゃぐちゃした汚い顔で、

後半何言ってるか聞き取れないほどグダグダで、母さんはエプロンで俺達の顔を交互に拭いてて、ただわかった事は、

コイツも俺を追いかけていたという事だけ。

俺が無我夢中で手に入れたくてどうしようもなかった世界の人間が、俺を懂れていた事実が信じられなかった。

だから、逃げた。

ランドセル放り出して、全速力で階段を駆け上がって、ベッドの中に逃げ込んだ。

全てが恐くなった。

耳に届くモノ全てが俺を否定する言葉のようで、見えるモノは馬鹿にしたように薄ら笑うように見えて、頭を抱えるように耳を両手でギュウ！と塞いで、目をこれでもかっ！てくらい強く閉じて、早くサラに会えば忘れられると信じて、ベッドの中で俺は体を小さくし、カタカタと痙攣したようにベッドを揺らした。

――目が覚めた次の日の朝も、アイツは変わらない笑顔を俺に向

けた。

目が腫れていたけど。

——俺はそれ以来、暴力と暴言で弟に返事をするようになった。

理由はわからないけど、今思えば……あれがきっかけで変わり始めたように思える。

アイツの本心での叫びを直接受けて、動かされた何かが……——

『——とまあ、こん時の愚弟にちよつとだけ重なっただけの話。俺の痛い昔話は、胸の奥にしまっとくか、今すぐ忘れる事。』

あの時はグレなかったのが不思議なくらい、源希に八つ当たりしていた。

今じゃ苦笑いで済ませれるくらいまで年を過ごした。
今でもアイツは笑ってて、憎らしい。

だけど、もう八つ当たりをするほど餓鬼じゃない。

黙って聞いていたメシアが、立ち止まる。
腕を引かれて、無理矢理振り向かされた。

「……今は？」

『今は？』その言葉に様々な意味が込められている事に気づいて、俺は少し黙った。

薄黄色の瞳は、ジッと俺の返事を待っている。

二人の間に、肌寒い風が吹き抜けた。

―俺は、『ふっ』と小さく微笑んだ。
胸に手を当てて、メシアを見つめる。

今1番感じている事を、此処にいない他の奴らにも届くように、俺は言い切った。

『俺は、此処で生きている。』

お前らがいて、本当に倖せだ。

『ありがとう』の言葉が、口にしなくても伝わってますように。

数年先も、アイツらの側にいられて、笑い声を出せますように。

小さく大きな願い事を胸にしまい、今度は俺がメシアの背中を押して歩いた。

この隣にいる存在を確かめるように――

中編（期末テスト）

――土曜日。

朝のメールで、今日はメシアは用事があるらしくて来れないようだ。

それからピロが頼み込むもんだから、二度寝なんかしないのにベツドにまた倒れるように横になった。

何時もの耳鳴りと心臓の音＋頭痛。
数える前に俺達は入れ代わった。

『朝飯食ったら、体動かしていーい？鈍っちゃう。』

（午後に響かない程度にな。）

『Thank you♪』

上機嫌でピロは部屋を出た。

久しぶりだな、此処。

先客いないからさっさと邪魔するか。

（良い思い出があったまるか。）

俺がいるのは、フリー達を捕まえたボロボロの廃墟の工場前。

先に公園に行ったのだが、小さな子供を連れた親と老人が既にいた為、場所を変更したのだ。

物は無いけど、広さはある。

前にメシアが作った出入口を通り、何も変わらない埃っぽい中を見渡す。

ただ一つ、中央にあるはずの血痕が無い事を除いては。明らかに何者かが消したようだ。

あの二人の知り合いか？

確か“あの人”とか言ってたな…

（お前はストーカーだったのか。見損なったぞ。）

違えっ！断じて違う！

アイツらがお前をストーカーしてたから、正軌に気づかれない範囲内に入ったら情報収集してたんだよ！

それより、あからさまにストーカーされてたぞ！

周りを注意しろよな！

俺様がいなきゃ、今頃危なかったぜ！

（あーはいはい。俺はピロのお蔭で助かった事は沢山ありますよ。ありがとうございます。）

ふむ、わかれば宜しい。

さーってと：そろそろ始めよっかな。

『Let's dancing？』

（見惚れるなよ？）』

（ナルシストが。）

正軌の言葉を見殺して、ストレッチをする。

軽く汗が流れたところでポケットから細い布を取り出して、片目を見えないように隠す。

両目からじゃハードル高いから、まずは片目だけ。

肉眼に慣れるのと、俺が普段使ってる他眼タガンに素早く切り替える為の訓練も加えて。

：やっぱり、いざって時に俺が守れねえと、俺がいる理由がなくなる。

傷つく姿はもう見たくないし、アイツらにも聞かせたくない。

男の俺が、やらねえと。

キュッ！

決意と同じように後ろで固く結んで、息をスウー…と深く吐き出す。

——そして、イメージした。

自分が危ないシチュエーションの中心にいる場面を。

前のような少人数じゃなく、この工場一杯の人数。

これを全員倒せたら、クリア。

もし無理だったら、片手腕立て伏せ100回。

利き手じゃない方だからご安心を。

——ダンッ!!

踏み出したのを合図に、戦いは始まった。

タオル持ってくれば良かったなあ…、と後悔しながら帰路を着実に歩いていると、

「お兄ちゃん！頑張って！」

「ほいな。任せとき。」

男の子が柴犬のリードを持って、電柱の上を見上げている。

黒柴はただ黙って上を見守る。

俺達は同時に『茶矢がいる。』と喉まで出かかったが何とか飲み込んで、立ち止まって上を見上げた。

…そこには、電柱をよじ登る中学一年か二年くらいの男子が。

電柱の1番上には降りられなくなった野良猫が切なげに『ミャア

…』と鳴いている。

男子はその野良猫を助けようとしているのか。

その勇敢な心意気に拍手。

俺は男の子と目線を同じにして、上の男子を指差す。

『あの子、君のお兄ちゃん？』

「う、ううん。違うよ。」

僕が降りられない猫に困ってたなら、この犬ちゃんのリードを渡して『持つ』ってな。』って言って、上っちゃった。

お兄ちゃんも助けてあげて！」

『そうか。良い奴だな、あの中学生。』

俺も上ったら下りる時に邪魔になる。二人で黙って見守っていよう。

』
「わかった！」

『良い返事だ。』とクシヤリと撫で下ろしてから立ち上がる。
中学生は上にどんどん猿並に登るが、もうすぐって所で足が遅くなり、猫を救出したと思ったら正軌がある一言を。

（アイツ、足ガクガク震えてんぞ。顔色悪いし、汗が半端ない。
もしかしくなくても、高所恐怖症かもな。）

『え、マジ？』
「お兄ちゃん？」

一向に下りる気配がない勇敢な中学生。
もうしがみつくだけで精一杯のように思える背中。

俺は男の子に『危ないから、電柱から離れてな。』と伝えて、離れたのを確認してから登りだした。
さっきの疲労が残っているが、中学生十野良猫くらいなら問題ない。

身長もあってか、早く中学生に追いついた。
ビクリしないように、静かに話しかける。

『青年、落ち着いて指示通りに動け。』
「あんさん、何者や？」

声が震えている。
身近に近づいて足が小刻みに恐怖しているのも見受ける。
『通りすがりの高校生さ。』と笑って言えば薄ら笑いが返ってき

た。

タンタンと青年の後ろを被うような形にする。

『首に腕回して、そのまま俺にしがみつけ。猫は動かないだろうから安心するといい。』

怖いだろうが、降りられないよりかは一時の恐怖を我慢して助かる方が良い選択だと思うぞ?』

「…せやな、あんさんの言うとおりや。

ちよいと汗くさいけど、我慢しましょ。」

『減らず口は一人前だな。』

青年はもたれ掛かるように背中を預けた後、スルリと腕を回しゆつくり足を絡ませる。

…案外重いな。

小柄なのにほど好く筋肉ある。

何か習ってんのかな。

「正軌先ばーい。」

黙々と下に降りていると、聞き慣れた声が。

下を向けば、男の子の横で茶髪のショートヘアが見上げていた。

今は凜とした顔が、微かに心配そうに唇を軽く噛んでいる。

そんな顔すんなよな。

早めに降りて、青年を下ろす。

前髪を少し上げて後ろに流している。

狐のような目で、ポーカーフェイスを浮かべたまま服の中から野良猫を取り出して男の子に渡す。

ゆったりとした口調で話し掛ける。

「ほい、猫さん無事やったやろ？良かったなあ。」

「ありがとうお兄ちゃん！大きいお兄ちゃんもありがとう！」

『良かったな。』

「ほんま、助かりました。ありがとうございます。」

：せやかて、よう高所恐怖症って気づかりましたな。急に上って来なはった時には驚いてまいりましたわ。」

『上で猫を助けたのに一向に降りてこねえから、もしかして思ってたな。』

あんまし無茶するなよ。』

わしわし青年の頭を乱雑に撫でると、やんわり手を払われた。

こういう事をされるのが嫌いらしい。

横で猫をよしよし撫でる男の子より少し高いくらいの茶矢に向き直ると、茶矢はそれに気づき見上げる。

手には鞆を持っている。

『今から行くのか？』

「はい。正軌先輩を見かけたので、一緒に行こうかと思いつてました。」

会長さん、こんにちは。私服ではわからないものですな。」

『会長…？』

「ご機嫌よう。」

あら、そちらさん自分の事知らへんかったようすわ。残念やわあ。」

……………誰？

（高校の生徒会長。朝礼の時に、毎回出てるぞ。）

多分暇だったから寝てるわ。

長ったらしい話とか苦手だし。

にしても小っさいな、生徒会長。

茶矢とあんまし変わらないような気がする。

正軌がデカイだけか？

（メシアがいるからデカイって感覚あまりねえ。
確か会長、柔道部の部長だったぞ。）

どうりで、筋肉あるわけだ。

これで納得。

『すみません、俺も私服でわからなかったです。

じゃあ、そろそろ俺達行きますね。』

「失礼します。

バイバイ。」

「さいなら。お気をつけて。」

「バイバーイ！」

『じゃあな。』

小さく手を振って、茶矢と並んで歩いた。

後ろで会長が不適に唇で孤を描くのに、誰も気づかなかった。

『にしても、久しぶりだな。茶矢と二人きりっていうのは。』

「そうですね。近頃はテストもありましたから、会える時間が減りました。残念です。」

『ま、テストの順位が良ければ買い物に行くんだから、それまでの辛抱だな。』

テストは順調か？』

「はい、今のところまあまあ出来てます。」

中馬先輩の方はどうですか？」

『一応、赤点採らないのが目標だから何とかやれてるな。家でもちやんと復習するし、真尋タイプだな。』

：教えてる時は「嫌だー、やめたいー」ってグダグタ言ってるのが多いけど。ハハッ。』

「すぐに目に浮かびます。」

夏休みは修学旅行に行かれるのですよね？どちらに行かれるのですか？」

『最終的にやってるから偉いけどな。』

アメリカと北海道だったかな。お土産何が良い？』

「……では、携帯電話で撮った景色をメールで送って下さい。私はそれが良いです。」

『了解。写真と、土産は適当に買って渡すな。センスないから覚悟しておけ。』

「正軌先輩からいただけるなら何でも嬉しいですよ。ありがとうございます。」

『茶矢は謙虚だな。もうちょっと我を通すと、肩が楽になるぞ。』

家に入る前に、ぼん、と肩に手を置いて小さく笑う。

先に家に入った俺の後ろでは、茶矢が頬を赤く染めて触れた肩に手を添えた。

胸がほんのり熱くなり、思いが募るのを感じて：茶矢は早足で俺の後を追った。

・ ・ ・
ガチャ。

「んお、よ。」

『30分遅刻！』

ね、ね、新曲完成した？ i P O O も一曲だけだと寂しいしさ、出来

たらまたダウンロードしてくれない？お願いします！』

「ま、まだまだよ！

そんなの知るか！由以外の曲入れば良い話だろ！」

『俺、音楽知らないもん。由君の曲と歌詞好きだからさ、ファンの一人としてのお願い。…ダメ？』

寂しげに笑みを見せれば由君は『うつ、』って唸った後、急いで勉強用具を取り出す。

出し終えた後もジーンっと見てれば、顔を反らしてブツクサ呟いてる。

お、これは脈ありだな。

これ以上口出ししない方が良さそうだ。
ただ見つめるだけ。

前のめりに顔を近づけて、由君の様子を伺う。

由君は耳まで赤くして、耐えてる。

限界は間近そうだ。

ジーン。プルプル…。

ジーン。プルプル……。

ジーン。プルプル……バアンツ！！

お、キタ。

「わあーったからそんな見んなあ！！完成したら入れてやつから！前の曲も入れてやつから！それで勘弁してくれ！！」

『やった♪ありがとう由く』

「そのかわり、」

ズイツ！と人差し指を突き出された。

思わず後ろに下がってしまう。

由君は負けじ魂で俺に食ってかかる。

やっぱり女は強いね。

こうやって直ぐさま気持ちの切り替えが出来るし。
こういうトコ見習わないと。

苦笑いでいる俺が『そのかわり？』先を促すと、由君は人差し指を突き上げた。

「曲の感想を絶対教える事！

前のやつ、休憩時間に教えてもらうからな！良いな！？」

『えー…』

「返事！」

『アイアイサー。』

んじゃ、勉強始めよっか。』

「お、おう。」

眼鏡を装着、勉強を始めた。

今日は二人だけど、なんとかやっています。

やっぱり、由君はグダグダ戯れ事を並べながらも最後までやる姿に笑ってしまった。

睨まれたのはスルーしたけどね。

中編（期末テスト）

『んじゃ、そろそろ休憩すつかな。お疲れ様、由君。俺は飲み物貰ってくるわ。』

「おゝ…サンキュー…」

干からびた由君を置いて、部屋を出る。

俺も肩凝ったなあ、そう思い肩を回す。

朝のアレもあつたからなあ…シャワーだけじゃ、やっぱり疲れもとれないか。

今日は早く風呂入って寝よ。

リビングに入ると、一年生、S三名と俺の部屋にいろのと似た死体が一体。

突いてみるが反応は無い。

死体の前には空になった皿、握られたフォークが。

先程までヤケクソ&糖分補給をしていたのを物語る。

二つに結ばれた髪の一つを持ち上げ、左右に軽く振る。

長い黒髪がパラパラと重力に従い指から落ちていく。

源希が撫でようとした時はバシッ！と俊敏に手が叩いたけど。

友恵で遊んでいたらとも美がもう用意してくれたので、『頑張れよ。』と背中をトンツと押してから部屋に戻った。

「……嫌いだよ。」

グシャ、両腕を頭の上でクロスさせ髪を手の平で掴んだ。

少女の言葉は、黒猫には届かなかった。

悪態の裏の意味を、周りが気づくはずもないこの心も。

――ガチャリ、

部屋に戻ると、ポ○モンでよく聞くひん死状態のはずの由君が復活したのか本棚の漫画を勝手に見ている。

まあ、別に源希以外なら良いらしい。

源希だったら肘打ちするらしいから、死にたくなけりゃ勝手に読むなよーっと。

一応忠告したぜ、俺。

テレパシーでだけどな。

テーブルの荷物を片付けて、3時のオヤツタイムだ。

今日は紅茶と、とも美手製のマフィンだ。

料理本とあそこのオーナーに色々アドバイスを聞いて、作ってみたようだ。

今日は俺の分もある。

あ、正軌はどっか向いてた方が良いかも。

（んじゃ、少女と遊んでるわ。何かあったら呼べ。）

了解さー。

並べ終えたところで、漫画と俺、交互に視線を忙しく動かしてる女の子に意地悪を言ってみる。

『早くしないと休憩時間終わるよー。

お先にいただきます。』

「あ、由も食べる！勝手に食うな！」

『ちゃんと漫画戻さないと怒る人いるからね？
はい、いただきます。』

「…う、うまい。

宮古の母ちゃん、料理上手だな…うん。」

『うん、生クリームつけてもいい感じ。
でっしょー？自慢の母親だよん♪』

親指をペロツと舐めて、ニヒヒと歯を見せて笑いかける。

俺のじゃないけど、今いない正軌の代弁って事で。

今頃新人と仲良くしてっかな。

サラとも話してると嬉しい。

ふっと無意識に表情が変わったのに俺は気づかず、由君は顔を赤くしてフォークを落としてしまった。

カラン！と甲高い音が皿とテーブルの上で鳴り、俺は何時もの顔に戻った。

『ああー、もおー、どこも怪我はない？顔赤いけど、風邪でもひいた？

ティッシュは何処にある…っけ…』

ベッドの頭の上ら辺のスペースに置かれた箱ティッシュを見つけ、手を伸ばす。

…あ、残念後少しだったのに。

仕方なく立ち上がり箱ティッシュGet。
振り向いた時、思わず質問してしまった。

『…地震でもくるの?』

「……………多分。」

『そっか。でもこのテーブル透けてるから上から丸見えだよ。頭打たないようにね?』

「?!!!」

テーブルの下でクッションを頭に被せて、でも背中から下は出るから由君が予言する地震が来ても腰と背中では絶対痛い。

俺はそんな由君をスルーして、テーブルの汚れを拭い去る。

ポイツとごみ箱に入れて、ティッシュを傍らに置く。

両手を床についてテーブルの下を覗くと、由君は更にクッションを握った。

…俺、何かしたっけ?

自分自身記憶にないんだけどなあ。

どうしよっか、この林檎さん。

手まで熱いよ。

ツンツン、ツンツン、

クッションを人差し指でつつついていると、もぞもぞ元の形に戻っていく由君。

クッションで顔を隠したまま向き合う姿は、ニュースで見かける顔にモザイクしている被疑者みたいだ。

『プスッ。』

思わず吹き出してしまった。
ビクッ！！と肩を跳ねる由君はくぐもった声で言い訳をしだした。

「こ、これはだな、このクッションが気持ちいからしているんだからな！別に、何があったかなんて全然無いんだからな！馬鹿宮古！」

『ごめんごめん。何も無いんだね。
紅茶冷めるよ？』

「冷ましてるんだよ！」

『半分以下のを？クスッ。』
「~~~~！！！」

クスクス笑いながら、最後のマフィンを食べる。
紅茶で流し込み、一息つく。
ルーズリーフにサラッと何か書いて、四つ折にした。
それを気づかれないようノートの最後のページに挟む。

気づくかな？

自宅まで気づかないかな？

ま、どちらでもいいっか。

一応、約束は守ったよ。

ちゃんと休憩時間に教えたからね。

—グイッ！

『はい、かくれんぼは終了！勉強の時間です。』
「バッ！クソッ返せ！」

『俺のだよ？ “返せ”は違うんじゃないかな？ 由君。』

「~~~~っ！！ 便所行ってくる！」

『あいさー。』

片手をヒラヒラさせて乱暴に飛び出す彪を見送る。

…ふあああ、眠い。

由君戻るまで、ちょっと寝てよ。

戻ってきたら起こしてくれるだろうし。

ベッドに上半身だけ乗せて、腕の上に顔を横にする。

うとうとまどろみ、暖かい陽気が手伝ってか、俺は眠りについた。

「…待たせたな、って、は？ いねえ？」

部屋に戻ると、由はテーブルの前にいるはずの人物がいない事にポカンとしてしまった。

顔を動かせば、簡単に見つかる。

規則正しい寝息をたてて、ピロは眠っている。

その寝顔にドキドキしてしまった由は、先ず初めにドアを閉めた。

次に、恐る恐る足音を忍ばせて近寄る。

フルフル震える指先で前髪を退かし、耳にかける。

あまり日焼けしていない肌が見え、無防備な寝顔がよく見える。
それにまたカアア・・・と熱くなったり。

暫くジーンツと見つめていると、ハッ！と我に返る。

勿体ないが勉強をしに来ているのだ、意を決して肩を揺らす。

ユサユサ、ユサユサ、

「み、宮古！起きろ！」

『スゥー……スゥー……』

「こ、こんな所じゃ風邪ひくぞ！起きろっ！」

『んー…』

努力のかいあって起きると思われたが、また眠ってしまった。

ガックシ項垂れる由。

仕方ないので、ベッドにあるタオルケットを肩にかけてやった。

自分はさっき教えてもらった復習でもする。

テーブルの前に座って、パラパラとノートをめくっていれば気づく違和感。

ノートの最後のページから微かに浮いている。

勉強を教えてもらっていたらわからなかっただろう。

由はノートを縦にする。

コトンと四つ折にされたルーズリーフが現れ、それを手にする。

自分が入れたはずのない物、そもそも今はルーズリーフを持っていない。

家を出る前はなかった。

四つ折で何かを隠しているようで、触った限り中に何も入っていない。

宮古が入れたのだろうか？

見ないと始まらないな。

「…文句言っても知らねー。」

カサツ、開いた中央にはシャーペンで書かれた文章が。

近頃見る事が多くなった字、贈り主は確定になる。

目で文字を追って、ある部分で目を見開かせた。

勢いよく眠る人の方を向き、再び文に目を移す。

そこには、こんな事が書かれていた…

「『無題』の感想。

前の続きだけどね、ストーリー的には天使は後悔してる。泣き暮れた日々が想像つく。

けどね、俺てきには」

「…男性は、死に際も倅せだったと思う。だって、天使を宥めながら笑顔で逝った光景が瞼に映るもん。男性は天使にも笑って見送ってほしかったと思うよ？

最後にあんな事しないで、天使は新しい人生歩いたら良かったと思いました。b y 宮古。

…クソッ、不意打ちかよ……」

ルーズリーフに顔を埋め、嬉しさからか恥ずかしさからかわからない熱を受け入れた。

自分が想像していたイメージ以上を彼が感じとってくれた事に、胸が熱くなった。

言葉に言い表せないとはまさにこの事だろう。

予測不能な彼、振り回される自分自身。

時折見せる普段とは違う表情に、優しく撫でる温かく大きな手。

子供のように笑う顔に、今見せる無防備な寝顔。

サラサラの髪の毛の感触が今でも手が覚えている。

唇を噛み締め、ルーズリーフを胸に掻き抱いた。

ほんの僅かに残る温もりを逃がさないかのように……――

「……卑怯だよ、お前はズルイ。

どうしてくれんだ？この痛いのを……クソッ……」

少女がその名前を知るまで、後少し。

……ただ、今だけは、静かに変化を受け入るのみ……

中編（期末テスト）（後書き）

…案外長引いてしまった（笑）

今回は急展開？かな。ヒロインピンチ！無理矢理登場感が否めなかったぞ！↑オマ

けど、影が薄くなりつつあるから仕方ない。↑え

宮古兄弟の昔話はなあ……もうちょい捻りたかた↑そればっかし
ま、アレ以上書いたら病みそうだったから止めたのは秘密です。

次は結果発表だー。赤点者は何名かな？地獄のミツチリ補習勉強☆
のチケットを手にするよ！↑

まだまだ続きます。

中編（褒美）（前書き）

期末テスト終了から数日後のお話。
皆お疲れ様でした（笑）

それでは、

『ハア、マツヂ疲れたしー。何かオ・ゴ・レ・☆
てかさー！この話一体何時になったら終わんの？長すぎグダグダす
ぎへボすぎ色々すぎてチョーウケるWWW
早く完結しろよ！途中のヤツ放置すんなダシィ！！
それと（強制終了。』

な、バリバリギャル系で他の作品を見て下さってるけど、苦情をな
さらない方はどうぞお進み下さい。
本当すみません（土下座）

優等生系の方もどうぞ。

↓

中編（褒美）

——梅雨が終わり夏に入り、蒸し暑い季節に入った。

蟬が煩い昼休みの屋上。

中の冷房が効く校舎とは違って、ムワムワする屋上は汗が止まらない。

全員、日陰のある扉付近にいるが…人口密度がやけに高くあまり意味がない。

全員の手には、一枚の紙が手に握られていた。

俺が口を開くと、全員が視線だけを向けた。

『…これからは階段踊り場で食べないか？

広さもあるし。』

「賛成…あたし死にそう。」

「死ねば良いですよ。」

「また茶矢ったらあ…窪田扇いで〜」

「今日は最高気温36度だって…」

「それは死ぬな…」

「由ちゃん、ボタン開けすぎだよお…」

「日本は何故こんなに蒸し暑い？」

『それはお前が俺に引っ付いてるからだ。

はい、弁当腐る前に全員動け！。』

／「」「」「はい。／おう…。／わかった。／わかりました。

／「」「」「」

ぞろぞろと蟻の行列のように屋上を後にした。

屋上に繋がる階段の踊り場にそれぞれ腰掛け、俺が座る場所には
当たり前のように例の二人が座る。

校舎の中は涼しいから良いけど。

さっきは触れ合う部分がカイロ以上に熱かった。

俺は先ず、由君を手招きして呼んだ。

『最初は由君。俺のも見せるから、由君のも見せて。』

「お前の見たら失望しそうなんだけど。」

……ほらよ。」

『はい。んー…』

向き合う形で座り、それぞれ結果が印刷させた紙に目を通す。

ピロと左右の二人、和葉さんも一緒に覗く。

学年順位はどうでもいいんだ…赤点がないかどうかで…

『国語、ギリギリ。世界史、お、40代。頑張ったな。』

「ザッと見た限り、英語だけだな。」

「わあ…！凄いよ由ちゃん！」

「ほとんどギリギリクリアですけどね。先生方も悔しいでしょう。」

「煩えちびっ子！！」

ん…まあ、良い方だろ。」

顔をちよつと染めて、頬をポリポリ搔く。

褒められた事が照れ臭いようだ。

俺も、あの短期間でよく頑張ったと思う。

体を起こして、由君の頭をクシヤリと撫でる。

『…よくやったな。お疲れ様。』

「……ふん。か、感謝してなくも……ありがと…。」

『後は吉田先生の補習だな。手伝ってやるから、ちゃんと点数とれよ?』

意地悪っぽく笑ってみると由君はふて腐れた顔をタオルで隠した。

吉田なら大丈夫だろう。

ハードル（点数）は上がるけど、テストから出すって言ってたし。

由君も記号問題全部外すのがなければ、まだ大丈夫だったかもしれない。

長文はシカトしたようだ。

せっかく徹底的に教えたのに。

由君のを返して、次は逃げ出そうとする奴を指差し、声をかけた。

『皆月?』

「はひっ!!」

『何処行く気だ? まだ見せてもらってないぞ?』

俺のをさっき見ただろう?』

「はい、正軌兄貴。これ友恵ちゃんの。」

「なっ!!? 馬鹿源希!! いつの間に!?!」

「さっき落とした時に☆」

ニカツと笑みを見せてピースする源希の腹にダイレクトにアップ
ーする皆月。

止めようとする二人に『危ないから止めた方が良い。』と注意して、俺は二つ折りにされた紙を開く。

——そして、固まった。

『皆月：お前……』

「え、えへ……」

『どうして期末なのに総合点数中間と変わってないんだよ！！？？ど
うしたんだ！？音楽頑張ったな！偉いけど、他も頑張れよ！！』

「ヒャー：すみません、ごめんなさい、私が悪かったです。」

『今日、二人共家に強制集合！逃げてでも家まで向かえに行くからな。

…真尋はどうだった？』

「あ、どうぞ……。」

ズーンと座敷童になる皆月と嫌な顔をする由君を放つといて、真尋の結果を渡される。

皆月の結果に頭を痛ませていたが、真尋の結果を見てホッとした。
歴史系は苦手らしいが、他は平均以上だ。

皆月に見習わせたい。

真尋の爪の垢をぜんじて飲ませてやりたい。

『流石真尋だな。』と褒めれば、嬉しそうにはにかむ。

うん、笑顔が似合うな。

俺も真尋に笑い返して結果を返した。

残るは二人の学年順位だが……この紙には載っていない為、玄関の広い壁に貼られた場所に確認に行かないとわからない。

…その前に、修学旅行の部屋をどうするかだ。

和葉さんを見上げると和葉さんも俺に気づいた。

小さく首を傾げてメシアの前に座る。

『修学旅行の部屋なんだけどさ、どうしょっか。』

三人の予定だったから、寝る部屋は別々に考えてたし…』

「前のように四人で眠れば良い。問題ないだろう。」

「前のように!?!」

「そうだよー。弥生にも後で伝えておくね。」

「弥生って誰だ!?!?」

「私の友達だよ。私だけ一緒にの部屋で眠らせてもらおう予定だったんだ。」

修学旅行が楽しみなのかニコニコ笑顔で由君の手を両手で握る和葉さん。

由君は何が何だかわからず、和葉さんになすがままにされている。俺はメシアの提案に頭痛がしたが、それ以外方法がないのも確かだ。

部屋に二人入るのは迷惑になる。

アメリカでは二部屋に別れているし、北海道では襖で区切れば問題ないか。

……本当に良いのか?

和葉さんが肝が据わってなければなあ……いや、良い事だけど。

後は由君が了承してくれば、俺が吉田先生に相談するだけ。

生徒指導には言ってくれと前に聞いたし。

俺はフリーズしている由君に説明する。

『えっと…先ず、アメリカでは一つの部屋に二つのベッドルームがある部屋がある。俺達はそこだから、男女に別れて寝れば問題ない。』

北海道はほとんど同じような部屋で、襖で仕切って寝れば良い。

本当に“俺達は何もしないから”安心してくれ。

吉田先生には俺から話しておくから。」

「良い歌詞が思い浮かぶかもしれないぞ。」

「正軌君とメシア君は大丈夫だよ！由ちゃんも知ってるでしょ？」

「……浅倉も一緒なんだよな？ってか、浅倉は他の女子と組まなかったのか？」

「あ……あはは。私、地味だから……中々馴染めなくて……ごめんねえ……」

「え！？どうした！！？由、何か地雷踏んだかつ？！わ、悪かった！！」

あからさまに落ち込む和葉さんに慌てて慰める由君。

思つきし素直に頷いたメシアの頭を『オイ。』と押して、ため息をつく。

由君はアワアワと焦った顔で和葉さんの顔を覗いたり、ぎこちなく背中を撫でたりする。

うん、気づいてないな。

和葉さんが顔を手で覆い隠しながら、小声で『じゃあ、一緒に寝てくれる？』そう呟いたのを『わ、わかった！』と断言した由君。

途端にガバツ！と和葉さんは抱き着いた。

「やった！約束だよ♪」

「なっ、お前騙しやがったのか！？浅倉！」

「違うよー？本当に馴染めてないんだあ……」

ギョッ：

本心からの呟きと強さに、由君は何も言い返せなくなった。

背中をぽんぽん叩く由君に、和葉さんは笑顔のまま抱きしめた。

——キーンコーンキーンカーン…

寝かかってる二人を小突いて、立ち上がる。

『ほら、授業始まるぞ。さっさと起きろ。』

「んあ…わかりました。」

「…うん。」

『授業中寝るなよ。ほら、立て。』

「宮古ってさ…」

『ん？』

「すっかりコイツらの“保護者”だな。デッカイ子供の父親みたい…プクク。」

『……由君も子供だけどね。』

「何だと!？」

『俺が父親なら、まともな常識がある母親が欲しいよ。ハア。んじゃ、放課後下駄箱でね。』

「「正軌先輩。／＼正軌。」」

『お前達は確実に子供だ。』

はい、その死体拾っておけよー。』

“保護者”と言われて否定出来なかった自分が悲しかった。
ま、賑やかなのは良いけどね。

中編（褒美）

「あ、正軌先輩！」

教室を出れば茶矢が駆け寄って来て、何故かこっそりガッツポーズ。

見て見ぬふりをしておいて、和葉さんに挨拶してから並んで歩いた。

茶矢がいるなら源希か真尋がいそうなものだが、真尋は用事があり、源希は皆月が逃げないよう先に帰ったと教えられた。

もし由君が逃げてたら自転車で行こう。
家までの経路覚えたし。

雑談なんかして順調に歩いていると、人だかりのある場所を見つける。

ワイワイと大きな紙の前で喜んだり、悲しんだり、笑ったり、落ち込んだりと様々な生徒が数字を見て表情を変える。

写真撮る生徒がいるが、ほとんどが女子や特別教室の外国人だ。どうせ好きな奴やメシアの順位でも撮っているのだろう。撮ってどうするのかわからないけど。

メシアと一緒に1番後ろで見上げると周りの女子から黄色い声。男子からは嫉みの眼差しが。

よく見えないので目を細めると、メシアが『前に行くか？』と聞いたが断った。

胸ポケットから眼鏡を取り出してかける。

すると、今度は外国人から悲鳴があがった。

写真撮る音も。

俺は色々無視して、三年生と一年生の順位から見知った名前を探

す。

『あ、今回4位か。勘違いして間違えたのが痛かった。』

「自分は7位だ。約束守ったぞ。」

『凄いなメシア。二学期もこの調子でいけば問題ないな。和葉さんもまあまあ良い順位だな。流石だ。』

「正軌先輩。次は一年生を見て下さい。」

ワイシャツの裾をクイクイ引っ張る茶矢に促され、視線を下に下げ。

順位表は上から三年、二年、一年の順で貼られている。

因みに学年順位1～100位までしか載っていない。

特別教室も同じテストだから見に来る生徒もいる。

一位は相変わらず山下^{ヤマシタ}という女子だ。

一年生からオール満点で一位に君臨している。

顔は見た事ないけど、一問も間違えないのは本当に凄い。

見本にしても良いかもしれないが、俺はそこまで点数を気にしていないからそこまで強く関心しないな。

確か、副会長だった気がする。

一年生の順位を見て、一旦嫌な顔をした。

『……アイツ二位かよ。』

「はい、嫌味なものですな。あそこの部分だけ破り捨ててやりたいです。」

『同感だ。』

水木：は、19位。

19位は頑張ったな！偉いぞ。』

「約束は守って下さいね。正軌先輩。」

『ああ、わかってる。日にち決めてメールしてくれ。』

真尋もまだ下の方だけど、前よりかは確実に上がったな。』

「正軌、1番下。」

『補習者名簿、中馬 由。皆月 友恵。』

：知り合いが載ってるのを見ると、何故か虚しい気持ちになるのは俺だけか？』

「「同じく。」」

暫く三人無言で1番下を見ていた。

俺はコイツらの勉強を見るのか：由君は良いけど、皆月はもうちょつと努力しろよなあ。

教える俺が馬鹿みたいに思えてくっからさ。

『：下駄箱で由君向かえに行ってから職員室行くか。』

茶矢は先に帰って良いぞ。』

「では、途中まで一緒にします。」

下駄箱で由君と入れ代わりに茶矢と別れ、俺達は職員室へと足を運んだ。

「――わかった。アメリカ、では部屋は、決まっていたから、良かったな。後は、私がやって、おく。

気をつけて、帰れよ。中馬、補習サボるな、よ。」

「はいよ。」

『では、失礼します。ありがとうございました。』

「失礼します。さようなら。」

人気が少なくなった校舎、三人は肩を並べて歩いた。

――んで、俺の自由時間。

リビングで由君と皆月に教え終えた俺は、部屋でグッタリしていた。

皆月が量の多さに撃沈して、由君を教えながらも皆月のやる気を出させる為に必至に頑張ったからだ。

結局出来た教科は少なかったけど…。

『風に当たるか…。』

気晴らしにベランダに出て、気分を入れ換える事にする。

――カララ…。

ベランダへと続く掃き出し窓を手で開け、裸足のままヒンヤリとしたコンクリートの上に踏み入れる。

ヒタ、ヒタ、手摺りにまでたどり着くと、もたれ掛かるようにして両肘を置く。

明日は曇りらしく、空が綺麗な物を隠してしまった。

残念ながら俺の好きな夜空を觀賞する事は不可能だった。

俺は顎を腕に乗せて、夜遅くでも明かりが灯る星の代理の蛍光灯をぼんやり眺める。

車の音：家族の笑い声：ネオンの街：ベランダの感触……そして、何かが頭に引っ掛かってる不快感。

——何かが俺に叫び声をあげ、必死に助けを求めているような……気がする。

その正体は今だ不明だが、俺の中で1番大きな存在だと思う。

……確証なんかないけど。

時折頭を震める映像に、初めて見たのに見覚えがあり、知らない顔に懐かしさもあり、聞こえた声で俺は大好きな人だったとわかるほど俺の心は嬉しそうに高鳴る。

今は白い絵の具でぐちゃぐちゃにされていて、顔が全く見えないけど……映像に映る少女は、全て太陽のような明るい笑顔を俺に向けているように、思う。

今はもう、あの時の記憶からの間が全く“無い”。

曖昧とかではなく、無いのだ。

あるはずのモノが、パソコンのデータのように抜き取られて、ポカンと空気が出来てしまったみたい。

……その恐怖が、このベランダに、この手摺りに触れると、より一層強くなる。

子供を失った親のように、付き合っていた者にフラれた時のよう

に、この胸にある大事なモノを失う辛さが心臓を鷲掴みにし、あわよくば潰してしまおうと企んでいるかのようにさえ思ってしまう。

誰かとこの痛みを分かち合う事は、無理だ。

痛い…

苦しい…

恐い…

怖い…

切ない…

気持ち悪い…

わからない…

ヤメテくれ…

もう俺から何も奪い取らないでくれ……

アイツらとの思い出さえも消えてしまったら、俺はもう生きていけなくなる…騒がしくて居心地が良いあの空間に居られなくなったら…そう想像しただけで生きた心地がしない。

『サラの事さえ名前しか思い出せてないのに…クソッ！
何なんだよ、この異様な』

空虚は、何？

言葉にする前に留まった。

もしかして、このように不安になった事も…俺は忘れてしまうような直感がしたのだ。

的に当たるか当たらないかの確率はご覧の通り。

俺の嫌な直感がそのままリアルになったのは、ほとんど。

まさかとは信じがたいが、今ある俺自身が、その証明。

逃れようもない現実が、此処に存在する。

『……やはり、俺は独りでないとダメなのか。
アハハ…クク、クツ……』

自嘲気味な笑い声。

小さな強がりには、今何の意味もなさない。

自分を更に哀れにさせるだけ。

ボロボロとこぼれ落ちる滴をそのままに、ただ自分のいる場所から墜ちないように、足元を見つめる他なかった。

中編（褒美）

今日は雨だ。

そして、今日は日直で早く行かなくてはならない。

『じゃあ、行ってきます。』

「行ってらっしゃい♪」

源希がまだ朝食を食べている時に家を出る。

メシアはまだ来てないが、母さんが説明してくれるだろう。

鞆を肩に掛け、一人道を歩く。

この時間、生徒は少ない。

何故知ってるかは前にこの時間帯に通っていたから。

人が少ない、周りにいない、誰も俺を見ないように避けていた。

小さな俺の逃げ道だった。

：今は、メシアを待っているからという理由もあるが、普通の生徒が通う時間に出ている。

前の俺からでは有り得ない、信じられない、頭を疑うほどだろう。

傘をぽつぽつたたき付ける音とiP O Oから流れる曲を何時もの登校時の日常会話代わりに、曇り空の下を二つの足音が前へ進んだ。

――コンコン、ガララ：

『失礼します。今日日直の三年生です。』

「日直の子か。」

今日は雨だから、三年生の廊下だけね。終わったらそのまま教室行
って良いから。」

『わかりました。失礼しました。』

廊下に置いてある鞆と傘を手に、階段を上がって行った。

教室の鍵を開けて、窓を開けて換気する。

机の上に鞆を置いて教室を出ると、見知った顔が。

相手も俺に気づいたらしく、長い前髪を上げて、無表情で一言。

「おはよ。」

『おはよう弥生さん。朝練？』

「違う。日直。」

『俺も日直なんだ。』

それじゃ、先に箒取っておくね。』

「ありがと。鞆、行く。」

『わかった。』

スタスタと歩いて行く弥生さんと反対方向に俺は歩く。

廊下の隅に設置されたロッカーから箒を二本取り出して振り返る
と、特別教室の生徒が立っていた。

この時間なら彼女も日直だろう。

俺は彼女に箒を差し出して『どうぞ。』と言えば、彼女は一瞬呆気にとられた顔を見せたがすぐに『ありがとう…』と流暢な日本語で箒を受け取った。

『どう致しまして。』と返事をして、ロッカーからもう一本箒を手にしてから閉めると丁度弥生さんが現れた。

今度は前髪を結んでいる。

彼女の横を通り過ぎ、弥生さんに箒を渡せば『ありがとう』と軽く頭を下げた。

俺は先程と同じように『どう致しまして。』と返事をして、並んで反対側の壁まで行く。

彼女も慌ててついて来たが、三人も必要あるかなと思ったが…まあいっか。

三人で黙々と掃いていれば、弥生さんが俺を見ずに話し掛けた。

「修学旅行、聞いた。」

『部屋の話？』

ごめんね、急に断って。』

「別に。けど、回る。」

『ありがとう。』

和葉さんも弥生さんと回るの楽しみにしてた。暇だったら部屋に遊びに来てあげて。きつと喜ぶ。』

「…わかった。行く。」

『俺達の事は気にしなくて良いからね。』

塵取り、取りに行くよ。』

「あ、宮古。あたしが行くよ?」

今まで黙っていた彼女が顔を上げて言った。

外国人特有の金色の髪が揺れ、青い瞳が俺を映す。

ギュッと箒を握りしめて真っ直ぐ俺を見つめて返事を待つ彼女。

暫く沈黙が続いて、弥生さんが掃く箒の音だけが周りに響く。

必至そうな表情を疑問に思いながらも、『それじゃ、お願いします。』と小さく笑みを向けた。

体を反転させると『やった!』と笑顔でロッカーまで走る彼女。

何がそこまで嬉しいのかはわからないが、俺も弥生さんと同じように掃除を続けた。

窓を覗くと雨は引っ切りなし地面に先程より強く振り付けている。ポツポツと生徒が登校する姿が見受けられた。

塵取りのゴミをゴミ箱に捨て、ロッカーにしまうと『お疲れ様。』と告げてから教室に戻る。

特別教室はロッカーに近く、俺達は途中まで少し話してから別れた。

教室には人が少しだけいて、俺は自分の席に直行する。

鞆から用具を机の中に入れてみると、

…トントン、

肩を叩かれた。

ちよつと遠慮がちに。

人物を確認する為に振り向けば、これまた珍しい人物が。

教室にいるのは初めてだ。

雨の日はランチルームといった購買の横でランチを作っている厨房があつて、それらの前に長いテーブルと椅子が置かれたスペースがあり、ランチを食べる生徒の為に置かれた所にいるのに。

俺の部屋に忘れ物でもしたのだろうか？

それとも、今日は雷でも落ちるのだろうか？

それと、補習に落ちてしまったか？…それはないか。

今日は鞆だけ肩に掛けて、俺の横で片手を上げて挨拶する。

「よ、よお、宮古。補習合格したぜ。」

『おはよう由君。おめでとう、頑張ったな。』

今日はどうした?』

「えっと…まあ、吉田に修学旅行に行く条件を挙げられてな。今日から授業受ける事になった。」

…由の席って…ドコ?」

『ちよっと待ってて。』

これは驚きだ。

由君が今日から授業に参加するらしい。

…けど、驚きよりかは『あ、そうなんだ。』みたいな気持ちが強い。

飲み込みが早くなった理由は考えないでおこう。

俺は眼鏡ケースから眼鏡を取り出して、席順が記された後ろの黒板を確認する。

中馬の文字を探して、席を立つ。

俺の列の二つ横の前から四番目。

メシアの席の横の横という事になる。

そんなに遠くない距離だ。

席まで案内すると、由君が気分悪そうに俯く。

俺も気づいてはいたが、周りの目が白い。

陰口をたたく奴らの言葉が聞こえるのは言うまでもない。

下唇を噛み締める由君の苛立ちは前に田中さんの話で怒った事を思い出せば納得できる。

俺も前まではシカトしていたので慣れはあるし由君の気持ちもわかる。

胸ポケットからイヤホンを取り出して、片方耳にはめてやる。

由君は驚いたように顔を上げてイヤホンに手を添える。

俺は眉間の皺に人差し指でグリグリ押して痕にならないようにしてると、額をパッチーン！と良い音たてて叩かれた。

い、痛い…。

由君は怒ったように俺に怒鳴る。

何時ものように。

「お前の行動の意味がわかんねえよ！何だよ？！突然イヤホン耳に突っ込んだと思えば皺をグリグリしやがって！正直痛いわボケ！しかもこの曲由のだし！」

『もう周りを気にしてないでしょ？今の方が由君らしいよ。』

「っ…！」

『休み時間は俺達の席に来れば良いし、アイツらは石像だとも思えば良いよ。雑音は喋ってれば気にならないでしょ？』

「……礼は言わねえぞ。」

教科書入れたら行くから、ちょっとそこで待ってろ。」

『了解。』

イヤホンを返され、由君の仕度を待っていると腕を引っ張られた。そこには息を切らしたメシアが。

こちらはこちらで朝から機嫌が悪そうで、腕を引いて顔を近づける。

何となく言いそうな事がわかる俺は耳を近づける事にする。メシアは唾を一度飲み込むと、息を荒くしたまま話し出す。

「…ッハ、どうして、先に行く？とも美に聞いて、驚いたぞ。」

『俺、今日日直。明日メシアだぞ。』

「……日直？」

『朝7時40分までに学校に行って、職員室に行って、先生に掃除する場所を聞く。』

初めてだから、明日一緒に行ってやるよ。』

「…すまない、ありがとう。」

『やっぱりメールすれば良かったな。』

明日一緒に行くって事でチャラな。』

コクンと頷くのを確認してから腕を戻す。

その間に由君は終わったようで、頬杖について欠伸びながら俺達を見上げていた。

どこか馬鹿にしたような表情に見えるのは気のせいだろうか？

メシアも由君に気づいたのか、俺の肩に腕を乗せて由君を見下げる。

「由は双子だったか？やけに似ている。」

「本物だよ黒澤。お前はいつペン真面目にシバいてやろうか？」

『吉田先生との条件らしい。さりげなく耳に息かけんな馬鹿メシア。ほら、席行くぞ。』

パチン！とメシアの後頭部を叩いて、席に向かった。

後に来た和葉さんもメシアと同じような反応をしたので、由君と見合わせて苦笑いをするしかなかった。

珍しいっちゃ珍しいけど、双子説って考えはない。

そこまで意外だったのはわかるけど、な…。

チャイムが鳴るまで話をした後、由君はメシアに悪態をつきながらも席に着いた。

この二人はよく衝突するな、と気づかれないようにため息をつく。

朝のH Lの時、吉田が感動してハンカチで目元を拭っていたのはクラスのほとんどが引いていた。

由君はiPodから流れる曲を聞いて、シャーペンくるくる回しながら作曲していたから吉田の話を全く聞いていない。

吉田はやけに良い顔でH Lを終わらせた後、『昼休みに、修学旅行の、班長は教室、にいてくれ。』と告げた。

和葉さんが振り向いて『終わるまで待ってるね!』と笑顔で言われたので、俺が班長決定らしい。

……仕方ないよな。

和葉さんは学級委員だし、他の二人は何か心配だし、自分がやるのが1番安心だな。

今のうち英語力上げておこう。

「…これで、全員か？」

教卓の椅子に座る吉田を囲むように数人の生徒が立っている。

教卓の前にはプリントが沢山置かれている。

班長を決めてないから人数は定かではないと思うけど黙っておこう。

吉田は“修学旅行のしおり”を手に取り説明していく。

「今から、各自班の、人数分取り、役割を決める。決めたら、この紙に班全員、の名前を記して、提出する事。

プリントは、大切に目を通して、保管する。『保護者へ』と、印刷されたのは、ちゃんと親に見せる。

以上。質問がなければ、解散。」

俺は四人分を手にして、待っている場所へと向かう。

しおりと紙を先に渡して、シャーペンを一本胸ポケットに入れる。

『話はさっき聞いた通り。

役割はあそこで決めようか。アイツらが待ってる。』

「友恵は不機嫌だろうけどな。」

「確かに。アッハッハッ！」

「それじゃ、購買に行ってから行こっか。」

俺達は教室を出て、ピーピー鳴いているであろう狐を怒らせないように少し急いで歩いた。

「……………で、遅れたと?」

『悪かったな。』

これから遅いと思ったら、先に食べていてくれ。』

「忙しい…のですか?」

『一応俺達三年生だし、進路関係で一緒に食べれない事も増えると思ってな。お前達を待たせるのも嫌だし。』

「正軌兄貴、何処の大学行くの?」

「もう決めてあるのですか?」

『お前（源希）が入れない大学。』

「酷い! うわあああん和葉ちゃん!」

「源希君ならきつと入れるよ! 頑張って!」

「宮古はもうどんな職業に就くか考えてんのか?」

『一応ね。まだ秘密。』

「正軌、此処行きたい。」

『パンフレット持って来たのか。俺は別に良いけど、他の二人にも聞けよ?』

「温泉楽しみだね♪混浴はあるのかなあ?」

『「ブッ!」』

「行かないとわからないな。」

「浅倉先輩って、たまに突拍子もない発言しますよね。ああ、無自覚って怖いわ。」

「そうかな?」

「確かに…ちょっとビックリする事、あるかも。」

「面白いからいーじゃん☆」

『「よくねえわっっ!!」』

「源希君!!」

騒がしい屋上に続く階段の踊り場。

最近噂になっているのを、俺達は知らない。

中編（褒美）

「とも美さん、夏休みは何時旅行に行くのだ？」

「今のところ、7月31日から8月4日までにしようかしらと思ってるのよ♪」

『母さん、日にち増えてないか？俺達を餓死させるつもりか？』

「だってえ、二人つきりって久しぶりだもの。」

それに大丈夫よ！メシア君と茶矢ちゃん、真尋君もいるんだから☆」

「GWみたいに泊まりに来るみたい！俺も二泊三日で真尋の家に泊まりに行くんだ！」

『そのまま帰らなくて良いぞ。』

メシアも止まるんだろ？』

「ああ、伯父に日にちが決まり次第教えるよう言われている。一応、大まかな日程を知りたかった。」

リビングでテーブルを囲んで座る。

母さんは頬をポツと染めて『新しい兄弟が増えるかも...』とか変な発言を始めたので、メシアの耳を両手で塞いでおいた。

意味を聞かれたらたまったものではない。

親父が帰ったらちゃんと注意しておくよう伝えておかねば。

『歳を考えてくれ。』と母さんにハッキリ言っておいた。

しかし、妄想の世界に入ったのか『キヤー！☆☆』と叫びだしたので、源希に任せて無言でメシアを部屋に連れて行った。

―ガチャ。

『あの人は若いな：頭痛い。』

「バフ○リンあるぞ。」

『いや、ストレスからだから。』

ってか、まだ持ってたのかバフ○リン。未開封だな。』
「自分は健康だからな。」

鞆から白いと赤のCMでよく見る箱を取り出そうとするのを止めさせて、俺はベッドに腰掛けた。

ベランダの薄いカーテンは閉めてある。

メシアもクッションの上に腰掛け俺を見上げる。

ジツ・・っと、何かを見透かすように。

…俺からの言葉（SOS）を待つかのように。

『何でもない。』と言えば、きっと怒るだろう。

俺が背を向けても、忠犬ハチ公のように待ち続ける…きっと。
はぐらかしたら直球で質問するだろう。

俺は元々、真っ直ぐな瞳が苦手だ。

顔を逸らしてしいたくなる。

弱さを見ないでほしいと訴えたいくなる。

ベッドに横たわり、メシアの長い前髪を指先で弄ぶ。

メシアはただジツ、と見守るだけ。

遊んでいた手をダランと床に垂らして、ベッドに顔を埋める。

…これだけは、俺も譲れない。

シーツにシワを作り、ぽつ、と呟いた。

『…：そこまで、俺に構わなくて良い。俺よりも自分自身の事を気にかけろ。』

「充分気にかけている。」

吐けば楽になる事もあるぞ。」

『これだけは、な。誰にも俺にもどうする事も出来ない。』

「正軌は最近変だ。何かを耐えてるように思う。」

『…仕方ないんだよ。周りにこれ以上迷惑かけられ』
「そういう事じゃないっ!!」

ダンッ！バキィッ！！

声を荒げて勉強机に拳を殴りつける。

きっと穴が空いたに違いない。

今はどうでもいいや。

「ハァー……ハァー……」

『…………。』

息を切らして俯くメシアを俺は見れない。

黙ってベッドに顔を押し付けるだけ。

暫くの間、静寂だけが部屋を仕切る。

メシアは肩の力を脱いで、右手の空気を握り潰すかのように強く握りしめる。

——きっと悔しいのだろう。

俺に頼られない事を一番悲しむから。

病室の時以来、俺だけに対して過度に甘えたりスキンシップをしたりする理由は知ってる。

俺の事になると何故か俺以上に感じ取る。

それもだいたい予測できる。

俺はスゥー…と片手を伸ばして、トスッとメシアの肩に手を置く。
顔を横にずらして、元気ない頬に人差し指をプスッと刺す。

見上げる薄黄色の瞳に微笑みかけ、ゴロンと仰向けに寝転がる。

『アー…』無意味な声を出して静かに目を閉じた。

ベッドに顎を乗せるメシアの後ろ髪に指を通しすと、スルリと指が抜ける。

目だけを向けて、笑い顔を作る。

小さな虚勢を張るくらい許してほしい。

『…今度さ、気晴らしに付き合ってくれるか？』

「勿論だ。何処に行く？」

『そうだな…今度CONANの映画がやるからそれを見に行くか。前売券を買わないとな。』

「それから？」

『それから…メシアはどうしたい？』

「正軌の気晴らしだろう？」

『俺は特にしたい事はないな。誰かに付き合う方が楽だ。』

「じゃあ、今度泊まりに来るか？たまには家から出るのも気晴らしになる。」

『伯父さんは良いのか？』

「自分が家事をやる代わりに置いてもらっている。煩くしなければ問題ない。」

『じゃあ…行こうかな。この部屋にいてばかりじゃ、変な考えばかり思い浮かぶ。』

「…話せるまで、待つ。ずっと、死に際まで待つ。」

だから“独り”だとは思わないでくれ。前のように喧嘩しても、自分は傍にいるから…お願い。」

『メシアと殴り合いはしたくないなあ。全身打撲も、痛いのも嫌だし。』

今度またダイビングしたら出入り禁止だからな。』

「…見向きもされなければ、するかもしれないぞ？」

『お前は犬か。ハハッ！』

「…犬でも良いかもしれない。」

手に頬擦りをするメシアの頬を軽く摘んでみる。
こんな大きな犬（狼）は困るな。

甘えられて倒されたらたまったものではない。

毎日が格闘だ。

前髪を上げて苦笑いすると、気持ちが少しだけ軽くなったのがわかった。

不安に一滴の水が薄まる感覚。

メシアと話したのが良かったのかもしれない。

それからはしょーもない雑談をして時間を過ごした。

笑い声は絶えなかった。

話している間、俺はずっとこの事だけを思っていた…

………忘れたらごめん。

中編（褒美）

ジリリリイイ……！！！！

「……もう起きてるよ。」

何時も通り、ベッドから墜落してから目を覚ます。

目覚まし時計はあまり役に立たない。

白い天井をぼんやり見上げていると、今日の事を思い出して顔がボツ！と茹で上がる。

今日は、今日は、待ちに待った、やっと手に入れた、勉強したかいがあった、隈が出来たかもしれないがバレなかっただろうか、そんな事より……

「正軌さんと……初デート♪キャー……！！」

やった！やったやったやった！！源希君感謝！！今度ケーキ奢ってあげなきゃ！

あ、お弁当作らなきゃ。」

ジリリカチンッ！

パジャマのまま部屋を飛び出して、キッチンへと猛ダッシュした。

……快晴だな。

今日は茶矢の買い物に付き合っただよな。

何かやけに源希の部屋煩いな。

電話してんのか？

ムクリと起き上がり、携帯電話で時間を確認。

うん、何時も通りの時間だ。

9時に噴水の前に待ち合わせだっけ？

オーイ、ピロ。

起きてるか？

（俺様をスケジュール代わりに使うなって言いたい。

9時で合ってるけどさ。8時半には家出た方がいーよ。）

了解…ふぁ、眠い。

朝飯食ったらニュースでも見るか。

のそのそと着替えて、パジャマを手にも部屋を出た。

ふっふーん♪

今日は茶矢と兄貴の初めてのデートだもんね！

俺の方がドキドキして眠れなかったよ！

きつと今頃どんな服着て行くか迷ってるんだろうなあ…あ、今日は日差し強いから帽子被らないと日射病になっちゃう。

後で兄貴に帽子貸してあげよつと。

シンプルなのあったっけえ？

クローゼットの中から帽子を漁っていると、着信音が鳴る。

この音は茶矢からだ。

どうしたのかな？

ピッ。

「もしもし？ 兄貴の好きな食べ物なら教えたよね？」

「当然弁当の中に入っていますよ。馬鹿にしているのですか？」

「流石は長年片思いしているだけあるねえ♪ある意味尊敬するよ。」

あ！それより帽子ちゃんと被った！？今日は日差し強いから日射病に」

「それなんです！正軌さんは帽子持っているのですか！？見た目を気にしない方ですから、もしかしたらと心配になって！初デートで病院行きになってしまったら…一生トラウマになりそうです。」

ズーン…という効果音が聞こえてきそうなほど暗い声の茶矢。

やっぱし同じ事考えてたか。

茶矢らしくてちよつと笑える。

一生トラウマになるって……店内にいる方が長いからそこまで心配しなくても良いと思うよ。

こんな時だけ冷静じゃなくなるのは長年の付き合いだから慣れたけどね。

正軌兄関連になると、皮が剥がれたかのように素が出る。

敬語なのは仕方ないけど……ちよつと寂しいかな。

ま、兄貴と付き合ったらタメ口になるかと思えばまだ良いかな。

苦笑いしていると、茶矢はドンドン危ない方向に進むので慌てて止める。

「俺も後で兄貴に渡そうとしていたから大丈夫だよ！安心して茶矢の服を選びな！！」

「そうですか。頼みましたよ。

しかしながら、それにも迷ってしまして……」

「あれ？1番お気に入りの服にしないの？俺は可愛いと思うけど。」

「前に制服で買い物に付き合っていたいた時、友恵に馬鹿笑いされなから『あんたと先輩、後ろから見ると兄妹みたいで笑えたわよ！キャハハハ！』とされた事がムカついてしまして。悩み中です。」

「……本当、友恵ちゃんも意地悪だねえ。

んじやさ、写メ撮ってメールで送ってよ！俺が決めてあげる！！」

「……まあ、一人で悩むよりかは最善かもしれないね。チャラ男の源希君でも。」

「あのね、俺も兄貴も誰かと付き合った事、一度もないんですけど？見た目だけで判断しないでくれる？ってか茶矢が1番知ってるでしょ！？」

「……正軌さんはあるではありませんか。馬鹿源希君。」

プツ、ツッ、ツッ、ツッ…

「あ、地雷だった…。ごめんね茶矢！」

♪♪♪…

ん？メールだ。

誰だろ、こんな朝早くに。

画面をカチカチしていれば、よく知るアドレスが。

本分には「一分以内に電話する事。」と短い文章の下に写真が載っている。

なんだかんだ言って頼ってくれている事が嬉しくて、自然と笑顔になってしまう。

んー…と写真を暫く眺めてから、俺は親友に電話した。

――
玄関で靴を履いているのに、後ろの二人はワイワイガヤガヤ騒がしい。

ただ買い物に付き合うだけなのに。

何をそこまで心配するのだ？

準備はしたし、帽子もピロに言われてクローゼットから一つしか持っていない布地のキャップを被ったし、財布持ったし、携帯も持った。

小さな肩掛け鞆に必要な物は入ってる。

こんなに天気が良いなら折り畳み傘は必要ないだろう。

騒がしい二人を放つという、ついに行きそうな二人を親父に任せて、俺は待ち合わせに遅れないように家を出た。

店が立ち並ぶ商店街を真っ直ぐ歩いていると、中心部に噴水がある広いスペースへとたどり着く。

噴水の周りには涼む為に来る人が多い。

時計台を見上げれば、時間に結構余裕がある。

今日はやけに暑いから自販機で飲み物でも買っておこうか。

そんな事を考えて噴水から少し離れた場所で自販機を探している
と…

「あ、こんにちは。」

『ん？ ああ、真尋の妹さんか。』

「真理です！ 宮古先輩も待ち合わせですか？」

満面の笑顔で話す真理ちゃん。

真尋そっくりの顔に自然と癒される。

微笑みながら眼鏡を押し戻す。

『そんなトコ。真理ちゃんも？』

「はい！ 友達と買い物に行くんです♪

宮古先輩眼鏡をかけているから、最初はわからなかったです！ 似合いますね！」

『そうかな？ ありがとう。』

後、敬語じゃなくていいから。普通で良いよ。』

「ありがとう！ じゃあ、正軌さんって呼んでも良いかな？」

『自由に呼んで。』

あのさ、この辺に自販機ない？ 飲み物買いたいんだ。』

「それならあそこにあるよ！」

…あ、友達だ！ やっほー！

ではお先に！ また今度ゆっくり話しましょうね♪」

『ありがとね。気をつけて。』

元氣よく手を振りながら走る真理ちゃんに手を振り返して、俺は教えられた自販機へと歩いて行く。

茶矢はまだ現れない。

俺はお茶を二本持って、噴水の縁に腰掛けた。

日差しは強いが噴水の水が気持ち良い。

ボケーっと俯いていれば、目の前に誰かが立っている事に気づいた。

その人物はしゃがみ込んで俺を心配そうに覗き込む。
今日はよく人に会うなあ。

「えと…正軌先輩、ですよね？気分悪い、ですか…？」

『おはよう、真尋。ボーツとしていただけだよ。そんな顔するな。さつき真理ちゃんに会ったぞ。』

「あ、今日は友達と遊びに行くって…楽しそうでしたか？」

『ああ。終始笑顔だったよ。真理ちゃん元気良いんだな、病室の時と違ったから少し驚いた。』

「それは安心しました…良かった。」

真理は昔っから、元気に笑うんです。」

自分の事のように嬉しそうに笑む真尋。

妹思いの優しい兄さんだな。

兄妹揃って見ているこっちが癒される。

窪田家は癒しのオーラを持っているんだな。

よしよしと髪がボサボサになるまで撫でてやると、照れ臭そうに俯く真尋。

そして、ふと気づく。

『真尋は何処に行く予定じゃないのか？』

「…あ！バイトに遅れちゃう！」

す、すみません、ボク行きます！」

『バイトやっていたのか、気をつけてなー。』

…もうすぐ9時だな。』

時計台を見上げて小さくため息。

窪田兄妹のおかげで時間はつぶせた。

二人には感謝せねば。

今度何処でバイトしているか聞いてみようかな…仕事ぶりを見てみたい。

一緒に仕事している人はきっと癒されるだろう。

あれ？癒されてるのは俺だけか？

……………俺だけか？

（あのー、そこで自問自答してるその兄さん。）

なあ、真尋って普通に癒されるよな？

（いい子だとは思うけど。

それよりも、さっきから言おうとしてたんだけどさ。）

言えばいいじゃねえか。

何を遠慮する必要がある。

お前らしくない、キショイぞ。

（前々から源希と扱いが似ているのに俺様気づいてたよ。心臓が痛い、ウウツ。）

そーいやそうだな。

で、何だよ？

（うん。あのさ、正軌が来る前から茶矢いたよ？自販機買ってたか言おうかなあと思ってたけど、気づくかなあと思って見守ってたけど気づかれないみたいだから。）

……………何処にいる？

見た感じワンピース少女はいないと思うけど。

まさか、俺の反対側とか？

まさかな…ハハハ。

（大正解。

茶矢は緊張してんのか、ずっと前だけ向いてるし。面白いけどね。）

早く言えよ！！

俺達このままずっと待ってたかもしれないぞ！？

（え？八つ当たりッスか？流石の俺様もショックだよ。）

…………ごめん。

ありがとな、ピロ。

感謝するけど、もうちょい早く教えてほしかった。

（うん、俺もごめん。お互い様って事で。）

だな。

よし、やっと対面するか。

腰を上げて噴水を回る。

すると、何時もと服装は違うけど見慣れた身長を発見する。
ほとんどワンピース姿しか見てないから新鮮だな。

ニュースでやってた“ガリリックファッション？”だっけ。

うんうん、似合ってる似合ってる。

しかも本当に前しか向いてないから本当に面白い。

背筋をビシッ！と伸ばして、ハットを深く被ってる。

何をそこまで緊張するのか、少々疑問だな。

暫く眺めてたい気持ちもあったが、時間が時間だけに端から見て可笑しい少女に声をかける事にした。

『よ、茶矢。』

「おおおはようございます！正軌先輩！」

『ククッ、声ひっくり返ってるぞ。』

俺も20分前に着いてたんだけど、反対側にいたから気づかなかったわ。待たせて悪かったな。』

「い、いえ！そんなに待っていません！私も先程来たばかりですから！」

『嘘つけ、そんな気を使わなくて良い。』

これ、温くなって悪いな。暑いから自販機で買っておいんだ。』

「あ、ありがとうございます…嬉しいです。」

両手で受け取る茶矢。

ペコッと頭を下げて、お茶を一口飲む。

『美味しいです。』とニコッと笑みを見せる茶矢に、俺も『そうか。』と笑い返す。

慌ててお茶を片方の鞆に入れ、スクッと立ち上がる。

二つも鞆を持って、沢山買うのかな。

「今日はお願ひします。」

『そんな畏まらなくても。』

何処の店から行くんだ？』

「えと、あちらです。」

指差す方を一度見て、『時間もあるしゆっくり行くか。』と言って歩き出す。

茶矢も慌てて一歩後ろを歩く。

…何故、並んで歩かないんだ？

俺は茶矢の背中をポンッと押して、一歩前に出す。

主導者が後ろでは変だろう。

茶矢は一瞬驚いた顔をしたが、そのまま大人しく横を歩いた。

夏休み近いからか、この時間にもかかわらず人が多い。

特に女性やカップルが目映る。

夏休みに出かける為の服でも見ているところだろう。

俺はそんなに服は必要ないと思うけどな。

……それよりも、さっきから茶矢が無言なのが気になる。

遅くなったのに怒ってるのだろうか？

んー…困った。

（手でも繋げば？ 人が多いし、はぐれたら大変でしょ？）

…けどな、前に触ったら嫌がられたからな。

これで『嫌です。』って拒否られたら結構落ち込むぞ？

お前やってみるか？

（いや、由君で体験したからいいや。

取り敢えず、言ってみ。さりげなく手を繋げ。）

……拒否られたらピロのせいにするからな。

俺は俯いて歩く茶矢の手を取って、そのまま歩く。

茶矢はバツ！とやっと顔を上げたかと思えば、俺の顔と手を行き来する。

ほらみろ、動揺しているじゃねえか。

帽子を少し上に上げて、茶矢を見る。

『今日は人が多いだろ？ その保険。店に入ったら離すから安心し』
「いえ！このままで！」

ギュー！

『…ッフハ！そうか、そうか。わかったよ。』

「え、あの…すみません…」

『何を謝る？俺は元気な方が好きだぞ？』

「！！は、はい！」

『けど、声量はほどほどにな。疲れちまうから。』

「…ふふっ、わかりました。」

やっと普段通りの茶矢になった。

俺も喉を鳴らして笑う。

茶矢は『兄妹でも、手を繋げるなら良いかもしれない。』とちよ
つとだけ迷った。

中編（褒美）

こちら女性用の洋服店の中。

カップルがいて、男性が俺だけじゃない事に安心する。

横にいる茶矢はズウン：と暗い影を背負っている。

「本当にすみません：お店を通り過ぎたのに気づかれなくて、商店街の入口まで延々と歩いてしまいました：すみません：」

『いや、俺は気にしていないから。そこまで気に病むな。』

ほらほら、服を選ぼうぜ？落ち込んでると時間が減っちゃうぞ？』

「は、はい。」

茶矢に手を引かれるままに洋服の中を歩く。

へえ：こんな服まであるんだ。

昔、母さんの服を選びに連れ回された以来だから品揃えの違いにちょっとビツクリ。

こんなヒラヒラしてて大丈夫なんだろうか？

夏なら涼しそうだけどな。

あ、これ友恵が着てそう。

この帽子、由君好きそうだな。

（あー、確かに！

けど、違うデザインないかな？おしいんだよね。）

んー：コレとか？

（微妙。俺様ちよつと探してくる。）

行ってらっしゃい。

……コレ茶矢に似合いそうじゃね？

って、ピロ行ったんだったな。

本人に聞いてみるか。

『茶矢、コレ似合いそうじゃない？この薄黄色の服。』

「どれですか？」

『コレコレ。ちよつとデカイか？Lか…』

「Mサイズを探してみましよう。見つけれたら試着してみます。」

それぞれ片手で探して、奥の方にハンガーでかけられているのを発見したら茶矢はすぐに試着室へと入った。

俺は待つてる間、試着室付近の服を物色する。

その間にピロが帰って来た。

良い物が無かったらしい。

落胆のため息をしているのに苦笑して、一緒に服や帽子とかを見て話し合っていると、

「正軌先輩？そこにいらっしゃいますか？」

『ん、終わったか？』

「はい。」

シャツ！

カーテンが開かれ、先程俺が勧めた服を着ている茶矢が現れる。
ピロと二人して『おー』と小さく拍手。

照れ臭そうにもじもじする茶矢。

（正軌が選んだの？普通に良いじゃん。似合ってるよ。）

自分でも俺にセンスがあるとは思わなかった。

センス持ってたんだな、こんな俺でも。

腕組みして頷く俺に茶矢は嬉しそうに『じゃあ、他のも選んで下さい。』と言ったので、着替え終えるまでそこら辺を物色していた。

（んじゃさ、あっち見に行こ。色々あったよ。）

じゃあ、茶矢が出たら行くか。

帽子を鞆の中に入れて、落ちそうな眼鏡を上上げる。

服を持って出た茶矢の手を引いて向こう側に移動する。

茶矢の好みも考えて三人で色々と手に取っていると、店員がやって来た。

「いらっしゃいませ〜♪何かお手伝いする事はありませんか？妹さん…の服をお探しですかぁ？」

「後輩です。今は必要ありません。」

『二人で大丈夫です。』

お気遣いありがとうございます。』

「あ、すみません〜…。」

何かありましたら、近くにいますので〜。」

そそくさと行ってしまう店員。

俺は気にせず帽子を見ているが、茶矢は不機嫌そうだ。

そりゃ、こんな顔の俺の妹って言われたんなら気分悪いだろう。

愚弟の頭がおかしいのだ。
源希と茶矢を取り替えたら毎日面白そうだとは思うけどな。
いっそ、交換したい。

ふて腐れる茶矢の頭にポンツと帽子を置いて、ピロに聞いてみる。

（さっきの黄色と合わせれば似合うんじゃない？）

このダボツてしたのが良いよな。

茶矢に言ってみるわ。

『この帽子さ、その服と合わせたらどう？可愛いと思うぞ。』

「！！可愛い…ですか？」

『ん？可愛いのは嫌いか？』

「いえ！好きな方です！

……よし。」

俺が見えないようにガッツポーズする茶矢に、ピロがクククと笑って見ていた。

俺が『どうした？』と聞くも（べつつにー。）ってはぐらかされた。

けど、聞かなくてもわかるから本当は聞く必要ないんだよね。

茶矢ガッツポーズ好きだな。

選んだ物をもう一度試着して、数点をレジに持って行き、店を出た。

茶矢はご機嫌な様子だ。

俺は茶矢の荷物を持ち、次の店へと足を運んだ。

次は、前に訪れた事もある雑貨屋。

メシアと皆月が現れて、結局何も買わずに終わったけど。

中はやはり女性が多く、カップルがいるのに安心した。

この女性だけの空間に男一人はやはりキツイ。
変に勘違いされたら困る。

茶矢は小物を手に『可愛いですね。』と楽しそうに見て回る。

俺も横で色々とピロと話していると、ヘアゴム発見。

最近暑いからヘアゴム欲しかったんだよな。

校則で色とか指定されてないし、今買おっかな。

何色にしよう。

（ピンク色とかは？笑）

シメるぞピロリ菌。

黙ってヨーグルトの中に入ってる。

何もついてない無地が良いな：何かないかな。

「どうされました？ヘアゴムを探しているのですか？」

『んー：髪伸びたからな。メシアが持つてるヘアゴムみたいな無地ないかと思って。』

「他にも雑貨屋はありますよ。気に入る物がなければ違うお店に行きましょう。」

『けど、欲しい物があるんだろ？俺のは帰り道にでも買うからい』

「いえ、私も特にありませんでしたので。」

さ、正軌先輩。次に行きましょう。」

『ちょ、ちょっと待て茶矢。ヘアゴムまだ片付けてない。』

手にしていたヘアゴムを片付けて、茶矢について行った。

何か強引だったけどこれは茶矢の優しさだろう。

ズンズン先を歩く茶矢に、さっきとは反対だなと小さく笑って『ありがとな。』と呟いた。

それが届いたかはわからないが、歩くペースが速くなったように感じた。

あの雑貨屋から少し離れた見た感じ洒落た雑貨屋。

広さはさっきのより少し広い。

中も外見と同じ落ち着いた感じで、今回は女性だけだった。

さつきより少ないからまだ大丈夫か。

茶矢は常連なのか、ヘアゴムが置いてある場所へ直行する。
色んな種類があり茶矢も横で悩んでいる。

俺も適当にピロと話し合いながら眺めていれば、また店員が現れた。

「いらっしやいませ。

そちらの可愛い彼女さんにプレゼントですか？」

『あ、いや違います。俺が使うのを選んでもらってるんです。』

「あー、確かに髪が長いですね。

えと…お客様大丈夫ですか？ご気分でも…」

「…大丈夫です。ちよつと立ちくらみがしただけです。」

片手で顔を隠しているが、耳まで赤いのが丸見えだ。

何か変な事でも言っただろうか？

心当たりないんだけど。

（否定しなかったからじゃね？彼女だって事。）

あ、否定した方が良かったか？

気にならないからスルーしてたんだけど。

（いんや、内心物凄く嬉しがってるからしなくてOKだと。否定したら落ち込むぞ。）

ふーん、よくわからないけど、このままにすればいいんだな。
何が嬉しいんだ？

普通嫌がるんじゃないか？

(…人それぞれだよ、正軌。そろそろ茶矢が哀れに思えてならないぞ俺様。

頑張れ少女！)

……………？

ピロと話している間に茶矢が『二人で大丈夫ですから。』とまだちよつと赤い顔で店員を返していた。

また二人でヘアゴム選び。

ピロは(店内回ってくんね。)とどっか行ってしまった。

繋いでいる手が汗ばむが、茶矢はずっと握ったまま。

俺は茶矢が離す気配がないので、軽く手を包む感じ。

茶矢が黒いゴムに銀の凸凹の短い筒^{ツツ}がついてるゴムを俺に渡した。シンプルで銀細工には細かいデザインがあるが、そこまでこつてなくて俺好み。

一目で気に入った。

『ありがとう』と言う前に、ピロが俺を呼んだので振り向く。

目の前にはフワフワと浮くヘアピンが。

考える前に叩くように取った。

お前は何やってんだよ！ドアホ！！

(いや、コレ由君に似合いそうだと思ってさ。

大丈夫、床にバレないように浮かばせて持ってきたから。安心しな☆)

☆って何だよ、お前が知らないだけで本当は誰か気づいてたらどうすんだよ!!

浮かせる前に俺を呼べ!

危険な事すんな!

それより、茶矢に似合いそうなの持って来なさい!

物事の優先順位を見極めろ!

(すんません。次からは気をつけまっすー。)

…買ってほしくないんだな?

よくわかったぞ。

コレ何処に置いてあった? 白状しろ。

(いや、マジでごめんなさい。次からは本当気をつけるから、頼みます。お願いします。)

最初っからそう言えばいいんだよ。

馬鹿ピロ。

俺は茶矢から手を離し、レジを指差す。

『ありがとな。じゃあ、先にレジに行って買ってくるから、色々見てて。』

「わかりました。」

ヘアピンが気づかれないようさつさとレジに行く。

先程の店員がレジ打ちをしてくれた。

俺はヘアピンを指差して『コレ、プレゼント用にお願いします。』

と小声で言えば『あ、彼女さんにですかー？ふふっ、わかりました。』と意味深な笑顔で言われた。

……何も言わないのが吉だろう。

『友人の代わりです。』と言えば言い訳にしか聞こえない。

大人の女性は神崎さんを例に、俺らの上の上をいくからな。

“触らぬ神に祟りなし”とはきつと男性が考えたんだろうな。
くわばらくわばら。

満面の笑みで二つ渡されて、すぐさま鞆に押し込んだ。

ピロに悪態をつきながら、茶矢が迷ってる所へと早足で向かった。

中編（褒美）

色んな店を回っていれば自然と時間が過ぎるのも早いもので、携帯電話を確認すれば12時を過ぎていた。

腹が空くのも当然の事でそろそろ昼飯を食べたくなる。帽子のつばを上げて適当なファーストフード店を探す。

キョロキョロしていると茶矢もそれに気づいて声をかける。

「何かお探しですか？」

『いや、そろそろ昼飯にしようかと思ってな。茶矢は何食べたい？』

「あ、でしたらお弁当作りましたので、あそこに行きましょう。」

『あそこ？あ、おい。』

手から荷物が落ちないように、急ぐ茶矢の後を早足で追った。

この鞆には弁当が入ってたのかと納得しながら。

商店街を抜け、そこから数分歩いた所の小学校を抜け、裏の雑木林へ。

小学生の時に教師に『危険だから入ったらダメ。』と注意されていたので入るのは初めてだ。

同年代の奴らのほとんどが入って教師に怒られてたのを思い出す。

：アイツら馬鹿だな、約束守れよ。

呆れ顔で注意されてるのを見ていた。

小さいながらに律儀に守っていたなあ俺。

別にあの時は勉強一筋で周りに興味持たなかったし。

今となっては懐かしい思い出話だ。

……今は高校生だから入っても問題ないよな。

獣道を手慣れたように歩く茶矢。

障害物も難無く越える。

俺は身長もあって木の枝やら草やら変な凹凸の道にてこずり、中々思うようについて行けない。

幸い、茶矢が手を引いてくれているのが唯一の綱だ。

俺が足を引っ張ったせいもあり獣道を10分くらいかかってしまった。

光のある方へ進んで行くと、そこは――

『……階段?』

「これを上れば、秘密の場所に到着です。」

神社のような石の階段を茶矢に合わせて一段ずつ上がっていく。そこまで長くない階段を上りきり、古びた社の裏を覗けば……

――ザアア……

『……凄い、な。』

――社の裏からは、街が一望出来るほど高く、空が近く感じるくらい景色の良い場所だった。

強い風が吹いて飛びそうになる帽子を外し、俺は景色に見惚れていた。

18年ほどこの街にいるが、こんなに綺麗な場所は初めて見た。みんなが怒られてまで行きたかった気持ちだが、今ならわかる。

あの時の俺がこの景色を見ていれば……少しは変わっていたかもしれない。

それほどまでに、この場所から感じるモノに俺は何かを強く揺れ動かされた。

何であの時の俺は此处に来なかったのだろうか……今まで知らなかった事が1番悔しい。

景色から目を離せずにいる俺の横で、茶矢はポツリと呟いた。

「この場所：昔、源希君に教えていただいた穴場スポットなのです。是非一度、正軌先輩とこのように一緒に眺めてみたくて：」

『……俺は馬鹿だな。お前達より先に生きてるのに、こんな素晴らしい場所を知らなかったなんて。

どうしようもないくらい悔しい。』

「：何時来れたじゃなく、今こうして出会えた事が重要ではありませんか？時間は関係ありません。」

『……茶矢には敵わないな。』

一度見つめ合うと、再び別次元のような街を眺める。

…この景色も、

この時の感動も、

この会話も、

この風も、

この色も、

この空も、

この温もりも、

この頬を落ちるモノも、

この場所を誰といたかも、

この日の事を全て忘れてしまう時が来るかもしれない。

それに気づかないで一生を過ごしていくかもしれない。

俺は何かを失っても、こうやって普通に暮らすのか。

人は案外丈夫に創られているものだな。

神様は酷いものだ。

…なら……この胸の痛みもどうか忘れてしまいたい。
何かを必死に捜し求める俺自身を、どうか無かった事にしてほしいと願ったらズルイだろうか？

未来に怯える日々をリセットしたい。
過去に囚われている醜い俺を、誰も見ないでくれ。

——この景色は今の俺には綺麗すぎる。
奥底に隠していたモノを吐き出して楽になりたくなくなってしまったんだ。

そんな俺を、記憶の子は『卑怯』だと蔑むだろうか？
俺はもう嫌なんだよ…考えるのに疲れた。

『……なあ、茶矢。』

「何ですか？」

『俺がさ、もし茶矢の事忘れたら……』

…ごめんな。』

縋って助けを求める俺を、どうか見捨てないで……—

中編（褒美）

……思わず『え？』って聞き返してしまいそうになった。

私より一回り大きな手から伝わる振動と、この景色を映す彼の瞳からこぼれ落ちる涙は本物だった。

辛そうに口を歪めて、怯えた声で謝罪する彼は何かを耐えてるように思えた。

…それを、私に少しだけ晒した。

明かしてくれたのが嬉しい半分、正軌さんの痛々しい姿に何をすれば良いのかわからない私がムカつくのが半分。

彼の違和感には気づいていたけど、かける言葉が見つからず今日まで延びてしまった事実。

今日のデートで気分を変えてもらおうという予定だったけど、この場所に連れて来てしまった数分前の自分を怒鳴り付けてやりたい。

何かが彼の地雷を動かしてしまったのか、私にもわからない。

臆病者だと言う彼が何を我慢しているのか私は知らない。

……私に言える事はただ一つ、ハッキリ彼の目を見て言い切る。

「忘れたら思い出させるまでです。」

戯言だと笑うかもしれない。

今の彼が何を欲してるのかは彼もわからないと思う。

私の頭では理解不能な事が多過ぎて、あーもう今は糖分が欲しいや。

脳に糖分は必要だ！

もう私が思ってる事を伝えれば良いや！

高校生一年生、現役女子高生の意地を見せます。

「正軌さんが私を忘れても、もし一生思い出さなくても、私を記憶から削除するって未来が決まっても、私は負けませんからね？嫌ってくらい新しい思い出作って、消すのが大変なくらい作れば一個くらいは正軌さんの中に残るでしょう？もし正軌さんの脳がオール削除しやがっても、一から作り上げればOKなのですよ！

謝るくらいなら今から沢山思い出作りましょう！私以外も忘れてしまふかもしれないなら、今から作れば良いじゃないですか！ぐずつて時間を過ごすよりかは最善かと！

私が正軌さんの中に消えたなら、また現れてやりますよ！何回消されてもしつこく現れて思い出を築き上げていきますよ！

私が一般女子高生みたいになよなよしていると思わないで下さいよ！！！！

「ハアツ…ハアツ…ハツ、ハア―…」

…一氣に喋ったから疲れた。

息切れ半端ない。

マラソンした時並に全身運動したみたい筋肉が疲労している。

同じような事を繰り返してたように思うけど、まあ何でも良いよ。

私は屋上で貴方と対面してから、貴方を遠くから見守る事は止めたから。

視界に貴方が入れば、足遅いけど猛ダッシュで貴方に向かつて存

在を気づかせてやるんだから。

もう私は眺めているだけの私じゃない！

自分の意志を貫く。

言った言葉に責任を持つ。

間違いだと思えば誰であろうと注意する。

困っていたらすかさず手を貸す。

……これら全て、正軌さんから教わった教訓ですからね。

忍耐強いのが、私の長所ですから。

言った言葉はキチンと守りますから、覚悟して下さいね？

——まさか、茶矢に怒鳴られるとは思わなかった。

両膝に手をついて肩で息をしている少女の言葉に、流れていた涙も止まり、啞然としたマヌケ面で茶矢の話を聞いてたと思う。

鏡を持ってないからわからないけど。

最後の『一般女子高生』は茶矢らしい発言だな。

茶矢をなよなよしていると思ってないし、見くびってもないけど。

……怒る茶矢は何となくメシアと重なって見えてしまった。
それを言ったらきつと不機嫌そうな顔をするんだろいうな。
内緒にしておこう。

眼鏡を外して手で目を擦り、それから茶矢の背中を撫で下ろす。
何故か笑いが込み上げる。

『…ツプ、ククク…アハハハッ!!』

「な…何ですか、人が怒ってるのに……」

『いや、茶矢らしいなと思ってさ…クフフッ！』

・ ありがとな、茶矢。怒鳴られたおかげで何かスッキリした。』
「…ただ、私の意見を並べただけです。お礼を言われるような事は…」

『いや、本当にありがとう。』

そうだよな、思い出作ればいいのか。今から腐るほど時間があるし、嫌になるまで作れば問題ないな。

茶矢を忘れたらしつこく記憶に刻んでくれるんだし、茶矢の事は安心だな。』

「忘れたら泣きますからね。それでも女の子なのですから。
もし思い出したら、“Sweet Okazaki” 奢ってもらいます。」

『泣くのは困るけど、ケーキ屋奢って許されるならまだ大丈夫か。』
「開店から閉店までオールですから。」

『ハハハッ!』

声を出して腹から笑い飛ばす。

茶矢のムツとした表情も今じゃ可愛いものだ。
軽く流せる。

そんな俺を見兼ね茶矢も『ふふっ』と唇に手を当ててどちらかが
終わるまで一緒に笑い合った。
ずっとずっと笑ってた。

二人が落ち着いた頃、社の裏の古びたベンチに腰掛けて景色を眺
めながら茶矢の弁当を食べた。

俺の好きな物が沢山入っていて驚いたけど、二人共歩いて、喋っ
て、泣いて、怒鳴って、笑ったものだから空腹は限界だった為、味
わいながらも早々と胃に入れた。

うん、茶矢の料理は美味いな。
これは将来良い嫁になるな。

茶矢の旦那さんは倅せ者だろう。

デザートも食べ、弁当を片付けた後、雑談をして暫く休憩してい
た。

まだまだ時間はあるんだし、社の裏は日陰になっていてヒンヤリ
涼しい。

夏場は最高だな、そう感じながら茶矢と時間を過ごした。

再び商店街に戻り、茶矢が行きたい店へ二人のペースで目指した。午後になってから、朝より人が増えている。

時間につれて日差しも強くなる。

ぶつかる回数も増えて、茶矢と逸れないよう手に少し力を加える。店に入るまであまり話さなかった。

『あゝ…涼しいな。』

「生き返ります。」

小さな本屋は冷房が効いていて二人して帽子で自分を扇ぐ。

外の炎天下とは大違いの天国だ。

本当に生き返る気持ちよさだ。

俺がCONANを毎回買う本屋と広さはあまり変わらないが、此処は店の真ん中で座って読めるスペースが置かれている。

古本屋のようで、ビニールのカバーの本は見当たらない。

埃が被っていないのは、店長がこまめに掃除をしている証拠だろう。

静かな店内にクラシック音楽がゆったり流れていて、俺はこの店を好きになった。

機会があれば一人で来ようかな。

入口付近で涼んでいたが、茶矢に導かれるままについて歩く。

英語の本もあるんだ、結構古いな。

茶矢は奥の方の本棚に着くと、1番上の棚に手を伸ばすが5／1

0cmくらいある。

背伸びしても届かないようだ。

俺は余裕で取れるけど…手伝った方がいいよな。

『茶矢、どの本だ？』

「えと…その深緑の本です。」

『コレか。はい。』

「ありがとうございます。」

受け取ってペコッと頭を下げる茶矢。

うん、礼儀正しいな。

『どういたしました。』

俺も本を選ぶから、先に座っていいぞ。』

「私は背が低いですからね。お役に立てませんですからね。」

では、座っています。」

『…あんま拗ねんなよー。』

両手で本を抱いて、パタパタと椅子がある場所へと向かった。

苦笑いのため息をこぼして、俺も何か面白そうな小説がないかと探し歩く。

うろうろと本棚に隙間なく並べられた本を取り出してパラパラ流して元に戻す。

ん…中々ないな。

ハリー○ッターは全巻図書館で読んだし、ホームズも面白いから三日通って読破した。

最近の小説はよくわからないのが多くて読みたくないのが本音。

そういや、アリスシリーズは読んだ試しがないな。

恥ずかしいってのもあったけど、原作本が図書館に無かったんだ

よな。

この店に“地下の国のアリス”…あるかな？
母さんが欲しがってたから、あれば少し呼んでから買おう。

“不思議の国のアリス”の下敷きになった本だと聞いたから、正直読みたい。

母さんにあげたら暇な時にでも貸してもらおう。

ルイス・キャロル、ルイス・キャロル…：Lはどれだ？

ピロはさっきから反応ないし、世界に戻ったか何処かうろついでんな。

自力でやるしかねえか。

『ふう…目が疲れる。』

眼鏡を外して眉間に指を当てる。

長時間使うと目が一段と重くなるように感じる。

眼鏡なしで探すか。

Lと見えた本を取り出しては確認しては、探して、確認しては、戻して。

そんな事を繰り返していると、だんだん近づいて来る後ろの人影に俺は気づかなかった。

俺が目を細めて探していると、

トントン。

『……はい？』

「こんにちは。宮古君。」

『…すみません、眼鏡がないと最近見え辛くて。』

服の衿にかけていた眼鏡を慌ててかけて人物の顔を認識する。
……あ、この人は…

『お久しぶりです。メシアの伯父さん。
このような場所で会うとは奇遇ですね。』

「古い友人の店なんだ。」

今日はメシアと一緒にではないのか。」

淡々とした物言いに相変わらざるの無表情。
青色の瞳は真っ直ぐ俺を映し出す。
伯父さんはメシアによく似ていると思う。
こう、人を直視して話すトコとか。
無表情っていうか真面目な顔とか。
髪と瞳さえ変えれば完璧だと思う。

伯父さんの言葉に苦笑しながら『何時も一緒ではありません。』
と頬をぽりぽり。

伯父さんは『そうか。』とだけ口にして、俺が見ていた本棚に目を移す。

俺も続いて本棚に視線を変える。

「何か探していたのか？」

『あ、はい。“地下の国のアリス”という本はご存知でしょうか？
「地下の国の…私の妻が好きだった本だ。家の本棚に置いてあるかな。」

君がアリスを好きだとは予想外だ。」

『そうなのですか。』

俺も読みたくはありますが、母が欲しがっていたのであれば買って

帰ろうかと探しているのです。

アリスは小さな俺が読むのは恥ずかしかったですし…。」

「母親に、か。」

一言呟いたかと思うと、伯父さんは何処かに行ってしまった。

何も予告せずに行動するのも血が繋がってる証か。

俺も茶矢が待ってるし、早く発掘せねば。

疲労覚悟で俺の背丈以上もある本棚の上を眺めていると、

―ポンポン。

『はい?』

「コレか、探し物は。」

伯父さんは何時の間にか横に立っていて、一冊の本を俺に差し出している。

落ち着いた色の表紙に洒落たデザインを施しており、英語で綴られた題名を読み上げる。

英語の上に日本語で記された題名もあった。

『“ALICE'S ADVENTURES UNDERGROUND” BY LEWIS CARROLL。地下の国のアリス：これです!』

ありがとうございます。」

「友人に聞いて探してもらった。原作本はこれだけだそうだ。価値が高い分、値段もする。」

『日頃の感謝の代わりですので値段は気にしません。本当にありがとうございます。』

「……メシアは良い友人を持ったな。」

母親もきつと喜ぶだろう。では、先に帰る。」

『はい、きつと。』

お気をつけて。』

「ありがとう。」

颯爽と店を出る伯父さんに礼をして、俺は茶矢の前の椅子に腰掛けた。

この本は英文の横のページに和訳が載っているもので、スラスラ読めた。

言葉遊びは子供が喜びそうなもので、小さな挿絵もちよこちよこ入っている。

今と違った可愛らしい絵に本の温かさが伝わってくる。

高値なものも頷けるし、妥当だと思う。

一、二時間足らずで読み終えた。

ふう：久しぶりに面白かった。

今回は和訳だったけど、次回は英文の方を見るか。

：その前に、値段がわからないな。

今あるので足りるだろうか？

レジの人に聞くか。

カタッ。

「買われるのですか？」

『ああ。面白かった本だし、値段聞いてみる。まだゆっくりしてて良いぞ。』

荷物を椅子に置いて、レジで椅子に座っている初老の人に話し掛けた。

『すみません。この本なのですが――。』

中編（褒美）

——昼間と色が違う夕方近い商店街をぶらぶら歩く。
結局あの本屋では何も買わなかった。

「…残念でしたね。」

『まあ、近い内に出向く予定だしそこまで落ち込んでないかな。』

青とオレンジのグラデーションの空を二人で見上げる。

烏が群れで宙を舞う姿は、朝のゴミ置場のみすばらしいのとは別物だ。

カッコイイとさえ思える。

ボーツと手を繋いだまま行く宛てもなくぶらぶらしていると、一つの出店に出くわす。

小物やアクセサリを並べていて、その店の主らしき人物と目が合えばニコツと愛想笑いを向けられた。

茶矢が『見て行きませんか？』と立ち止まるので、俺は頷いて商品の前にしゃがむ。

『ヘックシ。あー。』

「風邪でもひかれましたか？」

正軌先輩って、静かなくしゃみですよね。」

『そうか？普通だと思うぞ。』

誰か噂でもしてんだろうな…メシア辺り。』

「想像つきます。チッ…」

『おーい、舌打ちするなー。』

そっぽ向いて小さく舌を鳴らす茶矢の頭を軽く押した。

……一方、由の家。

「……で、何故由の家に？アポくらいしやがれ。」

「したぞ。メール見なかったのか。」

「由が言いたいののは家の目の前じゃなくって昨日か朝にメールしろって話だわあ！！外国人が何しても許されると思ってんなよクソ澤あああ！！！！」

「由ちゃんゴメン！俺も家出る前にすれば良かった！」

だから殴り合いは止めて！せめて口喧嘩で勘弁して！俺はこれ以上殴られたくない！！」

「許されるとは思ってない。外国も常識あるぞ。」

「んなら常識覚えてから日本に来日して来いよ！！日本で常識を学ぶんじゃ遅えんだよ！！」

「メシアもうお願いだから油を並々注がないでええええ！！！！」

今にも殴り掛かろうとする由を源希は間に入って仲裁する。

源希は自分よりも背が高い由を説得するのに手一杯だ。

それにメシアは呑気に椅子に座ったまま冷静に炎にダイナマイト

を束10本ほど投げ入れている。

源希は消しても倍加する炎を泣きそうな顔で必至に消していた。

……で、10分後。

疲れきった二人を余所にメシアは思い出したかのように袋をテーブルに乗せる。

あとコンビニの袋も。

中にはケーキ屋の箱と炭酸飲料二本となつchanN。

メシアはテーブルに突っ伏す由に箱を開けて聞いた。

「ケーキを選べ。コップは何処にある?」

「……お前ってやけに上から物を言うよな。無性に腹がたつわあゝ……ハア。」

「あ、俺持ってくる。」

由ちゃん、勝手に探しても良いかな?」

「やっぱし宮古の弟だな、常識ある。」

その戸棚にあるから適当に持ってきて。」

「わかった!」

「早く選べ。」

「お前は宮古弟を見習え。マジで。」

ハアア…由は深いため息を吐いて、『……たくしゃーねえな。』と顔を上げて箱を覗き込む。

——そして硬直。

メシアは早くしないかと由をジツ…と見つめる。

源希は皿とコップ、フォークを発見して明るい顔でテーブルに戻る。

テーブルにそれらを置いてると、由が固まってるのに気づいた。

『はいコップ。』とメシアに渡して、由の目の前で手を左右に振る。

メシアはなっchanNをコップに注いで先に飲んでいる。

正軌や伯父さん以外の前では基本…いや大分自由人なメシア。

今日はポニーテールしている。

源希は名前を呼びかけながら心配そうに由の肩を揺らす。

暫くして由はやっと口を開いた。

「なあ…宮古弟。」

「そろそろ名前で呼んでほしいかな？源ちゃんでもいいよ♪」

「……何で由の好きな物ばかり大量に入ってたんだ？しかも三人で食うにしてもケーキ多過ぎだし。」

「全部メシアが選んだんだよ？ね！メシア！」

「前に嬉しそうに食べてたからそれらを選んだ。」

早くしないと先に食べるぞ。」

「せっかく見直しかけてたのに最後でぶち壊したなコイツ。最悪だ。」

「…………ま、サンキュな。」

「俺はジュース買ったんだよ！なっchanNはメシアのリクエストだけど！」

「お前もサンキュな、源希。」

「えへへー♪」

メシアもう食べてるの！？」

「美味いぞ。」

「…………由はもう知らん。

食べるぞ源希。コイツが全部食べ切る前に一個でも確保しろ。」

「アイサーー!!」

黙々と口に運ぶメシアに、由と源希も急いで箱から二個取り出して口にする。

“Sweet Okazaki”は今じゃ高校生や主婦、女性の間で話題の店になり、毎日繁盛しているようだ。

近々改装する予定だとオーナーが新作の試食を頼みながらメシアに話していた。

女性店員ばかりだったのも男性店員が入り、余計女性客が出向くようになったとか。

メシアもよく出向くので売上に関与しているのは言うまでもない。男性も少ないが一階の奥の方の個室を利用する人が増えて、オーナーは喜んでいた。

機械のようにケーキを口に入れるメシアの横で源希と由はお喋りをする。

音楽関係の話で盛り上がっていたが、ふと由がメシアに話を振る。ある疑問を投げ付けた。

「黒澤が宮古（主人）無しでいるの珍しいな。また喧嘩でもしたのか？」

「…違う。今日は茶矢と出かけている。

家に遊びに行けば源希が『茶矢とデート中。』と教えたから商店街に行こうとすれば止められて、せっかくなので手土産持って来た。」

「ふーん、由はついだって事か。お前はサラッとムカつく発言ばかりするな由に喧嘩売ってんなら買うぞ？」

「ち、違うよ！俺が『せっかくなら由ちゃんと遊ぼう！』って誘ったんだよ！！」

「犯人はお前かよっ！！？」

あーあ、今日だと知ってたら由も邪魔しに行ったのに……皆月は邪魔してんじゃねーの？」

「いや、今日だけは俺が全力で阻止するよ！茶矢が必至に勉強して手に入れたんだから！！」

友恵ちゃんは今日は習い事だよ。接触の心配はないかな☆」

「……お前ら用意周到だな。感心するわ。」

「えへっ♪照れるっ☆」

「可愛くないぞ。」

「鏡を見るか？」

「ガァーン！！酷いわ……二人して俺を虐めて楽しむなんて！！」

「そういや黒澤。お前の髪って自毛？珍しい色だな。」

「ああ。生れつき持つ“忌み子”の髪だ。

自分は好きではない。」

「メシアの髪、俺は好きだよ？綺麗じゃん♪」

「ふーん……ま、“主人”が褒めれば好きになるさ。染めなかっただけマシじゃないの？」

由もその髪質は羨ましいよ。そろそろ髪染めの色変えよっかなあ……」

「……。」

暗い雰囲気はなく二人の明るい空気に囲まれ、メシアは俯きがちでフォークを口に入れた。

それからは満足するまで二人は由の家に居座った。

夕飯前には源希が引きずって帰ったのは余談。

――夕飯前の帰り道。

二人はまだ手を繋いで茶矢の家に向かっていた。
何となく暗い雰囲気。

茶矢が無言だからだろう。

「水木」と印された表札の一軒家の前に立ち止まり、茶矢は俺を見上げる。

残念そうな、寂しそうな、まだ一緒にいたいと言いたげな、後生の別れみたいな顔で見上げる。

俺は荷物を渡して、ポンッと頭に手を置く。

苦笑いに近い微笑みを浮かべ、眉を下げる茶矢を困った表情で見る。

『明日学校で会えるだろう？そんな顔してると近い内俺が死ぬみたいで悲しくなる。』

「……今日はありがとうございました。荷物を持っていたいだいたり、買い物に付き合っていたいだいたり、感謝で胸がいっぱいです。本当にありがとうございます。……では、おやすみなさい。」

『あ、ちょっと手貸して。』

「？」

素直に荷物を持っていない方の手首を差し出す。

俺は鞆から先程の出店でこっそり買った物を手首に付ける。

茶矢には少しデカかったか…。

まあ仕方ない。

茶矢の手首には、細い黒の三本のわっかに銀の犬のチャームが特徴のブレスレットが通された。

シンプルで茶矢の服にも溶け込むものだ。

俺は啞然とした顔でブレスレットを凝視する茶矢に『プッ、』と吹き出して、種を返す。

『今日のお礼と、もしものの時の約束の証。大事にしろよ？
じゃあ、おやすみ。』

ヒラヒラと背を向けたまま手を振る。

夕日に溶け込むような俺に、茶矢は珍しく大きな声を出して言った。

「足が遅くても私はずっと追いかけますから！約束は絶対守りますから！！」

「……また明日。」

『…頼むな、茶矢。』

…交わした約束が守らなくて済むように、少女は証に願う。
それが神に届かないかもしれないが、祈る事しか少女はできない。

青年の恐れるモノが起きる時、それが影のように静かに忍び寄っている事を……青年も知らない。

…誰も、わからない……—

中編（褒美）（後書き）

デート編終了！

明るく終わらせるつもりがパーンッ！って壊れました↑

初志貫徹は難しい！！私はどうも不幸にしよう……愛故だと思
っ（殴

何時かは皆で笑い合えるように頑張るよ！！

まだまだ続きます。

中編（修学旅行）（前書き）

Big Event!!

さて、出来の善し悪しは私にかかっている!! すんごいプレッシャーだ!!

お気に入り登録して下さい方も此処まで読んで下さっている方も、期待はナシの方向で!（↑最初からしてないか。

では、英語ペラペラ帰国子女よ!! って方はお進み下さい。作者は英語グダグチャですので失望されぬよう（もうされてても生温い目で見守ってやって下さい。すんません。）

バリバリ日本語しか言えないぜ!! という生粋の日本人もどうぞ。作者の英語を信じないで下さい↑オマ

では、どうぞ。

↓

中編（修学旅行）

……何だろう、この気持ち悪さは。

何時ものように階段を下りて、ふと目に入る下駄箱の上の電話機。何の変哲もない俺が生まれた時からずっとある電話。

何時もなら何とも思わずにその存在を空気同等と通り過ぎていたのだが……今は電話を疑視してしまう自分は冷や汗を流している。

俺の知らない大きなモノが俺を襲う予感。身体が触れてはならないと訴えている。

例えようもない身体の異常に、俺は目を伏せて深呼吸して落ち着かせる。

『……………五月病が今きたか？』

「オッハー！ 正軌兄♪

どったの？ 電話なんか見てため息ついちゃって。誰かからの電話待ってるの？」

『はよ。……………いや、何でもない。』

さっさと朝飯食うぞ。』

洗濯物を洗濯機に入れ、源希より先にリビングに入った。

この直感が吉と出るか凶と出るか、それは正軌次第。

――
：休み時間。

席でメシアと泊まる日程をほのぼのと話し合っていると、由君と和葉さんがやって来た。

和葉さんは楽しそうだが、由君はどこか複雑そうに腕組みして和葉さんに押されている。

俺達は携帯電話のカレンダーから目を外して、温度差がある二人を見上げた。

和葉さんが『ほら〜♪』と急かすのに『う、うるせえ！ちょっとくらい時間よこせっ！』とクーラー効いてる教室で冷や汗をタラリと流す由君。

メシアと一回目を合わせて、俺は由君に聞く。

『何かあったのか？』

「早く言え、由。」

「ほらっ！ジャンケン負けたでしょ？」

「浅倉は背中を押すな！」

んと：用件があるっちゃあるんだけども：」

『修学旅行の事？』

あ、荷物忘れたらダメだよ？今週の金曜日に一旦飛行機でホテルに送るらしいから、夏休みだからって寝坊しないようにな。』

「わ、わかってるわっ！……なあ、お前ら。」

「財布は旅行鞆に入れないようにな。」

「煩せえ！！そんなへま高校三年ですか！！」

「：私しそうかも。旅行先でよく歯磨き粉はあるのに歯ブラシ忘れちゃうし……」

「木曜日にメールしようか？」

「あ、お願いします。なら安心だね、良かったあ♪」

やんややんやと話しを変えて話し出すメシアと和葉さん。

俺は由君がわなわなと肩を震わせて、火山が噴火しそうなのを二人が早く気づかないか目配せしていた。

だが、昨夜のドラマの話に変わっており一向に気づく気配はない。

由君の我慢の限界を越える数秒前、俺は先に動いた。

グイッ！

『由君、廊下に行こうか。話ならそこで聞くよ。』

「え、ちよっ、宮古！？」

こうなれば早い者勝ちだ。

由君の抵抗が低い内に、俺は廊下に連れ出した。

…だが、

——キンコーンキンカーン…

『「あ。」』

廊下を出た瞬間計ったかのようにチャイムが学校中に鳴り響き、俺達は一旦顔を見合わせて、由君の腕を解放してから教室に戻った。

「えー、三年生は大学受験の為、課題は自主勉強、ただだ。だからと言って、二学期の成績を、落とさぬよう。金曜日は、8時半までに、学校に来るように。素行に注意する事。
夏休みを、有意義に使うように。学級委員、号令。」
「起立。」

ガタガタガタッ！！

「ありがとうございました。」

「「ありがとうございましたー。」」

「忘れ物するなよ。」

じゃあ、解散。」

吉田が出て行っただと同時に、クラスの中が賑やかになる。

俺は椅子に座って忘れ物がないか確認していると、前の席にいるはずの和葉さんが由君を引き連れて横に立っていた。

そういや、まださっきの話聞いてないな。

由君は和葉さんに軽く舌打ちするのを見ると捕まる前に逃げようとしていたらしい。

流石は学級委員長、レディースに対しても強いな。

『まだ言っていないでしょ？』と見上げる和葉さんに観念したのか、メシアの机に鞆を置いて俺達を見下ろす。

些か顔が強張ってるのは見なかった事にしておこう。
指摘したら本気で殴られそうだ。

由君の重い口が、今やっと開かれるかと思ったその時・・・

タツタツタツ、ドンッ!!

「ぐあっ!?!」

「やったまだいたわ!!」

ねえ、先輩達も正軌先輩の家に遊びに泊まりますよね!?!」

「え、友恵ちゃんは泊まるの?」

「一年生とメシア先輩は決定してますよ☆何なら人数多い方が楽しめるし、先輩達も勿論来ますよね♪?」

「うーん：そんな大勢で押しかけたら迷惑じゃないかな?」

『いや、母さんは賑やかなの好きだし、後二人くらいなら大丈夫だよ。来る?』

「寝る場所とか…」

『客間に布団並べて人数分のタオルケット渡せば問題ない。もしくは、真尋と源希は源希の部屋にすれば女子だけに出来るよ。』

「自分は?」

『お前はどうせ俺のベッドに忍び込むんだから最初から俺の部屋だ。異論は?』

「ない。その予定だったし。」

「ね!先輩達も来ましようよ!?!」

「……由は良いぞ。」

「じゃあ、二、三日お邪魔しようかな?日にち決めたらメールするね♪」

『うん。あ、母さん達が温泉に行ってる日は自分達で家事しないとならないから。』

「家事くらい朝飯前だ。一人暮らししているからな。」

「部屋は汚か」

「黙れええええ!!!」

『えっとね、母さん達は一応7／31～8／4にいないかな。
修学旅行が22～29日だし、その二日後だから疲れもとれてるかな。』

「じゃあ、なるべく早くメールするね！
弥生が来たから行くね。バイバーイ♪」

『うん、わかった。』

またね。』

「さよなら。」

「じゃあな。」

「さいならー♪」

四人で見送って、由君が落ち着いた頃に俺達も教室を出た。

『あ、そういや由君。』

「んー？」

「ホットケーキもらって来た。」

『ありがとなメシア。』

片手でお盆を持って扉を開くメシアに俺はテーブルを準備する。
由君は体育座りで脳トレのゲームに夢中。

近頃成績が上がっているようで、この前嬉しそうに見せていた。
俺はと言えば、母さんにプレゼントした本を借りてベッドに凭れて（モタレテ）熟読していた。

テーブルの上に二つの皿と三つのティーカップ。

夢中になってる由君に一言教えてから、二人でお茶タイム。

俺は眼鏡をテーブルに置いて、カップに口づける。

メシアはホットケーキをもぐもぐと口に入れて俺が読んでいた本
を手取る。

表紙や裏表紙を確認してからまたテーブルに置く。

「正軌もファンタジーな話を読むのか。」

『元々小説は読む方だ。最近面白い物がなくて手持ちのしか読ま
なかっただけ。』

それは不思議の国の下敷きになった本だ。あまり有名ではないかな。

「…前に伯父がこの本と正軌の事を話していた。」

後で見ても良いか？」

『どうぞ。和訳もあるけど、メシアは本文のが読みやすいかもな。』

紅茶を飲み干して、由君を見遣ると目が合った。

しかしバツ！と外されてしまう。

不思議に思いゲーム画面を覗くが、なんら変わった様子はない。

メシアは食べ終わったので、紅茶を片手に読書開始。

由君は『なんだよ…』と鬱陶しいと目で訴えたので『気になったから。』と言って俺は離れた。

由君はパタンとDSを閉じてホットケーキを食べる為のそのそと膝で歩く。

黙々と頬張る由君にさっきから聞けなかった事をストレートに聞いた。

何回も邪魔されたが、今なら障害はないだろう。

『由君、さっき俺達に質問しようとしていたの教えて。』

「（グフッ！！）」

……和葉がいらないから安心してたのに…しょーもない話だよ。しょーもない話。」

「こちらは気になる。」

「珍しく食いつくな黒澤。」

頬杖をついてフォークでメシアを指す由君と流すようにパラ、パラとページをめくるメシア。

読む速度が早いのはCONANでわかってるから驚きはしない。

由君は言い逃れ出来ぬか考えている模様。

質問する側はどうでもいいかもしれないが、された側は気になっ

て仕方がなくなる。

しかも三回も先延ばしにされたのだ。
これはスツキリしない。

無言の空間に耐え兼ねたのか、由君が重々しくなりつつある部屋で口を開く。

潔いぞ由君。

…しかし、由君の顔が赤くなるのは何故だろうか？

「……お前らさ、」

『「……。」』

「……………初恋の相手、って誰だ……？」

『「……。」』

「正軌。」

『何？』

「いや、質問の答え。」

『「阿呆か！！」』

「初めて好きになったのは本当だ。」

『「……お前は友情と恋情の区別を考えろ。俺が誤解される。」』

「異性で考えろ！異性で！！恋愛感情でだ！！」

「無いな。」

「あ、キツパリ言い切りやがった。同性だったら？」

「ま」

『ふざけるな！そんなにからかって楽しいか！？』

「おー必死必死。」

……………まあ、よくよく考えてみりゃ今更って事だし、気にすること
たねえよ。」

『……じゃあ、由君。もし和葉さんが恋愛感情で由君の事好きだとしたら？もし告白されたらどうする？』

「え。」

『今の俺の状況と同じ事だよ……？（和葉さんごめん。）』

「……悪かった。流石にそれは困る。」

「別に性別を気にしなければ問題ないと思うぞ。」

『「いや、大いに問題あるぞ。」』

「そういう宮古は？初恋の相手。」

『俺？俺は……』

頭に浮かぶのは、顔の無い少女とサウ。

これが恋愛感情とは断言出来ない。

家族や友人に対するのに近いだろう。

今無い記憶の中にもしあるのだとしたら、その時は謝罪しよう。

天井を見上げて考えていた視線を下げると、俺の言葉を待つ色が違う瞳が二人分。

メシアも本から顔を上げて俺を見つめる。

由君は頬を赤くしたままジツ…と口が開くのを待っている。

俺は少し困った顔で『俺はわからないな。』とだけ。

それにガッカリしたような嬉しそうな、色々ゴチャ混ぜの表情を浮かべる二名。

…何を嬉しがる必要があるんだ？

ま、後は由君だけだな。

『そういう由君は？初恋の相手、俺達は言ったんだから正直に白状しなよ。』

「由は……中学の社会科の若い新任。」

イケメンで授業中は真面目なんだけど、休み時間は明るくてやんちゃだったんだよねー。あー懐かしい。告白はしなかったけど、あれは好きだった。」

「今は好きな奴は？」

「そりゃお前……って、何ナチュラルに聞いてんだよ!? 思わず言いそうになった自分が怖いわ!!」

「いるんだな。よし、わかった。」

「何が『よし、わかった。』だよ!? 頭おかしいのか!？」

『……異性じゃなくても応援するぞ。』

「ちゃんと異性だよ!!」

「……ハアー……もうヤダ。」

『ごめんごめん。』

ま、本当に応援するから手伝える事があれば遠慮せずに言えよ? 男の方が男の気持ちわかるし。』

「自分も手伝うぞ。」

「あー……ハハッ、サンキュ。」

腕から苦笑した笑みを覗かせる由君。

その表情は寂しさを含んでいたが、俺達には見えなかった。

――……ってか、今冷静に考えてみると凄い事カミングアウトされてねえか? 俺。

別に由君の言う通り今更って思うからそこまで触れなかったけれど。

いやー……ハハハ。

アハハハハ……夢であってくれえ。

学校や町中の女性がこの事知ったら俺……家から出れないかも。

殺意の籠った目に囲まれて過ごす事になるよ。

由君は好きな奴いるから助かったけど、和葉さんも『やっぱりそうなんだ〜♪』で済ましそう。

うん、俺の予想は当たる。

……けど、別に態度を変えるつもりはないけどな。
きっと親に抱くみたいな感情と恋情を勘違いしているだけだと思
うし。

あの時俺以外が同じ事しても、メシアはきっとそいつを好きにな
っていた。

目が覚めるまで見守る事としますかな。

『由君の片思いの相手って、うちの学校の生徒？』

「……一応。」

「何年生？」

「三年。」

『クラスは？』

「言わねえよ。」

「髪の色は？」

「……黒。」

『身長ってどのくらい？』

「よくわかんね。」

あーもうヤメ！由はそんなに急いでないから！！

まだ気持ちもハッキリしてないし、微妙なトコなの！！」

『そうなんだ？』

ま、俺からの助言と言えば……胃袋を掴めば逃げる事はないらしい。
』

「よくテレビで聞くな。」

『ま、一回くらい弁当作ってあげれば？って事。意識されるかもよ。
』

「未経験者が上から言いやがって……家に弁当箱あったっけ…」

「○女か。」

『お前は女性の目の前でハッキリ口にするな。言って良い言葉とダメな言葉を修学旅行で教えてやる。』

「うっせ。お前らも童○だろーが。」

『由君も自重しよ。仮にも女の子なんだから。良かった、今此処に和葉さんいなくて。』

「童○とは何だ？」

ピキッ。

『「……………」』

「…………？」

……部屋が凍り付いた。

固まる俺達に、メシアは首を傾げて同じ事を聞く。

俺は口を開くのと同時に動いていた。

『…まさかの質問！？』

由君責任とって教えなよ！辞書はその使っていーから！！』

「ええええ！！？お前○女知っててこっち知らないとか何で！？

宮古逃げるんじゃないやねえええええええ！！この気まずい空気に由を見捨てんのか薄情者がああああ！！！」

『気まずい空気にしたの由君だろうがああああ！！俺関係ねえよ！

！俺注意してたよ！！お願いだから俺を巻き込むなよなあああ！！！！？

辞書引いてメシアに見せろ！！

『晩御飯食べるでしょ!？』

「謝るから宮古もいてくれよ!! この空間嫌だ!! 初めてまだな同
士仲良くしようぜええ!!」

「晩御飯お願いします!!」

『意味わかんない発言しないでくれる！？由君壊れたの！！？さっき糖分摂取したばかりでしょ？！』

ちよ、お願いだから足から離れてくれ！！食器が落ちる！！

げ、源希いいいい!!!!ちよつと来い!!!!早急に来いいいいいい!!!!」

階段に向かつて源希を呼び叫ぶと、ガチャと部屋から顔を出した。俺は由君に目で指示をして、由君は頷くと源希を捕獲した。俺はその間に階段を駆け降りる。

[illegible]「グ
ツ
トラ
ツク
☆」

タタタタッ！！！！

由君も逃げ出した模様。

無表情で階段を下りてリビングに来了。

源希の無惨な犠牲を終えた俺達は目を合わせて一回頷くと、10分後にメシアと懺え（イケニエ）だった弟を階段下から呼んだ。

真つ赤な顔の源希に、俺と由君は無言でおかずをあげた。

俺は自室には一時間ほど入らなかった（入れなかった）。

二人を見送って、窓を開けて換気し終えた頃、親父が帰ったので明々後日の修学旅行当日に空港まで送ってもらう約束をした。

親父に承諾してもらった後、叫びすぎて痛んだ喉を潤す為になっ
c h a n Nをコップに入れて飲み干した。

中編（修学旅行）

「へえー！アメリカと北海道ですか！楽しんできて下さいね♪」

「ああ。土産は何が良い？」

「土産話でお願いします！いっぱいお話聞かせて下さい！一週間かぁ…ちょっと寂しいかな。」

朝の公園のベンチ。

毎朝ランニングしている健康な二人は明日の修学旅行の話題で盛り上がっていた。

野良猫はメシアと真理の間で丸まっている。

警戒心はなさそうだ。

真理はジャージ姿で空を仰ぐと少しだけ寂しそうに笑う。

メシアはそんな真理を見て考えた後、唇を動かした。

「真理はケータイ持ってるか？」

「はい、持ってますよ？」

「じゃあ、明日の6時20分。この場所に来い。」

「え？メシアさ、あー…行っちゃった。」

メシアさんどうしたんだろうね？野良猫さん。」

何となく横で眠っていた野良猫に質問してみるが、野良猫はチラリと真理を見上げた後ベンチから飛び降りて何処かに姿をくらました。

真理は『つれないなー。』と唇を尖らせて、暫くの間空を見上げていた。

……おい、ピロ。

（うん、いないね。全体見回したけど来てないね。）

電話した方が良いか、やっぱ。

あ、弥生さん発見。

何か知ってるかな。

荷物をトラックの人に預けた後、弥生さんに歩み寄る。

メシアと由君は普段通り口喧嘩しながらついて来た。

弥生さんが荷物を預け終わったのを見計らい声をかける。
ジャージ姿を見る限りこれから部活練習があるみたいだ。

『弥生さん。』

「おはよ。和葉、病院。」

「病気か？」

「違う。ギックリ腰。」

「浅倉が…何か想像できるな。」

「違う、父親。」

『和葉さんのお父さんがギックリ腰になったから、看病してるの？』
「そう。荷物、やった。」

『あ、和葉さんの渡してくれたんだ。ありがとう。』

「：頼まれた。当然。」

『そっか。和葉さん、明日は来れそう?』

「うん。バイク、兄の。」

『お兄さんがいるって言ってたな。バイクって……大丈夫?』

「多分。」

コクンと頷いて『部活。行く。』と手を振って行ったので『頑張
って。』と振り返って見送った。

：一方、俺と弥生さんが話してる間後ろの二人はこんな会話をし
ていた。

「よくわかるよな、あれだけで。」

「ジェスチャーとかでわかるだろう。」

「由には難しいぜ。ってか考えるの自体面倒臭え。」

「こういう事で性格がはかれるな。」

「悪かったな! どうせ最悪だって言いたいんだろ!!」

「ちゃんと人を見ろ、という話だ。あまり話していないのに決めつ
けるのは愚行だと自分は言いたい。」

：正軌は、己より他人を考^{ヒト}え過ぎて心配になる。自分はそれが不安
でならない。

そういえば、明日は空港集合だが由はどうやって行く気だ?」

「……たまにその顔で真面目な話するとか卑怯だし。宮古が優しい
のはわかってるけど、黒澤が思ってるほどヤワじゃねえよ。」

田中さんに頼んで送ってもらう予定。」

「……………正軌は、」

『俺が何だって? 由君。』

「うおわっ!?!」

「由は正軌が優しいと言っていた。」

「うわっ、馬鹿黒澤!! そんな事由は言ってるねえ!! 訂正しやがれ!!」

宮古は信じるなよ!!?! 由が、んなキモイ事言うか!!」

『ハハッ、俺が優しいのは有り得ないな。由君やメシアの方が優しいよ。…いや、俺の周りは皆優しいかな。』

「………、…バァーカ。宮古は自分を見直しやがれ。勉強ばっかしてんなよ、今度からがり勉強してあだ名にしてやるぞ?」

「バーカ、正軌は誰よりも優しい。過小評価するなと教えたのは正軌だぞ。」

『馬鹿…って、お前ら。』

がり勉強して、そこまで勉強してないけど。』

先に歩く二人の後を眺めていると二人が立ち止まり俺の方を振り向いたので、俺は後ろ頭を掻きながら二人の所へ歩いた。

……が、足が止まった。

(っ!?! 何で、此処に…)

——誰だ、? あの人?

俺はこの人を知っている?

二人の向こう側に、金髪の女性が。

夏なのに長袖長ズボン姿は奇妙過ぎる。

肌の色は病人のように青白く、瞳に生氣は感じられなかった。

門に凭るように松葉杖を使って体を支えており、俯いていた顔は俺の視線に気づいたのか勢いよく顔を上げる。

ボサボサの髪が風に靡いた。

瞳に濁った光が浮かぶ。

渴いている唇が、声を出す為に動き出す。

耳が、体が、その音を覚えていた。

「正軌!!」

（正軌!）

ドクッ!!

女性が松葉杖を使って急いで俺に向かって来る。

俺はと言えば、顔を青ざめて目を見開かせるだけ。

足は泥沼に嵌まったかのように重くて動かせない。

二人は俺の変化と女性を見合わせて、走り出した。

震える唇と先程から煩い心臓。

女性の存在が 恐い。

（正軌! オイ!? 正軌!!）

『あ……あ……ダメだ……』

ガシッ!!

「正軌!!」

「とにかく走れ!!」

二人に腕を捕まれて、俺は半場引きずられるように女性と反対側へと全速力で走る。

あまり走っていないのに、汗が額から首筋へ大量に流れてる。

女性も必至に俺を追いかけるが、教師に止められた。

何度も、何度も、女性は俺を真っ直ぐ見つめて名前を叫ぶ。

「正軌っ！正軌！正軌！！正軌いいいい！！！」

女性を見ながら走っていたら、メシアに無理矢理前を向かされた。女性には松葉杖で教師達に抵抗しているが、人数が悪い為に取り押さえられた。

それでも、俺の名を呼ぶ音は止まない。

俺の震えも、止まない。

（ツチ！最悪だ！！）

ピロの舌打ちの理由がわからない。

俺は 何もわからない。

もう何も、何も知らない。

：ねえ、記憶の人。

貴女の事を忘れたから現れたのですか？

貴女の思い出を消したから再び刻む為に追いかけたのですか？

貴女の音は俺の身体が壊れるように浸透します。

貴女の目は獲物を捕らえるかのように俺を離してくれません。

知らない貴女の事が、存在が、全てが、俺は泣きそうなくらい恐怖です。

お願いです、どうか貴女の事を．．．

『……………忘れさせて下さい。』

一生の倖せを代償にしても良い。

どうか俺の我が儘を、誰か叶えて下さい。

中編（修学旅行）

度々訪れる校舎裏に俺達は一旦身を潜めた。

俺と由君は息切れをしているが、メシアは涼しい顔で正門を確認してから戻って来た。

由君は冷たい岩に横たわり俺は地面に目を落とす。

一年中この場所に光が射さない為、熱い体には調度良い風が吹く。風が気持ち良い…。

俺は横に座るメシアを一回盗み見ると目が合った。

苦笑して再び俯く。

『ごめんな二人共。そろそろ帰らないと、昼飯の時間過ぎるから行こうか。』

「その前にさー…あの女、誰？」

「正軌と何があった？」

…やはり聞かれたくない事を質問されてしまうか。

当然か、俺の変わりように二人は助けてくれたのだ。

知る権利はあるのに、俺は何も話せない。

何て言えば良いのか…

（正軌、）

ピロ？どうしたんだ？

（一回眠ってくれ、後は俺がやつから。）

どういう事だ？

ピロはあの女性の事、

キイイイン…ドクツ！ドクン！

『！！……っ………』

まだ話は終わってない、ぞ……クソツ……！

俺は服を引っ張られるかのように、世界から消えた。――

グラッ、

「正軌!？」

「おい宮古!」

ガシッ!

『ぐえ、ちょ、首絞まってる！死ぬ死ぬ俺様死んじゃう！！』

「……………正、か？」

「急に元気になったなお前…。」

『そ、正軌は強制退場。これから先は主人公は聞いちゃタブーな内容だかね。』

タンツ、岩から立ち上がり二人の前で胸に手を添え恭しくお辞儀をする。

由君は体を起こして胡座をかく。

話を聞く姿勢になったようだ。

俺は口端を吊り上げると、人差し指で空を指す。

ニコニコ笑顔で喉を震わせ音を口から出す。

『これから話すお話には条件があります。

第一に、この話は絶対に他言しない事。特にこの体の持ち主には。

この三人以外の誰かに話せば、俺様は何をするかわかりません。…

この意味わかるよね？』

「ああ。」

「まあな。」

『後、由君。この話を信じるか信じないかは君に任せる。否定してもらっても、馬鹿にしてもOK。

もし気分悪くなれば構わず帰ってもらって結構。無理に聞く必要はない。』

「…わかった。」

『メシアは？』

「最後まで聞く。」

『後悔しても俺様は責任を負いません。あらかじめ御了承下さい。』

んじゃ、まずは俺様の自己紹介からとしましょうか！』

楽しげにケラケラと笑いながら二人を見る。

二人は至って真面目な表情で俺を見上げている。

…正軌の事を理解してもらうには仲間が必要だ。

メシアは充分信用できるし、由君も香織と初対面なのに正軌を助けてくれたから信頼可能だ。

裏切る可能性は低い。

…だから、俺はこの二人に賭ける。

サラと新人は正軌を頼む。

『俺の名前は、ピロ。宮古 正軌の人格の一人だ。』

大赤字が大成功か、それは紙一重。

全ては俺にかかっている……この博打、負けるわけにはいかない。

『――で以上。』

由君顔色悪いけど、最後までありがと。メシアもThank you。』

「……悪いけど俺も神崎に色々調べてもらった。理論と現実ではここまで違うのだな。」

「……それより、宮古の生きた道のりが凄まじい。一般人が18歳までに警官よりも酷い現場に居合わせるとか、あの女に出会っちゃったのが悪かったんだな。最悪だぜ、マジ許せねえよ。」

「……それで、都合悪い記憶を取り除いても害はないんだな？」

『正軌が不審がったりネガティブになる以外は、今のところ問題ない。けど、新人に負担が大きすぎるのも事実。これ以上やると、新人がぶっ倒れて全てがパアになる可能性も無くはない。』

「そーなったらどうなるんだよ！？宮古は大丈夫なのか！！？」

『…全ての記憶が甦る。』

最悪の場合は二人の想像通りだよ。』

目を伏せて二人に背を向ける。

後ろで息を飲むのがわかった。

俺だって考えたくないけど、そうなる確率が高いのは俺が1番知っている。

わかっているからこそ、誰よりも恐れているのだ。

抱きしめるかのように両腕を掴んで深く深呼吸。

俺が暗くしても意味がない。

俺は笑顔でいないと。

Pierrotは周りに何時でも笑顔を振り撒くのが仕事だ。

皆を楽しませなきゃ。

『記憶の裏付けの手伝いはしてほしいけど、正軌には何時も通り接してやってよ。喧嘩したメシアならわかるっしょ?』

「当たり前な事を言うな。」

「由も見限んじゃないねえーよ宮古……じゃなかった、ピロ。」

『良い返事♪メシアも由君も大好きだー!』

あ、俺様の呼び方“ピロ”は止めてくれっかな? 周りに変に思われっし。』

「自分は“正”と呼んでる。」

「あー…面倒臭いな。」

んじゃお前“ミヤ”でいーよ。メシアをマネして。」

『俺様は何でもOKさ!』

ピピピピ…ピピピピ…

♪~~~~♪~~~~

『「電話だ。」』

『ちよっと向こう行くね。』

「失礼する。」

由君を置いて、俺達はそれぞれ別の方向へと歩く。
携帯電話を胸ポケットから取り出し、耳に当てる。

『もしもし? どした?』

「あ! 兄!? そっちに香織ちゃん行かなかった!?!」

『来やがったよ、マジ最悪。脱走したんでしょ?』

まだ学校にいるか、警察にいんじゃないね? 逃げたからその後知らねーのよ。』

「うん、さっき病院から電話着たんだ！やっぱり正軌兄に会いに行ったんだ……」

皆怪我してない！？」

『おう、ぴんぴんしてる。』

一応、病院には学校か警察にいと連絡しといて。

もうすぐ帰るから。じゃ。』

「了解！早く帰ってね☆」

ピッ。

通話を遮断して、少し辺りを調査した。

「もしもし。」

「黒澤君？神崎よ。」

そっちに伊崎 香織行かなかった？脱走したんだけど、今日は鞆送る為に三年生は学校にいるんでしょう？」

「正軌を追いかけて来た。今は教師に連れられて学校にいる可能性が高い。逃げたからその後はわからない。

学校に知り合いがいるのか？」

「ええ。貴方達の傍にいる変な制服姿の女子はあたしの従姉妹なの。家賃払ってるのはあたしなのよ。たまに貴方達の話聞くわ。じゃ、切るわね。ご協力ありがとう。」

「意外な繋がりだな。
早急に頼む。それじゃ。」

ツー、ツー、ツー、…

切られたケータイをポケットにしまい、チラッと由君を見た後に
もう一度正門を確認しに足を運んだ。

――ブロロロ…

『行った、か。これで安全だ。
じゃ、本当に帰ろう。明日は修学旅行だ。』

「便利だなミヤ。由もテストの時欲しいぜ。」

『正軌はそういう事を嫌うから俺様フラフラするだけだけどね。』

「早く行くぞ。空腹だ。」

「お前はケーキ屋ですつと食ってろ。」

『はいはい、俺様も腹ぺこだから由君も行こうねー。とも美の飯
は美味いよー。』

二人の背中を押して俺達は校舎裏を後にした。

……これが最悪の日々の始まりにすぎないって事は、理解してる。
俺が守らなきゃ誰も正軌を救えない。

嫌でもやるんだ、俺が。

俺の使命を真っ当する為にも、仲間を増やすまでは順調だ。
後は相手の情報収集しないと。

……もう少しの我慢だ。

明日は修学旅行なんだし、いっぱい楽しめ。

爪を研ぐ黒猫は、主の為に身を削る。

仲間は上辺で充分、独りの黒猫は更に動き出した。．．

中編（修学旅行）

……ダリイ。

マジ朝とか低血圧なのに早起きしろとか意味わかんね。

あー…健さん迎えに来てくれるんだ。

あー…頭に血がのぼらない。

あー…貧血チクショウが、クソツ。

「……………あああああっつ！！！！！！」

ベッドに顔を押し付けたまま、腹から声を張り上げる。

急いでる時はこうしないと二度寝する。

頭を上げて、由は両手を上に突き上げた。

ストン、と肩の力を抜いて頭をガシガシ。

うん、起きた。

「準備確認しねえと。」

ベッドの下に置いた鞆に手を伸ばして最終確認した。

「おい和葉。お前今日修学旅行だろ。送ってもらいたくなければ僕は別段構わないが。」

「すぴー……」

「おい、本当に無視するぞ。僕は知らないからな。和葉が後悔するだけだぞ。」

「んにあ……すー……」

「……………。母さーん、和葉どうしょー。」

「脇腹くすぐればー？」

「それ、この前顔面蹴られて鼻血止まらなかったから嫌なんだけども。」

「胸でも揉めばー？」

「セクハラで訴えられるから止めてー。僕まだ誠実でいたいー。刑務所嫌だー。飯マズイらしいしー。」

「もう着替えさせて、送ってけばー？母さんは朝飯作りで忙しいのー。」

「救急箱用意しといてねー。」

「まだ起きない和葉の熟睡に呆れたのはこれで何回だろうか。さてと、始めるか。」

和葉の兄は寝相の悪い妹のボタンをプチプチ解いていき、手慣れた手つきで着替えさせた。

眠りが深い和葉を兄が毎朝起こしているのだ。
自然とこういう事にもなるわけで。

「（今日は怪我しないと良いな。）」

ガリッ。

「あ。肉えぐられた。」

寝ぼけた和葉に手の甲に爪をたてられ引っ掻かれたのだ。
和葉の爪に兄の血とちよつとの肉が入る。

「あーあ、今日は吉か。」

これも日常茶飯事なので、兄も痛がらないし驚かない。
怒りもしなければため息も吐かず。

毎朝怪我の具合で一日の運勢を決める俺。

たった一人の可愛い妹だしな、僕もどうしようもない。
笑顔を見れるなら何だってしてやりたいし。

僕が出来る事なら手伝ってやりたいとも思う。

けど、なるべく自力で起きてくれ。

それだけが僕の願いだ。

兄は手の甲から流れる血よりも先にティッシュで和葉の爪を拭いてやるのだった。

タッ！タッ！タッ！

「す、すみません！遅れてしまいました！」

「いや、時間はまだある。」

ケータイは持ってきたか？」

「は、はい……ハッ……ッア……」

両膝に手をついて息を整える真理。

メシアは今日の服装は普段着で、何時ものスポーティーなタンクトップではない。

このまま家に帰り直行するという証拠なのだ。

野良猫はメシアが持つねこじらしに片手だけで遊んでいる。
やはり冷めていた。

真理はそんなメシアに少しだけ残念がるが、何時もようにベンチに腰掛けた。

なるべく笑顔で振る舞うよう心掛ける。

「それにしても、ケータイで何をするんですか？」

「メアド交換。写真を送れば、寂しくはないだろう。」

どうだ？」

「え……良いんですか？けど迷惑だからい」

「自分は自分が嫌な事は基本しない。迷惑だったら提案などしない。
後、自分はほとんどメールも電話もしない。返信が遅れても文句は
言うなよ。」

「……はいっ！」

横目で真っ直ぐ見つめられドキッ、と胸が高まる。
嬉しさが込み上げるのがわかった。

真理が思わず満面の笑顔で返事をすれば、メシアはポケットから携帯電話を取り出してカチカチとボタンを押していく。

真理もケータイを手早くいじり、赤外線で交換した。

それが終わり時間を確認して、メシアはベンチを立ち上がる。

ねこじやらしをベンチに置き野良猫を一度撫でた。

「じゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい！メシアさん！」

にゃあー。

二人に頷いてからメシアは振り返らずに公園を去る。

一瞬だけ晒した決意の眼差しに、真理は引き止めようと足を踏み出したが……伸ばした手を戻した。

行き場を失った手を握りしめ、無事に帰れるようにと真理は走り出した。

『行ってきます。お土産は適当に買ってくるから。』

「あちらは銃があるから気をつけてよ！ピロ君お願いね♪
行ってらっしゃい。」

（OK☆24時間見張っててやんよう！）

『任せろ、だって。』

親父お願い。』

「行ってきます。」

行くか。」

ブルル…

バアンツ！！

「兄貴！行ってらっしゃい！！

間に合った！」

『行ってくる。』

ブロロ…

助手席でパジャマ姿の源希を一目見て、親父が空港まで車を発進させる。

玄関前では、母さんと源希は車が見えなくなるまで手を振っていた。

移動中、車の音楽に耳を傾けながら小さく欠伸をした。

今はまだ7時になっていない。

空港まで距離がある為、早起きをしなくてはならなかったのだ。

親父は安全運転しながら、信号が赤になったところで俺を眼鏡越しに見る。

「眠いのか？」

『うん、まだ寝てる時間に起きたから。』

「ガム食べるか？」

『いや、平気。ありがとう。』

今日は混んでるね。』

「夏休みだから出かける家族が多いのだろう。仕方がないさ。」

『そっか…ふあ。』

由君ちゃんと起きたかな…』

「あの黒と金の女の子か。しっかりした顔だし、大丈夫だろう。」

『朝は弱いつてばやいてたからな…田中さんなら心配ないかな。』

「田中さんとは誰だ？」

『ライブする場所を管理してる人。一児の父親で由君とは古い付き合いらしい。あの由君が慕ってるから心配要らないよ。』

「そうか。」

『うん、……………あれ？』

窓を眺めていると、高速道をバイクが一台走り抜けている。

ヘルメットを被った男性と女性、よくある光景だが後ろの女性を俺は目で追う。

空港が見えてきて、あのバイクも真っ直ぐ空港に向かっているようだ。

あの焦げ茶色の髪と服装……………まさか。

バイクを凝視していた俺に親父が声をかける。

「知り合いか？」

『後ろの女性…和葉さんかも。』

「なるほど。あのバイクも空港に向かっているし、そうかもしれないな。」

『大丈夫かな……寝てたように見えただけ。』
「……………急ぐか。」

俺の言葉に、親父はバイクを追いかけるようにアクセルに力を入れた。

俺の見間違いでなければ良いけど、ね。
きっと眼鏡かけてないからだ、そうだろうだ。

（いや、今眼鏡外さなくても。）

今の俺に現実を突き付けるな。

こうして俺達は空港へと辿り着いたのだった。

キキィ…………。

入口前に親父が車を停める。

俺はお礼を言って、後ろの席に置いた鞆を取り出そうとドアを開けると、親父の後ろで車が一台停まった。

見慣れた顔が現れたかと思えば、後ろからドンツと誰かに抱き着かれた。

後ろを振り向けば、女の子らしい男の子が嬉しそうに見上げている。

「正軌！おはよ！

最近遊びに来てくれなかったから寂しかった！」

『おはよう瑠璃。悪かったな…あの場所に行くと帰れなくなりそうだな。』

「おーおー懐かしい顔だな。」

『田中さん、おはようございます。』

瑠璃の頭をクシャリと撫でれば、田中さんがタバコ片手に現れる。軽く頭を下げると、後ろからドアが閉まる音が。

「おはようございます。

初めまして、正軌の父の宮古 優人です。」

「おはようございます。

田中 健です。こいつは息子の瑠璃です。」

「おはよう、おじさん！田中 瑠璃です！」

「おはよう瑠璃君。」

『田中さんがいるという事は、由君起きれたんですね。』

「当ったり前だ。由を舐めんなよ…眠い。」

「由の限凄いつしょ？ゾンビみたいだ。」

「あんだと！？」

「おはようございます。田中さん、優人さん。

正軌、由、瑠璃もおはよう。」

言い合いを始める二人に呆れてると、後ろから耳に馴染んだ声がかかる。

メシアが鞆を肩にかけて、伯父さんと並んで立っていた。並んで比べると、本当によく似ている。

俺は瑠璃の頭に手を置いて、伯父さんに一礼する。

『おはようございます伯父さん。』

おはようメシア。』

「おはよう宮古君。」

おはようございます。黒澤 シェイルと申します。メシアの伯父で、今は一緒に暮らしております。」

伯父さんも軽く頭を下げて自己紹介をする。

それからまた名前を教え合って、親父達は何やら話し合いだしたので俺達子供は時間に余裕があるので離れた場所で雑談を。

和葉さんの中から駆け寄って来たので、瑠璃と自己紹介してから五人で話していた。

瑠璃はメシアに肩車してもらって終始ご機嫌だった。

「瑠璃ー、帰るぞ！」

「えー！？」

「じゃあ、私も帰るよ。」

みんな楽しんできなさい。周りには気をつけて。」

「メシア、空港に着いたら電話しなさい。」

無理はしないように。」

『ありがとう親父。』

「わかりました。ありがとうございます。」

「バイバイ！」

「瑠璃君バイバイ♪」

「健さんサンキューな！」

車が全て動いた後、俺達も空港の中に入った。

…そろそろ時間かな。

大分集まってるみたいだし。

和葉さんは学級委員だから教師達の所に行った。

班で固まって並ぶよう指示され、俺達はB組の列の最後で話した。

俺と由君は欠伸が止まらなくて親父のガムを貰えば良かったと後悔した。

座ったら寝てしまいそうになる。

「正軌、自分に凭るか？」

『いや、そうしたら寝そうだから遠慮する。』

『そういや由君。』

「んああ…何？」

「デカイ欠伸だな。」

「黙れ、低血圧なめんなよ…くあ…。」

『あっちの空港着いたら、そのまま出ちゃダメだよ？お金、しなきや…あふ。』

「話の途中で欠伸すんじゃないやねえ…よ、クソツ…欠伸移ったじゃないか。」

もーいーよ。お前らについて行くから。

ってか、さっきから女子の奇声が耳障りだ。黒澤どうにかしろ。」

「自分のせいではない。」

「特別教室の奴らもフラッシュ眩しいんだけど。宮古どうにかしろ。」

『俺のせい？』

「……後、さっきから空港にいるほとんどの女から嫉みやら嫉妬やら憎悪やら殺気やらが由に集中してんですけど。マジでどうにかしろ。」

『……メシアの人気は凄いな。』

「正軌だって、特別教室の生徒からは人気ある。」

『なわけない。こんな顔や性格を好きな奴は物好きくらいしかない。』

「自分の事か。」

『お前は論外だ。』

「お前らは自覚しろ！！周りの奴らにでも聞いてみやがれ！『俺ってカッコイイ？』って！ほとんどが縦に首振るぞ！！ああ自覚ないのがムカつく！！男子の気持ちがよくわかる！！」

学校内でも浅倉はスルーされて嫉妬の対象は全部由にくるんだぞ！？マジ勘弁してほしいぜ！！」
ポンッ。

「中馬：もう少し、声を落とせ。先生が、話してるから。」

由君の肩に手を置いたのは吉田で、何時も以上に顔色を悪くさせて腹を抱えている。

前を向けば、漢谷が腕組みして額に怒りマークを何個も浮かばせていた。

そーいや生徒指導だったっけ、あいつ。

弱々しい吉田の物言いは、まるでカツアゲされて怯えているサラリーマンのようで嫌な汗をダラダラと流している。

哀れ、吉田。

由君は俯かせていた顔を上げて、ヤンキー丸出しの声と顔で吉田を威圧した。

流石はレディースと言われるだけはある迫力だった。

「あゝんっ!？」

「!?!?…宮古、中馬を、頼むぞ。菓を、取りに行く…。」

『わかりました。』

不憫な吉田はヨロヨロと教師の鞆が集まってる所へ千鳥足で歩いて行った。

由君の脅しにシィン、と空港内が静まり返る。

ほとんどの生徒が青い顔で由君と目を合わせぬよう俯いていた。

教師も顔を反らす者が大多数。

漢谷は修学旅行での注意を大声で話しているが、生徒の耳には届いていないだろう。

カタカタ震えてる者までいた。

…一方、由君がキレるのに慣れている俺達は浅倉さんが戻ったのでメシアが事情説明。

俺は母さんに入れられた菓子を鞆から取り出して、イライラしてる由君に餌付け中。

由君は膝を抱えて俯いていた。

『由君、これ母さんに渡された菓子。これで機嫌直して?』

「……ふん。」

「食べないなら自分が食べるぞ。」

「キャラメルあるよー。一緒に食べよう?」

『お前のはこっち。和葉さんも、はい。』

ほら、母さんの菓子好きでしょ？朝飯代わりに食べなよ。』

「……………しょーがねえから貰ってやる。」

俺に向かって差し出す手に『素直じゃないね。』とカップケーキが入った袋を乗せる。

メシアはもう食べやがった。

仕方がないので俺の袋から一個取り出して、残りは成長期の大食いに恵んでやる。

甘さ控えめらしいが、乗り気ではない。

カップケーキをちぎって噛まないよう飲み込むと、カップケーキを頬張る由君と目が合う。

しかしすぐに逸らされてしまった。

『……由君食べて。俺もう限界。』

「なら自分が」

バシッ！

「由がいただく。黒澤は食い過ぎだ。」

「このままでも充分だけど、蜂蜜かけたらもっと美味しくなるかもねえ♪」

「浅倉は味覚がおかしい。病院行け。」

「えー、そんな事ないもん。由ちゃんも試してみなよー。」

「絶対嫌。ほらみろ、宮古は想像しただけで胸やけしてる。」

『俺にとって蜂蜜は毒薬と似たような物だ。あの存在は抹消されれば良い。』

「えー?!だ、ダメだよ!蜂蜜は地球に必要だよっ!」

「甘い物苦手（嫌い） v s 極度の甘党か。」

「何をそこまで力説するのかわかんねえよ。宮古もそこまで否定しなくても。」

後ろで話し合う俺達は誰にも注意されない事に違和感を持たなかった。

俺達以外の生徒と教師の気持ちは一つだった。

（（（（話しちゃんと聞こうぜ……何て、口が裂けても言えない。言えど死亡確定間違いない。

委員長／あの女子なら任せられると思ったのに………何故か宮古に蜂蜜のアピールしてるし。意味わかんねえよ！！

吉田先生――――！！！！！！何処に行ったああああ！！！！！！
????）））））

…その頃、吉田はトイレで薬を飲んでいた。

漢谷に叱られるも由君が睨みをきかせた為に、ぞろぞろと飛行機に乗り込む事になった。

吉田は他の教師に肩を借りて戻って来た。

修学旅行…初っ端から前途多難だよ！！（b y. 生徒一同。）

中編（修学旅行）

——飛行機の中。

「何処に座んだ？」

『高所恐怖症の人いる？』

「私：飛行機自体苦手…」

「自分は平気だ。」

「飛行機なんか初めてだし。」

『じゃあ、和葉さんはなるべく真ん中が良いね。通路側に座ろうか。』

後ろから二列目の左側に。

窓から由君、俺、メシア、通路側を挟んで和葉さん。

君は『窓際が良い。』と言ったので譲り、俺は顔色が優れない和葉さんが心配なので通路側に腰掛けようとすれば：自然とメシアと由君が隣同士になるわけで。

あからさまに嫌な顔をする由君と何か言おうとするメシアを遮り、仲裁する為に俺が真ん中に座った。

和葉さんとそうも遠くないし、問題ないだろう。

窓の外を見つめる由君を見て思い出し、鞆からある物を取り出す。

ピッ。

「？な、お前なに勝手に人を撮ってんだよ！？」

『良い絵だったから、つい。母さんに沢山撮ってこい、って頼まれたから。』

メシアと和葉さん、撮るよー。』

「ん。」

「うん。」

ピッ。

『…よし、綺麗に撮れてる。』

「ちょっと貸せよ。」

『さっきの消したら、由君の寝顔沢山撮るからね。』

「ヤメロ。」

デジタルカメラを由君に渡して、俺は鞆を棚に戻す。

カメラはポケットにでも入れれば邪魔にならないと考えて、席に座り直しシートベルトをすれば、

…ピッ。

『あ。』

「仕返しだ。」

横から撮られた。

由君は撮った写真を確認して俺にカメラを返した。

メシアが覗き込むので一緒に見れば、俺の横顔が画面いっぱい。自分の顔を見て『やっぱ目つき悪いな。』と苦笑して削除しようとボタンに手をかければ、

「消したらお前の寝顔、ケータイで連写してアイツらにメールするぜ。」

『え？』

「消したら自分もカメラで正軌を撮りまくる。」

『何でだよ！？』

「私も帰ったら正軌君の写真ちょうだいね♪」
『いや、1番いらないでしょ。』

（茶矢は悶えそうだけどね。）

なんでだよ!?

何故今茶矢が出てきた!?

「まもなく、飛行機が上昇します。シートベルトをおしめ下さい。」
アナウンスが流れたかと思えば、スチュワーズ達が見回り始めた。
た。

スチュワーズはメシアのシートベルトが緩くないか確認してから俺のもする。

俺は由君のがゆるゆるなのに気づいて、よそ見していたので勝手にシートベルトを引っ張った。

—キュッ。

「な、何だよ?!」

『シートベルト緩いと危ないぞ。はい、これで大丈夫。』

「い、いきなり触んな!」

腕をバシンッ!と叩かれてヒリヒリした。

メシアが由君を睨むのを『前を向け。』と宥めていれば飛行機が動き始めた。

ビクッ!!

突然女子二人の体が固まり、由君は無意識か俺の腕を、和葉さんはメシアの手を握りしめた。

だんだん地面から離れる機体に、強まる握力。

由君のは正直痛いけど、初めてだから仕方ない。

高度が安定すればきつと由君も平常になる。

♪…

「高度安全地帯に入りました。」

「お客様、シートベルトをお緩め下さい。」

スチュワーデスの声に、乗客はシートベルトに手をかける。

メシアは片方が使えないので片手で器用に緩める。

俺は由君の肩をツンツン突くも、腕から離れる様子はない。

メシアの方は我に返ったらしくお礼を述べて椅子に体を預ける。

和葉さん具合が悪そうだ。

本当に苦手なんだな飛行機。

足が浮いてるからダメだとかそんな類だろうか。

怯えてる彪の頭を引き寄せ窓から離す。

肩に触れる髪をポンポン叩いて『外ばっか見てると酔うぞ?』と

俺なりに宥める。

目をこれでもか!とまで見開く瞳と緩む手の平。

怒るかな?

殴られるかな?

怒鳴るかな?

メシアの手は何だ?

『……何コレ?コレ。』

「人肌恋しくなった。」

『右手よく見ろ。和葉さんの手を握ってるだろーが前も同じ事言ってたなお前。コノヤロウ。他の奴が見たら変に思うだろうが、何四人で繋いがつてるんだよ。変な集団だろいやもう俺ら浮いてるか今更だろうけど離そうぜ?』

「よく息続いたな。」

『やれば出来るもんだなだから離そうぜ?メシアが左手を膝に置けば全て丸く収まるんだ。』

…ポス。

俺が言う通りに膝に置いた。

置いたけど、置いたけどお前…ふざけてるのか?

意味わかってあえてやってんのか?

お前は俺を困らせて楽しいか?そうかそうか。

部屋でミッチリ叱ってやるからな、覚悟しとけよ?

「…オラ。」

ペシッ!

『痛っ!言葉並に由君地味に痛かった!何で叩いた!?』

「振動が自分にまで響いた。」

「何となくムカついたからな。しょーがないしょーがない、ハッ!」

『手の甲赤くなってるし。何故鼻で笑った?』

「浅倉寝てるな。手を置いてやれよ黒澤。」

「そうだな。正軌、手を離すぞ。」

『いや、最初から離してくれとお願いしていた。お前が握ってただけだし。』

由君ナチュラルに無視したね?』

シートベルトを外して和葉さんの手を戻す為に立ち上がるメシア。
由君は俺の赤い手を両手で持ち上げ『おー、マジ赤い。』と薄ら笑いしてる。

抓ったりペシペシ連続で爪で弾いたり楽しんでる。

：けど由君の目がトロロンとして俺には今にも寝てしまいそうに思えてならない。

弾く力もペシペシからヘシ：へ、シに変化してる。

手の高さも変わってて、最終的には・・・

「…………スウ…………」

『やっぱ寝たか。』

(写真撮って写真!)

記念だし、二人の撮っておくか。

帰った時の話のネタになるかもしれない。

メシアにカメラと説明をして、終わった後に俺も片手でピ、と。

由君も和葉さんも爆睡してるから気づいていない。

起きる前に壊される前にポケットにしまおう。

スゴイ体制で熟睡する由君の体をそー…と起こして座らせる。

静かに寝息をたてる由君に、普段と違って静かだなあ、などとキレられそうな事を考えてる。

――さて、暇になった男二人。

左右の女子は暫く起きる気配はない。

アメリカまで数時間はある。
映画が流されてるが見る気はない。

『……どうする?』

「自分は何でも良い。」

「お飲み物はいかがですか?」

これからを相談しているとスチュワーデスがワゴンを押して貼り付けた笑顔で俺達に質問する。

メシアは『どうする?』と首を傾げるので『水を下さい。』と頼む。

メシアは『コーラ。』とスチュワーデスに言えば、良い笑顔で紙コップを二つ渡された。

メシアが二つ受け取り水の入ったコップを渡してくれる。

『ありがと。』礼と共に受け取れば、スチュワーデスが身を乗り出して質問した。

「修学旅行の高校生だよね?隣の女の子達は彼女お?」

『「いえ、違います。」』

声を揃えて言った俺達にスチュワーデスは『ふふっ、仲良しね。』と口に手を当てて綺麗に笑った。

『そうですね。』とメシアがスチュワーデスを見ずにコーラを一気飲み。

俺はメシアに賛同するように頷く…が、スチュワーデスも安々と引き下らない。

メシアのコップを手に取りコーラを再び注ぐ。

俺はコップをテーブルに置き、空を眺める。

外は青と雲が広がっていて日本は良い天気らしい。

スチュワーデスはメシアに話し掛け続けるも、メシアは生返事ば

かりで俺は外を眺める事で逃げた。

スチュワードスは香水の匂いがキツイ。

鼻が曲がりそうだ。

しかも化粧がケバい。

マジで由君を見習え、って言いたいけど会話する気が起きない。

由君は化粧してもあんまし気分悪くならないし、薄化粧でも普通に綺麗になるぞ。

「自分達は“二人”でのんびりします。これ以上キツイ香水を近づけないで下さい。」

「なっ!？」

『すみません。俺が化粧品とか香水の臭いがダメなんです。コイツが代わりに言ってくれたので、気に障ったのならすみません。』

「それは申し訳ございません。」

では、楽しい空の旅を。ごゆっくり。」

ガラガラ：

メシアの言葉に一瞬顔を歪めたが俺の言葉にパツと笑顔を被りワゴンを押して行くスチュワードス。

あの真っ赤な顔を一瞬で変えたのは、流石はプロだと思った。
慣れてるらしい。

『ハアーー、疲れた。』

「正軌が謝罪しなくても相手が悪いのだから謝らなくて良かったのに。『ちゃんと仕事をしろ』と言えば相手はきつと」

『上っ面の謝罪で事が治まるんだったら先に謝った方が賢い奴だ。
日本はそういう人間が多い、覚えておけ。』

「……正軌もか？」

『そりゃ無意味な言い合いするよりかは先に謝るな。源希を除いては。』

それよりも俺は喧嘩したくないかな…こうやってのんびりしたい。』

椅子に頭を預けて目を閉じる。

人が多いのに静かな空間が俺は好き。

周りに友人がいるならもっと好き。

存在を確認できるし、触れ合う部分が妙に温かく感じる。

そんな風に思える時間になれるのも好きな理由の一つ。

目を開けて顔を動かしてメシアを見た。

『お前が行きたくない場所はハッキリ言えよ？』

「…。」

『乗り気じゃないのに無理するのはバレバレだ。』

実際あんまり良い思い出がないのだろう。』

「…何で？」

『わかった理由？』

「ああ。」

『パンフレットがアメリカばかりだったし、無意識にパンフレット見る時俺の服を摘んだ。他にも言おうか？』

「……正軌には勝てないな。」

『そんな事ねえよ。俺だってメシアに敵わない事が大量にあるさ。』

アメリカの案内、よろしくな？』

「任せておけ。」

拳をコツンと当てて、俺達は小さく笑い合った。

中編（修学旅行）

『メシア、由君凄いぞ。』

「先程からピクリとも動かないな。」

「……あ、あ、う？お前ら呼んだか？」

「あ、起きたね、由ちゃん。」

起きた（起こした）和葉さんと三人で死体のように動かない由君を見ていると、機嫌悪そうに眉間に皺を寄せて前髪を上げる由君。和葉さんは色々と横の人に迷惑をかけるので俺と席を交換した。頬を殴られたが何も言うまい。

寝てる人に何言っても変わらないから。

赤くなりジンジンとまだ痛む頬を頬杖で隠しながら三人と会話。

由君は横が変わってるのに疑問を問うたが俺は『色々あってね。』と苦笑して話を流した。

椅子についているイヤホンの先端を椅子の穴に入れて音楽を聴く。横の特別教室の生徒が騒がしいけど修学旅行なのだから仕方がない。

メシアはピロが持って来た漢字検定のゲームに夢中で女子二人は仲良く（？）お喋りだ。

顔色も最初よりは色も良い。

仮眠をとったのが良かったのだろう。

俺は何もする事もないので耳で音楽、目で映画というわけだ。

外国の映画で日本語訳が画面の下に移るので目だけで楽しめる。

『くあ……はあ、眠い。』

何だか俺も眠り込みそうだ。

その証拠に大きな欠伸が零れてしまった。

昼飯時に近いけど一眠りしようかと思ったその時、

…クイツ。

控えめに服を引っ張られた。

閉じそうな瞳を横に向ければ、特別教室の女子が視線を泳がせながら服を摘んでいた。

俺はイヤホンを片方外す。

『何か用?』

「み、宮古古今東西や、やらない?」

『ミヤココントウザイ?』

「ち、違う! 古今東西!」

「あのねー、リズムに合わせて動物の名前言うてくんだ!」

「お前違う、食べ物の名前だ。」

「せっかくだし一緒にやらない?」

男女それぞれ大人数に話されてちよつと躊躇ったが、まあ暇だし良いだろう。

イヤホンを外して『じゃあ、やろうかな。他の乗客もいるから静かにね。』と体を動かせば、何故か歓声が上がる。

うん、気にしないでおこう。

しかも名前だけ知っててやった事ないゲームなので、ちよつと楽しみなのは胸の内にしまっておこう。

(ま……き?)

…ピロ？どうした？
ノイズが変だけど…。

（ちよつと、ね。俺様疲れたから休憩する。何かあったら呼んで
ちよくだい？）

何が疲れるんだよ。

少女と遊び疲れるまで走り回ったのか？

（そんなトコ☆んじゃ、おやすみ♪）

ゆっくりしてろ。

おやすみ。

声がブレていたのに不審を抱いたがピロ達の詳しい情報がわからない為、考えても無駄だ、と即座に諦める。

ピロにも安息は必要だ。

そう思い、俺は現実に戻った。

「じゃあ、俺からなー！
梅干し。」

パンパン、

「牛丼ツユダク。」

パンパン、

「ラーメンチャーシュー葱少なめ。」

パンパン、

「ハンバーガーのピクルス抜き。」

『ちょっと待て。最初以外詳しく過ぎやしないか？』

「えー？ 私達いつもこんな感じだよねー？」

「おう。コレ普通。」

……誰か日本人連れて来てくれ。

本物のルールを、誰か。

「くぁ：飯食ったら眠くなった。」

『後一時間切ったから、もう少し我慢。』

「チキン美味しかったね♪」

「ビーフも美味かった。」

由君が『宮古の声が小さくて聞こえねえ。』と文句を口々と言い出したので、再び和葉さんと席を交替して昼飯を食べた。

和葉さんも似たような声量だと思うが、何か言えば怒りそうだから素直に従う。

因みに昼飯はチキンが俺と和葉さんで、ビーフが肉食の二人だ。メシアに一部盗られ、気を抜いた隙に由君にも一部盗まれた。

一言言えばあげるのに無言で自然に盗るのだからタチが悪い。

しかも二人共完食した後だから余計にため息が零れ出た。

♪~~~~♪~~~~

携帯電話を弄る由君は新しいメールのアドレスを見て顔を引き攣らせた。

サアア…と顔を青くさせ、瞬発力並の早さで立ち上がり鞆がメシアと俺の頭にバン！ドス！と当たったが由君は鞆の中をかき漁る。

目は死ぬ間際の人間のように必死で顔とは真逆に目が血走っている。

俺は見た目とは裏腹に以外と重量があった鞆の痛みと怒りに堪えるメシアの頭と、顫み（こめかみ）に何か固い物が強打した自身の頭を撫で下ろす。

頭がグワングワンするがまあ大丈夫だろう、うん大丈夫だ。

「！！あった！！」

由君はある封筒を見つけると何処かに走って行った。

足踏まれたけど何も言うまい。

メシアが追いかけてようと立ち上がるのを腕を掴んで無理矢理座らせる。

今のメシアなら女子トイレまで追いかけるかもしれない。
訴えられる前にそれだけは何としても阻止せねば。

ムツスリ顔のメシアの頭を子供の機嫌を伺うように顔を覗き込みながら髪を優しく撫でる。

俺も頭と足が痛むが俺が大人にならねばメシアは気持ちを落ち着かせないだろう。

『そうだ、アメリカじゃあ俺達の片方は必ず由君と和葉さんの近くにいる事。由君が喧嘩強くて危ないからな。』

「……ヤダ。」

『お前はガキか。』

でもさ四人で一班なんだぞ？誰かいなくなれば俺達、いや班長だから俺の責任か。楽しめる時間が減るんだけど…それでもか？』

「……それも嫌。」

『じゃあ、何を条件にしたら約束するんだよ？俺が叶えられる範囲内だな。』

「……、」

グイッ。

背けていた顔をメシアが俺の方を向いたので一気に顔が近づく。
それに何も動じない俺は火災になってもきつと冷静に対処可能だろう。

いや、関係ないか。

腕を引っ張られたかと思えば耳に唇を這わせられた。

少し低い声が耳に流れ込む。

「……じゃあ、夜は自分に付き合ってくれるか？」

『買い物か？なら昼間にでも良い』

「違う。夜の街、案内してやる。」

『なら二人も一緒に』

「正軌とが良いんだ。二人が寝た後に、二人で……」

ガッツ！！

『「！？」』

「お前えら公共の場所で何やってんだよこれからホモ野郎って呼んでやるおか？」

『由君、帰って来たんだ……』

「由、お前謝れ。鞆が頭に当たったし足を踏んだ。」

「サーセン。ほら、はよ退け。」

「っ！」

『はいはい、後で何にでも付き合ってやっから大人になれ。』

はい、指折り。これで良いな？」

「……ん。約束。」

「お前ら何の約束だよ？」

『夜に』

「由に言う必要ない。素直に謝罪出来ない奴は寝てろ。」

「何だと！？」

前々から気に障る奴だと思ってたんだ……黒澤表出やがれ！！」

「由は馬鹿だろう。此処は飛行機の中だぞ。自殺しろと言っているんならもう少し言い方を考えるんだな。ハッ。」

「んだと！？由は馬鹿だよ馬鹿な頭だよんでお前に迷惑かけましたか？あゝ？言ってみろよ？」

「今現在そうしている事に気づいてな」

『はい終了。口喧嘩これで終わり。殴り合いもしちゃダメだからな。』

人間みんな馬鹿なんだから、勉強だけで判断するな。メシアも言い過ぎだ、ちゃんと謝れ。』

「…………ごめん。」

『ほら、由君も。』

「……………悪かった。」

『二人共これでスッキリしたろ？

もうすぐ着陸するから席座ろうか。由君とメシアは席替えな。』

由君も外は飽きただろうし和葉さんと喋るのも近い方が話しやすいだろう。

有無を言わさずメシアを奥の席に座らせ二人が触発せぬよう俺は素早く真ん中に座る。

由は暫く俺を睨むように見下ろすが俺が無視し続けたので長いため息を吐いて渋々といったようにメシアが座っていた席に腰掛けた。これで嵐が去った。

よくやったと乗客とスチュワーデスの視線が教えていた。

唯一、和葉さんはニコニコしながら見てたけど。

ピンポンパンポン♪

「もうすぐ着陸致します。係の指示に従って下さい。」

やっと終わった……。

アメリカでは二人が仲良くしてくれますように。

それだけが1番の願い。

中編（修学旅行）

……一方、日本のお昼。

ある古びたアパートの階段を二人の男子高校生が上っていた。

片方は旅行鞆を肩にかけていて、熱中症対策の為に帽子を深く被っていた。

―ガチャ。

「源希ッス！お邪魔しまーす！二泊三日お願いしまーす！」

「連れて来た……。狭いけど、どうぞ。」

「源希君いらっしゃい！」

真尋君、お母さんお仕事だから三人で食べててだって。」

「真理ちゃんよろしくね♪」

「うん、わかった。」

あ、とも美さんが、お世話になる…代わりって。」

真尋は手に持っていた紙袋を持ち上げ私服姿の真理に渡した。

真理はキラキラした目で紙袋の中を覗き見る。

そして満面の笑顔で二人を見上げた。

「チーズケーキ大好き！ありがとうございます！」

「どいたまー☆

真理ちゃん可愛いねえ♪俺にも下がいたらなあ……ちようだい？」

ギョッ。

「あわわっ!？」

「だ、ただダメっ! 真理はボクの、妹だよ…!」

「にゃはは冗談冗談☆

でもこんな可愛い妹がいて真尋が羨ましいな。もうちょつとだけ。」

「真理もギュ〜返し♪」

「じゃあ…ボクは荷物、置いてく、る……」

グイッ、トスッ。

「「「…。」」」

真尋が源希の旅行鞆を持ち上げようとした拍子、真尋が尻餅をついてしまった。

真尋の腕力がたった一つの旅行鞆に負けたのだ。

衣類は勿論だが、1番重い物はDSやカセットが入ったケースくらいだろう。

それでも1kgもないのは源希だけが知っている。

源希は慌てて真尋を立ち上がらせた。

真理も『お兄ちゃん大丈夫?』と真尋を支える。

真尋は苦笑いしながら『ありがとう。体力、つけた方が、良いかな…。』と頬をポリポリしたのに二人は『手伝える事があったら言うて!』と両手を胸辺りで握りしめた。

やはり平和な窪田家である。

――キイイイ：

長い機内での移動も終え、今は空港の中。

俺と和葉さんは狼と彪に挟まれて漢谷の簡単な注意を聞いている。
これからホテルに行って、そこから自由行動だ。

ホテルで寝るも良いし、街へ出るも良い。

教師に何処へ行くか伝えて、グループ全員で行動するのが決まりだ。

因みに次の日はデイ○ニーランドに行くらしい。

予約していたバスにクラス別で乗り込み、俺達は1番後ろの座席に並ぶ。

左から由君、和葉さん、俺、メシア。

前が騒いでいるのに後ろだけ静か、いや騒いでる奴らは必死な顔してる。

無言の二人に内心ため息を吐いて和葉さんと雑談する。

メシアは指切りしたのに大人になってくれないので約束は無しだな。

和葉さんはニコニコ笑顔で『ワクワクするねえー♪』と話している。

俺も頷いて応える。

「今日はどうする？部屋でのんびりしてる？」

『……二人はほっといて、二人で買い物に行く？』

「！？」

「それも良いかも。正軌君と二人きりは珍しいねえ。」

驚いた顔でコチラを向く二人を無視したまま俺達は喋る。

和葉さんは意図を読んできたのか両手を合わせて賛同してくれる。

勿論、漢谷の注意はキチンと覚えてる。

犬猿の仲の二人をどうにかする為の作戦だ。

二人の制止の言葉を前に俺達の話は膨らんでいく。

『そういえば店が並んでる場所が近かったよな。そこでも行く？』

「わぁー素敵♪私、服を見てみたいなあ。」

『付き合うよ。誰かさんが約束破ったから何の予定も無いし。』

「っ！」

「そうなの？私も一緒に見て回る予定だったけど…機嫌悪そうだから困ってたんだ！」

「！？浅く」

『丁度良かったね。じゃあ、部屋で一休みしてから行こうか。』

「正k」

「うん！約束ね♪」

『ああ。』

「「……………」」

こうして約束は交わされるのであった。

――ピピッ、ガチャ。

荷物を持って部屋に入ると意外と広い部屋だったのに驚いた。
部屋の隅に先に送った鞆が並べられている。

このホテルのオーナーは日本人で校長と知り合いらしい。
金掛かってるだけあって色々凄い。

自分の荷物を持って奥の部屋を開けて入る。
教室で部屋は決めてあったのだ。

ベッドの前に荷物を置いて中身を確認。

後にメシアも入って荷物をベッドの上に乗せた。

メシアの荷物はやけに少ない。

まあホテルだしさほど要らないのは事実だけど。

メシアが部屋のカーテンを開けてる時、俺は入れたはずのない荷物があってピロを叱っている最中だった。

何かゲーム類多いし、源希にカセット借りたな。

(そそ。源希は喜んで貸してくれたよーん☆)

こんなにも誰とすんだよ。

メシアと和葉さん、絶対持ってたねえぞ。

由君は知らないけど。

(昨日由君にメールしたから大丈夫！あ、そろそろ来るかな〜♪)

ーバアアンツー！

「宮古お……由と勝負だあ！さっきはよくもシカトしてくれたな糞野郎！」

由君の片手にはDS本体が。

俺は鞆のチャックを閉めて立ち上がる。

『いや、してないよ。それから由君、此処ホテルだから壊したら弁償しなきゃならないから大切に扱ってね。』

後、委員長と班長は部屋に着いたら担任に報告しなきゃならないからちよつと待ってて。』

「正軌君、行くよ。」

『あ、うん。今行』

ガシィッ!!

部屋を出ようと由君の横を通り抜けたら、後ろからタツクルのよな勢いで抱き着かれた。

犯人は身長と行動でわかって、俺は壁に手について何とか倒れぬよう踏ん張った。

由君の顔が酷く歪んでる。

タツクルした人物は背中に顔を押し付けたまま呟く。

「……約束…守るから。自分を、置いて行かないでくれ。」

『…いや、この状況の時点で前の約束破ってるし。』

「由とも極力仲良くするから。」

「極力かよ。」

『……もしまた言い合いしたら、二人共本気で置いて行くからな?』

「げ、マジかよ。」

「私も置いて行くよ?」

「……わかったよ。」

「わかった。」

『んじゃ、本当に報告だけだからメシアは離せ。

俺達がない間、ゲームでもして時間潰して待ってな。こっちは直ぐ終わるし。』

「私も先生にする事聞くだけだからー。」

納得したメシアとソファーに座ったままの由君に『待ってる間も喧嘩するなよ？行ってきます。』と念を押してから、俺達は部屋を出た。

戻るまで肉食獣達が我慢できるか見物だな。

『…少し長引いたね。』

「ごめんね！待っててもらっちゃって…」

『部屋同じだし気にする事じゃないよ。』

絨毯が敷かれた廊下を二人で歩いていると、部屋の前に見知った人物が。

俺達の部屋の扉をジィー…と見つめている。
ピタ、と足を止めて眼鏡を上げ戻した。
その人物は俺に気づくとその顔に花を咲かせた。

「墮天使様っ！逢いたかった！」

ダキュッ！

『わっ、』

「墮天使…様？正軌君が？」

小走りで抱き着かれた俺はメシアのように離せずに思わず両手を
上げる事しか出来ない。

和葉さんの不思議そうな顔に俺も首を傾げると、また後ろから声
をかけられた。

こちらにも聞き覚えのある音だ。

「あゆ。宮古はん困っとりますさかいに、離したり。」

「弘六ヒロムのクズは黙ってて！やっとうして出会えたのに、雰囲気ぶ
ち壊しよ！！」

『あ、会長。こんにちは。この子と知り合いですか？』

「こんにちは。」

「ご機嫌よう。」

あゆは自分の幼なじみです。親が同じ役職さかいに、仲良しですわ。
「

「墮天使様っ！あゆの部屋に行こうよ。…二人でいっぱいお話し
よ？」

上目使いで首を傾げられても正直困る。

てか、俺と話す時はメシア以外ほとんど上目使いだから見慣れている。

“あゆ”と呼ばれる少女は縦に首を振らない限り離してくれそうにない。

困ったな、とため息をつけば会長が動いた。

あゆの体をいとも簡単に俺から離す。

だが、あゆは暴れまくる。

「あゆ、我が儘はいい加減にしまへんと。宮古はん困っとりますよ？」

「ヤダー！！墮天使様があゆを嫌がるわけないじゃないっ！！弘六の馬鹿っ！！」

瀬戸！瀬戸！！
瀬戸！瀬戸！！

「は、こちらに。」

「あ、執事はん。この我が儘娘預かって下さいな。」

「申し訳ございません、弘六様。」

さ、お嬢様こちらへ。」

あゆが名前を呼べば即座に現れた、外国特有の美しい顔をした執事服姿の男性が現れた。

身長は俺より高く190cmはあるだろう。

銀髪のショートヘアに、若干気弱そうな表情が印象に残る。

緑色の瞳にあゆを映したかと思えば、会長の言葉に深々と頭を下げ、壊れ物のようにあゆを抱き上げた。

あゆは瀬戸と呼ぶ男性に抱き着いたまま俺を指差す。

完全に外野状態だった俺は和葉さんに『部屋に戻ろうか。』と言

いかけたところだった。

突然の事についていけない俺、あゆが言い放つと同時に俺達の部屋の扉が開く。

ガチャ、

「瀬戸！墮天使様を捕まえてっ！捕まえなきゃクビよ！」

「わかりました。」

『へ、え？』

ストン、とあゆを床に置いたかと思えば俺を目で捉える瀬戸さん。部屋から由君が何かを俺に向けて投げ出したのを瀬戸さんは振り返らずに払い落とした。

目は俺を捉えて離さない。

距離は3Mも無く、今捕獲されておかしくない緊張感に張り詰めた空間。

……だが、会長が俺の間に立ち塞がっているからか瀬戸さんは一歩も動かない。

由君がこっちに走って来るのがわかる。

会長は腰に手を当て含み笑いを浮かべる。

「執事はん……あんさんの秘密、自分ようけ知っとりますえ？」

「……すみません。弘六様、お退き下さい。」

「瀬戸！早くしてよこのノロマ泣き虫亀！」

「……弘六様、お願いいたします。」

「嫌ですわ。宮古はんは命の恩人、見捨てるなんて人間じゃありません。」

勝手に泣けばよろし。」

「和葉、何事？」

「あ、弥生！」

「うらあっ！！」

「正軌っ！」

ガッツウ！！

「あ…痛い…。」

『ええ！？ちょ、無理無理無理！！』

瀬戸さんが会長の言葉に泣きそうな顔で、

その時弥生さんが現れ、

由君が跳び蹴りして、

メシアが叫んで、

瀬戸さんは前のめりに倒れて、

会長は何時の間にか俺の後ろにいて俺の背中を押して、

そして俺はどうすれば良いのかわからずに『無理』を連呼して、

終いには瀬戸さんの両肩を持ち上げる形で踏ん張る事になった。

瀬戸さんは膝を着いていないので全体重俺が支えてる。

見た目の割に瀬戸さん重っ！！

（正軌！手を離せ！！）

無理だって！

瀬戸さん倒れ込むぞ！？

ピロ見損なった！！お前最低！！

（違えよ！！正軌が危ないから、ツチ！！）

グサツ。

「すみません。」

『……………へ……………？』

ピロが舌打ちしたのと同時に前方から小声と太股にチクツと針に刺されたような痛みが。

下を見れば瀬戸さんの手に注射器が握られ、その先は俺の．．

ドクッ！！

『……………あ…っ！？』

「突然申し訳ありません。暫く眠ってて下さい。」

『……………ピ……………』

ドサツ！

——目の前がクラクラする。

頭がぼやける。

誰かが名前を呼ぶ中俺の体は瀬戸さんの肩に担ぎ上げられ、抵抗しようにも麻痺して動けず、意識は強引に奪われた。

ピロ……………他の奴らは、無事か？

正軌を肩に担いであゆの後ろを歩く瀬戸。

後ろには気絶して廊下に横たわる由と和葉を庇うように前に立つ弥生。

メシアは胸を手で抑えて跪ずいた体勢で噎せて（むせて）いた。弘六は腕組みしながら壁に凭かかったまま口を開く。

「瀬戸はん。」

ピタ。

「……何でございますか？」

顔だけを横に向け、弘六の答えを待つ。
目は泳ぎ今にも泣きそうだ。

正軌は今だ瀬戸の肩でダランと気絶している。

弘六は懷からある写真を取り出し、ニヒルに口角を上げた。

「瀬戸はんが番犬に追いかけて色々な写真とおばさんの絵画に色々して隠した時の写真。」

「?！ど、何処で、その写真を……」

「神様が贈って下はったん。」

コレ……おばさんにあげてまおうかなあ。」

「…………お嬢様…瀬戸はどうすれば……」

「墮天使様を家に連れて行く。他に選択肢は無いわ!」

「このままだと瀬戸は、本当にクビになって、お嬢様のお傍に……いられなくなってしまう……うわぁん!!」

「ウザイ!!泣くんじゃないわよ!!」

顔を上に向けて子供のように泣きわめく瀬戸。

あゆは耳を塞いで瀬戸の足を蹴るが更に泣いてしまう瀬戸。

弘六は写真で口元を隠しケラケラ笑う。

弥生と和葉はそのうちに二人を部屋に入れていた。

わんわん喚く瀬戸は変化に気づいていない。

肩に担いでいる正軌の手がピクツと動いたと同時に、指を絡ませ勢いよく振り下ろした。

ビュッ!ガッ!!

「痛いっ!」

ドサッ!

落とされた正軌の体は、這いつくばるように瀬戸達から少しずつ距離を置く。

薬の効果がまだ体に残っているのだ。

体を起こす力もないが正軌の体は亀より遅くても前へ進む。

それに気づいた弥生はメシアを任せて正軌の体に駆け寄るが…力が弱かったのか瀬戸が再び正軌の体を持ち上げようと立ち上がった。いた。

その距離は弥生がギリギリ間に合うか間に合わないかの境目。

弥生が顎を引いて走り出した途端、正軌の体は瀬戸に攫われようとしていた。

スッ、と手が正軌に触れようとした瞬間、

——バシィッ！！

「!？」

『…っは…ハアッ…、クソ……があ…。』

正軌の体が遠心力を利用して腕を瀬戸の顔に当てたのだ。
力が無いにしても長いのが吉と出た。

肩で息をしながら、俯せたまま掠れ声をあげる。

『……あ…ふっ、汚え手で…正軌に、触るんじゃねえぞ！卑怯な手、使ってまで……するなんて…、ツクソ…』

ピロは喋ってる途中で視界が暗黒になりかけている事に強く瀬戸を恨んだ。

両腕の力はもう残ってはいない。

瀬戸が頬を手で抑えてポカーンとしている間に、弥生が追いついた。

弘六に軽く頭を下げピロを引きずりながらも走り抜く。

『弥生、さん…ありがと……ごめん。』と呟くとピロは目を閉じた。

弥生はその囁きが耳に届いたのかはわからないが、唇を噛み締めて最終的にはピロを部屋に投げ入れた。

和葉は足を慌てて部屋に入れる時間、弥生が瀬戸達に注意して完全に入った時鍵を閉めた。

——ガチャンツ！

廊下に残された幼なじみは無言で睨み合う。

瀬戸は一人、これからの己を考え涙した。

「……………行った。」

「本当？良かったあ………はふう。」

「宮古、中馬、起きた？」

「まだだ。二人共、気絶している。」

弥生：助かった。感謝する。ありがとう。」

「……………困ってた、当然。」

「弥生本当にありがとうっ！」

弥生大好き！！優しくて涙出ちゃいそうだよ！」

「和葉……………大好き。」

気絶している二人をメシアと弥生でソファに寝かせ、起きるのを待つ三人。

メシアは辛うじて意識だけは残ったが、呼吸する度に辛そうに顔を歪ませる。

何度も、何度も、『すまない……』と謝罪を言葉にしながら正軌の髪を撫でる。

たまに由の頬を引っ張り小さく笑う。

抱き着く和葉の背中をぎこちなく叩いていた弥生が、不意にメシアへと声をかける。

顔は試合の時のように真剣そのもの。

「……アイツら、宮古、知り合い？」

「少女には一度だけ正軌の家の前で会った事がある。聞けば名前も知らないし初対面らしい。正軌の事を『墮天使様』と呼ぶおかしい少女、だと言ってた。」

「でもさ、正軌君は覚えてなくても女の子の方は凄く好意を持っていたようだったよ？笑顔可愛かったし♪」

「白城シラシロ、ある。」

「…白城？何があるんだ？」

「見た。学校、廊下。」

「「!？」」

思わぬ弥生の発言に二人は目を見開かせた。

弥生は表情一つ変えず、コクリ頷く。

弥生はポケットから携帯電話を取り出しカチカチカチ！と素早く文字を打ち込む。

流石は女子高生と言うべきか、数分たらずで終わらせた。

それを二人に見せる。

「二年生の時同じクラスだったけど滅多に教室に来る事はなくて、移動教室の時に歩いてたら加東と白城が並んで歩いてるのを見かけたよ。白城はやっぱりイジメにあってたみたいで包帯とか生傷が絶えなかったよ。けど、白城は全く気にしたそぶりはなくて何時も通り我が儘全開だったからそれがイジメっ子達の反感を煽ったみたいで……最近白城見かけなかったかも。」

「……あ、あの時のか。」

「メシア君？白城さんを知ってるの？」

「ああ、一応な。あの日は原形がわからなかったから気づかなかったけど、弥生のでハッキリした。弥生ありがとう。」

「……当然。二人、運ぶ。」

弥生は由を抱き上げ、メシアも正軌を寝室へと連れて行く。

一人残された和葉は、己の携帯電話を取りに部屋へと走った。

中編（修学旅行）

『……あれ？誰もいない。』

世界に来たは良いが、少女やサラの姿が見当たらない。
走って探して、呼びかけて、見回しても、誰もいない。
サラに外を見せてもらおうとしたのに……あ。

『サラ！』

何時もの背中に向かって走る。

少女の髪も見えたので膝の上で寝ているみたいだ。

……寝てる？

「止まりなさい。」

『……少女はどうしたんだ？具合でも悪いのか？』

「この子は今頑張ってるの。貴方は知らなくて良いわ。」

「……あ……」

少女の苦しむ声が耳に届く度にサラが少女の背を撫でる。

少女のブレスレットは細い腕に巻き付くような形に変わっていた。

少女は少しだけ大きくなった。

『……俺のせいかな？』

「……。」

『俺はどうすれば少女を助けられる！？』

「……今の貴方には無理よ。貴方が消えてしまったら、私達は生き
る意味が無い。」

サラは顔だけ俺に向け、片手を俺に突き付けた。
悲しげな表情で、ポツリと零した。

「もうこの世界に来てはいけない。現実で生きなさい。貴方はもう大丈夫。私達は此処で頑張るわ。
愛し子……さよなら。」

『サラ、』

シュン。

その手に触れる前に、俺は消えてしまった。

サラの最後の笑顔を目に焼き付けて……――

――……手が、温かい。

思わぬ拒絶から涙が零れ重力に従う。
この手を軽く握り反対の腕で顔を隠す。
なるべく明るく振る舞った。

『もうシャワー浴びたのか？メシア。』

「ああ。正軌も動けるなら入ると良い。」

『まだ足がダルイから、もう少ししてから行くよ。』

「そうか。」

メシアは何も言わずに傍に居てくれた。

何も聞かずに、伸ばした手に行き場を与えてくれた。

泉が治まるまで、黙って見守ってくれた。

俺はただ、声を押し殺して唇を噛み締めるだけ。

『……っ…ごめんな。もう大丈夫だ。』

「まだフラついている。肩を貸す。」

立ち上がる拍子に足が折れ、メシアが肩を貸してくれた。
俺は俯いたまま『悪い…』と謝りメシアに頼る事にした。

――シャアアア…

上からシャワーを全身に浴び、床に体育座りをし膝頭に顔を埋める。

今は何もしたくなかった。

雨のように水を浴び続けたい気分だ。

このまま一緒に無くなりたい気分。

目を閉じて…覚めない夢と共にいたい。

…メンタル弱いんだから、サラももうちょっと言い方変えてく
よ。

ただの我が儘だってわかってるけど、それくらい許してくれ。
今は暫く独りでいたい。

—ガラッ！

突然浴室のドアが開いた。

メシアはソファにいるはずなのに……ミステリー。

予想外の登場人物は俺を見下ろした後、シャワーの温度を上げて
しまう。

お湯が変わるのが体で感じる。

登場人物は俺の頭を一回叩いて、怒鳴った。

この人は綺麗な声でよく怒るな…。

「ダアホ！！んな冷水浴びまくってたら風邪ひくわ！！修学旅行で
風邪なんかひくな迷惑だわボケ茄子っ！！！！」

『……。』

「ああ〜ん？由の言葉を見無視する何て上等だなあ、あゝ？リンチしてやろうかがり勉強長？」

『……由君入ってないの？』

―キュキュツ。

「宮古が目え覚ます前にとっくに入ってたわ阿呆。

おら、あん時みてえにずぶ濡れじゃねえかよ。仕方ねえな。」

『……ごめん。』

「謝るくれえならさっさと出る。風邪ひいたら、アイツらに簡単に捕まるぞ？」

タオルで乱暴に頭を拭いてくれる由君。

ボソツと呟いた言葉にまた怒られた。

アイツらとはきつとあゆと瀬戸さんの事だろう。

もう眠気と痺れは残っていない。

それくらい充分寝たのだろう。

俺は顔を少しだけ上げ横で水滴を拭ってくれる女性を見上げる。

もう寝る予定なのか、Tシャツに短パン姿だった。

化粧もしていない。

俺は腰にタオルを巻いていて良かったなあ、とかのんびりした

考えで由君をジッと観察してれば、ふと由君と視線が交わった。

だが更にワシヤワシヤされて強引に外されてしまう。

由君はバチィッ！！と背中を叩いた。

ひりひりするのは当たり前。

「別によ、お前が喋りたくなきゃ話さなくていいけどよ。風邪ひき

たきやひけばいーし。

由達には干渉する権利なんかねえんだし。由にだって、お前らに話したくない思いもある。人間誰しもそんなもんだ。」

『…風邪は嫌だな。迷惑かけるし。』

「なら冷水なんか浴びんなバーカ。」

……お前が引き籠ると心配する奴らがいののだけは、勉強しか入ってないお前の脳みそに刻んどけ。由が言いたいのはそれだけだ。」

ガラッ。

浴室から出ようとする由君。

俺は無意識にその手を掴んだ。

驚きに見開く由君に俺は、俺は、俺は……

……縋ってしまう。

誰かの夢話のような願いを隠しながら、由君に問い掛ける。
叫びに似た声が浴室に静かに響く。

否定されたらもう終わりだと心が確信して。
俺は喉を震わせ音を作る。

『――俺は………』

肝心なところで喉が引き攣って言葉が出ない。

…嗚呼、俺は何をやってるんだか。

人に縫る事で相手が辛くなるとわかってるのに、馬鹿だな。
俺は弱さを理由に逃げ場を求めてばかりだ。

…ポン。

由君の綺麗な手から汚れを外し、背中を押す。
なるべく笑顔で話しかけた。

『ごめん、何でもない。引き留めて悪い。』

「お、前…」

『そろそろ着替えたから由君出てくれる？これじゃ本当に風邪ひく。』

何か言いたげな顔の女性を無理矢理追い出して、浴室の扉を閉める。

ズルリと崩れ落ちたのは、体か、己か。
詳細なんか当にわかってる。

……大丈夫だよな。

みんな寝てたし、置き手紙程度のメール打ったし、ちょっとロビーで寛ぐだけだし。

あれから就寝時間の為ベッドに潜ったのだが、眠れるわけもなくて。

メシアの寝息が聞こえたので、もしも用にメシアにメールして、夜景を撮り、電気をつけるのもあれなので、ノートとシャーペン片手に部屋を出た。

教師もこの時間なら寝てるだろうし、ロビーなら電気ついててテーブルもあるからこうして来たのだ。

題名の無いノートにツラツラとシャーペンを走らせ、ずり落ちそうな眼鏡を人差し指で上げる。

視力が悪いと本当に不便だ。

近頃、眼鏡無しじゃあ文字も見えない。

ある程度書いたところでノートを閉じ、椅子にもたれ掛かる。

日付はとっくに変わってる。

体は疲れているのに頭は要求しないので意見の違いに肩が重く感じる。

目を閉じて、外を走る車の音を静かに聞く。

走る音に同じ音がないのに気づくのはどれくらいの間だろうか？
微かな違いがよくわかる。

——コツ、コツ、コツ。

誰もいないはずのロビーに一人の足音が響く。

それはコチラに向かってだんだん大きくなり、数M先で止まった。俺は目を閉じたまま訪問者の言葉を待つ。

相手は俺を見つめていたが、起きてるのがわかると口を開いた。昼間とは少し違う声だが同一人物だとわかる。

「――此处、よろしいですか？」

『どうぞ。明日はしおり通りにディ○ニerland行くので、何もしないです。』

「ありがとうございます。」

カタン。

静かに椅子を引いてその人物は腰掛ける。

俺は目を開けて瀬戸さんを映す。

背筋を伸ばし足を組んだ姿はやはり様になる。

顔は良いのだから、黙ってれば二枚目だ。

俺は一旦座り直して、眼鏡をテーブルに置く。

昼間の事もあったが、何かする気配は感じられないので警戒はない。

個人的に会いに来たみたいだし。

『俺に何か用件でも？』

「お嬢様を助けていただいたようなので、礼を述べ忘れていました。この度は真にありがとうございます。」

『いや、俺が助けたわけじゃありませんよ。

にしても日本語が流暢ですね。』

「ありがとうございます。5歳から日本に住んでいますので、そのおかげかと。」

お嬢様は宮古様に助けられたと申されておられました。」

『長いですね。』

俺は人助けなどするタイプじゃありません。きつと白城さんの見間違いですよ。』

「しかし、お嬢様は確かに宮古様だとおっしゃいました。」

『人の記憶は曖昧で不確かなモノです。自分以外の記憶を信じるのは難しいですよ。』

「…では、宮古様はお嬢様を嘘つきだと？」

『いえ。ただ俺に似た人の間違いだと言いたいのです。』

静かな怒りを発する瀬戸さんに首を振って返す。

こういう一途なタイプはほっとくと後々面倒になるので早く訂正しないと。

しかも初対面で注射器ぶっ刺したなら尚更だ。

俺は席を立ち、満足した顔じゃない瀬戸さんに告げた。

『俺はあの子と話す気はない。話したいなら友人がいる時か俺が一人にいる時とかに来てくれ。俺にも予定や時間がある。』

それじゃ、おやすみなさい。』

「……おやすみなさいませ。」

コツ、コツ、：

♪~~~~♪~~~~

ノートを手に部屋へ戻ろうと歩いていれば、ポケットに入れたままの携帯電話が鳴る。

画面を確認すると耳に当てた。

『もしもし。』

「正軌。今、何処にいる？」

『エレベーター。気晴らしにロビーでぼけっとしてた。もうすぐ部屋に戻る。』

「わかった。」

ピッ。

チーン。

タイミング良く部屋がある階に着き廊下を歩く。

少し歩いた所で、部屋の前でよく知る人物が扉に凭て腕組みしている。

眉間に深い皺を寄せて俯きがちな辺り、相当お怒りらしい。

いや、寝てると思ったからメシアだけにしたんだけどね。

メシアは直ぐに電話して迎えに来そうだと思ったから、置き手紙したのに。

結局は電話されたけどね。

わざわざ起きたのは困ったな。

さてと、そろそろ言い訳を考えないとな。

部屋の前の女性は横目で俺を一回確認した後、トツと背を浮かした。

そのまんまズンズン俺へと直進。

——ガシッ！！

「先ずは部屋入れ。」

『わかった。』

胸倉を引っ張られ若干苦しかったけど、俺はノートを後ろに隠す

ようにして由君の後に続いた。

――ポーンと突っ立ってる俺がいる。

俺の周りには直径2Mくらいの小さな輪が描かれていて、俺はその中心。

俺が一步進めば輪も移動し、止まれば輪も同じ。

見渡せど夢には誰もいない。

――コレは、前の俺か。

今より更に不安定で、誰もいなかった俺がこの輪を表している。

触れようとするも輪も逃げるように俺と一緒に動きをするから触れる事すら叶わない。

2Mという微妙な距離。

半径1Mでも難しいのだ。

ゴロン、と寝転がれば輪も広がりちよっとムカつく。

ため息が零れた。

『……早く覚めろよ。』

『そんな悪い事じゃないわ。』

『?』

俺の呟きに誰かが返したので会話が成立した。

上半身だけ起こして見渡せば、数M先に誰かが俺の方をジッと見つめていた。

何故か見覚えのある姿に頭がズキッ！と鈍く痛む。

胸の臓器が異常な早さで動くのでハッキリ言って苦しい。

異様なほど流れる汗に違和感を覚え、同時に体がこのような体験を覚えているかのように何かが流れた。　…その時、スウと伸びた白い手が俺の顔を包み込み、目の前の“誰か”は優しく微笑んだ。

顔を上げる勇気が俺にはない。

ただ、ガクガクと肩を震わせ成すがままに無駄な抵抗をしない事以外、女性の手に握られた刃物を見なかった事にする方法がない。

女性がそつと優しく片腕で俺を抱きしめた。

嗚呼…これで逃げ道は防がれた。

女性はスムーズに本当に自然な動きで俺の背中に刃物を握った手を回した。

渴いた唇が耳元で蠢く（ウゴメク）。

「だアイ　好き　だよ？　君も　ア　タシを、

愛ジテ　る　？」

…ググウ…ズクツ……！！

『あ…あ…あ　ゝあああ…っ…？！？！？』

何かが背中を深くエグる。

痛覚の限界を通り越し、涙は出なかった。

あるのは『もう枷を嵌められた』という絶望だけ。

この背中への傷は二度と消えない鎖代わり。

触れる手の冷たさは、俺が忘れていた間の彼女の悲しみだろうか。
背中を大量に濡らす液体はきっと罪の証だろう。

彼女がニタァと笑った。

「コレで ずうツと 一緒ダあ…。」

その声を合図に、倅の時間は終幕を迎える。

中編（修学旅行）

早朝の街は静かでランニングやウォーキング、犬と共に散歩をする人しかない。

——タッタッタッタツ：

そんな中、並んで走る男女の姿が。

お互い真っ直ぐ前だけ向いて足を前へ走らせる。

：何だか対抗しているようにも思えるのは何故だろうか。

二人共スピードを緩める気はサラサラない。

「……。」

「……。」

無言なのが余計怖い。

何が二人をそこまで争わせるのか、飼い主二名さえもわからないだろう。

：しかし、とにかく速度は早い。

あっという間にホテルに戻ってしまった。

タオルで汗を拭きながら並んでエレベーターへ。

呼吸を整える音がエレベーターを占める。

男女はチラリと相手を盗み見た後、

：チーン。

エレベーターが階に到着し、男性だけが降りた。

クルツと振り返り男性は女性に軽く手を振る。

「お疲れ、弥生。」

「バイバイ。黒澤君。」

弥生も軽く振り返し、エレベーターの扉は閉じた。

メシアは肩に掛けていたタオルを手に、自分が泊まっている部屋へと歩んだ。

――…ガチャ。

まだ起きてない部屋の人達。

由は昨夜ソファで寝た。

部屋に戻った正軌が何を言っても無反応だったので、万が一の為にソファで寝たのだ。

ソファも柔らかい素材なので、寝違える心配はない。

メシアはシャワーを浴びようかと浴室の扉を開ける。

そこには先客がいた。

「正軌、おはよう。」

『…メシア、か。おはよう。』

「どうした？手首に怪我でもしたのか？」

『いや、何かやけに首とか手足が………いや、やっぱり何でもない。お次どうぞ。』

「正軌？」

…パタン。

メシアは正軌の背筋が猫背なのが、どこか引っ掛かった。
それは狼の直感なのかどうかはわからない。

ワイワイ ガヤガヤ ザワザワ…

朝食を食べた後、バスに乗りデイズオーランドへ向かった。
着いたと思えば漢谷からの注意を聞かされ、委員長がクラス全員のチケットを配った後、やっと中に入った。

後は各自でホテルに戻るようだ。
メシ代は二千円分のデイズオーランド専用のチケットを渡され、
これで食べるらしい。

余ったら教師が金に変えてくれるらしいが、高校生ならこれくらい簡単に使い終わるだろう。

外人はやっぱし背が高いな…俺くらいの身長が沢山いる。

瀬戸さんほどはあまりいないけど。

日本のデイズ○ーランドより広いな、流石は本場。

迷子になったら面倒そうだな…あ、地図渡されたっけ。

チケットと共に配られた地図を見ると、背中を叩かれた。

バシーンツツ！！

『…痛い。』

「おら、さっさと行くぞ！お前背中曲がってつと老後困っても知らねえかな。」

「どうした正軌、人にでも酔ったか？」

「正軌君大丈夫？無理しちゃいけないよ？」

『ああ、大丈夫。本場は広いな、と思ってただけだから。

和葉さん、迷子になるといけないから誰かの服握ってた方が良いでしょう。

』

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ！」

「和葉。」

「あ、弥生だ！」

小走りで弥生さんが現れた。

そういえば弥生さんグループとほとんどいないな。

まあ、ほとんどがルール守ってないし今更か。

弥生さんは和葉さんの手を取り小首を傾げた。

和葉さんも同じく首は横にする。

「回る？ダメ？」

「そんな事ない！大歓迎だよ！」

『何なら二人で行ってきなよ。俺達は適当に回るから。』

「え、でも…」

「修学旅行だ。気にする必要はない。」

「そーそー。二人で楽しんでこい。由達はそこまでワクワクしてねえからさ。」

コクンと頷く俺達と『さっさと行け』と追い出すように手を振る由君。

俺達の雰囲気には二人は顔を見合わせて、再びコチラに顔を見せた。

「……ありがと。和葉、行こ？」

「うん♪行ってきたーす！」

嬉しそうに手を高く伸ばしブンブン左右に振る和葉さんと小さく振る弥生さんは手を繋いで人混みに交じった。

うん、提案してみても正解だった。

楽しそうな笑顔に一安心。

残された俺達は先ずは地図を広げて話し合う。

さっきはあんな事言っただけど実は凄く楽しみだった二人に合わせてようかと思ってる。

ってか、俺的にはベンチで待ってても問題ないんだけどね。

そう言ったらメシアは行かないだろうし、由君には殴られそうだから口には出さないけど。

夜にはパレードがあるようだ。

本人達には自覚ないだろうけど実際ワクワクした顔の肉食に俺は質問する。

『何系が乗りたい？』

「断っ然絶叫系！！」

「アレ食べたい。」

メシアは全く違う事言ってるけど、メシアが指差した店を見ている。

チュロスの店らしい。

老若男女様々な人が買っていく。

俺は由君に親指で店を指した。

『アレ食べながら行かない？まだ時間はたっぷりあるんだし。』

「しゃーねえな。」

「早く。」

重たい首を上げなるべく背筋を伸ばして、二匹の我が儘に付き合う事にした。

今は何も考えたくない。

『先に行っててくれ。用事を思い出した。』

「一緒に行くぞ？」

「一人になって誘拐されても知らねえぞ。」

『大丈夫。すぐ追いかけるから。』

今まで行った道を引き返して早足である場所を目指した。

——地図と眼鏡を頼りに探していれば、

ドンッ！カシャン。

「S o r r y. (すまん。)」

『S o r r y. (すみません。)』

後ろからぶつかられた拍子に眼鏡が落ちてしまった。

ぼやけた視界で踏まれる前に急いで眼鏡を探す。

この眼鏡が無ければ鼻の先までしか見えなくなる。

誰かに導かれなくてはならない修学旅行など最悪だ。

必死に黒い物体を探していると、銀髪の物体が目の前に立ってい

る事に気づいた。

見上げた俺の視力からして中学生くらいだろうか。

それは目線の高さを同じにし何かを俺の前に垂らして首を傾げた。

「コレ、お前の?」

『…? すまない、今何も見えないんだ。』

「んじゃ、こんくらいなら、見える?」

グイツ、と黒い物体を押し付けられ漸く俺が探し求めていた物と出会えた。

俺は急いで眼鏡をかけて目の前の人物に礼を言う為顔を上げた。

『どうもありがとう。本当に助かった……、…瀬戸さん?』

「どいたまー。」

ん? 兄貴知ってんの?」

『ああ、昨日会ったばかりだ。』

「へえー、そうなんだ。あんな泣き虫な25歳も珍しいっしょ? あれ童顔なんだ、意外と老けてるっしょ? アハハハ!」

心底可笑しそうに笑う少年は両手首にリストバンドを嵌めていた。スポーツマンなのだろうか。

源希みたい腰パンをしている。

前髪は上げてヘアピンで固定して、緑の瞳の垂れ目が印象強く残る。

瀬戸さんの数年前と思えば納得できるくらい似ている。

少年の方が勝ち気そうだが。

少年は立ち上がると俺の腕を引っ張った。

吊られるように立ち上がると少年の背丈は皆月くらいある事がわかる。

中学生にしてはまあまあ大きい方だ。
少年は屈託のない笑顔で楽しげに話す。
そういえば日本語が上手い。

「名前なんてーの？」

『宮古 正軌だ。修学旅行で来ている。』

君の名前を聞いても良いか？』

「広瀬^{ヒロセ}！あんたの一つ下の高校二年！今日はぶらぶらしに来ただけ
」。

『（…よし、何も言わないでおこう。）』

友達と来ないのか？』

「えー、だってさあ…」

あんな屑^{クズ}達と一緒にいるなんて吐き気がする。」

『…友人と呼べる人物はいないのか？』

一気に低くなった声に内心驚きながらも、表情を変えずに問い掛ける。

こういうのはメシアで耐性がついた。

そんなに驚いてないのがその証拠。

こういうのはついて良かったと正直に思う。

もし素のままだったら相手を傷つけてしまう可能性があるから。

広瀬はケラケラ笑い声を上げて『いるわけないじゃん。』と断言した。

俺は少し胸が痛んだ。

広瀬の頭をクシャツと撫で、目を見開かせた顔を見つめる。

周りに誰もいない寂しさは、なった事がある者にしかわからない。
俺はスウと口から息を吸い込んだ。

『…此处で会ったのも何かの縁かもしれない。何かあったら俺を頼ると良い。話し相手くらいにはなれる。』

「……。」

『アメリカにいるのは明後日までだが、その間くらいは遊び相手にもなれる。』

…俺とじゃ嫌か？』

「いや、ちよつとビックリしちった。初対面でこんな事言われたの初だから。」

んじゃさ、友達んなってよ！あんたとならなれるかもしれないしさ！」

嬉しそうに服を掴む広瀬に笑って頷いた。

それを見て更に喜ぶ広瀬の頭をポンポンと軽く叩いた。

やはり無邪気な笑顔は見てて癒される。

……一つ下だけどな。

じやれる広瀬に俺は最初の用事を思い出した。

慌てて地図と周りをを確認する。

「どしたの？」

『ここら辺に城が在るはずなんだが……日本にいる後輩に写真を撮ってやろうと思って探していたんだ。』

「もしかしくなくてもシンデ○ラ城の事？」

『ディ○ニーに詳しくはないが、多分それだ。知っているか？』

「うん、地元でほとんど来てっし！案内してやるよ！

こっち！」

グイッ。

『うわっ、そんな急がなくても…』

「早く早く！噴水終わっちゃうよ！？」

腕を引っ張る広瀬に導かれるままに俺は後を追いかけた。

噴水とは何の事だろうか…？

ついて行けばどうせわかるか。

小走りで噴水の在る場所に着けば、人だかりがあるのに気づく。
噴水の向こう側にはシンデ○ラ城が聳え建っている。

数名がカウントダウンの声を出す。

「「3! 2! 1! GO!!!」」

―ブッシャアア―!

「間に合った!」

『…これが、さっき言ってた噴水か?』

「そっ♪この時間になると噴き上がるんだ。人間が造った割には綺麗っしょ?」

噴き上がる水に沸き上がる歓声。

俺は忘れない内にカメラと携帯電話で撮った。
これで良し。

後は夜にでもメールしておくか。

昨日の分も合わせて。

携帯電話を鞆に入れ広瀬に顔を向ける。

『案内してくれてありがとう。』

これから友人と合流するが、来るか?』

「えー…んむー、ま、あんたの友人ならマシな方かもしれないし、行く!」

『広瀬、俺は“あんた”じゃない。宮古 正軌だ。』

「んじゃ、マッキー。」

『…マッキー?』

「○ッキーに因んで。」

『…好きに呼べ。』

じゃあ行くか、広瀬。』 「おう!」

元気の良い声と共に待ちくたびれてるだろう二人との待ち合わせ場所まで広瀬と雑談でもしながら歩いた。

腕に絡むのは好きにさせている。

メシアとなら“アレ”だが、広瀬くらいなら従兄弟か友人辺りで見られるだろうから。

本当にあの甘ったれはどうにかならないものか。

高校卒業しても毎朝部屋で見るのは絶対嫌だ。

体がもたなくて倒れる。

大学まで一緒だったら………止めよう。

まだ先の話だ。

今から考えてたらメシアに冷たくしそうだし。

うんうん、今は修学旅行を楽しもう。

中編（修学旅行）

——待ち合わせ場所。

「……ガキ連れて来やがった。誘拐したんなら大人しく自首しろよ。」

「瀬戸のMiniver?」

「誘拐じゃねえよ。瀬戸は兄貴だよ。」

マッキーとは友達同士なんだよ！ベーツだ。」

「あゝあゝん!? このクソ餓鬼いっぺんシメテやろうかあ!!!?」

「由、顎がしゃくれてるぞ。ぷすつ。」

「変な顔。キャハハ!!!」

「煩えな!!! 外人が日本人馬鹿にすんじゃないよ!!! 国際問題だあ!!!」

「いやいや、あんたを馬鹿にしてんの。頭大丈夫でちゅか?」

「こんな事で国際問題になったら戦争は絶えない。」

「ああああ!!!」

『由君落ち着いて。俺が代わりに謝るから、此处で暴れるのは勘弁して。』

今にも殴り掛かる寸前の由君の肩を掴んで宥める。

由君キレる数秒前で、メシアは早く空気読む方法を知れ。

広瀬もわかって由君に油をドボドボ注ぐから質が悪い。

とぼっちを受け、由君を出入り禁止にさせないようにするのは最終的に俺になるんだ。

広瀬が俺に抱き着いてわざとらしく恐がる。

棒読みなのはバレバレだが。

「マッキーこいつ怖い。キャー。」

「（…プチッ。）」

「……………ぶっ殺すッッ！！！」

「相手は子供だ。ムキになるな。」

『そうだよ由君。お願いだから此处で強制送還されない為に大人になって。』

「お前の一つ下だけだな。ギャハハハハッ！！」

「……………高校生？」

『…ああ…………頭痛がする。』

「シィ…ン、と此处だけ空気が静まる。

怒り狂ってた由君も熱が冷めたようだが、この先を考えて俺は頭が痛い。

ガンガン頭が響く。

メシアに抑えられながら由君は鼻で笑った。

「…………ツハン！由より小っさ！」

「中学生かと思った。」

「…お前らの目がオカシイんだよ屑の分際で。やっぱし所詮子供だな。」

「お前より長生きしてっから。計算出来ないのか！アハハハハッ！、むぐっ！？」

「自分達も言い過ぎた。悪かった。

しかしお前も言い過ぎだ。」

「別に事実を言ったまでだし。謝る理由ないもん。行こ、マッキー。」

『メシア、由君窒息死しそうになってる。』

広瀬、由君が謝れば広瀬も謝るか？」

誘われた力を留め、俺は広瀬に聞く。

広瀬はムッスーとした顔で由君を指差した。

「あいつが最初に言い出したんだ！悪くねえから謝らねえよ！」

「プハッ、何だと?！」

『お互い様だと俺は思うけどね？最初に言っただけじゃなく、相手を傷つけただけでも悪い。』

「その通りだ。」

「……とにかく謝らない。マッキー行こ！」

『広瀬、ちよっと早い……』

ズンズン手を引っ張って歩く広瀬にコケないよう慌てて足を動かす俺に、俺の後ろを歩く二人。

広瀬は拗ねてるのか一度も振り返らない。

そんなに嫌だったのだろうか？

今時の子供の考えは難しいな。

由君と広瀬の温度の違う視線とメシアが服の背中を掴むので、何だかサファリ○ークで肉食獣に囲まれた人の気分になった。

息つく暇もないほど居心地悪い。

この三人で比べるとメシアが一番まともに思える。

一年生達に会いたくなってきた。

……要するに帰りたくなったのである。

由君よりも俺を強制送還してくれないかな。

そんな事まで考えてしまうくらい精神的に疲れた。

今は何故か俺を挟んで二人が言い合い始めてるし。
頭痛が半端なく酷い。

「ホンデ○トマンションに行くんだよ！」

「あの舟のが先だ！子供が何でも最優先されちゃうよ！」

『……メシア、決まったら呼んでくれ。俺はあっちのベンチで休む。』

「自分も行く。アレは決まれば自然と来るだろう。」

まだ口喧嘩を続ける二人の間に人だかりが集まる中を俺達はすり抜ける。

二人はそれに気づいてないし話が変わってきてるのは無視しておこう。

空いてるベンチにヨロヨロと辿り着き、ベンチに直ぐさま背中を預ける。

あー…何か無性に現実逃避したい。

何も考えたくない。

ホテル帰りたい。

あーあーあー………寝よっかな。

「正軌、あいつらが来たぞ。」

『そうか…。』

「宮古っ！お前逃げんな！」

「マッキー！一体何処に行くんだよ！？」

『足（とか色々）疲れたから止むまで休んだ。メシアはそれに付き合ってくれただけ。』

「まだバファ○ンあるぞ？飲むか？」

『ホテルで一錠くれ。』

それで、次乗るのは決まったのか？』

重たい腰を無理矢理上げ前髪を掻き上げる。
広瀬は腕に絡まりながらある建物を指差す。

「ホンデ○トマンション！」

「違えだろうが！」

オイ宮古！お前が決める！！それで決着がつく！！」

何の決着……？とは口が裂けても言えなかった。
自分自身が火の種を作るのは勘弁したい。

メシアに助け舟を求めて目線に向けるが、首を傾げられた。
帰国したら今度本屋で「外国人でも空気が読める方法」って本を
探そうかと心に決めた瞬間だった。

俺の選択肢は第三まであって「ホテルに帰る」ってのがあるんだ
けど、ダメだろうな。

よし、円満に決めようか。
地図は何処にあったっけ。

『広瀬という建物は何処だ？』

「コレ！」

『由君のは？』

「ん。」

『今俺達がいるのは？』

「此処だ。」

『じゃあ、近い方から順番に行くか。由君の方ね。』

「お、おう。」

「ええーっ！？ヤダヤダヤダッ！！」

『俺が決めたので決着がつくんだろ？後になっただけで行かないと

は決まってるんだ、し!?!?』

腕を勢いよく体が斜め下に、投げられた野球ボール並の速さで足が跳ねた。

片足が宙に着かない。

メシア達は呆気にとられた表情で俺はどんどん二人から離れる。腕を振るうがもう届く距離は過ぎた。

人混みが間を空けるように通る。

メシアが動いたが人という人が邪魔して中々真っ直ぐ走れない。

俺は先に行く広瀬に抗議する為に前を向いた。

自然と怒鳴り声に変わる。

『広瀬っ!! 広瀬止まれ!?!?』

そんな急がなくても建物何だから移動しな、い……っ?!?』

「マッキーは“友達”なんだから、“友達”を優先してくんなきゃ。ね? ふふっ♪」

振り向いた広瀬はにこやかに笑って俺に手を伸ばした。

目の前まで伸びた指先は顔に触れる前に別の物を捕らえて俺から離れた。

だんだん周りが認識出来なくなる。

音だけが、触れる温度だけが俺の命綱に等しい。

振り向くが顔は全て肌色の丸にしか、髪の毛は金色しかない。

広瀬を見下ろすがこの距離でも判別は不可能。

喜怒哀楽もわからない。

手をさ迷わせて無駄な抵抗だが眼鏡を探すが掴むのは空気のみ。

目を細めても見えないものは見えない。

繋いだ手は前にクイクイと二回ほど引っ張り、前に進む事を教える。

「行くよ？手離したら困るのはマッキーだかんね？」

『眼鏡を返してくれ…』

「ヤード。コレは預かったもんね！

さあさあLet's go！！」

『うわ、あ……』

暗闇に等しい中で予測不能の手に教えられるままに倒れない為にも足を動かす。

止まればメシアや由君が迎えに来てくれるだろうが、修学旅行という中で唯一無二の眼鏡無しでは俺はホテルにいるしかない。

荷物になるのは嫌だし。

由君の曲聞きながら待ってれば良いや。

……って、何か話がズレてる。

何回か肩に人がぶつかり謝ってばかりだ。

もう本当何もわからない。

こういう時“ ” がいてくれれば助かるのに。

……？

グンッ！

「わっ？いきなりどしたの？」

『……名前…』

「名前？広瀬だけどー？」

『違う。別の、もっと前に会ってた奴の、誰だ？名前が、わからない！思い出せない?!』

広瀬とは反対の手で頭を抱えるが、何も変わらない。

また俺は何かを忘れた。

それがわからない、わからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからない！！！！

——ガクツ！

「……ツ……ハツ、カハツ……ア……」

その場に膝をたて、
過呼吸による呼吸困難を安定させる。

心臓が痛い……あ、崩れる。

こんな状況を名も知らぬ誰かが助けてくれたような、

そんな夢を見ていた気がする。

ド
サ
ア
ツ
・
・

前屈みに倒れたマツキ。

情報は入ってたけど、実際目にするとはなあ。
記憶障害って大変だねえ。

……っと、人目を集め過ぎたかな。

マッキー見た目より軽かったよな、確か。
こんくらいならイケるか。

あの外人達も近づいてるし、早くしないと面倒だ。

「よっ、と。うんうん、これなら充分だ。」

正軌の体を両肩に担いで頭と膝裏に腕を回す広瀬。

トントン、ガシャツ。

広瀬がつま先を二回叩けば靴からローラーが音をたてて出た。
反対も同じ要領で、ものの数秒でローラースケートの完成である。
広瀬は顎を引きボソツと呟いた。

「目的地Cにて実行。後はホテルに返して完了。
…んじゃ、決行。」

「宮古っ!」

「正軌っ!?!」

ガシヨツ!!

「待てっ!!!」

アスファルトを音を殴るように蹴りつけるとローラーは高速で広瀬をその場から遠ざけた。

ガシヨ、ガシヨツ、と人混みをまるで先を見据えているかのよう
に警察犬並に躲して（カワシテ）いく。

ローラースケートは広瀬の望む通りに移動を続ける。

メシアと由も必死に追いかけるが波が邪魔をして差は開くばかり。
足も体力ももう限界だった。

その場に座り込む由に気がつき立ち止まったがメシアが正軌と広
瀬を見渡した時にはもう手遅れだった。

あの黒髪が視界に映らない。

顔を歪め大きく舌打ちをした後、由の所まで戻った。

由は肩で息をしていて顔は何時も以上に赤い。

腕を持ち上げたメシアの手をパチィッ！と払いキツと睨みつけた。
そして消えた二人の方向を指指す。

「何で追いかけなかった！？由の事は放つという黒澤だけ行けばも
しかしたら間に合ったかもしれない！！」

「飛行機で正軌と約束した。由と和葉をどちらかが守る、と。」

「んな事はどうだって」

「あのまま追いかけていても正軌に辿り着ける確率は無いつ！！」

普段冷静に由に返すメシアが眉を寄せ声を張り上げる。

それに一瞬驚いた由だったが、両手を目に当てしゃがみ込む。

悔しさからか膝に顔を押し付け『畜生お…』と声を絞り出した。

メシアも片手で髪を乱暴にクシャクシャにし唇を噛み締めた。

楽しげに鳴る音楽と笑い声とは真逆の空間が二人の男女を包む。

何を思い、何を恨んでるのか：けれど、戻らぬ人を思うのは二人

同じ・・・――

…ブロロロ…

一台の黒いワゴン車が人気の無い道を走る。

中にいるのは少年と青年、男性はワゴン車を運転している。

青年は座席に横たわり、少年は運転する男性の隣の席で青年を監視する。

青年は車の振動に揺れるだけでピクリとも動く様子はない。

死んでるようにもとれるが浅い呼吸を繰り返してるので一応生きてるらしい。

人が三人もいるのに会話が一言も発せられない車内。
変な光景である。

——キキイツ……

正軌達が泊まるホテルからそう離れていない一軒家の前に車が停車した。

広瀬が先に降り、扉を閉めると瀬戸も車を降りた。

ガラッ、と後部座席の扉を開き青年を肩に担ぐ。

青年は先程よりもグツタリしており顔色も悪い。

瀬戸は車に鍵をかけ、広瀬が開いた扉に青年と共に入った。

広瀬は周りを確認してから玄関の扉に鍵を二重にかけ、瀬戸の後を小走りで追った。

質素な家の中を瀬戸は目的の部屋を目指し、革靴を鳴らして歩く。家の中は殺風景で、必要最低限の物しか置かれていないように思えるほど、暮らしているのかさえ疑問に思わせるくらい在る物は少ない。

子供が数え切れるほどだろう。

瀬戸は最奥のある一室を開け、頭が当たらないよう屈みながら入る。

広瀬は扉を閉め、カチャンと念入りに鍵をかけた。

他の質素な部屋と比べ、この部屋はカウンセリングの部屋に似た造りで部屋と同じような落ち着く香りが充満している。

色合いも、家具も、明かりも、何もかも外とは別世界のように感じさせる。

瀬戸は青年を一つの椅子に仰向けで寝かせた。

青年は椅子にグツタリと全体重を預ける。

指先を小さく震わせ、息が小さくなっている。

瀬戸は入って来たのとは違う扉から別室へ移った。

広瀬は部屋の隅で椅子の背もたれに抱き着いている。

瀬戸は数分で部屋を出た。

服装が執事服からシンプルなのに着替えていた。

正軌とちよつと似ているかもしれない。

瀬戸は正軌の近くに置かれている椅子に腰掛け、広瀬を見ずに話し掛けた。

「何も音をたてるなよ。何なら別室に行け。」

「ヤダね。兄貴の覚えて使えるようにしたいもん。」

「勝手にしろ。」

瀬戸は正軌にそつと触れた。

「――じゃあ、貴方はどうして恐がるのですか？」

『わからない…』

「貴方が忘れていただけで、その方は貴方にとって重要な方なのかもしれません。さあ、ゆっくり思い出しましょう…焦らないで、時間があります。」

『ん……』

瀬戸の落ち着いた呼びかけに正軌は目を閉じたまま応答する。

『わからない』という時は決まって頭を横に振る。

指先の震えは一向に止まる気配は見当たらない。

広瀬はジッ：とこの光景を観察していた。

もう数十分が経過している。

正軌は喉をのけ反らせ、何かを探るように時折声を漏らす。
額に手を添え、記憶を引きずり出そうと懸命に探り続ける。

瀬戸はタイミングを計りながら声をかけ暫く待つ。

こういうのは時間勝負だ。

しかし相手に無理をさせてもならない。

それが数分続いた時、正軌が何かも呟いた。

『金髪の女性：が、夢で……』

「夢で、どうしたのですか？」

逸る気持ちを抑えながら瀬戸は問い掛ける。

正軌は口調をそのままに続ける。

『俺を抱きしめて、握ってた刃物で………背中を刺した。深く、
エグる。』

逃げ場を失った俺は、成すがままに、枷が、………重い。』

「女性は貴方を傷つけて何か言っていましたか？」

『……「これで、ずっと一緒だ」……』

「そうですか。」

今日はこのくらいで終わりましょう。これから3数えます。それから貴方は目を覚まします。

一緒に昼食を食べ、ホテルまで行きましょう。」

『……。』

「数えますよ。」

1…2…3…、はい。」

パチ…。

ゆっくりと開いた朧げな瞳。

目だけで辺りを見回す正軌の手に瀬戸が何かを握らせた。

正軌は感触だけで確かめると、眼鏡をかけた。

漸く見えた視界に私服の瀬戸が現れる。

チャリッ…。

首に何かをつけられ、それに触れる。

瀬戸が正軌の首にかけた物を正軌に握らせた。

ゆっくりとした口調で説明する。

「それは日本で言う“お守り”です。肌身離さずつけていて下さい。

」

『…どうして俺に？』

「貴方に必要な物だからです。

さあ、昼食を食べましょう。立てますか？」

『はい。』

正軌が頷くと首に垂れる長いチェーンのネックレスが少し揺れた。
先端には丸いリングが二つ交わっている。

正常だったら直ぐさま外すだろうが、今は訳がわからなくとも言葉に従う。

ボーっとしながら椅子から立ち上がり、渡された自分の鞆を肩にかける。

正軌の瞳は焦点が合わず、何処を見つめているのかわからない。

俯きがちに立ち尽くす。

瀬戸は正軌の肩に手を置き広瀬を指差した。

広瀬はタタツと駆け寄る。

「私の弟の広瀬です。先程お会いしたでしょう？」

『：はい。』

「私は昼食を作りますので、何かあれば広瀬に言って下さい。」

『わかりました。』

「じゃあ、後は頼むぞ。」

「イエッサー。」

部屋を出る瀬戸を見送り、広瀬は正軌の手を引いて『行こ。』と部屋を出た。

正軌はディ○ニールランドの時とは違う理由^{イミ}で、その手を追いかけた。

今の正軌に何かを見分ける事は出来なかった。

いや、本人がしなかった。

——番猫がいない主が他に操られる日が訪れるのは、もう間近。
今の弱い主の耳には正しい事も間違いも、皆同じ。

主は自ら嘘に沈む。

1番オカシイなのは だあれ？

中編（修学旅行）

——ロビーの中。

瀬戸は普段着（執事服）に着替え、正軌の肩に手を置いていた。正軌は視線を泳がせたままただ鞆の布を握りしめる。

広瀬は外で待っている。

「では、これから貴方は部屋に戻ります。

これまでであった事は他言してはなりません。良いですか？」

『はい。』

「また明日、朝の6時に迎えに参ります。着替えてロビーで待っていて下さい。良いですね？」

『はい。』

「最後に、また何時でも“あの部屋”に来て下さい。歓迎致しますよ。」

『はい。では、失礼します。』

早足でエレベーターに向かう正軌。

エレベーターが部屋の階で止まるまで、瀬戸はずっと見送っていた。

エレベーターと同時に瀬戸は種を返し、広瀬と共にホテルを後にした。

――パタン。

『あ、』

ピクッ。

部屋の扉を閉めたと同時に正軌の表情が変わる。

目の焦点も合い、掴んでた手も離す。

髪をクシャリと掻き、状況把握をする。

眼鏡があるのに気づきホッとした顔になる。

首に下げたネックレスに疑問を覚えたが、さほど気にする様子もなく寝室に入った。

ベッドに腰掛け、鞆の中を確認する。

朝とほとんど同じ中身にパンフレットと地図と二千円分のチケット

トが入ってるだけだ。

チケットは後で換金してもらうか、と取り出し再び鞆を覗くと携帯電話がチカチカしている。

着信とメールが大量に着ていた。

その多さに若干引いてる正軌。

着信は見なかった事にしてメールを確認する。

メシアと由から主に（おもに）「返事寄越せ」という内容のメールがズラリ。

カーソルを下に押してれば、新しい着信が。

この番号からしてメシアだ。

正軌はピッ、と通話ボタンを押して耳に当てた。

二人が息を飲むのが携帯電話越しにでもわかる。

『もしもし。』

「正軌、か？今何処にい」

「宮古おーっ！！！！さっさと電話に出やがれ馬鹿野郎おがぁ！！」

「煩い、黙れ。」

それで無事なのか？

『…？怪我はしてないが。』

「そうか、安心した。」

「今からぶん殴りに行ってやる！今何処にいやがる！！？」

『殴るのは勘弁して。』

今はホテルだけど、二人は？

「まだデイ○ニールランドだ。正軌がいると思ってな。」

昼飯は食べたか？

『ああ、腹は空いてないから多分食べた。』

「じゃあ、今から戻る。」

「逃げるなよ！？」

『いや、ゆっくり遊んでこい。俺はホテルで待ってるから。』

じゃあな。』

ピッ。

返事を聞く前に一方的に通話を終了する正軌。

それから茶矢にメールをして、ノートに何かを書いてから暇になり靴を脱いでベッドに横たわった。

柔らかいシーツの上にまどろむ正軌、手は無意識にネックレスを握っていた。

……夢の中。

俺は床に座っていた。

首と手足には黒くて重い、鉄の枷。

それとネックレスが。

首を項垂らせてるからか、チェーンが長いからか先端が膝の上に

落ちている。

真っ直ぐになればへそくらいの長さだろう。
少しでも重かったが枷ほどではない。

―ペタ…ペタ…

あの女性が現れた。

目の前で座り込み、虚ろな目で俺を捕らえた。
冷たいあの手が頬に触れる前に、

「……何コレ…？」

チャリ。

死人のような白い手がチェーンを握り引っ張った。
不機嫌そうな声にビクビクしながらもリングを軽く包んだ。
女性の顔を見ずに呟く。

『お守り…これは、ダメ。』

『正軌はアだシだケヲ見てレばいの。コンナ物…』

『ダメ…ダメ…俺に何しても抗わないから。これだけは、やめて…
…お願い。』

『だあめ。ゴレは没収うダ。』

『ヤダヤダヤダッ。』

膝を立て引きこもるような体制で首を必死に横に振る。

女性は苛立ったのか、俺の頬に魔女並に長い爪を押し当てた。
そして、ガリッ！と引っ掻く。

俺の頬に四本の爪痕が新しく刻まれる。

熱い液体が重力によってダラダラと流れる。

もう少し上だったら左目が潰れてた。

見開かせた瞳に地震のように震える体。

血が白い床を汚した。

女性は血濡れた頬に手を添えて、顎から垂れる血を生温い舌で舐めあげた。

気色悪い感触に目から何かが零れる。

女性は真っ赤な舌を見せびらかすようにニッコリ笑顔を貼付けた。

「悪ウイ子ニは オ仕置ギだヨ。
ゴンなにもお…」

愛してるのに。」

『…ご…ごめ…なさい…めん…なさ……………』

「じゃあ それ 渡ジて？」

『……………』

「モウ、だメな子ダア。」

それでも渡すのを拒むと、女性は首に腕を回しギュッと抱きしめた。

心臓がバクバクと煩くて痛くて、いつそ止まれば楽なのかと思っ
てしまう。

女性から全ての体温を奪われそうだ。

女性は耳元で囁く。

「離れチャやダカラねエ？」
『あ……………』

一秒でも早く現実に戻れないかと俺は静かに目を閉じた。

[illegible]

……頭上がやけに喧しい。

何か言い合いでもしているかのように、女性の怒鳴り声が頭に響く。

うつすら瞼を開くと焦げ茶色の髪が目についた。
覚醒してない頭で思い当たる人物の名前を呼ぶ。

『和葉…さん？』

「あ！正軌君起きた？」

「オイ宮古！さっさと晩飯食べに行くぞ！」

「起きれるか？魔れて（うなされて）いたようだが。」

『大丈夫。心配かけて悪い。もう平気だ。』

ベッドの下の靴を探す為に下を覗くと、チャリツと音をたててベツドから落ちた。

もそもそと履いていればグイツと上にチェーンが向く。

首の後ろが痛い。

由君はマジマジと先端のリングを凝視する。

靴が見れないから早く離してほしいのだが…。

「お前こんなの着けてたっけ？ってか宮古は基本アクセ着けねえよな。」

「でもカッコイーよね♪由ちゃん好きそう。」

「んー…もうちょいデザイン違うと好きに入るかもしれないねえ。」

『由君…首痛いから、そろそろ離して。』

「悪い。」

パツと由君の手から落ちたリングをもう目に映らぬように服の中にしまう。

会う人の度に触られていたら何時か失ってしまうかもしれない。コレをくれた人との約束を破るのは絶対嫌だ、と思った。

……何故かは俺にもわからない。

きっと、わからなくて良い。

これは俺の直感。

服の上からネックレスを一度握りしめ、二人の後を歩いた。

……メシアが黙って後ろを歩いてるのに気づかない俺は、きっと後に起こる事の最後にめっちゃくちゃ怒られるだろうと思う。

これも俺の推測。

中編（修学旅行）

「うし、今日こそ勝負だ。」

『……』

部屋に戻って女性二人に先に入ってもらい、俺達は部屋で呼ばれるのを待ち、メシアが入った後に俺もネックレスをしたまま入り、髪を拭きながら出た所をこうして由君に捕まった。

由君はDSを俺に突き付けて腰に手を添えている。

メシアと和葉さんはニュース番組を見ていて二人共眠そうに目を擦ってる。

だが、夜型の由君はこうして俺に勝負を挑み遊ぶ気満々である。

俺は昼間に何度か意識が飛んでるから別に良いが、二人はどうする？

同性だったら寝かすよう促すのに、悲しい事に異性なのでそれも叶わない。

いくらメシアでも同じ部屋で寝かすのは……無理だな。

それより由君はお肌の心配しないのか？

夜更かしはお肌の大敵だぞ。

『由君は眠くないのか？』

「昼間店で仮眠とったから平気だ。」

「それをベンチまで運んだ…ふぁ…」

「由ちゃん何のゲームするのぉ…?」

「マリ○カート。」

『二人は先に寝な。俺は由君が寝るまで相手してるし。』

目をとろんとさせる二人の背中をポンポンと叩いて寝かせようと

するが…揃って首を横に振る。

起きるつもりらしい。

メシアは俺のパジャマの裾を握って離さない。

俺が折れるしかないパターンだ。

小さくため息を零してソファを指差す。

『じゃあ、DS持って来るからソファで待ってて?』

「いや、もう此処にある。宮古の鮑漁って準備しといた。」

『……次やったら怒るからね?』

「スンマソーン。ほらほら、始めるぞ。」

『全く…しょうがないな。』

由君がテレビの真正面のソファに、その左斜め前の一人用のソファに俺は腰掛ける。

通信を始めるとメシアが左側のひじ掛けに座り画面を覗き見る。

そのうち寝そうだが、重たいが今日は見逃そう。

昼間の事もあるし、二人に強く言えないのだ。

和葉さんは由君に引っ付くように画面をぽけーとした顔で見つめる。

あのまま寝たら由君大変だろうなあ。

まあ頑張れ。

眼鏡を押し上げて、画面のカウントダウンと同時にボタンを押した。

このゲームは前に一年生達と一緒にプレイした覚えがあるので操作方法くらいわかる。

皆月がやけに強かったのが記憶に刻まれている。

あのバナナと緑の甲羅攻撃はムカついた。

初心者相手に本気を出すあの顔を忘れはしない。

「オラ死ねえええ!!!!」

「眠い。」

『ベッドで寝ろ。抱き着くな。』

「すう…すう…」

「ピ○チぶっ殺す!!」

…いゝっ!？」

ピシャーンツッ!!

突如由君の太股に平手打ちが。

良い音をたてて真っ赤な紅葉が由君の白い肌にくっきり浮かぶ。

日焼け止めを塗ってるし学校でもズボン姿だから足はほとんど日焼けしてない。

他も白い方だ。

『紫外線は大敵だ!』ってこの前言ってたような言っていなかったような。

♪~~~~♪

「ああー!!? 由が6位!？」

『やった、俺3位。今までで1番高得点。』

「ちよっと待て!途中で浅草が邪魔しなきゃ由が勝って、痛っ!!!」
「?」

ギリギリ…

あどけない寝顔で由君の横腹を抓る和葉さん。

本当に寝てるのか定かではないが尋常じゃない痛さなのは由君の涙目が証言している。

メシアはこんなキツイ格好で熟睡してる。
寝息が時たま耳に当たるので叩いてやろうかとさえゲームをしな
がら考えてた。

俺はDSを一旦テーブルに置き、メシアを揺らす。

『起きろメシア。ベッドまで歩けるか？』

「うん…うん…」

『由君、一回二人を運んでから再開しようか。他のカセットもついでに取ってくるし。』

「わ、わかった！痛ででで！！！」

「…それは…無理だよぉ…由ちゃん…」

「由の方が無理だわ！抓るな！」

「わぁ…凄い……」

何やら寝言を呟きながらも由君に攻撃しまくる和葉さんを抱き上げて早足で部屋のベッドに運ぶ由君。

由君：色々とお疲れ様でした。

俺はメシアの腕を肩に回し、よたよた歩くメシアをベッドまで導くので由君と比べると安全な方だ。

メシアをベッドに寝かせ、掛け布団を肩までかけ、鞆からゲームカセットの容器を手にも部屋を出る。

リビングの電気が明るいので心配だったが扉を閉じれば意外と遮断され、二人共熟睡してるので問題は無さそうだった。

案外早く由君とだけになったな。

ソファには赤くなった頬を撫でる由君が。

和葉さんからのダメージは由君でさえも破壊力抜群みたいだ。
それに寝てる人にやり返すのは出来ないか。

本人は自覚無いし、和葉さんなら倍返しで返ってきそうだしな。

普段優しい人は恐い恐い。

俺達は暫くの間ゲームに夢中になっていた。

由君が叫ぶのに注意して、勝った負けたで笑ったり拗ねたりするのにこっそり笑みを浮かべ、深夜2時くらいで一休みする事にした。
『んあゝ、ハア：』とグツタリする由君と眼鏡をテーブルに置く俺。

長時間連続でしたので目が重い。

つけねに指を抑えてコリを解す為マッサージをする。

マッサージをすると少し楽になるのだ。

『ふう：』と天井を仰ぐ。

ぼんやりしていると由君が声をかけた。

さっきの『イケエー!!』 『うおーっ!!』 『〇〇死ねえええあ
あ!!』とかじゃない、普通の口調で。

「宮古。」

『何?』

「お前あの後どうしてたんだ? あの餓鬼に攫われた後。」

『：わからない。』

俺は広瀬に眼鏡を盗られて、誰かの名前が思い出せなくて、気分悪くなって、それから何も覚えてない。気づいたら部屋にいた。』

「んじゃ、そのネックレスは?」

『誰かが“お守り”としてくれた。それ以上は俺も知らない。』

「昨日から顔色悪いのは? 背中曲がってんのは関係してんのか?」

『……悪夢のせいかな、首がやけに重いんだ。二人には内緒ね? 心配するから。』

「由にはかけて良いのかよ。」

『聞き出す為にゲームに誘ったんだろ?』

由君は二人みたいに深く心配しないから、そこが有り難い。迷惑か

けるのは嫌なんだ。』

「昼間ので充分かけてるけどな、ハア。」

『ごめん。俺も周りに気をつけなきゃ：由君や和葉さんに言う以前に先ずは俺がしっかりしないと。班長だし。』

肩に垂らしたタオルを目に被せ、深く息を吐く。

魂まで抜ければ体は軽くなりそうだが生きてるのでそれは不可能だ。

幽体離脱する事が一般人に可能なら一度してみたい。
そんなくらい首が重たいんだ。

由君はつま先で俺の足を蹴り、鼻で笑った。

：何を馬鹿にしたんだろうか？

変な発言をした覚えは無いけど…？

タオルを外して由君を見る。

シルエットだけでも由君はわかりやすい。

前が黒で後ろが金色な髪もそうだし、眼鏡で一回見覚えただけでもわかる。

オーラがあるのかな、多分そういうので由君だって判断できる。

由君は色々と有り難い。

本人には言わないけどね。

俺は前屈みに体を起こし、指先を前で絡ませ、由君を見上げる。

由君は足を組み、ソファに手を着いたまま唇を動かす。

さも当たり前のように。

「別に班長だからって完璧になる必要ねえし。宮古がこれ以上完璧敵無しになったら由はお前とタイマンする。そして勝つ。勉強がな
んぼのもんじゃない！ハンッ！！」

『いや、タイマンで古いよ。誘われてもしないし。喧嘩はダメだつて俺由君に何回言った？俺以外にもしたらダメだからね？』

後、勉強は必要だよ。』

「煩えよ！お前の苦手な教科教えやがれてんだ！！」

『家庭科と理科の実技。』

「アッサリ教えるとか余裕こいてる証拠か！！？ウゼエエエエエツツ！！！」

『いや、余裕こいてないから。この二つの実技だけはどうしても苦手だ。失敗ばかりする。』

「そーいや料理苦手とか言ってやがったな。お坊ちゃまめがコノヤロウ。」

『由君俺にちよくちよく恨みの言葉投げ掛けるよね？そんなに俺（の実力）が嫌い？』

「由より頭いい奴は皆死ね。」

『そうになったら博士とか技術者は全員死ぬから。世界の技術が滅びちゃう。日本企業今結構頑張ってるから。ゲーム消えちゃうよ？』

「ゲームは困る。」

由君の基準はそこか。

：とは言わなかったけど、呆れた顔にはなってたかと。

ゲーム以上に必要な物は沢山あると思うが……教えてもきつと耳に入れないだろうな。

そろそろ寝ようかな。

もう3時過ぎたし。

ソファから立ち上がり軽く筋を伸ばしてから寝室のドアノブに触れる。

カチャ…、下に押して扉を引く。

振り向いて由君にひらりと振って遅いけど『おやすみ。』と言っ

てドアを閉めた。

由君ももう時機寝るだろう。

眠そうに目を細めて眉間に深い皺を寄せてどこぞの不良かと言われそうな黒い何かが放出されてるし。

昼間数分か数時間寝ただけで疲れが全部抜けるのは有り得ないしね。

『今日はありがとう。』

扉を背にこの言葉が暗い部屋に浸透するのを肌で感じた。

…ギシッ…

ベッドを軋ませ（キシマセ）膝を抱える体育座りをして掛け布団に額を乗せる。

真っ暗闇が落ち着くのは何歳からだっただろうか？

誰もかれもない世界に安堵と寂しいと思う自分自身。

高校入学当時に本屋で買った小説で『黒に溶ければどんなに楽か。』という台詞が載っていた。

あの時の俺にはこの一文の意味がわからず流してしまっただが、今ならわかった気がする。

主人公に同感もできる。

今の俺がその状態だから。

主人公と似たような…いや、誰かと比べるような事ではないか。人によって物の考え方、受け取り方は全く違う。

同じようなモノはあっても同じモノは無い。

本人しか持たないモノだからこそ…

ゴソツ。

「正軌：眠れないのか？」

『いや、そろそろ寝る。起こして悪かったな、おやすみ。』

薄目を開けて目を擦るメシア。

起こしてしまった事に謝罪してメシアに背を向けるように横たわる。

外の車の音がやけに耳障りだった。

後ろで何か物音がしたので部屋を出てミネラルウォーターでも飲むのかと少しだけ掛け布団に顔を潜める。

俺も体力回復せねば明日はきつとバテる。

しおりに午後から学年全体で遠出をする予定と記されていたから。由君とメシアに振り回されるのだろうなあ……現実から逃げたいなあ……ハア。

……：「そういうメシアは一体何時になれば部屋を出るのだろうか？
長い間回想していたようにも思ったが。」

寝返りをうつようにさりげなくメシア側に体を動かす。

すると、薄黄色の瞳と御対面しました。

ベッドに両手と顎を乗せてジーンと見てた。

眠そうな顔してるんだからベッドで安眠すれば良いものを。

…何となく頭を撫で下ろす事にした。

早くベッドに戻るようテレパシーもプラスして。

—だが狼はへニヤと笑みを零して尻尾をふりふり振る。

やべ、また幻覚見えた。

近い内眼科でも行こうかな。

メシアはもともと俺のベッドに上がり引付くように寝転がる。

追い出すのは気が引けるのでスペースを空けて掛け布団もわけてやる。

淡い緑色の髪は月夜により更に美しさを増している。

正直、人離れたモノだと思った。

この色が白毛だと言うなら尚更。

ポツ、と言葉を落とす。

『綺麗だな。』

「何が？」

『メシアの髪。触り心地良いし、色も好きだな。』

「……忌み子の証だ。自分はこんな髪……」

『んなもん俺には関係ないだろ。俺が綺麗だと思うから俺にとっちや綺麗なんだよ。』

忌み子も証もクダラナイ。他人の言葉なんか都合の良いのだけ耳に留めなきゃ人生疲れるだけだぞ？』

「……自己中心的な感想だな。けど、真っ直ぐな物言いは好きだ。

明日から正軌の助言に従ってみる。」

『お前は周りの注意を聞け。』

ほら、さっさと寝ろ。』

「おやすみ。」

『おやすみ。』

ちょっと狭いベッド、触れる左手の温度でチャラにしてやろう。

これで安らぎを得られるならば 安い取引だ。

中編（修学旅行）

♪♪♪♪♪

「!」

メール着たああああ!!!

昨日ずっとケータイの前で正座したり、

開閉繰り返したり、

宿題やっても落ち着かなくて気づいたら凝視してたり、

やっとケータイが光ったと思えば源希君からで直ぐさま電話して
怨念送った。

昨日はあんなんで夜中に着いてたら嫌なので夜更かししてて、朝
着てなくてガツカリしてたけど……けど、ついに……ついにっ!!

神様ありがとうございます!!

早めに家出た私グッジョブ!!

テスト勉強最高!!

ヒーハー!!!!

「ヤターーッ♪ついに、ついに……ついに……ついに……ついに……
いに……アメリカにいる正軌さんからメール着信!写真有りだしも
う………酸欠になってしまった……っ……!!」

ベッドでケータイを手に呼吸困難の女子高生が家族に見えられ救
急車で運ばれるとか、ニュースで報道されたら友恵にまた馬鹿にさ
れる。

んな事は断じてあってはならない!!

……けど、正軌さんが見舞い来てくれるなら喜んでなろうかな。
苦笑いして『心配したんだぞ?』ってあの大きい手で頭をかいぐ

り回して髪がボサボサになるまで撫でてくれて……もう、それだけで

「昇天逝ける……!!」

あー!!もうっ、早く帰って来てくれれば良ーのにつ!メシア先輩
独り占めとか帰って来たら真っ先に正軌さんの隣キープしてやる!
!近頃中馬先輩も油断ならないし浅草先輩も………どうしょ。正
軌さん危ないじゃん!!イヤアアアアアアアアアア!!」

バツタアーンツ!!

ケータイを鞆に入れて部屋を飛び出した。

この部屋に居たら嫌な方向へと思考がアクセル全開で突っ走りそ
うになる。

取り敢えず甘い物を食べるのと愚痴を聞いてもらう為に“Swe
et Okazaki”へと全速力で走る私。

……けど、冷静に自転車の鍵取り出して自転車で行了きました。
だってそっちのが速いんだもん。

足遅いのは仕方ないんですよ。

あーもー煩い!!

ほっという!!

…ムクツ。

朝の5時半前。

正軌は機械のように上半身を起こす。

横には既にメシアはおらずジョギングに行ったようだ。

今日は生憎の雨で修学旅行なのに気分を少しでもだけ憂鬱にさせる。

天気予報だと今日一日中アメリカは雨らしい。

因みに日本は曇りのち雨だとお天気お姉さんが教えてくれました。
笑顔が可愛いですよお姉さん。

正軌は鞆から服とズボンを適当にベッドにほっぴり出し、ちゃっ
ちやと着替える。

男なのでカップラーメンを待つ間に終わらせた。

ネックレスは今も服の下だ。

蒸し暑いので髪を洗面所の前でヘアゴムで結び、色々仕度を終わ
らせてから部屋を出た。

携帯電話をベッドに置き去りにしたままなのに正軌は気づいてい
ない。

今は目の前の約束にしか意識が集中しないのだ。

それは男の子が友達と遊びに行くような感覚。

細かい事は後回しにとにかく遊ぶ事に夢中な子供。

エレベーターを降りた時間は5時50分くらいで約束の時間より
は早く着いた。

待ち合わせより5分、10分前行動。

日本人の性である。

：だが、待ち人は既にロビーにいた。
長い足を組み新聞紙を肩幅くらい広げて本日の情報を頭に入れていた。

気の弱そうな顔に正軌が小走りでたどり着くと瀬戸は新聞紙を閉じてスツと立ち上がる。

恭しく一礼をして、また顔を上げる。

「おはようございます宮古様。

お早いんですね。走られなくてもまだ充分時間がありますよ。」

『おはようございます。』

待たせてたらダメだと、思ったので……すみません。』

「謝られる事などありません。

時間が勿体ないので行きますか。」

『はい。』

テーブルに置いた新聞紙を手早く畳み懷にしまうと正軌の背を軽く押しながら歩き出す。

傘をバツと開きそれを正軌に渡す。

正軌は怖ず怖ずと受け取り先を行く瀬戸の後を早足で続く。

身長が違うので日本では周りの歩幅と合わせていたが今は追いかける形となる。

身長差即ち（スナワチ）足の長さの違いである。

：暫く歩いた時に気づいた。

遅れ気味だった速度が今は普段と同じに変わっている事に正軌は俯いていた顔を上げた。

振り向く瀬戸の目が……誰かに似ていた。

正軌の足が、止まった。

カツ：

『……？』

「どうされましたか？」

『目が、』

「私の目が？」

人差し指をスツと上に、瀬戸の目を指差す。

『……に似ている。』

「……聞き取れなかったので、もう一度お願いします。」

『……に似ている。』

「……。」

二回聞いても最初の言葉が聞き取れない。

だが、これ以上聞き返せば相手に不快感を与えてしまう為、瀬戸は『そうですか。』と種をかえす。

正軌は黙って瀬戸の後ろについて歩いた。

タタタッ！

瀬戸が扉を手で押し開くと階段から駆け降りる音が。
促されて家の中に入った正軌にパジャマのまま飛びついてニヘラ
と笑む広瀬。

「おはよマッキー！早起きしたんだよ！偉いっしょ？」

『おはよう広瀬。うん、偉い。』

「だろー！頭撫でて撫でて♪」

『ん。』

前髪はヘアピンで額を見せている。

パジャマ姿だけど寝癖はそんなになく、パジャマにそれほどシワ
もついてない。

寝起きなのに手は冷たく夏なのに肌は赤くない。

クラーの効いた部屋にでも寝ていたのだろうか。

正軌がよしよしと頭の横側を撫でてれば、瀬戸があ部屋の
中に促すように立っている。

正軌の視線に気づいた広瀬は唇を尖らせ瀬戸に顔を向ける。
拗ねた声を隠さずに瀬戸へとぶつける。

「時間余ったら遊んで良いんだよねー！？」

「ああ、余ればな。」

それよりも気安く触るな。昨日だけでまだ“脆く醒めやすい”。醒
めたら一からやり直ししなければならなくなる。時間の余裕は無い。
「

「：ツチ。行くよマッキー。」

『ああ。』

ガクッ！

『？』

「マッキー？急にどしたの？」

「！！広瀬そいつから離れろっ！」

正軌が一步踏み出した途端、膝カックンされたようにその場に膝を着く。

その変化にいち早く気づいた瀬戸は今だ正軌の手を引く広瀬に呼び掛ける。

正軌はただ頭を項垂らせ己の異変をぼんやり受け入れていた。

キイイイ……ドクンッ！ドクッ！

『……っ……頭が……』

「ツチ！広瀬、奥の部屋に行きなさい！」

「命令すんなよ。マッキーがオカシイのに離れろとか、」

パンツ！

「……っ……」

「私の言う事に従え。反論は聞き入れない。」

「……お前なんか、兄貴じゃねえ！！」

ダダダッ！バアン！！

部屋の奥へ走り去る広瀬の背を見ずに、瀬戸は頬を叩いた手を辛そうな顔で見つめていた。

下唇をキュッと噛み締め、後ろを振り返る。

——そこには、関節を伸ばしたり首を回したりするピロの姿が。瀬戸に気づいたのかスタッと立ち上がり人差し指を突き付ける。左側の口端を釣り上がらせ挑発する。

瀬戸は眉を下げた。

『久しぶりだなあ：泣き虫さんよお？』

お前のトコの嬢ちゃんが好き勝手に暴れまくってんデスケド？どおーにかしてくんない？』

「私は瀬戸です。」

『あんたが正軌に何かしてくれてる“何か”が原因なんだけど？俺様早く戻んなきゃならないんで、これでSee you♪』

ピロが背を向けて家から飛び出ようとした時、

ーダンッ！ガシィー！！ドサッ！！

『痛っ！？』

「：貴方のせいでこっちは“色々”迷惑かかってるんです。安々と逃がすわけありません。」

後ちよつとで泣きそうな瀬戸はピロを羽織い締めした体制で泣き出しそうなのを堪えている。

ピロは顔だけずらして瀬戸の顔を見るなり『（ええー？？！俺様が泣かしたの！？コイツ大人だよね！！？）』とパニックに陥ったのは言うまでもない。

大の大人が背中ではボロボロ涙流してるんだから誰だって驚きます。しかも羽織い締めしたまま、ピロは首くらいしか動かせないのに相手の方が不利な状況のような表情をしている。

ピロ君も混乱して顔を床に戻しました。

瀬戸は正軌の服にボロボロポロポロ滴を落としたまま動かない。ピロもどうすれば良いのか自問自答を繰り返している。

…そんな時間が幾分が続いた頃、後ろで扉が開いた音が二人の耳に届いた。

靴を鳴らして二人に近づく人物に瀬戸は顔を見られる前に袖で顔を拭いた。

ピロは溜息を吐いて諦めたように全身の力を抜いた。

…カシャン。

足首に重い物を着けられた。

次に両手首にも。

広瀬はニコニコと無邪気な笑顔でピロの後ろ頭を優しく撫で下ろす。

「お昼には帰してあげる。それまでは一緒に遊んでね？」

『へいへい。代えの靴でもあれば逃げるのになあ。』

「暴れないで下さいね。傷つけたくはありませんので。」

『抵抗できりゃとつくの昔にやってる。情が沸いた時点で俺様の負けだな。ハア…』

内心サラと少女の心配をしながら、注射器を弄ぶ広瀬をジッと注意する。

刺されたら一昨日のようになるだろう。

そうになったらピロは何も出来ない。

携帯電話はホテルだし助けを呼ぶ前に注射されるだろう。瀬戸はいないだろうが広瀬はずっと監視するみたいだし。

広瀬はピロの恐い視線にニコツと笑顔を向けた。
その笑顔の意味が読めず、ピロは視線を逸らした。

：一方、こちら正軌達が泊まってるホテルの一室。
色々と騒がしいようです。

コンコン、バアン！！

「正軌っ！」

「キャアアア！！？何勝手に入ってたこのクソ澤！！」
「すー…すー…」

女子二人が寝る部屋にノックはしたが返事をする前に開けたメシア。

和葉も寝てるので此处で着替えてた由は可愛いらしい悲鳴と汚らしい言葉と枕をメシアに投げ付けた。

メシアは枕は叩き落とし何やら部屋を漁る。

由は慌てて着替えベッドの下を確認するメシアの頭を蹴り飛ばした。

痛かったのかメシアは不機嫌な顔で由を見上げる。

由君は真っ赤な顔で仁王立ちしてメシアを見下ろす。

狼VS彪、肉食獣の戦いが今再び始まろうとしていた。

両者の間で火花が咲く中……先に狼が動いた。

由が使うベッドに腰掛け、顔を地面に向ける。

何やら尻尾がタランと垂れてしまってるようだが。

狼……いやメシアがポツリと言葉を零した。

「……正軌がない。」

「散歩だろ。」

「5時半までは寝ていた。自分が帰って来た6時半にはもういなかった。最初は自販機にでも行っているだろうとシャワーを浴びてリビングで待ってたが、8時になっても帰らない。テーブルに正軌の携帯電話が置かれてたのに先程気づいた……」

「お前それを早く言え!!! 気づくの遅えわ!!!」

オラ、浅倉が起きる前に探し出すぞ!!!」

「どうやって。」

シューーン……

メシアの一言で部屋には和葉の寝息以外の音は静まった。

いざ行こうとしていた由もピタリと動きを止めた。

メシアは正軌の携帯電話をずっと見つめている。

由は頭をガリガリ掻きむしる。

和葉はまだ寝てる。

呑気な寝顔は今の二人と対称的だ。

先ず初めに由が振り返り下を指差した。

メシアが顔を上げる。

「先ずは飯食うぞ。腹が減っちゃ何も始まらねえし。」

「…お前の頭は「朝食＜正軌」か。最悪だ。」

「ダアホ！！エネルギー摂取しなきゃ頭働かねえって由は言ってるだ！！さっさと浅倉起こせ！！由は着替える！」

バタァーン！！

怒り心頭の由は短パンと上着を手に部屋を出た。

何時かこの部屋の扉が壊れてしまいうるものにこの子達は気づいてるだろうか。

いや、気づいてないから乱暴に扱うのだな。

飼い主がいなきゃやはりダメなのか。

メシアは正軌の携帯電話を一度額に押し当て、恐る恐る和葉を起こしにかかった。

因みに昨日起こしたのは由である。

顔面と腹を蹴られてたのを正軌とメシアは目撃していた。

戻った由と入れ代わりに和葉が脱衣所に入り床に疼くまるメシアの肩に由は無言で手を置いた。

「じゃあ…宮古に、大事にするよう…言っといてくれ。」

「わかりました。私達は看病してますので、お気をつけ下さい。」

「何かあれば、フロントに言うよう、にな。
行ってくる。」

パタン。

吉田にペコッと頭を下げてからドアを閉める和葉。

ふう、と一息ついてソファに座るメシアの隣に腰掛けた。
由はベランダでタバコをふかしている。

一昨日、正軌とメシアが嫌がったのでベランダで吸うようにして

いるのだ。

ぼんやり空を見上げて片手に携帯型灰皿という姿はどこぞのキャバクラのホステスかと言いたくなる。

ただの不良女子高生だけど。

メシアは正軌の携帯電話を手にジッと連絡を待つ。

先程電話がかかったのが唯一の手掛かりだった。

―― 一時間前。

♪~~~~♪

「!!」

「早く出ろ!」

「正軌君かも!」

朝食を食べ終わった和葉に二人が説明したのだ。

和葉は『ありゃ、どうしたんだろ?』と呑気な返事をして素直に受け入れた。

二人よりも冷静な反応である。

由は『（コイツ絶対詐欺にあうな。）』と将来が心配になった。

メシアは和葉に『吉田が来たら「正軌は風邪気味で体調が悪いから自分達も看病する」と伝えてくれ』とお願いし、今こうして部屋で待機しているのだ。

急かす周りに従いメシアは通話ボタンを押し、耳に当てた。

二人も耳を近づける。

「…正軌か？」

「あ、メシアー？俺様だよん。」

「ミヤ！？お前今何処にいやがる！！」

「由君お久々。色々あってね、お昼には帰れるよ。」

「色々って何かな？」

「それを言うとは帰りが長引くから内緒。俺様も早く帰りたいし。そうそう、メシア聞いている？メシアー。」

「ああ。」

「帰ったら話したい事あるから早めに帰ってねえ。そんだけー。」

「部屋にいる。自分達は正に戻るまでいるつもりだ。」

「嘘ーん。俺様由君に殴られたくないなあ。痛い嫌あ。」

「オイ、由も聞いているぞ。」

「アハハ、冗談だって。殴られたくないのは本音だけど。」

「んじゃ、これ以上はヤバイから See you。」

「あ、ミヤ！？」

プツ、ツーツーツー…パタン。

メシアは正軌の携帯電話を両手に握り、歯を噛み締めた。

不安と安堵とその他諸々が入り混じる感情にメシアは目を伏せた。

——そして、今。

三人はこうして部屋で待ち続けている。

そろそろ短針が12時を過ぎようとしている。

メシアは何度もかけ直そうとしたが周りに誰かいるのだと頭が警報し、したくても無理だった。

正軌を今以上危険な状況に置かせるのはメシアには出来ない。

早く戻らないかとないかと耳と尻尾をタランと下に垂らしていた。

和葉がカメラで二人を撮って回る。

調度地面に向けたその時、何かがフィルムに写り込む。

そして指差して叫んだ。

「アアッッ！！」

「っ！？…ったく、何だよ浅倉。いきなし真横で声張り上げて。」

「正軌君お帰りー！正軌君横の子誰ー？」

『よお、和葉さん。由君体に悪い物吸ってんねー。』

「ミ…ヤ…」

「あー、オバハンだあ！」

バダアアンッッ！！ダダダッ！！

メシアがいち早く部屋を飛び出した。

扉の安否は後ほど。

次に和葉が笑顔で続く。

由は落ちそうになるタバコの火をを灰皿で押し消し、カチンツと音を鳴らして暫く広瀬を睨み据えてから部屋を出た。

中編（修学旅行）

「それでは、私は行きます。何かあれば広瀬に申し付け下さい。」
パタン。

昨日とは違う殺風景な部屋に連れて行かれ少し埃っぽいソファに座らされた。

昨日までの記憶は見たから状況も大体読めてる。

昨日の注射男は瀬戸って名前だったな。

すっかり忘れてた。

で、コイツがディ○ニランドで会った瀬戸の弟の広瀬。

あーヤダヤダ、笑顔の裏が怖い怖い。

こういうタイプは我が強いんだよね。

正軌が優しくしたから甘えまくってるんだよ、メシアのが可愛いもんだ。

最近新人と遊んでねえなあ……早くあの姉ちゃん帰らねえかな。

……てか、あの姉ちゃん何しに来たんだ？

暴れまくってるしかわかんないし。

美人だけどね………何で正軌の周りの人間てこうも個性的なのが
多いんだか。

良い意味でも悪い意味でも。

美人が特に濃い。

メシアがわかりやすい例だな。

雨ザーザー。

手錠冷たいし、埃が器官に入りそうだ。

掃除しろよなあ……とも美と優人、元気かなあ。

最近外出らんなかったし。

一年'sにも会いてえな。

…グイッ！グキッ！

『…痛いんだけどー。離してくんない？』

「なーに人ほっぽって考え事してんの？スッゴイ暇だったんだけど」
♪

『うわぁ、広瀬笑わない方が良いぜ。マジ作り笑いってわかるから。』

「ええー？マッキーは可愛いって思ってたようだけど？無邪気な笑顔は癒される…とか？ふふっ♪」

『俺様はそうゆーの効果ねえんだ。ゴミンね？』

正軌はこんな顔して案外動物好きだから。キレたらヤクザそっくりよ♪』

「わぁ、見てみたい！あんたキレさせたらヤクザ顔見れるよね？」

『足のさえ外してくれりゃいくらでもキレてやるよ？』

「手首じゃないのがスッゲエ怪しいから嫌♪逃げ出す気満々なの丸わかり！」

『ハハハハ！』

「アハハハ！」

いきなり顔を強引に向かせられ、首から変な音と痛みが贈られた。返品したいのは山々だけどクーリング・オフ制度は此処では無いらしい。

請求したら代わりに毒薬で返されるだろうな。

それか麻痺入りのドリンク剤を口に突っ込まれる。

どっちもBad endとか泣けるねえークソッ。

俺にじゃれつくようにベタベタする広瀬を好きにさせて早く時間が過ぎないかと時計の無い部屋でぼんやりと待つ。

この部屋は二階の一室でソファとカーテンくらいしか無い。

後、小さいテーブル。

そのテーブルに恐いのが並べられてるからあんまし見たくないんだけどね。

無言の圧力を受けたのは神崎以来だよ。

全くそういう人間に限って笑顔が上手いから世の中信じる前に疑っちまう。

ああ、世間は無情だ。

ああ暇だ。

手錠の鍵見当たらねえし、マジで昼には帰してくれんだろうな？
足さえ解放してくれりゃ、後は何とか逃げ切ってメシアにでも壊してもらえば万事解決なのにさー。

結んだ髪の手を指で遊ぶ広瀬に額で呼び掛ける。

広瀬は『何ー？』と猫撫で声で首に腕を回したまま顔を覗き込む。
垂れ目だから余計猫っぽいな。

けどね、1番似てるのはオウムだと思う。

1番の理由は厭味も込めて見た目で。

俺は広瀬を見つめたまま口を開く。

先程からある疑問が頭に浮かんでいたのだ。

相手の機嫌を逆なでしないよう言葉を選びながら話す。

『広瀬はさ、学校行かねーの？』

「うん！あんな所、行く価値が微塵もねえし♪勉強なら教科書ありや何処でも出来っし、テストだけ顔だせば昇格可能だもん！」

『出席日数は？』

「校長と教師の弱み握れば問題Nothing! 薬品調合が今のマ
イブーム。」

『わはあ、恐ろしい☆正軌に飲ますなよ、注射すんなよ。喋るくら
いは良いが』

ガシツツ!

「今の立場わかってる? さっきから大目に見てたけどね、限界もあるんだあ。気が短いつて兄貴達によく言われててね! 誤って飲ませちゃうかも♪」

『すみませんっしたー。』

めっちゃ怪しい小瓶から一つのカプセルを取り出して顎を掴まれた俺は即座に謝罪した。

唇を押し当てられた時は、バイオハザードを一瞬蘇らせた。

背中の冷や汗は尋常じゃなく滝汗のように服を濡らす。

けど薬は小瓶に戻り悪魔の笑顔は今だにべったり隣り合わせに座
ってる。

もー本当今の子供は難しい難しい。

むやみに気い許しちゃう正軌を誰か叱ったって。

由君にでも頼もっかな。

なんだかんだ言ってやってくれそう。

由君あー見えて本当は優しいからなく…ちよつと暴力的だけど。

素直じゃないところは愛嬌って事で。

久しぶりに話したいなあー、由君の声聞きたい。

i P O 持たせれば良かった…いや、壊されるかもしれないか
ら無くて正解か。

聞きたいなー、聞きたいなー。

「ねえ、」

『何ですかー？』

今度は広瀬から話しかけた。
俺は目だけ広瀬に向ける。

広瀬は携帯電話を指差して笑顔のまま話し続ける。
携帯電話で何をする気だ？
やっぱり意図が読めない奴は苦手だな。

「あんたが誰を思ってるのか知らないけど、声聞きたいなら電話してみる？」

『ワオ、心の声出ちゃった？ 恥ずかしいー。』

「顔に書いてある。とつても嬉しそうでイラッてするかな♪」

『でも、いーの？ 瀬戸に怒られるんじゃない？』

「拉致してる人間を心配するとか頭大丈夫？ 兄貴は後の事任せてるし、昼には帰すんだから問題無い。」

一回だけだから、もし出なければ終わりだからね。はい番号言って。

「

『んとねー、xxx-xxxx xxxxx。』

「それ、マッキーの番号じゃん。そいつの番号じゃなくて良いの？」

『個人情報保護法があるからねえ、それに変な事に使われたら俺様が怒られる☆』

「怒られたら良いのに♪」

ピッピッピッピッ：

片手で素早くボタンを押す広瀬を見てて、見た目こんなんでも高校生なんだなあ、とかしみじみ感じてしまう。

言ったら問答無用で何されるかわからない。

今でも向ける笑顔のまがましい事といったら。
はい、サーセンした。

広瀬が何故正軌の番号を知ってるのかは考えても無駄なのでスル
ーして、広瀬が携帯電話を耳に押し当てる。

ついでに太股に注射器の尖端も。

やべ、口滑ったら最期の電話になるかも。

プルルル…プルル…ピッ、

少し間の空いた後、通話が開始された。

それに安堵と嬉しさと一種の恐怖が胸に宿る。

虚勢を張る事が得意な俺は楽しげに口を開いた。

『もしもしー？』

ホテルに戻ると広瀬は三人が下りる前にローラースケートを滑らせて帰った。

帰りが長引いたのには昼飯が関係していて、俺が拒み続けたから遅くなりました。

ロビイでメシアにタックル並の勢いで抱き着かれ、背中をぽんぽん叩いてれば和葉がニコニコしたまま『お帰りなさい!』と言ったので『ただいま』と笑って返した。

最後に由君がふて腐れたように登場。

『お久さゝ由君』と手を振れば睨みつけられ、耳を引っ張られながらエレベーターに乗った。

痛かったけど、生の由君に逢えたから痛みはそんなに感じなかった。

にしてもメシア重い。

―ボタン。

部屋に入りソファに投げられ座り直していると携帯電話を最初に放り投げられキャッチ。

次には頭をスパアンツ！！と心地良い音をたてて平手打ちされた。抵抗しないからって由君ちよつと酷ーい。

ヘラヘラした顔を上げば由君は額に血筋を浮かべて人差し指を鼻先に突き付けた。

懐かしい声で怒鳴られる。

それでも俺の口許は緩みっぱなし。

「お前え登場すんの遅えんだよバァアカアアア！！！！昨日どれだけ苦労したと思ってやがるクソボケミヤ！！何だそのヘツツラヘラの顔は！？そんなにぶん殴られてえのかよっ！！マゾヒストキメエ！！！！」

『ごめんごめん。新人が…ね。俺様も俺様で色々あったんだ、許してちょ？』

そりゃ由君に逢えたんだからニヤつくのは当然さー♪』

ビュッ！バチィィ！！

『顔面蹴るのは勘弁したって？少しだけ動き鈍くなった？』

「ツクソ！」

足を離してやると由君は悔しそうに顔を歪めた。

何時になく暴力的だなあ、と笑っていると今度はグーツで顔を狙い打ちする由君。

顔を逸らして避けると後ろに立っていたメシアに肩をつつかれる。

「正、話があるんだろ。」

『そーでした。待たせてごめんねメシア。』

んじゃ和葉さん由君よろしくー。』

「わかった。」

「オイッ！待ちやがれクソミヤー！！」

隣に座ってた和葉にバトンタッチして、襲い掛かる由君に『話が
終わってからね』と頭をよしよし。

メシアに『歩きながら話すか』と外に誘えば二つ返事で頷く。
動かない由君と笑う和葉さんに手を振って、俺達は外に出た。

：ベランダから見下ろす由君にチラリと顔だけ向け、前に戻して
からヒラヒラと手を左右に動かした。

「……バアーカ。」

由君の眩きは風に奪われた。

「正、」

『んあ？』

歩いている途中、メシアが立ち止まった。

真剣な表情に小首を傾げて振り向く俺。

メシアは人差し指を地面に下ろす。

住宅街から少し離れた一軒家が建つ場所の前でだ。

一軒家は最近建てられた物なのか新しい感じだった。

ホテルから2、3 kmくらい離れた場所だ。

メシアは重い口から漸く言葉を出す。

「明日、正軌と此処で話したい。大切な話だ。夜でも構わない。」
『んじゃ、風呂上がりの散歩がてら一緒に来ればいい。俺様は大人

しくし』

「ピロにも聞いてほしい。正軌とピロに、伝えたい。これは自分の「」だから…」

少し淋しげに笑むメシアと俺の間に風が吹き抜ける。

一部だけ聞き取れなかった言葉を聞き返す前に、メシアが先を歩いていた。

俺も流れに逆らわず、その時まで待つ事にする。

最終的にはわかるんだから、無理に急ぐ必要もない。
今夜はきっと長い夜になる。

中編（修学旅行）

んじゃ寝ますかな。

楽しかったけど、名残惜しい気持ちは無しにして帰るか。

『俺様部屋で休憩してんね。由君……覗いたら嫌よ……』

「知るか！！ちょっと待て、勝ち逃げすんな！！」

「由、早くしろ。お前のターンだ。」

「チェスなんて久しぶりだなあ。」

正軌君おやすみなさーい♪」

『おやすみー。』

キィィ：パタン。

由君が立ち上がるのをメシアが邪魔してる間に扉を閉めた。

薄暗がりの部屋のベッドに腰を下ろし、ポスツとそのまま横に倒れた。

正軌は大丈夫だろうか：取り敢えず戻ったら少女の傍にいてやろう。

サラにも現実の話を聞かせよう。

暴れまくる女は時折ふくらはぎの刃物突き付けるから気をつけて、少女が持つ記憶は徐々に……

ガチャ、

これからすべき事をぼんやり考えてれば、誰かが部屋に入ってきた。

乱暴だけど静かなような、扱いは雑だけど気は使ってるみたいな。

うん、表現が難しい。

ま、黒と金の髪で誰だかわかるけどね。

入らないで、って言ったのにもう。

その顔見たらボロ出しちゃいそうだから嫌なのに。

顔だけベッドに伏せ視界を暗くさせる。

由君は隣に座り何かを枕の下に隠したけど部屋が暗くてわからない。

カチッ：

由君がタバコに火を着ける。

少しだけ部屋が明るくなる。

仄な（ほのかな）タバコ独特の煙りの匂いが鼻をかすめる。

由君が吸うタバコの匂いは嫌いじゃない。

酒は止めてほしいけど。

『ゆーいー君、』

俺は能天気な声を心掛ける。

読まれぬよう、違和感を持たれないよう。

『もう、男性の部屋に一人で入っちゃダメでしょーが。メッ！』

「お前が由に何かする度量がねえから微塵も問題ねえ。」

『あら、俺様も一応狼だよん？羊の皮被ってるだけかも。キャー、由君危ない！』

「勝手にクソツマラナイ一人芝居やってろ。」

『やーん、つれないなー。』

モゾモゾ頭を動かして由君の背中を見上げる。

猫背の肩にサラサラの金髪が呼吸に合わせて揺れる。

人差し指と中指に挟んだタバコの火かやけに綺麗に思えて俺は体を起こして背後に回る。

股の間に由君が収まるように座り直し、由君が気づく前に先手を打つ。

今は人肌恋しいんだ、許してやって。

『ガォー。』

「!?!? ちょ、ミヤ! ふざけんな離せ! !」

『やだもーん☆俺様ちゃんと忠告したもんねー。油断大敵さ! 観念なさい!』

「ミヤお前マジでぶん殴るぞ!?! は・な・せえー! ツツ! !」

バシバシ! ゲシゲシ!

『イヤーン、痛いよ由君。』

「んならさっさと離れろ! !」

後ろから抱きしめて肩に顎を乗せれば腕を本気で叩かれ抓られ、足を踏まれ蹴られ、痛い。

暴れる雌彪をあやしてる気分。

大きい大きい自分とあんまし変わらない背丈の動物を。

はいはい、落ち着こうねー。

爪立てるのだけは止めたげてー、この体俺様のじゃないからさー。由君やつぱり小さいな、メシアより柔らかい。

夢のアイツよりも温かい……このまま由君の夢見られたら良いな。

ギュッ…と腕に力を込めれば、ピタッ、と動きが静止し振り上げ

られていた腕は音もなく膝に降ろされた。
ゆっくり背中を預ける彪の顔を覗き込む。

『急にどーしたの?』

「：別に。疲れたからタバコ吸うだけし。お前邪魔くさいし吸いにくいし阿呆だから無駄な事止めたんだよバーカバーカ。がり勉野郎真ん中分けの根本からハゲちまえ。」

『えー、本当にい?』

「煩い、黙れ、死ね、くせっ毛、外人ばっかモテる残念野郎。」

『最後のが1番傷ついたかも。いーもん、いーもん。由君にモテるようにするから。ねー♪』

「意味わからん、フクリュウエンで死ね。」

『ねね、枕の下CDくれるの?』

「!!!??」

ポロツ、

『おっと。』

口から滑り落ちるタバコをパシッとキャッチ。

硬直してる由君の指先に戻してやる。

タバコはきちんと挟まり、目の前の人物の心拍数は先程よりも早まってる。

みるみる赤くなる全身に頭から湯気がたちのぼるのが見えそうだ。顔の前でヒラヒラと左右に手を振るが反応はなく、ほっぺを人差し指でぶにぶに突い（つつい）たり軽く引っ張るも思考停止してるみたいだ。

——あれで隠し通したつもりだったのかな?
なら悪い事しちゃったかも。

あちゃー。

やっちゃったやっちゃった、由君の連続攻撃をくらうかも。

やられるとわかってても逃げる気はなくて、友恵に『先輩Mですかー?』と言われても否定しようがない。

由君以外なら逆にやり返すけど。

『由くん? 返事しないなら勝手に貰っちゃうよ? ぽいつ、と。』

ポスッ。

CDを抜き取り旅行鞆に放った。

パジャマがクッション代わりになりCDへの衝撃は皆無だ。

よし、これで由君が持って帰る選択肢は失った。

壊されるのは何としても阻止しなきゃね。

一向に由君の意識が世界一周したまま有るべき場所に戻らないので、メシアみたいにベタベタしていると先程から邪魔くさい物の存在が気になり由君とほんのちよつと間を空ける。

鬱陶しいネックレスを外したいのだが帰り際の広瀬の言葉がそうさせない。

「それ壊したり一回でも外したら、今度は

監禁するよ♪」

——あの憎たらしい小悪魔を一発殴つとけば良かったかもしれない。

ああ、世の中って無情だ。

さてと、もう一度抱きしめたら解放する、か、……な……？

『アレ？』

………いない。

さっきまでマネキンと良い勝負が出来そうなくらい微塵も動かなかった女の子が、消えた？

目の前にいたのに、肩に手を置いてたのに、軽く膝で挟んでたのに、開いてないはずの扉が開いてるって事は…

『逃げたか。』

いや、『逃がした』の方が正解に近いかな。

ネックレスをしげしげと眺め回す間にまあ…流石は“彪”、としか言えないねえ。

足の早い事早い事。

扉から弥生さんと和葉さんが話してるのが見える。

メシアはきつとシャワーでも浴びてるんだろう。

由君は声が聞こえるから隣の部屋のシーツに包まって（くるまっ）ると推測。

ちよっかい掛けに行く気力はないなー。

『俺様もシャワー浴びて寝るかあ…あふ…。』

夜の事もあるしな。

後で正軌と変わんねえと。

また近い内に皆に会いたいけど、最後までいきちんと挨拶したかったな。

ポケットから携帯電話を取り出しメールの本文に四文字だけを打って送信。

返信が来る前に、部屋を出た。

~~~~~

「？」

モゾモゾシートから顔を覗かせる由。

枕元に置かれた携帯電話の音楽に慌てて新着メールを確認する。

「！！……っ。」

メールの一文を目に映し目をこれでもか、というほど見開かせる。と同時に、悲しげに顔を歪めた。

何が悲しくて、

何が寂しくて、

何が自分の胸を焦がして、

何が瞼の裏に映るのか。

その光の眩しさと鼓膜に残る振動とたった四文字の置き手紙。

彼女は独り先を歩く黒猫を思った。

一つでも早く、彼の積み荷が降ろされるよう。

刹那よりも己が素直に行動できるよう。

隣並んで笑い合えるようにと。

「またね。」

悩み抜いた彼からのメッセージ。



## 中編（修学旅行）（後書き）

一旦ココで切りマンジャロ！つまらない？それは作者が重々承知している。

最近、一年生の出番が……特に二年生が（汗）フリーと赤也を活動報告でも忘れる事故が。ごめんよ二人共。

次は近頃苦勞させてはっかのメシアのお話。頑張ります……しくじらないよう。

まだまだ続きます。

## 中編（狼の告白）（前書き）

メシアの昔話。

拒絶に極端に脅えた彼には、過去に原因がありました。

そして、一緒に何かが大きく動き出した。

真尋同等、暗いお話です。苦手な方はバック プリーズ。

大丈夫な方どうぞ。

↓

## 中編（狼の告白）

——嗚呼、今日で自分の最大の汚点が明かされる。  
嫌われる、軽蔑される、もう一緒に居られなくなる。  
相当のリスクがあるし、好転に傾くのはまず無い。  
自分の運命の分かれ道なのに……不思議と恐くはない。  
結構落ち着いてる。

夜の街に二つの足音を鳴らしてあの場所に向かう。  
後ろには眠そうに目を擦る正軌が。

正が部屋に戻ったかと思えば正軌に戻っていた。

正軌は開口一番に『それじゃ行くか。』とタオルで髪を拭きなが  
ら自分を真っ直ぐ見つめた。

ピロから話を聞いていたようだ。

自分も頷くと正軌より先に部屋を出た。

——そうして今、あの場所に辿り着いた。

正軌は両足を少し開き顔を真っ直ぐ自分を黒い双眼に映した。

自分も正面を家に、顔を正軌に。

あまり見せない笑みを添えて。

無駄に大きい手の人差し指だけで家を示す。

ザアツ・・

強風が向かい風となり、長い前髪を舞い上げた。

正軌の顔が微かに歪む。

ちよくちよく気づいてはいたらしい。

せっかく前髪伸ばして隠してたのに…正軌は何も聞かずにいてくれた。

その優しさに、胸に実在する罪悪感が増大する。

今度は自分の手で前髪を上げた。

これで見やすくなっただろう。

額の右側の痕。

口角を上げるのと反比例に目を伏せる。

自分の声が夜闇に響き渡る。

「この傷痕は、自分が家を…いや、“家族を殺した”証だ。」

正軌が生唾を飲み込む音が耳に届いた。

正軌に嘘を吐かない、これが自分のポリシー。

…だからこそ、正軌は冷や汗を地面に落としたのだ。

「ん？宮古と黒澤は？」

「夜道を散歩する、ってメールあったよ。」

「ふうん。」

リビングを見渡しても姿を見受けられず、部屋の扉は開けっ放して人はいない。

TVの前のソファに座って眠たげにニュースを見る和葉に生返事してからベランダに出る由。

下を覗くも人気はあまり無く何やら男女二人がいちゃつきながら何処かに消えて行く姿を何となく眺めてた。

―ふと、目に留まる銀色。

ホテルのロビーから執事服姿の男性が誰かに一礼してから外に出た。

由のあまり良くない視力からして見てもきっと瀬戸だろう。

ポケットの携帯電話のカメラをズームして確認するがあの背丈と髪は由にとって憎たらしい印象を受ける。

「あんのコスプレ野郎が…」

軽く舌打ちをしてポケットにしまう。

胸元のポケットのタバコを探したが先程キラしたのを思い出し苛々から頭をガリガリ掻いた。

由は愛用しているメーカーのタバコしか吸わないのだ。

他の社のタバコは毛嫌いする。

パスポは神崎のを借りて自動販売機に買いに行くか、知り合いのバンドが経営してる店に買いに行くかで何とか生きてる。

愛煙家が水と同等の生命維持する為の物が無い時ほど、機嫌が悪い事はない。

触らぬ神に祟りなし、昔の人も色々と苦労していたのだろう。

ボサボサの髪でもう一度瀬戸を見下ろす由。

…が、そこで違和感。

由が目を離したのはほんの数秒。

瀬戸が歩くスピードは早いが自転車ほどではない。

瀬戸が歩く道に裏路地はほとんどなく、走ったのなら音が響くはず。

由の場所から景色は見渡しやすい。

なのに、

「いねえ…？」

コンコン。

「？」

振り向けば和葉はまたソファで眠っている。

運ぶのか…、と大きなため息を吐き出して来訪者を出迎えに向かった。

カツ、カツ、カツ・

海東総合病院の別棟。

誰もいない廊下を白い看護師用の靴がある部屋に向かう。

一般の病棟の部屋とは違う、窓も入口も太い鉄格子で隔離されたベッドとトイレしかない部屋。

カツン―：

巡回用の懐中電灯で女性がその部屋を照らす。

この科は彼女には専門外のはず。

彼女が何故此処の患者に逢いに来たのかは彼女しかわからない。

照らす先、ベッドの上には唸り声を上げる金髪の女性が。

両手首両足に手錠をかけられており暴れたのか細かい傷痕が絶えない。

ボサボサの髪をベッドに広げ、渴いた唇からは聞き取る事が難しい呟きを延々と繰り返す。

女性は呆れ返ったのかフウ、とため息を零した。

「茜崎さん。」

「~~~~~」

「貴女の求めるモノは絶対来ないわよ。  
だって、貴女を嫌ってるもの。クスッ。」

「~~~~~」

神崎の言葉は香織には届いておらず、香織は同じ単語をブツブツと念仏並に唱える。





カッン、

再び始まった怨念を横目に、神崎はその場から翻す。

行きと帰りで速さが違うのは、何を予感したから。  
とても嫌な、けどよく当たる、女の勘。

「正軌、」

特長的な髪が揺れる。

視界が揺れる。

誰かと重なる。

何かが崩れ、滴も落ちた。

「もう、隠す必要はなくなった。」

これから始まるのは、狼のお話。

## 中編（狼の告白）

——アメリカ合衆国のXX州の小さな病院。

三十路を過ぎた夫婦の間にやっと子供が生まれた。

その子供の髪は二人の金色の髪とは違う、淡い緑色の髪の子だった。

夫婦は長年連れ添った間柄なので『神からの授け物かもしれない』と酷く喜んだ。

医者も看護師達も夫婦の言う通りかもしれないと子供は大切に育てられた。

壊れ物のように、優しく、大事に。

力が少し周りの子供より強いのが難点だったが、妹と仲良く遊ぶ姿は普通の子供と何ら変わりなかった。

風邪もひかず、健康で食欲旺盛な男の子。

家族四人で平穏な家庭を築きあげていた。

……だが、その平穏も一瞬で終わりを迎えた。  
たった一つの事故によって。

修復不可能なほどに。

少年が学校帰りに母親のいる産婦人科に直行している時だった。友人と別れ一人駆け足で自分が生まれた病院へと向かう。

新しい弟が生まれるのだ。

少年の顔は喜びを隠せない。

頬は赤く染まっている。

足も速度を上げる。

妹も病院に入るのか道路を横断する姿を少年は見つけた。

妹の表情も少年と同じく楽しみに満ち溢れた顔をしている。

少年と同じウェーブがかかったブロンドの髪を靡かせる。

すかさず声をかける。

「メリー！」

メリーと呼ばれた妹は道路の中央で立ち止まる。

少年に向かって花のような笑顔を咲かせた。

大きく手を伸ばして少年に振る。

「お兄ちゃん！」

少年は更に速度を速めた。

妹と一緒に病院に入る為に。

——だが、少年は妹の背後に迫る物に赤かった顔を真っ青にさせた。

妹は気づいていない。

バスの運転手もスピードを落とさない。

少年は思わず地面に転がる石を手取る。

その行動が元凶だった。

「メリー！伏せて！！」

「お兄ちゃん…？」

ビュンツ！

言葉と同時にバスに向かって石を投げた。

妹は慌てて伏せてその頭の上を物凄い勢いで石は飛ぶ。

バスには乗客が乗っていた。

だが少年は妹の事で頭がいっぱいだった。

…数秒後、バスのタイヤを石が貫いた。

小学生の力では有り得ない事。

——だが、現実が非現実を物語る。

バシユツ！キイイイイツツ！！

タイヤの空気が漏れ、バスは右に傾いた。

そのまま斜めに倒れバスは病院の壁に減り込み（めりこみ）、…

…妹に襲い掛かった。

少年が避けたかった運命が起きてしまった。

あいにく生憎周りに人がいなかった為、被害は少なかった。

最愛の妹とバスの乗客と運転手を除いては。

ゴオウ！ボオオオオ…！！

目の前で燃え盛る炎と苦しむ人々。

妹は頭をやられて即死。

意識のある人々は焼け爛れる（ただれる）手を伸ばし少年に助けを求めたが、少年は家族の死を受け止めるのに精一杯。

虚ろな薄黄色の瞳に炎を映す。

灰が全身に被さるが、少年は無傷だった。

スローモーションのようになりアルを少年は一人記憶に刻み付ける。

―その日の夜、弟が生まれた。

が、家族は喜べなかった。

純真無垢な弟に少年は涙を落とすだけだった。

―次の日、妹の葬儀と警察の事情徴収。

放心状態の少年にクラスメートや家族は心配し、警察も“バス会社の点検不足”として家族や乗客の家族に多額の賠償金が送られた。

…しかし、妹の死から家族はバラバラに崩れてゆく。

真面目で優しくたった父親はヤクに溺れ、母親は弟と少年を連れて家を出ようとしたが父親は『メシアは置いていけ』と母親を殴り少年は父親の手に渡った。

幼い弟は少年を兄だという認識は薄く、少年が会いに行くと決まっ  
って泣きわめいた。

それがかえって少年を不安定にさせた。

学校でも滅多に喋らなくなり、父親のいる家に帰らず夜の街をさ

迷うようになる。

昼間は学校に行き、夜は酒やタバコはやらなくても路地で絡まれて、逆に金を奪う毎日。

そうやって生き延びていく日々が数年も続いた。

少年はすっかり裏では名を知らぬ者はほとんどいないくらい有名になった。

少年が中学生の頃には父親は母親に金をたかるようになった。

弟は真面目に学校に行きバイトで家計を少しでも支える為に日々頑張っていた。

だが、人当たりの良い弟は、青年に変わった少年を汚い物でも見るかのような白い目で見えるようになった。

青年はそれをも思わなかった。

それは仕方のない事だと理解していたから。

父親は青年と家で会う度に顔を引き攣らせ、『飲み過ぎ』だと青年が肩に触れさえもすれば、

バシッ！！

「触るな！こ、この化け物！！」

と逃げ腰で家を飛び出す始末。

叩かれた手が痛いのか、

拒絶された心が痛いのか、

父親の怯えた顔が寂しいのか、

また、自分が何処で道を間違えたのがわからないからか、

行き場を無くした手を握り締め青年はソファに顔を埋めた（うずめた）。

触れたソファに少しでも力を加えればミシリとどこかが壊れる音がした。

青年の不可思議な力を青年自身が極端に恐れた。

どうする術もないこの自分自身を亡くせば全て終わるだろう、と高い場所から飛び降りようとすれば妹の顔が思い浮かび結局何も出来ない己の弱さを実感する度に屋上のフェンスをグニヤリと捩曲げた。

——高校を入学した数ヶ月後、母親と弟が見知らぬ男を連れて家を訪れた。

父親は瘦衰えたが今だに酒は手放さなかった。

母親は男を青年に紹介した。

再婚するらしい。

弟もその男を慕っている。

「だから、貴方にはもう会えないわ。」

母親はこれから父親に金は払えないと主張した。

男性が提案したらしい。

：だが、青年は見覚えのある顔だっただけに再婚に賛成はできなかった。

父親も金銭面で反対した。

弟は青年に言った。

「あんたともこれで離縁だ。今後一切俺達に近寄らないでくれ。死んだ姉さんみたいに殺されたくない。」

青年は目を見開かせて弟につかみ掛かろうとした。



だが、青年は思い留まりジャケットを片手に家を出た。  
父親はまだ抗議している。

青年は家を出る際、柱を一本蹴り飛ばし、家を後にしようと足を浮かせた時、

「!!?」

この平穏な地方では珍しい……大地震。  
青年が立っていられるのも難しいほどの揺れに地面に跪ずいていと、

メキメキメキ…

後ろで何かヒビが入る嫌な音。  
ついでに嫌な予感も青年を煽る。

振り向いた青年の家は、もう半分ほどヒビが入っていて原因は支える柱が脆かったのと一本が先程青年により折られていたから。  
周りの家も古いのが多い為ヒビが入るがそれだけの事。

青年は考えるよりも叫んだ。

「父さん!! 母さん!! ジャック!!」

ゴゴゴ…グシャアアアア…

青年は窓ガラスの破片で額を怪我した。  
他は、また無傷だった。

青年はあの時のように呆然と家を見つめていた。

家が、壊れた。

家が、崩れ去る。

家が、無くなった。

家を、失った。

家族を、失った。

何もかも、無くなった。

また自分が壊した。

「……ア…アアア…ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
 ア ア ツツ！！！！！！」

「」

悲痛な青年の叫び声が町中に轟いた。

そして、叫び声が終わると共にドサ……と青年は倒れた。

家族と男性は皆、即死だった。

――  
：三日後、青年は目覚めた。  
警察が先ず家族の事を青年に教え、青年は直ぐさま簡単な事情徴収を受けた。

家が崩壊したのは地震のせいで家が古かったのが警察を納得させる理由だった。

柱も大地震でヒビが入って壊れたのだと。

青年は警察の言葉をぼんやりとした意識で聞いていた。  
額の傷がジクジク痛む。

：涙は出なかった。

代わりに痛みが青年を包み込んだ。

青年は病院の個室で独りになった事実を痛感する。  
病室に差し込む光は温かかった。

コンコン、

「メシア君、面会ですよ。」

ベッドから空を見上げるメシアの返事を聞かずに看護婦は扉を開けた。

手を付けてない食事をワゴンに入れ、訪問者に一礼してから病室を後にした。

カタン、

物音がした方に青年は顔を向ける。

そこには銀色の髪を持つ三十路くらいの男性が真っ直ぐ青年を見据えていた。

顔は青年の父親に酷く似ていて青年は目を驚愕した。  
点滴を差した腕を男性に伸ばす。

「父さん…?」

「残念ながら君の父親ではない。」

男性の淡々とした否定に青年は伸ばした腕をベッドに下ろした。  
微かな希望を打ち砕かれた気分に陥る。  
しかし男性はそのまま喋り続ける。

「私は君の父親の弟、つまり伯父にあたる。君が生まれた時に妻と会いに行ったが、流石に覚えていないだろう。」

「…何の用で此処に？」

「メシア、君を引き取りに来た。君ももう高校生だし孤児院に入れる歳ではない。就職も難しいだろうし、病室に引き込もっては何も出来ない。」

「大丈夫です。一人でも何とか暮らせませす。家事は出来ますし、高校のお金は働いて…」

「住む家は？両親の遺産もあまり無いのは知っているだろう。」

「…今から探して、」

「ホームレスになるのか？」

「違うっ！違う違う違う！！」

ブンブンと左右に頭を振る。

伸びきった髪が窓から入る風に靡いた。

男性は青年の叫び声に驚いた様子はなく、冷静に青年を見る。

青年は膝と頭を抱えて小さくなった。

額の傷がズキズキと痛みだす。

「別に君を責める為にアメリカに来たわけではない。」

「…」

「私は今、日本で息子と二人で暮らしている。妻は病気で数年前に亡くなった。」

「…」

「君が私の今で家事をしてくれると正直助かる。男二人、家事は苦手でね。息子も反抗期になって困っている。」

「…」

「高校には勿論行かせるし、そのまま大学まで面倒はみる。」

「…自分は、化け物だ。一緒に暮らせなくなって時期に捨てるのが目に見えている。」

「なら私を試すか？」

男性は青年の手首を掴んで無理矢理顔を上げさせた。

青年はビックリして男性の顔を見上げる。

男性は立ち上がり青年に言い放つ。

「期限は君が大学を卒業するまで。条件は私が君を捨てない事と面倒をみる事。君は高校、大学を通う間家事をする事。

もし私が条件を破れば好きに生きれば良い。ただし、君が破れば私の面倒を老後までみる事。

じゃあ、日本の資料は置いておくから退院までに覚える事。また明日。」

カラララ…パタン。

返事をする間も与えられずに話が決まってしまった。

テーブルの上には本が大量にあり、別の袋には菓子と着替えが入っていた。

——これが、黒澤 シェイルと青年の出会い。

それから伯父は青年が退院するまで毎日見舞に足を運んだ。

青年は退院後も暫くアメリカで高校やバイトに追われながらも日本語の勉強を合間をぬってやった。

住む場所は伯父が用意し、保証人も伯父がなってくれた為ホームレスにはならなくて済んだ。

——それから一年後。  
青年は日本に住む決心をし、来日した。  
フリーとは最初から仲が悪かった。

——来日から二ヶ月後。

近くの私立高校に入学する為に試験を受けに赴いた青年。

伯父は大切な仕事があった為に一人で行った。

私服姿なのは伯父が『緊張するなら着慣れた服で構わない』と提案したから。

道のりは一度町を案内してもらった際に教えてもらったので迷子にはならなかった。

青年が門の前で学校が終わるのを待っていると、チャイムの音と同時に生徒がゾロゾロと出てくる。

青年は丁度良いと一人の女子生徒に話し掛けた。

焦げ茶色の髪を後ろで団子に結んだぼんやりした女の子。

日本語はまだ覚えないので英語で喋りかける。

……が、逃げられた。

手を伸ばして声を出す前に、全速力で。

次に真ん中分けの二つ結びの女子に話し掛ければ、まさかのシカト。

見向きもされなかった。

男子生徒は一目見ただけで女子生徒のように走って逃げられ、女子生徒は『キヤーキヤー！！イケメンキターッ！！』と叫ぶだけで会話不可能。

囲まれたので校舎に逃げた。

一回暴れたら教師が登場するだろうか、その前に警察か。仕方ない留学生でも探すか。

日本人以外を探してウロウロしていても女の甲高い叫び声は嫌でも耳に入る。

香水のキツイ匂いは慣れてはいるが好きにはなれない。

：一旦人気のない場所に行くか。

遅れても『迷った』と口実すれば問題ない。

実際迷ってるし。

パーカーのフードに結んだ髪を入れ、黒と茶色以外の髪を探しながら人気のない場所へとさ迷い歩く。

――で、発見。

自販機の前で何かブツブツ呟いてる青髪。

鬱病かと思ったがそろそろ時間が危ういので話し掛ける。

――グイ、

が、顔を見れば日系だった事に驚いた。

そして深く刻まれた皺と目つきに漫画で見た“不良”かと。

だが、目が濁ってないのが気に入った。

そんな第一印象。

結局スリッパに替えて職員室まで案内してくれたのだから面倒見は良いのに好印象。

話を適当にあしらいながらも横目でずっと聞いてくれるのにまたポイント＋2。



顔はアレだが服装はキチンとしていてアクセサリーを付けてないのにまた＋2。

背丈が変わらないのにもまた＋2。

日本人は小さい。

喋ってて首が痛くなる。

帰ってから青髪の男の印象が強くて忘れられなかった。

次の日も会えたがは会えたが……何故か逃げられた。

「――……で、今に至る。」

『うん、悪かったなあのは。正直そこまでお前のポイント高かったとは知らなかったし。』

「昔の話だ。今は気にしてない。」

近くの公園のベンチに背中を伸ばして空を見上げる。

隣に少し間を空けた正は後半になるに連れ緊迫した顔から苦笑に変化させた。

もう3時くらいだ。

風も冷たくなり、湯上がり自分達には肌寒い。

けど、景色は綺麗だった。

『メシア、ピロから伝言。』

「何だ？」

『“お前運良いな（笑）警察に二回もスルーされて”。』

「だろう。自分も今に思えば運が良かった。」

自分は運が良い。決心するのがもう少し早ければ尚更。」

『来日するのが？』

コクリ、と深く頷く。

考えてもみろよ？

半年、いや数ヶ月早ければ正軌を一人占めできたんだ。

茶矢に会う前に自分が会ってれば、もっと沢山時間を共有できた訳だ。

…まあ、今が一番だけどな。

これ以上贅沢言うと今度こそ警察に捕まるかもしれない。  
それだけは勘弁してくれ。

今は茶矢と正軌を取り合って、

源希に色々と教えてもらって、

真尋をからかって、

友恵とテレビの話題で盛り上がって、

和葉のボケボケな話を聞いて笑って、

由と毎日のように口喧嘩して、

たまに刑務所にいるフリーに嫌味を言いに行って、

伯父と一緒に暮らして、

正軌とピロの傍にいろ。

これ以上の贅沢はこの世に無いだろう。

一生分の幸福を使ってるかもしれない。  
それでも良いかもしれない。  
うん、構わない。

ガタッ、

『よし、行くか。』

「何処に？」

立ち上がった正軌に問い掛ける。  
もうホテルに戻るのだろうか？  
自分は後少し余韻に浸りたい。

正軌は自分に手を差し延べ、さも当然のように言い切った。

『何処って…お前の家族の墓だよ。』

「…え……」

『メシアの友人代表として、挨拶くらいしねえとな。』

「おい、由抜きで何しようとしてんだよ。」

『あ、由君。どうしたの？』

公園の入口から由が現れた。

寒さ対策に長袖のパーカーを羽織っている。

由に今の話を聞かれたのか、とポケットと見てれば人差し指を突き付けられた。

偉そうに自分に言う。

「由はお前を怖えと思った事ねえかな。お前何か所詮口が悪い外人だ。」

だから由も墓参り行く。感謝しやがれ。」

「無理に来なくていい。お前が来たら家族も自分も迷惑だ。それに、由の方が口悪い。」

「んだとゴルアア!!!」

『はいはい、由君落ち着いてね。』

「ハッ。」

「クソ外人がああ!!」

「今なら由が外人だ。」

『メシアも由君煽るな。』

自分の嫌味一つ一つにフリィのようにキレる由。それを宥める正軌はまた自分に手を差し出した。呆れた顔で自分を見下ろす。

『由君がクソ外人なら俺も同じだよ。

ほら、由君が暴走する前に行くぞ。』

「…ヤダ。」

『は?』

「由が理由で自分が動くのは嫌だ。」

「あっそ。なら探しに行くまでだ。」

『由君迷子になるから戻って!!ほら、メシアも我が儘言うな!』

子供の喧嘩に正軌は手を焼いている。

自分の手を引っ張って由を追いかける正軌。

こうやって困らせれば自分を見てくれる、自分を意識してくれる。子供のようだと思われても、面倒見が良いから最終的には構ってくれる。

…そういう性格だから懐いたんだ。

自分達は。

掴む手を気づかれないようそっと握り返した。

——朝日に照らされた公園から数km離れた墓地。

そのうちの一つの前に缶ジュースが三本、あの時の三人のように並んでいた。

## 中編（狼の告白）（後書き）

メシアの過去編終了！案外長かった！お待たせし過ぎてすんません！  
うとうとしながら打ってたから変なヶ所多いかもすんません！  
あんまし完成度低くてすいやせん！本当色々すいやせんしたっ！！

——この話、本当に“100話目”ですよ。よく此処まで飽きずに書いたな私（笑）↑

いや、本気で。自分自身に拍手。

今まで拝読して下さったかたにも拍手と土下座。もう感謝仕切れないです。

これからも張り切っていきやしょー！！体育祭延期とかふざけとるー！！もう体育祭しなくて良い！！オワレ！！↑

これからも皆様、生温い目で見守ってやって下さいませ！お願いしますー！！

まだまだ続きます。

## 中編（修学旅行2）（前書き）

修学旅行も後半に入って参りました！

皆さん準備はOKですか！！？返事が無くても勝手に『了承』と受け取りますよ！↑迷惑な

では、

『いやあマジ遅いからもう作者死んだかと思ってたわ（爆笑）あ、生きてたの？ならさっさと更新しろよノロマ犬。こちとら何時までも待ってやるほど気は長くねえんだよ（バシバシ）わかったら急いで取り戻しやがれ良いな！！！！』

という方。

作者は非常にチキンな精神の為、もうちょっとソフトにお願いします（土下座）

そちらから画面を上半分隠した状態でお進み下さい↑

『あー、いいいいいよ。俺オタクだから待つのが慣れてっし。気長にやんな。』

という神様もお通り下さい。

神っ！！！！ LOVE YOU！！

いや、普通にどうぞ（笑）

↓





## 中編（修学旅行2）

ホテルから昇る朝日を眺める。

記念に携帯電話のムービーで撮った。

送るのは飛行機の中で。

「宮古…カーテン閉めろ。」

「正軌、眩しい。」

『あー悪い。』

シャツ。

片手でカーテンを閉め、ベッドに横たわるメシアと俺のベッドで  
糞虫状態の由君達の方を眠い目を擦って見た。

今は朝の7時。

女子の部屋は昨夜訪れた弥生さんと和葉さんが使ってる為、由君  
は俺のベッドで寝てる。

アメリカ最後の日くらい、ふかふかのベッドで寝たいんだとさ。

俺は別に寝ないつもりだったから二つ返事で明け渡した。

メシアが誘ったけど頭叩いて寝かした。

『…ちよつと飲み物買ってくる。いる人ー。』

「「コーラ。」」

『11時にはバス乗るから起きとけよ。』

二本の腕が垂直に伸び、同じ単語を同時に発した。

部屋を出る前に小言を一つ置いて、和葉さんと弥生さんはフルー  
ツジュース辺りで良いかな、と鍵をジパンのポケットに入れて外

に出た。

歩く度にチャリ、チャリ、と音が鳴る。  
誰もいない廊下、すれ違う人はいない。  
真っ直ぐ歩いてて、…で、何か違和感。  
目の前に手を翳して（カザシテ）みた。

『眼鏡忘れた。ピロもいねえし、これじゃ商品が見えない。』

ドン、

『す、すみません。』

「いえ。」

『……、！？』

ダッ！！

聞き覚えのある外人にしては上手い日本語に、俺は踵を返して走り出した。

二人の事はピロの視点から見てきた。

瀬戸さんが危ないのは初対面からわかってる。

目隠ししたまま壁にぶつからないように走る前に、

ガッ！

『ぐあっ！？』

「逃げないで下さいよ。」

と服から飛び出したチェーンを捕まれ首が締まる。  
引く力は見た目よりも相当強く、チェーンが首に食い込み呼吸が

できない。

瞳孔が全開になる。

首の骨が軋む嫌な音が耳に届く。

チェーンを掴もうとしても掴めない。

意地でも前へ進むが引き戻される。

『カツ、ハアツ！ヒューヒュー：アツ！』

「あの方が出られたら厄介ですからね。気絶はさせませんよ。」

『…ッ、ガア！！』

後ろ髪をわしづかみされ、首は解放されたが両手を後ろに捻られ身動きがとれない。

ブチブチと何本が髪が抜けた気がした。

（正軌、バトンタッチ。）

ピロお前遅い、何時までこのキツイ体制で誘拐されるの待たないといけねえんだよ。

馬鹿ピロ。

（はいはい。小姑のは聞き飽きた！

1、2でいくぜ？）

一発でタイミング合わせるぞ。

一か八かの勝負だ。

（おう！）

スウ、と目を閉じた。

瀬戸さんは俺の異変に気づいたのか腕を更に痛め上げた。

だけど俺はもう止めない。  
唇を小さく動かした。

『1、』

(2、)

ドクッ！

心臓の音が一瞬高鳴った。  
俺は抜け殻の外に出た。

目の前の俺の口端が吊り上がる。  
楽しげに高笑いをし、静かに目を開けた。

ピロの時の俺の目は微妙に違う。  
俺が“鬼”ならピロは、そうだな…うん、ピロは“獣”だ。  
闘争心バリバリの獣。

前に本人に言ったら『そーかもな！』とケラケラ笑ってた。

ピロが余裕の笑みを見せるが瀬戸さんの力は緩まない。  
だが、ピロは顔色一つ変えやしない。

『あんたこんな弱かったっけ？瀬戸さんよ。』

「ハッターは止しなさい。こんな状況で減らず口を叩くよりも大人しく連行されるのが、この体の為ですよ。」

『体の持ち主から「自由に使え」ってお許しがあるからな。』

「なら、貴方を寝かしませう。」

髪を掴んでいた手をポケットに入れ何かを取り出そうとするがピロからは何も見えない。

俺には広瀬が持ってた変な色のカプセルのように見え、誰か助けを呼ぼうと周りを見渡していると、

「スウ……、

い嫌あああああああああ！！！痴漢！痴漢よ！！誰かジエントルマン助けて！！嫌あああああ！！！！」

『「！！？」』

（痴漢？！）

甲高い叫び声が俺達の耳をいぬく。

女性は腹に手を当て、顔を確認する前に走り去ってしまった。

二つ結びの髪が角に消え、慌てて追いかけようとする前に、

ドガッ！

『正軌ー、早く買いに行こうぜー。遅くなるとメシア達が煩いし。』

（けど、あの女の子に礼を…）

『また会った時でいーじゃん。ほら、先行くぞ。』

（お前な…）

瀬戸さんの顎に頭でガンツ！と殴り付け、緩んだ一瞬で摺り抜け早足で離れるピロ。

あの女の子はもう気配さえもなく、俺は渋々瀬戸さんの上を通る。瀬戸さんは壁に凭ながら赤い顎を押さえている。

地味に痛そうだ。

俺の頭もそこまで固くないから戻った時が心配だが、先ずはピロに痛覚があるのかが疑問だ。

『あるに決まってんじゃん。正軌の体に最初から無ければ感じないけど。』

あー痛かった。禿げたらあいつのせいだな。自販機見つけ。』

（ふーん。ただ我慢強いだけか。）

『んなところ。正軌は何飲む？』

（お前が好きなのにしろ。後、交代しても良い時で俺は構わないから。）

『T h a n k s。』

ピ、ガコン。

一般的な機械音の後に商品が落ち、取り出そうと前に屈むと抱えていたうちの一本が鈍い音をたてて落ちた。

しかも炭酸飲料のコーラ。

由君に怒られるだろうな、と苦笑してれば、また一本コーラが落ちた。

同じ要領で、中で炭酸が抜けるのも最初と同じ。

メシアは怒らないだろう、と人が来る前にピロはペットボトルに手を伸ばした。

が、横から伸びた手が先に目的の物を掴んだ。

顔を上げると、ジャージ姿というラフな格好で首にタオルをかけている弥生さんが。

「はい。」

『サンキュ、弥生さん。』

「持とうか？」

『んじゃ、この一本よろしく。』

ポン、と差し出された手に一本のフルーツジュース。

だが弥生さんに『まだ。』と促されたがピロは『いや、それだけで充分だ。ありがとう。』と苦笑して言えば、暫くの沈黙の後、『当たり前。』と首を左右に振られた。

ピロは綺麗に笑って二人並んでエレベーターまで歩いた。

こうして自分の後ろ姿を誰かと比較して観ると、やはりデカイなと思う。

弥生さんも女子にしては高い方だ。

皆月や由君よりも高いし、真尋と同じくらいかもしれない。

フリーよりは低いな。

あいつも中々デカかった。

ハーフなだけはある。

神崎さんはスタイルは良いけど、背はあんまりだったな。

靴の分もあるし、まあ源希より若干上だろうな。

威圧感は倍以上だけど。

『（何考えてんの？）』

（俺の周りの人間の身長について。）

『（考えるよねー♪俺様も暇な時は観察して楽しんでる！）』

（自分の生身の体を客観的に見れるのは俺くらいしか体験できないしな。そういう髪伸びたな。）

『（帰国したら切る？）』

（だな。）

チーン。

エレベーターが俺達の階で止まった。

トン、とエレベーターを出ると弥生さんがフルーツジュースをピロに差し出した。

『あ、それあげる。弥生さん用に買ったし。』

「…ありがと。」

チーン。

弥生さんが伸ばした腕を引き戻せばエレベーターの扉が閉まる。ピロが最後にヒラリと手を振り、そこを後にした。

――此処は、空港近くの店が立ち並ぶ大通り。



で、俺様達は何故か由君の前に並んでいる状態。

彼女の片手には飛行機の中で慌てて出していた封筒が。

今の表情は一段と陰しいもので、今から戦場にでも行くかのような顔。

ちょっと面白い。

けど、ケラケラ笑うと殴られそうなのでニヤニヤするだけで我慢。

由君に睨まれたが気にしない。

弥生さんも来た。

由君は俺達二人を見て、やっと話を切り出す。

「お前ら、神崎さん知っているよな。あの鬼ババア。」

「ああ。」

『モチ。』

「行きの飛行機の中で神崎さんからメールが着てな、内容はコレ。」

『「「「?」」」』

携帯電話の画面には一通のメールが映っていて、四人で覗き込む。そこには絵文字を使っていない簡潔な文章。

由君は頭を押さえて深く溜息を吐いた。

「貴女の鞆の中にお金が入った封筒があるから、それで私に似合う鞆と服を買ってきなさい。釣りはあげるわ。」

ただし、私が気に入らなければ：二ヶ月くらい釣銭で生活してもらうわよ？ま、貴女だけじゃ無理だろうし、周りに手伝ってもらいなさい。

じゃ、良い旅を。

「――――END――」

「周りとは自分達の事か。」

『だろうな。』

俺達センスないからパス☆みんなで頑張ってちょ。』

「正がないなら自分も。」

「オイ！お前ら逃げんな！！鬼ババアの餌食に由をするのか！？」

「由ちゃん！私達が手伝うよ！ね、弥生！」

「うん。」

「…センキュ。」

オラ！お前らも見習え！さっさと行くぞ！！」

『しゃーないなあ。メシアー。』

「わかった。」

ズルズルと俺様は由君に腕を引っ張られ、わざとらしい言い方を  
してメシアに手招きした。

弥生さんと和葉さんも手を繋いで歩く。

神崎さんを知らない辺り二人は平和だ。

このまま何も知らずに生きてほしいもんだね。

そして、由君が掴む反対の腕を引っ張るメシアが手を離してくれ  
れば俺様は平和になるな。

左右に引っ張られて正直痛い。

けど、まあ、しゃーないなあと諦める俺様は気を紛らわす為に喋  
る事にした。

メシアと由君はずっと黙ってるし。

『なあ、メシアって質の良い物とかわかる？』

「偽物と本物の区別くらいなら可能だ。」

『じゃあ、一応安心だな。由君が二ヶ月普通に暮らせる。』

「あの人が気に入らないと意味ないけどな。由もあの人の事はよく  
わからないから博打みたいなものだ。」

ズンズンと先を歩きながら困ったように零す由君に俺は喉を鳴らして笑った。

姪でもわからない神崎さんの実態。

あの人はそうでなくちゃ、面白くない。

グイッ、ビンッ！

『イタッ！ちょ、由君ストップ！！』

「あ？何だよ。由は急いでるんだよ。早く行くぞ。」

『裂ける裂ける裂ける！メシアいきなりどうした！？』

「…神崎が気に入るような鞆と服だったな。」

「そーだけど。」

「正達はちよっと待ってろ。由、安く済むからついて来い。しかも本物だ。」

「は？！あ、オイ！クソッ馬鹿力が！！ミヤ！和葉！女バス！助ける！！」

「由ちゃん行ってらっしゃーい！」

「行ってら。」

『三人で待ってるわー。』

「クソオオオオッ！！！！」

メシアは由君の二の腕辺りを掴んで、薄汚い建物の中に由君を連れて行った。

俺達に助けを求めた由君であったが、弥生さん以外は笑顔で見送った。

気持ちちは歯科に行くのを拒む子供を見送る感じ。

メシアが由君を悪いようにする筈はないし、きつと知り合いの店なのだろう。

深くは聞かないけど。

…ボタン。

古びた扉が閉まり、そこからは大通りの賑やかさが取り囲む。行き交う人の中には同じ学生もいる。

俺は周りを見回して顔見知りがないか注意する。

瀬戸ならわかつけど、広瀬は帽子被られたら見分けつかない。

しかも今の季節、帽子を被らない人のが少ないのを踏まえて判断するのは困難だ。

迂闊<sup>ウカッ</sup>に一人で歩けやしない。

あータルイ。

ポン、と喋る二人の背中を叩いてこちらに目を向けさせる。

俺は隣の小洒落た喫茶店を指差してニカッと歯を見せた。

『こんな日差しの下じゃあ暑いし、俺はそこで待ってるから二人は最後に店を回ったら？退屈でしょ？』

「ううん！私達もう大体回ったから大丈夫だよ♪ね、弥生！」

「うん。ディ○ニランド、帰り。」

「それに、正軌君一人だと退屈でしょ？三人で日陰にしよう！」

『わかった。Thank you和葉さん、弥生さん。』

「当然。」

店の入口付近で俺達は背中を預けて待った。

女子二人を守る自信は無いから適当にぶらぶらさせるつもりだったが、人数が多いのも安全だなと考え和葉の提案に甘える事にした。何かあった時に目撃者は多い方が好ましい。

正軌の体の安全が最優先だから。

雑談を交わしながら二人が出るのを待っていると、漸く紙袋を持

った二人が現れた。

メシアは普通だが、由君はげっそりした顔してる。

しかし、袋の中は洒落た服や鞆が入っており、メシアは『感謝しろ』と由君を見下ろした。

だが、キッ！と威嚇でもするように由君がメシアを睨みつける。

青い顔だからそこまで恐くはない。

ドサッ！と荷物を手放してメシアに怒鳴り付ける由君を俺達は慣れた感じで傍観していた。

「ああ感謝はするさ！けどな、あんな気色悪いお前を見てたら吐き気するわ！しかもケバい奴らいるし危ない奴らもちろはらいたし何か奥の部屋でわけわかんない声聞こえたしもう絶ッッ对此処には入らねえ！！！」

「由が一人で入れば最終的にボロ雑巾のように路地裏に捨てられ日本に帰れなくなるからな。一般人が入って帰れる場所じゃない。」

「メシア君は違うの？」

「自分は顔なじみだから危険は皆無だ。昔、此処でバイトしていた時代もある。」

「んな！？こんな場所で働くなんてお前はば、ムグッ！？」

『そろそろ空港に行くか。時間もあれだし。』

「ンゝー！！ンゝンゝンゝ！！！」

由君の口を手で塞ぎズルズルと今度は俺が引っ張る番。

もかく由君にボソッと耳打ちすると目だけ俺を見上げ、それから黙った。

メシアは和葉さん達と後ろで喋っている。

俺の視線に気づいて『どうした？』なんて聞くから『ちゃんとついて来てるか確認』と嘘でも本当でもない言葉をかけておいた。

由君の口から手を離し頭に顎を乗せながら歩いてると肘打ちを腹

にくらった。

ジンジンと痛む腹と『うっ』と零れたうめき声。  
もろに喰らった為、二、三步後ずさる。

前の女性に鼻で笑われその真意を確かめる前にさっさと歩いて行  
ってしまった。

そんなに頭に乗せられるの嫌だったんだろうか？

今更のように感じるけど、良いところに入ったな。

マジ痛い。

そんな俺が早足で離れた由君の眉が寄せられている事に気づく筈  
もない。

ガリガリと頭をむず痒そうに掻いた彼女は大きく舌打ちをした。

「はい、優人さん。」

「ありがとう。」

此処は宮古家のリビング。

息子二人が泊まりに行き、家には夫婦二人しかない静かな家庭。優人も夏休みだからか学校は休み。

夏休み中のプールは他の先生に任せていて、優人は家に持ち帰った仕事をこなすようになった。

とも美はソファアに座る優人の隣に腰掛け、ほとんど一方的にととも美が話し優人が聞き手になる。

それでも会話は成立していて話もどんどん膨らむ。

近所の伯母さんの話が今や息子達の今後についての話に変わっている。

勿論、二人にとってはピロも息子の一人だ。

とも美は頬に手を添え、優人から少しだけ顔を逸らす。

「あたしは正軌とピロちゃん、二人で一人だと思ってるけど、もしもの時に正軌がピロちゃんに体を譲っちゃうような気がしてならないのよ。だって、あの子諦めが早いし友達を優先にするじゃない。別にそれが悪いとは思わないけど、私にはどちらか選べ何て出来ない……三人共可愛い優人さんとあたしの子供ですもの。」

「私も同じ考えだよ。」

しかし、今私達がああだこうだ口にしても、決めるのは正軌達だ。あの子達に任せよう。」

「……優人さん、もう！私を何回惚れさせるのよ！顔が熱いわ！！」

『キヤー！』と両手で顔を隠して盛り上がりとも美に優人は呆れ

る事は微塵もなく、顔の赤みを見られぬようフイツと逸らしてお茶を飲む。

すっかり温くなったお茶は一気に飲み干せた。

コトン、と静かに置いた湯呑みに意識が現実に戻った妻は台所に行こうと立ち上がろうとした。

が、優人がそれを止める。

細い手首を軽く引き、先程よりも空いた幅を狭め、肩に額を乗せる。

短い髪が頬に当たるがとも美は反対の手を口に当ててから優人の黒髪をゆっくり撫で下ろした。

身長差があるものの、こうしてると優人が一回り小さく感じる。

繋いだ手に指を絡ませ、ただ額を肩に押し付ける。

とも美からは表情は窺えないが何時もの無愛想な顔とは違い、母親に甘える子供のような心底落ち着いた穏やかな顔をしている。

とも美も知っているのか知らないのかはわからないが、優しく優人に向かって笑む。

優人の耳は椿のように赤くなっている。

子供達の前では見せない父と母の二人の空間。

黙って太ももに頭を乗せる最愛の人にとも美は小さくクスツと笑った。

今のとも美は普段より大人っぽく、美しく思えた。

彼女本人が気づいていないこのギャップ、優人が落ちた理由の一つに入っている。

優人は繋いだままの手に力を込め、消え入るような声で呟いた。

「こんな日も、良いな。」

「大丈夫よ。二人が結婚したら飽きるくらい二人きりになれるわ。」

「とも美さんに飽きる事はない。私の方が捨てられても、文句は言えない……」



「あら、そんな心配しているの？」

「してない。」

「じゃあ、ずっと心配しなくて良いわよ。私は一途だから♪」

「……知っている。」

優人は静かに瞳を閉じた。

子供がいないこの甘ったるい時間も、たまには必要。

恋人だった時のドキドキする気持ちも。

顔がほてるこの熱さも。

触れる指先でわかる相手の体温も。

小恥ずかしさに耐え切れなくなって笑み合う事も。

キスの代わりに、肩を寄せ合う時間さえも、この夫婦には充分過

ぎるほどの……

## 中編（修学旅行2）

無事俺達は集合場所の空港に着き、周りを警戒しながらも飛行機に入れた。

危機感から解放され、行きと同じ席でぐったりする。

窓側の由君は眠たそうに大きな欠伸を漏らす。

正軌の体も疲れが溜まってんのか瞼が重たくて堪らない。

口に手を当てて欠伸すると、隣のメシアが『大丈夫か？』と聞いてきたから手を振って答える。

『まだ油断できないけど、飛んだら寝る事にするわ。徹夜明けは正直キツイ。』

「悪い。自分が連れ回したからだ。」

「本当だし。黒澤のせいでクソ眠い……くあ。」

「お前は勝手に自分達にストーカーしたんだ。悪いのは由だ。」

「何だとクソ澤……!?!」

『はいはい、アナウンスがそろそろ飛ぶって言うてるからシートベルトしようね由君。』

立ち上がる由君を座らせて、メシアと睨み合ってるうちにシートベルトを締めてやる。

シートベルトされた事に驚いた由君はカッと顔を赤くし、ぼけっとしてる俺に殴り掛かろうとするが、

グラッ、ぽす。

「!?!?っ、な!?!」

『ごめん、そろそろ限界かも。少し寝るね。』

「ゆ、由の肩使うんじゃないやねえ!! 重いだろうが!! ミヤ!! 起きや

がれっ！」

『…スウ……スウ……』

「……ツチ、今回だけだかな。有り難く思いやがれ、バカミヤ。」

俺が本当に寝たのに気づくと、由君は振り上げた手を面倒臭そうに下ろし、腕組みをして外を眺めた。

俺は体を起こすのが怠いのと、由君に引っ付ける&耳が赤くなってるのをこっそり見える一石三鳥という理由で更に体重を預けた。

彼女は一度俺を見上げて、『ふん。』と鼻を鳴らしながらも俺にちよつとだけ体重をかけてきた。

それがもう可愛くて面白くて、何とも言い表せない気持ちになって、顔がニヤついてるのがバレたら怒られるだろーな、何て呑気な事を考えながら眠りに落ちた。

——所で、隣の独占欲が人一倍強いメシアさんが、今まで何にもしてこなかった理由はと言いますと、

「スー……スー……」

「……ん……」

「ありゃ、みんな寝ちゃった。ふふっ♪」

俺の背中に頭を乗せて気持ちよさそうに眠っていたからである。

由君もいつの間にか寝ていて、和葉は微笑ましい光景に小さく笑った。

そして、和葉自身も目を閉じたのだった。

♪♪♪…

『ん…電話。』

目を擦り、ポケットの携帯電話を取り出す。

画面で誰からか確認するが、見知らぬ電話番号からだった。

不審に思ったが、シートベルトを外し、眠る二人を起こさないようコッソリ出る。

和葉さんと目が合い、『電話してくるね』と行く方向を指差すと、微笑んで手を左右に振ってくれた。

♪♪♪ピ、

『もしもし?』

人数が少ないトイレの前まで移動し、やっと出る。

この時、俺は壁に向かって話していた。

後ろの通路から誰が来るのかわからない状態。

けど、飛行機の中だから安心だろう、と俺は不確かな理由で安堵していた。

何かあればトイレに逃げれば良い、とか考えて。

今は大丈夫だろう、と甘い考えで自分を落ち着かせて。

——そんなだから、俺は近くの危険に一切気づかない。  
俺は一言、メシアか由君のどちらかに行き先を伝えておけば良かった、と後悔する事になる。

「……。」

『?もしもし?』

相手から全く返事が返って来ないので少し声を大きくして再度問い掛ける。

俺が気づかない間に後ろで静かにトイレの扉が開いていた。

俺は中々返事が来ないのに寝起きだからか苛々してしまい、電話を切ろうとした時、やっと声がした。

「「マッキー?」」

『!?!?』

電話越しに聞こえる同じ声が真後ろから鼓膜を貫く。

ビクッ!と肩が大きく揺れ、首から垂れるチェーンが音を鳴らす。  
電話から聞こえた、此処にいるはずがない人の声。

その呼び方で俺を呼ぶ人間は一人しか思い浮かぶ事が出来ない。  
後ろの通路という逃げ場は今塞がれ、俺は鼠捕りに己からまんまと捕まりに行った馬鹿な鼠。

プツ。

「マッキー、やっと二人きりになれたね。」

向こうから電話を切られ、ギュッと誰かが抱き着いてきた。

もう逃げ道は残されていない。

突っ立ってないで、思い切って逃げれば望みはあったかもしれない。

い。

壁に向いてないでいたら危険に気づいたかもしれない。

見知らぬ電話番号に最初から出なければ、あのまま寝ていれば、後悔ばかりが頭に渦巻く。

今、後ろの青年を振り払って逃げ出せば良いのだが、生憎腹に注射針を当たるか当たらないかギリギリの所まで突き出されて動けない。

中には変な色の液体が入っている。

後ろの青年はクスクスと何が可笑しいのか心底楽しそうに笑う。

俺は携帯電話を閉じて腕を下ろす。

苦虫を噛み潰したような顔を浮かべ、

『広瀬：どうして此処にいる。』

「マッキーに会うために決まってんじゃん。

ねえ、マッキー。マッキーが大人しく従順に行動してくれたら、ずっと優しくする。マッキーの周りの奴らにも何にもしない。歯向かえば逆だけど。」

『?!』

「マッキー、お願い聞いてくれる?」

猫撫で声のように甘ったるい声で脅迫する広瀬。

『周りの奴ら』というワードに目を見開かせ、ついに追い込まれた。

ゲームのように隠し通路など見当たらない。

いや、逃げたら人質に被害が出る。

俺なんかのせいで今以上二人に迷惑をかけるのは、嫌だった。

俺の独断で三人を危険にする権利は無い。

拒む権利など、俺には最初から無かった。

『…言ってみろ。』

携帯電話を強く握りしめ、短く返す。

俺一人が我慢すれば、全て平和に解決する。

俺が黙っていれば、三人は楽しく過ごせる。

俺のせいで満喫出来なかった修学旅行を、北海道は良い思い出を残せる。

俺を差し出せば三人の有意義な時間と引き換えになるなら、安い取引だ。

広瀬は俺の言い方に不満そうに、

「何か言い方がなく。けど、マッキーならいつか。

マッキーこっち向いてしゃがんで！」

『…。』

何も言わずに振り返り、壁を背にズルズルとその場に座り込む。

目は合わせない。

それが唯一の反抗。

俺はピロのように強くないから、目を見たら気持ち揺らいでしまいそうだから。

広瀬は俺の前に膝立ちで首に腕を回す。

後頭部を撫で回されるが抵抗はしない。

成すがまま、されるがまま。

ただ呼吸を繰り返すだけ。

「いい子いい子。マッキーは物分かりが良くてだあい好き。ちょっと反抗するくらいが可愛い。

マッキーは？」

『嫌いじゃない。』

「じゃあ、好きでもないか。残念だなあ。」

俺から離れ、拗ねたように唇を尖らせる広瀬。

だが俺は無反応を貫く。

そんな俺に飽きるかと思ったがその逆で、嬉しそうに笑みを浮かべる。

唇を耳に近づける広瀬を若干拒んだが、理由を知ってか知らずか頭を固定して『大切な話だから逃げたらダメでしょ?』と優しく叱る。

耳にかかる息がくすぐったくて、背筋に気持ち悪いのがはしって、立ち上がって逃れたいが我慢する。

すると広瀬は子供を褒めるようにまた『いい子だね』と頬を撫でる。

「じゃあ、最初お願いね。」

新しいゲームを始める子供のように顔を綻ばせ、俺に告げた。

顔とは異なる内容に、落ちそうな眼鏡を押し上げて黙って受け入れた。

早く終わる事を願って。



席に戻るとメシアは既に起きていて、由君も眠たそうにボーっと雲を眺めている。

俺は何事もなかったかのように座席に座り、ボスツと背を預ける。すると、和葉さんと話していたメシアが話し掛けてきた。

「長かったな。とも美からか？」

『ああ。質問責めくらって長くなった。最後は親父と話して終わったけど。』

「そうか。」

『そうだ、メシア。』

調度良いと思い体を起こす。

目は若干下を見てメシアに喋る。

後ろで由君が盗み見ていた。

メシアは首を傾げて『どうした』と何時も通り真顔で聞き返す。

俺は口元を緩め、音を紡ぐ。

次の瞬間、メシアと由君の顔が驚愕に変わった。

二人の反応は想定内だったけど、心の中では必死に『深く聞かないでくれ、聞かないでくれ』とがむしゃらに祈るばかり。

現在、本音が顔書いてないかビクビクしてる。

頼むから、このまま何事も起きずに過ぎてくれ。

『俺さ、北海道は一人で行動したいから、メシアは由君と和葉さんと一緒に行動してくれ。突然いなくなっても心配するな。……唐突に言っでごめんな。』

## 中編（修学旅行2）

（正軌、おい、正軌。）

頭の中でピロが呼ぶ。

何回も何回も、返事をしない俺を呼び続ける。

頭痛がだんだん酷くなっていく。

けれど、俺は何も知らないフリを貫き通す。

席に戻ってからの俺はといえば、ずっと黙ってる二人に挟まれているから自然と俺も無言になる。

俺の言葉にメシアも由君も深く追求はせず、無意識にカタカタと服の上から握りしめていたネックレスに気づいて、俺から目を離れた。

それからこの状態が続いている。

何十回も呼んでもシカトされるのに痺れを切らしたのか、ピロは頭の中で怒鳴り付けた。

キン…、と耳鳴りがする。

（ああ良いよ！わーったよ！俺様無視するとか上等じゃん！！！！先に言っとくけどな、今の正軌の状態じゃ簡単に入れ代われるんだぜ。正軌引っ張り込んで、俺様が出て動かすのなんか楽勝なんだよ！！…それで、今から広瀬を撲殺しても俺様は構わない。んなもん、俺らが三人を守り通せば問題ねえんだよ！！！！馬鹿正軌い！！！！）

話を聞いていたからか、ピロの口調は荒い。

特に、由君が関わってるから尚更強く己の意志を告げる。

本気だって事は同じ体なんだから互いの気持ちを読み取れる。  
話さなくても、わかり合える。  
それが今は酷く辛かった。

『（…もし、三人共守ると決意しよう。）』

（やっと喋ったか。）

『（もし、俺達が見てない所で三人の身に何か起こったら？メシアは大丈夫だろうけど、由君と和葉さんは囲まれたらお終いだ。）』

（俺様が常に辺りを警戒して……あ。）

『（女子トイレや風呂場までもか？しかもピロが移動できる範囲は限られてんだぞ？）』

（……。）

『（それに、もし気づいたとしても、お前だけじゃ何も出来ない。）』

』

押し黙ったピロに正論を突き付ける。

確かに、ピロの熱意はわかる。

言いたい事も納得できる。

：俺だって、俺だって、俺だって、三人を守りながら一緒に楽しめる方が絶対良い。

学生として最後の修学旅行、みんなと思いい出を作りたい。

腹抱えるくらい大笑いしたいさ。

——けどさ、もしも料理に毒が入ってたらどうする？

俺達に毒を見分ける知識なんかないし、きっと知らずに食べる。

せっかくの食事を三人を巻き込んで、一々注意しながら食わないといけないのか？

そんなもん、全然楽しくない。

もし、俺らが眠っている間に由君か和葉さんに危険が及んだらど

うする？

ピロにだって休息は必要だし、四日間ずっと寝ずに過ごすのは不可能だ。

何時かは倒れて迷惑がかかる。

俺が絶対したくない事だ。

もし、メシアが刃物で襲われたらどうする？

メシアなら刃物を軽々避けるかもしれないが、もし不意打ちで致命傷を負えば…合わせる顔がない。

きっと一生メシアに悔やみ続ける。

それに、俺が庇ったとしても、今度はメシアが辛い気持ちになる。俺と同じ心境になって、もしかしたら最悪な最後になるかもしれない。

これも撰んではいけない。

もし、由君と和葉さんに一生消えない傷を作ってしまったら？

俺が巻き込んだせいで女性なのに傷物にしてしまって、俺は責任をとらなくてはならない。

きっと二人は泣いて俺を責めるだろうし、恨まれて二度と会えなくなる可能性もある。

俺なら問題ないが、三人が傷つく結末はダメだ。

特に女性は大切にしなければならぬ。

男として当然の事。

——ツンツン。

考え事をしついると、左隣の女性から肘で突かれた。

そこでパツと意識が戻り、『どうした？』と彼女に問い掛ける。

彼女は書くジェスチャーを含め、

「シャーペンと紙寄せ。」

とジト目で言われた。

この目つきをするって事は、何時にも増して不機嫌らしい。逆らわない方が身のためだ、と学習している。

従うのが吉。

：しかし、どうして由君は上からモノを言うのだろうか。

たまに友恵に似ているな、と感じる時があるが、本人達に言えば睨まれそうだから口には出さない。

『はいはい、ちょっと待ってね。』

小さく苦笑しながら立ち上がり、上に入れた鞆を漁る。

前の方の小さなポケットに入れたため、すぐに見つけ出せたそれを由君に渡す。

目線を空にメモ帳とペンを奪うように取り『どうも』と一言だけ。軽く文句でも言おうとしたが、喉の奥から別の言葉を出してしまいそうな気がして、口をつぐんで席につく。

メシアは和葉さんと喋っている。

飛行機の中はとても静かな時間が流れた。

数時間経った後、北海道到着。

学校が手配したバスに乗り込み、今回も一番後ろを四人が占領する。

だが、席が左から俺、由君、メシア、和葉さんとアメリカの時に端だった二人が並んで座っている。

しかも、メシアが隣に座らないのは珍しい。

バスの間も俺と由君は全く話さず、由君は時折歌のようなモノを口ずさむ。

書いて、歌い、また書いて、歌い、氣にくわなければ斜線で消し、それを繰り返す。

途切れ途切れの小さな囁り（サエズリ）を耳に、旅館に着くまで目を閉じた。

――空港から数十分ほど走った場所を経つ、和風の広い旅館。

旅館の前で点呼と先生の軽い説明を聞いて中に入る。

学校で吉田先生に教えられた部屋に大きな荷物を手に歩く。

先を歩いて先導する和葉さんが両手で荷物を持ち、フラフラと覚束ない足取りで歩く。

そのうちコケるんじゃないかと心配になった俺は、今まで由君の歩幅に合わせてたのを早め、和葉さんの荷物を反対の手で掬い上げる。

突然の事に目をパチパチさせて足を止めた和葉さんに、

『危なっかしいから部屋まで運ぶよ。どの部屋?』

「え、えっとね、楓の間だよ。」

正軌君、私の鞆重たいでしょ? 私なら大丈夫だから!

『もう目の前か。じゃあ、先に行くね。』

「ま、正軌君?! 待って待って!」

目と鼻の先にある部屋を見つけ、和葉さんの言葉を無視して早足で先を歩く。

慌てて追いかける和葉さんが荷物を奪い返そうと手を伸ばすが、ヒョイっと避ける。

つまり彼女だが、めげずに再度挑戦する。

だが、荷物を彼女が届かない所まで持ち上げ、それも躲す(カワス)。

何回も拒まれ膨れっ面になる可愛い和葉さんに小さく笑った。が、その時に担いでいた彼女の荷物を後ろから引っ張られる。思わず倒れそうになったので譲ってしまった。

振り向くとメシアが立っており、何時もの真顔で何時も通りの口調で喋る。

「正軌はあまり寝てないから体力が少ないだろう。自分が持つ。」

『…悪いなメシア。』

「メシア君、私持つよ?」

「和葉は先に部屋を開けておけ。鍵を持っているのは和葉だ。」

「…もう、わかったよ。」

二人共ありがとね。」

タタタツと短い距離を駆け足で行く和葉さん。

拗ねたような顔をして、最後は笑顔で終わるのは彼女らしいな、とぼんやり思っていると、ゲシツと足を蹴られた。



メシアは和葉さんの後を歩いている為、犯人は一人になる。  
隣に荷物を後ろ手に持つ由君が前を向いて、

「邪魔。」

とだけ口にして、さっさと歩いて行く。

丁度膝裏を爪先で蹴られたのでジンジン痛む。

…どうして今日是不機嫌なのだろうか？

俺が何かしただろうか？

飛行機の途中から機嫌が悪いが…原因がわからない。

寝てる間に何かしてしまっただろうか。

本人に聞かない限り疑問は深まるばかり。

考えてもどうしようもないので、俺も急いで部屋に向かった。

それからは運んでもらった晩御飯を食べ、班長、委員長の集まり  
に行き、戻って布団を敷き、俺達の組の時間になったのでメシアと  
一緒に浴場に向かう。

着替えを手にメシアを誘うと、彼は旅館に置いてある着物を見つ  
けたのか、デ○ズニー○ンドの時のような期待に満ちた瞳で俺を見  
た。

両手には流し着一式。

…何となく事態を察した。

外国人は日本の文化に興味がある人が多い。

アメリカ人のメシアも同等で、流し着に興味津々なのだろう。

内心、早く入りたい気持ちを抑えて、『仕方ないな』と諦める。

『風呂上がったら教えてやるから、取り合える下着とタオルとシャツを持って。』

「わかった。」

「あれえ？着物って下着必要だっけ？」

襖で仕切られた向こうの部屋から和葉さんが現れる。

もう既に着物を着ており、彼女も風呂に行くのかタオルを抱えている。

由君はテレビを見ていて顔が見えない。

机には貸したメモ帳とペンが置かれている。

……あれ？今、彼女は何て言った？

準備を終えたメシアが俺を見上げて『そうなのか？』と問い掛ける。

そんなわけない。

俺は全力で首を横に振った。

俺の常識には素肌に着物を着る、という常識は存在しない。

昔の人達も禪や下着代わりの物を着ていたはず。

彼女は何処で勘違いをしたのだろうか：先が不安になる。

一旦荷物を畳の上に置き、和葉さんを座らせる。

メシアには待ってもらい、繋がっている部屋に早足で踏み込む。

音楽番組をつまらなそうに見る由君にトントンと肩を叩いて振り向かせる。

目が合った瞬間ギロツと寝起きの彪のように鋭く睨まれたが、今はそれどころではない。

一刻も早く和葉さんの常識を変えねばならないのだ。

俺は恥ずかしい気持ちを我慢して、彼女に小さく耳打ちする。  
耳が熱いのは気のせいじゃない。

『……着物って普通下着着けるよね?』

「はぁ!? 何馬鹿な事吐かしてんだよ! 当たり前だボケ!」  
『だよね、普通そうだよね。』

由君の言葉に酷く安心した。

此処で『違う』と言われたら俺は野宿するかもしれない。

『それがさ、さっき和葉さんが言ってたんだけど……』

和葉さんの問題発言を由君に伝える。

すると、暫く固まった後、俺を取り敢えず部屋から追い出し、和葉さんを部屋に引きずり込み、ピシャン! と襖を閉めた。

「ど、どうしたの由ちゃん? 震えてるけど…お腹痛いの?」

状況を飲み込めていない和葉さんの言葉が襖越しに聞こえる。

俺は荷物を手に、待っていたメシアの背中を押して部屋を出る。

和葉さんの言葉から数秒後、旅館中に響き渡る由君の怒鳴り声が轟いた。

「こんの阿呆たれがああああああああああああああああ  
あああ——————————————————————  
つつつ!!!!!!」

「由は煩いな。」

『振り返るなメシア。』

振り向くメシアが部屋に戻らないよう、浴場までずっと背中を押  
し続けた。

∴由君、後は頼みます。

## 中編（修学旅行2）

部屋に戻ると二人はおらず、畳には泣いた跡が残されていた。きつと和葉さんのだろう。

由君に散々怒られて泣いてしまった姿がたやすく思い浮かぶ。

着替えを鞆に入れ、最後にタオルで髪を拭く。

俺はパジャマ代わりの私服だが、メシアは上機嫌で着物を身に纏っている。

「正軌は着ないのか？」

と風呂上がり聞かれたが、着替えながら、

『最終日にでも着る。』

と適当にあしらった。

本当は着物なんてどうでもいい。

メシアが覚えていたら着よう、とか簡単な気持ちでいた。

納得したのか、髪を拭き終えたメシアは俺に着物を渡す。

それから覚えている範囲で左右の上下を間違えないように着付けてやった。

他の男子が絶句するほどメシアは似合っていた。

緩く結んだ髪が更に色っぽさを増す。

初めて浴衣を着た子供のように裾を軽く引っ張って喜ぶメシアに生徒も客も半口を開けたまま見つめていた。

俺はそろそろ面倒な事になりそうなので、『ほら、行くぞ』と脱衣所を出た。

―で、今に至る。

窓を開けるとほてった肌には気持ち良い風が吹き、暫く窓辺に居座る。

森が道路を越えた向こう側にあり、たまに動物が顔を出す。

触りたい衝動にかられるが、目を合わせた途端回れ右をし、せこそこと逃げるので叶わない夢だ。

だから見るだけで我慢する。

…やっぱ動物は可愛いなあ、見てるだけで癒される。

アニマルセラピーとかいうのを聞いた事あるが本当だな。

動物を携帯電話のカメラと持参したカメラで撮り、充実した気分  
でいると、

ガタンッ！ザザッ、タッタッタッ・・・

旅館の角から大きな物音が聞こえた後、こちらに走って来る足音がする。

敷き詰められた砂利道を走ってる。

こんな時間だし動物だろうか…鹿か？狐か？まさかの熊？

窓閉めた方が良いよな、部屋に入られたら危ないし。

女性二人は何時の間にか戻っていてメシアと三人で喋っている。

明日のプランを見直しているようだ。

窓に手を掛けていると髪を下ろしている和葉さんと目が合い、優しく微笑まれたから俺もなるべく柔らかく返す。

早く窓を閉めようと再び森の方に顔を向けると、そこそこ明かりがあった場所が真っ暗になった。

何故か首が痛い。

ダダダッ、ガッ、ダンッ!!

「ラッキィー！ー！！！」

『んぶっ！！？』

「「「！！？」」」

ガンッ！

窓から何かが飛び込んだようだ。

女性特有の高い声で『ラッキィ』と叫んだ。

後ろに倒れたからか後頭部がズキズキする。

…前もこんな事があったな。

あの時は今より重い物がのしかかったから全身筋肉痛になって暫く大変だった。

似たような事を何回もされて耐性がついたからか、のんびりと『（眼鏡外してて良かったなー）』とか思っていた。

上に乗っかっている人間は同じ方向から響く違う足音を耳にし、急いで窓を閉めた。

そして長い黒髪をボサボサにさせたまま俺が寝る布団に潜り込んだ。

布団から手が伸び、見覚えのある眼鏡が畳に置かれる。

…このやろう、砂で足が汚れているのに、ぶつかったのに謝りもせずに、勝手に入るか。

必死にしがみついてる掛け布団、無理矢理剥がいてやろうか。

「おら、さっさと寝るぞ和葉。明日早出だっただろうが。くぁ…眠い。」

「そうだったね！メシア君と正軌君、明日六時半には起きてね。三人共おやすみなさい。」

『「おやすみ。」』

ピシャン！

閉められた襖。

残された俺とメシアと布団の奴。

窓の外は騒がしく、数人の男の焦った音が飛び交う。

「おい！見つかったか！？」

「まだだ！森の方には流石に行かないだろうから…やはり建物内か。」

「サンダルはあっちに脱ぎ捨ててあったし、何処かの部屋に逃げ込んだ可能性がある。」

「友恵さんを捕まえた奴には池尾さんイケオから報酬があるぞ！」

「捜し出せ！とぼっちり食らいたくなければ血眼になって捜せつ！」

「「「「おうっ！！」」」」」

ザザッ！ザッザッザッザッ…

革靴の音をたてて四方八方に散らばる男達。

カーテンの隙間から全員がいなくなったのを確認すると、窓に鍵をかけた。



はみ出る足の裏を横目に、部屋に置かれたポットでお湯を沸かす。メシアはというとコンセントがある隅っこで髪を乾かしている。ドライヤーは和葉さんのだ。

アメリカでは元々置いてあったので不便ではなかったが、日本の男性の脱衣所にドライヤーが置いてなかった。

俺が窓の外を眺めている間にでも借りたのだろう。

ぺったりしていた髪が、今じゃほとんど元に戻っている。

肩に掛けてあるタオルもついでに乾いている。

干さなくて良さそうだが、洗濯には出さないと。

俺は水で濡らしたタオルに沸いたお湯を少しずつ染み込ませ、適度な温度になったら窓を開けて絞る。

ピシヤンと閉めて、外から見えないようカーテンも。

バツとタオルを開き、汚れた足を拭いてやる。

所々切り傷や擦り傷が出来ており、部位にタオルが触れると布団の中から短いうめき声が聞こえる。

だが、止めると細菌が体内に入ってしまうかもしれない。

苦しむのは彼女も嫌だろう。

左足の汚れは拭えたが血が滲み出てしまっている。

痛々しいが救急箱が部屋にあるはずもなく、母さんが入れてくれた絆創膏の箱が二箱があるだけ。

何故二箱なのかはわからない。

多分母さんがメシア達の人数分考えて入れたんだろう。

そんなしょっちゅう怪我しないけどなあ…気持ちだけは貰っておく事にしよう。

……ん？一番奥に何か入ってる？

奥に入れたハンドタオル（夏なのにあまり使っていない）の下に青い箱ティッシュ二個くらいの大きさの長方形の袋。

取り出してみると見た目に反して重たく、中に色々入っているっぽい。

やけに鞆が重いと思ったら…これか。

母さんは心配性だな、嬉しいけど。

袋を開けてみると、手紙が入っていた。

乾かし終わったのかメシアが肩に顎を乗せて手紙を覗く。

真っ白な封筒の中を取り出し、四つ折の白い紙を開く。

ボールペンで書かれた達筆で、

「息子へ

最近お前は怪我が絶えないから入れておいた。

困ったら使いなさい。

追伸

土産話楽しみにしている。

父より」

二行の短い文章と茶矢と同じ要求の、形が無い土産物。

親父の遠回しの優しさとは違う温かさ。

二つ共同じくらい嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。

言葉に表すには俺はまだ未熟で、言いたいのに言えないもどかしい気持ち。

帰ったら『ただいま』って真っ先に二人に言おう、そう決めた。

袋の中身は災害用の医療袋に似たような物で、オマケにカンパンの缶詰とチャッカマン（火を着ける物）が入っていた。

山に行く時に旅行鞆は持って行かないのに、気づかなかったら使えないのに…親父もどこかぬけてるな。

親父らしくて、ちよつとだけ笑う。

俺につられたのかメシアも笑みを浮かべた。

「スウ……スウ……」

「クウ……クウ……」

足の応急処置を終え、いつの間にか眠っていた友恵にちゃんと布団を被せ、『一緒に寝るか?』と誘うメシアの頭を叩いて先に寝かせた。

グチグチ文句を言う事なく『おやすみ』と口にし、それに返すと、一分経ったくらいに寝息が聞こえた。

相変わらず寝付きは良い。

メシアも友恵も寝ていれば大人しくて可愛いもんだ。

寝顔も年相応にあどけなさが残る。

メシアの寝顔を見れば女性なら簡単にオチそうだな、とか思ってしまう。

素材は良いのに、俺に出会ったばかりに勘違いしてしまった残念な男。

早く俺達以上に大切に思える異性と出会ってほしい。

メシア以外の奴らにも、早く大切に思える人と寄り添い歩いてほ

しいものだ。

携帯電話の時計で時間を確認してから立ち上がる。  
01・20がディスプレイに表示されている。

ちらつと襖の方を見たが、起きてる気配はない。

時々和葉さんの声が聞こえるくらいで、由君ももう寝たようだ。

物音を起てないよう長年夜の散歩に出る為に鍛えた技術を使って  
部屋を後にする。

21時に一度吉田が部屋を見回りに来たので、もう来ないだろう。  
長い廊下にチェーンの音がやけに大きく響くので、早足で目的地  
に向かった。

重い足と急かす足、本当は皆と一緒に眠りたい。

「あ、マツキーやっと来たね。」

「こんばんは、宮古さん。」

玄関に置かれた椅子に暗闇でも映える銀色の髪が二人、俺を見つ  
けるなりスクツと立ち上がった。

広瀬との約束の時間五分钟前。

嫌々ながらに律儀に守る俺に内心苦笑。

広瀬が駆け足で近づいて手を引っ張る。

その顔は今から友達と遊びに行く子供のような無邪気なもの。

表面だけ見れば可愛い後半のように思えるが、中身は恐ろしい薬  
品使いだ。

瀬戸さんは何時もと変わりなく、先に旅館を出た。

広瀬と一緒に旅館を出て、目の前に停められた黒い車に乗り込む。  
乗る前に一呼吸置き、決して後ろは振り返らなかった。

『……行ってきます。』

## 中編（修学旅行2）

カランカラン。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております。」

レジでお客様に一礼して、完全にお客様が外に出てから頭を上げる。

外は雲一つない良い天気で、日差しがコンクリートや人間をまるで焼きつくすように強く照り付ける。

街を歩く人は少なく、殆どの人は帽子を被り、片手にあるハンカチやハンドタオルで汗を拭く。

一方、ボクがいる店内はクーラーが利いて、暑さとは無縁の場所。お客様も涼みに来ているのか男性の方も沢山いる。

殆どの人は常連さんで顔なじみも多くなった。

「窪田君、此处は足りてるから厨房手伝ってくれない？」

「は、はい。」

先輩の方に言われて慌てて厨房に向かう。

お客様が手を振るので小さく頭を下げる。

少しずつだけ人見知りも無くなってきて、やっぱりバイトして良かった。

バイトするきっかけは少しでもお母さんを助ける為でもあるけど、前に源希君が勧めてくれたおかげでもある。

源希君に感謝しないとなあ。

ふふっ。

「……？」

早足で歩いている途中、ふと頭の中で、修学旅行に行っている先輩達が気になった。

何故かはわからないけど、頭に引っ掛かる。  
不思議な感覚……何だろう？

「真尋くん、盛り付け手伝って！。」

「あ、今行きます……！」

オーナーさんに呼ばれて、深く考えるのは止めた。

今日は牧場で遊ぶ為に学年全員早起きして、早めの朝食を食べ、またバスで仮眠。

だが、俺は戻ってから一睡もせずにいる。

戻って時間を確認してからメシアを叩き起こし、由君達を起こそうと間の襖を開ければ、布団が入っている襖を蹴破りそうな和葉さんを急いで止めたりと忙しかった。

由君は自分の携帯電話のアラームで起きていて、ボー……と虚ろ





隣で動物達には聞かせられない会話をする二人に苦笑。

心の中で牧場の動物達に謝り、そろそろとクラスの奴らが起きだしたので、俺は隣で静かに眠る由君を起こす。

カーテンを開け、ユサユサと肩を揺らし、名前を呼ぶ。

『由君、由君。農場に着いたよ。そろそろ起きないと漢谷に髪染めされるよ。』

「……牧場じゃね？」

『…ごめん。』

ムクリと半目で俺の方を向いて一言。

確かに『農場』って口にした。

俺も寝ぼけてるらしい。

素直に謝るが、由君はどうでもいいの事なのか、大きな欠伸を漏らしながら関節を伸ばす。

今日は後ろの髪をヘアゴムで結んでいる。

先っぽが金の筆のようだ。

興味本意で触ったら顎をパコーンと殴られた。

舌を噛まなくて安心。

メシアが身を乗り出して由君につかみ掛かりそうなのを慣れた動作で止める。

後ろでツーンとしている由君。

彪は寝起きだからご機嫌斜めのご様子。

キキィィ…ガクン。

「前から、順に降りて、行けー。」

担任の合図でそろそろと動き出す生徒。

さっさと由君が降りてしまったので俺達も後を追う。

眩しい日差しの下に一步出ると一瞬クラッと目眩がしたが直ぐに治ったので、駆け足で三人の後を追った。

漢谷の長ったらしい説明&注意などを生徒の殆どは眠たそうに右から左へ話を流し、数十分くらい経ってやっと解放された。

座っていた体制から立ち上がると、またクラッとしたがまた直ぐに治まる。

頭に手を当て、短く呼吸を繰り返す。

…うん、大丈夫だ。

ただの寝不足だ。

朝食もそんなに食べなかったし、貧血もあるかもしれない。

そのくらいなら問題ないだろう。

時期に慣れる。

「おい、ノッポ。」

『…、あ、由君。』

「しゃきつとしやがれ。通行の邪魔だ。」

『ごめん、目眩がしただけ。』

手を下ろして先を歩く由君の後ろをついて行こうと一步踏み出す。

…が、何故か体が進行方向とは反対に傾く。

大人数の手が腕を捕らえている感触が右腕に。

「宮古！あんな子とよりも、あたし達と行こう！」

「レディース？だっけ。危ない奴！」

「宮古黒髪も似合うな！日本男子っぽい！」

「中馬優しくない。冷たくて危険。嫌な奴、あたし嫌い。」

周りには特別教室の生徒が達が俺を取り囲む。

中には見知った顔がいる。

日直の時に一緒に掃除した子だ。

その子是由君を睨みつけながら両手を俺の腕に絡ませる。

一方の由君はほとんど間で広がっている事に気づかず、片手で帽子を被り直しながら前へ行ってしまう。

声に出して名を呼べば良いのだが、喉が渴いて上手く声が出せない。

彼女が遠ざかる。

たった数メートルの距離が、何故か今は何キロメートルにも感じてしまった。

周りの声が遠退く。

―その時、

ポンポン。

「ちよいと皆はん、突然すんまへん。宮古はん、お借りしてもええですか？」

「「「？」」」」

後ろの男子の背中を数回叩いた後、下から聞き覚えのある声がした。

ゆったりとした独特の口調。

この口調の人物を俺は一人しか知らない。

しかし、特別教室の生徒達は周りをキョロキョロして、

「声がするのに誰もいない。」

「お前か？」

「違う違う。きっとコイツだよ。」

「違うよ。僕は下から聞こえたけど。」

「「下？」」

誰か一人が下を指差し、全員が下に顔を向ける。

俺も声がした方に動かす。

外国人には背が高すぎて会長が見えなかったようだ。

全員が気づいた時には腕組みして、仁王立ちで待っている姿が。笑顔なのか、怒ってるのかわからない表情。

一人が声をあげて言った。

「会長！会長だ！」

「キャー！会長可愛い！！」

「小さい！短いよ！宮古と頭一つ以上違う！」

「弘六！今度大会応援するねー！頑張って！」

「そらおおきに。」

さ、宮古はんこちらへ。」

『あ、ああ。』

後ろにいるはずの会長は何時からか横に立っていた。

スルリと会長に導かれるままに特別教室の生徒達の輪から抜け、

彼の後を歩く。

目的はわからないが、彼が危害を加えてきた事はないので疑心はない。

無言で歩を進めるのみ。

周りの好奇の目線は無視して、とにかく会長に従う。

何故二人で歩いているのか、理由なら俺が聞きたい。

誰か教えてくれ。

腕時計の時間を気にしていると、唐突に会長が止まった。

何かを見上げているので俺も真似る。

俺達の目の前には、一本の木が。

夏に相応しい生い茂る緑の葉を携え、堂々と立っている。眼鏡越しでもわかる生き生きとした緑色だ。

高さは俺の二倍くらい。

よく見ると、緑の中に灰色の物がぶら下がっている。  
ハットのようなのだ。

『あの帽子、会長のか？』

「そうなんです。自分、高所恐怖症やからあんな高い所無理やし、  
困ってはります。

さっき助けたりしましたし、取ってくださらへん？」

『最初からそう言えば良いのに。』

見上げながら会話をする。

俺はスウツと息を吸い込み、『（ピロ、ピロ）』と中の住民に呼  
びかけた。

すると数秒で返事が返ってくる。

（にゃ〜にかにゃ？）

ムカつく言葉が頭に響く。

ズキズキと最近感じなかった懐かしい頭痛がするが、会長がいる  
為、外見は自然に振る舞う。

ピロ、あの帽子取れるか？

（おちやのこさいさいだけどお。落とせば良い？）

ああ、頼む。

ピロに頼んでいる間に会長とどうやって取るか話し合う事で時間  
を稼ぐ。

俺が木によじ登り、ハットを落とすか、または木を揺らして落と

すか。

そうしている内に、タイミング良く風が吹いてハットが枝から落ちる。

アイツ上手いな、とか感心していると、俺が届く高さまで降りてきたのでパシッと片手で掴む。

会長の頭に帽子を被せて、

『悪いな。俺がやる前に風がやってくれた。』

頬を人差し指でポリポリ。

すまなそうに謝る。

またザアツと強い風が吹き荒れ、会長の帽子がまた飛ばないように手で抑える。

風が止み、俺は辺りを見渡し失くなった物がないか確認。

会長も首を左右に動かす。

「また、えらい強風が吹きましたなあ。自分も飛んでまいそうで恐いですわあ。」

『人はそう簡単に飛ばないさ。』

それじゃ、俺は行くな。飛ばないよう気をつけて。』

「ほんまおおきに、宮古はん。」

俺達はそこで別れた。

木陰から出ると、最初から立っているのに立ちくらみのようなモノが俺に襲いかかり、その場に立ち尽くす。

今回ののはさっきのより長引く。

が、パツと何事もなかったかのように治り、不思議な症状に首を傾げながらも、メシア達を探す事にした。

そんな正軌の後ろ姿を、弘六は狐のように細い瞳で一部始終を眺めていた。

そして意味深な笑みを浮かべ、帽子を軽く上げる。

「帽子ありがとさん。」

それから彼もまた、別の方向に歩を進めた。

弘六が数メートルほど歩くと、物影から複数の人物が現れ、彼の後ろに続く。

全員よく似た容姿をしている。

まるで鏡に映った虚像のように。

その中の一人が片手を顔の高さまで挙げ、怠そうに口を開いた。

「アイツ、もうすぐ倒れますよ。」

横目で正軌を見る、とうにか観察している。

そいつは話終えたのか手を下ろす。

すると入れ代わりに違う奴が同じ高さまで挙手し、

「多分、30分後です。」

「ふうん。自分には関係ありませんわ。」

「あんれえ？ 命の恩人じゃありませんでしたか？」

真面目な声に弘六が返すと、今度はふざけた声が馬鹿にしたように新たな質問をする。

前の二人と同じように片手を挙げて。

すると左にいた奴がそいつの頭を後ろからパコンと殴り、

「いて。」

「…。」

真顔の奴はただ歩きました。

叩かれた奴も手を下ろして、後ろ頭を自分で撫でながら歩きます。弘六は先程の質問はスルーして、どんどん人気の少ない方向へと向かって行きます。

不意に彼が聞きました。

「他の子らはどうしてはるん？」

「命令を実行してまーす。」

「呼びますか？」

伸びた声が片手を挙げて答えました。

続いて早口で喋る声が、怖ず怖ずと片手を挙げて質問します。

「ええわ。ほんなら、自分も旅館に帰りますわ。あゆがおらへんし。車手配してください。」

「わかりましたー！」

明るい声が答えた後、後ろの誰かが走り出す。

弘六はフウと小さく息を吐き、今度は駐車場に向けて歩き始めた。どうやらあゆを探していたようだが、この様子だと見当たらなかったようだ。



「主人。例の人物が倒れたようです。」  
「そりゃ大変やな。」

機械的な喋り方の奴が同じように片手を挙げて言った言葉に、全く大変そうじゃない風に一言だけ返した。

それから全員、無言で駐車場に向かった。

――

人氣が少ない建物の影に、黒髪の青年が倒れていた。  
長身で細身の体。

背中は汗で濡れている。

被っていたはずの帽子は倒れた拍子に外れてしまったようだ。

見覚えのある姿だと思えば、最近不運に見舞われる宮古 正軌であつた。

とうとう倒れてしまったらしい。

前のめりに倒れたからか俯せ状態で、顔だけ横に向いている。  
その目は閉じられており、薄く開いた口からは浅い呼吸が繰り返されている。

顔色が悪いが、どうやら生きているらしい。

しかし、誰かが見つけてくれないと、目覚めるまでずっとこのままだ。

彼が目覚める様子は今のところない。

さあ困った困った。

しかし、彼は運が良い。

丁度店から出て来た人物が彼を見つけた。

「…正軌？」

「は？宮古？」

帽子の鰐を持ち上げ、青年は気絶している人物の名を呼ぶ。

隣にいた前髪が黒、後ろ髪が金の女性が疑問形で彼の名字を口にした。

青年の片手にはソフトクリームが。

まださほど溶けていないを考えると、どうやら買ったばかりのようだ。

青年の薄黄色の瞳が次第にその人物を認識していくと、考えるよりも駆け出し、最初の声よりも大きな声で名前を呼んだ。

女性も倒れてる人物を見るなり、表情を一変させる。

「正軌！！？おい、しっかりしろ！！」

「宮古！！こんな所でどうした！？何があった！！宮古！！」

苦しそうに呻く正軌を起こし、メシアは肩をガクガク揺らす。

由も正軌の帽子をにぎりしめ、青年と同じように正軌の名を呼ぶ。

『んう…』

「「！！」」

声を限りに二人が呼び続けたのが良かったのか、正軌はうつすら目を開ける。

「どうやら気がついたみたいだ。」

呼吸も先程よりも普通に戻っている。

虚ろな瞳で二人の顔を交互に見上げる。

その様子にホッとする二人。

由は首に掛けたタオルの使っていない部分で汗を拭ってやる。

メシアが何時もの真顔で、なるべく優しく問い掛けた。

「正軌、無事で安心した。」

「一体何があった？」

『……正軌？』

「そーだぞ。いきなし消えたと思ったら倒れてやがるし、驚かせんな馬鹿野郎。」

『? ?』

頭上で説かれるように交わされる会話に、正軌は頭に?を沢山浮かべていた。

「どうやら記憶がないらしい。」

ムクリと起き上がり、服に葉っぱがついているのをそのままに立ち上がる。

それから数歩、覚束ない足取りで建物の影から出ると、キョロキョロと辺りを見渡す。

眼鏡を押し戻し、二人に振り返る。

「…正軌？」

ちよっとした違和感に気づいたメシアが彼の名を呼ぶ。  
由も真剣な表情で立ち上がった。

正軌の体は二人と距離を空け、胸に手をあてる。そして、ぎこちない笑みを浮かべてこう言った。

『君達が助けてくれたのか？どうもありがとうございます。』

申し訳ないんだが、此処は何処か教えてくれませんか？道に迷ったみたいで困り果ててまして。』

「っ?!」

「!!?」

二人は絶句した。

正軌と同じ声なのに正軌とは違う口調。

ピロのような明るい声ではなく、他人行儀のような話し方。

無理矢理作ったような笑顔を貼付けて喋る彼が、二人には別人に見えた。

正軌は苦笑はするが、こんな作った笑顔はしない。

教師にも今みたいな社交辞令の話し方はしない。

もっと堂々と自分が思った事を、彼なりの礼儀に従って話す。

明らかに違う人物だった。

だが、見た目と服装、鞆に靴に帽子。

全て見覚えのある物ばかり。

二人が最後の見た正軌も同じ格好だった。

固まる二人がわからないのか、正軌の体は首を傾げる。

『どうしたんだ？私の顔に何かついてるのかい？』

ぱっぱと手で汚れを払おうとするが、落ちるのは葉っぱと砂埃。

顔には何もついていない。

頬を手で撫で下ろしたり、髪形を気にする彼。

正軌はそこまで見た目を気にしない。

最低限の身嗜みが整っていれば、後は髪がボサボサにされようが、ダサい服を着ようが、本当は顔が汚れてようが構わない、そんな人。鏡も朝に一度くらいしか見ない。

容姿に無頓着とも言える。

そんな正軌の体が髪形を気にしている仕種は大変貴重。

二人は半口を開けて、静かに驚く。

まだ前髪を気にしている彼に、意を決してメシアが問い掛けた。

「貴方の名前は？」

『悪いが、初対面の人には名を伏せておく主義なんだ。それに、人の名を聞くよりも先に己の名を曝すのが筋じゃないかね？』

「悪かった。」

自分は黒澤 明詩阿。正軌と同じ高校三年生だ。」

『明詩阿：とても綺麗な名前だ。確か、ヘブライ語で“救世主”という意味だった気が。』

漢字はどう書くんだい？』

「“明” るい “詩” を “阿”、つまり親しい人に聞かせる。当て字だ。」

『そうか。その名を大切にすると良い。

して、そちらは？』

メシアから由へ顔を移動させる。

そこには腕組みした由が足を肩幅まで開き、彼を睨んでいた。

話を振られた彼女は、『はあゝ…』と呆れたように深く息を吐く。

由の反応に不思議そうな顔をしていると、彼女はビシッと人差し指を彼に向け、

「お前がさっき言った事、そのまま返してやる。人の聞く前に自分から言いやがれ。キザ野郎。」

『おっと、それは失礼。』

両手を小さい挙げて、降参という感じに顔を左右に振る。  
スッと顔を上げて、眼鏡を中指で持ち上げる。

それから溜めるように無音の時間が続き、メシアが地面に落としたソフトクリームはもう溶けきって、コーンもフニャフニャになってしまっている。

それに蟻がたかる。

メシアはそれを見つめていた。

正軌の体は二人からまた距離を置き、辺りを注意しながら名を言う。

『笹木 灯。灯と書いて“あかり”と読む。れっきとした男の名だよ。』

次は君の番だ。』

「…本気かよ。誰だよ灯って。女か。」

中馬だ。名前は自力で思い出しやがれ。」

ドンッ、灯と名乗る男とわざと肩でぶつかり、そのまま何処かに行ってしまった。

灯はぶつかった箇所を手で抑え、訝しげに離れて行く由を見遣る。メシアはそんな事をする正軌の体を見るのが嫌だった。

『何だあの子は。私とは初対面だというのに、名前を知るわけがない。』

「：正軌、目を覚ませ。」

俯きがちにメシアが灯に向けてハッキリと言った。

空気を握り潰すかのように拳を強く握り、腕を小刻みに震わせる。歯をギリッと噛み締め、地面に八つ当たりするかのように右足をダンッ！と踏み付けた。

ビクッ、と一瞬肩を跳ね上がらせたが、瞬時に真面目な顔をして、

『残念だが、さっきから黒澤君がいう“正軌”という人物と私は違う。』

場所を覚えてくれないようなので他をあたるよ。助けてくれた事は感謝する。』

淡々とそれだけ言い放つと、踵を返した。

灯は早足で取り敢えず標識を探す。

現在位置がわからねば、これからどうするか思案する事も出来ない。

頼れそうな物は消えた。

信じれる物は己のみ。

最悪な状況だ。

前髪をかき上げ、苛立ちと焦りに『チッ！』と強く舌打ちをする。

―グッ。

突然、後ろから誰かに右手を掴まれた。

驚きで目を見開かせる灯。

掴んだのはメシア。

必死に縋り付くかのように両手で彼の手に力を込める。

灯は誰が掴んだのか確認をする前に、

パアアアンツツ!!

『はあっ…はっ…はあっ…、あ…。』

「……。」

全身が拒絶した。

振り切るようにメシアの手を払い落とし、片手で反対の手を胸に押し付ける。

赤くなった顔が、肩が、体が、唇が、怒りと恐怖で震え上がる。ヨタヨタと後退りをし、肩で息を整える。

その時、瞳孔が開いた灯の瞳に…メシアの酷く傷ついた顔が映った。

混乱している彼には理由がさっぱりわからない。

マイナスの気持ちが高潮まで達した灯は、カッと更に顔を赤くさせ、怯えを隠すかのように叫び散らした。

『私の膚に触らないでくれ!! 最悪だ! 見ず知らずの奴が、気安く触れて良いわけがない!! 人の体温は気持ち悪い!! 吐き気がする!!』

二度とするな!! もう私の目の前に現れるな!! 消えろ!!』

ザリッ、ダッ!!

一方的に喚き散らすと、灯はメシアに背を向け、その場から逃げた。

奥歯を噛み締め、顎を引き、牧場の柵の向こう側の森に向かって走り込む。



体は寝不足と疲労で限界だったが、彼の意地が手伝って何とか走れている状態。

走る度にチャリチャリと金属音をたてるチェーンがうっとうしくて、灯は服の下からネックレス取り出し、おもむろに地面に投げ捨てた。

パキン、と何かが壊れた音がしたが彼には届かず。

チラツと灯が後ろを注意すると、彼を追いかけるメシアが視界に映る。

メシアの表情はまさに“狼”。

獲物を捕獲する時の鋭い顔つきに、猛スピードで追い掛ける脚力。徐々に差を縮めるメシアに動揺し、灯は柵を飛び越え、森の中を全速力で逃げた。

メシアも後に続き、柵は飛び越えずに走っている状態から柵を蹴り飛ばし、新たな道を作る。

破片がシュン！と数十メートル先の灯の耳を掠めた。

嫌な奴に出くわした、と後悔しながらも必死に逃走する。

木を上手く使い四方八方に逃げ回るが、メシアは怒っているのか黙々と早足で灯を追い詰め、面倒臭い時は最終的に木をへし折る。

二人の通った後には四、五本以上、太い幹から横倒しにされている木の残骸が。

そんなメシアに畏怖する気持ちが強まる灯。

尋常じゃないメシアの力に、逃げ回る事しか出来ない。

二人は森の奥に進んでいるとは気づかず、鬼ごっこのような追いかっこを続けるのだった。

二人が入った森の正式な入口。

その入口の右側に、赤や黄色といった危険を表す色で、「この森  
くま出没！奥に注意！！」と描かれた看板が立てられている。  
そんな事、無我夢中の二人が知るはずもない。

## 中編（修学旅行2）

：何か新しいのが増えた。

「あーあ。」

今日、新しい奴、灯って野郎が出て来て、宮古の体を勝手に使って、由達に、まるで初対面の人間にするように話しやがった。

違和感しかなかった。

由も、宮古じゃない別の人間のように感じてしまった。  
赤の他人のように。

ザッザッ・・

だいたい、宮古は隠し事が下手くそなくせに多過ぎる。  
由達が気づいていないと思ったら大間違いだ。  
：そういうや、あいつから相談してんの見た事ねえな。

ガッ！

昨夜は黒澤が勝手に徹夜しそうだったが、無理矢理にでも寝かせた。

二人共使い物にならなかつたら意味が無い。

ザリッ、

飛行機に乗っている時、宮古が席を外した間に目が覚めた由は、

黒澤をたたき起こして打ち合わせをした。

もし夜に宮古がいなくなったら、日別で帰りを待つ事。

何かあれば起こす事。

宮古に『何処に行っていた？』などと深く問い詰めない事。

あいつは絶対口が裂けても喋らないから。

わざと知らないフリを決め込む方があいつは注意しない、と考えて。

黒澤は難しい顔をしたが、やがて承諾した。

ヒュウウウウ……

じゃんけんで今日の当番は由になり、襖の向こう側で新しい曲の歌詞を考えながら、向こう側から少しでも音がするまで、無事に帰って来るまで、夜が明けてからも、一人で待っていた。

その間に何度か和葉に背中を蹴飛ばされた。

殴り返してやろうかと腕まくりをしたが……しかし、何となく、何となーく嫌な予感がするので止めた。

由の行動が正しかったかどうかは、違う選択肢を選んだ由に聞かないとわからない。

いや、わかりたいとさえ思わない。

ブルルル……メエー、メエー……

宮古が帰った時には本当に限界で、飛び掛かって顔面を殴りたい気持ちを抑えて、胸の内に溜めて、布団に潜った。

しかし一時間も眠れなく、八つ当たりでもしてやろうかと、起こしに来た宮古の顔を睨んだが……あいつの目の下の隈も、由並に酷かった。

……ああ、コイツも寝てないんだ。

けど、気丈に笑って、普段通りに振る舞ってやがるんだ。

コイツは本当に、勉強以外阿呆なんだ。

疲れてるのが丸わりの顔で、そんな痛々しい笑顔見せられたら……クソッ。

まだ源希の方が賢く思えるくらい、宮古は正真正銘の阿呆だ。

ムカつく、殴り掛かりたいくらい苛々してんのに、寝不足で頭痛すんのに、朝飯そんなに食ってないのに、全身けだるいのに、宮古の嘘を見なかったかのように、あいつの真似して、由は知らないフリをする。

「ちくしょう、」

コーヒー飲んだのに今も眠い、くそ眠い、眠さで倒れる。  
いつそ永眠してえ。

「ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう！！」

何で宮古は何にも言わないんだよ！

溜め込むからああいう変なのが現れんだよ！

あんなのはお前じゃないだろうが！！

ガシユガシユ！

多重人格障害者は強いショックから自分自身を守る為、他の人格が必要な時に自分の中で新たな人格が作られる。

所謂、一種の防衛本能だ、とミヤが言っていた。

『だから、俺は正軌を守る。そのために生まれた存在だから。』

そう言った彼は、強い決意を胸に秘め、ぶれる事がない信念を抱

いた、真剣な顔つきだった。

何時ものおちゃらけた軽いのは違う、彼の本性のような重く、どこか鋭い、ハッキリとした言葉。

ミヤに誰が何を言おうと、彼を全員で止めようとも、全身が傷だらけになろうとも、犠牲者が出ようとも、彼は迷わず意思を貫くだろう。

例え、由が血まみれになっても、無表情で目的を実行する。

そう考えると、何故か胸が痛んだ。

自分はそれだけの存在。

彼にとって由は友達でしかない。

由がいなくても、黒澤がいれば構わない。

由との時間は、あいつらより、黒澤よりも一番少ない。

…だから、嫌いだ。

「…ッグ、ふ…っあ…う…」

あいつは一番信頼されてる、

一番アイツと近い視線で同じ物を見られる、

誰よりも積極的に触れられる、

一番気持ちをぶつかり合ってる、

きっと思っていることを一番素直に言ってる、

アイツを一番に考えてる、

何時も一番にアイツを優先している、

一番アイツに優しくできる。

そんな奴と性別も、性格も、スピードも、中途半端な身長も、何もかも正反対の由には、あいつは嫉妬の対象でしかない。

だから張り合う。

負けたくないから。

売られた喧嘩は全て買う。

ナメられたままは気に食わないから。

目線が合えば睨みつける。

少しでもあいつへの視線をアイツから逸らす為に。

触ってれば邪魔をする。

アイツは口では嫌がってるけど、本心は嬉しそうだから。

だから注意を引く為に割り込む。

遊園地の時、何故か戻って来たあいつの理由を聞いて、無性に腹がたった。

しかも、目だけはちゃんとアイツを探しているから余計に。

更にあいつが嫌いになった。

由もあいつみたいに強くなれば、そう何度も恨んだ。

「…っ…」

何もかもは、アイツの視線の為。

アイツが由に気づくように。

アイツが初めて由の部屋に入った日のように、自然と肩が触れ合えるように。

素直じゃない自分の精一杯のアピール。

“伝われ！”と願うも、“気づくな”と思う相も変わらぬ捻くれた性格が主張する。

お前の事だから、本当は気づいてんだろ？

なら、早くお前の気持ち、教えてくれよ。

もう、同じ顔で、同じ声で、あんな事を言われたら、もう許容量オーバーだ。

「ミヤ…ミヤあ…ふあああんん…」

二人と別れてから、宛てもなく歩いていた。

そして、辿り着いた場所は、誰もいない小屋の日陰。

涼しいその場所にうずくまり、膝を抱え、まるで迷子の子供のよう  
に泣きじゃくる。

後ろでは馬や羊の声の大合唱。

雑音ばかりが辺りに響き、時折後ろの小屋が揺れる。

ポタポタとこぼれ落ちる涙を、君の名前を呼ぶように何度も何度も  
何度も手で拭うが、一向に止まない。

タオルで顔を覆うも、汗で湿ったタオルでは吸収力は当然悪い。  
臭いが顔につくのが嫌でタオルから顔を離すが、ぐちゃぐちゃで  
あろう顔を曝すのはもっと嫌で、誰も見てないのに両腕で隠した。

「ひっ…つう、ふ…うえ…」

口からは謔言さえも言わなくなり、今はただしゃっくりをあげる  
だけ。

胸が痛む。

心臓が弱い訳でもないのに、何故だかチクチクして、締め付けら  
れて、痛くて痛くて、どうにかかなりそうなくらい熱くて、バクバク  
と煩い。

座ってるのに、体育でマラソンした直後みたいに早い鼓動が、耳  
を占領する。

今、顔は真っ赤だろう。

だって耳が茹蛸のように熱いから。

クウウウ…



「：腹減った。ジンギスカン食いに行かねえと。」

腹が空けば自然と冷静になる。

スツと顔を下げた時には涙は止まっていて、その事に一瞬、大食漢の黒澤と同類のように思えて自己嫌悪し、数分だけ腹の虫を無視して空を見上げた。

何も面白くない空に一分足らずで飽き、そういえば黒澤達を置いて行った事を思い出し、飯の事を教えてやろうとケータイを取り出す。

「やさしー由様。」

棒読みで言ってみた。

が、数秒後には後悔した。

：今のちよっとピロっぽかったか？  
恥ずいな。

差恥が込み上げる。

これは一人の時しか出来ないわー。

ある意味ピロを凄いと思う。

由はもうしない。

きつとしない。

トゥルルルル：

コール音が鳴る間、相手を待つ。

実は黒澤に電話をするのは初めてだったりする。

ほとんど連絡を取り合う事がないから、初体験に若干緊張。

和葉は何かとメールをしてくる。

宮古は、メールもあまりしないし、内容も短い文面しかない。

そういう由も長文は苦手なので人の事は言えない。

「…出ない。」

カシャン。

ケータイをポケットにしまう。

黒澤が出ないから宮古に連絡を入れた。

だが、ケータイから聞こえたのは同じ『只今電源を切っているか、電波の届かない所にいます』だった。

この由が珍しく良心で教えてやろうと思ったのに、音信不通。

この事に額に怒りマークが浮き出そうだが、何とか深呼吸して気を静める。

一人で無駄に怒っても体力を消耗するだけだ。

タンツ、と両足だけで立ち上がり、鞆を肩にかけ直す。

日陰にいたからか汗はあまり流れていない。

後ろはさつきよりも静かになっていた。

うんと遠い青空に日焼け止めを塗った手を伸ばし、

「もう知らね。あいつらは餓死すりゃ良いんだ。」

唇を尖らせ、ツンと青空から顔を背けた。

そして、その場を後にする。

腹の虫が、グルオオアアと珍しい音を鳴らし、そろそろ本当に限界だ、と訴える為、早足で集合場所に向かった。

「……早く来い、がり勉。」

背筋を伸ばして歩く彼女が、名前のわからないモノの答えに気づ

くのに、後何秒？

私は今何処にいるのだろうか？

木陰に隠れ息を忍ばせ、奴に気づかれないよう神経を研ぎ澄ませる。

あいつを一応撒いたが、それはあいつが躰いた一瞬を使って離れた木の後ろに隠れただけで、見つかるのは時間の問題だ。

所々かすり傷をつけてしまったが、眠気が強く痛みを感じない。全身が怠い。

頭痛が激しい。

もう立ち上がれないかもしれない。

：いや、帰るんだ。

会社の仕事が残っている。

まだ新入社員の指導もあるんだ。

私がやらなくては。

重い足に鞭を打ち、肩掛け鞆を持ち直す。

先程鞆の中を確認して見つけた小型ナイフをポケットにしまい、周りを注意する。

目の前が霞んで、眼鏡を持ち上げても大差ない。  
疲労が限界まで溜まっているのか。

向こう側に黒い物体が動いているが、遠目から見ても大きい。  
こちらに近づいているようだが、ん？

黒い物体を目をこらして凝視していると、体が宙に浮いた。  
持ち上げられているらしく、肩に担がれている。

担いでいる物を確認すると、見覚えのある髪の色が見えた。  
走っているらしく、淡い緑色の髪が揺れ動く。

顔を先程の黒い物体に向けると、黒い物体は猛スピードで追いかけていた。

眼鏡が落ちそうになるのを手で抑え、イマイチ状況が掴めていない私は黒澤君に問い掛ける。

私の問い掛けに彼は淡々とした口調で答えた。

『何故担いでいる。』

「今のお前では直ぐに襲われる。」

『年上には敬語を使いなさい。』

では、あの黒い物体は何だ？ 視界が霞んでよく見えない。』

「Bear. (熊。)」

『は？』

阿呆みたいな声が出た。

予想外の返答に思考がついていけない。

そんな私を余所に、黒澤君は時々時間稼ぎに木を蹴り折り熊の行く手を阻む。

熊は躲したり、立ち止まったり、猛スピードで摺り抜けたりと、  
厳しい自然の中で生き抜いている証を示すかのように黒澤君が倒す  
障害物を避ける。

どんどん差は詰められていて、私が担がれているのが理由の一つ

だが、この状況で降ろされてもお互い困る。

その間に人間の私達は襲われて、良くて重傷、最悪死亡だ。私もそう安々死にたくはない。

森を抜ける手前、熊がだんだん近づいているのをどうしたものかと考えて、ふと、腰にある物を思い出す。

外せば死亡確定だが、当たれば逃げられるかもしれない。

黒澤君も先程より大分息が荒くなってきた。

しかし、木を手でへし折る力はあるようだ。

：よし、一か八か、賭けてみよう。

腰から引き抜き、彼の目の前にその物を見せる。

『黒澤君、ターゲットに一発で当てられるか？』

「立ち止まれば死ぬぞ。」

『脳を破損されて生きている動物は少ないさ。私が投げられれば良いのだが、生憎君のように力は強くない。一か八かだ。』

「：お前が危険に曝される。」

『今も充分危険な状況さ。』

皮肉を交えて彼に交渉する。

そうこうしている間にも熊は目と鼻の先に来ていて、もし彼が背中をやられたら二人共死ぬだろう。

だから早くしてほしい。

会社に仕事を残してきたのだ。

私がいなくなれば社員達が、会社が困る。

多大な損害が発生する。

それは私のプライドが許さないし、全ての仕事を終え、退職してから最低八十歳まで生きてから死ぬ。

理想は老衰だな。

この目標を叶える為にも、彼に手伝ってもらわなければ。

黒澤君は私が気づかない間に森の入口まで着いていた。  
入口で彼は一旦私を地面に降ろし、その手に二、三個石を掴む。  
そして私の方を見ずに言い放った。

「自分は、今、疲れている。万が一の時に、備えて、下がっている。」

肩で呼吸をする黒澤君の足は何キロメートルも走った為、限界なのか小刻みに震えている。

私は彼の言う通り、邪魔にならないよう後ろに退いた。  
立ち上がれないので座ったまま距離を置く。

「投げるぞ。」

彼が投げる体勢をとる。

熊のスピードも落ちない。

彼が手を振りかざした。

野球に興味が無い為スピードはわからないが、一般人の私よりかは早いと思う。

ヒュンツ、ブシュツ。

鋭い石は熊の前足を貫通し、熊は激痛にその場に疼くまり、喉仏が見えそうなほど叫ぶ。

黒澤君はもう一度投げた。

それは耳をえぐり、欠けた耳が頭にぶら下がる。

熊はまた一回り大きな声で絶叫した。

遠くて私には見えないが、音や声からして痛そうだ。

それから熊は回れ右をし、右足を引きずりながら退散する。

だんだん熊が遠ざかるのが私にもわかる。

…私達は助かった。

彼に感謝の言葉を掛けようと顔を上げると、

ビクッ、

『!?!』

突然、何もしていないのに、体が強く跳ね上がれる。

サッ、と視界が真っ暗になった。

何も見えなくなる。

私は抵抗する隙さえ与えられず、何物かに意識だけを引っ張られるように、現実から離れた。

『…っ、あ。』

「正軌？」

ストン、と膝を着くメシア。

足が限界を越えたのだろう。

だが、痙攣する足を引きずりながらも正軌の元に近づくメシアの執着心は凄い。

胸を抑え、虚ろな瞳を浮かべていた正軌の顔は、視界にメシアが入った事でハッキリしたものに変わる。

心配そうに顔を覗き込むメシアに、正軌はキョトンとした表情をする。

変化に気づいたメシアが手に触れると、そっと握り返し、

『メシア、どうした？こんなに汗をかいて、何かあったのか？怪我したのか？立てるか？』

皴が寄っている眉を下げ、不安げに問い掛ける。

灯の時は拒絶し、激怒した事が、今、目の前にいる同じ体の人間はこの行動を嫌がるどころか心配している。

鞆から取り出した真新しいタオルでメシアの汗を拭き、水を勧めたりする。

だが、メシアが何も答えないので戸惑いを隠せない。

これ以上何をすれば良いのかわからず、正軌はただ労る言葉をかけ続ける。

お互い熱いと感じているが、手を離す事はない。

メシアはその手をコツンと額に当て、何時も通りの口調で喋った。

「正軌、腹がへった。正軌、走りすぎて疲れた。もう歩けない。」  
『ハハッ、お前は肉食漢だしな。人の倍以上食べないと持たないだろう。朝食は足りなかった、ってばやいてたし。  
ほら、肩貸してやるから立て。今何時かわからないが、昼飯食べに行くぞ。』



「ああ…。」

苦笑混じりに話し、メシアの髪を撫で下ろす。

その優しい手つきに、声に、何よりも『正軌』と呼んだのを否定しなかった事が、メシアは一番嬉しかった。

「お帰り、正軌。」

正軌が気づかないよう、閉じた瞳から静かに涙を流した。

## 中編（修学旅行2）

俺達はあの後、メシアに肩を貸しながら昼食場所に向かい、教師にこっぴどく説教をされた。

席に座ると由君に横腹を肘打ちされ、凄い剣幕で怒鳴られる。

俺達が来るまでお預けだったらしい。

メシアは和葉さんの隣で由君に怒ろうとしたが、何時も通り俺が宥め、肉食が睨み合いながらの食事開始。

他の班の奴らが食べ終わる頃に食べ始める。

由君とメシアは子供のように肉の取り合いを始め、和葉さんはケラケラと楽しそうに笑う。

吉田は部屋の隅で胃痛と戦っている。

騒ぐ二人を止める気にもなれず、何事もなかったかのように誰も手をつけない野菜を黙々と口に運ぶ。

ピロが肉を食うよう促すが、二枚食ったから充分だ。あまり食欲が湧かない。

…というより、“空白の時間”が気になって食事に集中できない。

会長と別れた後、休憩するための日陰を求めて歩き、着いた途端

限界を迎え、倒れた。

そこまでの記憶はある。

そのまま少女やサラがいる空想世界に落ちるのかと思っていたが、目を開けた先は全く知らない場所だった。

俺の下に在るそこは、一つの会社の一つの階を切り取ったような世界。

律儀に非常階段まである。

だが、その世界の周りは何も無く、黒ばかり。

オフィスの窓から見える景色はやはり無い。

広さは少女達がいるのよりは小さく、一般の会社の広さと同等だ  
と思う。

ドラマで見るような机に、パソコンや書類、固定電話とか、コピー機なんかも揃っていて、触ると本物そっくりだった。

椅子にもちゃんと座れて、扉を開けると廊下があり、違う部屋が存在する。

無人だが、それがいつそう広さを強調している。

試しに近くの部屋を探索しようとした。

宙に浮かんで中に入っても良いが、現実と同じように入りたかった。

しかし、ドアノブに途端、ゾクッ！と何かが背筋を走った。

俺が困惑している刹那、ガクン！と景色が一変。

目の前には見知らぬ景色。

体がやけに重く感じ、特に足が鉛のように重い。

気候は蒸し暑く、額から頬にむけてダラダラと汗が流れている。

Tシャツがぐっしょりだ。

空想世界で感じなかった感覚全てがドッと体にのしかかった気分。  
突然の事にわけがわからず混乱している俺の視界に、足を引きずりながら俺の様子を伺うメシアが映った。

疲れきった表情に、また俺が知らない間に何か起こったのだと直感した。

話し掛ける言葉の裏でメシアに謝りながら、彼を気遣う。

そうするしか、償う方法が見当たらなかった。

無反応だった彼が初めてとった行動が、一番驚いた。

微かに震えた手で、珍しく不安や怯えを含ませた表情で俺の手を握ったのだ。

俺は病室での彼を思い出し、あの時のように崩れないよう即座に握り返していた。

それに酷く安心する彼に、手に擦り寄り静かに泣く彼に、ボロボロの体の彼に、俺は顔を歪ませた。

俯く彼に俺の表情は悟られない。

それが有り難かった。

：俺っているだけで迷惑かけるんだな。

メシアに、由君に、和葉さんに、教師に。

それなら部屋で何もせずによーっとしてる方が良いな。

（おいおい、正軌ちゅわあん？今逃げたらあ、俺様にもー、その嫌いなメーワクがかかるんだぜえ？）

わかっている。

“条件”の一つでもあるし、交代する気はさらさらない。後、ピロリ菌のくせにウザイ。

源希と良い勝負だ。

（アッハー☆源希と同じレベルってのは複雑ー☆☆）

なら、黙ってろ。

頭に響く。

頗る気分が悪い。

帰路を走るバスに揺られ、隣で俺の肩を枕にして眠るメシアをそのままに俺も目を閉じる。

寝るわけではない。

目を閉じるだけでも体は休まるから、少しでも体力回復する為だ。右側の女性二人はお喋りに花を咲かせており、着いたら教えてくれるだろう。

行方不明になったネックレスと、空白の時間を考えるのは、部屋に戻ってからしよう。

最近色々ありすぎて、頭が追いつかない。

俺はフゥと溜息を零した。

「あ、お帰りなさい。お邪魔してまーす。」

「皆月、お前どうやって入った？」

「窓からですけど。鍵かかっているのに扉から入れるはずないじゃないですか。」

部屋に入ると、皆月が我が物顔で寝転がっており、今日は昨日の着流しとは違い私服だ。

ポリポリとスナック菓子を食べながら雑誌を読んでいる。

由君の質問に馬鹿にしたように言い返す皆月に、額の血管が浮き出そうな彼女を宥めて部屋に入れる。

晩御飯までは時間があり、この時間は自由時間。

旅館の外に出てはいけないが、旅館の土産物を見たり、卓球したりなど思い思いに過ごせる。

俺は忘れない内に四人に背を向けて、ノートに今日あった事を書き綴り、そのノートを見つからないよう旅行鞆の奥にしまう。

その時、ポケットの携帯電話が震えた。

ディスプレイを確認すれば、予想通りの人物からで、思わず顔が強張る。

『トイレに行ってくる。』

「んー。」

「はーい。」

「ごゆっくりー。」

「…。」

座布団を枕にしてまだ眠るメシア以外に声をかけられ、俺は早足

で廊下を歩いた。

ピッ。

通話ボタンを押し、携帯電話を耳に当てる。

遅くなってしまったかもしれない。

呼吸が微かに乱れる。

『もしもし?』

歩きながら話し掛ける。

トイレの前まで着いた。

良かった、人はいない。

安堵した表情を浮かべるのもつかの間、

トンッ、

と背中を誰かが抱き着いた。

その感触を覚えた体が、振り向かなくても頭が教える。

ピッ、と通話が一方的に切られ、背中にいた人物が俺の手を引き、一番奥の個室に入れられる。

ガチャンと鍵を閉められ、暑さとは別の汗が全身を流れる。

後ろの人物はフフツと何が可笑しいのか愉快そうに笑い、蓋を閉じた便器の上に俺を座らせる。

そしてやっと対面した。

「マツキー、これ、なーんだ?」

チャリ、

広瀬が俺の前に垂らしたのは、捜し求めていたあのネックレス。口は笑みを浮かべているが、目が笑っていない。

俺を脅す時の瞳。

鼻先まで突き付けたネックレス越しに広瀬の顔が近づく。

俺は眉を下げ、声を振り絞り、

『ごめん、なさい。』

と素直に謝罪した。

顎を引き、乾いた唇をキュッと引き締める。

視線が泳いで、まともに広瀬を見てられない。

だが、広瀬はそのネックレスを俺の首に掛け、汗でベタベタの頬に触れた。

そして上にのしかかるように体を被せ、顎を掴んで顔を固定させる。

「素直な子は好きだよ。だからマッキー大好き。」

『……』

「けど、お仕置きね。」

ズプッ、

『……!!?』

広瀬と至近距離で見つめ合っていたかと思えば、突如太股に激痛が走る。

喉を引き攣らせ、声にならない悲鳴をあげていると、中の液体が入ってくる感覚がした。

ズルッと広瀬は太い注射針を引き抜き、鋏でジーンパンを切り抜く。



穴か空いた場所は血で滲み、そこだけ丸くジーンパンを切り取られた。

体がビク、ビクンと痙攣している間に処置をする広瀬の表情は嬉しそうだ。

広瀬は処置で出たゴミを適当に床に捨て、俺と向き直る。

まだジンジンと痛む箇所が、だんだん痺れてきた。

力が入らず、片足だけで落ちないよう堪える俺を満足そうに見上げ、注射の時に使うような絆創膏の上から傷口を撫でる。

先程までのピリピリとした痛みが、今は全く感じない。

左足が、やけに重い。

麻痺の注射をされたのか。

他が動くという事は、部分麻酔とかそういうのか。

厄介なのをされてしまった。

「フッフ。まだ修学旅行中だから、一時間の軟禁で許してあげる。

優しいでしょ？」

『…ツフ…ハァ…』

「あー、疲労の体にはキツイかあ。でも大丈夫だよ。たったの一時間だから。」

『…ツク、…広瀬…』

「なあに？」

傷口を爪で弄りながら吞気に話す広瀬に俺はなす術がない。

痛みこそ感じないが、あんなに弄り続けていれば戻った時に激痛が襲うのは確か。

それでも、便器から落ちないように必死に両手右足で持ちこたえるのがやっと。

広瀬がもたれ掛かるからその分も俺が支えなくてはならない。

膝が笑う俺を横目に、広瀬は猫撫で声で質問をした。

「マツキーさ、どうしてコレを外したの？」

『わ…か、ない。』

「兄貴も何度も言ったよねえ？絶対外さないでって。」

『ごめ、んなさ…。』

「もしかしてさあ、外した記憶ないんじゃない？」

『……。』

「中馬 由にあんな事言って、毛嫌いし、黒澤 明詩阿の手を振り払って激怒して、コレを地面に投げ捨ててまで黒澤 明詩阿から逃げてたんだよ？マツキーの体が。」

『！？』

グラッ、

「おっと。」

広瀬の衝撃の言葉に、力んでいた足が崩れた。

しかめていた顔が驚き一色だけになり、抱き止められた体は人形のように広瀬に全身を預けている。

耳元で広瀬の声が頭を反響する。

全く記憶のない時間の出来事を、広瀬の残酷な現実が植え付けられる。

後ろ頭を撫でられながら、子供に優しく教えるように、俺がしてきた数々の、大切な人達にしてしまった罪を、一つずつ広瀬は語る。信じられない事実には、受け入れたくない真実に、己が犯してしまった本当に、耳を塞ぎたくなった。

けれども、体はピクリとも動かず、ただ込み上げる吐き気を我慢するしかなかった。

― 嗚呼、優しい彼らに俺は何をしているんだろう。  
もういっその事、誰かのせいにしてしまいたい。

弱い俺以外の、誰かのせいに・・・

コンコン。

「正軌、大丈夫か？」

二時間が経過したトイレの一番奥の個室。  
その扉の前で、メシアが声をかけていた。  
心配になった由がメシアをたたき起こし、様子を見に行かせたのだ。

中からは何の反応もなく、メシアは嫌な予感がした。  
この個室しか鍵はかかっておらず、正軌がいる事は明白なのだが、  
中で何かが起こっているのかもしれない。  
メシアは慌てた。

「正軌！何かあったのか！？早く開けろ！正軌！！」

ガチャ。

「！？正軌！」

そこには、無表情の正軌が立っていた。

真新しい包帯を太股に巻かれ、あのネックレスがかけている。その事にメシアは何があったのか感づいたが、正軌がペコリとメシアに向かって頭を下げたのに固まっていた。

正軌は顔を上げ、乾いた唇で淡々と話し始めた。

『すみません。長い間利用していて。もう出ますからお次どうぞ。』  
「は？」

間の抜けたような声がメシアの口から出た。

さっさとメシアの横を通り抜けようとする正軌の体を、メシアは慌てて引き止める。

正軌の体はキョトンとした表情で振り返る。

それにメシアは困惑した。

しかし、一瞬で正軌の表情は不機嫌になり、メシアの手を反対の手で殴った。

「!？」

『ウゼェよお前!“俺達”の手に触んな!!』

「…俺達？」

殴られた手の甲は赤くなり、けれども手放さなかったのは流石と言えよう。

正軌の体はメシアから逃れるよう手を引っ張るが、メシアに敵う筈はなく苛々ゲージを秒単位で貯める。

だが、また一瞬で先程の無表情に戻り抵抗を止め、

『やめなさい。初対面の人間に暴力を振るって何の利益があるので  
すか。』

すみません。“彼”の代わりに謝ります。』

「いや、気にしてない。彼とは？」

『彼は彼です。』

『んな事お前に説明する義理はねえよ!! さっさと離しやがれ!!』  
『今のが彼です。』

ころころと表情と口調を変えて喋る正軌の体に、メシアは混乱する。

頭上に？を沢山浮かべ、目の前で繰り広げられる一人漫才をしているような親友を手を握ったまま傍観するしかない。

温度差がある彼らの話し合いはメシアを抜きで進められる。

一人は怒りを露にした顔で怒鳴り声で喋り、最初に会った一人は常は無表を貫き、淡々とした口調で冷静に対応している。

後者はメシアに似ている。

メシア本人は気づいていないが。

けれど前者はフリーに似ているな、とか薄ぼんやりと考えるメシアであった。

今までかやの外状態だったメシアに気づいた一人が手首を持ち上げた。

『すみません。熱いのでそろそろ離して頂けませんか？』

「わかった。けど、その前に名前を聞いても良いか？自分は黒澤明詩阿だ。」

腕で汗を拭い眼鏡を押し戻す正軌の顔を覗き込み自己紹介するメシア。

今日で二回目、しかも同じ人物にだ。

普通ならうっとうしい、面倒臭いと思うだろう。

短気な人なら尚更。

メシアの問い掛けに正軌の体は暫く顔を見合わせるように表情を変えて横目で互いを見、フリーに似ている方が睨んで言った。

『俺達に名前なんかねえよ。生まれたばっかだし。』

「:Baby(赤ちゃん)なのか？」

『そうではありません。創られてから時間がまだ短いという意味です。』

首を左右に振ってメシアに似ている方が補足する。

まだよくわからないが、何となく理解したメシアは手を離れた。ベタベタして気持ち悪いのか、汗ばんだ手を正軌の体はトイレの手荒い場所で汗を流す。

メシアも隣で手を洗った。

無言の二人(三人)にジャアアという水の音だけが流れる。

メシアはちらつと正軌の顔を盗み見ると、視線を太股に移した。包帯の上から若干血が滲んでいる。

見るからに痛々しい。

けれども本人は気にした様子もなく、後ろのポケットに入っていたハンカチを取り出し水を拭う。

差し出されたハンカチを戸惑いながらも受け取り、キョロキョロと辺りを確認している正軌の体に傷の事を質問しようと顔を上げた時、

「あ！正軌君とメシア君発見！」

のんびりとした声が入口の方からした。

男子トイレなのにも関わらず、笑顔でタタッと駆け寄る女の子はこの人くらいだろう。

もし他の人がいたらどうするんだ、と正軌だったら真っ青な顔で

注意するだろうが、本人がいなければ意味はない。

えへへ、とかくれんぼで誰かを見つけた鬼のように嬉しがる和葉に、メシアはどうしようかと頭を悩ませた。

ピロには由と源希と家族以外には知らせていないと言われているし、他言無用と約束されているし、けれども傷の経緯は気になるし、普段気を遣う事がないから余計悩むメシアであった。

そんなメシアを余所に、正軌の体が動き出す。

そっと和葉の手を壊れ物のように取り、ニコリと笑みを向ける。

和葉もよくわからないが笑顔で返す。

暫く見つめ合う二人に漸く気づいたメシアが目にしたのは、正軌では考えられない状況だった。

正軌の体は目を軽く閉じ、ゆっくりとした動作で、和葉の手の甲に

チュツ。

と触れるだけのキスをした。

手慣れた感じなのは見間違いではないだろう。

顔を真っ赤に染める和葉を前に、正軌はニコリと微笑む。

『可愛い人。その小さな唇で貴女の名前を覚えてくれないですか？』

「へ？え、と：浅倉 和葉、だよ？」

『和葉：綺麗な名前だ。貴女によく似合っている。』

「え、えー？正軌君どうしたの？冗談はやめてよ。恥ずかしいなあ、もう。」

アワアワと照れながら苦笑いをする。

言われ慣れてないから、余計恥ずかしいのだ。

あの時に部屋で正軌に『可愛い』と言われた時も、今と同じくら

い耳まで赤い熱を持たせたくらいだ。

弥生に言われるのと異性に言われるのでは、色々と違うのだらう。

ましてや、正軌にコンプレックスを褒められるなら尚更。

現に、長い前髪を押さえて見えにくい顔を必死に隠そうとしている。

自分の顔が、そこまで嫌いなのだ。

しかし、そんな事を知らない正軌の体は、不思議そうな顔をする。強く押さえ付けている手を優しく掴み、離させた。

驚いて俯かせていた顔を上げた和葉の前髪を指先で緩く挟み、持ち上げる。

露になった顔を前に首を傾げ、

『何故、そう悲観するのですか？和葉さんは充分可愛らしいお顔を持っていていらっしゃるのに。何もされていないところがまた、貴女の純粋さを際立たせている。』

自信を持って堂々として下さい。私が貴女の事を見ていますか、ら。

『「ちょっと来い。」』

延々と褒めちぎっていた正軌の首にメシアの腕が回され、口説くのを強制終了させられる。

ズルズルとトイレの外まで引きずられる正軌の体を、頭を浮かせながら見送る和葉。

トイレの入口でフツと表情が変わり、手で謝るジェスチャーをする。

先程の口説いた時の丁寧で臭いのは違う、ぶっきらぼうで飾らない喋り方で、



『嬢ちゃん悪かったな。コイツのストライクゾーンに入った奴はしつこく口説かれるから。無かった事にしてくれ。』

まあでも、あんたはきつと良い女だぜ。それだけは同意する。』

「あ、ありがとう…。」

『また会いましょう。』

『お前は帰れ。』

「和葉は先に部屋に戻ってくれ。後で戻る。」

「うん、わかった！」

小さく手を振る正軌の体に振り返す。

パタン。

閉められた扉。

その扉の前に、和葉は床に膝を着かないよう取っ手にしがみついて震えに堪える。

差恥からか、嬉しさからか、よくわからない感情が頭を駆け巡る。

熱い呼吸を繰り返し、涙目でトイレを後にする。

壁に手をつきながらフラフラと部屋に向かう。

ほてった体を冷まそうと、手で顔を扇ぐが効果はない。

ハンカチで扇ぐと微妙に風がきた。

だが、微力の風と比べて熱の方が高く、涼しくならない。

そうしているうちに部屋の前に辿り着いた。

取っ手を掴む。

が、回さず、扉にもたれ掛かった。

コツンと冷たい扉に額を当て、小さく呟く。

「もう、心臓止まるかと思っちゃったよ。正軌君の、バカ。」

唇を尖らせむくれる和葉。

あの子の為にしまっておこうと決めていた気持ちだが、大きく揺らいでしまった。

## 中編（修学旅行2）

ズルズルと正軌の体が引きずられ着いた場所は、人気の少ない駐車場。

教師がいらないのを見計らい、素早く正軌の体を引きずるメシアの表情は始終不機嫌。

もしも教師が外を確認に来た時にすぐ見つからないよう、車の影に隠れる。

夕刻に近づきアスファルトも熱を引き、そこまで暑くない。

北海道という事もあって、昼間と比べ涼しい風が吹いている。

二人で膝を抱えるようにしゃがみ、大きな体を小さく隠す。

向かい合う形で見つめ合う男子達。

数少ない人通りも奇妙な二人組に不審がるが、メシアが人通りの方に顔を向けていた為、誰しも深入りはせずにメシアを直視したまま通り過ぎるだけですんだ。

不機嫌なオーラを放出させるメシアを前に、正軌は夢見心地に空を見上げる。

うっとりとした表情で、

『和葉さん：あの子は本当にタイプです。黒澤君、和葉さんについて詳しく教えてくれませんか？』

「その前に、お前の名前を決める。それからこれからについて教える。」

『あ、それなら先程決めましたよ。』

「自分が此処まで連れて来るまでにか。早いな。」

パッと無表情に変えて頭を切り換える。

頬杖をついていたメシアは予想外の事に微かに驚き、話を聞こう

と正軌に近づく。

冷静な方が確認するように怒りっぽい方に呟く。

それからぶつぶつと独り言を呟いた後、最後に頷いて顔を上げる。  
人差し指で無表情の顔を指し、

『私が水。水と書いて“すい”です。』

『俺が炎。炎と書いて“えん”。性格に似た漢字を探して付けてみた。』

「なるほど。よく合っている。」

『ありがとうございます。』

小さく頭を下げ、礼を述べる。

炎は何も言わなかった。

先程から主に水が出ている。

和葉を口説いた時から炎は二度しか出ていない。

そうメシアが問い掛ければ、『彼は元々あまり話さないんです。』  
と返ってきた。

喋りたい時に喋り、出たい時に出て、殆どは“中の世界”で寝転がっているらしい。

逆に水は外向的で、外に興味があり、常にターゲット（可愛い子）を探している、と本人が言う。

そんな二人の共通点は、女性には優しく男性はどうでもいいと思っ  
てるところらしい。

水が言うには、自分よりかなり小さい女の子が好きだそうだ。

可愛くて控えめだったら尚良い。

そういう面で、和葉はドストライクのようなだ。

己のストライクゾーンを無表情のまま力説する水は正直不気味だ。  
それに正軌の体で、口で、メシアの好きな低く落ち着いた声で話  
されるのだから、和葉に対してヤキモチをしてしまいそうになるメ

シア。

唇を尖らせ水から目を逸らす。

だが、水は聞いてないとわかっていても気にせず語り続ける。

『くくく。どうしました？』

もはや独り言になっている水の口が一旦止まる。

炎に何かを言われたようだ。

ブッスーと遂にふて腐れたメシアは正軌に見向きもしない。

暫く水が炎と会話していると、

ビクッ。

一瞬、強く体が跳ね上がる。

メシアは気づいていない。

正軌の体はスッと目を閉じ、また開いた時には纏う雰囲気が変わった。

視界に映る人物の名を呼ぶ。

『メシア。』

「!？」

バツ！と勢いよく声のした方に顔を向けるメシア。

そこには、弱々しい笑顔を浮かべる正軌の顔。

ピロかもしれない、けれどそれは耳が否定する。

これは正軌本人のものだ、メシアは確信した。

“黒澤君”ではなく“メシア”と呼ばれた事が、彼を酷く喜ばせた。

しかし、その表情の真意がわからない。

正軌は前髪をクシヤリと握り、表情が見えにくくなった。微かに見える口元は強がるように笑みを張り付けている。

『“灯の時”はごめんな。後で由君にも謝る。傷つけてばかりでごめん。本当にごめん…』

「正軌が謝る必要はない。自分は傷ついていない。由もそうだ。だから正軌が気に病む事は」

『あのな、メシア。お前に頼みがある。』

必死に正軌の考えを訂正するメシアの言葉を手を突き付けて遮る正軌。

メシアの彼を氣遣う優しい嘘が、正軌に決意を固めさせた。前々から考えていた、けれど本当はしたくなかった約束。強めに言い放った言葉に、微かに震えが混じっていた。

メシアは嫌な予感がして、突き出したままの手に触れた。強く握りしめた為に固く、解くのが難しい拳に。

だが、正軌はその拳をゆっくりと広げ、やんわりとメシアの手を彼の膝の上に戻した。

その行為の一部始終を、メシアは顔を動かして見ていた。離れた手が自らの体を強く強く抱きしめる。

まるで、これから受ける痛みに堪えるかのように。

正軌はやっと顔を見せた。

その瞳に迷いは一切ない。

もう震えは止まっていた。

決意は、ある物を包み隠す。

簡単に出れないように、幾重にも箱を重ね、嚴重に。

正軌の薄く開いた唇が、冷たく告げた。

彼が自分を嫌うように。

『お前は俺を忘れて違う奴らとつるめ。俺は正直疲れた。謝るのもうんざりだ。俺と比べてお前は好かれる体質だから簡単だろう。話しかけた奴らの輪の中にでも入って話題に混じれ。』

俺は“中の奴ら”と上手く生きていく。だったら一人のが楽だ。お前らと絡む前に戻るだけだし、俺は元々単独行動を好む。それだけだ。』

「……本気で言っているのか？それは。」

『俺が嘘ついてるように見えるか？見えたら重症だ。眼科にでも行け。』

じゃあな。』

「正軌、どうしてだ？自分を気遣かってるならしなくて良い。止めてくれ。」

立ち上がり、その場からさっさと去ろうとする正軌に、今にも泣きそうな声でメシアは聞く。

メシアは下唇を噛み締め、じわりと血が滲む。

メシアの後ろで立ち止まった正軌は、振り向く事もせず、眉間に皺を寄せる。

深く刻まれた皺は、更に正軌の顔を恐くさせる。

近頃疲れていたが穏やかだった表情は、今や昔の彼のように苛立ちしかない。

怒気を含ませた口調でメシアに返した。

『お前に気を遣う必要は今の俺にはない。』

後、今後俺の名前を口にするな。必要があれば、違う奴らにでも聞け。もし呼んでも無視するからな。

お前もさっさと部屋に戻れ、黒澤 明詩阿。』

ドクンッ！

冷酷な拒絶の言葉の数々。

メシアが最も恐れた言葉を、正軌は軽々と口にする。

顔色一つ変えず、面倒臭そうにハァーと長い溜息を吐き出す。

数秒前の彼の言葉が理解出来ず、硬直したまま大粒の涙をボロボロと流すメシア。

頭を抱え、正軌の言葉を理解しようと口に出して考える。

正軌はメシアを放つという早足で旅館に戻った。

辺りが暗くなり、大好きな人に置いてかれ、一人残されても、メシアは繰り返す。

由が呼びに来た時も、虚ろな瞳で何処を見ているのかもわからない薄黄色の目を揺らせ、口を止める事はしない。

肩を掴んで強く揺すり、大声で呼びかけても、メシアは答えが見えている問題をまだ理解しない。

いや、理解できない。

それを受け入れてしまえば、彼はその先の自分を演じなくてはならないからだ。

つまりは、最愛の人をいないフリをして過ごさなくてはならない。触れず、話し掛けても無視をされる、違う奴らとたむろって彼を記憶から薄める、そんな地獄を。

だから彼は理解出来ずにいた。

「由。」

数十分後、メシアが止まった。

由は途中で彼を目覚めさせるのを諦めた。



彼が落ち着くまで、ただ立ち尽くした。

俯くメシアの下には小さな水溜まりが出来上がっている。

今も水は止む事を知らない。

由は黙って続きを待った。

メシアを腕をダランと垂らしたまま、奥はを噛み締める。

ギュッと心臓ある辺りの服を片手で握り、

「ここが、痛い。胸が、張り裂けそうなほど、痛い。全てが、恐い。大切な物が、なくなった。自分を拒絶した。何もわからない。何が間違ったのかわからない。自分は、何処を間違えた？何が、正軌を変えた？わからない…わからない…わからないんだ。」

「…由もわかんねえよ。」

「ウツ…ヒック、正軌…正軌い…」

地面に跪ずき、何度も何度も『正軌』と今いない人の名を呼ぶメシア。

由も夜空を見上げ、すれ違い様に『ごめん』と軽く頭を下げて謝った人物を思い浮かべる。

何に對してかはわからなかったが、今日の前にいる男を見て、理解した。

大きく舌打ちし、ガシガシと髪を掻きむしる。

この憤る気持ちを何処にも向けられぬ苛立ちに、無性に“彼”に会いたくなった。

叶わぬ願いを胸に秘める男女は、暫くの間、その場所で自分自身の弱さを憎んだ。

## 中編（修学旅行2）

『和葉さん、暫く俺とメシアは仲悪いけど気にしないでね。』

「喧嘩したの？」

『喧嘩、ではないかな。』

二人が帰って来ない部屋。

和葉と正軌は漆が塗られた旅館特有の大きい机を挟んで会話をする。

大きな胸を机の上に乗せて頬を両手で包みながら正軌の話を聞くる。  
和葉。

一方、正軌も頬杖をついて和葉と真っ正面から向き合う形をとる。机の上の料理に手をつけないのは彼らの性格からで、きつといない二人が現れるまで一口も手を出さないだろう。

友恵は正軌が戻る前に部屋に戻った、と由が正軌に教えた。

その由はきつとメシアと共にいるのだろう。

正軌は和葉の問い掛けに困った笑みを見せる。

和葉は首を傾げて続きを待った。

彼は言葉を探すように机に視線を落とし、少し体を起こして、今度は両手を絡める。

『俺はあいつに甘えてばかりで、迷惑かけて、心配かけて、気を遣わせてしまってる。由君と和葉さんにも。だから一番近いあいつと離れる事で、一旦リセットしたいんだ。』

「私達の関係を？」

『全てではないけれど。“俺の中”を詳しく知っている人と、かな？』

「性格が変わる事は関係してる？」

『……そうだね。その障害が一番関係している。』

ポンツ、と拳を軽く胸に当てる。

和葉は真剣な表情で、ではなく、普段誰かと話す時のように何気なく聞いた。

答えが返ってきても、彼女は大きく驚きもせず、気味悪がりもしない。

笑顔を向けるでもなく、ふざけるという事もしない。

何時もの彼女で話を聞いていた。

そんな彼女に正軌は嬉しくもあり、逆に彼女に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

自分の知らない所で彼女にまで迷惑をかけてしまっている。

灯の時だろうか、そんな事を無言のまま考える。

『ごめん』と口にしようとする前に、和葉が先に喋る。

照れ臭そうに彼女ははにかむ。

「さっきね、正軌君に手の甲にキスされて口説かれたんだ。私もうビックリだよ。でもね、正軌君と同じ事を正軌君が言ったんだけど、私は違う人のように聞こえちゃった。同じ事を言われてるのにね。恥ずかしかったけれど、嬉しいって気持ちがあの時より全然感じない。不思議な感覚だったなあ。」

思い返せば、今の正軌君っぽくない時は沢山あるね。私だってちゃんと見てるんだからね？」

人差し指をくるくる回して右の頬を膨らませる和葉。

怒ってはいないらしく、すぐに小さく笑ってみせた。

そんな彼女を前に、正軌は驚愕していた。

彼女が気づいていた事もそうだが、何より、自分が和葉を口説いたという事実が彼を驚かせた。

同時に、その時の自分を想像して顔が赤くなる。

口説かれた時の和葉のように。

眼鏡を外して腕で顔を隠す。

和葉も正軌の反応に、だんだん顔を真っ赤にさせる。

慌てて両手をばたつかせ正軌にさっきの発言を訂正しようとするが、上手い言葉が見つからない。

お互い耳まで熱で染まる。

沈黙をどうかしようと思えば彼女は必死に頭を巡らせるが、中々良いアイデアが浮かばない。

正軌はずっと黙っている。

視線が合えばお互いパツと逸らし、焦りすぎて正軌は壁に額を打った。

ビックリした和葉が傍に駆け寄るが、涙目になる正軌と視線が交わり、二人はボロボと顔から火を噴く。

付き合い初めの男女のような初々しい反応をする二人を茶矢が見れば、卒倒して暫く寝込むであろう。

上を向いて正軌の額を優しく撫でる和葉に、俯いてされるがままの正軌の間に流れる静寂。

赤くなった額をずっと和葉は撫で続ける。

『あのさ、和葉さん。』

「な、何かな？」

この空気に耐え切れなくなった正軌が話し掛けた。

和葉も吃り（ドモリ）ながら聞き返す。

先に喋ってもらえたのに少なからず安心している。

手を動かしたまま彼を覗き込む彼女に気まずそうに、恥ずかしい気持ちを我慢して、これからの為に勇気を出す。

見上げた彼に彼女は不思議そうに小さく頭を斜めに倒す。

『お、お俺が口説いた時、嫌だったでしょ？もうしないから、早く忘れて！手も後で石鹸で洗ってくれ！』

お詫びは出来る限りするから、荷物運びとかするから、本当………ごめんなさい………』

「え、えええええ！？ままだ正軌君落ち着いて？私不快に思っていないから！ビックリしたただけだから！お詫びなんてそんな……一緒にいるだけで充分だよ。」

『俺なんてつまらない人間だよ。面白い話一つ言えないし。』

「あー！自分自身を悲観するのは駄目だよ！正軌君よく言ってるじゃない！正軌君の傍にいと安心するんだから！みんなそう思ってるよ！少なくとも私はそう思ってる！」

『……あ、ありがとう。』

「ど、どういたしまして？」

『……プツ。変な会話だね。』

「フフツ♪そうだね。」

苦笑いしながら笑い合う二人。

褒められる事に慣れていない正軌は人差し指でポリポリと頬を搔く。

和葉は色々と問題発言をしたが、彼女は気づいていないようだ。

キョトンと気まずそうにする正軌に正座して見つめる。

正軌は胡座をかいて浅く深呼吸。

何となく和葉も深呼吸をした。

ジッと見つめ合う二人だが、特に話す事は決まっていなない。

内心どうすれば良いのか焦る正軌と和葉。

次は和葉が先に動いた。

ビシッと手を挙げて、普段より早口で話す。

「あのね、お詫びではないけれどお願いがあります！」

『ど、どうぞ。』

「さつき正軌君がメシア君と仲が悪い、って言ってたけど、私の前では何時も通りでいてね？ 弥生とも！

正軌君が相談したかったら気軽に！役に立てるかはわからないけど、頑張ります！」

『ありがとうございます。』

「いえいえ。」

何故か改まった言い方で話す理由は正軌自身わかっていない。

和葉も手を挙げたまま砕けた敬語で話すのは、きつと緊張しているから。

お互い何故か深く頭を下げてお礼を言ったり返したり。

本人達もよくわからない現状。

頭を上げ、顔を見合わせた時、今までの意味不明さに声をあげて笑った。

和葉は笑いすぎて目に涙をためている。

二人の楽しげな明るい笑い声は、メシアと由が戻るまで続いていた。

深夜。

襖で仕切られた男子達側の部屋に、今日は正軌がいた。

掛け布団を肩まで掛け、規則正しい呼吸を繰り返す。

メシアに背を向けた窓の方に体を向けているので、メシアに表情は見えない。

悪夢を見ているかもしれない、けれどもメシアは触れる事に躊躇っている。

人一人分空けた二人の間。

今まではほんの数ミリ程度まで布団を近づけていたが本人はいなかった。

だが、今日に限って目の前にいる人物が自ら布団を離れた。

それがメシアに深く心臓をえぐる。

メシアと由が部屋に戻った時、和葉とは仲よさ気に笑っていたというのに、自分には冷たい彼の気持ちかわからない。

困惑を隠せないが、彼の前では弱い部分を見せたくないメシア。

長い前髪で顔を隠して、悟られないようにした。

しかし、彼は見向きもしなくて、黙々と食事を進める。

女性二人は喋る声だけが部屋に絶え間無く続く。

和葉が正軌やメシアに話を振るが、短く答えるのみで、他は無言。正軌は全然話さなかった。

しかし、風呂の時間になった時に、

『お前も早く来いよ。』

と短く告げ、さっさと先に行ってしまった。

呼び止めようとしたメシアだが、何て呼べば良いのかわからず、その間に正軌はいなくなる。

風呂場では隣を使っても何も言わず、眼鏡がないので眉間に皺を寄せてシャンプーなどを確認する彼を手伝いたかったが、やはりどう呼べば良いのかわからずじまいでチャンスを逃す。

太股に絆創膏が貼ってあるが、内側に怪我しているから外からは見えない。

首にはあのネックレスが掛けられたままの状態。

風呂に浸かり、正軌とつかず離れずの距離で彼の名字を思い出そうとしていると、彼が先に上がってしまうのでメシアも慌てて後を追う。

けれどクラスメートが引き止め一瞬立ち止まってしまう。

正軌は浴場を後に脱衣所に行ってしまう。

今まで共に行動していたメシアは正軌の遠い背中に寂しさを覚えてしまう。

クラスメートに謝りながら、滑らないよう早足で、縫う思いで彼を追いかけた。

扉を開けると他の人達はメシアに注目するが一人、彼だけは着替え終え、黒髪をタオルで拭く為に頭を下に下げている。

正軌が先に行かないようメシアは手を伸ばす。

一度掴めばメシアが有利だ。

険しい顔つきで腕に向けて後僅かで指先が触れる。

―だが、その時に鋭い目がメシアを映した。

やっと正軌がメシアを見た。

それに目を見開かせて固まるメシア。

あまり時間は経っていないはずなのに、一週間ぶりのように感じた。

ヌツと今度は彼の手が伸びる。

メシアにはそれがスローモーションのように感じた。

次に、視界が真っ白になる。

頭に柔らかい物が被せられた。



ガシガシ。

『風邪ひくぞ。ちゃんと拭け。』

「……。」

ぶっきらぼうな言い方。

溜息をついて、正軌の大きい手がちよつと乱暴に淡い緑色の髪をタオルで拭く。

ポカンとした表情でメシアはされるがまま。

暫く頭の上で手が動いていると思ったら、ポンと軽く頭を押さえる感覚。

頭を上げた時には、もう彼はいなかった。

あの手は優しかった。

メシアには見えなかったけれど、あの時は何時もの、面倒見の良  
い彼だった。

今も確に残っている温かい手の感触。

布越しに触られた温もりが忘れられない。

月明かりがぼんやり辺りを照らす。

メシアは布団から起き上がり、正軌の後ろに座る。

そつと、黒い髪に触れる。

起こさないように。

気づかれないように。

まだ少し濡れている髪を、人差し指に絡める。

前からは寝息が聞こえる。

指先は髪から横にずらし、黒髪から下の首筋に移す。

女やホストが使う香水やアロマなどをつけていない、真っさらな

うなじ。

高校生にも関わらずワックスを使っていない、何もいじっていない痛んでいない髪。

くせ毛ではあるが、柔らかく指がするする通る。

前髪を耳に掛けるとニキビが一切ない肌、皺が寄った眉が印象を受ける顔が露になる。

無防備な寝顔。

最近濃くなった目の下の隈を親指でなぞる。

彼は全く起きる気配はない。

久しぶりにまともに眠るからか、熟睡していた。

その事に、メシアは安堵する。

体調もそうだが、近くにいてくれる、自分が守りやすい範囲内にいてくれる事が嬉しい。

嫌われていないとわかっていても、眠る人が目覚めたらきつと互いに辛い思いをするだろう。

ならばいっそ、このまま寝ていてくれないかとメシアは願う。

だが、そうすれば周りも自分もつまらなくなるのは目に見えているので、すぐに諦めた。

胡座をかいて彼を見下ろす。

正軌がメシアと距離を置いて違う奴らとつるめと言ったが、メシアには“つるめ”という言葉自体理解していない。

そもそも、“正軌が一人で行動する”“単独行動が好き”などなど、話の部分的なところだけ覚えて、全ては理解していない。

普段もそうやってわかった箇所を組み合わせて何となく言いたい事を理解する。

そうやって今まで会話をしていた。

これからもそうだろう。

きつと、日本にいる間はずっと。

日本語を全てを理解したいが、今は時間があまりない。だから、このままでも充分だと感じている。

―けれど、正軌の気持ちだけは全てわかっていたい、とメシアは強く思っている。

一度酷く傷つけてしまったからこそ、空回りやすれ違いをしないように、お互いがわかっていたい。

：なのに、メシアには正軌の考えが読めずにいる。

冷たいのか優しいのか、嫌っているのか逆なのか、全然わからない。

いや、元々彼は周りには優しい人間だから、しつこく付き纏うメシアに呆れてしぶしぶ相手をしているのかもしれない。

ならばそれはそれでメシアは嬉しいが、そのうち飽きられて見向きもされなくなるかもしれないという不安が込み上げる。

一人で知らない場所に消えてしまうかもしれない。

奪われてしまうかもしれない。

笑わなくなるかも、しれない。

グッ、と膝の上でメシアは拳を握りしめる。

苦々しい顔をして眠る人を見下ろす。

この手を引いて明るい道に導いてくれなくなるならもう、

「壊してしまおうか。」

どす黒い感情がドロドロとメシアの中で溢れる。

それはとても恐い物で、時々メシアにも手がつけられなくなるほど危険な物。

アメリカで喧嘩に明け暮れ、金をたかってきた奴らに逆に財布を奪い、酷い時には気絶するまで殴る蹴るを繰り返したほど。

メシアの力で。

殺しはしなかったが、致命傷を受けたり、骨が曲がったり、一生体に残る傷痕を相手は最低一つ、それを死ぬまで背負う。

泣いて許しを請いても、ボロボロの体で頭を地面に着けても、メシアは容赦なく痛めつける。

それでストレスは多少柔らかく事もあったが、逃げ惑う相手に苛立つ時には、捕まえて足首の骨を折り、サッカーボールにするように顔を蹴り飛ばして笑った。

メシアは、人を痛め付けるのに何の抵抗も持たなかった。全てを失い、伯父に出会うまでは。

今でも制御はしているが、時々本気である時の自分が出そうになる。

正軌が宥めるから一旦落ち着く。

彼は日本で初めて、傷つけたくないと思えた人物だから。

そんな彼の言葉でも抑え切れない時は、彼に甘えて忘れる事になっていた。

それが効率的だし、一石二鳥だから。

：しかし、その本人が対象となると、メシアは制御仕切れる自信がない。

心身共にぐちゃぐちゃにして、傷つけて、嫌がって、暴れて、憎まれて、嫌われる。

きっと一生許されないだろうし、きっと二度と会えなくなる。

最悪、彼なら死ぬかもしれない。

それだけはメシアは避けたい。

殺したいほど嫌いになっても良いから、

ずっと生きていてほしい。

そう切に願う。

実行する気は今のところないが、どうか死に急ぐのは勘弁してもらいたい。

そう考えてる自分に、メシアは失笑した。

もしかしたら、本当にしてしまうかもしれない。

そしたら三人、いや四人に殺されそうだな、とつまらない事を考

えて。

「茶矢に源希に由、とピロか。流石に死ぬな。ハッ。」

こてんと添い寝をするように正軌の後ろで寝そべる。  
口を獣のように吊り上げ、瞳に歪んだ色を宿す。

背後の怪しい気配を無意識に感じ取ったのか、正軌は掛け布団を肩まで持ち上げた。

その行動に起きてしまったのかと慌てて顔を確認するメシアだが、うなされている寝顔に安堵の溜息。

再びコテンと横になり、それから自分が眠るまで正軌の背中を上下に撫で続けた。

自分のドロドロした物を落ち着かせる為にも。

## 中編（修学旅行2）

今日は修学旅行最終日。

北海道で有名な○山動物園に来ている。

何時ものように旅館からバスで移動し、数時間かけて到着。

バスの下に旅行鞆が入っている。

このまま空港に行くそうだ。

漢谷が何やら注意事項を話しているが、ほとんど聞いていない。

昼までにはバスに戻らないとならないらしい。

毎度の如く班行動と言っているが、従う奴らは元々仲良しグループで作られた班くらいだろう。

「では、解散！！」

漢谷の言葉でぞろぞろと動き出す。

俺もさっさと中に入ろうとすれば、後ろから誰かが俺の腕に絡まる。

驚いて横を見下げれば、焦げ茶の髪の子が『えへへ♪』と照れ臭そうに笑っている。

珍しく今日はヘアピンで前髪を留めていて、表情が見えやすくなっている。

後ろの二人も俺と同じように呆然と彼女を見ていて、彼女は固まっている俺にほんのり頬を染めて話す。

「えっとね、せっかくの修学旅行だし、たまにはヘアピンで留めてみようかな、って思ったの！正軌君が褒めてくれたから、前髪どかしてみたの！…変？」

『そんな事ないよ。似合ってる。』

「本当？ えへへ♪」

不安な顔をする和葉さんに小さく笑って答える。

女の子らしいヘアピンをつけた彼女は可愛い。

お世辞でもなく、素直な感想だ。

指先でヘアピンに触れると、彼女は満面の笑みで更に腕に抱き着いた。

柔らかいものが当たるけれど、気にしないでおう。

邪心よどっか行け。

向こう側に去れ。

俺は健全でいるんだ。

しっしっ。

腕を組んだまま二人で歩いていると、前から弥生さんが現れた。

思わず立ち止まってしまった。

この状況を見られて弥生さんに睨まれる。

それか引き離される。

かと思ったが、弥生さんは和葉さんの前に立ち、首を傾げる。

和葉さんも鏡のように首を傾げる。

俺は向こうにいるサイを観て現実逃避。

弥生さんはチラッと俺を盗み見、また和葉さんに戻す。

「二人、恋人？」

『ブッ！』

「ちちちちち違うよお！！？ただ、ただ顔出すの久しぶりだから、恥ずかしくて、正軌君に引っ付いてるだけだよ！！」

「そうなの？なら、一緒、良い？」

「うん！大歓迎だよ！！ね？正軌君。」

『うん、構わないよ。というよりは、一緒にいてくれた方が誤解されないから正直助かる。』

「：腕組むの、迷惑かな？」

弥生さんの発言に吹いてしまい腕で口を隠している俺に、和葉さんが寂しそうに呟く。

そんな和葉さんに気づいた時には、弥生さんの顔に影が出来ていた。

怖くて顔向けできない。

黒いオーラを曝す弥生さんを視界に映さないように和葉さんを見下ろす。

しょんぼり眉を下げる彼女に苦笑するとますます落ち込んでしまった。

絡んでいた腕の力が弱まる。

彼女が更に小さくなったように感じた。

どんどん弥生さんのオーラが不穏になる。

誤解してしまっているようなので、俺は彼女の頭に手を置く。

『俺は嫌ではないよ。ただ、色々噂されるのは嫌でしょう？和葉さんは女性だから、特に傷付きやすいし。』

『そんな事気にしないよ！相手が正軌君だから平気だよ！』

『和葉さんは好きな人いないの？その人に勘違いされるかもしれないよ？』

『正軌君は好きだよ？』

『「「……………」」』

『「？」』

賑やかな動物園の中で、此処だけ静まり返る。

輪の中心にいる和葉さんはサラッと何か言った。

それを俺の頭は冷静に分析している。

弥生さんと少し離れた距離にいる由君とメシアもその場に立ち尽くしている。



和葉さんは俺達の反応で気づいたのか、真っ赤な顔で慌てて付け加える。

「弥生も由ちゃんもメシア君も茶矢ちゃん達も好きだよ！後、お菓子でしょ、家族でしょ、絵を描く事でしょ、動物でしょ、ハチミツ、いちごあめに、綿菓子に、」

『うん、わかってたよ。言葉が足りなかったただけだよ。』（嗚呼、心臓に悪い。）』

必死に好きな物を並べる和葉さんが暴走しないように甘い物が並べられた辺りで止める。

弥生さんも現実に戻ったのか俺の言葉に何度も頷く。

無駄に鼓動が早い胸を撫で下ろし、火照った顔を手で扇ぐ。

彼女はたまにとんでもない言動をする。

ハラハラドキドキして心臓に負担がかかるから、本気で止めてほしい。

気を紛らわす為に先に行く事を促すと、二人共同意する。

右から俺、和葉さん、弥生さんの順番で歩く。

真ん中の彼女は片腕を俺のに絡ませ、反対の手は弥生さんと繋いでいる。

凄く嬉しそうにしている彼女に、小さく微笑む。

問題発言や寝相の悪さを除けば、一緒にいるだけで癒される。

弥生さんもきつとそうなのだろう。

見たい動物を聞けば、暫く考えて弥生さんに聞いて、弥生さんが首を左右に振れば、彼女はまた悩む。

後ろの二人に聞こうと頭を向けるが、いなかった。

代わりに遠くで人だかりが出来ているが、綺麗な声で怒鳴っているのが聞こえるが、俺は先を促した。

あいつらなら自力で抜け出せるさ。

女性の闘争心の強さなんか知らない俺は呑気にそう考える。

特に見たい動物が決まらず、ぶらぶらと三人でうろつく。

人が少ない場所の動物を見たり、遠巻きに見たり、見えない和葉さんの為に近づいて持ち上げると、肩車した時の瑠璃みたいに目を輝かせた。

弥生さんと俺は高身長だからだいたい見える。

そんな事を繰り返していると、突然ポケットの携帯電話が震えた。途端に嫌な予感が胸を駆け巡る。

横にいる二人は周りが騒がしいからか携帯電話の音に気づかずに喋っている。

俺は和葉さんが絡む腕を軽く引き、彼女をこちらに向かせる。震える携帯電話を見せ、

『ちょっと電話してくる。二人は先に行つて。後で追いかけるから。』

「あ！正軌君！！」

二人が返事をする前に、俺は携帯電話を耳に当てて歩く。

画面の番号は知らない番号。

また携帯電話を変えたのだろう。

コールが終わる前が出る。

『もしもし。』

周りを見渡して人気の少ない所を探す。

有名な動物園だから歩いても歩いても見つからない。

人にぶつからないようけれど急ぎ足で、視力が殆どない両目を忙しく動かす。

帰ったら眼鏡に行かなくては。

度をきつくしなければ、遠くも見えなくなる。

実際、眼鏡をかけたままでも二、三メートル以上は顔とかがぼやけてしまっている。

電話の主は一向に喋らない。

ドン！

誰かとぶつかってしまった。

あの時みたいに眼鏡が落ちないよう手で押さえる。  
よろめきながら謝罪した。

ぶつかった時に俺より大きかった印象がある。

『すみません。』

「「いえ。」」

『…！？』

電話越しと目の前の人物との声が遅れて重なる。

顔を上げた先のその人は、珍しく私服姿。

何時もの執事姿ではなく、俺と似たような感じの服。  
それが一層彼の気弱そうな顔を引き立たせる。

電話の主は、通話を切った。

目の前の人も、ボタンを押した。

それをズボンのポケットに入れる。

ガシャン！

手から携帯電話が落ちた。

体が硬直したように感じた。

…何故、この人が？

昼間に現れるなんて、何かあったのか？

それか広瀬が怪我したとかで代わりに来たのか？

俺が気づかない間に何かしてしまったのか？

どうしよう。

何をしてしまったのかもわからない。

目の前の人が、落とした携帯電話を拾ってくれた。

それを手首を掴み、手の平に置く。

状況が読み込めていない俺は、上の空で『あ、りがとうございます。瀬戸さん』と囁みながら礼を述べる。

瀬戸さんは『いえ』と短く返し、チラッとネックレスを確認した。それに気づかずにポケットに携帯電話をしまい、視線を泳がせながら顔を上げる。

悪い事をして親に怒られる子供のように、押し黙る。

視線をアスファルトに向けていると、被っていた帽子を取られ、代わりに別の物が乗った。

乗せられた物は大きくて、ぽんぽんと二回叩いた。

それが離れ、真面目な口調で彼は言う。

「貴方は何もしていません。そう警戒なさらないで下さい。本日は昨日に広瀬がつけた足の怪我のお詫びと、怪我と体調の具合を確かめに私が参りました。

昨日は申し訳ありませんでした。広瀬にもきつく叱り付けましたので、許してやって下さい。」

『あ：俺は大丈夫です。頭上げて下さい。』  
「すみません。」

高身長 of 瀬戸さんが腰を折って頭を下げる姿は人目を引く。

立っているだけでも注目されるなら尚更。

傷は痛むが、そこまで酷くはない。

歩くのに支障もない。

慌てている俺とは対照的に、気品あるゆったりとした動作で動く瀬戸さんは顔だけでなく全体的に綺麗だ。

見惚れても仕方ない。

女性の多くは立ち止まったり頬を染めたりしている。

メシアと似たような反応だ。

近くにいた俺を嫉妬や羨ましがる視線を向けているのも伝わる。

瀬戸さんはスツと俺の少し後ろに回り、軽く背中を押す。

「近くに人払いをした場所があります。そこで怪我の具合を診させていただきます。」

『あの、昼までにはバスに戻らないといけないんですが…それまでに終わりますか？』

「はい、約束しましょう。」

後、これは破ってしまったジーンズの代わりの品です。もう履けないでしょうから。」

『わ、すみません。ありがとうございます。』

歩きながら紙袋を手渡される。

正直、変な部分を切り取られたズボンを母さんにどう言い訳しようか困っていた。

もう一足あれば何とかごまかせるだろう。

これで言い訳しないで済む。

ホッと胸を撫で下ろすのは本日二回目。

久しぶりに楽しみに紙袋の中身を確認して、止まった。

てっきり瀬戸さんが履いているようなズボンだと想像していたから。

けれど、中にはファッションに疎い俺でも知っている有名ブランドの刺繍がついてるジーンズ。

自覚した瞬間、喜んでいた顔がサッと真っ青になった感覚がした。

いや、実際そうなのだろう。

止まった俺の顔を覗き込む瀬戸さんに、紙袋を押し返した。  
首がちぎれるかもしれないくらい左右に振りまくる。

『こんな高価な物いただけません！お返しします！！』

「そんなたいした物ではありませんよ。貰い物ですが、履く機会がありませんので新品です。どうぞ受け取って下さい。」

『いやいやいや！俺もこんな高い物履く機会ありませんから！百均のジーンズで充分ですから！！誰か違う人にでもあげて下さい！！』  
「持って来たので貴方が貰って下さい。持って帰るのも面倒ですから。」

『残飯処理みたいに言わないで下さいよ！面倒って、たった紙袋一つです、うわ！！』

グイッ。

「失礼。」

「ツチ！！」

高級品を俺に押し付ける瀬戸さんに怒っていると、突然腕を引かれ、後ろで空を切る音と大きな舌打ち。

瀬戸さんに頭を抱き寄せられ、軽くつまづく。

片腕で誰かの腕を掴んでいて、けれど瀬戸さんの手が邪魔して誰だかわからない。

顔を下げずに彼は片手で器用に眼鏡を取った。

視界が何も見えなくなる。

後ろでメキメキと音がする。

小さなうめき声が耳を掠め、頭上で彼の声が降る。

後ろの人は何度か俺の足を蹴るが、痛いだけで誰かはわからない。  
振り返ればシルエットとかでだいたい予想つくのだが、今はでき

ない。

「残念でしたね。荒々しい女性は好かれませんよ。」

「うっせえ……!! 離しやがれ、泣き虫野郎があ!!」

「そちらから手を出しておいて、その言い草ですか。頭痛がします。」

「っぐ……畜生……。」

『その声、由君!? 瀬戸さん! 止めてください!! 俺との約束破るつもりですか!?!』

「貴方が狙われてしまったので。」

「そう言われてしまったら、逆らえませんか。」

瀬戸さんとの会話でやっと気づいた。

この口の悪さと耳に馴染んだ綺麗な声は、彼女しかない。  
足を蹴るのは彼女なりのサインだろう。

ギリギリと嫌な音が彼女のものだとわかれば、俺は焦る。

せっかく遠ざけて傷つけないようにしていたのに、これでは意味がない。

彼の服を掴んで無理矢理顔を上げて抗議すれば、嫌な音は止んだ。  
次に後ろでドシャア! と何かが倒れる。

彼の腕からしゃがんで頭を引き抜き、音がした方にしゃがみ込む。  
視界が悪いまま手探りで由君を探した。

彼女特有のシルエットが見つかり、肩に手を置く。

『由君! 大丈夫か!?!』

「……っ、ゲホ! こんの、バアカ! 野郎が! 敵にのこのこ、ついてく、阿呆がいる……かよ! ってか、“約束”とか、由は知らねえぞ……。」

『ごめんね、ごめん由君。俺がいなくなっても気にしないでって言ったのに、こうなるの嫌だから離れたのに……痛い思いさせて、ごめ

ん。』

「宮古さん、行きましょう。人が増えてきました。時間がなくなっ  
てしまいます。」

『…お昼までには戻るから。

今、行きます。』

「待て…宮古!!」

そつと由の頭を一度撫で下ろし、腕を掴んで引き止める彼女を目  
を閉じて優しく外した。

歯ぎしりの音を背に、瀬戸さんに背中を押されながら由君を後に  
した。

瀬戸さんが手に眼鏡を握らせたので、それを黙って掛けた。

俺達は黙って歩く。

動物達が騒がしく鳴いている。

人々の話し声がよく耳に入る。

日照りが強いが、そこまで気にならない。

風が心地良い。

黙々と歩いていて、手にある物に気づいた。

瀬戸さんの右手首を掴んでそれを掛ける。

ガサッ。

けれど、力を抜いた瀬戸さんの手首から紙袋が落ちた。

邪魔になる前に慌てて拾い、彼を軽く睨む。

素知らぬ顔でそっぽを向かれた。

カチンと頭にくる。

しかし、此处で怒ってもキリがない。



妥協したら更に問題が増える。

頭を抱えたくなった。

苛立ちを隠さずに彼に言葉を投げる。

『これは要りません。持って帰るなり誰かにあげるなりして下さいませんか？』

「だから、貴方にあげます。」

『だから受け取れません、って何回言わせるんですか！何だったら質屋にでも売って下さい！』

「宮古さんがなさって下さい。私はそこまでお金は必要ありませんので。」

『俺もそこまで必要ありませんよ！』

…あゝゝ！！話しに通じない！！

「わざとです。」

『わかってますよ！！』

髪の毛をガシガシ掻きむしる。

しれっと言う彼に思わず怒鳴ってしまった。

辺りがシィン、と静まり返る。

俺は気づいていない。

瀬戸さんが溜息をついて、紙袋と俺の腕を掴んだ。

「しょうがないですね。では、これは捨てておきます。」

『大切に保管して下さいよ！？貴方は何故そういう考えに至るんですか！？』

「少し静かにして下さい。周りが注目します。」  
『わっ！！』

グイ、と帽子の鍔を下げられ前が見えなくなる。

早足で進む彼に合わせて駆け足になる。

鍰を上げて、鞆が落ちないように掛け直す。

―で、時間が経って冷静になった頭が、瀬戸さんがする事を思い出す。

途端に顔が真っ青になったり真っ赤になったりして、手を引く彼を止める。

怪訝そうにして止まる瀬戸さんに、帽子の鍰で顔を隠し、しどろもどろ話す。

『あの、怪我の具合は診なくて結構です。酷くありませんし。』

「何を今更。ほら、後もうすぐですから。」

『いやいやいやいや。俺にもプライドがありますからね？流石に人前でズボンを脱ぐのは勘弁して下さい。』

「旅館で脱いでいたではありませんか。」

『でないと風呂に入れませんから。』

「ならば、問題ありません。」

『いやいや、それとこれとは話しは別です。後、紙袋は返します。』

「一緒ですよ。お気になさらず。私も気にしませんから。」

『脱ぐ人は俺ですからね？一番気にしますよ。』

それより、今サラッと紙袋の事スルーしましたね？』

「ほら、行きますよ。」

『嫌だ！今諦めると何かを失う気がする！俺はまだ失いたくない！』

「諦めましょう。もう場所は目と鼻の先です。」

『クソッ！俺は最後まで諦めない！離して下さい！』

「わかりました。」

『へ？』

パッ、ズシャ！

掴まれていた手首が解放され、腰を引いていた俺は尻餅をつく。

手にかすり傷がついた。

痛む腰をさすっていると、フワッと俺の体が宙に浮いた。  
本当にフワツと。

何故か異様に顔が近い気がする。

：てか、この格好は、まさか?!

気づいた時には瀬戸さんは歩き始めていた。

言葉を出す前に彼の顔を叩く。

パシイン!と良い音がしたが、頬が赤いが、彼は気にしていない。  
すました顔と口調で、たった一言、

「痛いです。」

『じゃあ降ろして下さい!俺歩きますから!』

「この方が効率的です。人もいませんから恥ずかしがる必要はありませんよ。」

ほら、見えてきました。」

『俺は男です!そういう問題じゃありませんし!!』

てか、本当に降ろして下さいよ!俺は嫌です!』

「そういえば、貴方は耳が弱かったですね。」

『!?!』

彼の悪魔の一言に、バシバシと瀬戸さんを叩いていた手で反射的に耳を隠した。

すると彼は初めて見るニンマリとした嫌な笑みを浮かべ、建物の中に入っていく。

瀬戸さんは建物内でも早足で歩く。

：ハッ!しまった!

瀬戸さんの策略にまんまと嵌まってしまった!

両手が使えなければ何も出来やしない。

クソッ、何とか打開する方法は…。

両手で耳をしっかり覆った状態で解決策を練っている俺は、どんな戻れなくなっているという事態に気づいていない。

そんな俺をクスクス笑っている瀬戸さんにも気づかずに必死に考える俺。

…が、後に、考える行為自体が無駄だったという事を、改めて思い知らされる。

最終的に紙袋を持ち帰らされたし。

## 中編（修学旅行2）

バスに乗り、飛行機に乗り、やっと怒りが治まった。

瀬戸さん真面目に殺したい。

無理矢理しやがって、

縛られた手首に痣ついたし、

そのせいで無言でメシアに不審がられたし、

和葉さん達と合流出来なかったし、

あの人メシア程じゃないけど力強いし、

何か失った気がするし、

羞恥心で死ぬかと思ったし、

由君に手を出したし、

結局紙袋持ち帰らされたし、

取り敢えず、あいつ死ね。

クソッ、私服の瀬戸さんは色んな意味で会いたくない。

椅子に背を預け、仰向けのまま両手で顔を隠している。

手首には暴れまくったからか、くつきりと縛られた痕が。

あの時のあいつの顔は一生忘れない。

今度会ったら、首締めてやる。

それくらいやらないと全ての怒りが治まん。

俺が何時までも大人しくしていると思うなよ、馬鹿野郎が。

絶対同じ目に合わせてやる。

羞恥心で、

『殺してやる。』

「「!?!」」

無意識に口に出していた危ないワードに、左右の二人はバツと俺

の方を向いた。

源希にも言った事が（あまり）ない言葉だけに、二人は背筋を凍らせた。

俺は呟いた事にすら気がついておらず、どのように仕返しをするか策を練っている。

それ以降無言の俺を跨いで視線で会話する二人は、首や手を左右に振ったり、何故か罪のなすりつけ合いを視線とジェスチャーだけで始める。

その間に俺が無意識に何度か強く舌打ちをした為に、二人は冷や汗を流して必死に相手のせいになっていた。

和葉さんは疲れたのか眠っている。

少し落ち着いた俺が腕を外して起き上がると、左右に違和感。

起きていた気配がしたのに、今は眠っている。

二人共俺に背を向けた状態で顔は見えない。

珍しいな、と思いながら、カメラの写真を見返していた。

一応茶矢に連絡。

「今、飛行機の中。16時には帰れると思う。」

メールを送信し、もう一度仰向けになる。

俺も疲れたから、一寝入りする事にした。

キイイイン…

空港、到着。

寝起きの俺と和葉さんはボケッと漢谷の話を聞いている。

メシアと由君は実は起きていたみたいで、何故か疲れていた。

教師達の短い説教も終わり、解散。

お兄さんが迎えに来ていた和葉さんと、田中さんが迎えに来ていた由君と別れる。

すると自然とメシアと二人きりになるわけで。

気まずくはないが、椅子に座って待っているのも暇なので、大分余ってしまったお金でお土産を買おうと土産屋に入る。

旅行鞆にも土産が入っていて重たいが、まあ堪えられる。

あの瀬戸さんのに比べればな。

ハハハ、何時か殺す。

手に取って物色していると、面白い土産物を発見。

メシアが好きそうなお菓子の詰め合わせだ。

量もあって高めだが、メシアなら買いそうだ。

『メシアー、お前これ好きそうだな。』

「…。」

『…！』

振り向いてお菓子を見せると、後ろで物色していたメシアが驚愕の表情を浮かべていた。

それにハッ！と気づく馬鹿な俺。

瀬戸さんのせいで、気が抜けて、何時も通りに『メシア』と言っ  
てしまった。

瀬戸さんのせいだ。

暫く固まる俺達。

俺は先ずお菓子を元に戻して、茶矢達が好きそうなお菓子をレジ  
に持ってって購入。

そして何事もなかったかのようにメシアの前を通り過ぎ、

ガシッ。

「ちょっと待て。」

『…何だ黒澤。』

「今、メシアって」

『何だ黒澤。』

「お前本当は」

『離せ。俺は行く。』

「…。」

『…。』

痣がついた手首を掴まれ、どうにも動けない。

店の前で黙っている。

注目を浴びている。

…俺は失態を犯した。

もう暫く距離を置くはずだったのに、やっちゃった。

無言のメシアの視線が痛い。

親父、早く迎えに来てくれ。

それか伯父さん。

一応、これからの為にごまかす事にした。



俺が歩くとメシアも掴んだまま歩く。

『……今のは、ピロだ。俺じゃない。』

「嘘つけ。」

『……お前に違いがわかるか。離せ。』

「わかる。口調、目、態度、変わる時の瞬間、まだ言うか？」

『……………離せ。』

「嫌だ。正軌は嘘をつく時、間が空くな。」

『そんな事ない。』

「今“正軌”で反応した。」

『……………。』

メシアが恐いです。

誰か助けて下さい。

俺は選択肢を思いっきり踏み外しました。

馬鹿です。

阿呆です。

ドジです。

マヌケです。

がり勉強だって認めるから、メシアをどうにかして下さい。

誰でも良いです。

本気をお願いします。

視線が痛いです。

それから伯父さんと親父が同時に来て、俺は駆け足で親父の所に逃げ込んだ。

伯父さんにはメシアが荷物を積む間にちゃんと挨拶をした。

帰り道に、親父に話せる事をポツリポツリと土産話を零し、それ

を親父はずっと黙って聞いていた。

車の窓から見える夕焼けは、俺が帰って来た自覚を更に強めた。

『ただいま。』

「ただいま。」

「兄貴お帰りー☆」

「二人共お帰りなさい！」

一週間ぶりの自宅にホッとする。

煩い二人の出迎えも、懐かしく感じる。

旅行鞆を源希に任せて、ふと視線に気づく。

母さんの後ろに、小さい女の子。

小学校一年生くらいだろうか。

薄茶色のおかっぱの髪に、地味な暗い服。

長いスカートがより影を出す。

ジッと俺を見上げている少女。

俺は親父の方を向いた。

不思議そうに俺を見る。

俺は最近嫌な予感しかしていない。

『：俺、“歳を考えて”って言ったよね？』

「何を考えてるんだ。」

この子はお前の従姉妹の“片平<sup>カタヘラ</sup> 詩律<sup>シリツ</sup>”ちゃんだ。」

「赤ちゃんの時に会っただけだから、覚えてないのも無理はないわね。今は小学校一年生よ♪」

『微妙だな。』

：一応初めまして、か。宮古 正軌だ。高校三年生。』

靴を脱いで、座ったまま自己紹介をする。

詩律は母さんの足に隠れている。

恐がられているのだろう。

むやみに返事をしてもらおうとは思わない。

『ごゆっくり』と小さく笑みを見せ、脱衣所に入る。

詩律は俺をジッと見つめたまま、微かに頷いた。

——風呂上がり。

久しぶりに母さんの手料理を食べる。

今日は母さんの代わりに詩律が座っていて、黙々と食べている。

源希が詩律に沢山喋りかけるが、反応は少ない。

俺は食べ終わり、食器を片付けて部屋に行こうとした時、親父に呼び止められる。

促されるまま椅子に座り、親父の方を見る。

詩律はまだ食べていた。

ゆっくりよく嚙んで食べている。

親父より先に母さんが話し始めた。

「あたしのお姉さん、つまり正軌の伯母さんがね、海外出張で三ヶ月の間預かる事になったの。二人共仕事が忙しくて、一人で家にい

るのは心配だからって。」

「だから、大学受験の勉強もあるだろうが、息抜きの時は一緒に遊んでやってくれ。」

『わかった。けど、俺は子供に好かれたいよ?』

「源希もこうだから問題ないわ。」

「ごちそうさま。」

隣で手を合わせて食器を片付けようとする詩律。

危なっかしさに慌てて詩律から食器を取り、『食器は俺が片付けてやるよ』と流しに置いた。

ジッと見上げる詩律にしゃがみ込み、視線の高さを同じにする。

すると、キュッと小さい手が服を掴む。

俯きがちに、呟くように『ありがとう』と言った詩律に、『どういたしまして』と頭を撫でる。

椅子に再び座ろうとする詩律を持ち上げて座らせる。

大きな欠伸が漏れた。

『じゃあ、もう寝るわ。』

おやすみ。』

「「おやすみー♪」」

「おやすみ。」

「…おやすみなさい。」

最後に小さな呟きが聞こえたので、背を向けたままヒラヒラと手を振った。

今日は疲れた。

ゆっくり眠りたい。

ベッドに倒れ込むと、すぐに眠りにおちた。

## 中編（修学旅行2）（後書き）

これで修学旅行編終了しました！やっと終わったよ！ぐちゃぐちゃだったけど、終わったんだよ！最後瀬戸さんへの殺意が目立ったけれど！終わり呆気ないけれど！！↑

前々から考えていた子が出せて満足。詩律ちゃん小一で、従姉妹です。正軌とは11歳差。w a o。数字にすると案外歳離れてるー。まあ、ぼちぼちやります。必要な子ですから。

まだまだ続きます。

## 中編（夏休み）（前書き）

Hey皆さん、今は春ですがこちらは夏休み突入です！準備okですか？作者は全くですけど気にしない！！↑

では、

『えー、今入学式とか新入社員とか春真っ盛りなのに夏とか☆お前しつかりしろよwwさつさと更新しとけばこんな事にはならなかったんだよバーカ♪このままだとお前の夏休みも此処の夏休みと被るぞ？ま、あたしは関係ないけどねえー（・∀・）ハンッ』

という方、本当そうですね。今日なんか帰って爆睡してましたし↑毒舌の方はもうちょい毒を抜いてからお進み下さい↑

温厚な方はどうぞ。

↓

## 中編（夏休み）

北海道より暑い朝。

俺は朝っぱらから強い視線を感じて目を覚ました。

上に何も感じない辺りメシアではないらしい。

源希なら煩い声で部屋に入って来るだろう。

親父と母さんはそんな事しないし、後は…ああ、詩律か。

ロボットのように入った時間にくくりと体を起こす。

母さんが起こしてこないから、まだちょっと早いのか。

ぼーっとしていると、微かに開いた扉から視線を受ける。

目を手で擦って、眼鏡をかけて見ると、案の定詩律がこちらを覗いていた。

昨日と似たような服装をしている。

俺が起きたのに気づいても、詩律はずっと見つめている。

ガシガシと後頭部を掻き、扉に向けて手招きをした。

キョロキョロと周りを見渡す詩律に、欠伸をしながら呼ぶ。

『詩律、入って良いぞ。暇なら遊んでやる。』

「…。」

そーっと部屋の中に入り、キョロキョロと部屋を見渡す。

源希と違ってポスターとか趣味の物とか置いてないから、何も面白くない物はないだろう。

本棚に趣味の漫画が揃っているだけだ。

本に比べると少ないゲームも同じ本棚の一番上の段に並べている。

小学校一年生が楽しめるのは脳トレくらいだろう。

ベッドから降り、床に座る。

夏は暑いからパジャマじゃなくTシャツが寝巻き代わり。

下は部屋着のズボン。

薄くて快適なので気に入っている。

俺が座った近くにちょこんと詩律が座る。

正座して背筋を伸ばして座る彼女はジッと俺を見つめる。

そういえば、俺の名前は覚えてただろうか？

試しに聞いてみる。

『俺の名前、言えるか？』

「まーくん”。」

『…まーくん？』

「お母さんが言ってた。」

『伯母さんか…最近会ってねえな。元気か？』

「知らない。お母さんもお父さんも嫌い。」

『そうなのか。』

俯いてフルフルと首を左右に振る詩律の声は昨日よりも小さく、  
けれどハッキリしていた。

きつと両親が仕事ばかりだから寂しいのだろう。

否定するでもなく、共感するでもなく、ただ一言だけ返した。

俺にも両親が嫌いだった時期もあるし、気持ちにはわからなくもない。  
い。

時が経つにつれ、次第に理解していくさ。

ポンと小さな頭に手を置いた。

小さく微笑むと、顔を上げた詩律は不思議そうに首を傾げた。

俺もわからず『どうした？』と問い掛ける。

詩律は俺を指差して、

「怒らない。」

と言った。



俺もクエスチョンマークが頭に浮かぶ。

怒る要素が何処にもないし、怒る必要はないが。

強いて言えば、人に指を差さない事くらいだが、注意するだけで怒鳴ったりはしない。

誰かに怒られた経験でもあるのだろうか？

それはまた短気な人だな。

カルシウム不足が原因だろう。

牛乳やニボシを勧めるところ。

よくわからないので暫く詩律がするようにジッと見つめていた。

詩律もジッと見つめる。

頬を人差し指でつついても、軽く摘んでも、詩律は何も抵抗しない。

大人しくそこに座っている。

源希とは真逆な詩律と愚弟を取り替えたいな、とぼんやり思った。

小さく溜息を零すと詩律はキョトンとした表情を浮かべた。

「取り替える”ってどういうこと？”

『んー…交換したい、って意味かな。』

「まーくんは、ごちゃごちゃしてて、沢山あって、わかりにくい。」

『どういう意味だ？』

「普通の人は、一つしかないよ。けど、まーくんは音が沢山あるの。」

両手を耳の後ろに添えて話す詩律の言葉が“中の住人”を意味している事に気づくのに、そう時間はかからなかった。

確か伯母さんは“夢国市”って色んな種類の種族が混じって暮らしている市に住んでいた筈だ。

本当にあるのかわからないが、一般人は入れないらしいし、行っただ事がないので、俺はそこまで詳しくない。

まあ、色々と謎な市だ。

そんな所で暮らしているんだから、何があっても不思議ではない、と思う。

俺がこんなだからどうこう言える立場ではない。

それに、子供の時は第六感が鋭いらしいし。

虐められたりしないと良いんだがな。

大丈夫だろうか。

：しかし、気持ちを聞かれるのはピロで慣れてるから何にも思わないな。

ある意味良い事かもしれない。

詩律を傷つける事もなかったし。

クイツ。

遠慮がちに引っ張られた服。

意識がまた飛んでいたらしい。

下を見れば、詩律がまたジッと見上げていた。

残念ながら、俺には人の思考は言葉にしないと読み取れない。

そっと手を胸に当て、彼女にわかりやすく説明する。

『俺の中には、色んな人格、人間が生きているんだ。それは俺の体を使って出て来られる。特殊な体なんだ。

家族以外には内緒な。』

「うん。内緒。

詩律のも、秘密ね？」

『約束な。』

小指を絡めて約束をする。

こういう昔からの習わしを小さい子とするのは良いな。  
楽しく思える。

下から母さんが呼んだので、部屋を出る。

後ろで詩律がヒヨコのようについてくるのに、本当に源希と交換してくれないかと本気で考えた。

お昼ご飯を食べ終え、出かける仕度をする。

帰って来て一番に行きたい場所があるのだ。

後ろでジッと着替えるのを見つめる詩律に暫く外に出てもらい、クローゼットに隠した紙袋を更に奥に隠し、部屋着とあまり変わらない外着を身につける。

帽子を被って、携帯電話と財布とタオルを鞆に入れて、完了。

扉を開けると源希と詩律がおり、源希が『お出かけ？』と聞くので『夕方までには帰る』と言っておいた。

見上げる詩律の頭に手を置き、『行ってきます。』と告げると、彼女は足に引っ付いた。

髪が乱れるほど頭を左右に振る。

―何があったのだろうか。

源希と見合わせるが、わからないらしい。

俺も心当たりを考える。

細い腕に力が入るが、離そうと思えば簡単に離せる。けれど必死に引き止める詩律には出来なかった。

『あ。』

「どったの兄貴？わかった？」

そして、やっと一つの仮定にたどり着く。

朝の部屋での会話。

彼女は俺が帰って来ないかもしれないと思ってるのかもしれない。思わず苦笑した。

んな訳あるか。

明日から由君達が来るんだし、俺の家は此処しかない。

わしわしと小さい頭を撫で下ろすと、詩律がジッと見上げてきた。俺は頷いてやる。

すると、足が解放された。

一部始終を傍観していた源希が『ヒュー♪流石正兄』と褒めたが無視をした。

『あの愚弟はこき使って構わないから、存分に遊んでもらえ。』

「愚弟？」

「愚かな弟と書いて愚弟だよ！兄貴が俺を呼ぶ時のセカンドネーム☆」

『意味は大人になればわかるさ。』

じゃあ、行ってくる。』

「いってらっしゃーい！」

「…いってらっしゃい。」

二人に見送られながら階段を下りる。

メシアに見つかりと捕まりそうなので、久しぶりに自転車に乗ってみた。

肩掛け鞆を持ち直し、ペダルに足を踏み入れた。  
すると風がおこり、歩くより涼しい。

暑くて人気の少ないアスファルトの上を、風を感じながら走った。

ザアア・・・

『二回目だが、この感動は変わらないな。』

茶矢が教えてくれたあの古びた社の裏の絶景。

崖の下に広がる町並みや遠くにある山。

全てを覆うような青空に、白く漂う白い雲。

絵に描いたような、此処だけ現実から離れたような世界。

俺は此処に来たかった。

この感動を覚えているのか確かめたかった。

幸い、体や記憶は覚えていてくれたいた。

凄く嬉しかった。

『写真撮っておこう。』

鞆に入れっぱなしのカメラで景色を撮る。  
誰もいないので、社も記念に撮っておいた。

社の裏はヒンヤリしていて、古びた椅子に腰掛けて暫く景色を堪能する。

きっと、夜はとても綺麗なだろう。  
是非今度観てみたいものだ。

朝日が登る瞬間も眺めてみたい。

それなら、大晦日に茶矢達でも誘うか。

きっと全員言葉を失うくらい素晴らしいものだと思う。

この感動は色んな人と共有したい。

この絶景を独り占めするのは勿体ない。

帽子を横に置いて、社に背を預ける。

このまま目を閉じれば、自然と同化するかもしれない。

それくらい静寂に包まれている。

俺の呼吸が邪魔なくらいだ。

そっと目を閉じて、風の音を肌で感じる。

心地良い場所だ。

このまま眠ってしまいたくなる。

―カタ、

どのくらい意識を飛ばしていたのだろうか。

小石を蹴るような足音が聞こえた。

そして足音は一旦止まると、俺の前を通り、間を空けて隣に座る。  
古びた椅子が軋む音がした。

気づかれないようそつと目を開ける。

隣には、長い黒髪を下で二つ結びにした女の子が景色を見つめていた。

真ん中分けの長い前髪が風になびく。

清閑な雰囲気纏い、どこか淋しげな表情を浮かべる彼女は景色に溶け込んでいた。

目つきが少しきつい。

夏なのに半袖のタートルネックに長いスカート。

顔色は普通だが、どこか悪いのだろうか？

彼女は俺と違い、何も持っていなかった。

ジロジロと見るのも失礼なので、俺も景色に移す。

やはり癒される。

自分の悪いモノが浄化されそうな気分になえる。

「貴方もこの絶景が好きなのですか？」

不意に、隣の女の子が話し掛けた。

女の子は俺に顔だけ向けている。

俺も顔だけ向けて肯定した。

『後輩に案内されて二回目だが、此処には何か力を感じる。』

「私は頻繁に訪れています。力を感じるのは同意見です。」

しかし、宮古君が此処にいるとは珍しいな、と思いました。小学校では勉強ばかりしていたのに。」

『：俺を知っているのか？』

「ええ、奇遇にも小中高同じ学校ですから。」

私は“山下 林”<sup>リン</sup>。副会長です。好きに呼んで下さい。」

『成程。通りで見覚えのある顔だと思った。』

一応俺もしておく。宮古 正軌だ。俺も自由に呼んでくれ。』

「宮古君は律儀な方ですね。

今から私達は絶景仲間です。」

『それは良いな。』

とんとん拍子に会話が進む。

ハキハキと話しているわけではないが、彼女の声は澄んでいて耳に入りやすい。

山下さんの記憶はあまりないが、朝会で何度か顔を見た覚えがあるくらい。

膝下の長いスカートに制服の下にタートルネックを着ている彼女は奇妙だった。

由君のスカートじゃなくズボンを履いているのと同じくらいに。

あー、思い出すと色々浮かぶな。

そういえば一年生からずっと満点だったっけ。

凄い人だ、と思ったのが第一印象だな。

真面目で生徒手帳を表したような人物だ、と誰かが口に使っていた気がする。

賞賛するのと同じくらい妬みの言葉も多い。

けれど、周りを気にせず一人でいる姿は、また周りの反感を買う。

俺と少し似ているな、とぼんやり思った事があったようななかったような。

取り敢えず、彼女は凄い人だ。

運動は知らないけれど。

♪♪♪

携帯電話の着信音が鳴り現実に帰還する。

またやってしまった。



トリップ癖は何かしないとな。

彼女に謝ってから席を立ち、鞆から携帯電話を取り出す。ディスプレイに表示されている名前を確認して、切った。メシアからだった。

昨日の事もあり、今は距離を置いていたい。

また電話されたり、心配かけるのは嫌なので、「ほっといてくれ。」とメールして送信。

場所がバレたら面倒なので、山下さんに別れの挨拶をする。

『俺先に帰るわ。お先。』

「気をつけて。」

手を振り返してから階段を駆け降り、自転車を置いた場所まで早足で向かう。

見つかるかとまたしつこく付き纏われる事は確定だ。

きっと今現在自宅にいますうだし。

詩律と遊んでくれれば良いけれどな。

あいつも子供が好きみたいだし、きっと喜んで遊ぶだろう。

三人で仲良く遊べばいい。

俺は遠回りして帰ろう。

自転車の鍵を外して片足を上げて跨がる。

鞆を持ち直して、何処に行こうか考える。

まだ時間があるから電車に乗って遠くに行くのも良いな。

映画の前売券は買ってあるが二人分だし、誰か誘わないとならないし、机の引き出しに保管しているから一旦戻らないといけない。

映画は無理だな。

あ、なら、茶矢が教えてくれた本屋はどうだろうか。

あそこなら涼しいし、本も充実しているし、何よりメシアが場所を知らない。

もしかしたらメシアの伯父さんと遭遇するかもしれない。  
よし、そこに行こう。

ペダルに乗せた足に力を込めるが、また携帯電話が鳴った。  
またか、と溜息をつきながら、携帯電話を取り出す。  
今度は源希からだった。

珍しい。

あいつが電話をするなんて、余程の事だろう。

ピッ、と通話ボタンを押して耳に当てる。  
すると慌てた声が聞こえた。

「あ、正軌兄!？」

『どうした。』

「メシアが家に来ているんだけどさ、メシアを見た途端に詩律ちゃん  
が泣き始めて……。母さんがあやしても全然泣き止まないんだ!」

『メシアの顔は俺よりマシだったと思ったが……。あ、そうか。』

「兄貴?」

パッと詩律の不思議な力の事を思い出す。

きっとメシアの中に何か恐い物を感じ取ったのだろう。

顔で判断をしないから、それしか原因が浮かばない。

あいつは何を考えているんだよ……。ったく。

しょうがない、帰るか。

子供を泣き止ました経験はないが、何とかなるだろう。

『今から帰る。取り敢えずメシアはお前の部屋に入れておけ。』

「わかった!助かるよ正兄!!」

ピッ、と通話を切り、自転車の向きを変更する。

本屋はまた今度にしよう。

今は従姉妹の方が優先だ。

自転車の途中で入れ代わらないと良いんだが、な。  
心配するよりも、先を急ぐか。

自転車を早めにこいで、自宅へと急いだ。

ガチャ、

『ただいま。』

「…！」

『おっと。』

扉を開けた瞬間に詩律が抱き着いてきた。

リビングから母さんが頬に手を添えて姿を現す。

詩律はギュと抱き着いて離れない。

もう泣いてはいなかった。

よしよしと頭を撫で、靴を脱ぎたいから抱き上げる。

小さいからかとても軽い。

俺の中の住人の一人、少女が重なる。

キュッと首に腕を回したまま顔を肩に埋める小さな体は震えてい

ない。

片腕で抱えながら靴を脱ぐ。

後ろで母さんが感心したように話した。

「今までずっと泣いてたんだけど、正軌が帰るちよつと前から泣き止んで、玄関でずっと立っていたのよ。すると正軌が帰って来たから驚いちゃったわ。」

『そうなんだ。』

「昨夜あんな事を口にしていたあなたが一番懷かれているわね♪これなら明日から安心して行けるわ!」

『うん、家の事は任せて。久しぶりの二人きりの旅行楽しんできて。』

「ありがとう♪」

『じゃ、俺らは部屋にいるから。』

「よろしく☆」

泣き疲れたのか腕の中で眠る詩律だが、抱きしめる力は緩まない。そこまでメシアが恐かったか。

そうなると明日からが不安だが：仕方ない、詩律は茶矢達と一緒に寝てもらうか。

メシアはどうせ俺の部屋決定だし。

まあ、何とかなるさ。

母さんが詩律の背中をぽんぽんと二回叩いてから、自室に向かった。

片腕で持ち上がるのは茶矢と瑠璃と少女以来だな、とかぼんやり考えながら。

## 中編（夏休み）

深夜、母さん達は旅行の為、車を走らせた。

詩律と俺と源希はそれを見送り、眠たそうに目を擦る詩律を抱き抱えて家に入った。

今日は母さんがいないので、彼女は俺のベッドで一緒に寝る。

腕枕をしてやると、すぐに寝息が聞こえ、俺も早めに寝た。

扇風機の羽を回す音と二人分の寝息が規則正しく部屋繰り返された。

ピンポン。

「はいはい！」

朝の11時くらいにチャイムが鳴る。

俺達は母さんが作り置きしてくれていた朝食を食べ終わり、俺が

洗って源希が拭き、全て終わると食器棚に食器を片付けた。  
詩律は何もする事がないので俺達をジッと見上げていた。  
そして暇になるのでリビングで自主勉強。

源希はソファに座り詩律とテレビを観ている。  
そしてチャイムが鳴った。

源希が駆け足で迎えに行くと、詩律はテレビを消して俺の膝を叩いた。

そちらの方に注目すると、詩律がジッと見つめている。

膝に座りたいんだろうか。

暑いと思うけど、本人がしたいなら良いか。

脇を持ち上げ膝の間に座らせる。

すると、彼女はジッと俺のノートを凝視する。

小学校一年生ではちんぷんかんぷんだろう。

苦笑しながら勉強を進める。

「正軌先輩。お邪魔します。」

『…一斉に来たな。』

リビングの入口を見ると、一年生達とメシアと和葉さんがいた。  
由君以外は全員集合。

そしてメシア以外は詩律に注目し、それぞれ違った反応を見せる。

茶矢は複雑そうな表情を浮かべ、

皆月は怪訝そうな顔を向け、

真尋と和葉さんはニコニコしている。

一方の詩律は沢山の人間の登場に俺の服を握って顔を隠した。

人見知りをするのだろうか。

源希が全員に詩律の説明をしている。

あいつに任せて俺は勉強の続きをする。

気づいた時には入口に立っていた奴らはいなくなっていて、けれ

ど詩律はまだ俺にしがみついていた。

ぽんぽんと母さんがするように背中を軽く叩いてやる。

『人見知りするのか?』

「…沢山の音が混じって、恐い。」

『そうか。そういえば昨日、メシ…黒澤の時に何故泣いたんだ? 恐かったか?』

「…うん。嫌な音が混じってて、まーくんの名前が沢山出てきてた。危ない人。」

『…あいつはそこまで危険人物じゃないぞ。慣れれば、頼もしい奴だ。』

「……。」

『ゆっくり知っていけばいいさ。焦る必要はない。』

小さく笑んでやると、彼女は微かに頷いた。

無理強いさせても逆に幅が広がるだけだ。

ならば本人達のペースで徐々に縮めていけばいい。

焦っても意味がないし。

―あ、そういえばあいつらに土産があったんだ。

確か部屋に置きっぱなしのはず。

今のうちに渡しておかないと。

『詩律、部屋に行きたいから降ろすぞ。』

「…。」

ヒョイと持ち上げて床に立たせる。

席から立ち上がり、リビングの入口まで歩くと茶矢と遭遇。

ついて来た詩律はピュッと俺の足に引っ付いた。

それに苦笑いをして『一斉に来たから恐がっているらしい』と説

明すると、茶矢は詩律の前にしゃがんだ。

詩律は俺の足に抱き着いて茶矢をちらっと盗み見る。

小さい物が揃ったな、とか上から傍観しながら小さく笑う。

彼女はとくに愛想笑いを作るでもなく、凜とした表情で人差し指で自分を示す。

「初めまして詩律ちゃん。私は茶矢です。正軌先輩達の二つ下の高校一年生です。一年生は詩律ちゃんと同じですね。」

「…片平 詩律です。まーくんとげんくんの従姉妹で、小学校一年生です。」

「…何て呼べば良い？」

「茶矢ちゃんでも茶矢お姉ちゃんでもご自由にどうぞ。では、私は詩律ちゃんと呼ばせていただきますね？」

「…。」

「ありがとうございます。」

コクリと頷く詩律に茶矢は微笑む。

子供が好きなのだろうか。

積極的に話し掛けている。

敬語だけど詩律がだんだん隠している顔を茶矢に見せている。

その変化に『おー！』と言いたい気持ちを抑えて、黙って二人のやり取りを眺める。

そろそろ行っても大丈夫かな。

『じゃあ、土産を取りに部屋に行くわ。』

「わかりました。詩律ちゃんもリビングに行きますか？」

「…まーくんと行く。」

抱き着いたままフルフルと小さい頭を左右に振る詩律。てっきり茶矢と一緒に行くかと思ったから驚いた。



茶矢は『そうですか』とあっさり諦めた。

小さい子供に追われるのは悪い気はしないので、茶矢と別れて階段を上がる。

トントンと上がる音に遅れてタン、タンと上る音が追いかける。階段もそろそろ終わるところで、自室から誰かが姿を現す。

淡い緑色の髪の男、薄黄色の瞳が気づいた。

荷物を置いたがりビングに詩律がいるので部屋にいたのだろう。階段を上がる音に気づいて部屋を出た、というところか。

源希から教えられたが、昨日の詩律の泣きっぷりは酷かったらしいし。

みんなが宥めても、メシアを視界に映しただけで更に酷くなり、メシアを隠してもあの母さんが手に負えなかったらしいし。

親父は丁度家にいなくて、俺が帰るまで母さん一人で詩律を相手にしていたが、何をしてても泣き続けたとか。

母さんが困っている顔は珍しかった。

さて、今回は俺込みの対面だが、どうなるだろうか。

メシアは詩律に気づいていないようで、パアと嬉しそうに顔を輝かせる。

一日ぶりなのに、そこまで嬉しいか。

横でメシアの方を睨む詩律を横目に、メシアを待つ。

涙目でギュッと俺の足を抱きしめて離さない。

フウッ！と獣のように威嚇し始めた。

メシアが階段を一段降りる。

そして彼女の存在に気づく。

ジト目で睨み据える詩律は怯えながらも、一回りも大きいメシアより強く見える。

メシアは後退りをして部屋に戻った。

狼vs子供、子供の勝利である。

まさに“メシアキラー”。

一番強いはずのメシアが一番弱いはずの詩律に臆する。

トランプゲームの一つ、大富豪（大貧民）のジョーカーとスペードの3みたいだ。

3が一番弱いのに、スペードの3だけは無敵のジョーカーに勝てる。強いね、詩律。

ぼす、と頭の上に手を置いてやる。

すると彼女は頭を横に倒した。

「強い？」

『メシアに対してね。』

詩律は源希の部屋にいてくれないか？俺は部屋に行くから。』

「…危ない人いるよ？」

『その時は叫ぶ。それかベランダから飛び降りさ。』

「……二人、友達なんだ。」

『そうだよ。大切な友達。だから離れてる。』

「…？」

『ん、先に行くな。』

ジィツと見つめる詩律を後に、部屋に入った。

ガチャ、ゴン。

…何か当たった。

頭が当たったような、固い音。

扉の隙間に腕を挟み確認すると、懐かしい髪の毛の感触が。

手を下げると耳らしき物に触れた。

下で結んだ髪が掴めた。

それをクイクイ引っ張り“入れろ”と伝える。

すると髪が手から離れ、扉が開いた。

狭い隙間に体を滑り込ませ、中に入る。

後ろを向けば、メシアは膝を抱えて小さくなっていた。

パタン、と扉を閉めて、隅に置いた一年生達の土産をつかみ取る。

振り返ると長い前髪の間から様子を伺う瞳が覗く。

淋しげな、不安の色を映す。

俺にはどうする事も出来ない。

前髪を書き上げ、これからの事を思案する。

三ヶ月、詩律は居候する。

他の奴らは一応問題なし。

俺には懐いてくれている。

けれどメシアには威嚇するほど警戒している。

さて困った。

このままだとメシアだけぼっちだ。

ずっと俺の部屋にいないてはならない。

それでは泊まりに来た意味がなくなる。

一人だけつまらないのは俺自身嫌だ。

ふう、と溜息をついてベッドに座る。

メシアも移動してベッドに顎を乗せた。

今だけは可哀相な獣を甘やかしてやろう。

メシアキラーがいる限り、コイツは寂しいだろうし。

長い前髪を額が露になるまで掬い上げる。

額の傷痕が姿を現すが、メシアは気にしない。

逆に手に頭を押し当て甘えてきた。

それを好きにさせ、親指で額を撫でたりしてやる。

安心したのか、ヘニヤリと表情を和らげた。

コイツにとっては長い時間甘えられなかったのだろう。

よしよしと犬にするように両手で髪をボサボサにさせると、腰に

巻き付いてきた。

詩律よりも強い力でギュッと抱きしめる。  
こうされるのも慣れたなあ。

昔は引きはがして怒鳴っていたというのに。  
病室のが一番記憶に残っているな。

あれは一番声出た。

全身が叫んだ気がする。

病院の人達、あの時は本当すみません。

怒るならメシアにして下さい。

『明日、ずっと前に約束してた映画観に行くか。』

「うん、行く。」

『もうちょい離しておくつもりだったのになあ、まあ仕方ない。』

「…もう離れるな。」

ドサツ、ゴン。

天井を仰いでいると、上半身が押し倒されて壁に頭を強打した。  
痛い、地味に痛い。

何だコイツは、よそ見た瞬間に狙いやがって。

甘やかした途端にこれか。

あゝゝゝゝ！！

脳震盪起こしたらどう責任とってくれんだ馬鹿！

両手で頭を抱えて痛みに堪える。

上にはコイツが覆いかぶさるし、痛いし、涙出てきたし、クソ。  
片腕で押し返すもびくともしない。

何なんだよ、離れろよ。

叫んで詩律呼ぶぞ。

メシアキラー登場するぞ。

っだあー！顔近いわ馬鹿メシア！

「正軌、弱ったな。昔と比べて全然だ。」

『悪かったな！んな事どうでもいいから離れろ！』

「やだ、正軌不足だ。」

『暑いわ！クソ、馬鹿力めえ…！！』

抱き着くデカイ狼の頭を下に押すが、歯がたたない。

バシバシ背中を叩いても離れる気配はない。

髪を引っ張ると効果があるのか多少顔が浮く。

しかし髪を引っ張っていた手首を逆に捕らえられ、追い詰められてしまった。

メシアがボサボサの髪を結んでいたヘアゴムを解く。

綺麗な髪が顔をくすぐる。

真面目な顔が見つめる。

メシアはふと思いついたように話し始めた。

「そういえば、前に“○貞”かどうか聞いていたな。結論を言えば、経験済みだ。食う為には金が必要だからな、金が貰えるなら誰とでも寝た。」

『……何故、今言うんだ？』

「まあ、やろうと思えばやれる訳だ。気絶するほどな。」

…あれ？絶体絶命？

ちょ、目が本気何だけど。

え、ちょ、俺何した？

いや、距離は置いたけど、わざと冷たくしたけど、へ？

わー、死亡フラグ？

こんな時に限って体が動かねえ。

詩律が警戒した通りだな、こりゃ危険だ。

アレ？メシアが笑ってるけど、どういう意味だ？

ビクッ。

あ、またこの感覚。

もう全てが真っ暗だ。

冗談半分で正軌に覆いかぶさったメシアは笑いが抑え切れなかった。

本気で困惑する目の前の人に、今までの仕返し程度に驚かせようとしただけなのに、ここまで良い反応をみせるからつい調子に乗ってしまった。

クツクツと喉を鳴らして笑う。

初々しい、こんな可愛いモノをみるのは何時ぶりだろうか。

大胆なアメリカではない、謙虚な日本人らしい。

冗談だ、と言ったら彼はどんな顔をしてくれるだろうか。

笑いながら愉快そうに上げた顔が、驚愕に一変する。

メキメキ、ドゴツ！

「ガハッ！」

腹に彼の足の裏が減り込み、嫌な音が聞こえる。

先程の彼からは想像出来ない、強い力。

一瞬その力が緩んだと感じた刹那、メシアの体が宙を浮き、床に倒れた。

力では圧倒的に強いメシアが、飛んだのだ。

ドオオアン！と椅子に体をぶつけ、強い衝撃に呻く。

ゆらりと正軌の体は立ち上がり、首をコキコキ鳴らす。

手首を回し、キョロキョロと辺りを見渡す。

『クハア〜』と大きな欠伸を口を隠さずに漏らした。

落とした眼鏡を拾い、気怠そうに喋る。

何もかもつまらない、面倒臭いといった表情で眼鏡のレンズを服で拭く。

『つたく、つまんねえ部屋にいやがんな。弟のが高校生らしいと思わねえか？なあ？』

「…っ、ゴホ。お前は誰だ？」

『ん〜？何、質問を質問で返してんだよ。バァーカ。』

ドスッ！

「グッ！アガ、ハグ！？」

横に仁王立ちする彼はボリボリと頭を掻きむしりながら、メシアの脇腹を三回蹴った。

先程の痛みがまだ残っており、対処が遅れたメシアは石ころのように蹴飛ばされ、背後にある整理整頓されている勉強机の上が見る影もなくなる。

三回蹴った後、彼は口角を上げた。

今までとは打って変わり至極愉しそうに笑う。

腹に片足を乗せたまま前のめりに体を折り、メシアに近づく。

メシアは腹の圧迫に彼の足首を掴む。

しかし正軌の体だからか、力が入らない。

それに気づいた彼はスツと表情を消した。

そして腹に乗せた足に力を加える。

ミシミシと骨が軋む嫌な音がメシアの耳を襲った。

『つつまんねえつまんねえ。抵抗しねえとか何？マゾか、キメエ。どMを相手する興味はねえ。』

ツチ、時間食った。あーあ、最悪う。』

パツと今まで痛めつけていたメシアから離れ、踵を返す。

唇を尖らせて両手をポケットに入れて歩く。

飄々と歩く足首を、部屋を出る前にメシアは掴んだ。

そう簡単には外せない。

ゴホッ、とむせ返り、激痛に堪えながらも、足首を握る力は変わらない。

彼は不自由な足をぶらぶらさせて、呆れ顔でメシアを見下ろす。

ハァー、と大きな溜息を吐き出した。

『その兄ちゃんよ、あんたの執着心は認めるが、そのせっかく綺麗な顔が傷ついちゃうぜ？』



「もう、傷ついている。」

『ふうん。あっそ。』

ドガッ！

踵でメシアの額を馬のように蹴り上げた。

額が赤くなり、脳が激しく揺すられる。

力が抜けた隙に彼は部屋を出た。

開けっ放しの部屋には、気絶したメシアが残された。

## 中編（夏休み）

タンタンタン、ドサ。

階段を下りていた正軌の体が、途中の段で座り込んだ。

手摺りをギリギリと音が鳴るまで握りしめ、嘔吐感に髪の毛をわしづかみする。

激しい頭痛に襲われながらも、彼は笑っていた。

目尻に生理的に溢れる涙を浮かべながらも、嬉しそうに口元を歪ませる。

『へえっ、まだ出番は早いってかあ？ 全くお固い奴らで。はいはい、戻るって。だからちったあ待ちやがれ。』

誰かに向かって悪態をつくも周りに人気はない。

せいぜい開けっ放しの扉から見えるメシアくらいだろうが、気絶している。

正軌の体はそっと目を閉じ、浅く呼吸を繰り返した。

ビクッ。

ガサ、

『ほら、土産。適当に取っていけ。』

「わぁ：ありがとうございます。」

「どうも。」

「ありがとうございます。そういえば、メシア先輩はどうされましたか？」

『打ち所悪くて気絶してる。馬鹿だな。今ベッドに寝かせてるから、そのうち起きるだろ。』

「そうですか。やはりあの音はそういう音でしたか。」

カタン、と椅子を引いて腰掛ける正軌の体。

和葉以外は皆、一度経験しているので深く追求しない。

またか、と呆れるのみ。

由はまだ来ていない。

用事を済ませてから行くらしいので、午後から入る、と和葉にメールが着ていた。

珍しい組み合わせの食事。

正軌を囲む二人がいないという事は茶矢にとっては喜ばしい。

何時にも増して嬉しそうに正軌の前で食事をする。

隣には詩律が独占しているが気にならない。

源希と真尋はテレビを観ながら食事をとる。

友恵と和葉が喋っているが、今日はやけに静かだ。

正軌の体はさっさと食べ終わり、食器をそのままに上に行こうとする。

食器を片付けない彼は珍しい。

和葉と詩律以外のテーブルに座っていた二人は目だけで正軌の体

を追った。

階段を上がる彼は、忘れていた事に気づいていない。

和葉は二人の様子に頭を傾げる。

家で彼と食事をした回数が一度しかない彼女は違和感を感じない。

しかもリビングではなく正軌の部屋なら尚更。

茶矢と友恵は視線だけで短くやり取りをした後、『何もありません』と茶矢が言った。

友恵も頷くが、それ以降口数が減ってしまった。

一人黙々と食べる、正軌の部屋の一部始終を聞いていた詩律だけが、真相を知る。

正軌の体がいなくなると、更に静かなリビングになった。

♪♪♪

正軌の自室に着信音が鳴り響く。

ベッドに横たわるメシアは着信音に全く起きる気配はなく、身動き一つしない。

正軌の体はポケットの携帯電話を取り出す。

ストン、とベッドの空いたスペースに腰を下ろした。

眠る人と触れないように。

眼鏡を押し上げ、相手が話すのを待つ。

電話の相手は一向に正軌の体が話さないで、綺麗な声に微かに怒気を含ませる。

「もしもし？」

『中馬さん、だったか。残念ながら私は“正軌”という人物ではない。用件くらいはメモしておこう。』

「お前かよ。いや、もうすぐ家に着くから、皆に伝えておいてほし  
いだけだし、別にいいや。」

『皆とは？下にいた人間達か？』

『そうだよ。あ、黒澤そこにいる？代わってくんねえか？』

『いるにはいるが、気絶している。全く、“あいつ”には頭痛が酷  
くなる。手加減しないからな。』

「…黒澤が気絶するって、てかあいつって誰だよ!？」

『煩い。君に話す理由はないし、義務もない。私はあいつのしか見  
ていないから、全てを語れない。おかげで尻拭いするはめになった  
が。全く、“あいつら”がやれば良い事を何故私が。』

ハア、と疲れた溜息を吐き、指で眉間の皺を解す灯。

“あいつ”と“あいつら”という違いに由の頭は混乱している。

メシアが“あいつ”のせいで気絶して、灯が現れて尻拭いをして、  
理由が“あいつら”で、それよりも“あいつ”が現れる前に正軌に  
何があったかが気になるし、そちらの方が重要だと思う。

けれど、灯に正軌の記憶は無いらしいし、由には確かめる術が…  
あった。

正軌が入れ代わる前後にいた人物が、いた。

今近くにいる、正軌が距離を置いてもうすぐ傍にいる、由が特に嫌  
いな奴。

ビクッ。

灯の体が一回跳ねた。

灯の顔が青ざめる。

ガチャン、携帯電話が落ちた。

目が、閉じられる。

「…おい？おい！返事しろよ！！何があつたんだ！？」

カタン、

携帯電話が拾われた。

震えた唇が、携帯電話に押し当てられる。

呼吸が乱れている。

黒い髪が微かに震える。

由は変化に気づいて名を呼んだ。

「宮古か？」

『由君…どうしよう。』

返事はすぐに返ってきた。

確かに彼女特有の呼び名を口にしたので、本人に間違いないだろう。

困惑と不安を混ぜ合わせた怯えた声を、縋るように伝える。

立ち尽くした目の前に眠る人を見開かせた瞳に映して。

顔を真っ青にさせて、蹴った後に感じる痛みが残る左足が物語る

現実には、頭がガンガンと後ろから殴られているように痛む。

中の住人の誰であろうと、自分がした事には変わらない。

正軌はそう決めている。

だから、正軌は自分がメシアを“こうしてしまった”のだと、恐怖した。

『どうしよう、俺、メシアを、蹴ったらしい。呼吸、してるけど、動かない。全然、動かないよ。』

駄目だ。俺はもう一緒にいられない。弱い俺は、いちゃいけないんだ！行かなきゃ…起きたら、メシアが困る。』

「ちょ、落ち着け宮古！今からそこ行くから、動くな！』

ツクソ！何で今日に限って神崎さんは土産持ってきて来いって言いやがんだよ！あんのKYB（空気読めないハバア）！！」

『由君、暫くどっか行くから探さないで。携帯電話は持って行くから。茶矢には多分行き先伝えるから。』

メシア起きる前に行かないと。ああ。』

プツ、ツー、ツー、

「あん！？おい、宮古！ツクソたれがあ！！」

携帯電話に向かって怒鳴りつけるが、周りが驚くだけで相手から返事はない。

テンパる相手に不安を覚える。

苛々しながら携帯電話を握り潰しそうなほどギリツと手の平の中で音をたて、荷物を詰め込んだキャリーバックを持ち上げて走り出した。

一方、正軌も鞆の中に携帯電話、財布、タオルやノートを入れ、帽子を深く被る。

メシアがまだ眠っているのを確認して、小さく『ごめん』と謝ってから部屋を飛び出す。

すると、丁度階段を上がっていた茶矢と出くわした。

焦る正軌に疑問を抱く表情を見せる。

正軌は茶矢の両手を取り、一方的に告げる。

『晩御飯までには絶対帰るから。外で頭冷やしてくる。』

茶矢、家の事頼むな。』

「え？へ？は、はい？あ、正軌先輩！」

『行ってきます。』

「行ってらっしゃい。」

両手に触れた時に一瞬正軌の顔が安らいだが、茶矢には帽子に隠れて見えなかった。

返事を聞く間もなく、正軌は家を出た。

茶矢は？を沢山頭に浮かべるが、彼の様子から何かあったのだと理解した。

不安になって彼が出ていった玄関の扉から顔を覗かせるも、一台の車が家の前を通り過ぎただけで、もう何処にも姿はなかった。

ハア、と彼のいない寂しさにガックリ肩を落とす。

久しぶりに会えたというのに。

―けれど、両手を握られた時の至近距離を思い出し、茶矢の顔は赤くなり、高揚する。

嬉しさに沈んでいた気分も急上昇。

茶矢自身、簡単な女だな、とクスクス笑った。

パタン、とルンルン気分で扉を閉めると、いつの間にか背後に詩律が立っていた。

ジィッと茶矢を見つめている。

茶矢はニヤついていた顔を戻し、凜とした表情で詩律と目線の高さを同じにする。

リビングでは大音量のテレビゲームの音楽が聞こえる。

そのせいで源希達は気づかなかったのだろう。

源希と友恵が奇声をあげているから尚更わかるまい。

キュ、と小さな手が茶矢のスカートを掴んだ。

顔を俯かせる彼女に茶矢は問い掛ける。

「どうされました？嫌な事でもありましたか？」

「：まーくん、」

「正軌先輩なら先程出掛けられましたが、何かありました？伝言なら私が承ります。」



「あのね、まーくん、まーくんは今、辛い気持ちでいっぱい。だから、茶矢お姉ちゃんが、必要。茶矢お姉ちゃんに触ると、まーくん落ち着くの。」

「え…」

詩律の言葉に全身真っ赤な茹蛸になる現役女子高生。

予想外の発言に途中で思考が停止してしまった。

詩律は必死に茶矢に正軌の心情を教えるが、今の彼女の耳には右から左に一方通行。

言葉が頭の中で留まらない。

通り抜け、何処かに飛んで消える。

気づいていない詩律は尚も話を続ける。

茶矢もだんだん冷静になり、少女の話を真面目に聞く。

涙目の少女は両手で涙を拭うがぼろぼろとこぼれ落ちる。

「だからね、まーくん、茶矢お姉ちゃんがいないきゃ、ダメなの。ロボロなの。ぐちゃぐちゃ音が混じって、茶矢お姉ちゃんがいるとそれが落ち着いて、まーくん安心して、まーくん本当は皆といたいの。無理してるの。」

「詩律ちゃん。」

茶矢が床に膝をついて詩律を抱きしめる。

詩律は涙を拭うのに忙しく、嗚咽を漏らしそうになる口をキュときつく閉じる。

茶矢には話の内容があまり伝わらなかったが、正軌が関わってる、正軌が辛い、正軌が無理をしているという事だけはわかった。

静かに泣く詩律の後ろ髪を撫で下ろしていると、

ガチャ、ガン！

「おい、それ、ハアツ、由にも詳しく聞かせろ。ツア、ハツ、暑い。」

茶矢の後ろの扉が乱暴に開けられた。

驚く二人の視線の先には、肩で息をする汗だくの由。

走ってきたらしく、顔が赤い。

機嫌が頗る悪いらしく、それが顔に出ている。

キャリアバックを無造作に玄関の靴箱の前に置き、ドサツと詩律の横に腰掛ける。

―由は間に合わなかった。

それは正軌の靴を確認しなくてもわかる。

全速力で喫煙者が走ったとしても遅いとわかっていたが、僅か数パーセントに賭けて炎天下を走った。

まだ彼が残っている事を願って。

だが、やはり駄目だった。

…しかし、一人の有力な情報が残されていた。

小さな少女が必死に語る話は、玄関の扉の前で少し立ち聞きをした。

それが嘘じゃない事は、内容からして断言できる。

真実だと、由は信じた。

額を流れる汗を腕で何度も拭う。

前髪を耳にかけ、ほてった顔を詩律に向けた。

由の顔は正軌程ではないが、恐い部類だ。

てつきり子供なら恐がるかと思っていたが、逆に詩律は近づいた。涙で腫らした目を、ジツと由に向ける。

由も見つめ返した。

口からハア、ハアと熱い息が短く吐き出される。

クーラーが効いた家の中は涼しい。

夏だというのに快適だ。

由はもう一度言った。

「由に、その話の詳しい内容を話せ。由は、宮古の仲間の一人だ。」  
「：うん、お姉ちゃんに教える。お姉ちゃんは、“まーくん達”を知ってるから。：お願い、まーくんを助けてあげて。失くなっちゃう前に、お願い。」

汗も気にせず由の肩に顔を押し付ける詩律の背中を、返事の代わりにポンと叩いた。

その時の由の表情は兵士のように勇ましく、とても心強いものだった。

## 中編（夏休み）

慌てて家を出た。

行き先など決めていなかったが、取り敢えず誰もいない場所を目指そうとした。

自転車の存在を忘れて駅に向かおうと走り出した時、一台の車が前からのろのろとこちらに向かって走っていた。

運転席に座る人銀髪に気づいて、何故か安心した自分がいた。

俺より圧倒的に強い人なら心配いらなから。

それに、瀬戸さんならメシアと違って手加減しないだろう。

あいつはきつと俺相手に気を遣ったからあんなった。

そう考えるのが一番正しいと思う。

キッ、とあまり音を起てずに車は俺の横で停まった。

助手席の扉が開けられる。

中からヒンヤリとした風が流れた。

執事服姿の瀬戸さんが顔を覗かせる。

「乗りますか？」

たった一言。

強制ではない選択肢を出され、一瞬躊躇う自分がいた。

ちらっと家を振り返り、そっと目を閉じてから中に入り込む。

シートベルトをすると車は急発進し、家から早々と遠ざかった。

車が去った数分後に由が到着。

項垂れる由の先に光が射すのは、数秒後。

車は町から街に移動する。

ちよつと行った場所、由君の家辺りまで行くと落ち着いた場所がだんだん賑やかになる。

道路が広くなり、車や人が多くなり、店が大きくなり、栄えていくのがわかる。

別の国に來たみたいだ、とぼんやり車の中から外を眺める。

瀬戸さんは何も話さない。

車の中は曲名を知らないクラシックが流れる。

音楽に疎い俺にはわからないが、茶矢や皆月ならわかるかもしれない。

ピッコロとバイオリニストだし。

ただの俺の予想だけど。

そういえば皆月の演奏は聴いた事ないな。

あいつは安々と人前で弾いてくれなさそうだからな、今度一か八か頼んでみるか。

即座に断られそうだけど。

あ、茶矢なら知ってるかな。

今度こっそりどんなもんか尋ねてみよう。

『?』

気づいたら、知らない土地を車は走っていた。  
高級住宅街みたいな、俺が住んでいるのとは違う静けさが漂う。  
大きな家が多く建ち並ぶ。

今更だけど、瀬戸さんは何処に向かっているのだろうか。

勢いに任せて乗り込んでしまったが、てか何故瀬戸さんはいたのだろうか。

よくわからないな。

もし誘拐する為だったら手っ取り早かっただろうな。  
獲物が自ら望んで籠の鳥になったのだから。

まあ、俺も電車に乗って遠くまで行くつもりだったし、問題ないか。

晩御飯までには帰してほしいな。

茶矢と約束したから。

詩律の事も心配だし、源希がいるからそこまで悩まなくても大丈夫だろうけど。

真尋や和葉さん達は可愛がってくれそうだし。

由君も姐御肌タイプだからブチブチ言いながらも遊んでくれそう  
だ。

問題はメシアと皆月だな。

メシアは…帰ったら逃げずに謝るとして、皆月は『子供は嫌いですよ。うっとうしいし』って前に言ってたからなあ。

ある意味一番の問題かもしれない。

キイツ、

車が一軒の大きな屋敷の中に入った。

俺の家の何倍あるだろうか。

とにかく広くてデカイ。

…いかん、帰りたくなってきた。

こんな場違いの中にいるのは堪えられない。  
けれど車は前進して降りられない。

大きな屋敷を車は通り過ぎ、隅の離れ家らしき建物の前で停められた。

「一旦降りて下さい。私は車を置いてきますので。」  
『わ、わかりました。』

頭をぶつけないように屈んで外に出る。

離れ家は俺の家より小さいが、あまり大差はないようにも思える。  
金持ちは凄いな：うん、離れ家でこんなに大きいのか。

二階建てって、うわ。

どうしよう、こっそり帰っても良いかな。

離れ家を仰いで後退りしていると、ポンと肩を叩かれた。

ビクッと肩を跳ねさせて振り返ると、何時からか背後に瀬戸さんが立っていた。

足音しなかったけど、俺が緊張しているせいかな？

気配はなかった、うん、なかった。

執事ってそういうものなのか？

へえー、恐いな。

「どうされました？」

『あ、いえ。この屋敷の広さに圧倒されていただけです。』

「そうですか。この離れは私や広瀬達の住まいです。」

今お嬢様達は避暑地に出向かれており、屋敷には小数の使用人しか残っておりません。肩の力を脱いで下さい。」

『：お嬢様達？』

「あゆお嬢様や、屋敷の主人の旦那様と奥様です。」

『あゆ：どっかで聞き覚えがあるような。誰でしたっけ？』

「！？」

空を見上げて考える俺に瀬戸さんが驚愕の表情を浮かべる。  
唇に指を添えて記憶を辿るが中々目当てのモノが見つからない。

あゆ、あゆ：鮎？

んー、思い出せない。

お嬢様って事は女だよな。

俺と一度でも会ったか？

ともかく、全然知らない人物だな。

うん、考え込むの終了。

瀬戸さんを見上げて苦笑いをする。

結局思い出せない。

『すみません、俺の気のせいでした。あゆって人、記憶になかったです。』

「本当、に？」

『はい。どうしました？』

「：いえ。」

立ち話もそこそこに、中に入りましょう。」

『お邪魔します。』

背中を軽く押され中に促された。

ペコッと軽く頭を下げて、怖ず怖ずと開けられた扉を潜る。

中を呆然と見渡している俺の後ろで、カチャリと鍵が閉められていたのに気づいていなかった。



「ん…」

「あ、やっと起きやがった。」

「由、か。?!」

「お昼ご飯置いてありますよ。」

「…。」

今だ痛む頭を抑えながら上半身を起こすメシアに声をかける由と茶矢。

茶矢の後ろでジト目で睨む詩律を目に映してしまい、メシアは後退りした。

またあの甲高い大声で泣きわめかれてしまうと困るので先ず耳を塞いだ。

詩律は茶矢越しに睨み据えるだけで泣く様子はない。

馬鹿にしたようにハアと息を吐く由がメシアの両手を耳からベリツと剥がした。

状況が読めず、いつの間にかベッドに寝ていた事にも驚いたりして周りの三人の顔をキョロキョロと見回す。

呆れる由にジトと睨む詩律、一人麦茶を飲む茶矢。

由ならともかく、何故他の二人が部屋にいるのかわからない。

ベッドを背もたれにする由が空のコップをコトンとテーブルに置いて、メシアを睨み上げた。

「で、気絶するまでの経緯を由に話せ。チビスケの話と照合すつか

ら。」

「何時、来た？」

「一時間前だ。早くしろ。」

口調に怒りを込め、話を促す。

メシアは気絶する前と突然言われ、深呼吸をしながら少しずつ思  
い出す。

冗談半分で襲った事、目を離して笑った間に入れ代わった事、あ  
の気怠い口調に暴力的な彼。

必死に足首をつかんだが踵で脳を蹴り飛ばされ、そこから記憶が  
ない。

思い出す度にズキズキ痛みだす体を叱り付け、話す為に口を開く。  
―けれど、他の二人に気づいて再び口を閉じた。

ピロとの約束が邪魔をした。

そんなメシアを見兼ねて、由がベッドから床に引っ張り落とした。  
肘を打ち激痛が走る。

キツと睨むメシアを真顔で見下し、彼女にしては冷静な声で喋る。

「茶矢には本人が当たり障りない部分を話していたし、詩律は力で  
気づいていた。お前がグースカ寝てる合間に補足しといたわ。ミヤ  
がどうした、緊急事態だ。あいつが行方くらましやがったから人手  
が必要だった、はい終了。文句言うならあいつが入れ代わって自力  
で戻って来いって話だ。んな約束に縛られてるお前は、宮古が何か  
あった後に絶対悔やむぞ。だったら宮古が無事で、後でミヤに何か  
される方が断然良いし。由はそう思うな。草食系男子気取りかキメ  
エ。」

「：殺されるかもしれないぞ？」

「本人が喋ったのに補足して何が悪い。少しでも結局は喋ったんだ。  
そのうちバレんだし、知ったのが早まったただけだ。」

それに、コイツらがペラペラ周りに広めるように見えるか？もしそ

うだったら由が締めるから結果オーライだ。」

「されませんよ。言い触らすなんて馬鹿馬鹿しい。」

「…話す理由がない。」

「だそうだ。」

淡々と持論を並べる由はカッコイイ。

潔く、けれどちゃんと考えている。

二人に正軌の事を確認してから補足したのも勢い任せの行動ではない。

普段短気な彼女がとても冷静に物事を考えている。

危険を回避する言い訳も尤もらしい。

メシアは彼女と出会って、初めて心強いと感じた。

一方的に喧嘩してばかりの相手が、己よりも頼りがいがある。

うじうじしていた自分自身を恥じて、メシアは顔を上げた。

『やつとか』と隣から厭味を言われたが今は気にならない。

メシアは語りはじめた。

「正軌が部屋に入って来たところまでは本人だった。」

茶矢と由に殴られるかもしれないな、と内心苦笑しながら話す。

けれど、嫌な気はしない。

三人共、いや四人共根本は同じ人を心に思っているのだから。

当たり前の仕打ちだ、とメシアは気持ちいが安らぐのを感じていた。

話している時の顔は笑っていたかもしれないな。

最後に彼に付けられた痣を見せると語りは終わる。

メシアも初めて見る痣に驚いたが、冷静だった。

全員、口を挟まずにメシアの言葉に耳を傾けた。

詩律は終始茶矢に引っ付いていたが、最後までいた。

茶矢は香織の一件もあり、そこまで気分は悪くならなかった。由は元々そういう耐性があるのか話の途中から何か思案をしていた。

メシアはアメリカではする方だったので慣れている。服を着直し、由に顔を向ける。

今現在、リーダーみたいなのは由だ。

他の二人も由に注目する。

ブツブツと呟く彼女は何か考えがあるようだ。

しかしそれを使うのは嫌そうだ。

眉間に皺を寄せて別の方法を考えるが、浮かばないらしい。

髪をガシガシと掻きむしりボサボサにさせる。

腹をくくったのか、ダンッ！と立ち上がった。

「由がレディースって言われる理由に連れてってやる。あいつらに手伝ってもらうしかねえ。」

けど、ちびっ子とチビスケは留守番だ。流石に危ねえから。

黒澤はマスク用意しとけ。ヤク中いっから。ま、そいつが今の頭だけど。」

「ヤク中とは何だ？」

「貴女はどんな場所にいたのですか。」

私と詩律ちゃんは正軌先輩が帰宅したら連絡します。家は任せて下さい。」

「はいはい、お綺麗な奴らは大人しくしてな。こっちは汚れた奴らで探すから。」

怪訝な顔をする茶矢にシッシツと犬を追い払うように手を動かす。メシアが今だに“ヤク中”について質問するが、由はシカトを決め込む。

ジッと見上げる詩律に気づいて由は視線だけで聞く。

茶矢の服を掴んだ少女は、コテンと首を傾げる。

「…お姉ちゃん、大怪我するの？」

「しねえよ。ヘマすりゃ大怪我だが、喧嘩慣れしてるコイツがいつから大丈夫だ。」

「…けど、この人連れて行くの、嫌でしょ。」

「まあな。女多いからムカつくがイケメンのコイツ連れてくのは面倒だ。」

「イケメン？池面？なんだそれは。」

「あーはいはいはい。さっさと行くぞ。目的地の前に由の家寄るぞ。」

「んじゃ、いつてきー。」

「由、教えろ。」

「見送りくらいしますよ。詩律ちゃん、行きましょう。」

「…。」

茶矢に手を引かれて部屋を出る詩律だが、話をはぐらかした彼女を見透かすように先を歩く背中をジッと見上げる。

由はキャリーバックから適当に何かを取り出し、源希に頼んで手に入れたマスクをメシアに渡して家を出る。

見送られる視線の中に違うモノを背中に感じたが、気づかないフリして歩いた。

## 中編（夏休み）

目の前の人は、忘れていた。  
あゆお嬢様の事を。

「フウ。」

さて、それは私の“目的”を叶える為にはとても助かるのだが、これからどうしようか。

広瀬は手続きの為に掛けている、帰るのは遅くなるはず。  
たまに不意をつかれるから油断はならない。  
あいつは兄の私でも読めない。

しかし、相手は飛行機の中ではあれほど私に殺意を抱いていたというのに、今では緊張しながらも出した紅茶に口をつけている。  
うたぐる事をしないのだろうか。

毒が入っているとか考えないのか。

初対面で注射器をぶっ挿す、誘拐、軟禁をした男の出した物を。  
私なら飲んだフリをしてやり過ごす。

一先ず、何があっても相手について行かない。

この人は真っ直ぐだ。

約束だって、こちらが破るとは思わずに律儀に従って。

広瀬にあんな事されても、動物園であんな発言するから。

それほど周りが大切か。

自分よりも、友人が。

勉強はできるようだが、危険と判断するラインが低い。

今時珍しい、根は純粋なタイプか。

見た目や別人格はアレだが、いや、主体がこんなだから釣り合いがとれているか。

成る程、これなら納得がいく。

『どうしました？』

「いえ、これからどうしようか考えていただけです。」

『そうでしたか。』

そういえば、このネックレスいつまで着けなければならないのですか？』

チャリ、

服の下から発信機を埋め込んだネックレスを取り出すターゲット、

宮古 正軌。

本人や周りは気づいていないようだ。

外されて地面にたたき付けた時は本当に焦った。

嫌な音がしたし、走り回るターゲットに気づかれずに探すのは至難の技。

それ以前に面倒臭い。

旅館に戻って来た時は安心した。

お嬢様にどやされずに済んだから。

近頃冷たいのに、見向きもされなくなったらクビだ。

今の不景気、再就職するのは辛いな。

外人だから日本人よりもっと厳しい。

やっぱり同じ職業で探すのが無難か。

いやいや、まだクビになったとは決まってるないし。

止めよう、本当になりそうで怖い。

そういえばネックレスだったよな。

あゆお嬢様忘れているしな、正直もうどうでもいい。

けど何かあった場合の保険にもなるし、着けさせておこうか。  
うん、決定。

機材片付けるのが面倒なだけではない。

広瀬の言葉は関係ない。

適当に話しておくか。

「学校が始まったら、ポケットにでも入れておいて下さい。身につけるのは嫌でしょう。」

『わかりました。』

「部屋を移動しましょうか。ついて来てください。」

『?はい。』

やる事がないなら、ついでに術をやってしまおう。

今の彼ならかかりやすいだろう。

明日の早朝にまたやって、様子みて、あゆお嬢様が飽きたら……  
私が貰おうか。

練習台になってもらおう。

手伝いとかしてもらうと、少しは時間に余裕ができるだろう。

馬鹿ではないし、知恵はある。

背も高いから外で使える。

欠点大きいが、どうにかなるだろ。

部屋の扉を開けて彼を促す。

素直に中に入る彼に気づかれないよう小さく笑む。

これから先が楽しみだ。



叫んだ。

古びた廃墟の前で、力の限り。

周りに轟く怒声のような奇声にメシアは顔を顰め（シカメ）、横目で彼女を睨み迷惑そうに耳を塞ぐ。

彼女の手にはメガホンが握られている。

それが余計彼女の音を拡大させる。

辺りに人が住むような建物はないが、隣に立つメシアは迷惑窮まり（キワマリ）ない。

鼓膜が破れそうなほどの大音響にメシアの額に青筋が浮かんでいる。

もうそろそろぶちギレそうだが、目的が目的だけに堪えている。本当はぶん殴りたいが堪えている。

気はそこまで長くないが堪えている。

肺活量が人並み以上の彼女はまだ続けている。

大きすぎて何を発しているのかメシアには聞き取れない。

もし建物の中に人がいたら由を怒鳴りに走って現れるだろうが、目の前には人氣が皆無。

メシアはそろそろ血管が破裂しそうだ。

きつちり二分、そこでピタリと音が止む。

由はメガホンを下ろした。

腹に添えていた手を強く握り、肩で息をする。

息継ぎもあまりせず二分も叫んでいたのだ。

馬拉ソンで数キロメートル走った時のような疲労が彼女を襲う。

膝に手をつき、けれど建物を睨み付ける彼女の先に何があるのだろうか。

メシアも両手を下ろし、荒い呼吸を繰り返す彼女を見下ろす。  
建物は今だシン：としていた。

こんな静寂な所に由が言う人達がいるようには思えない。  
けれど彼女の目は本気だ。

来た時からずっと建物から目を離していない。

数分が経過した。

二人は建物の前に立ち並ぶ。

由は顔を歪ませた。

いないかもしれないという不安が頭を過ぎる。

♪♪♪♪♪：

ポケットに突っ込んだ携帯電話が震えた。

キィ、と建物の端の方の窓が開いた。

そこからダランと垂れた青白い腕が中へと手招く動きをする。

由は喜び勇んでメシアの背中をバチン！と叩いた。

叩かれた背中がヒリヒリして、先程の苛立ちもあり由につかみ掛  
かろうとするが、彼女は走って建物の中に消えてしまった。

マスクの中が蒸れるのに更に苛々するが、メシアも彼女の後ろを  
追った。

中はとても広く、埃っぽい。

マスクをしたメシアでさえもむせ返る。

古く壊れた物があちらこちら無造作にある。

建物の中にまで蔦や蔓が壁に張り付いており、明らかに掃除され  
ていない。

人が住めるのか甚だ疑問な場所だが、確かに人はいた。

住んでいるかは知らないが、いるにはいた。

由は道筋を熟知しているのか、人が通れそうにないガラクタの山を軽々と越える。

体育ですぐに息を切らす彼女とは思えない早さでメシアを置いて先に行く。

どんどん前へ進む彼女を追うメシアだが、なんせ足場が悪すぎる。体制を崩したり、躓いたり（ツマヅイタリ）、舞い上がる埃に視界を遮られたり、一向に彼女との距離は縮まらず離れてしまう。

遂に由はガラクタの山を乗り越え、汚い絨毯の上にトスツと降り立つ。

髪についた汚れを手で払い落とし、まだ後ろでもたついているメシアを腰に手を当てて見上げる。

足場に手を着けて少しずつ上るメシア。

手は黒くなり、ジーパンには埃や塵や何かの破片などの汚れが。外に比べて涼しい建物内だが、彼の額からは新しい汗がガラクタの上に落ちる。

腕で汗を拭い、指でマスクとの間を広げ空気を入れ換えた。

見た目以上の足場の悪さに息は乱れていないが、足腰に予想以上の疲れが溜まっている。

最後は由に腕を強引に引かれ、やっと平らな床に足を着けた。

パツと由の手から腕を外し『どうも』とだけ言う。

頭にくる物言いにカチンとくるが、由は何とか堪え、フンと鼻を鳴らして先を歩く。

メシアも黙って後続く。

木々が陽射しが入るのを邪魔する場所に建つ建物は、大人が近づくのも畏れるほど、風がザアア：と吹き抜けるのも酷く響き渡り、二つの足音が廊下を跳ね返り二人の鼓膜を震わせる、恐ろしいほど全てが静まり返っていた。

部屋で正軌の人格に蹴られた箇所や踏まれた腹がジンジンと痛むが、メシアは顔色一つ変えずに歩く。

彼は弱い部分を他人には見せない。

アメリカの路地裏で生き残る為に身につけた防衛本能、ある種の癖でもある。

弱っている己は仲間やシェイルにも見せたくない。

目の前の由なら尚更嫌がる。

犬猿の仲だし、馬鹿にされるし、見下されるし、お互い嫌っているし、何よりライバルだから。

一応認めてはいるのだ。

口にはしないだけで。

今後もある気はないけれど。

頭痛は大分引いたので大丈夫。

右手の拳を強く握り締め、ある人を思い痛みを忘れようとする。

けれど濡れたマスクの呼吸のしにくいなのなんの。

そもそも建物に入る前に付けければ良いのに、何故宮古家から付けて来たのだろうか。

一緒に歩いた由にとっても疑問だが、メシア本人はマスクを渡された時点から律儀に言い付けを守っている。

日本人にはわかるけれど外人にはわからない日本語の意味。

ああ難しい。

あの青白い腕が手招きをした部屋の前。

扉に向けて片足を不自然に上げた由が、ふと思い出したようにメシアを見上げた。

スツと今まで通っていた廊下を指差す。

指差す反対側は、草が生えている壁。

二人の後ろは水垢が何層も張り付いた窓ガラスを嵌めた、外開き

の窓のみ。

ここは二階である。

「お前あっち注意してろ。何か襲ってきやがったら相手してやれ。」

「由は何するんだ。」

「安々通してくれたあの人と“話をする”。」

ウイイイイインン！！

指差していた方向からチェンソー独特の刃が回転する耳障りな音。メシアはマスクを付けた顔をそちらに向けると、やはりチェンソーがあった。

ボロボロのタンクトップや短パンを身に纏う女が、数メートル離れた場所でチェンソーを構えている。

顔を布で巻いているのもあるが、遠くて表情は読めない。

彼女の前でチェンソーは煩い金切り声のような音を発している。

ガンン！！

由は扉を蹴破った。

文字通り、普通手で押し開ける扉を、彼女は当たり前のような顔で壊した。

不自然に上げていた片足で。

古びた木製の扉はたやすく由の足元に倒れ伏す。

部屋の中は、今まで通り過ぎた際に開いていた扉から見えた部屋と似たような構造だが、この部屋だけは小綺麗に掃除されていた。

窓際に一脚の椅子と少し離れた場所にベッド。

箆笥やテーブルなど生活する為の必需品は揃っているが、壁は他と大差ない。

中に人はいなかった。

何処かに隠れているかもしれない。

警戒して入るべき所なのに、由はズカズカと遠慮なしに入室。

メシアの前には人が増えていた。

それらは女が多く、全員手に何かしら凶器を下げていた。

チェンソーやノコギリ、金づちなど、掠っただけでも重傷を負う物に小さく舌打ちする。

カッターナイフやパイプなどは慣れているが、流石に大物は難しい。

―しかし、相手が動き出す様子はない。

お互い一定の距離を保ったまま、それらはメシアを見つめるのみ。

沢山の瞳にジロジロと全身をなめ回すように見回され、気持ち悪さに顔をしかめる。

部屋の中から由が呼びかけた。

「マスク取んなよ。此処の最初のルールだから。」

「……。」

「何もしなかったらあいづらもしねえ。そんなくらい堪えろ。」

「了解。」

カツカツとブーツを鳴らして部屋を一周する由。

ハァー…と長い溜息を吐いた。

窓際に設置してある椅子を蹴飛ばした。

ガラッ、ゴッと重い金属が転がる音が続き、椅子は壁にぶつかった。

古びた椅子は木片の隙間から鉄がちらほらと姿を表す。

元は鉄製の椅子をカモフラージュの為に、外見をボロボロの木の椅子に見せ掛けていたようだ。

ぶつかった壁に穴が空き、そこから小麦粉のように白い粉が入った小さな袋がこぼれ落ちる。

これがヤクである。

由はそれに見向きもせず、メシアがいる入口に戻った。

ぞろぞろ数を増やす奴らを目を細めて見下し、両手をポケットに突っ込んで声を張る。

「おいお前ら！今から由の話しきけよ！」

よく通る彼女の声は最後尾まで余裕で届く。

随分上からの物言いだ。

従う奴がいるのだろうか。

キュルルウウウウ：

チェンソーを構えていた一番前の女が、チェンソーの電源を切った。

他の奴らも彼女にならない、武器をその場に置いたり、ドサツと落したり、ポケットにしまったりし始める。

聞く準備が整った奴は後ろに腕を組んで、足を肩幅くらい開く。

これが彼、彼女らの話を聞く姿勢らしい。

シィーンと物音一つしない空間。

メシアは感心していた。

偉そうな言い方に腹をたてずに従順に従う彼、彼女らに。

拍手しそうになる手を後ろで組み、気を紛らわせた。

由が一步前に出て、スーハーと数回深呼吸。

乾燥した唇をペロリと舐め、また大きな声を出す。

彼、彼女らは黙って由達を見つめた。

「内容はさっき叫んだ通り！約束は守った！そちらの答えを教えてください！」

「質問を受けるのは誰？」

コッ、

彼、彼女らの中からニット帽を被った高身長的女性が前に出た。前髪は鼻先まであり、くせ毛の髪は肩につかないほど短い。

スラッとした体形だが、胸は由より大きい。

夏なのに白い肌は日焼けを知らない。

女性は腰に片手を添え、唇に笑みを浮かべたまま返事を待つ。

チラッと後ろにいたメシアを盗み見ると、由はグイッと前に引く張った。

メシアはぼーっと会話を傍観していたので、突然引く張られ躓いてしまった。

すぐに体制を持ち直して、腕を掴む由の手を解こうとする。

が、また下に引かれ、耳元で囁かれる。

小さな呟きはスツと耳に入る。

掴む手に力がこもる。

「今から言うあの人の質問に、全て『はい』って答えろ。矛盾していても、絶対嫌でも、脅迫されても、全て『はい』だ。無言も禁止。それ以外を答えれば、宮古を探すのが困難になるし、お前の体の一部が潰されると思え。実際に違う答えを言って、由の目の前でも何十の奴らがいっつらに潰された。

絶対に『はい』だ。良いな？」

「…わかった。」

「もう終わったかしら？」

「ああ。始めてくれ。」

由がメシアを前に差し出した。

マスクの中の熱さに髪が肌に張り付く。



ポタ、と床に滴が落ちる。

頬が赤く染まり、今メシアは外でサウナに入っている状態。

涼しいといっても夏に変わりはない。

クーラーや扇風機もない建物は暑い。

立っているだけでもしんどい。

ガチャガチャ、パシッ、

ニット帽の後ろの奴らが床に置いた凶器を取り始めた。

そのうちの十数人がぞろぞろとチェンソーとニット帽の彼女らの後ろから、武器を下げたままメシアに近づく。

男女十数人がメシアを、四人が由を取り囲む。

「構えて。」

チャッ。

ニット帽の命令に、それぞれの凶器を二人に向ける。

首や後頭部、顔に腹に足に腕、心臓など、鋭い刃は確実に人間の急所を狙う。

揺るぎのない殺意。

後ろの由も、首と背中、太股や腹に刃先を当てられている。

白い目で見える彼、彼女らはロボットのようになら動かない。

メシアと由も一センチも動けない。

ニット帽の後ろには鉄球や小型ナイフ、拳銃のような物を二人に向けて構える奴ら。

袋の中の鼠の二人だが、メシアは恐怖を微塵も感じていない。

由はメシアがヘマをしないかハラハラ。

腕組みをし、緊迫した空気の中、メシアの後ろ姿を見据える。

ニット帽の女性がカツカツと靴を鳴らして歩き、人を挟んでメシアと向かい合う。

人の間から長く細い物を片手で持ち上げた。

チャキ、

鋏の部分が若干錆びている、通販で売ってそうな長い枝切り鋏の刃を開き、その間にメシアの耳を軽く挟む。

老人でも簡単に持ち上げられる軽い物で、離れた距離でも楽々枝が切り落とせる。

ニット帽の女性が左手に力を込めれば、メシアの左耳は失くなる。冷や汗が二人の背中を流れた。

逃げる事は許されない。

女性はニッと口裂け女のように口角を吊り上げて、質問を始めた。

「今から質問を始める。ルールは中馬から聞いた通りで間違いない。私の問い掛け全てに『はい』と答えて。私が『お疲れ様』と言うまで。

わかった？」

「はい。」

「じゃあ、開始。」

質問という名の精神破壊を。

## 中編（夏休み）

正軌さんは『晩御飯には帰る』と私に伝えた。

それをあの方達はちゃんと聞いていたのでしょうか。

全く、手のかかる子供ですね。

はやとちりして炎天下の外に出て、危ない場所に赴くとは。

じっと家で待機して帰りを待てば、笑顔で『お帰りなさい』と出迎えば良いのに。

せっかちな方々です。

携帯電話だって持っていらっしゃるのに。

：電話、しても良いでしょうか。

やはり不安は隠せません。

正軌さんが関わってるなら、やはり。

今何処にいらっしゃるかだけでも、教えてくだされば。

一声聞ければ、もうそれだけで。

それだけで安心する。

大丈夫なんだ、ただ外に出掛けただけなんだ、そう思える。

よし、電話しよう。

何もしていないのは、悩むのは性に合わない。

カタッ。

「茶矢？どこ行くのー？」

「電話です。私用ですので、源希君に関係ありません。」

「ふーん。ところでさ、兄貴達は？」

「！！！」

ギクッ！

今リビングには二人だけ。

真尋君と浅倉先輩は詩律ちゃんを連れて買い物に出掛けた。

友恵は客間でゴロゴロしている。

テレビをぼーっと観ていた源希君はサラッと鋭いところをついてくる。

感が鋭いと言いますか、私が嘘をつくのが苦手と言いますか、彼に嘘についても簡単に見破られてしまう。

今まで彼に何度か嘘や冗談を言っても、すぐに否定や訂正をされてしまっている。

プツン。

リモコンでテレビを消され、静まるリビング。

ジツと詩律ちゃんのように私を見つめる源希君は長年の付き合いからか、もう事態をわかっているように思えた。

ソファに凭ていた背を起こし、私の前まで歩く。

腰を両手で掴み、フウと溜息を吐く。

頭半分くらい高い彼をそうっと見上げると、何時もの彼だった。

仕方ないな、といった諦めている顔。

やはり源希君はわかっていた。

クシヤリと髪を撫でられ、俯いてしまう。

怒られる前の子供のように。

普段馬鹿を演じてるのに、器用貧乏のくせに、今の彼には逆らえない。

怒らないで、呆れながら髪を撫でる。

相手が話すのを黙って待つ。

こういうところは正軌さんに似てるな、とされる度に思う。

兄弟だな、と。

彼に教えたなら凄く喜びそうだが、教えてやらない。

安々と良い思いをさせてやるか。

気が向いたら、大人になったら教えてやろう。

それまで縁があればだけど。

…しかし、彼となら老人になっても親友でいそうだな、とか思っている自分がいて、教えるのは確実そうだ。

大人になっても覚えているかな、未来の私。

ま、先の話だ。

若年性アルツハイマーにならない限り大丈夫だろう。

クスクス笑っていると、源希君が不自然そうに顔を覗き込んだ。た。

こんな事を考えていたなんて、彼は知らないだろうな。

笑みを浮かべたまま彼を見上げる。

先程の不安はいつの間になくなっていった。

「正軌さんが行き先も言わずに出掛けてしまいました。源希君も気づいていたでしょう？」

「そりゃ正軌兄の弟ですからね。メシアと何かあったんでしょ？」

「お察しの通りです。けれど、“正軌さん”ではありません。」

「…誰から聞いた？」

明るい笑顔を見せていた源希君の顔が珍しく恐くなる。

目を細め、少し怒気を含ませた声で、私に一歩詰め寄る。

私は至って冷静。

静かに怒る彼を見つめ返す。

本気で怒る彼は貴重だ。

滅多に怒る事がない彼が本気で怒ってるのを見たのは、指で数えられる程度。

正軌さんに暴力&暴言で傷つけられても、周りに馬鹿にされても、

彼は常に明るく振る舞う。

源希君の性格や、生きてきた環境が関係あるけれど、彼は人間が好きなのだ。

周りも好きだし、自分自身も好き。

だから何をされてもほとんど許せる。

何言われても軽く流せる。

自分の事なら笑っていられる。

けれど、正軌さんや両親、私が関わると注意したり否定する。

彼が声を荒げたり、相手と喧嘩した理由の殆どは、正軌さんや私を酷く侮辱された時だけ。

あれは驚いたな。

楽しそうに会話していた彼が目の前で、物凄い剣幕でクラスメイトにつかみ掛かったのだから。

しかも女子に。

怒鳴っている彼を前に、私も周りもポカンと固まってしまった。

私は全然気にしてなかったのに彼が代わりに怒鳴って、最終的に泣いた。

それにまた全員ポカンとして、気がついた者から彼を慰める。

次の日には何事もなかったかのように全員に、つかみ掛かった女子にも挨拶するから驚いた。

あれは忘れられない。

一生の思い出だ。

嬉しかったよ、言葉にならないくらい。

凄く。

彼はもう覚えていないだろうけれど、とても感謝している。

『ありがとう』なんて言わない。

親友にそんな言葉必要ないから。

一生の別れの時にしか言ってやらない。

心の中では常に、貴方に。

フツ、と気を緩めた顔で話す。

こんな顔、源希君にしか見せませんよ。

わかっていますか？

伝わってなかったら怒りますからね。

脇腹に跳び蹴りですよ。

「デートの時に社の裏の崖で、正軌さんに少しだけ。今日、中馬先輩に詳しく教えてもらいました。“緊急事態”ですから。」

「：ハア、由ちゃんとメシア、やっぱり知ってたか。なら、詩律ちゃんも茶矢と一緒に教えてもらったの？」

「詩律ちゃんは正軌さん本人です。」

「ならいっか。兄貴から話したなら、きっと大丈夫。

ごめんね茶矢。」

パツと雰囲気に戻し、苦笑を浮かべて謝る源希君。

私は顔を左右に振る。

「気にしていません。勘違いするのわかりますし。

では、今の状況を簡単に説明します。席に座りましょう。」

「うん！」

ニカツと歯を見せる嬉しそうな源希君に、先程の面影は微塵もない。

人懐っこそうな、明るいチャラ男。

切り替えが早いな。

まあ、そこが彼の長所の一つでもあるけれど。

ダイニングテーブルに隣同士に座り、説明を始めた。

建物の中は静寂と人で満ちていた。

メシアはずっとニット帽の女性を睨んでいる。

一方、女性はそんなメシアと愉快そうに向き合う。

チェーンソーの女や由とメシアを取り囲む周りはマネキンみたいにピクリとも動かない。

よく訓練されている。

ニット帽の女は枝切り鋏の刃の間にメシアの耳を挟んだまま、カクンと壊れた人形のように首を真横に倒した。

不気味な女をメシアは黙って睨み据える。

睨む事しか彼には出来ない。

疲労はピークに達していた。

女は『質問をする』と言ったが、かれこれ十分ほどこのやり取りが繰り返されていて、質問などは全くされない。

苛立ち始める彼だが、由の注意通りなにも言葉を発しない。

短気の彼がここまで我慢出来たのは、今いない人との楽しい思い出と、今日の晩御飯を頭に思い浮かばせているから。

お腹が空いて更に苛々したのは言うまでもない。

何も話さなかったニット帽の女が、やっと口を開いた。

待ち侘びたメシアは大きな溜息を吐き出す。



しかし、次の瞬間、女の驚愕の問い掛けに、薄黄色の瞳を見開かせた。

ニット帽の女は涼しそうな顔で言う。

「君のその耳、切り落として良い？」

「……はい。」

「そう。」

間があつたものの、メシアは『はい』と答えた。

由はそれにホッと胸を撫で下ろす。

ニコニコと楽しそうに女は笑む。

何が面白いのか二人にはわからない。

女の鋏が動き身構えるメシア。

切り落とされる、覚悟は決まっていた。

スッ、

―だが、枝切り鋏は耳から離れ、カシャンと女の手の中で短くなる。

メシアは訳がわからなかった。

左耳は無事。

切り落とすと言ったのに、何故凶器を手元に？

混乱状態のメシアを見透かすように女はクスクス笑う。

由は手に汗を握り、深く深呼吸をして気を落ち着かせる。

これがこの人のやり方なのだ。

後はメシアがヘマをしないかどうか。

それが二人の今後を左右する。

もし一度でも間違えれば、由も大怪我を負う。

この事を言ったらメシアの妨げになりそうなので、敢えて教えていない。

ただ、全問正解するのを願うだけ。

知り合いが周りにいるのに気が休まらない。

早く終われば良い。

心の底からそう思った。

女の姿はメシアに隠れて見えないが、女愛用のニット帽が人の隙間から見え隠れする。

声だけが由の耳に入るのみ。

彼女も気が長い方ではないので、トントントントンと軽い足踏みを始めた。

貧乏揺すりのように一定のリズムで右足を動かす。

「じゃあ、その腕チギッテイイ？」

「…はい。」

カタカタと歯を鳴らして笑う女。

指差した右腕にはカッターが押し当てられていた。

目だけで刃先を注意する。

押し当てている女はメシアの答えに、スッとカッターを下ろした。けれどジッと白い目で彼を見つめたまま。

何となくルールが読めてきた。

ニット帽の女は指先を移動させる。

「君の足を切り落としてイイ？」

「はい。」

今度はハッキリとした口調で言い切った。

すると、予想通り太股に当てられていた鎌が下ろされる。

しかしカッターの女同様、男はメシアを無言で見つめる。

気色悪いが、我慢。

女は尚も質問を続ける。

「指を食べてイイ？」

「はい。」

「舌を引き抜いてイイ？」

「はい。」

「腹を切り開いてハラワタを引きずり出してイイ？」

「はい。」

「だるまにしてもイイ？」

「はい。」

「鼻を削ぎ落としてイイ？」

「はい。」

「綺麗な髪の毛をむしり取ってイイ？」

「はい。」

「××を踏み潰してイイ？」

「はい。」

「うわぁ…。」

最後の質問に女の由の方が痛そうな顔をした。

多分メシアは所々何を言っているのか理解していない。

それが不幸中の幸い。

意味不明な言葉を言われても、ただ『はい』と答えれば良いだけなのだから。

メシアを取り囲む彼、彼女らは次々に凶器を下ろす。

目玉だけがメシアを捕え、逃げる事を許さない。

息苦しい閉塞感。

マスクを外したい。

呼吸を楽しみたい。

が、それすら叶わない現状。

メシアの答えに周りの凶器は全て下ろされ、次はチェーンソーの

後ろの凶器が一つずつダランと下ろされる。

メシアに向けられる凶器はなくなった。

パチパチパチ……！！

枝切り鋏の先を肩に乗せたニット帽の女は両手を叩いた。

一人、拍手を響かせる。

……そろそろ最後だな。

由とメシアは生唾を同時に飲み込んだ。

先を知る者と知らぬ者の緊張感。

トン、と女は枝切り鋏をメシアの中心に当て、薄く笑む。

突かれたら、死ぬ。

少し緩んでいた気を引き締める。

女はまた人差し指をたてた。

「じゃあ、最後の質問ね。普通の人間がよくもまあここまで堪えたもんだよ。途中で逃げ出す奴らが多いのに。こんな蒸し暑い中、マスク付けてさ。」

「……。」

「はいはい。じゃ、最後ね？」

「はい。」

トン。

枝切り鋏の先端が床に着く。

女はスツとメシアの後ろを指差した。

嫌な予感が駆け巡る。

ギロツと女を見下ろすが、それは女を逆なでするのみ。

鋭い目つきにブルツと体を震わせ喜ぶ。

イカレテいる、メシアは今すぐに由を連れて帰りたくなった。

女は声高らかに質問した。  
これから先を夢見るように。

「あんた逃がしてやるからさあ、中馬、殺してイイかなああ!？」  
「っ!？」

「馬鹿! 答えろ黒澤!!」

後ろで由が怒鳴る。

けれど、自分以外の人間が関わるとなると簡単に肯定出来る訳がない。

必死に頭を巡らせて、一番最良の解答をメシアはニット帽の女に怒鳴り付けるよう答えた。

「コイツには一切触れるな!!!」

「…それが君の答えか。」

「ば、馬鹿野郎!!」

「ああ。」

肩で呼吸を繰り返すメシアに、女は静かに言った。

由は絶望した。

まさかこんなところで、最後の最後にヘマをやらかすなんて。

目の前が真っ暗に暗転する。

…これで終わった。

メシアは大怪我を負い、由は出入り禁止を言い渡される。

探す手懸かりを、失った。

その場に立ち尽くす由。

ニット帽の女は、ゆっくり唇を動かす。

言葉を作る為に。

メシアはジッと女を見つめた。

由はもう何もかも投げ出したくなり、前髪をグシヤリと掴む。  
女の顔は、何故か穏やかだった。

「お疲れ様でした。

いやぁー、上手いね。一本取られちゃったよ。

合格合格ー。はい皆お疲れー。氣い緩めてちょーだい。」

「...」

「あゝ！疲れた。」

「お兄さんイケメンじゃない？由なんかほっというて、あたしと付き合わなくいい？」

「にしてもデカイな、お前。日本人じゃねえだろ？」

「.....ハアッ!？」

ガバッ！

顔を勢いよく上げた由が見たものは、想像とは全く違った風景。  
皆さん凶器をしまつて、メシアの周りにワラワラと集まって話  
掛けている。

メシアを何処かに誘おうと体を押し付ける女もいるが、メシアは  
無表情を貫く。

由の周りにいた彼、彼女らも『お疲れさん』とか『いやぁー、カ  
ッコイイねえーあの子』と笑っている。

ニット帽の女は由に近づき、グイッと首に腕を回した。

歯を見せ、滅多に見えない目が彼女を映す。

「なーにしかけた面してんのよ。相方合格したんだから、素直に喜び  
なさい。ったく、そんなんだからあんたは胸が小さいのよ。成長し

ねえな。」

「なっ!?! あんたがデカイだけだわ!! 久しぶりの会話の始めがこれって、やっぱ“邦<sup>クニ</sup>さん”最低だ!!」

「あ、やっぱ気にしてんの? 何なら大きくしてやろっか? あたしの手で。」

「遠慮する!! 離れろ!!!!」

引きはがそうと“邦”と呼ぶニット帽の女の顔を押す由。

怒りを露に、けれど顔を青ざめて必死に離そうとするが邦はびくともしない。

代わりに顔を近づけてキスをしようとする邦の顔を由は必死に顔を押し返す。

ブンブン頭を左右に振りまくる由と邦のやり取りを、周りは爆笑して傍観。

日常茶飯事らしい。

グイッ。

突然手首を引かれ、由が邦の魔の手から解放される。  
引っ張ったのはいつの間にか前に立っていたメシア。  
腰に手を当てる邦に向かってマスクを指差す。

「外して良いか? 暑い。」

「どーぞ。もう必要ないだろうし。“あの人”に会うのはあんただけでしょ? 中馬。」

「あ、ああ。」

そうだ! 何であんなんで黒澤が合格したんだよ!?! あれは不合格だろ!!!

「相変わらず頭弱いですね、流石です。」

「んだと!?!」

カチャ、カチャ、ズズッ…、ザリッ、

二人の後ろからチェーンソーの女が喋った。

メシアはマスクを外し、ポケットにしまう。

青筋を額に浮かべる由に無表情の女はボソボソと呟くように喋り続ける。

「お久しぶりです元副隊長、今僕は特攻隊長です、凄いでしょ凄いでしょ？ 由さんより年下なのに上とか、僕の方が実力者ですね、ハハ。」

「ウツゼ！！お前は口を開いたら由を挑発する言葉しか言えねえのか“<sup>スズナ</sup>菰”！！」

チェーンソーを両手に、由よりも背が低い菰と呼ばれた女はずっと由だけを見つめて歩く。

メシア何か視界に入っていない様子で、近くに来てもずっと由だけを瞳に映している。

短い前髪の下は幼い顔立ちの女。

後ろ髪も短く切られておりそのせいで余計若く見える。

由は菰の額を人差し指でグリグリするが彼女はギョロ目で彼女を見詰める。

「何で何で？ 何で何ですか？ 褒めてくれないの？ 菰頑張っていないくなった由さんの穴埋めしたのに、昇進したのに、レベルアップしたのに何で？ 『頑張ったな』『よくやったな』って褒めるのが普通でしょ、由さんやっぱ頭弱いですね、ハハハハハ。」

「……あああ！！よくやった。お前は頑張ったよ。だから離れろ！」

「そんな投げやりな言い方で菰が満足すると思ってるんですか？ 思っ



てるんですか？まだまだですね、ちょっと嬉しいとか思っていないですからね。」

「邦さん、どうかしてくれ。」

「ムッリー。あんた辞めた後、こっちは大変だったんだからね。報いなさい。」

「……マジか。」

「「「マジマジ。」」」」

由と菰、メシア以外の全員が賛同して頷く。

由が辞めた後の事故やら苦労やらを思い出して遠い目をする者もいる。

それほど酷かったようだ。

顔だけ近づける菰を見下ろし、由は頭痛を覚える。

思い当たる節が幾つもあるらしい。

取り敢えず全員に『お疲れ様』と言っておく。

ハアーと長い溜息を全員で吐いた。

コテンと首を傾げるメシアは終始茅の外。

疲れている由を見下ろしている。

ポン。

と菰の頭に手を置いた。

キョトン顔の彼女に苦笑いを向けて、由は謝った。

「悪かった。よく昇進したな。偉いぞ。」

「……っふう。」

「ククッ、泣き虫は相変わらずだな。」

「わー、これで解決。皆、これから由がちよくちよく顔出してくれるらしいよー。係決める必要なくなったよー。」

「っは！？由は、夢の為に、辞めたんだ。今更戻れっか。」

「月一でいーから。毎週“菰制止係”決めるの辛いんだからさー。」  
「イ・ヤ・ダ。」

下唇を噛み締め、ポロポロ涙を零す菰の顔を肩に押し付けた。  
断固拒否する由の頑固っぷり。

周りが説得をするが聞く耳を持たない。

グスグス泣き続ける菰の髪を撫でる手は優しい。

周りがメシアも宥めるよう促すが、メシアはただ一つの事を思っていた。

「（早く正軌を探さないのか？）」

## 中編（夏休み）

――逃げ出した。

正軌の体は、何も考えていないような無表情で鞆を掴んで走る。後ろからは噎せながら（ムセナガラ）私服で追いかける瀬戸。

腹と胸の中心辺りに蹴飛ばされた時の跡がくっきり残っている。

苦々しい表情でターゲットの捕獲を謀る。

走る事に慣れているのか、お互い距離が縮まらない。

身長差を覆すように顔色一つ変えずに走る正軌の体。

一ミリも変わらぬ、手を伸ばしても届かぬもどかしい距離に、瀬戸は大きく舌打ちをした。

飄々と瀬戸の前を走る正軌の体は前を向いたまま、誰かに話し掛けるように独り言を言う。

瀬戸に対してではなく、別の誰か。

親しいような、けれどそこまで共にいない相手に。

『不愉快極まりない。あんな男に触られ、変な事をされるなんて私には堪えられません。悍ましい（オゾマシイ）。』

『んなら、俺がもう一発顔面に食らわせるか？』

『やめなさい。触りたくありません。』

淡々と話す彼が一瞬、怒りだけを表に出したような表情を浮かべ、不良のような荒々しい口調で最後に大きく舌打ちをする。

拳を握る手に力が籠るが、また一瞬で先程の無表情に変換された。そして前の人格、炎の言葉をやんわり叱る。

その後に自分自身の我が儘を添えて。

今、現れている人格、水はチラッと後ろを確認した。

瀬戸はスピードを緩める様子は微塵もなく、定規のように真っ直

ぐ彼らの後を追う。

女の子だったら良かったのに、と水は悲しみと残念な気持ちをこっさり溜息に乘せて吐いた。

もうすぐ門に着く。

その前に水は一人ぼやく。

中で待機する炎に向けて。

『しかし、炎はもう少し“女らしく”できませんか？先程あの人を蹴飛ばしたのも、「俺」を一人称にするのも、私が貴方を「彼」と呼ぶのは違和感バリバリでそろそろ限界です。』

『女に気安く触った代償にしては安いもんだろ。』

『そういう話ではありません。ハア。』

『お前が男らしくなりゃ考えてやるよ。』

『男らしいですよ。』

『どこがだ、よっ！』

タンッ！

閉まっていた自分の背丈以上の大きな鉄製の門を、炎は飛び越えた。

まるで学校の体育でした棒高跳びをするように。

門の前で追い詰めて連れ戻す予定だった瀬戸は、予定外の正軌の体の行動に愕然と、己でも不可能に近い事をやり遂げた彼らに驚愕をした。

ガシャン！と門を後ろ脚で蹴り、着地への衝撃を軽減させる。

タンッ、と片膝を着けてヒーローが登場するシーンのように華麗に着地。

結構な距離を走ったが全く息を乱していない正軌の体。

アスリートも感服するであろう。

パンパンと汚れを払い落とし、門越しに肩で息をする瀬戸に向け

て中指だけ立てて見せる。

プラス舌を出して彼を挑発。  
最後に皮肉を。

『あんたが俺に催眠術使うなんざ百万年早いわボオケカス!!二度とそのブツサイクな面見せん!!』

『流石に言い過ぎですよ。けれど、顔の表現は賛同しましょう。では、失礼します。』

ペコリと頭を下げ、タタツと彼らはその場を後にした。

頭の中の筋書きをグシャグシャにされてしまった瀬戸は固まっていたが、軽々と走り去る足音に我に返る。

何の未練もない屋敷に背を向けている正軌の体を、遠ざかる後ろ姿を、数分前とは反対に黙って見送った。

照り付ける日差しの下、流れる汗をそのままに含み笑いをする瀬戸は不気味だった。

目には妖しい光が宿り、何か危ない事を考えていそうな顔。  
実際に危ない事を企んでいる。

「これは直しがいがある：フッフ。」

危険な顔を曝したまま、門から体を離れた。

己の玩具を手に入れる為に、ゆったりとした足取りで仮住まいへと歩いていく。

その一步一步は、これから瀬戸が想像するモノへと近づくような恐怖を与える。

瀬戸は笑いが止まらなかった。

――  
太陽が傾いて日本から温もりを無くす手前の夕焼けの光は、この古びた建物にも平等に与えられる。

窓からその光が差し込む長い廊下を、前から邦、次に由、最後に菰と見た目三十代の男の順番で歩いていく。

三十代の男は一応幹部的地位だが、影が薄く、あまり目立たないのがコンプレックスだったりしている。

名字は“影森”と今の彼を表しているかのよう。

残念な人である。

廊下を進む全員口を閉じ、誰一人無言を壊そうとする患者はいない。

四人が向かっている部屋に続く廊下は、チーム内の暗黙のルール、絶対煩くしない。

叫び声なんかあげれば、後の事は目に見えているからだ。

面倒事に進んで関わりたくはない、普通の人間ならそう思うし、喧嘩好きの四人も同意見である。

これだけは絶対に避けたい。

知る人ぞ知る、新入りが先ず初めに先輩に注意されるルール。

因みに、メシアは別の部屋でメンバーに囲まれ、早く正軌を探しに行きたい気持ちを抑えながら待機中。

グツと狼は我慢してます。

——そういえば、メシアの合格理由の説明を忘れていた。  
簡単な事だけど、一応解説するよ。

廊下を歩く前にまだわかっていない由に邦が教えてやった。

「『コイツには一切触れるな』を片仮名表記にすると、『コイツニ  
“ハイ” ツサイフレルナ』。真ん中でちゃんと『はい』って言うって  
る。あたしは“他の言葉を付け加えたらいけない”って一切言って  
ないからね。つまり、条件満たしながらも、あんたを守ろうとした  
のよ。外人のこの子の方が、日本人のあんたより賢いわよ。ププー。」

「んだと!?!」

だそうだ。

みんなわかったかな?

取り敢えずメシアに拍手ー。  
パチパチパチ。

廊下の端から二番目の部屋の前。

懐かしい臭いと傷跡で飾る扉の前に、緊張からかゴクリと固唾を  
飲み込む由。

三人は手に汗を握る由の後ろで、何があっても対応出来るようス  
タンバイ。

この傷だらけの、汚いという表現もあながち間違いではない扉が  
開かれた瞬間から、何が起こっても可笑しくない。

そんな世界なのだ。

異次元と称しても過言ではないその場所と現実の境目の扉の金属  
が剥がれまくっているドアノブを、彼女の手が掴んだ。

後ろの三人にジェスチャーで合図して、

カチャ：

恐る恐る回した。

――30分後。

日本が暗くなり始め、他の建物が一切ないこの場所はお化け屋敷よりも不気味なほど真っ暗。

建物内の蠟燭の光だけがゆらゆらと揺れ、建物の気味悪さを一層際立たせる。

その建物の玄関から、数十人の人間が現れた。

その中の由と邦、影森は何故かボロボロ。

理由はメシア以外が知る。

菰は運転免許が無い為、他の者達と共に家に帰らされた。

バイクに乗れる大人や学生は由のメールに添付された写真の正軌を確認。

それぞれのバイクに一人や二人乗り、バイク特有のエンジン音を辺りに主張するように轟かせる。

邦の後ろに由、影森の後ろにメシアが跨がった。

多くの女性に後ろに座るよう誘われたが、前の方を走る影森に頼んだ時の女性陣の嫉妬の対象は当然影森に集中。

一度も誘っていないのに、メシアが頼んだのに、メシアから影森にお願いした事で更に女性陣を怒りの炎で熱くさせ、とばかりをくらってしまった影森は、イケメンを今まで以上嫌いになりました。プラス、自分より遥かに高い、若い男を妬みました。

自分の三十路を過ぎた年齢、平凡な容姿に、日本人らしい身長、それら全てに彼は泣いた。

仲間の男性らと由が心情を察し、同情の眼差しを向けるが、影森より若い年齢なので逆に惨めな気持ちになってしまった。



メシアは全く気づいた様子はなく、片腕だけ影森に回しているのが屈辱的。

邦は一人、影森の不幸をネタに大笑い。

それを由が注意するが、全く止むことを知らない笑い声が影森に突き刺さる。

家に帰ったら文句を言ってやる、と彼の妻、邦の方を睨むが、彼女は笑いすぎて涙を拭っていた。

影森と視線が合うと、また小馬鹿にしたような相手を不快にさせる笑い方をする。

自分に素直な、本能に忠実な彼女に、影森は別の涙を流した。

茶矢からの連絡はまだない。

夕飯の時間はとくに過ぎた。

堅物の正軌が約束を守るなら、今現れているのが“正軌”ならば、もしくは“ピロ”だったなら、帰宅している。

連絡が無いという事は、別の人格か、もしくは正軌に何かあったのか。

こんな時に何故“彼”がいないのか、一番正軌を考えている“ピロ”が何故…。

ネオンの光が眩しい街中を走りながら由は下唇を噛んだ。

悔しさと苛立ちと不安がごちゃまぜになった表情を浮かべるが、すぐ消した。

考えていても何も変わらないから。

だったら、手伝ってくれている人達に感謝して、あいつを捜しだそう。

それしか出来ないから。

十字路から更に分散して、今は影森達と邦達のバイクだけ。

メシアは終始真剣な顔で行き交う人々の中に見知った顔を探す。痛めつけられた部分は触れても平気になった。

頭痛もうしない。

もう大丈夫だから、一刻も早く帰ってほしい。  
それだけが望み。

何もいらないから、彼の顔を見て安心したい。  
叫んで名前を叫びたい衝動にかられるが、再会した時の事を考  
えて声を控える。

大声で彼の名前を呼ぶ為に。

沢山言葉をかける為に。

彼が戻って来た、と安心する為に。

「もしもし田中さん!?!」

後ろの由が田中さんと電話をしているがメシアは必死に高身長  
の正軌を、目まぐるしく変わる景色から見つけ出そうとする。

最近猫背気味だから難しいだろうかという不安が過ぎるが、そ  
こまで身長が変わる筈はないと言い聞かせる。

「本当かそれ!?!?」

メシアの真剣な表情に徐々に不安が表れ始めた時、由の怒鳴り  
声が耳をつんざく。

普段なら厭味を含めた注意をするが、話の内容に彼女の方を勢  
よく振り返る。

「宮古がそこにいんだな!?!!」

「……正軌が?」

「影森! 次の路地で停まるわよ!?!」

「あいよ!?!」

車を獣のように擦り抜ける二台のバイクが列をなして路地裏に吸い込まれる。

ヘルメットを外した邦と影森はバイクに跨がったまま由に注目する。

完全に停車する前にメシアは飛び降り、由の前に駆け寄る。

元々ヘルメットを着けていない高校生達は髪をボサボサにさせたまま携帯電話に耳を当てる。

驚きに半口を開けた由と渴いた唇を舐めるメシア。

電話越しの気怠い声と女の子らしい男の子の声は、メシア達を囲む緊張感で張り詰められた空気に相応しくない。

男性特有の低く渋い声が、希望の光をさす。

二人の気持ちを余所に、田中さんは何でもない事のように話を続けた。

「さっき瑠璃に家の前を掃除させようとしたら倒れてたんだとよ。控室に連れてって、今は寝かせてる。汗びっしりで息も荒いし、魘れてやがる。足が熱いから長距離走ったっぽいぞ。早く迎えに来てくれや。」

「正軌頭痛そうだぞー。由が何かしたのか？最低！」

「違いし！勘違いすんな！！」

「今行く！正軌を頼む！」

「邦さん！影森さん！田中さん家まで頼む！」

「あいよ。」

「兄ちゃん行くぞ！！」

狭い路地裏に大きな轟音が二つ、ネオンから離れ、四人は此処からそう遠くない建物を目指した。

目的の人物を宝探しの宝を発見したように、散々探し回り、やっとの思いで手に入ったお宝。

∴大人しく待ってろよ。

## 中編（夏休み）

行かなくちゃ。

早く帰らないと。

約束が、待ってる人がいる。

俺なんかを待っててくれる人が。

こんな俺を迎えてくれる奴がいるから。

俺が“忘れない”うちに、一秒でも早く。

…茶矢、ごめんな。

―ガチャ、

「正軌ー、カレーあるけど食べる？…あれ？

健！正軌どうした！？」

「親父を呼び捨てすんな、馬鹿息子。そこに寝てんだろ。」

「いないけど？」

「は？」

田中親子の視線の先、もし誰かが倒れた場合に造られた控室の、薄汚れた白いシーツの簡易ベッドの上。

そこには、数十分前まで健よりも大きい体、正軌が横たわっていた。

眉間に皺を深く刻み、全身をほてらせ、頭痛が酷いのか魘れながら何度も頭を抱え込み、起きる気配が全くなかった高校生。

それが今、簡易ベッドの掛け布団は元からそうあったかのように綺麗に畳まれていて、シーツ同様の枕も正しい位置に置かれてある。もしかしたら健が配置するよりも、ちゃんとした形かもしれない。ただ一つ欠点なのは、急いでいたのか正軌の体の一部と言っても

過言ではない“黒縁眼鏡”を忘れた事。

コレ無しで、彼はこういった方法で帰るのだろう。

五体満足の人間が日常生活を送る為に必要な五感の内、一番トツプで頼り切っている“視界”をペナルティーに、どうやって？

頭を抱える際に誤って床に落としてしまったのだろう。

カチャ、

見た目だけで使い古されているとわかる眼鏡を健は摘み上げ、今日も女物の服を身に纏うが違和感が仕事をしない、寧ろ似合っている中性的な顔立ちの息子を見下ろす。

此処の管理者であり、対等の存在であり、煙草や酒を子供の前でするダメダメな大人であり、自分の父親である健を、瑠璃は敬意を破片も持ち合わせていない普段から使っているタメ口で問い掛ける。父親の威厳のカケラも息子に感じさせていない健は、それを煙草を蒸しながら見下ろす。

「由に連絡いれとけ。宮古が消えた、ってな。」

「えー、面倒。」

「俺はそこら辺探してくっから。」

「仕方ないなーもう。」

ぶりっ子のように可愛らしく頬を膨らませ、薄生地で通気性のある、フリルがそこそこ使われたスカートのポケットから携帯電話を取り出した。

片手をくびれ辺りに当て、ツンと小さな唇を尖らせ、横髪を耳に掛けて露になった耳に携帯電話を軽く当て、受話器から聞こえるコール音を部屋を出る猫背の健の背を見送りながら止むのを待つ。

ボサボサの短い黒髪をガシガシと掻きむしり、“Red tree”管理者である証、と此処で演奏するバンド達の間で噂されている

るよれよれ黒エプロンを身につけた健は、息子の視線を背に受けたままホールを若干がに股で歩く。

見た目、年相応の歩き方をする自分の父親を呆れた顔で見つめるながら、胸の内で『（ああはなりたくないな）』と小さくぼやく瑠璃。

子は親の背を見て育つ、少年の将来がどうなるのか楽しみである。

悲しいほどに父親らしさが存在しないが、一部のバンド達には“親父”と親しみを込めて呼ばれている健は、ゆっっくりと立ち止まった。

それはとても奇妙な光景。

探し人のデカイ体が背負われ、高校生くらいの背丈の、殆ど同じ容姿の四人の子供達に建物の外に運ばれている、とても不思議な光景。

正軌はまだ気絶しているのか、死人のようにピクリとも動かない。まるでガリバーの物語の一部のようだな、とぼんやりそう思ったのと、準備運動もせずに走り出したのはほぼ同時。

遠ざかる見知った姿を見失わぬよう全速力で追い掛ける健の存在に気づいた一人が他の三人に警告したのか、それぞれ別の表情で健を確認すると、当然四人も速度を上げる。

半泣きの、今にも泣き叫びそうなくちゃぐちゃの顔で最後尾を走る奴が、正軌の背中を押しながら片手を挙げる。

それから喚くように三人に言った。

「うえーん！あの顎髭怖いよお！！それに、ターゲットがデカすぎだよお！！」

「此処の管理者、ネームは田中 健でしたね。予想を超える足の早さは想定外です。」

半泣きの奴は喋り終えたのか片手を下ろし、両手で背負われてい

る正軌の背中を押しながら走る。

続いて、最後尾と同じように片手を上げ、優雅な口調と動作の奴が喋った。

優雅な口調の奴は、外見からして堅物と思わせる無表情で正軌を背負いながら走る奴の右側を、スツと片手を下ろし、健を物珍しそうにジロジロ観察しながら走る。

何年ぶりに走っただろうかとか、瑠璃の学校で行った“親子二人三脚リレー”ぶりだろうかとか、昔は陸上部だったとか、昔より衰えたとか、昔ならとくに追いついてるとか、めっちゃ辛いとか、色んな事を考えながら必死に走る健は息切れをおこしていた。三十か四十代の喫煙者には相当キツイ。

無表情の奴の左側を正軌の荷物を肩に掛けながら走る、小動物のようのにのほんとした顔の奴は人差し指を頬に当てて何か考えている。

優雅な口調の奴はまた片手を挙げてから口を開いた。

視線は健から離していない。

「命令を放棄する訳ではありませんが、ターゲットを田中 健に任せてみてはいかがでしょう？」

「えー、此お処おまできて手放すのおイヤ。」

「うわーん！理由を教えてー！」

堅物の奴以外、二人は片手を挙げて即答した。

堅物の奴は終始前だけを見据え、己よりも一回り大きい体を背に、獣のように走り続けている。

二人は手を下ろし、優雅な口調の奴が答えるのを待つ。

優雅な口調の奴はやっと健から視線は外し、手を挙げたまま堅物の奴に顔を向けた。

「命令は“ターゲットを無事帰宅させる”事です。あの方はあゆ様と接触された事は一度もありませんし、ターゲットをターゲットの



友人に引き渡すだけのようです。

ならば、苦勞せずに命令を完了させたくはありませんか？」

「なるほどおね。でもさあ、今更どおやって？」

「降ろしましょう。」

「えっ!？」

「賛成。あんたは？」

「怖くなるなら賛成――!! 顎髭が益々怖いよおお!!」

「じゃあ、降ろしますか。」

ピタッ、ドサッ!

「!？」

一番先頭を走っていた堅物の奴が、今まで走らせていたラジコンの操作を突然止めたように立ち止まると、背中から正軌を落とした。突然の事態にフラフラの健も一瞬息を止める。

クルッと綺麗に回れ右をし、既に手を下ろしている三人を一度見回すと、堅物の奴は三人と同じように軽く片手を挙げ、

「作戦を中断。新たな作戦を告げる。

これから二人はターゲットが無事帰宅するか物影から注意。残る二人は駐車場に置いたバイクを取りに行き、二人を迎えに行く。無事任務完了すれば帰還。トラブルが発生すれば、己の判断で行動。責任は各自。

意見や質問が無ければ実行。」

「了解。」

「了解!」

「了解。」

ダッ!!

チーム分けをしていないのに、二人一組、合計二組が別々の方向に散らばった。

四人共手を下ろし、健の視界からどんどん小さくなる。

フラフラと酒を飲んでいないのに千鳥足で歩く健は、やっと正軌に追いついた。

眩しい光が背中当たり、走ってきた道から二つのバイクの音。

ハアハアとだらし無い格好で息を整えながら振り返ると、案の定、由達がバイクに跨がっていた。

健にとっては懐かしい面子もいる。

その二人は笑顔で健に向けて手を振ったり、頭を下げたりして挨拶する。

「健さん！瑠璃から聞いて追いかけてきた！宮古は！？」

由がいの一番にバイクから降りて、だらし無い格好で地面に座り込む健の元に駆け寄る。

健の体は運動不足が祟って全身汗だく。

由の次にメシアが飛び降りた。

周りの煩さに気づいたのか、モゾモゾと健の前に倒れていた体が動き出した。

『腰、痛…てか、何処？』

「おう、起きたか。」

『……顔が見えない。』

「眼鏡ならあんど。」

『すみません。』

上半身をのろのろと起こし、目隠しをされた人間のようにさ迷わせていた正軌の手首が掴まれ、ポン、と目的の眼鏡をそこに乗せら

れた。

壁に向けて頭を下げて礼を言う正軌は眼鏡を掛けて、そこに誰もいない事を知る。

顔を横に向けると眼鏡を渡した張本人が同じように地面に座り込んでまま『よう』と挨拶した。

正軌はもう一度お礼を述べ、そして健の後ろの四人に気づく。

知らない男女に、よく知る二人の友達。

男性の方は誰かに連絡している。

女性は健と親しいのか笑いながら会話している。

残る二人はいつの間にか正軌の前に仁王立ちしていた。

「宮古。」

「正軌。」

ゴゴゴ：とどす黒いオーラを曝し、般若と良い勝負が出来そうなほど、鬼ヶ島にいても違和感が仕事放棄して逃げそうな、とてもとても恐い顔をして正軌を見下ろしていた。

足の怠い感覚と痛みと熱と、服がピッタリくっついて気持ち悪いのと、流れる汗と、全て引くくるめて、生命の危機を感じた正軌。イマイチ現状が把握出来ない正軌は助けを求めるように健の方を見るが、正軌が入口に倒れるまでの経緯を全く知らないので困ったように苦笑するしかない。

横に置かれていた自分の鞆を肩に掛け、鞆の中の携帯電話を確認すると、たった数時間の間に送られた着信履歴とメールの山、山、山。

この量は左手を怪我した時以来の多さ。

ボタンを下に着信履歴をザァーザーと見ていけば、茶矢と和葉、源希からもちよくちよく連絡が着ていたが二人の比ではない。正軌は足が痛むのも忘れ、そうしなくてはいけないような気がして、体が勝手に“正座”という日本が反省を表現した座り方を二人

の目の前でしていた。

「…ッハア、まーくん、いた。」

「兄貴！！…あれ？この状況は、反省中？」

詩律に手を引かれた源希が現れた。

詩律は彼女には似合わない源希の所有物の大きいヘッドホンで耳を覆い隠しており、ケーブルをi○odに差し込んだヘッドホンから微かに音楽が漏れている。

二人共走って来たのか肩で呼吸を繰り返し、源希は詩律を抱き上げた。

こうして見ると本当の兄妹のようである。

やんちゃ盛りな兄と暗く大人しい妹。

落ちないよう詩律は小さな手で源希の服を握る。

坊主が師匠に叱られる時のように頭を俯かせた正軌がちらつと二人の顔色を伺うが、二人は仁王立ちしたまま重い沈黙をズッシリ正軌だけに乗せる。

スー…とさつきよりも深く頭を下げ、どのタイミングで謝罪しようか正軌はテストの時よりも頭を使う。

ポタ、パタパタ、

不意に地面を雨が濡らした。

それは奇妙な事に正軌の前だけで、他は全く水の音も臭いもしない。

何となく、何となくこの水の正体がわかった。

ズズッ、と鼻を吸える音が聞こえ、正軌の予感確信に変わり、罪悪感に胸がズキンと痛む。

目を閉じ、スウツと息を吸い込み、フウと息を吐く。

「ごめん。」

迷わず、顔を上げた。

やっと、顔を上げられた。

メシアはやっぱり泣いていた。

隣の由君もメシアに貰ったのか、そこまで心配してくれたのか、強気の彼女が珍しく涙を零している。

視線が合うとフィツと今度は由が顔を背けられてしまったが、その先に立っていた健と男女が驚愕の表情をして固まっていたので、本当に貴重な映像だろう。

正軌はもう一度、二人に伝わるようにハッキリとした口調で同じ言葉を口にした。

「ごめん。」

詩律の力を使わなくても、それが心からの言葉だと、その場にいる誰もが感じた。

初対面の邦と影森も、一番親しい源希も、皆。

## 中編（夏休み）

『ごめんな、茶矢。  
ただいま。』

あの後、涙ぐむ由君に何故か肩に踵落とし（カカトオトシ）され、源希が宥めている間にメシアに泣き付かれ、その時に激痛に苦しむ肩に触るものだから俺まで泣きそうになったのは余談。

詩律は呻く（ウメク）俺の傍で何か聞こえるのか、初めての場所が物珍しいのか、ずっと辺りをキョロキョロしていた。

健さんや由君の知り合いの男女、邦さんと影森さん夫婦に頭を下げ、後ろに泣き付く奴を、左側にそっぽ向く由君を、右側に詩律を抱えた源希に囲まれ、帰宅。

玄関の扉を開けて驚いた。

もう深夜を過ぎている。

それなのに、茶矢は玄関に敷いてある絨毯の上に正座して待ってくれていたのだ。

申し訳ない気持ちだが、胸を締め付ける。

『ごめんな茶矢。』

「！！」

『ただいま。』

バツ！と勢いよく上げた茶矢の瞳と視線が交わった時の、ホッと安堵した気持ちと誰もいなかった寂しさを混ぜた表情を浮かべる。

けれどそれも一瞬で、茶矢は何時もの凜とした顔つきと声で、

「お帰りなさい。皆さんの晩御飯はラップしてあります。温めてま

すね。」

早口で喋った後、小走りでリビングに入る茶矢の横顔は、泣いていた。

強がりな彼女の、本心。

心配かけてしまった。

由君、メシア、源希、詩律、茶矢の時間を、俺なんかに…。

由君に蹴られて当然か。

それだけの事を、皆にしてしまったのだから。

ごめんなさい。

――――

『黒澤、狭い。』

「…。」

「三人なんだ、我慢しろ。」

『今度から布団用意するか。』

「……暑い。」

シングルベッドに高校男子二名（しかも180センチ以上）と小  
学生一人。

明かに密集してるし、詩律の言うように暑いし、広さと人数が合っていない。

詩律を真ん中に俺が壁側で、メシアが部屋の内側。寝る時に、詩律が部屋の前で熱い視線を扉の隙間から訴えるので、仕方なく招き入れて現在に至る。

メシアがいるだけでも暑いのに、扇風機の風がメシアだけに当たって俺はそろそろ熱中症になりそうだ。

三人共頬が赤く、寝苦しく、正直眠れない。ソファで眠るか。

リビングなら涼しいだろうし、クーラーもある。

一番熱が籠る場所から起き上がれると、何故かベッドに戻った。首には詩律が抱き着いていて、細い腕がギュッと離さない。

その詩律と一緒に俺の腕に抱き着くメシア。

倒れた原因の99%はコイツのせい。

詩律や茶矢くらいなら持ちこたえられる。

和葉や源希辺りから難しくなると思うが、愚弟なら取り敢えず蹴り飛ばすから問題ない。

けれど、コイツのような馬鹿力&巨体は論外。

熱いし痛いし、夏は勘弁してくれ。

二人共、俺を熱で殺したいのか？

意識が遠退きつつあるんだが。

眠気じゃなく気絶で。

詩律の背中をポンポン叩いてやると、小さな呟きが囁かれる。

あまりに小さくて、今にも消えてしまいそうだと思った。

「…………まーくんは偉いよ。ちゃんと…逃げたもん。逃げなきゃ、見つけれなかったよ。」

『…“俺”じゃない。俺は偉くないんだ。』

「まーくんだけのせいじゃない。詩律は、ちゃんと聞こえるから。」



悪い事しちゃった気持ちでいっぱいなの、わかってるから。半分は  
“この人”のせいだし。」

「メシアだ。正軌をからかっただけだ。」

『からかうなよ。』

よしよしとか細い子供の手が頭を不器用に撫で、静かな声が罪悪  
感を抱いた心を宥めてくれる。

…しかし、それに甘えたら駄目だ。

そうしたら、それをしたら、メシアにした酷い事が“無かった事  
”になる。

無数にある痛々しい色の痣に、何も言わず一人痛みに堪えるメシ  
アを、俺は否定する事になるんじゃないか？

俺がした事なのに。

俺が巻き込んでしまったのに。

俺が傷つけて、俺が悲しませ、俺が気絶させて、俺が泣かせて、  
俺が時間を割いて、俺が、俺が、

『…やっぱ下で寝る。』

「…まーくん。」

「正軌、自分は何もない。」

『黒澤…いや、メシア。やっぱ嫌いだわ。』

二人に背を向けて、髪をクシヤリと掴む。

涙声にならないようグツと唇を強く噛み、小さく呼吸。

詩律は眠たいのかうつらうつら舟を漕ぐ。

それをメシアが膝に乗せて寝かしつけが、微かに抵抗する詩律。

まだ嫌いなのだろうか、意地よりも眠気が勝ってしまい寝息をた  
てる幼い少女の寝顔を俺は見れない。

いっその事、メシアも一緒に寝てくれれば良いのに。

そう思うが、服の裾を摘む感触に失笑。

駄目だこりゃ。

俺が切り離さなきゃ、コイツ俺に殺される。

制御出来ればすんのに、残念ながらロボットのよう楽な造りじゃない。

不安そうに見つめる視線を背中に、眠る皆を起こさぬように、笑った。

自嘲のような、自虐のような、自傷のような、自重なんか知らない笑い方。

息継ぎを忘れたように矢継ぎ早に喋り始めた。

『俺、お前嫌い大嫌い優しいお前が一番嫌い。嘘つきだし俺に気遣うし馬鹿だし阿呆だしどうしようもないし、やられても反抗しねえし俺無傷なのにお前ボロボロだし。本当に頭大丈夫か？俺なんかより自分を大事にしろよ。嫌いだ嫌い大嫌いもう嫌だ。人に気を遣わせてしまうのは、正直しんどい。』

もう、構わないでくれよ。大切だから傷つけないんだ。大事に思ってるから離れたいんだ。遠目で姿を見れるだけで、良いんだ。もう充分なくらい人と一緒にいられた。一生分人と話した。高校最後に友達が出来て嬉しかった。一生の思い出だ。』

（違うだろお？正軌。）

……誰？

人が今一生懸命嫌われようとしてんのに、邪魔する奴は。

ピロじゃない、けど前に何度か聞いた覚えのある声。

とても嫌いな声が頭に響くと同時にキイーン…と耳鳴りが始まる。懐かしい痛み。

頭を抱えるとメシアが心配して手を伸ばすが、

パン！

「……！」  
『触るな。』

叩き落とした。

メシアを気にしてられない。

急いで部屋から出る。

声はまだ止まない。

（高校で初めての友達い？冗談抜きにしようや。）

どういう意味だ？

俺は小中高二まで一人だった筈だ。

友達と呼べるのは“誰も”いない。

家族さえも嫌っていたんだ。

（ヒッヒヤハハハアアア！！正軌、本当に何も覚えてねえのな  
！？はぁー愉快愉快。つまんねえ部屋の割には面白えじゃねーか。  
）

また記憶が消えてるのか？

そもそも誰だお前？

部屋を知っているという事は、一度でも“入れ代わった”んだな？

俺が知らない間に？

サラや灯のように“別の世界”があるのか！？

まだ俺が知らない世界が存在しているのか！！？

（まーまあ落ち着けよ主体。お前えの感は当たってんぜ。記憶は  
管理され、知られたら困るモノは削除されっか外されてる。けど

お、不法侵入者でボロボロにされてたけど、もう平気だぞ。俺がぶっ殺しといたからなあ。）

（“無名”<sup>ムメイ</sup>！そろそろ黙りなさい！）

（んだよ、お前えがノロマだから手伝ってやったんだろおが。締めるぞ。）

サラ、サラの声だ。

久しぶりに聞いた。

焦ってるっぽいけど、大丈夫か？

サラが呼んだ無名って、コイツの名前か？

サンダルを履いて外に出る。

公園にでも行くか。

それより、不法侵入者って誰だ？

無名が殺したって：殺した？

コイツ、何か殺したのか？

俺の中で、誰かが死んだ？

（ピロつつったか？コイツもうボロ雑巾じゃん。返事しねえし。

そのガキは使いもんになんねえし。灯の野郎ははなっから手伝う気はねえだろ。あの双子はまだ無知で馬鹿だ。“録”<sup>ロク</sup>は動けねえしなあ：お・ま・え・の・せ・い・で。

ガキ共手足に良い気なもんだ。なあ？サラ。）

（違う！違うわ！私はこの子達は私の手伝いをしてきているだけ！）

こんなに慌てているサラは初めてだ。

追い詰められてわめき立てる昼ドラの女優のように、頭にキンキン酷く響いて立っていられなくなる。

電灯の所で跪ずき、表現出来ない痛みに意味もなく声が漏れる。  
誰もいない夜道で良かった。

（全く、お前達は自分の事しか考えていないな。）  
（あ？）

また、違う声が聞こえた。  
今度は初めての声。

ビクッ。

あんなに苦しかった頭痛が引いていく。  
またこの感覚。  
意識も遠退いて、く。

ドサッ！

正軌の体が夏の夜の冷たいアスファルトの上に倒れた。  
マネキン人形のように可笑しい形で横になっているが、普通は寝返りをうったりして形を変えるが正軌の体は動かない。

寝違えてしまう心配があるが大丈夫だろうか。

こんな時に人が通り掛かると救急車を呼ばれ、あの般若と鬼神を従える神崎さんと御対面に。

主人公ピンチであるが、こんな深夜にうろついている人間に見つかるという二重の意味でピンチである。

近頃誘拐されてばかりなので尚更。

…ジャリ、ムク。

絶対寝苦しい格好でいた体が両手を使い上半身を起こす。

ガンガン後頭部を殴られているような痛みに苛々しながら、電灯を使って立ち上がる。

パンパンと全身の汚れを払い落とし、顔についた砂利も丹念に手で落とす。

最後に眼鏡を服で拭き、ハアと溜息を夜風に向けて吐いた。

スツと背筋を伸ばし、不機嫌な表情で腕を組む。

理由は彼にしかわからない。

ゴソゴソと首に掛かるネックレスを取り出したかと思うと、

ブオンツ！ガツシャアアアンツツ！！！

その腕を勢いよく振り下ろした。

コンクリートの壁に当たり、電灯に当たり、最後はアスファルトにたどり着き、チェーンのネックレスはチェーンだけになる。

正軌の体は粉々になったソレを冷めた目で見下ろすと、ガンツ！とその上に踵落としをした。

すると、姿を現す小さな機械。

指先でそれを摘むと、向こう側の人間に告げる。

静かな怒りを込めて。

『只今、黒い部分は“不可抗力”で壊れてしまいました。仕方ありませんね？“事故”なんですから。チェーンくらいは首に下げられます。一応約束とやらは守っておりますよ。では、さようなら。もう二度と会わないでしょう。』

トプン。

溝<sup>ドブ</sup>の中に小さな機械を放り投げると、先程と同じようにチェーンを首にかけ服の中に隠す。

踵を返し、自宅に引き返す。

ボサボサの髪を両手で整える正軌の体。

髪の毛が何時もより纏まっている。

（見た目なんかどーだっていーだろお？綺麗好きだねえ灯ちゃん？  
？ヒヤハハハ！）

『無名、気色悪い呼び方をするな。身嗜みを整えるのは常識、主体が気にしなさ過ぎなのだ。』

（ふうん？そんなもん？）

『私はこれから主体の代わりに動く。明日、今日の昼間には偵察に行くからちゃんと覚えろよ。』

後、主体に手を出すなよ。居場所に戻って待機してなさい。』

（はあいはい、わかりましたよー。）

玄関の前、無名や他の声が消える。

クイツと眼鏡を押し上げると、あまり音を起てずに扉を開けた。

ソファ―に横になろうとリビングに入ると、スウスウと寝息が聞こえる。

目的のソファ―からのようだ。

足音を忍ばせ、上からそつと覗き込む。

「ん…」

金と黒の髪の間に見え隠れする寝顔。

網戸だけでも此処のリビングは風通しが良く涼しい。

けれどタオルケットも掛けずに寝ていると寝冷えしてしまうだろう。

そもそも、何故彼女が客間で寝ていないのかが灯には疑問だった。邪魔くさいであろう前髪を、指先が肌が触れぬように気をつけて耳に掛けてやる。

何度か身じろいだ由だが、すぐに寝息をたてる。

クルツと由に背を向けてリビングを後にした。

タンタンと階段を上る音がして、暫くリビングは由一人になる。

が、また階段から足音が聞こえ、灯がリビングに戻って来た。

手にはタオルケットが二枚。

『君に風邪をひかれ、私に移されては困るからな。』

厭味を一つ、タオルケットを一枚、由の体に掛けてやる。

灯はソファ―の前に腰掛け、カタンと眼鏡をテーブルに置いた。

フウと息をつき、自分の体にタオルケットを巻き付け包み込み寝る準備が完了する。

ポストとソファ―に背を預け、彼は目を閉じた。

暫くすると、二つの小さな寝息が反響する。

とても静かな夜だった。



## 中編（夏休み）

よく晴れた夏の朝。

メシアは朝の5時からジョギングに出かけ、7時のこの時間になっても帰って来ていない。

だが、7時起床するのは体内時計が正確に作動している宮古兄弟と詩律くらいで、他はまだスウスウと安らかな寝息をたてている。

タンタンタン、

「くぁ…眠りたい。」

目を擦りながら階段を下りる金髪頭の男子高校生。

寝癖でボサボサの頭をそのままに、寝間着に使っているパジャマを片手に個性的なTシャツと短パンを身につけている。

同室で眠る真尋を起こさずに、布団で眠る長い彼を踏まずに、扉に彼の足が当たらないように、気を使いながら部屋で着替えた。

友恵や由なら女性なのにあまり気を使わないが、こういう常識のある面を見ると正軌と兄弟なのだと納得せざるを得ない。

見た目は近頃の男の子だが、根はやはりあの正軌の弟。

兄や友達に酷い扱いや罵声を浴びせられようが、生まれつきの人好きな性格もあり、このように成長した。

「あ、しーちゃん。オハヨー。」

「……おはよう。」

食物を人型に変化させた国民的幼児向けアニメを見ていた詩律に気づいた源希は、ニカッと人懐っこい笑顔を彼女に向けた。

当の詩律はチラッと源希に顔を向けたが、直ぐさまテレビに視線

を戻す。

このアニメが好きなようだ。

彼女の細い足が無意識にソファアの足が上下にパタパタ動いているのがその証拠。

無口で大人しいイメージの彼女が心なしか興奮している様に見える。なくもない。

小さな手に汗を握り、主人公のパンを言葉無しに応援する姿が年相応で可愛い。

熱意だけはひしひしと伝わる詩律の後ろで由が寝ている事に気づかないまま、源希は洗面所に足を運ぶ。

父親の部屋と客間の前を通り過ぎた先にある洗面所の扉を開けた。

ガチャ、

「ん？あ、正軌兄おはよ……………似合ってる！！」

『本体の弟か。朝から煩いぞ。』

洗面台の前の鏡の前に立つ正軌の体は、髪を全体的に軽く後ろの流していた。

正軌が己の意味では一生使う事はないであろうワックスを使って、だ。

眉間に皺を寄せ、普段着慣れたTシャツではなくポロシャツを着ている正軌の体。

目つきが普段よりも鋭くなり、その姿のせいで迫力が割り増している。

ワイシャツにスーツならどこぞのヤクザと間違われても可笑しくない。

てか、リアルにいそうだ。

サングラスを掛けただけで子供が泣き叫びそう。

しかし耐性がついていると言うか、人好きな彼のスキルと言うか、

生まれた時から今まで生活を共にしていたと言うか、第一声が『似合ってる!!』だったのは、流石ブラコンだと称せる。

そして正軌の体、灯の言葉に驚きもしないどころか、源希は馴れ馴れしく自己紹介を始めた。

パジャマを洗濯機に放り込み、元氣よく片手を挙げる。

「俺は正軌兄の弟の源希！高校一年生だよ☆  
名前教えてくんない？」

『源希：希望の源か。名は身を表すと言うが、君ほど良い例はないだろう。』

笹木 灯だ。説明をする必要はあるか？』

眼鏡を押し上げ、腕組みをする灯。

説明とは大方人格の事だろう。

それか入れ代わった理由。

灯の前で人差し指を額に当て数秒考えたが、源希は首を横に振った。

「んーん、特にないかな！何かあったらその時質問するし。  
何て呼べば良い？」

『好きにしなさい。ただ、呼び捨ては好かない。』

「んじゃ、兄貴でいい？」

小首を傾げて一回り大きい灯を見上げる。

普通の容姿で、同い年の男の子より少しだけ小さい彼。

容姿も中身もとても普通だと思える彼。

そんな彼に向けて、灯は小さく笑った。

馬鹿にするでもなく、蔑むでもなく、彼は小さく笑った。

『周りを混乱させないようにするには良い案だ。賢い人間には好感

を持てる。

では、私は出かけてくる。八時までには戻ろう。』

「いってらっしゃーい☆♪気をつけてねー！道わからなかったら帰ってきてよー！知らない人は無視してねー！？」

褒められた事が嬉しいのか、正軌の口で己が好きな方だと言われたのがよほど嬉しいのか、源希は何時にも増して明るかった。

飼い犬が主人に頭を撫でられ、嬉しすぎてキャンキャン鳴くみたいに。

玄関でブンブンと手を振り見送る源希の後ろに、寝起きで頭が覚醒していない由と茶矢が登場。

二人して大きな欠伸を漏らし、上機嫌過ぎてウザったい源希に疑問を抱く。

けれど、源希は二人に彼らしく大きな声で挨拶する。

二人がポカンとしながら挨拶を返すと、源希は満足そうに頷いて、スキップしながらリビングに入る。

熱中して成り行きを見守っていたアニメを見終わり、熱が冷めた表情で、夏なのに堅苦しいスーツをキッチリ着こなしてニュースを話すアナウンサーをつまらなそうに見上げる少女。

その隣に源希はストンと座り込み、ニュースそっちのけで一方的に会話を始めた。

テレビに飽きた詩律はリモコンで電源を消し、ジーと源希を見つめる。

見つめるだけで無反応。

話を聞いているのかいないのか、茶矢と由にはわからない。

身振り手振りでオーバーに話す源希と、数分経ってやっと頷くというリアクションをした詩律。

茶矢は朝食の用意を始め、由はテーブルに頬杖をつき携帯電話をいじる。

のろのろと真尋が起きてきた。

それでも源希のマシガントークは止まらない。  
着替え終わった真尋が会話に参加。

だが、主導権はテンションが高い源希。

黙って話を聞いていた詩律がモソモソと移動し、真尋の服をクイ  
クイ引っ張った。

意図を読んだ真尋は、詩律を膝の上に乗せた。

「…触っていい？」

「うん、お手柔らかに、お願いします…。」

「…ありがとうございます。」

買い物以来仲良くなった二人。

きっかけは真尋の手に残っていたあの時の傷痕。

何か気に入ったところがあるのか、帰宅してから、暇さえあれば真尋の膝上に座り、彼の腕の傷痕を見つけては指先でなぞる。

くすぐったいようなむず痒いような感覚に耐えながら、真尋は詩律の好きなようにさせる。

「ふふっ…くすぐった、いな。」

「…優しい証。勇敢な、人。温かい…な。」

「温かい、の？」

「…うん、とても…安心するよ。」

小声でぼそぼそ話す二人。

途切れ途切れだが、ちゃんと繋がっている。

まだまだ続く源希の演説にも興味を無くした詩律は、迷惑にならない程度に傷痕に触れる。

真尋も何時からか源希の話を聞かずに、くすぐったいのを堪えて  
るだけ。

友恵と和葉はまだ起きていない。

メシアも走りに出かけたまま。

灯も帰って来ていない。

リビングに子供だけだと気づいた由は、デカイ独り言を続けてる源希に話を振った。

「おい、源希。三年はどうした？」

「えっとねー、メシアは最初っからいなくて、和葉ちゃんは多分寝てて、兄貴はどっか行っちゃけど、もうすぐ帰ってくるよー！」

「……源希だけこっち来い。」

「んー？ なになにー？」

のほほんとした空気を纏う、まるで兄妹のような二人を残し、源希はニコニコ笑顔で由の隣に座る。

茶矢はずっと台所で朝食を作っていたが、終わったのか皿を並べ始めた。

ニヘラとだらし無く笑む源希の肩を寄せ、内緒話をする時の距離で顔を近づける。

近づけた彼女の表情が少し固いが、それはこの至近距離のせいではない。

ちらっと真尋を盗み見ると、話を切り出した。

「…お前が言った“兄貴”は、宮古の事か？」

「んーん、ピロ兄でもないよ。灯兄さん、俺は“兄貴”って呼んでる。」

「ツチ、あの野郎か。」

グシヤリと前髪乱暴に掴み、その手を上へと流すと共に源希から体を離す。

酷く苛立った表情。

その意味がわからず、源希は由の腕を掴んだ。

疑問を顔に表し、軽く頭を横に傾ける。

由よりも綺麗に染まっている金髪がサラッと肩からこぼれる。

「兄貴と何かあったの？」

「：別に、何もねえよ。」

あーそうだ、その兄貴には直に触んなよ。人の体温が死ぬほど嫌いらしいから。」

コッソン。

テーブルに頬杖をつき、真っ直ぐな瞳で由を見上げる彼の額を、溜息を吐き捨てながら軽く小突いた。

額を片手で抑える彼の表情は見えず、だが由は気にならないのかブチブチと修学旅行の恥ずかしい思い出に対しブチブチと文句を一人愚痴る。

茶矢が『手伝ってくださいよ』と横槍を入れるが、面倒だから由は聞かなかったフリをした。

そのやり取りに気づいた真尋が立ち上がり、その場は丸く治まる。思い返せば穴があったら入りたいくらい、とても人には話せない秘話なのか、愚痴る彼女の耳がだんだん赤く染まっていく。

口に出さなければ良いのだが、本人がその事に気づかない他に善作は見当たらぬ。

小突かれてから嵐が去ったかのように大人しくなった源希。

その彼から、彼にしては珍しい、三年に一度、あるかないかと思えるほど珍しい、小さな呟きが聞こえた。

「……………ありがと。」

「あー？何か言ったか？」

てか、この情報源、黒澤からだし、一応注意しとけよ。お前もな。」  
「……うん。」

「呼んだか？」

何時からか由と源希の間にいた詩律にも忠告する由。

子供特有の小さな頭がコクリと頷いた時、前屈みに座っていた由の後ろに：今まで行方知れずだったメシアがいた。

ポタポタと大量の汗を全身から流し、長い淡い緑色の髪は顔や首に張り付いている。

上気した頬に、口からは熱い息が上下する肩に合わせて吐き出される。

見ている方も顔を赤くさせる色っぽい姿。

だが、普段無表情を心掛けている彼の顔は、微かに戸惑いや焦りを浮かべている。

「―っ!？」

そのメシアの前に座っていた由は動けなかった。

驚きのあまりビクッ!と体を跳ね上がらせ、運悪く椅子から落ちた。

目の前に立つ詩律を掴み体勢を立て直す訳にもいかず、無理矢理体を捻り、そのままの勢いで床に倒れる。

ドタアァンッ!!

肩を強く打ち付け、膝を少し擦りむいたが、他は無傷。

詩律も源希に抱き寄せられたおかげで何ともない。

「いってえーなあ!クソ!!」

「由ちゃん大丈夫!!?」

「:.。」

「大丈夫、ですか…!？」



「何をしている。」

「朝から騒がしいですよ。」

「お前が後ろに立ってんのが悪いわボケクソ！！後、ちびっこはちったー心配しやがれ！！」

慌てて由に近づく二人に呆れた顔を向ける二人。

源希の腕の中で両手で耳を塞ぐ詩律はカタカタと震えていた。

怒鳴り付ける由を流してメシアと茶矢はそれぞれ別の場所に行く。痛む箇所を聞く源希は冷静で、隣の真尋は眉を下げ、何をすれば良いのかわからずただ肩をそつと撫でるだけ。

二組の違いは一体何なのだと苛々しながら考える由だけが一人、少女の変化に気づいた。

心配そうな表情を浮かべる源希の腕の中で、人知れず縮こまる詩律。

全身を小刻みに震わせ、不思議な事に由が最も痛む箇所を同じようにギュッと強く掴んでいる。

詩律が持つ力が原因。

耳からではなく、頭に直接響いた、由の痛み。

声に出さなくとも、音は正直に痛みを訴える。

しかも今まで大人しいかった二人の音が、由を心配し始めた為に大きくコダマした。

数秒足らずで大量の音が詩律の頭に反響し、幼い子供の脳は許容量を越える。

頭にカラオケボックスのように鳴り響くそれに対し、少女は恐怖や痛みを抱き、結果由と同じ箇所に痛みを感じるという錯覚が生まれた。

ポロポロと涙を流し、喉が引き攣って叫ぶ事も出来ない少女の後ろ姿。

「チビスケ。」

グイツ。

誰かが腹に片腕を回し、抵抗する術もなく、詩律は誰かの膝の上に尻餅をついた。

体の震えが止められず、瞳孔が開いた瞳は焦点が定まらない。

背後にいる人物、詩律を膝に乗せた人間は、スツと片手で少女の視界を暗くさせた。

空いた腕は小さな体を苦しめない程度に強めに抱きしめた。

暗闇が世界を塗り潰す。

「痛むなら、口に出せ。由が受け止めてやるから。」

「……、……頭が、痛い。音が大きくて、体が痛いよ。痛いよ、痛いよ、お姉ちゃん。」

スツと新たな涙が少女の頬をつたう。

返事の代わりに抱きしめる力が強まり、涙も量を増やす。

何もない暗闇が初めて優しく感じ、温もりがある事を知った。

あんなに煩かった音が気づけば治まっており、無意識の内に込めていた肩の力がカタン、と人形のように抜け落ちた。

縋り付くように目元の手を一回り小さい手が触れる。

もう怯えてはいない。

けれど頭痛はまだ残っているようで、痛みを受け入れる為に詩律は目を閉じた。

少女の体を抱き込む由は、まるで古いアルバムを見て昔を懐かしむような、あの日々が恋しくて淋しいような、そんな表情を浮かべていた。

周りの人間は成り行きを黙って見守り、茶矢は寝ている二人を起こしにリビングを出た。

源希は赤くなった由の肩に湿布を貼る。

何もする事がない真尋は、詩律の頭を撫で続けた。  
テレビを切ったままなので、リビングなのにとっても静かな空間。

『何があった。』

割れたガラスのように鋭い声。

この場にいる誰もが振り向かなくても声だけわかる、耳に染み付いた声。

ゆっくり振り向く由と真尋はリビングの入口に立つ人物に注目。  
時刻は予告通り八時ジャスト。

その人物の格好に違和感はなく、寧ろその通りだと言いたいが、  
正軌だと有り得ない部分が数箇所ある。

それが別人格という証拠で、本人ではないという絶対だった。

求めていた人格ではないという事実により胸がズキンと痛んだ。

丁度洗面所からメシアが現れ、その姿を視界に映した途端、酷く  
怯えた顔をした。

二、三步後退りするメシアを横目に、灯は手で眼鏡を押し上げる。

『安心しなさい。私は本体ではない。昨夜の事はあまり気にする必要はない。“どうせ彼は覚えていない”。』

「…覚えていない？」

『これ以上説明すると問題が発生する。気が向いたら教えてあげよう。』

それと源希、後で質問したい事がある。食後に部屋に来てくれ。』

「はい♪」

灯の中では話が終わった、スタスタとリビングの中に入り、静かにソファに座る。

怪我した由を全く心配せずに。

何故か悔しがる由。

帰って来た途端、上機嫌になる源希。

壁に肩を預けて立ち尽くすメシア。

泣き疲れて眠る詩律。

目の前の光景が飲み込めなくて、真尋はオロオロとするしかなかった。

## 中編（夏休み）

周りが黒い世界。

コポポポ：

水音が聞こえる。

大きなカプセル状の入れ物の中に隙間なく入ってる水。

その中に入っているモノは、一人の人間。

酸素マスクをしていないが生きている。

緩く膝を抱えた人間は目を閉じ、口から出た気泡が水上に浮く。

起きる気配はなく、人間はそこにいるだけ。

目を閉じた人間は死体のようにも見え、研究所とかにありそうだ。

水中に浮く人間は服を着ており、それが違和感を覚える。

カプセルに入っているⅡ真っ裸だろうに。

人間の黒い髪の毛が水の中で踊り、僅かに見えるその顔は、母

親の腕の中で眠る子供のように穏やかだった。

普段何もしていなくても恐い顔なのに、今は表情が柔らかい。

もうずっとこのまま、一生起こさなくてもいいように思えてしま

う。

起こしてはいけないようにさえ錯覚してしまう。

ペタ。

人間が入ったカプセルの外側に、誰かの手が触れた。

その手の主は、見た目は二十手前の少年。

前髪は目にかかるくらい長めで、後ろ髪は肩に着かないくらいの

長さの短髪。

無表情がより一層少年を歳上に見せる。

少年の向こうには、クッションの山に仰向けで寝転がっている女性がいる。

青年と同一年くらいの見た目で、口をへの字に曲げているからか不機嫌に見える。

男のように全体的に短い髪だが、胸にある膨らみが女である事を証明する。

頭の下に両手を入れ、片足を膝の上に乗せている姿は、現実にいる人間と変わりない。

こうしていると、全く双子のように思えない。

顔は瓜二つだが表情が真逆なので、別人だと言われても頷ける。ずっと人間を見つめていた少年は振り向かず話しかける。

表情に合った淡々とした口調だが、そこに見え隠れする期待が含まれている。

「前よりも確実に彼の“存在”が薄れていますね。これならば、和葉さんと再会する日は遠くありませんよ。」

「お前、本体がなくなったら全員確実に死ぬぞ？そいつがいるから、世界があるんだし、そいつの体が生きているんだろ。」

「わかっておりますよ。」

けれど：やはりテンションが上がります。和葉さんと相思相愛になったらどうしましょう？炎。」

己の頬を両手で包み、うつとりとした目で話す。

少年の名は水、女性の名は炎。

二人とも正軌の人格であり、最近創られたばかりで知らない事が多い。

他の人格との接触はまだなく、ただ正軌を保管するカプセルを見るだけ。

そこらじゅうにあるクッションとカプセルだけが存在する、まだまだ小さな世界。

正軌の記憶を読み取りたければ、黒い空間に手を突っ込めば目当てのモノが取り出せる。

それを利用して、水は暇さえあれば和葉の映像を眺めている。思い詰めたように溜め息を吐いたり、炎に相談したり、独り言を延々と語る時もある。

重傷者だ。

そんな忙しい水とは対照的に、炎はクッションの上で寝転がったまま。

たまに水の言葉に返事をする。

炎の行動の殆どは、目を閉じて、現実の音に耳を傾けること。

水が出掛けている時はカプセルの近くに寝転び、水中に浮かぶ正軌を見上げるだけ。

話しかけるでもなく、叩き起こすでもなく、傍にいただけ。

時折、ポツリと独り言を呟く。

どちらかが監視しなくてはならないのも理由に含まれるが、炎には他の理由もあり、自ら進んで世界に残っていた。

スツと今まで閉じていた目を開け、ゆっくり体を起こす。

「俺が出るわ。水よりは適任だろうし。」

「頼みます。」

「仕事サボんなよ。」

記憶を両手で抱え、ギューと抱き締めていた水に背を向ける。

だらしなくにやけていた顔をパツと無表情に切り替え、記憶のデータを元に戻す。

見送る片割れにクルッと振り返り、そのまま後ろに倒れた。

ヒュン。

黒い世界に炎の体が消えた。

二人にとっては当たり前の移動手段。

それしか方法はない。

たった一人残された水は、またカプセルに触れた。

何かを確かめるように、何度も何度も薄い赤色の入れ物を撫で回す。

「素直に『正軌』と呼ばば良いのに、頑固な人ですね。」

コツンと額をカプセルに当て、フゥと溜め息を吐いた。

朝食を食べ終わると、灯は源希だけを連れて正軌の部屋に向かった。

メシアや由、茶矢が同行しようと申し出たが、灯はさらっと断った。

『源希だけで充分です。私の質問に対して正確に答えられるのは彼しかいません。』

後、大多数いると部屋が暑いので。』

眼鏡を押し上げ、全員に背を向けた。



私情が含まれているのが彼らしいと思える。

確かに今日は昨日よりも蒸し暑い。

狭い部屋に五人も入っているのはキツイ。

タンタンと階段を上がる灯。

ヒラヒラとにこやかに手を振りながら、源希は灯の後について行った。

諦めてリビングに戻る面々だが、ただ一人、メシアだけは階段下からジッと正軌の部屋を見つめた。

詩律は由に手を引かれながら、そんな彼をジッと見つめていた。その瞳に宿る鈍い光に、ゾッと寒気を覚え、小さな体はギュッと由の足にしがみつく。

子供がする行動だと由はあまり気にせず、瑠璃にするようにポンポンと片手で背を叩いただけだった。

一方、正軌の部屋では二人が向かい合っていた。

カーペットの上に正座する灯と胡座をかく源希のアンバランス。

背筋をビシッと伸ばしている正軌の体から、何故か威圧を感じる。外見のせいだろうが、一般人が見たら怯え、そそくさと逃げ出しそう。

だが、そこは正軌の弟。

全く気にした様子はなく、呑気に欠伸を漏らした。

中々話が始まらないので、二人の横で扇風機が風を当てる為に左右に首を回すのと同じ向きに顔を動かす。

兄の手前なのに暇そう。

そんな源希を灯は黙って眺めているように見えて、実は中の人格と色々話し合いをしているらしい。

だから母親譲りのお喋りな源希が何も話さないのだ。

灯の邪魔をしない為に。

数分後、灯の瞳がやっと源希を映した。

『待たせて悪い。今準備が整った。』

「平気だよん♪で、俺に聞きたい事って？」

『本体の過去についてだ。』

ピクツ、と源希の肩が揺れた。

ニヘラとだらしない表情だったのも、その一言で心なしか辛そうに感じる。

けれど、笑顔が消えることはなかった。

無理矢理作ったのではなく、悲しみを耐えるかのように優しく笑う源希の心意はわからない。

だが、灯はそんな源希を微塵も気にせず、己の目的の為に口を開く。

慈愛にも似た作り笑いを浮かべて。

『本体が「伊崎 香織」と交流がある前に親しくしていた人物がいるだろう。その者の詳しい情報が欲しい。

色々訳あって本体の記憶が所々破壊され、現在修復に力を入れている。外部からの情報と照らし合わせて進めていく方が確実だと判断し、君に頼む事にした。

手を貸してくれないか？』

話を省略したり大きく省いたりしたが、この弟は必ず手伝うだろう、という確証があった。

記憶をざっと確認すると源希は正軌に酷く懐いているし、何をされても笑って流しているほど慕っているくらい頭が可笑しい。

勉強も本体のようにでき、性格は正軌以外の万人に好かれるようなタイプだが、ブラコンが度を過ぎて最初は引かれていたらしいし。何やら親友らしき女の子の恋路をフォローやアドバイスをしたりしている様子。

本体は全く気付いてはいないが、記憶を観覧しただけで灯にも茶

矢の気持ちはわかった。

と同時に哀れみを感じたのは余談。

こんな弟なら二つ返事で受け入れる。

さっさと修復を終わらせて本体を現実に戻す、それから外人の事をどうにかしよう。

あれから瀬戸や広瀬に四つ子、メシアを危険視する灯は早く手を打ちたくて焦っていた。

無名やサラ、炎などへの指示にも頭を悩ませ、こんな話はちょっとと済ませてしまいたい。

早く世界に戻り、取引や書類整理などの事務仕事に戻りたいな、と薄ぼんやりと頭の中で呟きながら。

「灯兄、」

本体の弟が名を呼ぶ。

肯定するのだろう、ならば笑顔を作って感謝せねば。

それだけで彼は喜ぶと知っているから。

朝のお世辞にあればどこ迄に嬉しがったんだ。

ほら、源希がニコツと笑顔を浮かべた。

彼が得意な、人懐っこい笑顔を。

妙に落ち着いた声が灯の耳に入った。

「それはイラナイよ。正軌兄には必要ない。そのままにしといて。」

『…何を言っている?』

「代わりに他の事は手伝うから、何でも言ってね!」

無邪気に微笑む彼を前に、想定外の事態が起こり困惑するしか出来ない灯。

ガッ！と源希の襟首を掴み、強引に引き寄せる。

息苦しさに表情を歪ませる源希の間近で狼狽える灯は、状況に頭がついていけない。

殴ろうか、殴って蹴飛ばして悲鳴をあげるまで痛め付ければ、コイツは言うことをきくだろうか。

混乱、怒り、疑問から黒ぐドロリとした考えが浮かび上がる。  
そんな灯の心情を察してか、

「どんなに傷つけられても、俺は言葉を曲げないよ。」

正軌兄のように。

口だけそう動かすと、ニヘラと笑った。  
まるで正軌を自慢している時のように。

―ガッッ！！

その言葉を聞いた直後、部屋に鈍い音が生まれた。  
何か固い物を殴る時のとても嫌な音。

声が無い室内に、それは何度も繰り返された。

## 中編（夏休み）

宮古 源希。

父母兄を家族に持ち、母親似のお喋りな高校生。

見た目は高校生に入ってからチャラくなり、金色に染めた髪は兄を真似して入学式の次の日に髪染めを買い、夜に自分でやった。

けれど外見に反して未成年ではならない行為は今まで一度もせず、人懐っこい性格で友達も多い。

努力家な兄に習い毎日決めた時間に机に向き合い、予習復習を怠らない勤勉な面もある。

授業中も友人に話しかけられない限り真面目に取り組み、宿題や提出物も忘れない。

成績面も性格面も文句なしの人間。

人が嫌がることはしないし、されても笑って流せる寛大な心を持つ。

両親よりも厳しい兄の長年の躾の結果。

躾の方法はバイオレンス的で酷いモノではあるが、彼の“ブラコン”という性質で難なく乗り越えている。

特に親しい者達には酷い扱いを受けている不憫なポジションの彼。世界中でたった一人だけ慕う兄の自慢話をしては、見た目とのギャップに教師やクラスメートにドン引きされた経験をもつ。

けれど親友や友達が近くに、誰よりも尊敬する兄が近からず遠からず見える場所にいたので全然気にしなかった。

見放されない“絶対”がいたから、平気だった。

：しかし、そんな彼にも心底憎んでいる存在がいる。

幼い兄弟の仲を壊し、優しかった兄を豹変させた奴。

香織と出会う前にいた、一人の男の子。

その子と複数の友人と一緒に正軌は子供らしく遊んでいた。

たまに源希も交ぜてもらったりしていた。

憎む前は大好きだった年上の男の子。

名前は宮木<sup>ミヤギ</sup> 虎<sup>トラ</sup>。

いつの間にか引越していた。

だから正軌と再会せずに済むと安心していた。

正軌の心が傷付かなくなる。

…そう思っていたのに。

この人格はぶち壊そうとするんだ。

絶対、絶対絶対話してやるもんか。

源希は固い決意を胸に、冷めた目で見詰めながら殴る灯をぼんやりとした意識で見上げた。

目の前の人間が気絶したのを合図に拳を止めた。

真っ赤に染まった手を広げる。

指の間までドロリと血が垂れて気持ち悪い。

本体の弟は顔を集中的に殴ったからか悲惨な状態。

呼吸も小さく、すぐに途切れてしまいそう。

やり過ぎた、とは微塵も思っていない。

この世界で“殺人”が許されていたら殺していた。  
計算違いだ。

もう面倒臭い。

コイツを殺してリセットしたい。

だから人肌は嫌いだ。

触った奴をめちゃくちゃにして、ボロボロにして、泣いて許しを請うくらい傷つけたくなる。

ある意味、私は無名よりも質が悪い。

：嗚呼、カーペットを汚してしまった。

洗わなければ本体が目覚めた時に大変だ。

ついでにこの“ゴミ”も片付けないと。

血生臭くてかなわない。

庭に落としたら駄目だな。

仕方ない、風呂場に放置しよう。

誰かが手当てしてくれると予想して。

（あーあ、汚れちゃったなあ。）

無名が脳内でゲラゲラと不愉快な笑い声をあげる。

確かに、服にも多少返り血がかかってしまった。

この部屋に鏡がないから全身は見えないが、きつと赤色が大半を占めている。

この服は捨てるしかないな。

着替えてしまおう。

（んじゃさあ、俺と交代しねえ？ “劣化版の削除” も終わったし、やりたいことがあるしい。）

『勝手にしろ。私は少し休むから、何かあれば起こせ。』

（はあい灯ちゃん。）

ドクン。

目の前が赤から黒に変わる。

今日は疲れた。

体を動かすことさえ大変なのに。

耳鳴りが酷い。

無名がヘマをしないか、それが一番の心配だな。

――――

タンタンタン。

階段をリズム良く下りる足音。

Tシャツにパーカーを羽織った無名はポロシャツと源希を風呂場に投げ入れた。

シャワーを冷水のまま源希に浴びせ、適当に血を洗い流す。

『んなあもんか。

じゃ、バイビー。』

ポイツとタオルを無造作に投げ、ピシャンと風呂場の扉を閉めた。自分も洗面所で手や顔を洗い、うっとうしい髪を後ろで結ぶ。



そのヘアゴムは茶矢が選んでくれた物。

上機嫌で鼻歌を歌いながら無名はリビングを覗いた。

そこにはメシアと茶矢、和葉の三人だけ。

宿題をやっていた真面目な高校生達。

真尋と由と詩律の三人は図書館に涼みに行き、友恵はテレビの前のソファに寝転がっていた。

クーラーが効いたリビングは涼しい。

けれど、無名はメシアだけを手招きして呼び寄せた。

不思議そうに見守る二人の視線を浴びながらメシアはリビングの入口まで歩く。

ニヒツといたずらっ子の笑顔を浮かべてポケットからある物を取り出した。

『明日さあ、これ見に行かない？昼飯食べた後に。』

手には映画のチケットが二枚。

正軌が以前メシアに『一緒に見に行くか』と話していたアニメ映画。

嬉しいことだが、メシアは怪訝な顔で無名を睨んだ。

「お前は、あの時の奴か。何を企んでいる？」

『ツチ、ハッキリしろよ。行くか行かないのか、今すぐ。』

「：別に構わないが。」

『んじゃ決まり。』

ちよっと出掛けてくるな。』

苛立ちを隠さずに返事を催促する無名にメシアは一応頷く。

するとまたヘラツと笑い上機嫌になる。

止めようとするメシアを無視して無名は外に出掛けた。

伸ばした手が触れる前に見た、あの目。

『ついて来るな。』

低い声は聞き慣れているのに、何故か躊躇ってしまった。  
目の前で閉まった扉を前に、メシアは拳を強く握り締めた。

家から少し歩いた駅の前。

近くにあるペットショップのガラスケースの中にいる動物と戯れる無名。

端から見れば強面の顔の男が可愛い動物を脅している光景に見える。  
てしまう。

駅の前だから人通りが多く、遠巻きに大量の奇異の目を向けられている。

そんなことを全く気にしていない彼は一番元気な子犬と喋っている。

『お前は可愛いな、もう。録が好きそうだし。あげたら喜びそうだなあ。ハア：持って帰りたい。無理だあけえど。』

「何をブツブツ呟いているのですか。気持ち悪いですよ。」

『だってえ、仕方ねーじゃん。』

背後からかけられた悪態にガラスに張り付きながら返す。

ガラスに映る人間を見上げて唇を尖らせむくれる。

背後からの人影は無名よりも高く、ラフな服装で頭に帽子を被っている。

髪を切ったのか前よりも短くなっていた。

未だ振り返ることもせずに犬とじゃれる無名に溜め息を一つ。

銀色の髪を耳にかけ、瀬戸は『行きますよ。』と移動を促した。  
けれどこの場所から動かない無名。

イラッとする瀬戸。

グイッと強引に腕を引っ張り、近くに停めた車の助手席に無名を無理矢理入れた。

抵抗はしなかったが、掴まれた腕が痛む、と抗議した彼を瀬戸は無視する。

バタン。

運転席に座り、シートベルトを絞めてから発車。

ブーブー文句を垂れ流す横の人間を瀬戸はスルーする。

諦めたのか飽きたのか、何の荷物も持っていない彼は携帯電話を弄り始めた。

大通りの交差点を左に曲がった所で漸く、無言だった瀬戸が口を開いた。

「突然あんなメールを寄越して人を呼び出しといて動かないとか、私は貴方のように暇ではないのですが。」

『いーじゃん。結局アンタは来たんだし、結果オーライ?』

「はあ、全く。宮古さんと違って貴方達は扱いづらいですよ。盗聴を壊したかと思えば、このように呼び出して。」

ぶつくさと愚痴を溢す瀬戸は眉間に皺を寄せている。

普段泣き虫でクールな印象を受ける彼にしては珍しい現象。

ヒョイと運転の邪魔にならないよう瀬戸の帽子を取った無名は顔を覗き込む。

『ありゃ、アンタイライラしてる?』

「ええ、腹立たしいほどに。仕事を中途半端に終わらせて来ましたので、早く済ませてしまいたいんです。」

『そりゃ悪かったよ、なんてな。クククッ!』

瀬戸の帽子を被り何が楽しいのか喉を鳴らして笑いこける。  
瀬戸に送られたメールには短い一文だけ。

「これから取引しましょ♪」

正軌が絶対使わない♪が入ったメール。

人格からの申し出に慌てて出掛けた瀬戸は不機嫌丸出し。

書類整理を大量に任されたのは朝。

期限は明後日の夕刻。

あの量で終わるのかわからないと途方に暮れながら黙々とやって  
いたのに。

フツフツと怒りが煮えたぎる。

助手席の彼から帽子を奪い、表情を隠すように深く被った。

チラッと静かになった隣を盗み見て呆れた。

椅子を倒して寝ているではないか。

堂々とシートベルトをせずに、仰向けで寝顔を晒す。

こうしていると正軌と変わらない。

元は正軌の体だ。

当然のことなのだが、こうも性格や言動が違えば別人に思えてし  
まっても可笑しくない。

珍しくワックスが使われた髪もその一つ。

「もうすぐ宮古さんが消えるな。」

ボソッと呟いた。

寝ている人に言ったでもなく、自分に確認したわけでもない。

ただ、口にした。

それだけだ。

『俺達が消させねえよ。』

「狸寝入りですか。」

『寝言です。』

ごそごそと身動き、瀬戸に背を向ける。

それから屋敷に着くまで、車内をクラシックのゆったりした音楽が占めた。

## 中編（夏休み）

図書館で何冊か本を借り、ちよつと寄り道してから帰路を歩く三人。

右から由、詩律、真尋の順に並んで歩く。

詩律はヘッドホンを被り頭の中の音を音楽で紛らわしていた。

このヘッドホンは詩律の物。

前回は急いでいたから源希のを借りたが本当は自分のを持っている。

選曲は朝に観ていたアニメの主題歌やシリーズ曲。

パソコンから自分でダウンロードしている。

よっぽどこのアニメが好きらしい。

「……。」

宮古家が微かに見えてきた辺りから詩律の足が重くなる。

強いノイズが頭に響き微かに声が聞こえる。

家に近づくに連れてだんだん気持ち悪くなり、最終的に真尋のズボンを掴んで座り込んでしまった。

顔を青ざめ、手で口を抑える。

異変に気づいた二人は背中を擦りながら『大丈夫？』『気分悪いか？』と労りの言葉をかける。

力がある由が詩律を抱き上げ小さい頭をポンポンと叩いて落ち着かせる。

心配そうに眉を下げて少女の背中を恐る恐る撫でる真尋の手を、

詩律は弱々しく握り締めた。

詩律は真尋を“ひろくん”と呼ぶ。

その名を呼ぶ少女の唇は震えていた。

「ひろくん、お風呂に……げんくんがいる。痛い、痛い、寒いって、泣いてるよ。……まーくん、違う、あかり？ 悲しいって。壊したくない、嫌われたくないって、何回も繰り返してる。」  
「っ!？」

窪田、今すぐ風呂場見てこい！ 最悪救急車呼べ！！ 源希が酷い怪我してる！！ 走れっ！！！！」

「は、はい！」

タッ！

図書館の本を抱えて真尋は走り出した。

長い足が馬が跳ねるようにアスファルトを駆け、ものの数秒で玄関の扉をくぐった。

キュと服を握る小さな手に手を重ね、宥めるように詩律を褒める。

「ありがとな詩律。よく教えてくれた。これでもう大丈夫だ。源希は頑丈だから、きつとすぐ笑うさ。」

「……お姉ちゃん。げんくんは、誰よりも恐がりなんだよ？」

「あー、幽霊とか苦手って言ってたな。」

「違う。幽霊だけじゃないよ。」

「は？」

フルフルと頭を左右に振って否定する。

訳がわからずに間抜けな声を出すと、ジッと見詰める瞳が語り出す。

笑顔が似合う彼が誰よりも怯えるモノを。

不思議そうに由に喋る詩律。

知らないの？ と言いたげな顔で。

「誰もいない場所が、げんくんは一番恐いんだよ？ 体の傷よりも、

お風呂に一人ぼっちの方が、げんくんは辛い。一番寂しがり屋さんだから。」

「…。」

「音に負けないように頑張るから、お姉ちゃん行こう。大勢に囲まれている方が、げんくんは嬉しいよ。……お姉ちゃんなら特に。」

意味深な言葉を最後に由から下りる。

よくわからなかった由だが、小さな手に導かれるままに家へ急いだ。

カリカリカリ。

机に向かって筆を走らせる瀬戸。

私服姿なので何時もの執事服よりはカッコよくないが、顔だけは良い。

真剣だけど気の弱そうな表情は女性の母性本能をくすぐりそうだが、その前のソファに無名が寝そべっていた。

両足首に手錠をかけられ安々と逃げられないようになっていた。前回の二の舞を踏まないよう、取引を条件に瀬戸がつけたのだ。特に気にした風もなく大人しく許諾した無名はつまらなそうに携



携帯電話を弄っている。

ガチャガチャと足を前後に動かして瀬戸が一区切りするのを待つ。テーブルに置いてあるお菓子には手をつけずにいる無名に瀬戸は顔を上げずに促す。

「その食べていいので、静かにしてもらえませんか。後少しで休憩しますから。」

『やあーだ。手え伸ばしても届かないしい。それに腹ペコじゃないもん。』

「ハア、わかりました。早く終わるよう努力します。」  
『あーい。』

駄々をこねる無名に諦めて溜め息を溢す瀬戸は、痛むこめかみを指で抑える。

瀬戸の反応にニタニタと気味の悪い笑みを浮かべる無名は、また携帯電話の画面に目を移す。

映し出されているのはアドレス帳。

ポチポチと女子高生のように両手でボタンを押し、一件ずつ削除していく。

数少ないアドレスを次々と消され、残ったのは六件。

正軌の両親、メシア、和葉に真尋、最後に茶矢。

他は全て消された。

メールも着信履歴も証拠となるものは全て。

携帯電話のアドレスも変更した。

この六人にだけアドレスのメールを送り、それから色々弄っていると携帯電話が手から無くなる。

顔をずらすと書類整理が終わったのか瀬戸が傍に立っていた。

正軌の携帯電話の画面を確認して閉じる。

「私のアドレスも削除したのですか。」

『あんたのはあ鍵つけて隠したの。本体に見つかったとメンドーだし。』

Did you understand?

(理解してくれましたあ?)』

「なるほど。」

けれど瀬戸はポケットにそれをしまい、向かい側のソファに腰掛ける。

口をへの字に曲げムスツとした顔をつくり、両手で上半身を起す。

ドサツと背もたれに体を預け、紅茶を淹れる瀬戸に手を突き出す。知らん顔で自分のカップに口付け足を組む。

『ケエタイ返してくんね? まだまだ途中なあんだけど。』

「貴方が帰る時には返します。後、その口調どうにかなりませんか?」

『これえ? 無理ムーリ。元からこんなだし、今更変えるなあんてイ・ヤ。』

「∴頭痛がします。」

正軌の唇で無名の口調を話されると、本当に違和感しかない。

灯やピロ、炎や水ならまだわかるが、無名のはナイ。

飛び抜けて変だ。

わざとらしい間延びした言葉に、時折冗談で加えられる猫なで声。ニタニタとサーカスで踊るピエロのような笑みと、機嫌が悪い時に見せる子供のような表情。

コロコロと感情によって変わる彼は、一番正軌と違う部類の人格だと瀬戸は思う。

だからこそ、彼の言動一つ一つが正軌と比べ明らかに違っているとわかる。

本当、扱いにくい。

本体が素直な分、中の奴らはひねくれている。

いや、無名は自分に素直なのか。

他と比べて警戒心が薄い。

この状況をどうにかなると思っているのだろうか。

だとしたら大した自信家だ。

力量は知らないが、先ずはお手並み拝見としよう。

瀬戸はスツと背筋を伸ばしてから本題に入る。

「で、私と取引したいとはどういうことでしょうか？」

『こっちのお願いを受け入れてくれれば、あんたの頼みもお出来る範囲きくってえこと。ど？シンプルっしょ。』

「なるほど。確かにわかりやすい。

で、そちらの要望は？」

『二つ。しかも片方はあんたにしか頼めない。』

指を二本立て、人差し指の方をクニクニと反対の手で動かして存在を強調する。

唇を引き締め、キリッとした顔つきで見詰めたかと思えば、直ぐに瀬戸を指差してゲラゲラと大笑いし始めた。

意味がわからない。

何が可笑しいのだろう。

奇妙な人格だ。

取り敢えず瀬戸は普通の人間と接する、という方法は止めた。

薬中と会話すると頭を切り換えた。

「それで？」

『一つは、伊崎 香織の記憶から宮古 正軌の削除。得意っしょ？にんげーんそおーさっ。』

「対価は高いですよ。」

『安くしてちょ。』

「拒否します。」

それで、二つ目は？」

両手を頬に添えてお願いする無名。

正直気持ち悪い。

瀬戸はバサツと無名の言葉を切り捨て話の先を促す。

『ちえ』とアヒル口にさせてポスとソファに凭れ、手足を放り投げ  
る。

けれど、すぐに身を乗り出して話し始めた。

起伏の激しい子供だな。

少し冷めた紅茶を喉に流し込み、カップを皿の上にそっと置く。

まるでこれからイタズラを仕掛ける子供のように楽しそうな無名  
はまた指を二本立てた。

今度は中指を軽く口付ける。

その指を下唇に添えたまま、無名は上目遣いで目の前の男を見上  
げた。

テレビドラマの女優のように目を細め、色っぽく笑む。

手入れのされていないかさついた唇が微かに開いた。

『“宮木 虎”の現状について、なるべく早く調べてくれない？』

ガリ。

喋り終わると同時に中指を強く噛んだ。

口端から血が垂れる彼の瞳は、まるでこれからの未来を覗てきた  
かのように嬉しさを滲ませていた。

## 中編（夏休み）

「病院は、やだな。」

風呂場で皆に囲まれながら、蚊の鳴くような声で源希は病院を頑なに拒んだ。

説得する和葉や由の言葉にもずっと頭を左右に振る。

縦に振る様子は全くない。

神崎が恐いからか、または別の理由からかは本人と詩律にしかわからない。

その詩律は脱衣所で目を閉じ、頭に流れる複数の音をじっと耐えている。

苦し気な少女に何も出来ずにいる真尋は、そっと腕の中で詩律を温めた。

少しでも痛みが和らぐよう願いを込めながら。

抱き締める力はあまり強くないが、それだけで少女は満足だった。

ザッ。

「皆さん退いてください。」

リビングから救急箱を手にした茶矢が登場。

凜とした表情でスカスカと人の輪に割り込み、源希から人を遠ざける。

そんな彼女の手当ては手慣れており、結果、源希は病院に行かずに済んだ。

由もメシアも何も言えない。

自室のベッドに横たわる彼の顔はボロボロで、服の下はメシアと同じくらい痣が咲き乱れている。

喉を殴られたのか呼吸し辛そうに眉をひそめる。

源希の部屋には二人だけ。

ベッドの傍らで源希の手を握る茶矢の顔は、先程の頼りがいのあるものとは違う。

傷だらけの親友を前にしてポロポロと堪えた涙を溢す女の子。

彼女の意地なのか絶対に声は漏らさなかった。

こうなった犯人はだいたい人間が予測出来ていて、けれど当の本人がいなければ意味がない。

メシアや由が連絡を入れても、正軌の携帯電話はずっと音信不通だった。

それが更にメシア達を不安にさせる。

昨日のようなことにならないよう強く祈るしか出来ない。

慌ただしい風呂場に友恵だけ現れなかった。

彼女は客間で自分のノートパソコンを開き、ずっと何かを探している。

ズレる眼鏡を何度も押し戻し、ずっと画面とにらめっこ。

探し物が中々見つからないのか、苛立った友恵は大きく舌打ちをした。

瀬戸はソファから立ち仕事机から救急箱を取り出す。

歯形から溢れる血。

よほど強く噛んだらしい。

唇を赤く汚す彼は服が汚れても気にしない。

しかも舌で血をいやらしく舐める始末。

本当に薬中のようにだと思ふ瀬戸。

無名の口から強引に中指を引き抜き、折り畳んだティッシュに血を染み込ませていく。

取り出した絆創膏を傷口に丁寧に巻いてやった。

ゴミをゴミ箱に入れ、再び無名の前でソファに膝を着いて跨ぐ。

ヘラヘラした顔から流れる血を親指で拭い、その指を唇に塗りつけた。

再びあのドロツとした感情が甦るのを見透かしたかのように無名は嘲笑した。

『なーに？ アンタこの体とやりたいわけえ？ 気持ちわるーい。』

「いいえ、駄目だけです。この不可思議な生き物を。色々と思えば、行く行くは手駒にします。あゆお嬢様は興味を無くされたようですし。」

『ええ、それはあム・リ。未来を決めるのはー本体だし？』

「ならば取引不成立ということだ。」

『やん、待って待って。俺様にいそこまで権限があ無いって言うたいのっ。』

ゆっくり離れる瀬戸の服を掴んで慌てて引き戻す。

先程までの余裕は何処へやら。

初めての困り顔が真実か偽りか見極めるよう無名を見下ろす。

覗き込む銀髪と僅かに距離を置こうとする無名。

どうしたものかと苦笑する目は余所を向いていて、チラと瀬戸の顔色を伺うがまた逸らされる。

唸りながら顔をしかめたり、ガシガシと頭を掻き毟ったり、どうやら中の奴らと案を練っているようだ。

急かしても無意味そうなので、瀬戸は書類の続きを行うことにした。

数分後、話が一段落したのか動きにくい足を器用に動かし、ボサボサ頭で瀬戸の前に立った。

疲れた顔でポリポリと頬を掻きながら手を差し出す。

この手の意味がわからない、といった眼差しを向けた。

『紙とおーペン、貸してくれない？』

「有料ですが。後、無理してその口調を続けなくていいです。寧ろ、しないでください。」

『やん、イジワルしないでえ。』

「残念ですが、もうお金を払われても何も貸しません。」

机に手を着いて女子のように甘えた声を出す、瀬戸には逆効果だった様子。

無視する気なのか書類に目を落とし、黙々と作業に勤しむ。

ヒラヒラと書類と自分の間で動く手は物凄く邪魔だがシカト。

焦れた無名は机の上に顎を乗せて唸った。

『ブー、虐めっ子はあ嫌われちゃうぞーっ。ペーパー&ペンくらいーじゃんイーじゃん。ケチィンぼ!』

「豚に話す権利はありません。黙りなさい。」

『あら、目はキツイけど中々のイケメンよ。奥様ちゃんと見てくださってる? ほらほら。』

「ウザイので死になさい。」

両手を頬に当てて角度を決める無名に顔を上げずに一言。

丁寧な言い方ではあるが、本音は罵声や批判を浴びせたいと思わ



れる。

無表情を保ってはいるがイライラしているのは明白。

微かに眉間に寄せられた皺がその証拠。

机の上に座ったが注意も何も言わなかった。

クイ

前から顎を掴まれ、強制的に上を向かされた。

睨み付ける瀬戸を前に涼しげな眼差しの無名は正反対のよう。

クスリと意味深な笑みを貼り付け、そっと耳に触れる。

『せっかく綺麗な顔なんだから笑いなよ。勿体無いぞ？』

「そんなのは口説き文句に入りませんが。甘いですね。」

『つまーんねえーの。ま、アンタが伝えてくれりゃいいや。

ねえ、さっきのアンタの提案以外に何かしてほしいことないの？ 主体にさせてもいいけど。』

「宮古 正軌にですか……なら、一つだけ提案が浮かびました。」

パシッと無名の手を叩き落とし席を立つ。

額にトンと人差し指で差し、反対の手で眼鏡を奪う。

違う視点から見れるので困難ではないが、これが結構頭を痛める。

しかし、その苦痛さえも受け入れながら、まるで誘うように唇に人差し指を添えて色っぽく笑う。

本物の葉中のようだと言戸はぼんやりと思った。

見詰め合う二人の間に流れる空気は油断を許さない。

銀色の髪の下、赤い舌でペロッと下唇を舐める姿は欲情している男のよう。

唾液で潤った薄い唇が声を作る。

己の野望の為に。

「私を貴方（宮古 正軌）の家庭教師にしてください。」

『簡単でしょう？』と言った瀬戸の笑顔は酷く歪んでいた。

## 中編（夏休み）

ニタリとお世辞にも“綺麗”とは口に出来ない笑顔。

仕事柄キャラを被る癖があるのか、多少見た目と中身のズレが生じているとは感じていた。

泣き面の内に墨以上にどす黒モノが潜んでいる、そんな感じ。

弱虫のフリした支配者？かな。

だから、今の瀬戸は本性のように思える。

裏で何を考えてんのかは知んねーケド、まあいつか。

この体が危なくなれば、どうせ周りやアイツらが手伝うんだろーし。

周りが積極的で良かったねー。

中で眠っているであろうこの体の持ち主に言ってみるが届く筈がない。

双子の部屋で休ませてっけど、明日にゃ無理矢理起こして現実に出さねえーと、な。

外の空気も必要ってこと。

スルリと瀬戸の後頭部に手を回す。

添えた右手でグイと顔を引き寄せた。

額がコツンと当たり強者が口端を吊り上げ、睨むよりも相手を捕らえるような熱い瞳が動かない。

面白い奴だ。

体調が万全だったら殺り合いてえ。

『オツケエ、日時はそっちでえ決めてから〜メールちょーだい。』

「わかりました。」

『後お、お手洗いにいきたいからーコ・レ、外してちょう？』

両足を上げて足首を戒める手錠を指差す。

この状態でもしようと思えば出来ないことはないが、やり辛い  
ちゃやり辛い。

最悪ズボンが汚れるかもしれねーし。

それはヤダね。

勘弁してほしい。

痛いのは別になんともいけど、気持ち悪いのは嫌いにやんだ。  
味わうならやっぱ○○○並の快感じゃねえとツマンネエでしょ。

生き物ってそういうもんだろ？

ガチャガチャと煩く手錠を主張していると、やっとな瀬戸が重たい  
腰を上げた。

遅い奴は好かねえケツド、本能のままやったら取引がパアになっ  
ちまうからガマン我慢。

帰ったらあの外国人と喧嘩してストレス発散するか。

本調子だったら、な。

ヒョイ。

ぼーっと考え事をしていると瀬戸の肩に担がれた。

足の手錠はそのまま。

首には細長い縄を結んだワツカが掛けられていた。

その先端は瀬戸の右手に握られていて、グイと引っ張ったら首が  
締まる簡単な仕組み。

そんなに逃がしたくないのかねえ。

前の双子のが余程悔しかったと予想。

取り敢えず、腹を圧迫するのはヤメテちょーだいな。

少しでも苦しさから逃げるように体を浮かす。

だが、弱った身体にそんな力は残っていないらしく、直ぐにガク  
ッと腕が折れてしまった。

その衝撃が腹にダイレクトで無駄骨だったと悔やむ。

せめてもの抗議で瀬戸の腹を膝で蹴るが、持ち直されただけで何

も言われなかった。

あの部屋から少し歩いた個室の前で降ろされた。扉を開かれ、お手洗いの中に促される。

清潔感漂うこまめに掃除されている様子。

流石執事だな、とか思ったり思わなかったり。

床に立たされて手錠を片方だけ外された。

すると外した方を瀬戸は自分の右足につけて背を向ける。

確かにやり易くなったっちゃそーだ・け・ど、ある意味しにくくなっただことない？

俺の気のせい？

別に野郎同士だから気にしてないけど。

一々そういうの気にしてたら、学校のお手洗いとか一生使えないわ。

背を向けたのは瀬戸なりの配慮なのか知らないが、だったら個室から出てってくれ。

用を足す意外にもしてえーことがあるんだよ。

しかも原因はお前のせいだし。

『ネエネエその執事君、出てってくんねえの？』

「逃げられたら面倒です。それに、私は気にしません。」

『俺様もそんな乙女じゃにゃーいから、どうでもいいんだけどね。』

ま、いつか。じゃあ耳塞いでいてちょうだい？後、振り返るなよ。』

「はいはい。」

適当に返事をする瀬戸は頼み通りに両手で耳を塞いだ。

勘違いしてくれたのはいいが、後はこの縄だな。

もうちょい余裕を持たせてくれねえと距離が足りんのよ。

クイクイと軽く引っ張るとちょおつつとだけ弛めてくれた。

んー、キツイけど限界近いしもう我慢は無理。

頭がガンガン喧しいし、腹がキリキリ絞られるみたいに痛む。  
全身が気怠い。

膝カクンされたように床に膝を着き、座る部分を掴んで顔が便器に突っ込まないよう体を支える。

胃酸が込み上げてきた。

『ウゝボゲエエエエツツ』

ビチャビタバチャ：

あゝ、頭の血管ミシミシいってやがる。

背中とか腹とか下半身以外全部痛てえ。

腕も体重支えてっから震えてっし。

ツーンとした臭いが鼻をぬける。

吐いたのは何年振りだったっけ？

ストレスとかでしょっちゅう駆け込んだたなあ。

病室でも自宅でも、学校のお手洗いでもコッソリ吐き出してたな。

そう思えばとても懐かしい感覚ではあるが、到底好きになれない。

吐いた後のこの気持ち悪さとか。

その他もろもろも含めて嫌いな部類だ。

テンション上げるのも怠い。

口濯いで、全身の脂汗を洗い流してサッパリしたいけど、歩くのも面倒臭い。

ジャアアア：

汚物が浮かぶ物に蓋をして流す。

腹が何にもない。

腹ペコだけど食欲はわからない。

いや、ちよっとはあるかな。

立つという行為さえも億劫で、昔のように壁に凭れてぼーっとする。

唾液で口内の下呂を飲み込んだけど、まだ残ってる。早く綺麗にしないとカピカピになっちゃう。

怠ける体に鞭を打ち、壁に手をつきながら立ち上がる。

けれど、力が入らないのかズルと崩れ落ちる。

男の命の腰まで痛めるとか、男としてヤバイかも。

一生○○○出来ないかもなあ、なんてね。

「もう手を離してもよろしいですか？」

『あゝ、そうだったな。もう、いゝよ。それで肩貸して。もう立てない。ヘルプミー。』

「吐きたいならそう言えば良いのに、意地っ張りな方ですね。心配はしませんよ。されたくないでしょうからね。」

『俺様のこと、わかってるう☆』

俺の言葉は無視した瀬戸は互いの手錠を完全に外した。

保険なのか縄はそのまんま。

腕を肩に回して個室を後にする。

何処にも力が入らないからちよくちよく座り込みそうになるが、ズボンを掴む手が支えてくれてなんとか歩いている。

廊下を並んで歩きながら頭上で悪態をつかれた。

「もういっそのことシャワー浴びて全身サッパリスッキリしてください。着替えは私のを用意します。多少デカイでしょうが諦めてください。」

それらが終われば仕事を手伝ってもらいますよ。切羽詰まっているっていうのに手間かけさせられましたからね。間に合わなかったら貴方のせいですよ。粗方終われば帰しますので。」

『ありがとさん。仕事って何すんの？』

「渡した書類に判子を押すだけです。今の貴方でも簡単でしょう。」  
連れて行かれた脱衣場に降ろされ、後ろで扉が閉まる音が聞こえた。

先ずは鬱陶しい縄を外してから洗面で口を濯ぐ。

ちよつとだけサッパリ気分。

もそもそと服を脱いで、ワックスをつけた頭から冷水を被った。

無名がシャワールームにいる間、事務室で瀬戸は電話をかけた。

トゥルル…

短いコール音の後、苦手な人の声が耳に入る。

何でもお見通しの人。

何処で監視されているかわからない。

「あんさんから連絡するのは珍しいなあ。何か急用ですかい？」  
「はい。無名という人格から、弘六様に言伝てを頼まれました。」



「……………」

ゆったりとした口調で話していた弘六の沈黙。

それは相手の性格をよく身をもって知っているから、早く通話が終わらないかと切に願う。

案の定、次に聞こえた声音は静かな怒りを秘めたモノだった。

「……えろお待たせてくれましたな。そんで？」

「はい。無名は『恩人からのお頼みよん。その病院にいる“伊崎香織”を瀬戸に渡してちょうだい』と。」

「瀬戸はんが言うくらい気持ち悪いわ。精神科にいるキチガイか……まあ、検討したります。」

じゃあ、無名に『名付け親に顔見せくらいしろボンクラが』と伝えたいください。」

「わかりました。」

プツ、ツーツー…

最後の言葉に重圧を感じ、ピシッと全身が固まる。

一方的に切られた通話にやっと肺に酸素を取り込めたかのようにハアアーと深いため息を吐いた。

クーラーはきいているが冷や汗が治まらない。

長い釈放から解放された気分。

ソファに抱き着きながら何もない幸せを噛みしめ、無名の着替えを片手に部屋を後にした。

## 中編（夏休み）

風呂上がり、ドンと積み上げられた上の山を目の前にポカンとする。

腰から顎までの高さのタワーが三つ。

『うっわ、スゲー数う！ヒヤハハハハ！！』

こんなに溜まってたのかと腹を抱えて一人大笑いする無名を無視して、黙々と残りを片付ける瀬戸。

無名のツボにハマったのか、ソファの上でヒィーヒィー言いながらまだ笑いこけている。

この二人の温度差。

まるで常に冷静なメシアと、常に怒っている由が言い合いしている時のようだ。

やっと満足したのか、タオルで額から後頭部を縛り、手首につけたヘアゴムを確認する。

茶矢からのプレゼント、ニヘラと笑むその横顔を盗み見していた瀬戸に声をかける。

『何処に判子を押せばいいのん？適当？』

「私がサインした上にお願います。」

『向きとかあ決まってる？』

「終わっている書類を見本にしてください。」

『アイアイサーっと。』

ヒョイと判子の向きを確認してからペタペタと書類に押し付けていく。

最初は注意するように慎重にやっていたが、慣れてきたのかポン、

ポンとスピードアップ。

適当そうだけどちゃんとサインの上に押しているし、向きも間違えてはいない。

この調子なら今晚には終われるか。

やはり手駒がいると効率上がる。

ピンチの時は手伝ってもらおう。

書類に目を通しながら早く手元に入らないものかのため息を溢す瀬戸だった。

トップリと外が暗くなった夜。

日付が変わる一歩手前、判子を押す音が止む代わりにグツタリとした声がある。

『しゅーりょーだあゝゝッ！！フウ。』

「お疲れ様でした。」

両手を天井に向けて突き上げそのままソファに倒れ込む。

靴を脱いで横たわれれば瞼が重くなる。

フカフカって程じゃないけど居心地は最高ランク。

疲れてるってのもあるけど、この程好い固さが好きなの。

柔らかいのよりかは固い方が好み。  
普段は録の腕の中か椅子の上だし。  
手摺に頬を乗せてグデーってしていると瀬戸が肩を揺する。

「寝ないでください。ほら、帰りますよ。」

『ヤッダー。アソコは“敵”ばっかでおちおち眠れないもん。それに、まだ俺様のお洋服があるーしっ。』

バタバタと足をバタつかせる無名の背中に容赦無く腰を降ろした。  
病人になんてことを。

優雅に足を組んで紅茶を呑む瀬戸は目だけ俺を見下ろす。

「敵ではなく味方の間違いでしょう。何を言い出すかと思えば……もしや、何かやらかしましたか？ 髪に固まった血がついてましたが。」  
『勘が鋭い奴は好きだぜ。俺自身じゃなくて灯だけどにゃー。全  
くう、パンって簡単に理性が壊れちゃうから困ったもんよー。』

上半身を起こすと瀬戸はカップをテーブルに置いて端に座り直した。

やっぱ間近で見るとデカイわ。

何を食べたらこんなになんだろ。

不思議だわぁ。

トンと背を相手に預け小さく欠伸を漏らす。

うーむ、眠たい。

眼鏡を腹の上に、頭を二の腕に寄せる。

このまま寝れそう。

「貴方は私を警戒をしませんね。そこだけは宮古さんと少し似ているかもしれません。」

『俺っちは、人格の中でも人間スキスキだからねー。特に好きな奴

はLove（大好き）だし、嫌いな野郎はIt destroys  
it（破壊する）だけ。

あんたは周りより話がわかるから好きな方だ。嬉しい？』

「貴方が女性でしたら素直に嬉しかったです。誰かに好かれるのは嫌ではありませんよ。」

そっと目を閉じて冷めた紅茶に口付ける。

嬉しさにだらしなく頬が緩んで元に戻らない。

一方的じゃなく気持ちを返される。

言葉がある人間はやっぱりいい。

録が好きなだけはある。

アイツが好きなモノは俺も絶対好きになる。

これは絶対原則。

サラントコや双子よりも強いモノで繋がっているから。

：そんなこと考えてつと、録に会いたくなるわけで。

最近独りにしてっからなあ。

寂しい思いさせてる自覚はあっけど、現在俺達の生存の危機なわけ。

もうちょいしたら灯と交代して、朝はアイツを出して調整。

まだまだやることあるなー。

んーっと腕を伸ばしながら瀬戸の膝の上に寝転がる。

ポトツ。

何も言わずに落とされた。

俺様悲しい、うう。

「（お帰りなさい。）」

『つつ!?!?』

フラッシュバックのように脳内に流れた映像。

自宅の玄関、正座で座っている茶髪の女の子、俯いていて表情が伺えない顔、震えていた体、一瞬だけ見せた涙。

あの子が待っている。

泣きながらずっと座っている。

帰らなきゃ。

これ以上泣かせないために、帰らないと。

あの時救ってくれた温もりを離さないためにも。

「どうされましたか？」

『やっぱ帰る。』

「今さっきあれほど『敵ばかりで嫌だ』と駄々をこねていたのに、もうホームシックになりましたか。」

『家に忘れ物しちゃったの思い出したの。さ、帰ろ帰ろー。車出してちょ。』

起き上がりグイグイと腕を引っ張る俺に『面倒臭い』と目で訴えかける。

が、数分間受けたしつこさに瀬戸の方が折れ、重たい腰を上げた。机の引き出しから車のキーを手に取り、ため息を吐きながら乱暴に俺の着ている服を引っ張り部屋を出た。

もう0時を過ぎている。

コケないように早足で隣を歩き、下から顔を覗き込みながら『ごめんね？』と謝ると『貸し二ですよ』と告げられた。

仕事やら何やらで疲れてたのか、記憶に残る物凄く不機嫌な顔 Best 3に入るお顔でした。



## 中編（監視）（前書き）

いやはや、当初ここまで書くとは思っていませんでした。長いな…  
うん。誤字脱字は沢山ありますが笑

では、

『お前が寝ぼけている時の話は色々酷いんだよボケエエエエエエエ  
！！！！！！ちゃんと打てや馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿  
馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿  
ら。次からちゃんしろよボオーケ。』

という方。

作者のHPはもう0ですのでもう少し労ってやってください。ひぬ  
…。

取り敢えず、どうぞ。

↓



## 中編（監視）

キイツ。

自宅から少し離れた緑川公園の前に車を停めてもらった。  
自宅の前だと何が待ち構えているかわからないからだ。

だぼだぼの服が落ちないように肩の辺りで小さく縛って、ズボンの裾も引きずらないよう折られた。

車から出ると中から手招きをされ、窓から覗き込むと携帯電話を握らされた。

正軌の物だ。

すっかり忘れてったー。

もう取られないようにポケットにインしとこ。

よし、安心。

この格好のまま寝るしー、壊すってことはないだろ。

ケータイもそんなに柔じゃないって俺様信じてる。

さあて、帰りますか。

体を起こそうとすると腕を掴まれ、軽く引かれた。

耳を触られ反射で後ろに逃げようとするがそうはさせてもらえず、強い力で固定されたまま終わりを待つ。

「じっとしていなさい。直ぐに終わります。」

『み、みはあ…やだ…。むっり、マジで…ひう。』

「本当に苦手なのですね。これはいいモノを知りました。」

顔や耳に熱が集中する感覚がする。

全身が息が熱いアツいあつい。

やだやだやだやだ、もうやめて。

変な感じがする。

足に力が入らない。

涙目で首を振って許しを請うが、その反応を面白がるように耳を弄くり回す。

車の窓の縁を握って数分間耐えていると、やっと魔の手から解放された。

左耳の耳たぶと左手首に違和感。

強く瞑っていた目を開けると、腕時計が勝手に付けられていた。

耳のは触った感じイヤリングと予想。

きつと盗聴器とか埋め込まれてんだろーな。

俺の心意を察したのか瀬戸は時間を確認しながら喋る。

「貴方の想像通り、時計には発信器、イヤリングには盗聴器が仕組んであります。今回ののはその二つで私と会話が出来ます。

苦労したので壊したら弁償&契約破棄ですよ。何かあれば時計に話し掛けてください。」

『はあい。てか、耳弱点なの知ってて触るとか最低っ！』

「洋服レンタル代と送迎代です。安く済んで良かったですね。」

しれっと流しやがるコイツに腹がたつ。

頬を膨らませて今度こそ帰ろうと体を起こすと、窓から頭を出す手前で髪をグシャグシャにされた。

何をされたのか一瞬わからなくてポカンとしていると、トンと額を押された。

車内には俺に人差し指を向ける瀬戸だけ。

「痩せすぎ、寝不足、顔色悪い、今の貴方の健康状態は最悪です。これからゆっくり寝て、沢山食べて、オープンキャンパスなどでリラックスしてきなさい。これは命令です。後、次会う時に服は返してもらいますよ。では、失礼します。おやすみなさい。」

ブ  
ロ  
ロ  
…。

言いたいことだけ言って瀬戸は帰ってった。

俺の返答を待たずに。

さっさと帰ってたかったんなら嫌味を言わずに帰りゃいいのに。  
ワケわかんね。

遠回しでも心配してるってバレバレだし。

…駄目だ、優しくされると視界が滲む。

こういうのに慣れてねーんだから、止めてくれなきゃ。  
せっかくだから瀬戸の服で鼻かんでやる。

チーン、っと。

はぁ、スツキリよん。

遅くならないうちに帰ろ帰ろんぽ。

生ぬるい風に残して歩く。

戻ったら録に甘えてほしいなぁ、なんて思いながら帰路を歩いた。

午前六時半。

毎朝欠かさず行いうランニングの為に正軌のベッドから起きたメシア。

寝苦しい夜だったからか理由はわからないが、彼は上半身裸でベツドから下りた。

上にタンクトップ、下にジャージと着なれた物を身につける。

走りやすそうだ。

高いところで友恵並に長い髪を結び、階段を下りながら『そろそろ全体的に切るか』と前髪を摘まむ。

最後の段が近づくに連れて見慣れた人影が視界に入る。

それは昨夜帰らなかった人物で、何故か玄関に横たわっている。

：横たわっている？

倒れている？

大怪我！？

ガタタッ！

気づくのが早いかな否か、血相を変えて階段を落ちるように下る。

見知らぬデカイ服を身に付けた彼の前に座り込み、ユサユサと強く体を揺さぶる。

息はしている。

コレといった外傷は見当たらない。

変わったことといえば、服が出かける前と違う。

後、見覚えの無い腕時計をつけている。

瞼がちょっとだけ腫れているのも気になる。

「…痩せたな。」

手首を掴んでボソツと溢す。

自分のように激しい運動をしていないのに、出会った当初と比べて見るからに細くなってしまうた。

精神的ストレスからだろう。

人格の入れ代わりは体力消耗も激しいし、頭痛も酷くなる、と校舎裏でピロが説明していた。

「（正軌の体を動かすのは俺達のような人格には過酷で、本音は辛いけど顔には出さない。それが外に出る人格（俺達）のプライド。でもね、どんなに苦労しても、やっぱり外が好きなんだ。メシアや由君がいるしね。）」

照れ臭そうに笑ったあの顔とここ暫く会っていない。

飛行機以降、灯が現れてからだ。

何かが正軌の中で行われているのか？

触れた頬からは何もわからない。

リビングのソファで眠る由のように静かな寝息が聞こえるだけ。

何も出来ない、何も知らない自分自身が腹立たしい。

「チッ！」

膝の上でギリツと力強く拳を握り、眉をしかめて舌打ちをする。

打開策はないものか、と前髪をぐしゃりと持ち上げるメシアの前で正軌の体が身動きをした。

驚く彼を前にそっと開かれる黒い瞳。

容態を伺う為に顔を近づけると、ギョツとした表情を浮かべ手だけで後退る。

キョロキョロと辺りを確認しながら己の服を見て首を傾げる。

状況が飲み込めていない様子だ。

眼鏡を探すがメシアが辺りを見渡しても目的の物は見つからない。正軌が衣服の中を探るが、残念ながらベルトより固い物は触れなかった。

頭を抱えて誰かを責めるように呟くが、メシアにはハッキリと聞き取れなかった。

ちよくちよく誰かの名前を口に行っているが、重要な内容が入らない。

確か、正軌の予備の眼鏡は無かったはず。

視界がボヤける世界で安心させようと肩に触れるが、ビクツと体を跳ねさせて固まった。

怯える眼差しがメシアに向けられる。

その時、客室から茶矢が現れた。

正軌には茶色の髪が、まるで海の中のようにぼやけた世界に射し込んだ光のように思えた。

ダンッ！

メシアの肩を押して床を踏み出した。

驚く二人の前で小さな体を抱き着いた。

パチクリする茶矢に開いた口が塞がらないメシア。

リビングの入口で傍観していた詩律は目を閉じ、スッと両手で耳を塞いだ。

## 中編（監視）

朝から和葉に背中を蹴飛ばされ、不機嫌丸出しの友恵。長い黒髪をボサボサにさせながらドタドタと廊下を歩く。口をへの字に曲げて開けっ放しの扉からリビングに入る。

「…？ッ！？」

そこであるモノを見つけギョツとする。

片手を顔の高さまで上げ、目の前の光景に現実との区別をする為に頬をつねる。

頬が赤くなりヒリヒリするから現実らしい。

痛かったらしい。

ずり落ちた眼鏡はそのまま。

遠巻きに呆れた様子で頬杖をついている由に近づいて現状説明を試みる。

「中馬先輩、アレは何ですか？真ん中の“今は”正軌先輩ですよね？」

「知らん。朝起きたからああなってた。寧ろこっちが聞きてーし。」

「ふーん。一先ず、顔洗ってから茶矢を冷やかそつと。」

眼鏡を掛け直してからリビングを去る。

入れ替わりに真尋が現れ、由に挨拶してからキッチンに目を向ける。

すると、友恵と同じような表情を浮かべ、数歩後退。

苦笑をしたのは彼なりの優しさ。

乾いた笑いや回れ右しないだけまだマシ。

キッチンには、茶矢と正軌とメシアの三人。

眼鏡が無い正軌は料理中の茶矢の肩に手を置いて、怯える正軌の背中に抱き着いているのはメシア。

観覧者達には何がどうなっているのかわからない。

第一発見者の由は一度この奇妙な光景が夢だと思い二度寝したが、起きてても最後に見たモノと同じだった。

変化といえば、茶矢の顔色が更に赤くなったくらい。

何時にも増して顔が発熱しております。

そんな茶矢の肩に両手を置いて眉間に深い皺を寄せているのは、昨日音信不通で、由や友恵にだけアド変（アドレス変更）連絡をしなかった正軌。

その事実を知った二人は勿論、メシアや真尋から正軌の携帯電話のアドレスを強奪。

後でそれぞれ別の場所でキレていた。

目付きが悪い正軌の背中に抱き着いているのはメシア。

もうこの腕から離すまいとずっとこのまま。

肩に額を押し付け、細く骨張った同じ高さ体に回した腕に力を込める。

一風変わった構図。

茶矢・正軌・メシアサンドは珍しくはないが、こうもピッタリ密着しているのはこれが初。

正軌は目が見えてないからまだ二人の視線の意味に気付かない。

朝食作りを手伝おうとちよっぴり早起きした真尋だが、あの人数に、あの輪に加わるのは気が引けるし、正直無理だ。

大きな欠伸を漏らす由の隣の席に浅く腰掛け、苦笑を浮かべながら成り行きを見守る。

戻ってきた友恵の嫌味全てに茶矢は無反応で、ムカついた友恵が腕を叩いてもなお、体を固まらせたまま料理を続ける。

この状況の中で平静を保つのに精一杯のようだ。

反応がとてつまらない友恵は、顔だけを声のする方に向けてい



た正軌に昨日の恨みを込めて、太ももに膝蹴りしてからリビングに戻った。

痛みに絶える彼にやっと茶矢が怒鳴り付けたが、手遅れなのか友恵は頬杖についてシカト。

寝惚け眼の和葉が空気を読まずに朝の挨拶をしたが、返事をしたのは真尋と由だけだった。

やっと何時も通りの騒がしい空間になった。

しかし、そこに詩律と源希の姿はなかった。

眠る従兄弟の傍らで耳を塞いで、隠れるように背中を丸める詩律の背中とは、普段と比べて一回り小さかった。

お昼過ぎ、和葉を迎えに現れた和葉の兄が宮古家のインターホンを押す。

昨夜に前もって携帯電話に連絡を入れられていたので、リビングで荷物と一緒にスタンバイしていた。

両手で荷物持ち、駆け足で玄関に向かう。

そこには、見慣れた顔のお兄ちゃん。

見送りに来ていた人達に振り返りペコリと頭を下げる。

「それじゃ、お邪魔しました〜♪」

「和葉が世話になりました。これ、つまらない物ですがどうぞ。」  
「わざわざありがとうございます。」

妹と同じ焦げ茶色の髪のお兄ちゃんが茶矢にケーキの箱を差し出す。

ケーキの箱には“Sweet Ozaki”のプリントが印刷されていた。

見送りに出ていた面々がリビングに戻ると、ソファに座ってテレビゲームに熱中している由君と友恵が叫んでいた。

近所迷惑にあたる部類の煩さだ。

きつと茶矢は耳を塞いで顔をしかめているのだろう。  
見えなくてもその顔が目には浮かぶ。

メシアの肩に右手を置いたまま小さく笑った。

すると隣の奴が振り返ったように思えた。

どうしたのだろうか？

目を細めて表情を読み取ろうとするが、この行為の意味を察したメシアがグイッと顔を近づけたので手間は省けた。

しかし近すぎる。

いや、この距離じゃないとハッキリしないけど。

何か――の時を思い出す。

……アレ？

何の時だっけ？

ま、いつか。

そのうち思い出す。

暗記物は得意なんだ。

「今日、映画を観に行くぞ。前に話していた“名探偵CONAN”の映画だ。」

『いや、無理だろ。今現在進行形で眼鏡ないし。』

「あ。」

すっかり忘れてたってわけか。

目付き悪いのは自覚してっけど、そこまで違和感なかったか。最近付けっぱなしだったはずなんだけどなあ。

それより、何故メシアがチケットを持ってるんだ？

引き出しに保管してたはずなのに。

…あ、住人が交流したのか。

それなら納得。

いつの間にか日にちが変わってたってことは、長時間出ていたってことか。

全く記憶ねえや。

驚きもしない。

風呂には入っていたらしいから良しとしよう。

不潔なのは許せない。

最低限身嗜みを整えなければ。

何か考え事をしているメシアの前で俺もどうしようか思案中。

…メガネ、買いに行くか。

あれは気に入っていたけど度が合わなくなってきたし、フレームの傷とか酷いし。

同じの二つ買えば片方無くしても問題ないだろう。

今から行って映画の時間を確認して、それから眼鏡屋で視力とか調べてもらって、時間が余ればそのへんぶらぶらするか。

よし、決定。

未だ悩んでいるメシアの肩を叩く。

『今から映画に行ってもいいが、その前に眼鏡屋に寄ってもいいか？』

「自分は構わない。前の眼鏡はいいのか？」

『そのうち見つかる。』

「そのうち？」

『よくわからないけど、そんな予感がするんだ。誰かが届けてくれる。』

一先ず着替えるか。この服ぶかぶかだし。』

所々縛ってあるTシャツを摘まむ。

この家にいる奴らの物ではない。

予想はついているけど特に詮索はしない。

しても意味がないと思うから。

きつと、忘れる。

俺の記憶は曖昧だから。

若年性アルツハイマーかな。

ボケ防止の為に日記っていうかメモを書いてたけど、もう手遅れか。

後で確認しよう。

手摺を頼りに階段を上り、やけに静かな二階を不思議がることなく自室の扉を開けた。

## 中編（監視）

眼鏡二つは予想よりも高かった。

財布に入れっぱなしの所持金の半分以上が消えた。

少しだけ驚いた。

四年ぶりに訪れた商店街の小さな眼鏡屋は色々と変わっていた。

外装も違うし、商品の配置も色々と手が加わっている。

店員は相変わらず中年の店主一人だったが。

時の歲月ってのは早いな。

レジで受け取った眼鏡を掛けると、女店主の目尻の皺が増えていくのに気づく。

彼女も年をとった。

俺も背ばかりデカくなった。

レジでお釣りと予備用の眼鏡、眼鏡ケースを受け取る。

その時、彼女から『久し振りね』と話しかけられた。

俺の顔を覚えていたらしい。

四年前なのであまり記憶はない。

あの頃は今よりも無愛想だったと思う。

メシアは鏡の前で眼鏡をかけたりにしている。

気まずさに小さく会釈するしか出来ないでいると、店主は笑う口元にそっと手を当て、優しくこう言った。

「中学生だった君と比べると、大分丸くなったわね。あの頃は、周りを睨み付けるような目付きの悪さだったのに。

お友達のおかげかしらね？話しかけやすくなったわ。」

『：：：そうですか。』

「時々君を見かけたけれど、眼鏡を大切に使ってくれてたみたいね。ありがとう。」

返す言葉が浮かばない。

何も言えずに頭を下げるしか方法が見つからない。

そんな俺に『何時でも修理にいらっしゃい』と笑いかけてくれた。鞆に眼鏡ケースやらをしまい、もう一度頭を下げてからメシアの所に向かった。

ピンクの伊達眼鏡をかけていた。

買うわけでもないのに、まだ眼鏡を物色していたのか。

しかもサーモンピンクって、お前は女子か。

何故か似合ってるけど。

違和感が仕事サボってる。

ちゃんと働け。

…そうか、顔が良ければ何でも似合うのか。

そうかそうか。

壁に向かって脳内で違和感を叱り、最終的に最もらしい理由で強引に自分を納得させてから帰還。

不思議そうな表情を向けていたメシアは、今度はパープル色の丸縁眼鏡をかけた。

鏡で確認してから俺に聞く。

「どうだ？」

『…なんか微妙。こっちの明るい紫の方がきつとお前の肌の色に溶け込む。』

「ふむ。わかった。」

そうやって俺が差し出した眼鏡と今までかけていた物と交換する。

お、やっぱりそっちのがメシアに合ってる。

チラッと表情を盗み見たメシアに何度か頷いてやる。

すると、嬉しそうに口に喜びを浮かばせ、長い前髪を指先で退かし、鏡に映る顔の角度を変えたりしている。

とても楽しそうだ。

このような平穏な時間にいられたのは何時ぶりだろうか。もっと長く此処にいたい。

コイツらと一緒にいたい。

：それが叶わないとわかってはいるが、願うくらいは許されるだろう。

高い位置で結ばれたメシアの色素の薄い髪に触れる。

結構長いよな。

夏だと暑いだろうに、切らないのか？

でも、それも勿体無い気がする。

せっかくここまで綺麗に伸ばしたのに、枝毛とか見つからないし。マジマジと人の髪の毛を凝縮していると、前方から声がかかる。

「正軌、どうした？自分の髪に何か異変でもあったか？」

『いや、切らないのかなーと思って。背中まであるし、暑くないのか？』

普段涼しい顔をしているから意外と暑くないのかもしれない。

俺はこの長さで限界だが。

髪の中に熱が籠って蒸し暑い。

今はクーラーが効いた店内にいるから平気だけど。

鏡を見るために猫背だった背中を伸ばして正面を向き合う。

無表情というか真顔でメシアは喋り始めた。

「蒸し風呂のように暑い。日本の夏はアメリカより何倍も暑い。そのうちハゲそうだ。」

なら丁度いい。そろそろ前髪を切ろうと思っていた。全体的にバツサリカットする。正軌、帰り道に美容院に寄ってもいいか？」

『いいぞ。源希が通っている近所の美容室に行くか。』

コクンと頷くメシアは何故かレジに行き、俺が勧めた眼鏡を度無しで購入。

…あれ？

マジで買ったの？

伸ばした手が行く先を失い、どうしようもないので爪を見詰めてみた。

長くなったな。

そろそろ切らないと折れそうだ。

店を出てからちよつとぶらぶらする。

時間を確認したら十分くらい残っていた。

五分前には映画館に向かうか。

日本人の常識、何事も五分、十分前行動。

異論はない。

寧ろ考えた人は素晴らしい。

俺が偉人になるように推薦する。

しかし、暑い。

外の炎天下、先程のクーラーが効いた室内を恋しく思う。店主と話すのは気まずいが、あの空間には至極戻りたい。いっそ南極や北極にレポートしたい。



瞬間移動能力があればだけど。

：欲しいな。

人間だからこういう欲望が次々と思ひ浮かぶ。

食欲や睡眠欲のように毎日毎日。

欲望は生きるための本能に近い。

無ければ死んでしまう。

底が無い、だから怖い。

欲望を叶えるために人間は豹変するから。

根深いこのモノを消したいと思ひながらも、モノのおかげで生きていられる。

悪循環。

現実の空気は“あの夢の中”よりも汚れている。

歩き煙草の有毒ガス、副流煙が気持ち悪い。

メシアは慣れているのか、俺のように心底嫌がる様子はない。

あれ、今日の俺ネガティブ？

マイナス思考に傾いてるのは自覚してたけど、何かダメだ。

早くテンション上げないと。

：テンション？

源希じゃあるまいし何言ってるんだ。

久し振りの現実だからきつとまだ頭が慣れてないんだ。

言い訳考えないと。

新しい言い訳、次の言い訳、どんどん積み上がる言い訳。

そろそろ、映画館に向かおうか。

熱で頭がやられた。

映画館なら寒いくらいクーラーが効いていて涼しいはず。

時間も頃合いだろう。

日本語おかしいけど気にしない。

何だろう、嫌な汗が止まらない。

歩いているだけなのに呼吸が荒い。

足が鉛のように重い。

何だこれ？

病気とか風邪とかのレベルじゃない。

住人が何かやってるのか？

なら、寝てる時にやってくれよ。

こんな人が多い中でやんなよ。

凄く迷惑だ。

「どうした？気分が優れないか？」

『ただ暑いだけだ。』

口数が少なくなってきた俺の心配する。

帽子の鰐を深く下げ、青ざめている顔色を見られないようにする。

心配はかけたくないんだ。

ついてもいい嘘くらいあるだろ。

タイミングが大事なんだろう。

あの時みたいに傷つけないからさ、これくらい許してくれ。

トウルルル…トウルルル…

今時珍しい瓦屋根の平屋。

小まめに手入れされた庭が眺められる居間に、とも美と優人が寛いでいる。

ちゃぶ台の向かい側には優人に似た顔つきの初老の男と、優人と同じ黒髪の優しそうな微笑みが印象的な中年の女性。

男の名は“宮古 祐司”<sup>ユウジ</sup>、女性は“宮古 楓”<sup>カエデ</sup>。

優人の両親であり、正軌達の祖父母にあたる人達だ。

くすんだ金髪の祐司は人見知りをしない笑顔で二人に話しかける。息子と顔つきは似ていても性格が違うので、あまり怖いといった印象は見受けられない。

祐司の隣に寄り添うように座っている楓のおかげでもあるのだろう。

二人を纏う空気はとても穏やかだ。

「それで、正軌と源希は元気にやってるか？年賀状くらいしか孫の顔を見れてないからな。とも美さんから連絡を貰った日から、二人の話を聞くのを今か今かと、時間が進むのが焦れたいと思うくらい楓と楽しみにしていた。」

「おかげでね、あんちゃんお皿割っちゃったんだよ。しかも二枚。それで“杉先生”カンカンに怒っちゃった。」

年甲斐もなく声をあげて拳を握り、喜びを深く噛み締める祐司の隣でケラケラと思い出し笑いをする楓。

会話に出てきた“杉先生”とは楓の育ての親で、小説家でもある。この平屋は杉先生のひい祖父さんの物で、此处で独り暮らしをしていた。

それから色々あり、楓を引き取り、祐司を“下僕”として住まわせてやったのは…また別のお話で。

両親の話を黙って聞いていた優人は、子供達に一度も見せたこと

のない心底呆れた眼差しで実の父に注意する。

隣に座っているとも美は楓のようにずっとニコニコ笑顔。家の時と違って沢山喋ってくれる優人が嬉しいようだ。

「父さん、杉先生も歳なんだから、あまり血圧を高くさせないで。母さんも、杉先生が怒って暴れないように注意してください。」

「今度は息子二人も連れて来ますから、今はあたし達のお話で楽しんでくださいねー♪」

「誰が歳だって？糞坊主。まだまだ喧嘩や口喧嘩なら負けんぞ。」

優人とも美の後ろの襖を開けて現れた、白髪混じりの黒髪を無造作に縛った老人。

徹夜明けなのか着物がぐちゃぐちゃで、元々口が悪いのに不機嫌がプラスされていて、怒っているようにもとれる。

この人が杉先生。

現在も執筆活動が続けている。

ちゃぶ台に置かれてあった優人の麦茶をグイッとイッキ飲みして、ちゃぶ台の定位置に腰を下ろす。

お昼過ぎまで続いていたのか眼鏡越しの目付きが何時もより鋭い。近寄りがたいオーラが醸し出されているが、そんなのに慣れている三人と、空気を読むのに疎いとも美には特に何の影響もない。

杉先生が『茶。』と言口にすれば祐司がすぐに腰を上げて台所に向かう。

とも美が手伝おうと腰を浮かすと楓が左手で止めさせる。

「杉先生はなあ、ゆーじ君の煎れたお茶しか飲まんのや。『信用した物しか口にしない』って、昔から譲らんのや。」

「そうでしたか：なら、あたしを信頼していただく為にも、これからはどんどん遊びに来ますね！杉先生♪」

「来んでいい。騒がしいと仕事に支障をきたす。」

そうだ。お前んとこの長男、“変わった身体”だと耳にしたぞ。多重人格だったか。」

話題を変えるように優人に喋りかける。

静かに三人の会話を眺めていた優人は視線だけを向ける。

手渡された熱いお茶を飲む杉先生に、何を話せば良いのか思案していた。

話しても良い範囲を考えているようだ。

お喋りに花を咲かせる女性陣を空気を読んだ祐司が宥め、二人を別の部屋に移動させた。

居間には男三人。

ちゃぶ台を中心に三角形に座っている。

「私達の子供」は他の子供とは違う。それは父さんと杉先生に話していた。」

漸く自分の中で話が纏まったのか、父と祖父に真面目な顔で語り始めた。

落ち着いた物腰で話す内容は簡単に口外するようなモノではなく、安々と信じてもらえるものでもない。

嘘や冗談を言わない優人の日頃の行いや、真剣な眼差しが本物と疑わせない。

「“神崎”には色々と手伝わってもらっているし、近頃正軌を監視している人間が増えている。それはそれで有難いんだが、近づき過ぎて“あの子の世界に飲まれないか”が心配だ。

長年積み重ねてきた“創造の世界”はとても頑丈なようで、とても脆い。」

「あの町は“元々存在してない”しな。地図にも載っていない場所だ。」

「デカイモノは狙われやすいぞ。悪い者が近寄りやすく、範囲が広い分気づきにくい。」

それに、創造主に多大な負担がかかる。最悪：死ぬぞ。」

「危険なのはわかってます。ですが、もう心配は要りません。」

“あの子”がやって来たみたいですから。」

「“あの子”？ やっと見つけたのか。」

怪訝な顔をする杉先生に何度か頷く。

腕を組んで眉をしかめる祐司は視線を落とし、ハアと短い溜め息を零した。

遠くない未来から目を反らすように、そっと目を閉じた。

優人も目の凝りを解すように指先で揉む。

「小学校の研修、とも美さんや子供達には『出張』と言って地方を回り、やっと出会えました。」

彼は最初からわかっていた。私が何も言わずとも『夏休みにはどうにかするよ』と。

私には何も出来ませんが、後は彼に任せるしかありません。

“同等の魂の所持者”に。」

偽りの町。

創造は現実に変わり、何も無かった場所にはいつの間にか何かが存在している。

映画館に入って行った正軌達の後ろに一つの人影が蠢く。

人影は形を変え、人は電柱から姿を現す。

眠たげな垂れ目に茶色の髪が項<sup>ウナジ</sup>を隠すほど伸びている。

中学生くらいの青年は一つ欠伸をし、汗一つかいていない涼しい顔で辺りを見回す。

そしてまた気怠そうに欠伸を漏らした。

「これは思ったよりも楽そうだ。」

次の瞬間、青年はそこから消えていた。

## 中編（監視）

夕日に染まった温かな色の煉瓦の道を歩く。

笑う人々に混じる俺達。

振り返る女性の目には隣の奴が晒す素顔を見つめ、何人かは立ち止まってしまうほど。

橙色の光の中じゃ頬を染めたのか、夕焼けに染められたのかかわからない。

男性も振り向いたり凝視する者も少なくない。

横にいる俺は居心地が悪くって仕方ない。

現にお婆さんに孫の仇のような凄い形相で睨まれたし。

俺は何もしていないのに。

『…もう少し離れていいか？』

「何故だ？」

お前が綺麗な顔をしているからだ。

お前が美人だからです。

お前が俗に言うイケメンだからだ。

…後どれだけ言えば良い？

取り敢えずそのお姉さん、ハイヒール投げようとするの止めてください。

場所代わりしたいなら交代しましょうか。

とにかく、うざったかった前髪を切ったメシアは注目の的ということだ。

代わりに俺は人々の視線から八方塞がり。

今にも死にそうだ。

現実逃避をしたくて何か良いものはないかと、盗み見るように辺りに目を向ける。



だが、そこには変わらぬモノばかり。

泣きたくもなる。

何だろう、人の前で優雅に佇んでいる薔薇の横に生えてるハエトリグサの気分。

問答無用でハエトリグサを抜こうとする人間に諦めと悲しみしか浮かばない。

こんな顔になりたくて生まれたわけじゃねえよ。

そう周りに説き伏せたい。

ちよつとでも距離をとろうと二歩ほど下がってみる。

するとメシアは不思議そうな顔をして振り返り、俺の腕を掴んで前に引っ張る。

ですよねー。

こんなことが無謀だってわかってたさ。

この外国人が人の気持ちを読めないって知ってたさ。

もう帰りたい。

帰路を歩いてるんだけど、一刻も早くこの嫉妬と憎悪の中から抜け出したい。

取り敢えず、メシアさん。

腕を離していただけませんか？

一人で夜道を歩けなくなりそうなので、一刻も早い判断をお願いします。

とどのつまり、自由をください。

女性陣が占領している客室。

そこには寝転がったままノートパソコンの画面を睨む友恵だけ。至極不機嫌な顔でカーソルを下に動かす。

まだ目当てのモノが見つからないのかイライラは最高潮。

ちよつとでも触れたら爆発してしまいそうなほどピリピリしている危険な状態。

カラ。

そんな空気の中に来客が登場。

麦茶とお茶菓子をおボンに乗せて運んできたのは茶矢。

一目友恵のだらしない格好を見るやいなや、イラッ、という効果音が後ろに表れそうなほど、呆れと怒りを含ませた表情で見下ろす。だが、自分が大人にならないと、と頭を左右に振り、一旦己を冷静にさせる。

フゥー、と胸に手を当てて息を吐き、唇を引き締め凜とした立ち振舞いを心掛けた。

声をかけようと小さな口を開けるが、頬杖について唇を尖らせた友恵が先手を打つ。

横目で彼女を見据える瞳は真剣で真っ直ぐで、ふざけた様子は微塵もない。

「あんたさ、“世界の創り方”って“覚えてる”？」

「世界の創り方、ですか？」

「記憶にないならいいわ。やっぱあんたも“記憶無し”か。それ、後で食べるからそこ置いといて。」

「“覚えてる”とか“記憶無し”とか意味不明ですよ。ちゃんと説明してください。」

「はいはい、また今度ね。」

正座をして向き合う形をとった茶矢を適当にあしらう。

カチンと怒りが限界寸前まで上り詰める、が、何とか耐えた。

今朝吸収した正軌パワーのおかげだろうか。

わざわざ嫌いな相手にお茶菓子やお茶を運ぶくらいだから、茶矢には良い効果が期待される。

膝の上でプルプルと震える拳を片方の手で宥めて、ヒクヒクと口端を小刻みに上げながら精一杯平静を保とうとする。

端から見れば痩せ我慢しているのがバレバレだが、当の本人は気づいていない。

小さいながらによく頑張っております。

一方の友恵はボタンと電源を落としたノートパソコンを閉じ、壁に背を預け天井を仰ぐ。

この上は源希と正軌の部屋。

今は詩律と源希くらいしかないだろう。

スウと息を吸い込み、友恵は空に謳うように語り始めた。

「小さな体はとても嫌いで、真っ直ぐな性格はもつと嫌い。

子供故の残酷さと純粋なモノが何よりも好きじゃない。

だって結局子供は無力。

昔々、小さな少女は言いました。純粋な気持ちで誓いました。

『私が貴方を救います』と。

けれど、その約束は果たせず、彼はどんどん飲み込まれる。

彼は己を守る為、自分の体を六つに引きちぎり、欲を七つに分けた。体は“魂と血肉”“心臓”“骨”“手脚”“脳”“肺”に。

欲は有名なあの七つ。そのうちの三つは独立してしまった。もう元には戻れない。

ああ寂しい。ああ悲しい。けれど、離れられないんだ。君がいなくちゃ僕らは生きれない。

さあて、一番危険な“貪欲”は何処にいる？  
早く早く、あの子が殺されちゃうよ。」

クスクスクス。

耳に入るのは小さな笑い声。

サーカスの滑稽なピエロを笑う子供の笑い声。

ニタリと笑った黒い雰囲気、茶矢は彼女と出会ってから初めて、彼女に恐怖を覚えた。

目の前にいる一つ年上の幼なじみが、自分と同じ人間と思えなかったから。

カッン、カッン、

松葉杖の音。

気付かない彼。

苦笑している横顔が愛しい。

隣が存在が鬱陶しい。

傷んだ金髪が望むのは、底知れぬ独占欲。

あの子の何もかもが欲しい。

ただそれだけ。

さあて、一番危険な“貪欲”は何処にいる？  
正解は、後ろ。

## 中編（監視）

何だか、寒気がする。

商店街から住宅地に入りやつと人の目から多少解放されたのに、何故？

もしかしくともメシアのストーカー？

嫉妬の対象は俺？

あ、ー振り返りたくねえ。

ナイフとか握ってたら洒落にならん。

ナイフ、刃物……ん？

何か忘れてる？

顎に指を添えて記憶を探るとメシアが覗き込んできた。

髪が短くなっても前屈みで頭だけを上げる動作や、黙って見詰める瞳とかが狼と重なる。

久しぶりに耳と尻尾という幻覚が目映った。

試しに触ってみるがやはり妄想は妄想。

尻尾がフルフルと揺れているのだって幻覚。

言葉にはしないが、嬉しそうに手に擦り寄るメシアに微笑する。

さっきまで考えていたことはもう気にならなくなっていた。

前髪で見え隠れする傷痕を優しく撫でると、くすぐったそうに首を竦める。

『素顔がハッキリした方が、メシアは似合っているな。』

「もう髪を伸ばす理由も無くなった。正軌のおかげだ。Thank you.（ありがとう。）」

『俺は何もしてねえよ。寧ろ、迷惑ばかりかけた。ごめんな。』

俺の手をそっと持ち上げ、男性が女性にするように軽くキスをした。

たまたま人がいなかったのが助かった。

恥ずかしくても慣れなのか、メシアが穏やかな表情を浮かべているからか、振りほどこうとは思わなかった。

アメリカでは普通のことなんだろう、って有り得ないとわかっていても無理矢理納得。

デカイ男二人が道端で何してんだ、ってのは言わないでくれ。

この一般常識を棄ててきたようなセクハラ野郎と違って、俺は充分自覚してるから。

空いた手で帽子を外し、眉を下げて謝ると、鏡映しのようにメシアの眉も下がってしまった。

「そんなことはない。

自分の過ちを吐き出せたのも、人の輪の中に居場所をくれたのも、全て正軌だ。

正軌が謝ると、自分は悲しくなる。謝らないでくれ。」

『……ごめんな。』

「何度も言う。正軌が謝ると自分は悲しくなる。謝らないでくれ。

頼むから。」

『俺が悪い、って思うから謝る。んな顔すんなって。頼むから、な？』

子供が必死に抗議するような寂しくて必死な形相に、狡い俺は逃げるようにメシアに帽子を被せた。

この意思が交わらない話題を終わらすために、今度は俺がメシアの手首を掴んで先に歩く。

後ろでキュツと唇を結んだ彼の後ろに、殺気が迫る。

ゾワッ！

二人同時に鳥肌が粟立ち、いち早くメシアが背後に回し蹴りを打

っ。

だが、何もいない。

手を掴んだままだったので前のめりにバランスを崩すと、すかさずメシアに担がれコケずに済んだ。

…あれ？

前にもメシアに担がれたような気がする。

懐かしい目線。

呑気に考え事をしている俺を立たせて、背後に忍び寄るどす黒い殺気を警戒する。

電柱の後ろに、松葉杖と金色。

夏なのに長袖とロングスカート。

明らかに狂っている目に見覚えのある顔。

香織だ。

神崎さんから連絡はないのが気がかりだが、今はどうでもいい。

こんなに重くて冷たい殺気はアメリカ以来だ。

沸き上がる獣の闘争心と、また何か考えている正軌の安否が天秤にかけられる。

そんなの、答えはもう決まっている。

アイツが動く前に、彼がアイツに気づく前に、メシアはまた正軌を担いで走り出した。

修学旅行で熊に追われた時のように。

家はすぐ目の前だ。

体力もあの日よりは充分残っているし、松葉杖の人間が熊より早いわけがない。

それに、毎朝欠かさず行っていた早朝ランニングを今日はしていない。

これは余裕だ。

そう確信しながら後ろを振り向くと、何故か松葉杖とナイフが飛んでいた。

驚愕を浮かべ固まる正軌。

反対に直ぐ様状況を受け入れたメシアがその場にしゃがむ。

けれど、正軌もメシアも無傷。

恐ろしさに戦慄いたのか、記憶のピースが動き始めたのに驚いたのか、正軌の顔は蒼白になっていた。

ニコツと微笑んだのを合図に、重たい枷が再び体を束縛した。

ただの錯覚の筈なのにその重さがメシアにも伝わり、誤って横に倒れてしまった。

パシユ。

人形のように動かない正軌の眼鏡や顔にも、赤い鮮血。

白い服が赤く染まり、電灯がチカチカと瞬いて夜を報せる。

香織の視線の先は、正軌。

ミシミシギリリ：



あゝつつつ!!!」

痛覚が無いのかと思うほど、口裂け女のように口角を上げて狂いながら笑う香織。

虚ろそうな、けれど野望を秘めたギョロ目はずっと、そこで横たわる彼に向けられる。

気味の悪さに力を弛めそうになるが、頬の痛みで冷静になり、腕を捻り潰すのを続行。

こんなにやっているのに、まるで生まれたての赤ん坊のようになイフを離さない。

松葉杖は遠くにある。

これさえ何とかすれば後はどうにでもなる。

家までは後数十メートル。

正軌だけでも安全な場所に行かせたいが、きっと動けない。

現に苦しみながら、幻の首枷を外そうともがいている。

生理的な涙を流し、細い呼吸を繰り返す彼は本当に首枷をつけられてるように思わせる。

「ック!」

一向に進まない現状に苛立ちを覚え、香織の体を蹴飛ばそうと膝を上げる。

「駄目。」

ビクッ。

「!?!」

だが、制止の言葉を投げ掛けられた。

落ち着きを払った、気怠そうな少年の声。

まるでその言葉に力が込められているかのように、振り上げようとしたメシアの足が意思に関係無く動きを止める。

ゆっくりとした足音が後ろから近づく。

「ソレ殺したら、今後ソイツが困る。アンタはちよつと頭に血が上りすぎ。」

「っ!？」

メシアの横に立ったのは、学ランを着た中学生。映画館に入る二人の後ろに現れたあの男の子。

眠たげな目で傷ついたメシアの頬を見詰めると、瞬きをした一瞬で頬の傷が癒えた。

それには凶悪な香織も驚きを隠せない。

次に香織が握っていたナイフが消え、苦しみもがいていた正軌の喉に空気が通りやすくなる。

「ゴホッ、ゴフ、ゼエ…ツハ、」

咳き込む正軌はやっと中学生の存在に気付く余裕が生まれた。

枷が全て無くなったように体が軽くなり困惑する。

が、助かったことに安堵し、次にメシアの頬が何もないことにまた驚く。

足を振り上げるとは叶わないが下げることができたメシアは、体を跨いでいた香織を突飛ばし体を起こす。

隣に立つ源希くらの背丈の中学生を警戒しながら名を聞いた。

「自分は黒澤 明詩阿。君の名は？」

「Meshiah―Kuroshawaだろ。オッサン（優人）から記憶を覗かせてもらった。自己紹介とかは要らない。」

俺は“改革”。あんたと同じ“化物”だ。」

「改革？化物？」

サラリと己を“化物”と言ったのけたのと、明らかな偽名にメシアは不審を抱く。

立ち上がる正軌に肩を貸し、ハッとあるモノを思い出した。

今まで存在をほかついた香織の方を振り返ると、違和感。

まるで最初から何もいなかったかのように、改革の前には誰もいなかった。

しかし、メシアの服と正軌の眼鏡についた血が先程の光景を蘇るのには充分なモノ。

震えこそ治まったものの、まだ強いショックで意識が朦朧としている。

弱った正軌の前に改革は立ち、自分に指を差す。

ファと遠慮なく欠伸を漏らしながら、今度は宮古家を真っ直ぐ指し示した。

まだ二人が教えていないというのに、間違いなく。

「あのさ、夏休み中だけでいーから泊めてくれない？寝るのはソファでいーからさ。」

ああそうそう、優人さん？だっけ。あんたの父親には居候する許可とってるから。何なら確認する？」

『いや、君を信じる。それに、恩人を雑には扱えないさ。好きなだけ泊まるといい。』

「どーも。」

後、さっきの奴は病院に戻したから。消していないから安心しなよ。」

また一つ欠伸をして、クルッと踵を返した。

二人よりも先に宮古家に向かう改革と名乗る中学生に、メシアは距離をとろうとする。

だが、横で壁伝いに一人で歩こうとする、今にも倒れそうな正軌の腕を強引に肩に回し、同じ目的地に向けて改革の後に続いた。

## 中編（監視）

帰宅すると、リビングには友恵しかいなかった。

茶矢と真尋は買い物にでも行ったらしい。

ソファに座ったままパソコンを操作する背中に声をかけてから階段を上る。

後ろで改革と名乗る中学生がリビングの方をずっと見つめていたが、何度か頷くとメシアの後に続く。

友恵が気になるのだろうか？

勉強は音楽以外酷いものだが、スタイルは良い方だな。

性格はマイペースで問題がちらほらあるが、源希のように明るいから知らない所で人気があるかもしれない。

留年してるがな。

「よう。：誰だそいつ？また誘拐しやがったのか？しかも今度は真正銘の中学生かよ。マジ引くわー。」

『違うよ。』

手摺を頼りに改革を自室に導くと、源希の部屋から由君が現れた。とんでもないことを言い出したので即座に否定。

恩人にそんなことするか。

頭痛がしてきた。

後ろでメシアが由君に説明してくれる。

後はメシアに任せて、先に改革を自室に入れる。

クッションを手渡し、申し訳ないけど俺はベッドに横たわる。

体が怠い。

ベッドに背を預けるように座る改革が内緒話をするように小声で話しかける。

聞き取りやすいように耳を近づける。

「今晚だけこの部屋に泊めて。アンタの“中身”を“整頓”したり“独立”させたりすっから。」

『…人格のことか？』

「んーまあ、それかな。人格ってのはちよつと違う気がするけど、間違いじゃないか。」

考えるように少し間を置いてから改革は返事をした。

人格のことを間違いじゃないとか違うとか言ってるけど、よくわからない。

「アンタが言う人格ってのは本当は欲と臓器がバラバラなんだけど、幾つかそれを兼用してる奴がいるし複雑なんだよ。アンタは土台だから仕方ないけど。」

元々一つだけど、人格を表に出した方がアンタの体が楽になるし、人格の何人かは独自に動きたいと思ってるだろうし。あ、理解しなくていいよ。無理だし。」

ところで今日の晩御飯って何？腹へった。」

「しょうが焼きらしいぞ。正軌はどんどん衰弱しているから、栄養をつけないと。」

「って、当の本人寝てんじゃん。」

途中から改革の話についていけなくて、眠る前に絵本を読んでもらう子供のようにゆっくりと眠りについた。

：ああ、また知らない世界に来たんだ。

真っ暗な、夜から光を奪ったような黒が辺り一面に広がる。

ふわふわ空中に浮いている体を翻すと、以前出会ったもう一人の俺がいた。

子供の姿の俺は真っ暗な世界の中心にポツンと立っていた。

両足をバタつかせて近づくと、子供の俺は片手を突き出して接近を拒んだ。

何故だろう？

言う通りに動きを止めると、子供の俺と離れた距離で見詰め合う。

子供の俺の腕には少し大きいウサギのぬいぐるみ。

ハッキリ言って趣味が悪いと思うようなデザインだ。

「こんばんは。」

ニッコリと笑った顔は子供特有の癒しがある。

俺も返事の代わりに手を左右に振った。

嬉しいのか笑みを更に深め、腕の中のウサギを抱き直した。

穏やかな空気が流れるのを感じる。

こういうのは久しぶりだ。

やはり子供はいい。

一人腕組をして頷いていると、子供の俺が話しかけてきた。

「今日は顔を見たかったただだから。これ以上はダメ。また今度お話ししよう。」

それと、“利欲”は元氣？」

『利欲?』

「君のことを誰よりも心配してる子の三人称。

僕もあの子も君の一部なんだ。

あ、そうだ！今から元に戻るからちよつとだけ待って。」

そう言う自分の足元に丁寧にぬいぐるみを置き、クルッと背中を向けた。

そして衣服を着替えるようにズボンを掴み、そのままガバッと全てを脱いだ。

……脱いだ?

ポカンとする俺。

子供の俺のだった奴の手には脱け殻のようなモノがある。

暗闇でも映える色素の薄い白く全体的に短い髪が目を引く。

野球部の坊主頭よりちよい長いくらい。

黒いタートルネックに黒いズボン姿の子供はそこらへんにポイッと脱け殻を捨てた。

何故か少しだけ悲しくなった。

脱け殻が世界に沈み、ウサギのぬいぐるみを抱き上げた少年が此方振り返る。

小学校低学年くらいの容姿は、サラと同じ世界にいる少女よりも年上。

ニコニコ顔は相手の緊張を無くし、安堵を与える。

俺の顔の筋肉も自然と緩む。

少年はウサギをギュッと抱き締め、明るい声で言った。

「僕の名前は『録<sup>ロク</sup>』。また会おう、〇〇。」

大きく手を振る少年、録の姿がだんだんとボヤけて霞む。

最後に言った言葉が聞き取れなかったけれど、またすぐに会えそうな気がしたから俺も小さく振り返すだけ。



『（目覚めれば、現実か。）』

揺れる暗闇の中、目蓋を閉じて次に映る光を待った。

## 中編（監視）

高校生三人と中学生。

男三人と女性一人。

テーブルには人形が二つ。

「ん、あった。」

ポイツ。

「ヒヤッハー！」

ポス。

「なっ！？無名早く退け！！」

「二人共、お願いだから喧嘩しないで。」

プラス、現在進行形で何か増えた。

……これは現実か？

物言いたげな顔の由とメシア。

年上の二人を無視して改革は黙々と手を動かす。

正軌の頭に再び、文字通り手を突っ込んだ。

——今から十分前、源希の部屋の前に立ったのが始まり。

「これから居候する改革です。一応よろしく願います。」

あれから三人はリビングに下り、改革は晩御飯の前に一年生に短

く自己紹介。

それから正軌の席に何食わぬ顔で座り、しょうが焼きを淡々と腹に詰め込む。

突然の来訪者の説明を求める四人に対し、メシアは改革と同じように他の人の倍の量のしょうが焼きを口に運ぶだけ。

何の感想もなく、満腹になるまで黙って食う。

これがメシアだけなら茶矢も文句の一つや二つ言いたくもなるが、生憎真尋以外の人間は基本的に口を開けば文句しか言わないので気にしない風を装うことで我慢。

リビングにいない此処の家の長男はさらっと『美味しい』と誉めたりするので、作る側の人間（茶矢）としては凄く嬉しくて遣り甲斐を感じる。

しかし、度を過ぎると気絶しそうになるので、隣の席の真尋は心配でならない。

因みに、料理当番は日数制。

明日からはメシアが当番。

カチャ。

「ごっそーさん。じゃ、上にいるわ。」

食べ終わった食器を重ねるがそのまま放置。

席を立ち、さっさと行ってしまう。

その後にメシアが食べ終え、改革の分も水に浸してから二階に上がる。

最後に由が慌ててご飯を胃に掻き込み、適当にシンクに置いてから二人の後を追いかけた。

「「「……………」」」

残された一年生組。

更に静まり返ったりビングには食器が当たる音しかせず、やけに掛け時計の音が煩い食事だった。

「…。」

階段を上り、改革は正軌の部屋には入らず、隣の部屋の前に立つ。隣で不思議そうに見下ろすメシアを一瞥した後、彼の胸をトンと手の甲で軽く叩いた。

走って横腹が痛む由が追いつくまで改革は俯いたまま、固まった体はピクリとも動かない。

「どうした？」

「…ちっと順番変更。もう中身だけ最初に抜く。」

「はぁ？中身ってどーゆうことだよ？」

グシャリと少し長い前髪を鷲掴み、踵を返し早足で歩き出す。

近くにいたメシアに肩がぶつかろうと謝りもしない。

気持ちが焦っているのか自然と息が荒くなる。

バンツ！

乱暴に押し開けた正軌の部屋に入るなり、枕元に膝をついて軽く深呼吸。

遅れて入った二人を横目で注意するなり、改革は顔だけ由の方に向けて指を差した。

面倒くさそうに溜め息混じりに注意する。

「そこのお姉さん、一通り終わるまでこれから喋らないでね。叫んだりすると気が散るから、何なら出てってくれた方が有り難いんだ

けど。」

「なんだなんだ中坊が由に喧嘩売ってんのムガッ!？」

「自分が黙らせる。約束しよう。」

「そ。ならよろしく。」

「んゝー!!んゝんゝッ!!!!」

話（喧嘩を買う五秒前）の途中でメシアに口を封じられ、手を剥がそうと必死になる由だがこの手はびくともしない。

口も鼻も塞がれて空気がシャットダウン。

それに気づかない同級生の腹や膝を蹴って訴えるが伝わらない。

改革との会話も終わり、やっと解放されて目一杯新鮮な空気を取り込むと吸いすぎで噎せた。

力の差で負けたのが悔しくて、色々とムカついて、涙目のまま抗議してやろうと振り返り、

「っ。」

息が止まった。

鼻先が当たるギリギリの距離で薄黄色の瞳が見詰めていた。

まるで飲み込まれてしまいそうなこの瞳に、柄にもなく首から上に熱が集まる。

これは不可抗力だ。

見慣れているとはいえ、この顔とこの表情は狡い。

何もしなくても綺麗なんだ。

懐かしい状況で女性ならトキメキで恋に落ちてもおかしくないが、あの時とは相手を知った量が違う。

「近いわクソ外人。」

眉間に皺を寄せて相手の顎を足で押す。

その反応に同じように皺を寄せ、不満げな視線を向けるがシカト。陰悪ムードの始まり始まり。

一方、室内の空気全体に重しを乗せたような中、改革だけはちやっちゃんと準備を始める。

学ランの袖を捲り、浅い呼吸を繰り返す正軌の額に右手をそっと当てた。

ポツリ、二人には聞こえない呟きを一つ。

「今だけ堪えて。」

まだ見ぬ誰かを心配する声音。

スツと細められた決意の目。

小さく息を吐き、次の瞬間、

ズププ。

水溜まり、粘土、スライムに固形物を突っ込んだような鈍い水音が耳に入る。

顔を上げた先に異様な光景が広がり、驚愕に言葉を失う。

正軌の額に、改革の手が埋まっている。

明らかに現実では有り得ない異常、不可能なリアル。

改革の気遣いか、さりげなく正軌の顔を左手で隠してあげている。

グリュ。

ある一点だけに集中し、まだ先に入ろうとする腕。

混乱した思考が一周して冷静になり、改革を止めようと腰を浮かせた由。

だが、それをメシアが腕で制す。

邪魔をすれば危ない、と本能が感じたのだろうか。

それは由も同じらしく、何時もなら投げ付けるように怒鳴る罵声や悪口が彼女の口から一切出てこない。

両者無言。

息を飲む感覚だけがやけにハッキリとわかる。

視線の先は同じだがメシアにはモザイクが入るモノが丸見えで、先程食べたばかりのしょうが焼きが逆流しそうなのをなんとか飲み込む。

叫ばなかったのが奇跡だ。

普通なら卒倒したり吐き気に見舞われて、最悪トラウマになる。良いことなんか一つも有りはしない。

気絶するのも忘れて、成り行きを見守ること三分が経過。

何か手応えを感じたのか、改革の様子に僅かな変化が見られた。

「先ず一つ。」

グイッ。

肘まで埋め込んだ右腕を引き抜くと、手には人形が一つ。

ヒトガタの女性の人形は金髪と黒いストライプのワイシャツ、同じ黒のズボンが特徴的だ。

大きさはミリリットルのペットボトルくらいで、それを改革はテーブルの上に乗せた。

何が起こったのか許容量オーバーで理解できない二人に、更に不可思議な現実が追加されることになる。

横たわっていた人形はムクリと上半身を起こし、辺りを見回し始めた。

そして啞然としている二名を発見。

「あら、そういうこと。」

すんなり状況を把握した人形は両手を後ろに置き、フウと息を吐いた。

全くわからない。

てか、人形って喋ったっけ？

様々な疑問が二人の頭を駆け巡る。

そうこうしている内に新しい人形が登場。

同じようにテーブルに置かれ、人形同士顔を見合わせ溜め息を吐く。

「何だ、君もか。」 「ええ。灯が出たのなら無名も来るわね。」

二つ目は銀縁の眼鏡をかけた右側だけ前髪が少し長い男性。

口をへの字に曲げ、癖なのか胸の辺りで腕組みをする。

人形だから人間と比べると断然短く、正直腕組みになっていない。これから先のことが見えているのか、小さな二つの人形は横たわる正軌の横顔を眺めた。

――そして冒頭に戻る。

横髪以外の髪を全て後頭部の高い位置で結んだ髪の高い男の人形。長袖のパーカーのフードに先っぽを入れている。

顔は前の二つよりも上等な方で、メシアとはまた違った綺麗な顔をしている。

『無名』と呼ばれた人形は出てくるなり『灯』と呼ばれた人形の上に飛び乗り、幼稚園児のようにふざけながらケラケラと笑っている。

同じ大きさの人形が三体。



「ラスト。」

トン。

訂正、合計四体。

最後の人形は前髪は目にかかるくらい長く、視界が悪そうだ。後ろ髪は肩に着かないくらいの長さで、普段のメシアと同じ無表情の少年。

先にいた三体を確認するなりペコリと会釈。

「お三方もいらっしゃいましたか。一応初めまして、水と申します。」

「もうお互い知っているから、堅苦しいのは無しにしましょ。」

「サラの言う通りだ。最優先すべきはこの状況だ。」

「俺はこんのまんまーでも面白いけどーね。」

『水』と名乗る礼儀正しい少年は『サラ』と呼ばれた女性の言葉にコクリと頷く。

真剣に打開策を考えている灯の横でわざとふざける無名。

短気な彼の堪忍袋がはち切れるまで後五秒。

ワイワイギャーギャー賑やかなテーブルに背を向け、正軌の額を撫でると凹んでいた部分が元通りになった。

しかし、正軌が目覚める様子は微塵もなく、メシアは不安にかられる。

隣の由は未だにテーブルの動く人形達から目が離せず、若干逃げ腰。

ベットから下りた改革は正軌の机の上から紙とペンを勝手に拝借し、それをテーブルに置いた。

注目する人形達にペンを向け、眠たげに目を擦る。

「事情は聞いてると思うから省略。外には、影響力が強い奴、単独で行動したがつていた奴、マトモな考えを持っている奴を抜粋した。残りは安定させる為に滞在。ここまでで質問は？」

「…録はどうして選ばれなかったのかしら？」

一步サラが前に出て質問をする。

微かにしかめた顔には明らかな動揺が見え隠れしている。

他の人形達はどうでもいいことらしいが、彼女には好ましいことではないようだ。

サラの問い掛けに改革は紙にペンを走らせながら、さも当然のことのようにさらっと一言。

「あんたが根深いトコに隔離してんだろ。」

「……。」

まだ新しく造られたばかりの水だけ意味がわからないらしく、辺りを見回し周りの様子を伺う。

三体共に口を開かない。

騒いでいた無名さえもぼけっと窓の外のを仰ぎ観ている。

毒を含めた改革の言葉にサラはバツが悪そうに顔を俯かせ、悔しさを紛らわすようにキュツと下唇を噛んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0923m/>

---

真面目な向き合い

2011年11月20日09時30分発行